

幻想郷で死に戻る俺は

せかいちっ！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校生の小野寺蓮司（オノデラ レンジ）はある日神隠しに遭った。

見知らぬ場所、幻想郷に突然送り込まれた少年はいきなり不慮の事件で死んでしま
う。

しかしまた目を覚まし最初に目覚めた場所にいた。

何があった、そして何がすばいいのか？

戸惑いながらも彼もまた幻想郷に吞まれていく。

※

リゼロのキャラは出てきません

異変の時系列が物語の都合ズレが生じます
サブタイトルは頭ばななで考えています

目次

百話までのあらすじ	1
二百話までのあらすじ	18
放浪編	
一話 迷子或いは神隠し	lost
mystery.	39
二話 魔法使いと妖怪と	witic
hand specter.	52
三話 人里での暮らし	bette
rliving.	65
四話 春雪異変	springs
now.	80

五話 死に戻りとその自覚	res
urrect once more.	
地霊殿編	
六話 地獄へと向かう	hell
inmarionette.	104
七話 少女さとり	3rd ey
e.	117
八話 太陽の届かない地	deep
world.	133
九話 あなたはだあれ?	who
done it.	147
十話 自由気ままな妖怪少女	dis

e a m e n d .	249	二十話	博麗の巫女	shrine
十六話	二度目の別れは唐突に	dr	330	
w o r l d .	235	二十一話	疑惑と信頼	doubt
十五話	煉獄異変	burn out	二十一話	疑惑と信頼
i c g r o u n d .	219	二十話	霧雨魔法店	where
十四話	地上の世界	nostalg	二十話	霧雨魔法店
e m o n .	206	十九話	人形裁判(優しめ)	girl
十三話	鬼が住む土地	meet	十九話	人形裁判(優しめ)
l a r .	191	十八話	人形屋敷と少女	doll
十二話	地底の太陽	sun pill	十八話	人形屋敷と少女
a t e d l a v a .	176	十七話	森の中で見たもの	the
十一話	溶岩をも溶かす地獄跡	he	十七話	森の中で見たもの
a p p e a r g i r l .	162	森の魔法使い編		
		十九話	人形裁判(優しめ)	girl
		二十話	霧雨魔法店	where
		二十一話	疑惑と信頼	doubt
		二十二話	博麗の巫女	shrine

四十五話	甘く無い現実	subject of fear.	783	五十一話	魔法図書館	little demon.	771
四十六話	紅魔館と言う場所	can't escape.	699	五十二話	日陰の少女	locked girl.	785
四十七話	お嬢様の暇つぶし	scarelet lady.	714	五十三話	自慢の自慢の大図書館	memory.	799
四十八話	最悪な一日	mess	728	五十四話	地下の騒音	nothing	814
四十九話	メイドの休みは何処行つた?	maid holiday.	742	五十五話	自分なりの上海人形	what's this.	829
五十話	お嬢様の暇潰し②	vampire	755	五十六話	近づく満月	great vampire.	842

t girls.	七十三話 白玉楼の二人組	ghosts	1122	pirate by nature.	七十九話 吸血鬼と魔女	vampires	1200
	永遠亭編			reak of quarrel.	七十七話 問題児と問題児	outb	1186
Margatroid.	七十二話 本当の再会	Alice	1098	tic rabbit.	七十六話 トラウマの月兎	luna	1170
disease.	七十一話 病に臥す	vampire	1083	cam rabbit.	七十五話 嘘吐き兎を追いかける	s	1153
1066				rollable impulse.	七十話 地下の少女	② uncount	1050
				book.	六十九話 異変ノ断章	strang	1035
				property.	七十四話 常世の姫君	beauti	
				ful princess.			1139

meet again.	1379	魔法の森のその奥へ
九十一話	不思議な同行者	dest
ination is the same.	1394	
九十二話	香霖堂	mystery
shop.	1405	
九十三話	騒がしいお客様	I, m
not skipping.	1418	
九十四話	消えた人物は何処に?	where
ind him.	1437	
九十五話	無縁塚	mouse
rl.	1455	gi
九十六話	黒に染まる過去	sin
in black.	1475	
九十七話	探し物は何処に	where
ability.	1487	
九十八話	鬼に会うために	lots
of preparation.	1502	
九十九話	妖精とお地蔵様	pray
for tomorrow.	1513	
百話	罪と忘却	from now
on.	1530	
百一話	神社にて	bad
		impr
		r

百六話	向日葵畑と妖怪	dance	1605	arch	search	search	1696
百五話	過去の事を言うと人は死ぬ	curiosity killed	1591	百十話	河童、革命をする	muso	1678
百四話	来年の事を言うと鬼は笑う	demon laugh.	1578	百九話	更なる侵入者	only	1662
百三話	今年の事を言うと鬼は答えない	demon silent.	1563	百八話	獯猛、時に慈悲	though	1648
百二話	去年の事を言うと鬼は怒る	demon wrath.	1549	百七話	苦勞だらけの新生活	do	1636
百一話	太陽の畑編	hecat.	1605	百十二話	彼女は何処にいる?	se	1621
百六話	向日葵畑と妖怪	dance	1605	百十一話	河童と過去と	forgo	1696
百五話	過去の事を言うと人は死ぬ	curiosity killed	1591	百十話	河童、革命をする	muso	1678
百四話	来年の事を言うと鬼は笑う	demon laugh.	1578	百九話	更なる侵入者	only	1662
百三話	今年の事を言うと鬼は答えない	demon silent.	1563	百八話	獯猛、時に慈悲	though	1648
百二話	去年の事を言うと鬼は怒る	demon wrath.	1549	百七話	苦勞だらけの新生活	do	1636
百一話	太陽の畑編	hecat.	1605	百十二話	彼女は何処にいる?	se	1621

百二十三話	寺子屋の日常	two	
people in distress			1874
百二十四話	人間と妖怪	though	
hushal apparition			1887
百二十五話	湖にて	fairy	
ischief			1901
百二十六話	これより向かう先は		
heaven or hell?			
1919			
〓 廃洋館編			
百二十七話	廃洋館へ	curse	
百二十八話	廃洋館の少女	myst	
ery girl			1946
百二十九話	騒霊と妖怪	polite	
regiests please			1965
百三十話	廃洋館を彷徨う	where	
ehis he?			1979
百三十一話	館探索編①	dinin	
groom			1994
百三十二話	館探索編②	girls	
room			2009
百三十三話	館探索編③	small	
place			1934

百三十九話	常識外	↓	don't	g	2101
百三十八話	悪霊の住処	↓	dead		2086
百三十七話	異変と悪霊	↓	to	so	2068
百三十六話	その頃の彼女は	↓	nit		2051
百三十五話	館探索編⑤	↓	base	m	2036
百三十四話	館探索編④	↓	stran	an	2024
			l.		
			genes	s	
			in	the	
			hal	l	
			l.		
			library.		

百四十五話	事件中断	↓	half	h	2199
百四十四話	事件発生	↓	thief		2181
百四十三話	仕事なんですきつと	↓	t		2166
百四十二話	紅魔館にて	↓	reuni	i	
	紅魔館編②	↓	ted	girls.	
			is	boy.	
百四十一話	今後の課題と	↓	cris	s	2150
			bye.		
百四十話	さよならの時	↓	good		2132
			et	caught.	
					2116

2395

百五十八話 募る苛立ち、探す最適

depende nce girl.

2409

百五十九話 犠牲者精神

can't be helped. 2424

百六十話 自分の事、自分の目的

exte nsi on destination.

2446

地底の底へ

百六十一話 向かう場所

deep er than here. 2459

百六十二話 地底の底に潜むもの

nderground beast.

2475

百六十三話 事態は更に悪く

can't help it anymore

2489

百六十四話 異変の始まり

twice incidents. 2505

二つの異変

百六十五話 二つの異変

search incidents. 2523

百六十六話 見知らぬ少女

Imiss you. 2537

百六十七話 邪魔をする者

stri 2537

sou t e n s o k u .	2621	百七十二話	河童、完成させる	h i
u b l e s o m e g o d s .	2609	百七十一話	山でのトラブル	t r o
t n e g o t i a t i o n s .	2596	百七十話	異変解決の少女	s t a r
o u n d v i l l a g e .	2583	百六十九話	魔理沙は何処に?	s a r
g e r o u s g a f f e .	2568	百六十八話	問題は増え続け	d a n
er a l l t h i s .	2635	百七十三話	異変の解決仕方	a f t
parent .	2700	百七十八話	魔界の主	d o t i n g
q u a r r e l .	2687	百七十七話	仲の悪い二人	o n l y
boy .	2672	百七十六話	焦燥	w a k e u p
n a e s i d e .	2658	百七十五話	目を覚まさぬ裏で	s a
l y d a n g e r o u s .	2648	百七十四話	魔界にて	s u d d e n
g e r o u s g a f f e .	2568	百六十八話	問題は増え続け	d a n
o u n d v i l l a g e .	2583	百六十九話	魔理沙は何処に?	s a r
t n e g o t i a t i o n s .	2596	百七十話	異変解決の少女	s t a r
u b l e s o m e g o d s .	2609	百七十一話	山でのトラブル	t r o
s o u t e n s o k u .	2621	百七十二話	河童、完成させる	h i

deceive God.	百八十四話	神と妖怪と魔法使いと	2784
who disturb.	百八十三話	船を追う	those 2772
is.	百八十二話	不思議な人間	Who 2756
ty here.	百八十一話	追いついた者達	the 2743
re is an abnormali	百八十話	法界へ	gang of 2730
four.	百七十九話	ポンコツ主	chari 2717
sma break.	百八十五話	封じられし超人	its 2800
tr u e i d e n t i t y.	百八十六話	超人と人間	diff e 2812
r e n c e i n f o r c e.	百八十七話	理想と目標	what 2826
t o d o d a n g e r l a d y.	百八十八話	船は飛び立つ	go 2841
o h o p e.	百八十九話	記憶喪失の鍵	plac 2859
e a r r i v e d a t.			

l.									
二百七話	旧都へくjust hel	3117							
二百六話	最後の仲間くvarious	3096	sly rely mates.						
二百五話	彼女の決断くfellow	3080	girl.						
二百四話	忘れし盟友くleft	3065	ehind clue.						
二百三話	山の主との対談くfound	3052	dling girl.						
二百二話	聞かされた真実くthe	3039	past heard.						
二百八話	鬼の纏め役くfighti		ng girl.						
二百九話	喧嘩くreckless								
二百十話	怪しげな提案くouts	3142	challeng.						
二百十一話	古明地さとりくher	3157	de knowledg.						
二百十二話	地上での行動くlack	3170	speculation.						
二百十三話	私がすべき事くdete	3184	of preparation.						
二百七話	旧都へくjust hel	3117							
二百十三話	私がすべき事くdete		rm ination girl.						

二百三十四話 永遠の姫君のone

who knows eternit

y.

二百三十五話 異様な対価のdiff

icult problem. | 3468

二百三十六話 危険すぎる場所のst

range bottom. | 3476

百話までのあらすじ

皆様「幻想郷で死に戻る俺は」を日頃閲覧いただき誠に有難うございます。いつも読んでいただける皆様のおかげでついに百話となりました。

今回はぶっ通しで百話まで行った事に加え、自分自身でも今までのおさらいをしたいため、大まかに百話までの流れを書かせていただきます。

まず始めに、流れだけ見たい人のために一番上へと移動しましたが、先に本編を読む事をお勧めします。

加えて、まだ途中までしか読んでない方はご注意ください。

前提として全ての話で目的として多くの人間や妖怪と出会うがあります。

一話から五話く放浪編く

幻想郷に迷い込んだ人間が、前も後ろも分からずに……闇雲に迷いながら人里へと辿り着く人里編です。

この話では幻想郷と言う存在を知る事、この場所が今まで生きていた場所とは全く異なる事を理解する事、死に戻りと言う行為を認識する事が目的となっています。

小野寺蓮司は何も分からぬまま、幻想郷に迷い込みそのまますぐに妖怪に殺されてしまう。

幻想入りした一部の人間達と同じ運命を辿りますが、死んだ筈なのに何故か同じ場所にいる。

夢だったのかと思いつながら同じ行動を繰り返し喰われることを回避します。

そのまま、闇雲に歩きながら魔理沙達と出会い人里に案内されます。

里に受け入れられた事もあって、このまま里で生きながら戻る方法があるか考えようとしていましたが……春雪異変が起きます。

原因は勿論白玉楼ですが、人里以上に閉鎖的なこの里ではそんな事を分かるわけもなく、今まで異常も無かった事から新たに来た蓮司を疑いそのまま殺されてしまいます。

その事から彼は疑心暗鬼と虚無になり、死に戻る事もやり直せると考える事は無くなり、ただただ流されるままに生きるようになりました。

六話から十六話く地霊殿編く

何もする気がない蓮司が、ただただ死んで戻つてを繰り返すうちに、ある日古明地こいしと出会い、地霊殿へと辿り着く話です。

この話では彼の壊れた心を取り戻す事と妖怪と言う存在を知る事、煉獄異変の存在を知る事が目的となっています。

何度も何度も死に続けているうちに、ある時、古明地こいしが地上に迷い込み、彼女を認識出来ないまま無意識に地霊殿へと迷い込みます。

地底にそのまま落ちた彼は重傷を負い、さとりもこのまま死ぬと思っていました。

しかし、死ぬと思いつつも賢明な看病を続けた事により、春雪異変から風神録以降までの間約4年間眠り続けましたが、目を覚ましました。

本来であれば命の恩人で済む話ではありませんが、4年も眠り続けたと告げるのは酷だと考え伝えずに、人間が暮らし辛い地底から追い出し、人里に戻って貰おうと考えます。天使です。

しかし、地上で生きる場所が無いと考えた彼は、地底で暮らす事を決意します。それを読み取った上で、彼が自棄状態になっている事を分かった彼女は、嫌味を言いつつも地底で住む事を受け入れます。

地底でこいしを見つけ、お燐やお空とも交流しながら日々を過ごします。……お空の

中に眠る狂気に気付かないまま。

ある日それは爆発し、煉獄異変が起きます。

さとりには逃げろと言われましたが、さとり達が危険な事を知り、最終的に誰も死んで欲しく無いと灼熱に飛び込んで死にます。

そのまま彼は、また地霊殿へと辿り着きますが……彼が既に自棄じゃなくなっている事、死に戻りによって自分自身が何度も彼の死を見なきや行けないことを理解し……家族になれるかもしれない彼に……お空を守ってくれた事に礼を言い追い出しました。

また彼は居場所を失いましたが、無事でよかったと思いつつ、既に新しい目標を立てて歩き始めました。

十七話から二十五話く森の魔法使い編く

地底の問題をなんとかしようとした彼は魔理沙を探しアリスや、目的であつた魔理沙達と出会いました。

この話では、春雪異変の解決と幻想郷の常識を知る事が目的となつています。

地底の異変をどうにかしたいと思つた彼は、最初の頃に出会つた魔理沙を探すために森へと入りました。迷いながらも上海人形と出会いアリスと出会います。

心優しいアリスは外の世界の住人と知った彼から色々話を聞くとともに魔理沙に用がある彼を連れて行きます。

魔理沙を始め妖怪退治の巫女霊夢と出会い、地底であった事、死に戻りのことを伝えますが……信じてもらえませんでした。

そのため春雪異変のことを彼女達に告げ異変解決のお願いをしました。

外には雪が積もり、真実の確認が取れるまでは出れなくなった彼は、閉鎖した人里や地底と言う尖った知識しか持つていなかったため……幻想郷の事をアリスに教わりました。

魔法の事も教わりたいとは告げましたが、残念ながら彼にはそこまでの才能は足りず諦める事となりましたが……機会があればまたと考えています。

その代わり覚えた人形作りは彼の特技の一つとなり今後も活躍しています。

雪が溶け異変が解決したと共に、謎の夢を見ます。自分が見たことない筈なのに何処か懐かしさを感じました。

改めて春を迎えた幻想郷で、地底の件も伝えた彼はアリスと別れ幻想郷を回ると告げます。

しかしアリスも付いてくる事となり、内心ホッとしたのでした。

二十六話から三十九話く妖怪の山編く

幻想郷を何処から回るかと悩み誘われた彼は、妖怪の山へと向かいそこで色々な出来事や問題を起こしました。そして頂上で思い出せない記憶がある事を知ります。

この話では、萃夢異変と自分の中にある禁止された記憶、???が目的となっています。

アリスと何処を回るかと話していると、前から蓮司に目を付けていた文が妖怪の山へと誘います。

様々な理由から妖怪の山へと向かう事にした彼達は、そこでは神々や妖怪を始め多くの種族と出会います。

神様に振り回されたり、妖怪に助けられたりしながら妖怪の山でも過ごしてしました。

そうしているうちに余所者に興味を持たない河童ですが……一匹の河童、河城にとりが彼に興味を持ちます。

そのまま彼女に懇願されて巨大ロボットを作る事になりました。

蓮司にとりがそう企んでいるうちに、幻想郷ではまた異変が起こります。

その異変で鬼が関わっていると知り心配しますが、説得されてアリスを見送る事になりました。

その後も文と一緒に山を探索する蓮司ですが、頂上の何も無いはずの場所で、外の世界での思い出せない友達が浮かび、慌てて思い出そうとすると……禁止と言う言葉に頭が割れそうになりました。

それが何なのか探ろうとしますが、巨大ロボをはじめ様々な要因から妖怪の山の今の主天魔によつて退去命令が出されます。

最初は反発したものの、アリスの覚悟を知り無駄死にする事をやめました。

異変を解決しに行ったアリス達に対して、自分に何が出来るか考えて次の異変が起こる場所を迷いの竹林だと知り、死なないように気を付けるよう心がけながら……迷いの竹林へと向かいました。

この時から地底の事も気遣いながら、それ以外の異変も少しでも知って行く事を決めました。

唐突な異変で死ぬ事を避けるだけでは無く、さとりさんのような事が起きて欲しくないから。

四十話から四十四話く終わらない悪夢く

竹林へと辿り着いた彼はそこで妹紅と出会い、異変について探ろうとします。

そこに狂気が潜んでいるとも知らずに。

この話では永夜異変の脅威と蓮司の死が目的となっています。

迷いの竹林まで送ってもらった彼は、文の情報から友好的な妹紅と出会います。

そこで彼女に心配されますが、欠けた月を見て妹紅さんと共に異変を探りに行きま
す。

途中でゐに騙されながら、永遠亭に辿り着いた彼は……狂気の瞳を覗き発狂してしま
います。

自力ではどうする事も出来ないまま、発狂と共に精神をすり減らし高所から飛び落ち
てしまいます。

しかし、偶然にも落ちた先は竹林にあると言われている地底への道であり、落ちた衝
撃と擦り切れた精神で死にかけの彼の前にさとりが現れます。

心を覗き全てを理解した彼女は恐怖を思い出す「テリブルスーヴニール」とは反対の
スペカ、楽しかった事を思い出す「フアインスーヴニール」によつて、狂気に侵された
彼の精神を再び取り戻させます。

……ただし、肉体は既に手遅れで穏やかに死んでいきました。
そして世界はまた巻き戻ります。

四十五話から六十一話く紅魔館編く

また巻き戻ったと思つていましたが、いつもと違う状況に驚く蓮司、その事も心配しつつも味わつた異変をどうにかしないといけない、慌てて博麗神社へと向かいましたが、霊夢は居らず吸血鬼と出会います。

この話では進んだ世界の自覚と、永夜異変の解決が目的となっております。

死んでいつもの草原へと戻った彼は、いつもと違う景色に違和感を覚えます。

そこで人里で時期が秋では無く、夏であることを知り春雪異変が既に解決された事を知ります。

しかし彼は死ぬ前に得た永夜異変の知識があり、慌ててそれを霊夢に話そうと博麗神社へと向かいます。

そこには霊夢はおらず、偶々博麗神社に用があつたレミリアと出会いました。

既に紅霧異変を起こしていた事を知っている彼は、どうにか出来ませんかと懇願しますが……吸血鬼と言う種族を理解していなかった彼は、アツサリ殺されてしまいます。

そのため、彼は方針を変え神社に訪れる彼女達の興味を持たれるように振る舞い、そのまま連れて行かれました。

そこで彼は異変の事を話し、異変解決の協力を得られますが騙されたとなればプライ

ドに関わる以上、半ば人質として紅魔館で暮らす事になります。

紅魔館で皆と交流し、レミリアにも気に入られながら遂にまた永夜異変を迎えます。彼女達が解決してくれると信じていましたが、そこで事件が起きます。

欠けた満月により身体に異常が起きたフランが暴れ出します。

その最中脚を失いますが、必死に生きようとしレミリアが間に合い事なきを得ます。

レミリアは、脚を無くした蓮司をどうにかしようと考えながら、まずは蓮司の助けになりそうなアリスをお茶会に誘うのでした。

六十二話から七十二話へ魔法使い集結編へ

レミリアが呼び出したアリス、図書館にいるパチュリー、普段から泥棒に入る魔理沙と……紅魔館には気付けば魔法使いが集まっていました。

永琳が来るのを待ちながら、魔法使い達や図書館から色々とする事となります。

この話では記憶に無い記憶を辿る、フランの衝動、アリスが記憶を思い出す事が目的となっています。

お茶会にアリスを誘うと同時に、魔理沙も紅魔館へと盗みに忍んでいます。

久々にアリスや魔理沙と出会った彼でしたが、既に死に戻っており二人の記憶に蓮司は居ませんでした。

その事を理解しつつ、魔理沙の行動に頭を抱えながら、もう一つ送られてきた竹取物語でも頭を抱える事となっていました。

この時はまだ呆れられるだろうと思ひ、気に入られたことなど知らずに……

そのままレミアアの約束を信じて、脚が治るまでフランとも仲良くなったり、特に図書館に入り浸る事が多かった中「異変ノ断章」を見つけ読み進めます。

そこで無縁塚が引つかかり、妖怪の山では止められた自分自身について探れるのでは無いかと思ひ脚が治った後向かう事を決めました。

それから数日後、フランの暴走を未然に抑えるためにフランの元へ安全確保も兼ねて皆を誘つて向かうと、彼女はまた衝動に飲まれ……アリスが怪我を負います。

その傷は軽症だと思ひ安堵していましたが、アリスが動かなくなり彼女を誘つた自分のせいでこうなつたと悔やみます。

その後ヴァンパイア病に罹つたアリスは、日を増すごとに弱つていきその度に彼は自分自身を責め続けました。

高熱にうなされ、脳の判断が鈍つた事により本来ならば無いはずの記憶、彼と出会つた事を思い出し、もうどうしようもないだろうと悟つたアリスはごめんねと彼に伝えま

す。
彼は昔に比べて死ぬ事に躊躇いが出てきましたが、それでも友人を失うのが嫌で、自

決を決意し世界を巻き戻そうとします。

しかし、そのタイミングで運良く永遠亭から訪れた永琳によって、アリス含めて事なきを得ます。

その後奇跡的に助かったアリスに説教されましたが、何故か彼女に無いはずの記憶が完全に戻っています。

その事に戸惑いつつ紅魔館を歩いていると……永琳と会います。

今回の対価で肝試しに参加する事に了承しつつ、アリスの事について永琳に話を聞くと、彼女の脳にスキマみたいなものがあったと切除したと伝えられました。

彼自身はそれを理解出来ず、記憶は戻って良かったと考えていますが……裏では何かが動いているようです。

七十三話から九十話く永遠亭編く

肝試しへと訪れる事になった彼は、永遠亭で因縁の兎達や冥界組と出会います。

そこで幽々子から不穏な事を告げられるのでした。

この話ではフランの衝動問題を解決する事、過去の記憶の存在を知る事、???と???が目的となっています。

永遠亭で行われる肝試しに参加する事になった蓮司は、紅魔館の頃から会っていた二組と、冥界組と出会います。

輝夜や前の世界で会った兎達と交流しているうちに、構われる事が減ったレミリアが拗ねます。

慌ててご機嫌取りに向かい、彼女の過去話を聞く事になりました。

彼女の過去に色々驚かされながら、そこで自分の過去について違和感を持ちます。時折見る夢は何なのだろうと、疑問に思いながらも肝試しが始まります。

最初は普通の肝試しかと思いましたが、妹紅の元を訪れ、最初からそう言うことかと理解します。

かつて前の世界で彼女に恩があったため流石にこれはあんまりだと思い、輝夜に伝えるに行きますが……それを納得出来ない彼女は彼を永夜へと閉じ込めます。

何も無い世界。そこで孤独に襲われ徐々に幻覚のようなもの……記憶に無いはずの少女を見ます。

その姿はにとりに似ていると思いつつ、どうにか話しかけようとするも限界を迎え気が絶してしまいました。

その後永夜が解かれた彼は約束を守ってもらおうとしますが、そのまま輝夜は逃げ出します。どうにかしようと思つと、大ごとになってしまいました。

その後逃げ道を塞がれた輝夜は妹紅が来たら謝ると告げ実際に永遠亭へと訪れた妹紅に謝る事となつてしまい自分の行動を後悔しました。

一方の蓮司は、肝試しも妹紅さんの件も無事終わったと思い、紅魔館に戻る事も考えましたが……脚も治りまた幻想郷を回ろうと紅魔館を去る事を決めました。

幽々子の過去の話を餌に白玉楼に来ないかと誘われますが妖夢に遮られ断念し、記憶の中にあつた待ち人がいる気がする無縁塚へと向かう事を決めます。

そのまま、今回の件で一度竹林を離れようと決めた妹紅と共に無縁塚へと向かうのでした。

九十一話から百話へ魔法の森の奥へ

無縁塚に向かった彼達は、そこで閻魔様と出会う。

彼女が言うには、蓮司の過去は罪深い物らしいが一体何があつたのかを知る事を決意する。

この話では自分の過去を探る事が目的となっています。

異変の前兆を探しつつ、自分の記憶にあるものを探す彼は無縁塚へと向かうこととしました。

しかし、彼には無縁塚への行き方が分からずに困っていた所、霖之助と出会います。無縁塚への行き方を知る彼がまた訪れる日を待ちながらバイトをしながら成美と出会います。

彼女曰く生命力が薄く、死人同様と聞きますが……どうする事も出来ないため聞き流していました。

何もせずそのまま数日して無縁塚へと向かいました。

途中妖精達に惑わされながら無縁塚へと訪れた彼達は、無縁塚で宝探しをしているナズーリンと出会います。

彼女の他に誰かいないかと探していると、蓮司が来る事を知っていた四季映姫と出会います。

そして彼女は彼の過去は罪があるから思い出さない方がいいと告げます。

しかし、思い出さずにこのままでいたら未来永劫このままでと分かる彼はそれを拒みます。どうしてこうなったのか、ここに居たはずの少女ならそれを少しでも知っているんじゃないかとナズーリンにダウジングで探してもらい博麗神社に居ることを知りました。

そのまますぐにも向かおうとした彼ですが、会おうとしている人が鬼だと知り霖之助からせめて酒を用意していけと待つ事になりました。

そして博麗神社に訪れる当日、安全祈願も兼ねて魔法の森で見かけていたお地蔵さんにお参りをし、成美とまた出会います。

そこで彼が鬼と出会うと言う事を知った彼女は、せめて生きてきて欲しいと思い、死にかけの生命力を操作して強化します。

その最中、リミッターが少し外れ禁止されたはずの記憶が少し思い出されました。

鬼である伊吹萃香とかつて会った事があり、忘れるなど念を押されていた事を。

四季映姫には、思い出す事が罪と言われていますが……彼女との記憶を忘れる事を罪と考えた彼は改めて決意して会う事を決めたのでした。

以上までが百話までの大まかな流れとなります。

改めて読み直して見ると説明不足だったり、反省するべき点なども多く見当たりました。

今更話の内容を変えたりはしませんが、注意すべき点をより一層注意した方がいいと思います、特に目標が薄く流されるままでは無くもう少し意思を持ったほうが良いと思われるばかりでした。

以降その点をまず注意出来たらなと思います。

さて長文となつてしまいました。がここまで読んでいただき有難うございました。

次回からは新章、く鬼と罪と嘘吐きくが始まりますので皆様楽しみにしてください。
い。

二百話までのあらすじ

皆様、日頃「幻想郷で死に戻る俺は」を読んでいただきありがとうございます。

気付けば二百話、正直一年近くで行くとは自分でも驚きでした。

さて今回も百一話から二百話までの大まかな纏めとなりますが、途中までしか読んでない方などはご注意ください。

百一話から百五話く鬼と嘘吐きく

自分の過去の記憶にうつすらと残る鬼を探しに博麗神社へと辿り着き、鬼と出会う話です。

この話では目的の少女を見つけ出す事、蓮司も過去について探る事が目的となります。

四季映姫の話から博麗神社に鬼が居ると知った彼は博麗神社へと向かい伊吹萃香と

出会う。

やっと会えたと安堵するものの彼女に遠ざけられてしまい戸惑う。

しかし彼女にとって過去の情報を知るであろう彼女は映姫に言われた罪の事も知っていると推測し、相手からの印象が最悪でも折れるわけには行かなかった。

そのまま何度も何度も彼は粘り強く通い続けついに萃香の方が折れた。

やっとこれだと思つた矢先、突如目の前に電車が通り過ぎた。

何が起きたのか分からぬまま、電車に轢かれ致命傷を負います。

死ぬ間際彼が目にしたのは普段全く接触して来ないはずの八雲紫だった。

そして彼女は知り過ぎてはいけないと言う。

知り過ぎてはいけないとは一体なんなのか？

そして殺される程だったのかなど何故こんな事が起きたのか理解せぬまま死にました。

百六話から百二十話く太陽の畑編く

強制的に太陽の畑へと連れて来られた彼は、そこでその最中に起きた異変を解決するため太陽の畑の主に協力を要請し、異変解決をすのお話です。

このお話では異変の解決と、河城にとりとの再会が目的となっております。

死に戻った事を知った彼は、先に進む必要がある事を理解しつつも一度萃香に会おうとする。

それを許さないようにスキマが現れ、太陽の畑へと投げ捨てられた。

そこで一人の妖怪と出会い、花畑で働くこととなる。

当然ながら人里よりも辛い環境で、折れかけもしたがなんとか耐えた。

その中で幽香は怖い妖怪であると知りつつも、優しさもある事に気付かされる。

そんなある日花畑に河城にとりが訪れた。

その後、にとりと時には革命など不穏な事を考えたりしつつ、過去の出会いについて話し合ったりなどと様々な話をしながら、共に花畑で生活しているとある日異変が起きる。

それは太陽の畑で四季を完全に無視した花が咲き乱れ、それにより本来の花たちが苦しみを幽香は知る。それにより激怒した風見幽香が異変解決へと乗り出した。

その場所はにとり曰く無縁塚であり、向かうと再び映姫と出会う事となった。

そして映姫から今回の異変の真実を知る。

それは、六十年に一度起こってしまう異変であり、待てば直に解決すると。

そのまま、異変解決を待ち続け、解決したのを確認し、にとりと共に太陽の畑を後に

したのだった。

百二十一話から百二十六話く 廃洋館準備編く

太陽の畑を出て、人里についた蓮司達は次の行き場所を考える。

そこで文が合流し、紅魔館近くの廃洋館を勧めてくる。

ただし幽霊騒動や危険な可能性などの問題があり事前準備をするためのお話です。

このお話では異変探しが目的となっております。

人里についた二人は妖怪の山に行こうとするが、蓮司が出禁になっており行き先に困る。

悩んでいると合流して来た文から廃洋館に向かうのはどうかと勧められる。

文曰く幽霊が出るらしい場所で、逃すまいと文をパーティーに加えて先ずは向かう準備をした。

準備のため寺子屋についた彼らは慧音と交流しながらアイテムを作っていく。

そして完成した物を持って、途中湖で妖精達に絡まれながら廃洋館へと辿り着いたのだった。

百二十七話から百四十一話　廃洋館編

廃洋館に着いた彼らは警戒しながら入るも閉じ込められる。

それでも耐えて探索するも次に蓮司だけが逸れた。

逸れた先で蓮司は少女と出会ったが……

このお話では異変の解決と死に戻りについてと???が??に?????事が目的になっておりま
す。

廃洋館に辿り着いた三人は警戒しつつも廃洋館へと侵入する。

始めに文単独で入るが、一時中から出られなくなり、開けようとした時叩き出された。

ポルターガイストが原因と決め警戒していたが扉が突然開き吸い込まれる。

その後そこから出られなくなり、三人で館を探索しつつ出口を探す。

しかしその途中とある部屋に蓮司は飲み込まれる。

目を覚ました時、二人はおらず慌てて探すと一人の少女が居た。

話し掛けると彼女はレイラ・プリズムリバーと名乗った。

彼女に出口を尋ねると遊んで欲しいとなつて遊ぶことになり、遊び続けた。

彼女は満足したかと思われたが、友達なら自分と一緒にでなければならぬと幽霊の彼

女は、蓮司を幽霊にしようと殺した。

死に戻り、異変と判断した蓮司は博麗神社に話しに行こうとしたが、目が覚めるとまだ廃洋館の中だった。

慌てて周囲を散策するとまたあの少女が居る。

警戒していたが、逆にその行動が彼女に気付かれまた殺された。

その一方で文にとりは消えた蓮司を探しておりその途中プリズムリバー三姉妹と出会う。

文はその存在を知っており、話し掛けるが、一方の三姉妹達は幽霊の大量発生に困りながら、問題点を話す。

自分達の末妹を止めて欲しいと。

逃げ続けながら過去の幻影のレイラから彼女の過去を知る蓮司と行方不明の蓮司を探し続けるにとり達は館内を探し回り、蓮司は自分が鏡の世界にいる事に気付き。ついに鏡を通じて互いを認識する。

しかしどうしようも出来ず、戸惑っていた。

そこに一匹の妖怪、八雲紫が何故かおり、蓮司の救出の協力をする。

にとり達は疑っていたが、自分達ではどうしようも出来ずにそれを受け、彼の救出へと向かった。

逃げ続けた彼は礼拝堂へと辿り着く。

そこで、まるで予知をしているような行動に違和感を感じたレイラは彼を殺さず悪霊を取り憑かせようとした。

その時、思い出せないはずの過去の記憶がよぎる。確かにいた筈の幼馴染の声が聞こえた気がした。

その直後自分の中から悪霊が掻き消えた。

何が起こったのかと思っていると、持っていたロザリオが熱くなっていて、これに助けられたと理解する。

そのままレイラは襲って来るが、幼馴染のように常識にとらわれずに逃げ続けたが遂には追い詰められた。

もうダメかもしれないと思った時、三姉妹の奏でる音楽が流れて来た。

その音楽により、レイラは呪縛から解き放たれる。

今までの事を謝罪し、オルゴールを蓮司に託しながら成仏した。そして彼女の成仏を以って結界異変は終了したのであった。

その後紫から死に戻りについて話され、今の貴方はとにかく生き続けろと告げられた。

一連の異変が終わり、異変中に負った怪我を治しに永遠亭へと向かおうとするが、湖を徘徊していたレミリアに捕らえられたのだった。

百四十二話から百六十話く紅魔館編②く

紅魔館に捕らえられた蓮司は、フランの世話係に任命される。

その後、紅魔館に迷い込んだこいしも加わり二人の世話をしつつとなった。

①の姉メインとは異なり今回は妹達メインのお話。

このお話では妹達が、お互い話し合つて、二組の姉妹の仲直りする事が目的となっております。

捕らえたはいいものの、蓮司の処遇に悩んでいたレミリアの元に暇と言つてフランが訪れた。

そこで名案を思いついたレミリアは、蓮司をフランの世話係とした。

どちらにせよ、受けるしか選択肢の無かつた蓮司はそれを受ける。

最初は過去に脚を潰された事や、日常でも起きる狂気から警戒気味だったがすぐに打ち解けていった。

そんなある日、フランの人形が壊れてああいつものかと思つてみると、フランはそれを否定した。

疑いつつも周囲を探すとこいしを発見した。どうやって紅魔館内に？

そのままこいしが帰るのかと思つていたが、何故か紅魔館に居続けていた。

どうするべきかと思いつつ、見捨てられない彼は特に咎める事はせず、世話係の仕事を増やした。

次第にフランとこいしは仲良くなって行くが、こいしが姉に対してコンプレックスを抱いている事を知る。

自分の事なんて必要なかったんじゃ無いかと思っており、そんな事ないと否定するが確証が無いと反発される。

そのため、さとりに会いに地底に行こうとするがその際に遭遇したヤマメによって死に掛ける。

咲夜のお陰で助かりはしたが、地底に行け無い事に気付き頭を抱える。

しかしその行動をヤマメがさとりに伝えた事によってさとりは地上へと向かう事になった。

悩んでいる蓮司の元にフランが訪れ、自分の過去を交え蓮司に忠告する。

思い込みは良くない、ちゃんと話した方がいいと。

こいしにそう伝えるが一度決めた事をそうそう曲げはしなかった。

結局無駄脚だったのかと沈んでいると、こいしさんから人里へ行かないかと誘われる。

気分転換にと付いていくと、そこで衝撃の光景を目の当たりにした。

地底にいる筈のさとりが人里に居たのであった。

慌てて追おうとするが、こいしまでもが行方不明になる。しかし一度さとりさんを集めて探した。

見失ったが里の人間の協力を得て見つけ出した。

その後さとりと共にこいしを探しに行こうとするが、妹との拗れから諦めようとする。

しかし一度話してと伝えてこいしさんを探し続け遂に見つけた。

そして、やっと本当の仲直りが出来た。

その後さとりを連れて紅魔館に帰還し、数日間滞在許可を得る。

良かったと安堵していると、フランの様子がおかしい。

その件でレミリアに呼び出され、初めての優しい人だったこともあり、フランが依存気味だと伝えられる。

それに気を付けつつもフランと遊んでる最中に寝落ちてしまう。

寝ている間に眷属にされかけたがレミリアによって助けられ、姉妹の戦いになった。

目を覚ました蓮司は二人の紅魔館が半壊するほどの戦闘を見かけどうにか出来ないかと考える。

さとり達に逃げろと言われたがフランを放っておけないと、さとりと協力しフランを

正気に戻した。

翌日レミアリアに呼び出され、紅魔館の修復とフランの自立も兼ねて紅魔館から離れるように言われた。

行き先に困っていたが、さとり地に地霊殿に来ないかと案内され向かう事としたのであった。

百六十一話から百六十四話、地底の底へ、

地底へと訪れた蓮司は空が前に会った時より小さいことに気付く、その違和感などから灼熱地獄に向かうとしたが途中何者かの妨害により地の底へと落ちた。

そして、地の底に潜んでいた者と出会うお話。

このお話では新たな異変と??の登場が目的となっております。

地霊殿へと辿り着いた蓮司は、まず空の違和感に気づく。

前に地霊殿を訪れた時に比べて姿が小さかった。

何故かと聞いたがこれが普通だと聞かされた。

ならば他の場所にも異なっている場所があるのではないかと前に事件が起きた灼熱地獄に向かうとする。

しかしその途中、狭い通路で突如足が動かなくなり下へと落下する。その途中赤色の河童が見えた気がした。

さとりは友人である、みとりの行動に驚き問い質すが良い答えは帰ってこなかった。地の底に落ちた蓮司は周りが見えず闇雲に歩き続けるとさとりさんを確認する。いつのまにさとりさんが地の底に降りて来たんだと驚いたが助かったと思つた。

そのままさとりさんの言う通りに従つて、怪しいものを解くと目の前のさとりさんが変化する。

地底の妖怪ぬえの封印を解いてしまつた事に気付いた蓮司は慌ててどうにかしようとするが妖怪に敵うわけもなく、こいしさんの救援も虚しくそのまま攫われた。

何処まで攫われるか戸惑つていたが、地の底にある船まで辿り着いた。

この場所とは戸惑つていとぬえはここで封じられていた妖怪達を解放する。

そのままぬえは人間達に復讐しようとするが、村紗達は聖の救出を目的に魔界へと向かうと言う。

そのまま向かつて行き残されたぬえは自分が助けたのに人間を助けるとはなんだと村紗達の計画を邪魔しようとする。

そのまま蓮司は巻き込まれて、村紗達を止める事となつた。

時同じくして、蓮司の幼馴染である早苗が本来の予定よりも早く幻想入りしていた。

理由としては行方不明の幼馴染が幻想入りしている可能性があるからだと言う。こうして同じタイミングに二つの異変が起こったのであった。

百六十五話から百七十三話、二つの異変、

村紗達をどうかしようとする二人は偶然幻想郷を回っていた文に再会する。

異変について話すが文は妖怪の山でもう一つ異変が起きていると話す。

向かってみると、覚えてない筈なのに、何故か記憶にある幼馴染に再会した。

このお話では異変の解決と蓮司の過去が目的となっております。

地底を出た二人は、まず協力出来そうなアリスを頼ろうとした。

しかしアリスはおらず、他に頼れる人を探した。

その時廃洋館以来の文に遭遇し事情を話す。

しかし文の方でも問題が起きており、一度妖怪の山に向かう事になった。

天魔に見つからぬ様直接山頂へと向かったが、そこで何もなかった筈の山頂に神社が
出来ていて驚く。

更に話を聞くと、妖怪の山なのに人間が居るらしいとそのせいで皆警戒しているとの
ことだ。

ならばと向かうと、確かに人間が……っと思つたのも束の間、相手がこちらの事を知っていた。

そのまま記憶が欠けている事を伝え、何故神社が建っているのかと尋ねると神奈子に聞いてくれと言う事になった。

神様に遊ばれつつも話を続け、村紗達をどうにか出来ないかと尋ねると早苗を連れて行けと言われる。

その後文から魔界への行き方を教えられるが、その道中ナズーリンに妨害される……筈だったが彼女の優しさのせいでスペカの使い方を教わり通された。

そのまま博麗神社へと辿り着き神社に居た霊夢に事情を話すが、彼女は魔界の異変よりも守矢神社の方を問題視して向かってしまった。

これは不味いと急いで妖怪の山に帰還しようとするがその途中で文に会い魔理沙を探してくる様に言われた。

魔理沙を探しに人里へ向かったが見つからず、一縷の望みをかけて寺子屋に向かったら魔理沙は香霖堂にいる可能性が高いと伝えられ香霖堂に向かった。

中では魔理沙と霖之助が揉めており、事情を聞いた上で魔導書を対価に魔理沙の協力を取り付けた。

山に向かう途中面倒な姉妹に会つたりしたがぬえの機転により助けられ山を登る。

そこで霊夢とかつてにとりと作った偽想天則が戦っており、まさかの霊夢に勝利していた。

早苗がロボットに興奮しつつにとりから事情を聞くと一人で非想天則を完成させた。それで霊夢に勝利出来る以上恐ろしい出来なのは分からされた。

そのまま話し合いとスペカバトルにより守矢の異変は解決し、今度こそ問題である魔界へと向かうこととなったのだった。

百七十四話から百八十九話く魔界編く

魔界に辿り着いた蓮司はいきなりの猛吹雪に死に掛ける。しかし運良く上海人形に見つけられた事により助かった。

その後、アリスの親の神綺や魔理沙の師匠の魅魔などを仲間に加えて村紗達を止めに向かう。

このお話では異変の解決と??と??が目的となっております。

魔界に辿り着いた三人は突入直後に猛吹雪に襲われる。

最初は固まって行動していたが、常人である蓮司には体力が持たず次第に意識を失った。

運が良かった事にそこはアリスの魔界での住居の近くであったため上海人形に救われた。

目を覚まさない蓮司を心配した早苗とぬえだが、彼が目覚める前に異変を解決しようと二人で向かった。

目を覚ました蓮司は二人を追いかけてようとするがアリスに止められる。

一度は諦めようとするも、悪夢を見たせいでやはり行くべきだと再燃する。

ただ一人ではどうしようもないと思っていたが、突如家に居た魅魔が協力を申し出る。

それでも異変なら不足と考えたアリスは神綺をメンバーに加えるよう向かった。

館に着いた三人は魅魔が先行して中へと入るが、過去の件で魅魔に恨みを持つ神綺は追い出そうと全力になる。

しかしアリスが異変解決の協力者だと言うと渋々協力する事にした。

神綺の情報から法界に封印された人間が居ると聞いて夢子と神綺をメンバーに加える五人で向かった。

早苗達もユキとマイをメンバーに加えて法界へと向かった。

法界に着いた蓮司達はナズーリンと再び相對する。

幻想郷みたいに油断はしておらず、ピンチになるかと思いきや……神綺相手に敵うは

ずも無かった。

ナズーリン撃破後、蓮司は法界の空気になれず調子を崩し休んでいると、早苗達と離れていて仲間と知らないユキに襲われる。

いきなりのピンチだったが、見知らぬ女性に助けられユキを追い払った。

ユキの逃げ際に神綺の関係者だと知ったが既に遅かった。

その女性に感謝しつつアリスさん達と合流すると神綺もおりユキは自分のやらかしの氣付く。

そのまま、皆揃って散策していると浮遊する船を発見した。

その船を追う途中早苗やぬえと合流して追い付くが星に邪魔される。

星をぬえ達に任せて船を再び追い掛けて止める事に成功する。

こちらは村紗が足止めするが、過剰戦力相手に星も村紗も倒される。これで異変が終わったと思ったが……

船から先程自分を助けてくれた女性が降りてくる。

五対一で戦つてるにも関わらず崩れる様子はなく、一瞬の隙について全力を出した聖に全滅した。

蓮司は捕らえられ、尋問されるが思つた事を全て話す。その言葉に不満があり全部の妖怪を救うと言い続けたが、蓮司の言葉によって納得させられた村紗が聖を説得し聖

が納得した。

その後倒されたメンバーを説得しながら警戒しつつも幻想郷に行く事を神綺に許可され魔界のメンバーが見送りながら皆を乗せて船は幻想郷へと戻った。

……その途中蓮司の頭がまた禁止の文字で埋まり気絶したのであった。

百九十話から二百話へ平和な日常へ

二つの異変が終わり、博麗神社でのんびりと過ごす蓮司。

その日常は平和に過ぎて行く筈だった……しかし段々違和感が起き始め日常は壊れ始める。異変が終わったばかりなのに新たな異変の予兆を残して。

このお話では異変の始まりと河城みとりの??が目的となっております。

蓮司が目を覚ますと博麗神社に居た。

確か魔界に居たはずだがいつのまにか戻ってきていたらしい。

霊夢に事情を聞くが、暫く大人しくしてるとのことらしい。

文句はあるものの当然意見は通らず少しの間神社に居ることになった。

早苗を始めレミリアなど多くの人が神社に訪れ、色々と情報を聞くが、紅魔館の妖精メイドの失踪や地底に向かった村紗達が帰って来ないと伝えられた。

気になりはしたが動くわけにもいかずただ聞いているだけだった。

数日後アリスが神社に訪れて、やっと解放された。

その後、失踪事件などの情報を得るために人里や新しく出来た命蓮寺に向かったりするがやはり失踪が起きているらしかった。

命蓮寺のメンバーである一輪は守矢神社が怪しいと告げ、そんな事は無いだろうと思いつつも守矢神社へと向かった。

守矢神社に着いたが失踪した人間がいる事は無くやはり無実だと言う事は分かった。

神社前で早苗に会いたがってにりと合流し、その事で諏訪子にイジられていた。

それを見かねた文に止められ、話はまた失踪事件の方へと戻る。

文は急いで情報収集へと向かいそれを神社で待つ事にした。

早苗も仕事が終わりにとりがいる事に気付き、非想天則を見せてもらおうと向かって行った。

残されたメンバーは文の帰還を待っていると、慌てた文が帰って来る。

事情を聞くと人里が襲われているらしい。

理解不能だったが文さんに続いて人里へと向かった。

少し前まで居たはずの人里は惨事になっていた、事情は分からず寺子屋に向かうと妹

紅と慧音がおり事情を聞くと鬼が襲つて来たらしい。

何故鬼が居るか分からず命蓮寺に向かうと寺が潰れていた。

大怪我したナズーリンに事情を聞くと聖が大変な事になっていると。

救出しようとした時鬼が再びやって来て襲われた。

抗おうとしたものの、尋常な数ではなく命を落とした。

数日前地底殿ではさとりと神奈子の対談が行われていた。

内容は幻想郷の産業革命のために協力してくれと。

さとりは断ろうとしたが、とある人間がもつと地底に来やすい様になればと乗ろうとするが、空に力を与えると聞いて、何度も聞かされていたらしい空が地底を滅ぼすとの話を思い出しそれだけは反対した事により空による異変は未然に防がれた。

一方で星と村紗は河城みとりに捕らえられていた。

地の底ではみとりが鬼達を集めて地上に革命を起こそうとしていた。

止めようとするが全てを禁止されておりどうしようも出来ない。

ただただ見ている事しか出来なかった。

その数日後、鬼によって幻想郷は崩壊するが……蓮司の死により巻き戻ったのであった。

以上が百話から二百話までの流れとなります。

本来起きる異変が既に順序が壊れており、存在しない異変や消えた異変なども出て来始めて居ます。

その中で彼はどうするのか、これからの異変にどう立ち向かうのか。これからも楽しみにしてくださいませ。

長文となつてしまいましたがこのまで読んでいただき有難うございました。

次回からは新章、く獄都異変くが始まりますのでお待ちくださいませ。

|||||

「俺は何も持ってないはずだが……」

金髪の少女が目の前にいた。

外国の人か?と思つたが話せる事にも違和感があつたし……何より目が赤い。

アルビノ、とか言うんだっけか?どちらにせよ普通の少女じゃ無さそうだが……

「……は?」

「……?幻想郷よ」

「幻想郷……?」

聞いた事がない。夢を見ているのかもしれないが……この子が適當を言っているよ
うには思えない。

目の前の少女こそが明らかな異質なのだから。

「何処へ行けばいいか分かるかい？」

「知らない」

「まあ俺が何も言っていないしそうだよな……」

ここに訪れた人が行く場所があるとか言うのは無いらしい……ならば帰ることを目標としても現状把握が最優先か。

「俺は小野寺蓮司、君は？」

「ルーミアよ」

「なるほど、よろしく」

ルーミア、その名前からやっぱりこの子は外人かな……？
ただ幻想郷って名前が明らかに日本の地名にも見える。

正確には日本では聞いたことないためアジアの何処かかもしれないが……話が通じる以上現状は日本だと推測する事にする。

「それで、近くに街などはあるかい？」

「どうして？」

「ひとまず街で情報収集をする。幸い君と会話が通じると言う事は、街でも話せそうだしな」

「だから、どうして？」

「何故かって……」

そう言えば焦るあまり俺の今の状況について話して無かった……

そりゃ困惑するだろうな、申し訳ない事をした。

「今、俺は迷子になっていて困っているんだ。だから近くの街を探して情報を集めようとしている」

「そうなんだ」

「だから教えてくれないかなお嬢ちゃん」

「なんで……?」

「いや今俺話したよね!」

聞いてなかったのかな? いやなるほどって言ったよな……?」

ええ……話通じないタイプだとは思わないだが……

「と言うか……外の間人なのか」

「何か言ったかい?」

「なんでもないよー」

「??？」

話になってない気がする……この子で大丈夫なのか不安になってきたな。

「街に寄りたいたいから、分かったかい？」

「分かったけど……ダメだよ」

「なんで!？」

もしかして外部のものは入っちゃいけないルールとかそういう奴……？

それだったらさつきまでの反応も分からなくはないが……それでももつと早く教えて欲しかったな。

「だって貴方は餌だもの」

「……………は？」

驚く間も無く少女が飛び込んで来る。

反射的に手をバタつかせ、追い払おうとしたが、その追い払おうとした腕が喰い千切られた。

「はあ……………!?なんだよっ……………なんだよこれっ!?!」

嘘だろ……………?これが現実なわけないだろ……………!?!

噛みちぎられ穴の空いた左腕を押さえながら必死にどうにかしようとして慌てて逃げ出す。

ただし逃げ出そうとしたが周囲を黒が覆う。

「なんだこれ……………暗い暗い暗い!?!」

闇？よく分からない……痛いし暗いしどうなってんだよ……

「外の人間は襲っていいって聞いてたからね。いただきます」

「嫌だ……なん d ……」

首筋に熱が籠る、その直後に痛みが走って何かは抜ける気がして……噛みつかれたんだなど。

「あ……。」

何かを喋ろうとするが、喋る言葉も出てこずにその場に倒れる。
次第に俺の体は冷たくなっていった……

「……」

死んだ……と思ったんだが……今俺は野に突っ伏している。
一体どう言うことなんだ？

「腕は……」

少し震えながらも腕は生えている……と言うよりも傷すら一切ない。本当に良かった。

周りを見渡すと見覚えのある所であった。

「さつきまで居た場所……？」

より正確に言うなら先程目覚めた場所までもが一緒に思える。
なら夢を見ていたのだろうか？

「正夢なら困るが……」

妙なりアル感は残っている、本当に自分が死んだようだった。

ただそれならなんで生きているのか謎としか思えないし今はそうだと思ひ込む。周りを警戒しつつ進む、少し進んでいくと……先程まで見たはずの少女がいた。本当に正夢なのではと思ひ始めて慌てて逃げた。

「あれ……？行っちゃった……」

一方少女は自分の方を見るなり逃げていった男の方を見る。

全力で追えば追いつくかもしれない。

ただしリスクもあれば餌を取るのに面倒事をしたくないといった意志で今回は彼のことを諦めた。

「はっははは……夢ならばち壊してやったよ」

少なくとも自分は死なずに済んだと歓喜を上げる。

少なくとも餌にならずに済んでほつとする。

「そして、これからの事を考えないといけないか」

信じようとした矢先にあれだ……

証拠が言っていた幻想郷と言う場所にはどれだけあんな奴みたいのがいるかって……正直考えたくもない。

「街は……」

先程までは行こうと考えていた……が躊躇ってしまふ。

先程のような人喰いの街だったらどうしようもない。

そもそも、人間の街ならさっきのような奴が既に襲っているか……

「だったらどうすりゃいいんだよ……」

わけの分からねえ場所に飛ばされて、運良く死んでなかったみたいだが結局ここで生きていけないのか？

知り合いすらいないこの場所です？

「……………」

死ねる度胸があるわけじゃない、救われたからって誰かに助けられるとも限らない
……………

ただ……………それでも自分は他人を信じるしかないか。

「次の人がいい人だといいな」

死んだらそこまでとしか言えないが……………どうせこのまま1人では死ぬ。
だからと言って街の場所が分かるわけでもないのが難しいな……………

「聞いておくべきだったか……………」

ルーミアと名乗ったあの人が喰いに……………

ただ……………また喰われるだけか……………

「とにかく行くしかないか」

途方もなく進むことになる……何か目印になるものがあれば……

ドツカーン

「なんだ……?」

唐突な爆発音に驚く、爆発物なんてあるのかと。

慌てて音のする方へと向かった。

何かあると、今のこの状況を打開できると信じて。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二話 魔法使いと妖怪と
Witch and sp
e c t e r .

爆発する元へと辿り着いた。

正確に言うのと近くまで辿り着いた。

何故近くまでと言うと……

「空を……飛んでいる!？」

正直理解出来ない……女の子達が空を飛んでいるってどう言う状況だ……?
そう言った機械のような類は持つてなさそうだが……

「あの2人は……」

片方は金髪の黒い服を着た箒に乗った少女。
そうしてもう1人は……

「人喰い……」

ルーミアと名乗った人喰いだった。

あの2人が空を飛んで何かしているのか……？

驚きながらもそれに見入る。

一体何をしているのか、何故爆発が起きたのかと思いつつながら。

「飛び道具は持っていないはずだよな……？」

人喰いは、先程の用に少女に嘔みつこうとはせず、何かを飛ばして戦っている。

「恋符マスタースパーク!!」

もう1人の少女がそう叫ぶと、直後に人喰いの方へとビームに似た何か飛んでいく

……え？ビーム？

「直撃した……!？」

「もー……だめー……」

「私の勝ちだなっと、負けた事無いけどな」

そう言いながら2人とも降りてくる、そうして人喰いと目が合う

「人間……食べてもいいのかな？」

「ひっ……」

慌てて後退りする……見てる場合じゃなくてすぐにでも逃げるべきだった……

「ん？人間がいたのか？」

「あつさっきのレーザーの人……すみません助け……」

脇目も振らず助けを求める、見捨てられたらどうしようもないからかなり切実にだ。

「あー、ルーミア……食べちゃだめだぜ？」

「えー？なんでー？」

「霊夢にどやされる」

「そっかー、それじゃあダメなのか……」

「おう、そうしてくれると助かる」

「……助かったのか？」

「おう、その兄ちゃん無事で良かったな」

「はい……ありがとうございます……」

彼女が居なければ俺は夢の通りに喰われてた気がする……まだ人喰いがいる以上は油断は出来ないが……

「自分は小野寺蓮司と言います、貴女は？」

「魔理沙だ」

魔理沙って名前は非常に珍しい気がする……

ただし名前の雰囲気的にはやはり日本なんだろうなと思う。

ただ日本は日本で違和感あるんだが……例えばアニメとかだったらこんな世界なのかな？とかは思う。……がまあ流石に無いだろうな。

「ルーミアなのだー」

それよりなんとと言っても彼女の存在だ……

明らかに日本らしきはないのに、日本語は平気で話せるのに帰国子女みたいかと言うと違和感もかなり残る。

「所で、こんな所でどうしたんだ？」

「自分、迷子でして……」

「なるほど、災難だったな」

「それで……街はどちらでしようか？」

「先程までの考えを捨てる。少なくともこの人喰い達を制止出来る人間達がいるってことは、普通の街があるはずだ……」

「街は遠すぎるから里だな……ここから少し離れたところにあるが……博麗神社も遠い

んだよな……。しゃあない、面倒だからルーミア案内してくれ」

「なんで私がー？」

「弾幕ごっこ負けたからいいだろう？」

「むー、分かったー」

そうしてルーミアと言われる少女が案内してくれることに……。え？なんでですか？

「本気ですか？」

「何か、問題でもあるのか？」

「食べられたりしません？」

さつきも食べられかけたし、夢では喰われた以上そこまで信用が出来ないが……

「食べるなって言った以上は問題ないな、ルーミアだって霊夢を敵に回したくないだろうし」

その霊夢って人が分からないんだが……信じるしかないのか？

「じゃあ私はもう行くぜー」

そうしてそれ以上の言葉を伝えるまでもなく箒に乗った少女は去っていった……
そうして人喰いだけがこの場に取り残される。

「仕方ないから人間の里まで案内するよ」

「はいっ！ありがとうございますルーミアさん!!」

「ルーミアでいいよ」

逆らったら殺される、そんな気がしない。

さっきの少女は大丈夫とは言ったが……流石に舐めた態度は命に関わりそうで取れないな……

「(今度こそは死ぬわけにや行かねえし……)」

都合の良い夢などは2度もあり得ないから、死ぬわけには行かねえな。

そうして、一時的な人間と人喰いの奇妙な2人旅が始まった。

「それより、君の事見た事無いけど、街の人なの？」

「いや……ここからだいぶ遠いので、一応先に街へと行こうかと。里に行く事になりましたが」

「ふーん」

時々される質問を答えながら里へと向かう。

結構近くにあつたようでよかつた。自分自身体力は平凡程度だと思ふから、疲れて動けなくなると機嫌を損ねるかもしれないし。

「着いたよ」

「ありがとうございますルーミアさん」

「じゃあ行くー」

「つと」

あつと言う間に去つていつてしまった。

それと同時に生き延びられた事に安堵する。

「ただ……喰われるはずの相手に助けられたのは意外でしか無いけどねえ」

「アンタどうした？」

「ああ、すみません迷子でこの里まで案内してもらったものでして」

「迷子かあ、そりゃ災難だったな」

「ええ、運良くここに辿り着けて良かったです」

実際運が良かったんだろうと思う。

ルーミアさんに夢の通りならば本当は喰われていた筈なのに……生きていただけじゃなくて助けられたまであるしな。

「おうそうかい、じゃあ当ても無えんかな？」

「はい……そうですね……」

「一晚借りられればいいが野宿も考える……経験がないからキツイと思うんだけどさ。」

「だったらこの里で暫く過ごしな、状況整理もしたいだろうしよ」

「いいんですか？」

正直「一晚借りて情報を集めてそれまでと思っていた。」

暫く泊まれるって言うなら非常に有難いが。

「流石に他所もんとは言え勝手に追い出しちゃあ里としてその程度かと知れちまうから」
「や」

「ありがとうございます!!」

幻想郷と言うもの自体がよく分からないし現在この場所が何処だかは分からない。

ただ、野垂れ死ぬことは無いって分かっただけでも助かった。

「元の場所にいつ帰れるかは分からない」

ただ喰われなかった以上生きていれば進展がある。

そう信じて生きて行く。やりたいことがまだまだあるからな！

腕を振り上げて、そう決意した。

t o b e c o n t i n u e d

三話 人里での暮らし ~better living.
g.

里に入つてはじめて言われたのが、珍しい服装をしている。だ

確かに俺の服装はここでは目立つが……

私立だった故に普段着なのだが、皆にとつてはこれでも珍しいっぽいな。

「確かに作業服のようだけど、そんなに珍しいですかね？」

「ああ、初めて見るな」

「そんな田舎にも思えないんだがな……」

見る限り確かに里の名のように地元から少し離れた村のような感覚はある。

ただ……それでも服はそれなりのを着ていたはずだが。

「どっかでそういうものがあるのかな」

「服屋とか寄らないんですか……？」

「服屋……」

そうは言われてもこの里には無いかな……？

それなら替えの服が心配なところはあるが、まあそもそも持つてるお金使えるか不安だが。

そう気楽に思っていたが……

「もしかしてあんた、外の人間か？」

「外……？話が通じる以上外国では無いと思いますが……」

「外国ねえ……」

「何かありましたか？」

何か失言したのだろうか？

ここがかつての日本だったらアウトだが……流石にそうは思わないし。

「いや、アンタが本当に外の人間だなと」

「外って……どう言うことでしょうか？」

「村に詳しい奴が居るから、ソイツに聞くといい」

「長とかですか？」

「ここに……いや幻想郷に人間の長なんていないよ」

「……？」

疑問に思いながらもそこへと向かうことにした。

まずは里に入って何やらやることはあるだろうけど、それ以上に現状が気になったからだ。

「ここについて知ることができるかな」

幻想郷について、そして外について……

帰る手がかりがあるかどうかだ。

「やあいらっしやい」

「すみません」

「いや構わないよ。それで何の用だい？」

「幻想郷と外の世界について話してくれるって聞いたんですが」

「君は外の世界の住人なのかい？」

「外の世界って……？疑問に思っただけなんですけど……」

さつきと同様に同じ話だ、だが外の世界ってどう言うことなんだろう。

「……君は幻想郷と言う場所を知っているかい？」

「いえ、ここに来てから初めて聞きます」

「だろうね、ならば君は外の人だ」

「そうなんですか？」

「そうして幻想郷に迷い込んだ……忘れ去られたのかどうか分からないけどね」

「迷い込んだですか……？」

「変な場所に来なかったかい？」

「いえ、高校で授業中でした」

「……ん？君の出身は？」

「日本ですが？」

「そうか、ならボクと同じか」

「同じってここは日本じゃ無いんですか？」

「そう思ったかい？」

「最悪過去も考えましたが……田舎かなと」

「昔の時代……まあそう考えられないこともないけど……違うよ？」

「そうなんでしょうね……この服を珍しがるのも違和感でしたし」

「ボクも違和感あるけどね……だいぶ昔に幻想入りしたから」

「幻想入り……」

「今の話で予想ついたかもだけど……ここは異国ってより異世界って考えた方がいいかな」

「異世界……」

友人がよく言ってたが、異世界行きたいなって。

呆れながら聞いてたが俺の方が異世界に行くなんざ予想出来ねえよ。

「それで、君はどうやって？」

「授業中に神隠しって言葉を聞いてここに来ましたが……」

「神隠し……」

やっぱ言われても戸惑うよな……神隠しなんざ普通はあり得ないし……

「賢人様か……?」

「心当たりあるんですか？」

「どうだろうね……自信はないけどそうかなって思う人はいるんだ」

「マジですか……」

神隠しをさせる人に心当たりあるって相当やばいな。ただ……その人に聞いてみるべきかな？

「ちなみにその人は？」

「残念だけど会うことは出来ないね」

「え？なんでですか？」

会うことができない人って遠くに住んでいるってことか？

それならそこを目指すけど……そうでは無さそうだな。

「そもそも人間じゃないんだ」

「……え？」

人間じゃない……なら動物とかか？

そんな特殊能力を持った動物とかがいたら大変だとは思いますが。

「信じられない話だと思うが……妖怪がこの世界にはいるんだ……」

「は？」

いやいやいや……妖怪つて……何を言ってるんだ。

そんなものいるわけが……

(だって貴方は餌だもの)

ルーミアの発言を思い出す。

明らかに人間同士の発言に思えなかった。

「もしかして、ルーミアって妖怪もいます？」

「会ったのかい!？」

「はい……」

「よく生きてこれたね……本当に良かった」

「……そうですね、運が良かったです」

案内してもらったとかは言うわけにやいかなければ……

「里の人間は襲わないけど、外の人間は襲う。だから彼女の餌になった人間は多いんだ」

だから夢では喰われたし外の人間って拘っていたのか……

ただ……そう考えるとだいぶリアル過ぎる気もするんだが。

「他にもだいぶ妖怪がいる、正直里の外は危険だらけだ」

「……そうですか」

「さつき言った神隠しを起こすのも妖怪だし口クでなしでもある」

「どうしようもないですか……?」

「確か、誰かを頼れば出れたはずなんだが……この里は閉鎖的で思い出せないな」

「なら……次の里向かった方がいいですかね?」

「いや、やめた方がいい」

「どうしてですか?」

「周りの雰囲気を見ればわかると思うが今は秋だ」

「そうみたいです。ここは現実と変わらないのか」

「そうすれば冬が来る、恐らくは君がいた場所の冬とは桁違いで出ることも厳しいケースが多い」

「そんな……」

ただ確かに暖房も明らかに無いのだろう。

そう考えると携帯の暖を取るアイテムもないだろうしかなり厳しいか……

「だったらどうすればいいんですかね？」

「ここの里で冬を過ごすといいさ」

「良いんですか？」

「流石に冬に追い出すわけには行かないしね、食糧も薪も余裕がある」

「ありがとうございます」

「同郷の人間だし仲良くしたいしね。なんならここが気に入ったらずっといてくれて良いと思うよ」

「分かりました」

こうして俺は里に迎え入れられた。

バイト経験はあったものの、それでも流石に村での仕事は結構厳しいものだったが……それでもなんとかやってこれた。

「良い人ばかりなのは本当に良かったな」

そうして秋が過ぎ、冬を迎え、里は春を迎えようとしていた。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

ただし春を迎えることはなかった。

四話 春雪異変 (Spring snow.)

今は4月。雪も溶け、桜を迎える季節のはずなのだが……一向に春が来ない。

「これが普通なんですか？」

「いや……異常だ……。春は遅くても3月中盤には来るはずだし……そもそもだ」

春が来ないで済む問題では無い。雪が降っているのだ。

普通に考えてあり得ない。

「なんだよこれ……」

冬が長引いて、里の貯蓄も自信が無くなってきた。

何よりここまで雪に降られては春に採取するものが出来ないのも辛い。

「原因が分かりませんね、過去にこんなこと一度も無かったので……」

「ここまででは異常すぎるとは言え、異常気象とかつて存在はしていると思いますが……無かったんですね？」

「幻想郷では災害や異常気象は起きませんので」

「何それすごい」

幻想郷って場所はやっぱり理想の地なのじゃないかと。
人間が暮らして行く上でトラブルが少なそうに思える。

「どっかの誰かが悪さしてるとか？」

「そこまでは分かりませんね。自分達も」

「そう言う妖怪が居たり……?」

「前にも言った通り閉鎖的なせいで、そう言ったことは知りません……」

そもそも雪女みたいに雪を降らせる妖怪が居たら、こつちに接触してくるか? いや分かんないが……姿を見せずにはおかしいなとは思った。

「……どうしようもないんですか?」

「終わってくれることを祈るしかありません」

祈ると言われたように、祈りながら寝て起きて、また寝た。そうして数日が経っていく。

雪は、収まるどころか強くなる一方だ、何が起こっているんだ……?

「……薪ももうだいぶ少なくなってきた」

「無理してでも採りに行きますか？」

「いや……雪でだいぶ湿っていて正直使えたものじゃないだろうね」

「不味いですね……」

「里全員が大変なことになるか……」

「それだけではありません……」

「何が……？」

いや色々あるだろうけど、正直目を逸らしたい。

これ以上何があると言うのだ。

「いや……やっぱりいや」

「そうなのか？……気になるがそう言うなら」

多少モヤモヤが残るが言わないと言うなら仕方ないだろう。

一先ずは諦めるとする。

ただ隠したいことなんかあるのだろうか。

「それじゃあ今日は帰ります」

「気を付けて」

そのまま借屋へと帰る。正直帰るまでもしんどいんだがね。

「……」

残された男は心配そうに蓮司を見送る。

完全に去った後にポツリと一言溢した。

「大丈夫かね……少年を守れるなら守りたいが……正直自信がないな」

小野寺蓮司、彼の置かれている現状を改めて思い知らされながら。

—————

最近なんだが里の皆からの視線が冷たい気がする。

こういつまでも雪降っていては険悪な雰囲気になるのは分かるけど……それでも一方的に俺に集中している気がする。

「気のせいだとは思いたい……」

残念ながら真実だろう、1人増えてやっぱ里も厳しいのかな。小食ってわけではないしな。

そう思った故に食糧や薪を今度持っていくか……とそう思っていた。

しかしそんな甘いものでは無かった。

雪が少しだけ弱まったその日……その事は起こった。

「村中で集まれて何があつたんだらうか？」

この日、里の皆から全員で集まるようにと言われて集まった。

今日中に採取とかをするんだらうか？

「皆に集まってもらったのは他でも無い。各々が思っていたことだらうが今日決行することにした！」

その言葉に村人達は歓声を上げる、ただし同郷のあの人だけはいい顔をしていない。と言うかそもそも何を決行するか聞いてないんだが……

「では手筈通りに行かせてもらう、小野寺蓮司!!」

「はっはい!!」

だから聞いてないんだってば……何をする気だ……？

「お前、何者だ？」

「何者って人間ですが……？確かに俺は外の人間であって他の人とは多少違いますが……」

「本当にか？」

「何が言いたいんです……？」

嫌な予感がする、正直逃げたい気持ちしかない。

「先にもう一つの質問をする。お前はどうかやってこの里に来た？」

「どうやって……徒歩ですが……。」

「そうではない、この里は所謂隠れ里であって迷い込んだ人間が辿り着けるわけではない」

「そう言うことですか……案内してもらいました」

そもそもあの2人が知ってた以上は隠れ里って感じもしないんですが。

「誰に？」

「誰について……」

金髪の黒い服の少女……確か名前は魔理沙だったよな

「魔理沙さんです」

「……苗字は？」

苗字……聞いたつけ……？いや聞いた覚えはないな。ルーミアって名前があつたし
魔理沙も普通の名前かと。

「いえ……聞いてません」

「ふん」

そもそも名前だけじゃなんでダメなのか……これがまったくもって分からない。

「それが何か？」

「その少女は暫くこの里に立ち寄った記録はない、大方騙つたんだろうと言う話だ」

そう言うことか……確かに案内されてないし疑われているのか、そこは仕方ないかも
しれない。本当にそこだけだが。

「案内は別の方にしていただいたんです」

「誰だ？」

「ルーミアさんです。魔理沙さんと弾幕勝負？と言うものをしていたらしく、負けて案内していただきました」

「……なるほどな」

「これで何が知りたかったんです？」

確かに妖怪に助けられたって言えば笑いだらう。

ただ笑いにされる、それだけで済むはずだらうと。

「お前は本当に外の人間かって聞いているんだ」

「人間じゃなかったらなんだって言うんですか!!」

「妖怪だ」

無情にも里のみんなに妖怪だと宣告された。
俺は妖怪じゃない!!とその言葉は里の誰にも届かなかった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

五話 死に戻りとその自覚
resurrecto
nce more.

「は……?」

「お前がこの里の雪を降り続けさせている妖怪だつて言ってるんだ!!」

何を言い出しているんだこの人は。

俺は人間だ、見れば分かるだろう?

確かにルーミアさんとかみたい人間に見える妖怪は分かるが……わざわざ弱くなる必要ないだろうと。

「そんなこと出来るわけがないだろう!!」

「去年まで不作も蝗害も無い！雨は降れども台風すら来ないこの里に雪が降り続けているのはおかしいというんだ!!」

「それは知りませんよ……」

あの人が言っていた通り村では災害なく暮らせて来れたと。

ただ、実際にどうであつたかは知るわけ無いんだからどうしようもない。

「この異変が起きたのを我々は疑った、そしてその時間いた話がより確実になった」

「妖怪である理由ですか……?」

「お前がルーミアに食べられず、それどころか案内された……おかしいだろう?」

「言いがかりですよ」

一度喰われた記憶がある。だからこそ生き延びようとして生き延びたのにそれはあ

んまりだろう。

出会わないように逃げただけだって話だし。

「残念だが我々はお前が我々を殺しに来た妖怪としか思っていない」

「出て行って言うんですか……？」

正直この雪の中、違う里まで辿り着ける自信がない。

ただ諦めず運が良ければと言ったところか……

「いや」

「良かった、弁明は聞いてくれそうですし、雪で死ぬこともなさそ……」

「お前は殺す。里を守るために」

「嘘ですよね……？」

殺害宣告に言葉を疑う……嘘だろ……そんなことが……
そもそも罪が重すぎやしないかと訴える。

「待つてください!!流石に妖怪と確信してないのに殺すのは……」

あの人だけは味方とばかりに止めようとしてくれた。
しかしその言葉すらも通らぬようで……

「里の『総意』だ皆、討ちとれ!」

その言葉とともに皆が武器を持って構える。
慌てて逃げ出す、流石に冗談じゃない。

「追え、絶対逃すな!!」

怒号と共に武器を持った人間が迫る。

慌てて逃げ出すが足に矢が刺さる。

「痛ッ……。」

「必ず追い詰めろ！絶対に生かして逃すな！」

足の痛みも血も止まってはくれないが、足を止めれば死ぬ。その恐怖心で必死に逃げ出す。

「死んで……たまるか!!」

腕を長槍で刺された。腕から血と共に体温が逃げていくのを感じた。腹に石がぶつかった。

さすりながら逃げる。絶対に変色しているだろう。

謂れない罵倒を浴びせられる。

違うと叫びながらも足を動かす。

そうして村の入り口について、そのまま外へと出て行った。

「アイツが外に出て行きました!!」

「追い詰めろ!絶対に逃すな!!」

「ダメです!」

「何がダメなんだ!?!」

「アイツが村から出た途端吹雪が強くなりました!!」

「畜生やはり妖怪だったか。逃したのが惜しいな……各自今後は防衛を固めるぞ!!」

「はっ!」

⋮

寒いと言う感覚はない、むしろ暑いくらいだ。

それも全部身体中が痛いから……痛みで身体が熱を持ち、しかしすぐに冷えていく。

「血が止まったのか……？」

流血していたはずの場所を見る。

そこには、血が止まっているのではなく、凍っている自分の傷口があった。

おそらくもう、傷口から露出した血管を通して、血液の奥底まで固まり始めている頃だろう。

「痛い……ただもう何処が痛いかわからない……」

徐々に神経が鈍ってきたのかもしれない。

それと同時に視力もだんだん落ちてきた感覚に陥る……元から吹雪で見えはしなかったが。

「死んじまうかな……」

もう既に動かなくなってきた身体を見ながら、目の前のどうしようもない事象に諦める。

既に外の世界に帰ることは不可能だろうと思ひ込んだ。

「これも夢だったら良いのにな……流石にそれはないか」

自分に呆れつつ徐々に脳の判断も鈍ってきて考えるのすら怠くなる。

「もっと器用に生きたかったな」

そう呟いて積もった雪に倒れる。

既に起き上がる力も判断もなくそのまま自身に雪が積もっていく。

そのまま全てが凍り付いて、俺は絶命した。

「……まさかまた夢なんてオチじゃないよな」

この景色を見るのは3度目だ。

自分がまた同じ場所で目を覚ましたと自覚する。

それと同時に理解した。

「死んだら、元の場所に戻っている」

季節も、見る限り時間すらもここに来た時に巻き戻っているんだろう。

確か……こう言うのって……

「死に戻りって言うんだっけか？」

友人が言ってた、まるでゲームの様に死んだら元の場所に戻る。

セーブしてロードする感覚だと……まあゲームの様になってかゲームそのものに見えるが。

「つまりは……1回目喰われたのも本当ってことかよ」

正直思い出したくもない、こびりつく吐き気を抑えながら考える。

「元の場所からやり直し……普通に考えれば都合がいいかもしれないが……」

失敗すればやり直せる……そう考えれば便利なことには違いない。

ただ……流石にそんな馬鹿げたことはないし、何より何度も死ぬるメンタルもない。

「そもそも誰かが覚えてる可能性もある以上変な行動は出来ないか……」

誰かが俺のことを人形のように作り直して遊んでいるとさえ思った。

これじゃ元の世界に戻ることは出来ないのかなど。

「……」

だったら今やるべき事は……自分を殺した人間への復讐……

「……」

それをする気にはなれなかった。

正確に言う……何かをする気にすらなれなかった。

所詮何かしても死んでしまえば全てが消える。

それに妖怪だらけのこの世界、生きていけることすら自信がない。
そう考えると生きる気力すらなかった。

「死のうとする気はないが……生きる気も出ない」

どうせ自殺した所で、この地獄が終わるわけでは無いだろう。

だったら何をしたら一緒に一緒だ。

好き放題する気力すら出ない。

信じていた者達に裏切られたことも、だいぶ心にヒビを入れた。

そうしてただ空をぼうっと見つめる。

これから俺は何をすればいいんだろう？

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

）地霊殿編（

六話 地獄へと向かう ）h e l l i n m a r i o

n e t t e .

何もする気が起きなければ、誰も信じることが出来ない。

そうした不安に苛まれながら……自堕落な日々を過ごした。

正確には過ごしたわけではなく、自堕落に過ごしその度に妖怪に殺されて戻っていった。

だからこそ、死に戻りは確信したが正直どうでも良かった。苦痛でしかないのだから。

「死ぬのが怖いって気持ちよりもどうでもいいって気持ちが強くなった」

痛いのは今でも嫌だが……だからと言って争う気持ちが湧かなかつた。

「確か前回の人生の最後はリグルって子だっけ？」

妖怪は、人喰いは色んな種類がいるんだなと思いつつ思つた瞬間に死ぬことを繰り返す。

むしろ即死させてくれる分人間よりも優しいかもしれない。

「何百回、何千回死ねば終わったりしないかな」

一定回数死ねば終わるって言うなら喜んで死ぬが……そんな気配は一切ない。

だからこそ残るのは苦痛だけ。

時折少しだけ長生きしてみようとするも、頑張ったところで冬に死ぬ。

一度だけ本気で頑張ったが、その時は同様に春になつても雪が降り続けていた。

「俺が悪いわけじゃなかつたじゃん……」

当然そう言ったところで誰も信じてくれないと分かりつつも愚痴る。

「どうせ俺は嫌われ者ですよ……」

『やーい嫌われ者』

「うるさいうるさい、自分だって気にしてるんだ!!」

『でもお兄さん自分で言ったんじゃない』

「それはそうだけどさ……」

そう、自分で言ったわけだから仕方ないけどそこまで言わなくて……

「こうなったらいつそ暴れてやる!!」

『暴れたところで何も無いのに……?』

「確かにそうだな……」

無性に暴れたくなった気がしたが……意味がないことで諦める。
本当に暴れる意味がないのは事実だが。

「しかしどうするか……」

『お腹空いたー』

「ん、きのみしか無いけど」

『わーい』

あれ？俺きのみ食べたっけ？なんか無くなってるんだが……
食糧ただでさえ少ないのにそれを覚えてないのは損な気分だ。

『意外と美味しいねこれ!』

「そうかい? そりゃよかった」

『うん、もつとある?』

「……」

『わーい♪』

今言ったばかりなのにまたきのみが無くなっている。
本格的に裏切られて記憶が朧げになっているのだろう。

「適当に歩くか……」

『何処行くのー?』

「さあな……1人で何も考えずだ」

『それじゃあいい場所あるよー』

「そうなのか？」

『うん、案内するよ』

理由もなく道を歩く。なんだかそつちに行かなきゃいけない気がして……
本当にこつちに何かあるか分からない。
ただ行かなきゃ行けない気がした。

「遠いな……」

『後もうちよつとだよ』

「そうか」

なんでこんな所まで来てしまったのかと思うこともあったが、ここまで来てしまったなら突き進む方がいいと進んでいく。

ただしこちらまで来たことはないので分からないことだらけだ。

『ふんふーん♪』

「楽しそうだね」

『うん、久々の人だしね』

「そうですか」

そうしているうちに気になる場所へと辿り着いた。

「なんだろう、ここは……」

何故かここで足を止める。

目の前には大きな穴が広がっていた。

『目的地だよ』

「そうか、ここだったか」

そうか、そう言えばここが旅の終着点だったな。

そんな記憶は無かったけど……そう言う気がした。

「そして……どうするか……」

ここに着いたって何したかったんだっけ俺……

普通に考えるならこの穴を降りるんだが……

『この先だよ？』

「そうか、この先か……」

目的地はやつぱりこの先だったと思い出す。

ただ……流石に一歩が出ない。

「今更命なんざ惜しくないと思ったが……」

ただ一歩が出ない。先の分からない穴の中に落ちる気がしない。

『えー、どうしたの？』

「どうもしていない」

行かなきや行けないと言った焦燥感しょうそうかんに駆られる……ただ……行く度胸はない。

『しょうがないなあ』

ドンつと

唐突に何かに押された？

いや自分で落ちた？

分からない……ただ1つだけ言えることは……足が地面から離れているし、今自分は穴へと向かって吸い込まれていく様だった。

「うわああああああ!!」

なんで？何がどうして？分からない……足場が悪かった……？

人間な以上空を飛ぶことができずにただ落ちていく。

その後どうなったのか……

…

「……もうすぐ冬になりますね」

1人の少女が道を歩いている。

一見ただの少女の様に見えるが胸元に目玉のアクセサリーの様なものがついている。

「こいしは何処に行ったのでしょうかね。地霊殿内なら安全ですが……」

こいしと呼ばれる少女を心配しながら歩き続ける。

冬は流石に勝手に出かけないで欲しいが、そうは行かないために困っている。

「寒かったと分かってくればいいのですが……気付かないだろうから尚更心配です」

こいしと呼ばれる少女は、冬を本当に乗り切れるかと……

気付けば動けなくなってるのではないかと心配になっている。

ただし……見つけることが困難なため頭を抱えている。

「こちらの穴から落ちてたりしないかしら」

結局落ちていたところで見つけられる自信はないのだが。
それでもわずかな希望を持って探し続ける。

「…………おや？」

探していたこいしではない、だが人が倒れている。こんな所に人が落ちてくるとは到底思えない。

ただ…………落ちてきていることは現実である。

「酷い怪我…………」

正直空を飛べる様にも思えないし生きているのも異常なレベルだ。

地上から地獄に落ちて虫の息とは言え生きているのが運がいいで済む話ではない。

「治療はしますが…………期待はしないでおきましょう」

これが古明地さとりとの出会いだった。

t o b e c o n t i n u e d

七話 少女さとり ~3rd eye.

痛みによって目を覚ます……自分の身に何が起きたのか思い出せぬまま。

「いたたたた……」

自分は……そうだ思い出した穴に落ちたんだ……そうしなきゃいけない気がしたから……なんでだ？

「と言うか……」

ベッドで寝かされている……？

誰かに拾われたのか。

「勝手に動き回るのは不味いよな……」

ひとまず周りを確認するが……かなり殺風景だ。

と言うか部屋で家主がどんな人かを判断するのも不味いか……？

「別に判断するくらいなら構いませんよ」

「っ!？」

扉の前に少女がいた……入ってきたのを気付かなかったが、いつのまにだ？

「目が覚めましたか？」

「はい……」

もしかしてこの少女が助けてくれたのだろうか？

それなら命の恩人だが。

「気にしませんよ、そのくらい」

「え……？」

まるで見透かされたような感じがするが……

一体どう言うことなんだ？

「……詳しくは部屋で話します。落ち着いたら来てください」

「分かりました……」

そうして少女が去っていく。

明らかに歳下には見えるし見た感じ可愛らしいように思えるが……何やら違うものも感じた。

「着替えは……少なくとも部屋にないし、行くしかないかな」

お礼も言いたいし行くのでしょうか……ただ何処行けばいいんだこれ？

『こつちだよー』

「こつちかな？」

建物の中を歩いてゆく、ここ穴の下だよな？

こんな立派な建物があるのか。

そのまま歩いて行って開けた場所に出る。

「……早いですね」

「なんでですかね……なんとなくこつちだと思ったので」

「その割には確信していたような……。まあいいです」

「あの……助けてもらったんですよね」

「まあ……正直助かると思っていますけどはいたが」

「ありがとうございます」

「……」

少女は何も答えずにこちらの方を見てきた。

「しかしそんな酷かったんですか俺……」

「地霊殿まで直接落ちて来て全身が潰れる方があるはずなのに……むしろ生きてる方がおかしいです」

「運が良かったんだな俺……」

自分の傷を見ると本気で治療されたのが分かる。
生きていられたのはこの懸命な治療のおかげでもあるんだろうな。

「最低限出来る程度をしたままでです」

「つ……ああ、そう言えば俺の名前は……」

「小野寺蓮司さんですよ、存じております」

「……」

汗が流れる、そしてわざわざ示して来たんだろうなって思う。
もしかして覗かれてるのか？と。

「はい、貴方の心を覗いていますよ」

「凄いですね……」

「凄いつて感想が来るのも意外ですが……」

ああそうだ、そう考えるとこの子も通常の人間とは違う。
あのルーミアのように……

「ええ、私も妖怪です」

「……意外ですね」

「何も妖怪が人を食べるってわけではないですよ」

「なるほど……」

元の世界では考えられないようだ……
いや元々は妖怪なんていなかったけど。

「サトリって知ってますか？」

「……漫画とかでなら」

「そう言えば外の人間でしたね」

「はい、そうですね」

「外に出て行った方がいいですよ」

「なんっ……」

「治療はしましたがそれ以上の面倒は見る気はありません」

「確かにそうか……無理言うのもどうかだし」

「出て行けとは言いませんが、この地霊殿では暮らし辛いと思います」

「出て行けって言われなければなら少しだけはいいですかね……この傷で出るのも厳しそうだし」

「……すぐに出たくなりますよ」

「……」

何を企んでいるか分からない、悪い子だとは思わないんだが。

「この地霊殿は嫌われ者が集まっています」

「嫌われているようには思えませんが……」

心を読まれることは不都合とかはあるかもしれない。

……ただ……嫌われる程では無いのではないだろうか？

「……へえ」

あれ？もしかして怒ってます？怒らせることしました？

「怒っていませんよ別に。ただ、嫌われ者の意味を……トラウマを見せてあげようってだけです」

「トラウマ……」

嫌な予感がする……首筋に汗が垂れる……

本能がまずいと知らせているように。

「貴方の心底を見させてもらいます」

そう言うと少女の胸元の目が光った。

身体が透き通るような感覚があった。

「貴方はこの世界で……なるほど」

色々と覗かれているのだろう……ただし逆らったところでどうしようもないしそのまま流される。

「死に戻り……貴方もただの人間では無いのですね。もしかして化け物」

「つんな言い方すんじゃねえ!!」

俺は人間だ……化物なんかじゃない……

アイツらが言ってたことは違うはずだ……

そこを掘り返さないでくれ……

「人間の里で裏切られ、嫌われて……今まで生きるのすらどうでもいいと言っていた人とは到底思えませんね」

「……」

「そう言われるとそうだ……今までどうでもいいって思ってたのに自分でも激情すると思わなかった。」

「この程度で激情するなら地底は貴方がいる場所ではありません、お帰りください」

「ひとつ聞かせてくれ」

「俺は本当に妖怪なのか？」

「……持っている能力、人間から見れば貴方も十分に化け物でしょう」

「……アンタからすれば？」

「わたしからですか？」

「人里で化け物扱いされたんだ……この能力話そうともどうせ化け物扱いされるだろ」

う。

なら妖怪であるこの少女にとってはどうなんだ。

「……なるほど、そう言うことですか」

「ああ、突然キレたり落ち着いたり騒がしくてすまないがな」

「口調がだいぶ荒れていますね、助けた恩をお忘れですか？」

「はぐらかすのはいい、答えてくれ」

「……ただの人間ですよ、所詮大した力もないちっぽけな人間です」

「そうですか……」

「なので妖怪と悪霊の集うここに貴方の居場所はありませんよ」

「ただ……無理やりは追い出さないんでしょう？」

「……わたしに怒りを覚えていたのでは？」

「ああ、確かに化け物なんざ言われて頭に来たよ。そんなわけねえだろうって」

「では、どうして？」

「でも少なくとも貴女は俺を人間扱いしてくれますし、こんな能力を持っていてもここに
でなら人間でいられる」

「人間が住むには適した地では無いんですけどね」

「構わない、どうせ人里でだって外の世界とは多く離れていたんだ」

「後悔しますよ？」

「少なくとも今死んで元に戻るくらいなら、少しでもここで情報集めた方がいいですね。今はまだロクに動けないのもありますし」

「好きにしてください」

そうやって彼女は席を立つ。

その表情は複雑そうな顔をしている。

「家主さん」

「……古明地さとりです」

名前を聞こうと思ったがそれを察してか先んじて答えてくれる。

古明地さとり、この館の主人で良さそうだが……本当に名前までもがさとりなんだなって。

「では失礼します、あの部屋は使っているので好きにしてください」

「それじゃあさとりさん」

俺の命を救われて助けられた。

この人がいなければ間違いなく今回もまた死んでいただろう。

ただ……トラウマを思い出させられたのは少し許せない。

だから……

「嫌われ者同士仲良くしましょう」

少しだけ悪態をついたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

八話 太陽の届かない地 ~deep world.

地霊殿で過ごすことになってから数日が経った。

一番に思ったことは、この地霊殿では霊の類が多いと思ったが妖精という類のものもいれば、動物も結構な量がいた。

その中でも猫が多いかもしれない。

「懐いてくれる子もいれば、威嚇してくる子も居るんですけどね……」

ただ妖精は俺を見つけ次第悪戯してくるので正直やめて欲しい……傷がまだ……
つと……もう1つの意外に思ったことが目の前に……

「皆さん、ちゃんと分けるんですよ。1人で食べちゃダメですからね」

「ニャーニャー」

「こらっ一人で食べちゃダメだつて……」

地霊殿の主人古明地さとりの姿がある。

俺は嫌われているようでまだ冷たい態度を取られているが……動物たちには優しいようで始めは驚いた。

「……何か、御用ですか？」

「さとりさん、おはようございます」

「おはようございます」

挨拶だけして動物達の方に視線を戻す。

数日が経って餌やり時とかに俺が居てももう気にしないらしい。

助けてもらったのも事実だし俺も鬱陶しいようには思われてないわけだが……流石に寂しい……

猫みたいな真似をするべきなのか……？

「気色の悪いことをしないでください」

「ごめんなさい」

確かに自分の猫姿を想像してみると気色が悪かった。やつちやダメなやつだこれは。

「想像しないでください」

「ごめんなさい」

そして想像して怒られる。

そりゃ覗かれてる以上はそうだな……

「まだ何か？」

「いえ……特にそう言うわけでは」

気になつてることがあるんだが……言つていいものかと。

「何がですか？」

「大したことでは無いんですけどね」

「だからと言つて何か抱えていて黙られても困るんですが」

「では、他の人達は？」

「……」

地霊殿に来てからと言うものさとりさんとしか会つてない気がする。

流石にこの建物は広いし誰もいないってことは無いと思うが……どうしたんだろうと。

「この子達がいるじゃ無いですか」

「それはそうですね」

「そもそも人間がいる事自体が異常なのです。なので何もおかしく無いと思いますが」

「そう言われるとそうです……家族とかはと」

「妖怪を人間の定理に当て嵌められても困ります」

「……」

「そうだよな……妖怪って人間と違うだろうに家族が居るって決まったわけじゃ無い
か。」

「貴方は大丈夫なんですか？」

「何がですか？」

「家族についてですよ」

「ああ……もうどうせ会えないって思っていましたから」

「それでいいんですか？」

「寂しいのは寂しいですよ、大切な家族でしたから」

「やはり……そうなんですネ」

「友達とかとは違う、特別な繋がりですからね」

外の世界では友達はいたけど、それでも家族は特別だった。

こっちの世界では友達と呼べるかは不安だったし……リセットされてしまった。

「会えるとしたらまた会いたいですか？」

「流石にね……死にたいとは思いましたがそれでも会えるなら」と

「意外と家族思いなんですね」

「そんな驚くんですか？」

「正直貴方は身投げしたようにしか思えなかったのです」

「あー……」

確かにそうだな、俺はなんで飛び降りたのかって感じだったし……

「……病気とかでなければ良いんですけどね。ここでは治せないのよ」

「気を付けます……」

と、話をしたところで。

はぐらかされたのかどうかは分からないが。

「結局さとりさんの家族って？」

妖怪だからって言って否定されたわけじゃ無いしな……やっぱり一人で住むには広いと思うし。

「この子供がいますよ」

「いや……それはそうですけど」

「冗談ですよ、いえこの子供も家族ですけど」

冗談って言ったところで足元の猫が威嚇したようで頭を撫でている。
少なくともペット達を本当に大事にしてるんだなって。

「妹が1人います」

「妹さんですか……ここにいないんですね」

「今は行方不明なので」

「え……?」

それは大変じゃ無いか。もうすぐ冬になるし地底もだいぶ危険そうな所が多そうだし放つて置けない……

「難しいんですよ」

「どうしてですか？」

「あの子はちよつと特殊でして、見つけられないんです」

「特殊つて、聞いても良いんですか？」

「無意識というか……認識できないんです。そこにいたとしても」

「認識出来ないつてそんな事あるんですか？」

「人間も妖怪も同じ、意識せずに行動することがあります。その結果疑問に思うことはあつてもだから何やったかなどは思い出しづらいですね」

「まあ……そう言うこともありますね……」

「この幻想郷に着いてからは……」

「もしかしたらあるかもしれません」

「何処ですか!？」

いつもと違つて真剣な目でこちらを掴んで語りかける。

確かに行方不明の妹なら気になるのは事実か。

「いや俺つてここに着いたじゃないですか」

「……そうですね、自殺願望ではないと言っていましたか」

「ここに来なきやいけないって思ったんですよ……もしかしてその子に無意識のうちに誘われてたつてもあるんじゃないかと」

「……」

「あのさとりさん?」

「あの子がここに招いたと」

「おーい」

物事に耽ってしまったようでこちらの話が聞こえてない気がする。

「全く、貴女が招いたのにそのまま放置だなんて悪い子ですね」

呆れたような声で言うがその顔は笑っているように見える。

え？笑ってる？

「……やっぱり妹は大切なんですネ」

「それはそうですよ。たとえ見えなくても……」

「どうしました？」

「笑ったことは忘れてください」

「え？」

「いいですね？」

そう言うときとoriさんは行ってしまった。

餌やりが終わってなかったようで猫達がなーなー言いながら言った方向を見ていた。

「餌あげておくか……」

改めて妖怪は妖怪でもその違いを感じさせられるばかりだった。

決していい妖怪ではないけど……人とほとんど変わらないなと思いつながら。

……まあ実際にはそんなことないしそう思ってたら確実に痛い目見るの分かっているから思わないが。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

九話 あなたはだあれ? ~who done it.

事件が起きたのは数日後だった。

身体も歩くだけではなく少しはマシンになってきて、掃除などを手伝っている。と言うか妖精達が多少掃除はしているようだが、流石に力不足だし。

流石に重過ぎるものは身体が痛むが、軽いものは悠々と持ち上げている。

「にゃー」

「流石にお前はこれ持てないだろう……」

黒猫が鳴くが流石に何か持てるようには見えない……

応援だけ有難く受け取るとしよう。

「……大体これでこつちも完了か」

ふと一息つこうとしたところで。

パリンツと背後から音がした。

「え!?!」

慌てて振り向くと壺が割れていた。

「え………なんで!?!」

『あつ………』

「俺がやったんじゃないよな………?けどどうするかこれ………この子が怪我しないように
早いところ掃除した方がいいかな」

『ごめんねー、お兄さん』

「何事ですか?」

「さっ……さとりさん!」

音がしたからかさとりさんが部屋へと入ってくる。

それと同時に事態を理解する。

「……手間を増やすくらいなら、始めからやらないで欲しいのですが」

「一応言っておきますが……俺じゃないです……掃除してたからでは無いと信じたいですが……」

何故弁明しているのかは分からないが……

これ以上マイナスなイメージを持たれたく無いのかもしれない。

ただ実際にやってないしと……

「嘘はついていなさそうですが……」

「ただちゃんと見てれば良かったのはあるかもしれないのでそこはすみません」

「お憐、どうでしたか？」

「ん？あたいかい？」

「え？」

声がして慌てて振り向く、さっきの黒猫しかない……あれ？

「今何処から声が……」

「兄さん目の前にいるだろうと」

「喋った!？」

黒猫が喋ってる!?それにびっくりして飛び跳ねる。

「あっはは、いい反応だねえ」

喜んだように猫がご機嫌なままクルリと一回転する、そうすると人型になった。

「人型にもなれるんですね……」

「おや、むしろこっちの方が驚かれると思ったのに」

「彼は十分驚かれていますよ」

「そりゃよかった」

もしかして地霊殿のペット達ってみんなこんな感じ?

「お隣が特別なだけですよ」

「そりや良かった……みんなこうでしたら腰が抜けそうで……」

「兄さんも大変だねい」

「……まあ、問題ありません」

「あたいは火焰猫隣さ、よろしくな兄さん。」

「よろしくお願ひします……えつと化け猫かな……？」

「残念あたいは火車なのさ」

「……え？猫にしか見えないんですが」

「と言うか火車って何……？」

「妖怪の一端で構いません。それよりも……」

「ああそうだったね、ごめんごめん。この兄さんは何もしてないよ」

「やはり、そうですか……分かりました」

「どうしたんですか？」

「もしかしたらあの子がいるんじゃないかって」

「あの子って妹さんですか？」

「そう、自然現象だとは思っただけどね」

『いるよー』

そう言えば聞いてなかったな……

「さとりさん、そう言えば妹の見た目ってどのような感じなんですか？」

「妹が何ですか……」

警戒されてる……え？今のって警戒される場面だっけ？

「いや……だって知らなければ見つけたりしてもダメじゃ無いですか……」

「それもそうですか……」

「いや……流石に恩人にどうこうって気はないですよ？」

「恩人と言う割にはまだ多少恐怖心があるようですが」

「え？マジですか？」

怖いと思ってるのか。自分でも意識はしてないが……深層ではまだそう思ってるのかな? それなら申し訳ないが。

「……髪の色は私と違って明るい色、緑がっています」

「姉妹で……いや妖怪だし関係ないか」

「貴方達人間のようにそこまでそっくりではありませんよ」

「少なくともこの地霊殿では見たことないですね……緑髪の妖怪に襲われたことはありますが……」

ただあの子は虫だったし違うだろう絶対に。

「帽子を被っていて……私と同じく目を持っています」

「目つてことは同じく心を読むんですか？」

「いいえ、逆です。閉じてしまっているから……読むのではなく読ませない……気付かせないんです」

「……？」

ちよつと難しいことを言っている？

心を読ませないのはさとりと言う種族がいなければそうだと思うが。

「そこに居ても気付かないのです」

「……」

「貴方がここに呼ばれたって言いましたよね」

「そうですね、じゃないとここに来れないと思いましたがから」

「その時彼女にあつた記憶は？」

「勿論ないです」

「そう、だからいても気付かないの」

「……気付く方法はあるんですか？」

「そこにいると確信する……根気強く探るとかでしょうか……？」

「難しいですね……」

常に気を張れるわけでもないし……確信なんてできない……見えないのだから。
それではいつまでも見つけられないってことだけども……

「見つけられたら、でいいのでお願いしますね」

「分かりましたが……」

「最初から期待なんてしてませんので」

「手厳しい……」

「それじゃお兄さんあたいも行くね！」

「あっはい……」

そりゃ誰も割れたツボの掃除手伝ってくれないよな……と思いつつ掃除を続けた。

—————

壺の掃除は終わったものの、今日という日は最悪だった。

あちこちで問題が起きる。

「これ全部なのか或いは他に要因があるのか……。」

やれカーペットが汚れただとか、戸棚に置いてあったケーキが無くなっただとか、挙げ句の果てには落とし穴に落ちたりした。

「こういうのはWho^誰が^がやった^たんだ^だ?」

正体はわかっている……古明地こいしと呼ばれた子が地霊殿にいるのだと:

流石に1000全部をやったとは思っていないが……少なくとも全くやってないわけでもないだろう。

「見つけれれば……楽になるのだろうけど、正直自信はないな」

現場だってそこにいるなんて確信出来ないし、やっぱり無理なのではと思うばかりだ。

さとりさんとしても早く見つけたいだろうが、そっちで無理なら俺の方が無理じゃない

いか？とは思いながらも。

「探したところで見当たらないよな……寝ますか」

枕の位置が微妙にズレていると思いながらもそのまま就寝する。

少し寝心地悪いと思いながらもまさか部屋にいるのでは？などと余計な思考のせいで眠りが浅い気がするが。

「……」

次の日は明らかに寝不足だった。

眠い目を擦りながら部屋の全体を見る。

またなんか悪戯されてないかなどと確認しながら。

「……んう？」

少し霞んだ目で机の方をじーつと見る。

誰かがいる……

「えつとどちら様……?」

「うーん……ふわあ……お兄さん?」

そう言った少女はさとりさんとは違った人物に感じた。

ただそれと同時に似ているような感じがした。

ひとまず言うべきことは……

「えつと……貴方は誰ですか?」

to be continued

十話 自由気ままな妖怪少女の disappearance

i r l .

|-----|

古明地こいし……古明地さとの妹であり地霊殿に住む住人の一人。

無意識で行動するようで、ふらふらと気の向くままに歩いてゆく。

それが周囲へと伝播し、無意識の中に偏在する彼女のことは認識出来ない。

それが普通である。

「どうしたのーお兄さん」

「ちよつと状況を整理させてくれ」

しかし見えている……

一体どういうことなのか……いや確かにいるかなあとは思っただけど……そこにいる

なんて確信したっけ？

「無視しないでー」

「ああ、ごめん後ちよつと……」

どつちみち俺だけが見えるのか、他の皆も見えているのかと確認する必要があるよな？

皆に見えているなら楽だが……俺だけだと面倒だ。

皆に認識して貰う必要が出てくるわけだし。

「♪」

「ちよーつと待ったー！！」

「うえ!!お兄さん急にビックリするなあ」

1人で考えすぎていたせいで飽きてしまったのか。部屋を出て行こうとしたのを必死に止める。

見当たらなくなったらまずいって……

「こいしさん勝手に行かないで……」

「えーなんで？」

「お姉さんが探してるから……まずは行こう？」

「お姉ちゃんが？分かった！」

そう言ってこいしさんは俺の手を握って、そのまま手を繋いでくる。

……いやなんで？

「あのこいしさん……？」

「なあに？」

「これはどういうことです……？」

「え？ 離れていいの？」

こつちが離れて欲しくないって思われてるんだろうか？

確かに見失うと困るけど……いや困るから繋いでた方がいいな。

「悪いんだけど……私でも何処行っちゃうか分からないからさ」

「……」

わざとじゃないのは分かるが、マジかよって言いたくなる。と言うかそうだな……そうじゃなきゃやさとりさんも苦労しないよな。

「分かりました、行きましょう」

「わーい」

そのまま引つ張るように連れて行く。

油断して何度か手を離されそうになったのを気を付けながら。

……外の世界だと下手すりゃ補導されてたんじやないのかなこれ？

警察等は存在しないし安全なわけなのだが……そんな恐怖に若干怯えながら。

—————

「さとりさん、少しよろしいでしょうか？」

「……何の用ですか？」

「あれ……？」

すぐに察されると思ったがそんなことはなかった。

疲れているのかな？

「……いきなり部屋に入って来られて即心を覗くなんて出来ませんよ」

「それもそうでしたか……すみません」

「それで……何の用ですか？」

「えっと探し人見つけました」

「……はい？……っ」

一瞬キョトンとしたような顔をしたが、すぐにこちらを凝視してくる。

「こいし、何処ですか!？」

「えつと今はぐれないように手を繋いでいます」

「やつほーお姉ちゃん」

「いし……!?!」

手を繋いでいた事もあつてすぐに認識したようだ……すれ違いしていたのを解消で
きたようで良かった……

「でも、またすぐ見えなくなっちゃうんだろうけどねー」

「こいしが冬の間地上に出なければ構いません」

「えー、なんでー」

こいしさんはプリプリ文句を言っているようだ。

確かに冬の間は窮屈になりそうだが。

「貴女が雪とかで埋もれても見当たらないのですよ……」

「うーん……分かったー」

本当に分かったんだろうか……？ちよつと自分としては信用出来ないような……

「その通りです……と言うよりも彼女自身が無意識なので自分でも分かっていますの
で」

「うわぁ……」

「えへへー」

「いや喜ぶところじゃないと思いますが……」

「こいし……申し訳無いですけど冬の間はこれを付けておいてください」

「なにこれ？」

「鈴です、無意識といえど流石に鈴の音は分かるので」

「今までは付けることなんて無かったのにー」

「彼が居ますからね」

そう言ってさとりさんは俺の方を見てくる。

「彼が探す時に見当たらないと不便でしょう？」

もつともらしい理由を付けている気がするが……それでも単純にさとりさんが心配だからな気が……

「……」

すっごい睨まれた……いや妹を心配することは悪いことじゃ無いと思うんですけどね……

「どうしたのお姉ちゃん？」

「なんでもありませんよこいし」

「なんか怖い顔してた気がするけど気のせいかな」

そう言いつつ鈴を帽子につける。

チリンチリンと音が鳴って一瞬消えかかりそうだった輪郭がくつきりと映る。

「これなら、こいしの姿を見失いませんね」

「もー、お姉ちゃん大袈裟だなあ」

「そう思うなら少しは行方不明にならないように注意してください」

「ちよつと難しいかなあ」

「だから困っているのです」

「はい、変なことはしないようにします」

空返事というか……適当と言うか……いまいち信じがたいような……
それでも信じるしか無いのだろうけど。

「ところでいいし」

「なあにお姉ちゃん？」

「戸棚にあったケーキを知らないかしら？」

「……」

「いし……？」

「シーラナイヨー」

典型的なしらばつくれるを見た気がする。
確かに戸棚にあったケーキを食べるのは彼女くらいだろうけど……

「チョコレートケーキが無かったですよ」

「あつじやあ本当に知らないよ！」

「……つまりチョコケーキじゃないケーキを食べたと」

「……」

チリンチリンと音がする、明らかにこいしさんが逃げた音だ。

「待ちなさいこいし」

「やーだよー」

そのまま逃げるも音で気付かれ捕まる。

そのまま怒るかと思いきや抱きしめ合いながら笑っているようだ。
本当に姉妹なんだなど。

「いこう言うところを見ると……」

正確にはこう言ったところは人間そっくりなんだなど。

人間と差異がないんだなど思った。

身体能力とかは優れているけど家族を思う気持ちや、心は同じなのかもしれないと思わされるばかりだった。

余談だが、抱きしめた後食べたことはさとりさんに怒られていた。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

十一話 溶岩をも溶かす地獄跡へ heated lava

a.

地底で暮らすことになってから暫くの時が経った。

地底には時間感覚というものはないから、正確な時間は分からないが数ヶ月以上経っていると思う。

ただ、それでもまだまだ疑問に思うことばかりだった。

怪我で地霊殿から出ないということもあるのだが、俺が理解出来ていないと思うことばかりだ。

多分冬は過ぎたのだが冬だった時も全然寒くないことをはじめ……まだまだ俺は何も知らない。

「……だからと言って俺一人が出るわけにもいかないしな」

地上以上に危険な場所だと思ってるしな……
さとりさんに何度も注意されたし。

「おや、どうしたのお兄さん」

「ああ、お隣さんこんにちわ」

「うんうん、それで悩みながら歩いてきたようだけど」

「いや、地霊殿の外行ったことないなって」

「あー、そうなのかい？」

「はい、外で倒れていたみたいですが……自分は気絶していたみたいなので」

「なるほどねえ」

流石に地霊殿以外が何も無いとは思えない……だから何かありそうではあるが……
正直分からない。

「外に何かあるのか気になるのかい？」

「まあ……気になりますね」

「ふふん、それじゃあたいが教えてあげようじゃないか」

「仕事があるのでは……？」

「大丈夫大丈夫、気にすることないって」

「確かお隣さん仕事頼まれていたような……」

「まあいいならいいけど。」

「ごめんねえ、お兄さん用の仕事見つからなくて」

「いつまでも雑用じゃ申し訳が立たないんですけどね……」

「それはあたいらも分かってるんだけどねえ……」

怪我が治ってさて何か出来ることはないかと探してみるものの、さとりさんに無いと言われてしまった。

外は危険だし中で貴方に任せる仕事はないと。

人間の里以上に長い間ここにいるはずなんだが……雑用程度じゃまるで自分がヒモのように思えて嫌になる。

「掃除等の雑用はさせて貰ってますがこれでいいのやら……」

「それでもお兄さんがいるから重い物とか持てるだろうか？」

「さとりさん達の方が力ありそうですが……」

「そうだとしても女子にそう言うことやらせないのがモテる秘訣なのさ」

確かにそう言われるとそうかな……

さとりさんに重いもの持たせると罪悪感あるし。

「まあ、案内することにはなると思うけどね」

「そうなんですか？」

正直地霊殿ですつと家事等で籠らされるとばかり思っていたが……

「そのうち地上で買ひ物が必要になるしねえ、アンタに任せないと面倒だからね」

「確かにそうですが……何か必要なものが……？」

「主にお兄さんの食糧だよ」

「……すみません」

聞いた話によると、旧都で買っていたらしいが、ここの所滞ることが増えているらしい。

そもそも自分の食糧くらいは自分で買いに行かなきゃダメだった気がする。

「ざとり様達にも嗜好品が欲しかったし、ちょうど良かったつちや良かったんだけどねえ」

「必要そうに思ってたんですけど……」

「気張ったところで嫌われ者の地底の住人さ、ストレスや嫌味が貯まるしそう言ったものは必要なのさ」

なるほど、確かに言う通りだ……

買い物できるようにしないとまずいなそう言われると。

「そしてそのうち向かう外だけど……旧都と、核施設があるよ」

「地獄……大変そうだ……核？」

なんか聞いちやいけないことを聞いた気がする。

え？核ってあの核？

「旧都を抜けて旧地獄街道への道は地上へと繋がるしそのうち行くだろうから……今は核施設かな」

「なんであるんです……？」

「これが無いと地底は不都合だからなあ」

いやそうじゃなくて……そもそもなんでそんなものがあるのって……

「今の時間はお空もいるだろうし、行ってみようか」

「ええ……不安なんです……」

お隣さんについて行って行って核施設へと向かうが……本当にお隣さんはお仕事大丈夫なのか？

そんな心配ばかりを思っていることだらけだった。

—————

「……なんだこりゃ」

流石に雑に使っているとは思っていなかったが。

それでもここまでガッツリだと思わなかった。

「確かここって外の世界から失われた物が流れ着くのでは？」

「その中でも地底では絞られるけどね」

「核つて……失われた記録も無ければここの技術も段違いな気がするんですが……」

「あー、そこいらは河童が頑張ってるからねえ」

「河童……もいるんですね」

「そりゃねえ、河童達と後はお空もいるしねえ」

「お空つて人は分からないですが……、管理できるなら凄い人なんですかね」

手で身体を仰ぎながら返答する。

核施設のため仕方ないのか非常に暑い。

「お兄さん、大丈夫かい？」

「核燃やしてるせいか凄い暑いんですね……」

「ああ、地霊殿も灼熱地獄跡にあるとはいえ……ここの近くは現時点で燃えてるしねえ」

「どうりで冬でも暑いものだ……え？灼熱地獄!？」

「ああさとり様から聞いてなかったんだね。それとおかしいかい？」

「少なくとも地獄が辿り着ける位置にあるのが違和感しか……」

「今は移動したけど、その名残は今でも残ってるんだよ」

「跡なのに今でも活動してるんですね」

「あたいの他にもここが大好きな子がいるからね」

「よかったですね」

「うん？暑い暑い言う癖に、そんなこと言い出すなんて面白いねえ」

「そりやそうですよ、自分のお気に入りの場所が寂れるなんて悲しいですから」

自分もそう言った経験がある。

近所の空き地が使えなくなったなどと。

小さい頃に遊んでいた場所は、もう遊べないと知ると寂しさともどかしさを感じるばかりだった。

「しかしそう考えるとお空さんって人は凄いですか？」

「ああ、あたいと同じで特別な力を持ったペットだしね」

「え？また死体を動かすんですか？」

前に見せてもらったがお燐さんの能力は尋常じゃない。

死霊がたくさん湧いてきて驚かされた。

「いやお空は違うよ」

「それはよかったですけど……」

「自慢の足で核融合を操ってるんだよねえ」

「……は？」

「どう言うこと……核って操れるものなの？」

「それも機械じゃなくて人……ではないな一妖怪か。」

「地獄鴉様でしたらもうすぐこちらに来られると思いますか」

「おーちようど良かった」

「そう言えば地霊殿で長くいて会ったこと無かったですしね」

「お兄さんを単独でここまで連れて行ったらさとり様に怒られちゃうしねえ」

「ここに来るまでにも結構妖怪に見られてましたしね……」

「あれはお兄さんを食べたがってたんだと思うよ」

「やめてくださいって……」

「ほら後ろにも……」

「!？」

慌てて振り向いたが誰もいない。

「ひっかつかつたひっかつた」

「命の危険なんで脅かさないでください」

そう言つてデコピンをする。

正直これはこれで命の危険な気がするが……流石にさつきの悪戯が度が過ぎてたし仕方ないだろう。

「ごめんなさーい」

全く……地霊殿で早々に死ぬことは無いと思つているが……

それでも命の危険は間違い無くあるので……やめて欲しい。

「唐突に後頭部に銃を押しつけられるような恐怖みたいに感じるんだから……」

そう文句言つてると、後頭部に何かを押し付けられている感触がした。

「そうそう、こうみたいに感じるのはやめて……」

あれ？おかしいな……銃みたいなの何かを後頭部に感じるぞお？
え？俺今どんな感じなの？

「お憐に何してるの？」

とりあえず分かった。俺、今さつき言ったようなテンプレ的な命の危機に晒されて
いることを。

……どうすりゃいいの？助けてください。

t o b e c o n t i n u e d

十二話 地底の太陽～sun pillar.

「ごめんね、そう言うことだったんだ」

「いや……分かってくれればいいです」

銃らしき右腕も下ろされて良かった……

と言うかその腕なんなの……怖いんだけど……ただ向けて来なかったり撃つてこなければいいか。

「いや……本当に死ななくて良かったよ……。お兄さんが死んだら大変なことになったろうし」

「うにゅ？ そうなの？」

「当たり前だろう……!!さとり様のお客様みたいなものだよ」

「そうなんだー、ごめんなさい」

「……気を付けてくれればいいです」

お隣さんやさとりさんとかに比べると完全になんとなくで生きてるように感じる。

……多分この子理解はしても納得行かなければ暴れ出すだろうし。

止められない系だろうなと思うとともに。

「しかし……大きいですね」

「うーん……胸が？」

「違います!!」

いきなりそんな話にならないで……

セクハラなんざしたら女性陣の目が厳しいの……。昔、友人が干されてるのを見てやめるって誓ったんだ。

「そうなの？」

「背です背!!」

「あー背かー、確かに、君は小さいよね」

「人間はこんなものですよ……」

「えー? そうなのー?」

明らかに俺の1.5倍くらいはありそうな子が見下ろす。

人間のような姿をしているせいか、より現実味を帯びて畏怖してしまっている。

「大丈夫だよ、流石にお空は取って食べたりにしないから」

「……と言うか地霊殿の皆さんは食べませんよね？」

「地霊殿のみんなはねえ」

「……」

「勿論外に出ると人喰いはいるよ」

分かってているが心境は辛いものである。

誰かと離れないようにしなないとまずいかもな……

「まあ、少なくともここはあたいかお空がいるからさ」

「ありがとうございます……」

「彼を守ればいいの？」

「お空撃つちやダメだからね!!」

「分かった！」

不安だが……信じるしかない。

お燐さんと離れないようにしましょう。

「小野寺蓮司です」

「霊鳥路空だよ、この施設は危ないから気を付けてね」

「……分かりました」

さとりさんのペットだし仲良くしたいけどやっぱり怖く思っっちゃうのは……仕方ないよなあ。

「それで彼を連れてきてどうするのさお燐」

「地霊殿から出たことないから案内しようかなって」

「それでこつちきたんだ、じゃあ灼熱地獄跡行く？」

「俺行くと蒸発すると思うんですが」

「まあそうだろうね。案内だけで辞めておこうか」

「えーなんでー」

「残念ですが俺死にます。普通に死にます」

「私もお燐も、さとり様たちも大事な場所なのに……」

「そうなんですか？」

「うん、少し前までは寂れてたんだ……」

「そうだねえ、あたかもその時は寂しかったよ」

「でも神様から力を貰って強くなったんだ！」

「神様……？」

「ああ、どっかの神様から貰ったらしいよ」

神様ってこの世界だと干渉してくるのか？

俺達の世界だとそんなことはなかったけど。

「その時のお空はここままでじゃなかったんだけど……その力を貰ったって言ってから核融合出来るようになって背も伸びて……」

「よく扱い切れましたね……」

「河童達のおかげだね、いなかったら不味かったと思うよ」

「なるほど」

「今の灼熱地獄は私が燃やした凄い所になってるから一度だけ見て欲しいな」

「言いたい事は分かるんですが、冬なのに寒くないのは助かりますし……ただここでも既に暑いのでちょっと」

「あたいとしても作り上げたものは凄いの分かるけど、ただの人間じゃ無理だから」

「……」

「お空？」

「そっか……しょうがないよね」

空さんは諦めたようだ。

ただ……本当に申し訳ない事をしたとは思う。

「河童さん達も頑張ってください」

「……ウス」

反応は薄いようだが……人間がダメなのか、単純に気が散るからなのか。

「河童達は専門にしか興味ないから仕方ないねえ。ここの子達は炉にしか興味ないよ」

「それはすみませんでした」

「……」

返事がない、気にしなくていいだろう。

「さーて、この後は旧都にでも行こうかねえ」

「旧都……名前だけは聞きましたが」

確か旧地獄街道と呼ばれる場所を通っていく道のはずだ。それなりには遠くないと聞いたが。

「あたかも鬼とかいるしあまり行きたくないんだけどねえ……ただお兄さんは絶対通るし」

「そうなんですか？」

「地上に行くにはお兄さんだとその道を通る必要がある……飛べないからねえ」

「なるほど……確かに俺は飛べないや」

「それじゃあ行こうか、お酒も欲しいしねえ」

「何処に行こうと言うのですか？」

「あつさとりさん」

正直ここに来るのは予想外だったがさとりさんが見に来たようだ。

「ささささ……さとり様!？」

「お隣、貴女には頼んでおいた仕事があるのですが」

「そつそれは……お兄さんに案内した方がいいかなって」

「私に嘘が通じるとお思いで？」

「……」

お燐さんから汗が止まらない。暑いからじゃなくて絶対誤魔化してたんだ。

「どうやら、彼が仕事大丈夫って聞いたにも関わらず案内したようですね」

「……許してー」

「ダメです、説教しますのでほら貴方も帰りますよ」

「ん？俺もですか？」

「ここに一人だけ置いていきましようか？」

「すつすみません行きます!!」

慌ててさとりさん達を追いかける。

道中で人喰い妖怪いたら流石に不味いし簡単に死ぬそうだ。

「待つてええええ」

情けない声を出しながら2人を追いかけて行くのだった。

：

1人残された空は灼熱地獄の方を見ている。
かつて枯れた地獄をもう一度取り戻したと。

「折角頑張ったのに、やっと皆の大切な場所を取り戻したと思ったのに」

だけどあの人間は見てくれなかった。

頑張りを知ろうとはしてくれなかった。

「死ぬって……そんな理由で」

地底に住むからこそ勘違いしていた。

この地底において人間は死体な事が当たり前だと、むしろ生きている彼に違和感しかない。

「どうすれば皆見てくれるかな？」

空は考える、そして浮かぶ。

「地底は人が少ないから……皆に見てもらえるようにすれば褒めてくれるよね！」

地底にはこんな凄い所があるんだって！

地上に負けない凄いものがあるんだって。

そうすれば皆喜んでくれるし、さとり様のこと褒めてくれる！

「よし、それじゃあもつと力を蓄えて頑張らないと！」

その顔は純粹で真面目で、そのはずなのに……その目にはどす黒さを孕んでいた。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

十三話 鬼が住む土地 meet demon.

何日か経って、2度目の地霊殿から外出することになった。

と言うより……本来であればもっと早かった筈のだが……お隣さんがサボっていたため滞っていたらしく遅くなった。

「お隣にはキツク言っておきましたので」

「いや……多分俺にも原因がありますし」

「それがあろうと無かろうと、お隣はサボることが多いので言う必要があるんです」

「……まあ確かにそんな気がします」

真つ当に彼女がやるようには思えないと。

俺も高校優等生ではなかったから分からなくもない。

そう呟いてるとチリンチリンと鈴の音が鳴る。

「でもそのお陰でお姉ちゃんと一緒にお出かけできたし」

「と言うか本当にいいんですか？ 姉妹が2人とも地霊殿にいないと」

「ええ、少しであれば問題ないでしょう。そもそもこいしに留守番を任せられませんし」

「えへへ、多分できないな」

「照れることではないと思いますが……」

今回は地底の案内かつ、買い物をするためにさとりさんが旧都まで案内してくれる。そこからはこいしさんと地上でって話だが……一応は予定だけであって無意識な彼女はどうかまだ分からない。

「一応私もいますが旧都も危険な場所です、気をつける様に」

「はい」

あいも変わらず心配してくれる。

確かに油断すれば一瞬で死ぬような気がするけどさ。

「まだまだ遠いけどねー」

仕方ないとはいえ旧都へは多少距離がある。

まあ街に近いと色々と聞こえたりして不便もあるんだろうけどさ。

「そもそも私とて旧都に行きたいとは思ってないので」

「……」

また心を……はいいとしてなんでって思うことばかりだな。

こちらに干渉とか言っていた気がするが、ここまでしてくれる理由とか……

「……話す必要ありますか？」

「さあ……」

気になりはするけど無理して聞くものでもないだろうと諦めようとする。

「ん？なんの話？」

しかし彼女がそれを許さなかった。

「……」

「どうしてさとりさんがここまで優しくしてくれるかと思ってたんですよ」

「ちよつと貴方!!」

説明するようにこいしさんに伝える。

言っておいた方がいいかなとは思ったので。

「そんなの簡単だよ」

「そうなの?」

「だつてお兄さんのことお姉ちゃんは大事に思つてるし」

「え?」

「こいし……貴女は少し……」

え?確かに大事にされてるのは勘付いていたがそれでもそう思われるほどとは思わなかつた。

もしかしてこれって……

「あつお姉ちゃんが思ってるのって友達とか仲間とかそう言ったタイプだよ」

「……」

「勝手に人のお姉ちゃんですらで自惚れないで欲しいな」

「ごめんなさい」

「少しだけそう言った感情があるのかと思いました……」

「でもお姉ちゃんにとって家族だけしか周りにいなかったし、友達も居なかったから私も嬉しいかな」

「そうなんですか？」

「うん、お姉ちゃんのことちゃんと知る人増えて欲しいしね」

「それは俺もそう思いますが……」

「結構です」

「……」

「地底の人間達は自分のことを理解していることを忘れないでください」

「……勝手に出過ぎた真似を」

人との付き合いは多いほうがいいこともあるが、人数が増えると苦痛な人だっている……強制は良くないな。

「……着きましたよ」

「ありがとうございます」

正直もう少し長引いて欲しかったが、微妙な空気のまま旧都へと辿り着いた。

「結構賑やかなんですね」

「そうだねー、私は偶に来るけどいつでもドンちゃんやつてるかなあ」

「さとりさんは？」

「……」

「やっぱり来ないのかn ……」

「よう兄さんちよつといいかい？」

「え？俺ですか？」

呼ばれた方を見てみるとツノが生えた女性が……燐さんが言っていた通り鬼か？

「ちよつとメンツが足りないからさ、酒に付き合ってくんない？」

「ええっ!？」

鬼って確かに昔噺とかでお酒飲んでるイメージ強いけどこんなになのか
と言うか俺……

「すみません、未成年なんで……」

「ああ？地底に地上のルール持ってくるなつての」

「あんまり連れを誘わないでくれますか？」

「ああ？なんだ今いいところなの……」

さとりさんの方を見て顔色を変える。

「へえ……嘘はついていない様ですが、無理やり何度も誘っている様ですね。確か勇儀が同じ人を流石に毎日の様に連れ回すのはダメと言っていたのでは？」

「……でつでもそいつは今回が」

「連れに何か？」

そう言うのと鬼の姉さんは諦めた様に去っていった。

酒はまだ飲めないだろうし、鬼相手だといくら飲まされるか分からないだろうし助かった。

「分かりましたか？」

「何がですか？」

「来ない理由です」

分かりはしたが……それでももうちょっとどうにかしようがあると思ったが。

「もう一度想起させましょうか？」

「やめてください」

「それでは……私はここまでなので、後はこいしをお願いします」

「うーん、頑張る」

そう言ったこいしさんは焼き鳥を頬張っている。

……いつのまに店に行っただんだ？

大丈夫だよな……うん信じます。

「さとりさんはもう帰るんですか？」

「少し勇儀と話してからにします」

「ああ、さつき言っていた」

「はい、地霊殿では届かない情報もあるので」

「分かりました、ではこいしさんちゃんと見張るので」

「お願いしますね……」

「もー！案内するのは私の方でしょ！」

「ははは……頼りにしてますよ」

「ちゃんと頼りにしてよね！」

そう言つて二人で旧都を後にする。

暫く見なかつた地上を直指しながら。

t o b e c o n t i n u e d

d. 十四話 地上の世界～nostalgic ground

地底をさらに進んでいく。

橋姫に妬まれながら、土蜘蛛に襲われそうになっていたのをこいしさんに助けられたりした。

「やっぱ私いないとダメじゃん」

「いや、居なくならないかって不安なだけで、こいしさんいないと詰むのは分かっているからね？」

「ふふーん、崇めてくれていいんだよー」

「ははー」

崇める様なポーズをする、そして態度を切り替える。

「さて、地上だよ」

「そうですね」

駆け上がって地上を見る、久々の地じよ……

「あゝあゝあゝあゝあゝ」

痛い痛い痛い、焼ける……焼けてしまう。

「ダメだよお兄さん、久々の地上なんだから太陽なんてすぐに見ちゃ」

「気を付けます……」

日陰に案内してもらって休む。

焼けた様な痛みがあつた目も次第に収まってくる。

「もう大丈夫なの？」

「はい大丈夫です」

そして買い物が終わらせ帰還する準備をする。

途中こいしさんが盗もうとしていたのを叱りながら……見えないから俺が不審者に見えるかもだし放置しても良かったんだが。

「それじゃあ帰りましょうか」

「そう……だね」

「どうしました？こいしさん？」

「ねえちよつといい？」

「構いませんが」

「あのさ、このまま地上で暮らす気ない？」

「どう言うことですか？」

「そのままの意味だよ、地底に帰らずに地上で暮らさない？食糧はあるし」

「こいしさん……何が言いたいんです？」

邪魔つてことなのかな？

そうは思われてないだろうけど。

「貴方は何がしたいの？」

「何がって……」

何がしたいかと言うと……正直分からない。

どうでもいいと言う気持ちは無くなったが……だからって明確な目的がない。

「地霊殿にずっといるの？」

「仕事を頼まれる様になればいいですが、それが一番かなって」

「いいよ」

いいのか……？何が言いたいのだろうか？

「それじゃあいつまで？」

「いつまでって……。そんなこと言われてもまだ分からないかな」

「そっか、じゃあそれでいいよ」

「さつきから……」

「じゃあ死ぬまで居るとするね！」

「それは分からないけど……」

「お姉ちゃんを悲しませるの？」

「……は？」

言葉を遮ってきたかと思えばいきなり何を……う？

さとりさんを悲しませる気はないのだが。

「俺はそんな気はないんですが」

「妖怪ってさ、やっぱり人よりも寿命が長いんだ」

「むしろ魔の物とかも含めて、逆に人が短いとまで聞きますね」

「お姉ちゃんは心が読めちゃうから、友達や仲間は増やさない……家族だって地霊殿だけ」

「……確かにさとりさんは積極的に増やしたりはしないでしょね」

「それでも貴方はいいって言われてる、これはいい事なだけどさ」

あついい事なんだ……てつきり姉が云々で文句だと思っただが。

「ただたった100〃しか〃生きられない癖に」

「耳が痛いですね……。ただどうしようもないんだよそれは」

人の寿命は増やす事はできない。

吸血鬼は眷属を増やすとか聞くけど、今は関係ないし。

「しかしそれじゃあ、結局今去っても悲しいんじゃない？」

「わかるでしょ？毒の様に長く居れば居るほど苦しくなる」

「出て行けって事ですか？」

「別に……別れってものはどうしても存在するし」

「……」

「一っただけ約束して」

「………何ですか？」

「ここで地底に戻るなら、お姉ちゃんを見捨てないで。裏切らないで」

「……」

「別れは仕方なくても、裏切りはそうじゃないよね？長く信じていた人に裏切られるほど劇毒になる」

「……」

裏切りはしたくないしする気もない。

ただ今後それを断言できるかってわけか。

「……少なくとも俺はさとりにさんに助けられたしその恩返しを出来た記憶もない」

「別にお姉ちゃんは気にしないと思うよ？」

「俺が気にしますってば……それに……嫌味を言われながらも受け入れてくれましたか
ら」

逆に俺の心を知っているからこそあの人は一番分かってくれる。

帰りたい気持ちもあるが……それ以上にこの世界も外も悪意だらけだ
ただの逃げ腰かもしれないが……もう何度も死んだんだから。

「じゃあどうする?」

「断言しますよ、裏切らないって」

「そっかー、じゃあ改めてお帰りなさいってことで」

「……まあそうですね」

「裏切ったら生きていられないと思ってね」

「今去つてた場合は……?」

「うーん分らない、何も考えてないし」

場合によつちや今刺されてたんじゃ?

そう考えると正解だったのでは?

「それじゃあ帰ろうか」

「はい」

しかし改めて認められたと考えると嬉しいな。

人間だとアウトな見た目だし何かしたりはしないけど……可愛いし。

「お兄さん、自惚れたってそう言ったのではないよ」

「今読んだ……?」

「顔に出てたかなー」

これからも平和が続いてくれないかと願いながら帰っていく。

「良かったお兄さんが残ってくれるって言って」

先に行った蓮司に聞こえないようにボソリと呟く。

「貴方が地底に落ちてきて、何年も怪我で目覚めなかったのに」それでもお姉ちゃんは見込みのない重傷を懸命に治療し続けてくれた。……今はもう既にお姉ちゃんにとって大切な家族になつてゐるだろうしき」

そう言つて後を追う、ただ今戻ろうとする穴から出て行く存在の多さに違和感を覚えながら。

「悪霊……ですか？」

「ああ、管理ちゃんとしてるのか？」

「気を付けているはずですが……」

「ただ気を付けろよ、こんなこと今まで無かったんだからな」

旧都にて鬼とさとりが話し合う。

その内容は旧都でも悪霊を見かける様になったと言うことだ。

「さとりがそんな杜撰なことはしてなさそうだが」

「ええ、帰ってみたら確認してみます」

「そうも行かないだろうけどな」

「何故ですか勇儀？」

「旧都を抜けて地上に出て行った奴らも居るらしいんだ……だから察していると思うぜ？」

「……面倒ですね」

「私は喧嘩出来れば歓迎なんだがね」

…

「おい霊夢聞いたか？」

「何の話よ」

「地底から間欠泉が出たのと一緒に悪霊がドバーツと溢れてきたらしいぜ」

「紫から聞いたわ、ヘルプも受けたけど」

「それじゃあ霊夢もやるのか？」

「どうしようかしらね」

「おつと……それじゃあ私が先に異変解決だな！」

「それはなんか納得出来ないわね……」

「だったら競争か？」

「それもいいかもしれないわね」

「それじゃあアリスを呼んでくるか！流石に地底はサポート欲しいしな」

「私は……紫でいいか」

二人の少女が地底へ向かう準備をする。

これから……始まってしまった異変を解決するために。

「春雪異変からもう『四年』以上か……あの異変以降霊夢に異変解決勝ってないから今日こそは勝たせてもらおうぜ！」

彼女達の言葉に謎の違和感を残しながら。

t o b e c o n t i n u e d

十五話 煉獄異変～burn out world.

地霊殿に戻ってみると慌ただしかった。

さとりさんやお燐さんが慌ただしいのはまだしも、妖精達まで総動員でドタバタして
るのは初めて見た。

「さとりさん……何をしているんですか？」

「ちようど良かった、貴方達お空を見なかったかしら？」

「いや……見てませんけど」

「不味いわね……」

「何があつたか聞いてもいいですか？」

流石に雰囲気から放置出来るケースでは無いと悟る。
ならば聞かなきゃならないだろう。

「お憐から聞きました、お空がやろうとしていることを……」

「一体何を……？」

「貴方は灼熱地獄を見ましたか？」

「いえ……見てないです」

「でしょうね、アレは人間が耐えられるものではありません」

地霊殿内は色々環境が整っていて暑いと言うことはないが……核施設の内部でも暑過ぎた。

「時間も持たないだろう。」

「それが……どうしたんですか？」

「お空は地上にも灼熱地獄を作ろうとしています」

「……ええ？」

それは……止めなければならぬ事だろう。

地底には影響なくとも地上が滅びるぞ？

「まるで浄化の火のように地上が全て焼き払われるでしょう……」

「さしずめ煉獄れんじくですか……」

「本来であればこう言った異変を解決するための巫女がいます」

「……初耳ですね」

「博麗の巫女、まもなく地底に来るでしょう」

「なら助かつ……」

いや、そんなわけはないだろう。

巫女が来るって、そしたら地底の住人達はどうなるんだ？

「そこは……まあ大丈夫です」

大丈夫とは言うが、その彼女に若干陰りが見えていた。

「だから探せってわけですか？」

「いいえ、違います」

「え？」

「こいしを連れて急いで地上に逃げてください」

「……え？」

「お姉ちゃん、何言ってるのさ」

「お憐が出したSOSが間に合えば問題ありませんが……間に合わなかった場合地底が焦土へ変わる可能性があります」

「……」

「そうなった場合は、貴方は耐えられないでしょう。妖怪である私達でさえだいたい厳しいでしょうから」

「さとりさんは？」

「私は地霊殿の主人で、お空は私のペットです」

「だから残ると？それなら……」

「貴方も家族の一人なのですから」

「それなら俺だって……」

「あの子に家族殺しをさせないで下さい」

「っ……」

「こんなことって……こんなことって……」

「お兄さん」

「お隣さん……何が言ってくださいいよ」

「残念だけど妖怪に対して人間はちっぽけなんだ。だからお兄さんが何をしようとしても無駄なんだよ」

……分かってる、空さんと戦えやしないし。

妖怪に勝つなんざ狂気じみた事を出来るわけないって。

その場でチリンと鈴の音になる、ハッと意識を戻される。

「行くよお兄さん」

「いいしさん」

「お姉ちゃんがそうするって言うなら頑として動かないから諦めるよ」

「……いいんですか?」

「どうせ私は不良妹だからね」

さとりさんの急いでくださいと言う言葉に慌てて地霊殿を出て行った。
そして……旧都へと辿り着いた。

「ねえお兄さん」

「こいしさん、今は急ぎますよ」

さとりさんの意思を継ぐように急かす、逃げたのに巻き込まれたじゃ馬鹿だし。

「ごめんね、やっぱいけないや」

「何を……?」

「お姉ちゃんがいてこそその私なんだ」

そう言うところりと回転して地霊殿の方へと向きを変える。

「……そうは言っても、だからこそ逃げるのでは？」

「お姉ちゃんがいて、お隣がいて、お空がいて、妖精のみんなとか他のペットがいて
黙々と指を曲げて数えるような仕草をしながら呟く。

「そして貴方がいて、それが地霊殿なんだ」

「……」

「だからいけないや」

「死ぬかもしれないのに……」

「確実に死ぬお兄さんよりはまだ私達は可能性あるしね、だから信じてねって事で」

「ダメです、連れて行きます」

縛つてても連れて行こうと構える。

さとりさんに言われたのだから。

「ごめんね」

そう言ってこいしは鈴を投げる。

一瞬目線が投げられた鈴の方へと向き……こいしさんを見失った。

「何処か……いや探すのは無理か」

彼女を一度見失ってしまったらもう見つけるのは無理だろう

だから諦めて一人でも……

「家族か……」

彼女は自分を嫌われ者だと言った。

能力を理解して、分かるとは思ったが俺には到底そうは思えなかった。

人里でも家族みたいに扱ってはもらえたが結局は化け物扱いされて殺された。

「今回だって」

空さんからしたら、俺が灼熱地獄を見に行かなかったからも間違いなくあるだろう、それどころか動機かもしれない。

なのに俺が一切悪いと誰も言わなかった……いや言われてもは？ってなるんだけどさ。

居るのは好きにしていって言った癖に、不自由なく客人として家族として扱ってくれた。

「家族殺しはさせたくない、か」

そんなの俺だって同じわけだ。

そう思うと自然と足が灼熱地獄へと向かって行った。

「さて、どっかにはいるんだろ？」

正直ぶっ倒れそうな高熱で体が満たされる。

あちこちから焦げたような匂いがするがもう気にしてられない。

「本当に君が勧めるほど綺麗な場所だっただけは分かったよ」

体が乾き血が流れ始める。そしてすぐに蒸発する。

既に乾いた目で全体を見渡す。

至る所に見える炎がまるで寶石かのように美しく燃えている。

地獄のように燃やし尽くす炎だからこそ美しく見える。

「さとりさんが……か？ ……おく殺しにはさせたくないってさ」

何が持っただ、こんな持っわけないだろうと。
乾き切って声が出辛くなった声から掠れた声を出す。

「――、――」

そして声が出なくなるまではすぐだった。

自分は空さんが本当にさとりさんとか地霊殿が大好きだつてことはわかってる。
その善意が歪んだ方向へと曲がったことも。

「――、――」

震える身体を見る、周りが暑過ぎて身体が壊れてこれは寒いから震えているのか。
それとも死への恐怖で震えているのかと。

後者だったら良いのかもしれない。

ここに来るまではどうしても良かったはずなのに、また死への恐怖を思い出したのだから。

ここの人達が思い出させてくれたのだから。

怖いけど、やらなきゃいけないと思いつながら。

さとりさんが空さんに家族殺しをさせたくないと言うのなら、自分で命を絶って全て平和に戻すと。

俺だってそれが正しいと思ったから。

そう思いながら灼熱地獄の中へ自ら飛び込んでいった。

t o b e c o n t i n u e d

十六話 二度目の別れは唐突に～dream end.

最初にしたのは土の匂いだった。

草も混じった懐かしい匂いに少しだけ泣きそうになる。

ただ……いつまでも寝そべっていられないと起き上がる。

そして、歩き出す……。地霊殿へと向けて。

「急がないと……」

途中妖怪とかに襲われそうに何度もなるが、それでも避けながら行く早く会いたいと思いつつながら。

「……あと少し」

ただし違和感がある……確かに走っていて熱を帯びているとはいえそれ以上の熱気を感じない。

「灼熱地獄……まだ出来てないんですかね」

「確かお燐さんは最近復活したと言ってたし……俺が地霊殿にいる間に復活したのか……？」

「……た……お邪魔します」

ただいまと言いかけたが、流石に今は違うだろうと。言いたい気持ちを抑えてお邪魔しますと扉を開けた。

「にゃー」

黒猫が出迎えてくれる……と言うかこの猫は……

「お隣さん、さとりさんは居ますか？」

「……!？」

「あの……」

「お兄さん……何者だい？」

「あ……」

分かってはいるけどついうっかりやってしまう。

「まあ、さとり様に用があるなら呼んでくるけど……。」

「ありがとうございます」

良かった、すぐに済みそう……

「とはならないよ？ お兄さん何の用だい？」

「え……？」

「流石に大事なご主人を出せーと言われてもねえ」

お燐さんの明確な敵対を見る。

と言うか……初めてな気もする。

「……本当に大事な事なんです」

「そうは言ってもねえ……」

「お燐、構いませんよ」

「さとり様!？」

「……………さとりさん」

「何泣いてるんですか……………」

「あつすみません」

別に久しぶりに会ったわけじゃ無いのに……………なぜ涙が出るんだろうな。

「さとりさん、お話が……………」

「必要ありません」

「え？」

ああ、そうだよなうつかりしてた……………

さとりさん見れるんだから言う必要ないか。

「お帰り下さい」

「……なんて？」

明確な拒絶を受けた。

いや……なんて……？

「ちよつとさとり様？」

「お隣、彼を地上まで案内してください」

「え!?!地上に行くてくるのかい!?!」

「ちよつとさとりさ……」

「貴方にはもうここは合わない、ここにいる必要はありません」

「そうじゃなくて、俺はここに……」

「お憐……」

「分かったよ」

そう言ってお憐さんに抱えられる。

力負けしているので敵わない。

そうして連れて行かれる。

「小野寺蓮司さん、ありがとうございました……」

最後にさとりさんの言葉だけを聞いて、その感謝の意味を……俺は理解したのかなと言うことと、自分の役目は終わったのかなと思っただけだ。

「さとり様、聞かせてもらってもいいですか？」

彼を送り返した後に燐は主人に尋ねる。

「お燐、そんなに気になりますか？」

「まあ……敵意あるのかと思いきや丁重に送るだけじゃなくありがとうございますと言っていましたね」

「……そうですか」

「もしかしてさとり様どつかで会ったことあったり？」

「お燐……貴女は死に戻りって信じますか？」

「……いや、死んだら戻るってないでしょ」

「今まで送られてきた人間一人も蘇ってないじゃん！と正論だーみたいにする。」

「彼はその能力を持っているみたいですよ」

「……マジですかい？」

「彼の心底にはここ地霊殿での記憶がありました」

「確かに地上の人間には地霊殿のことは知らないですもんね」

「それから未来を知った気がします」

「未来ですか……？」

「彼が死に戻った理由を」

「……聞かせてもらってもいいですか？」

「お空が起こした異変、それを止めるために」

「……え？お空が？」

お空がそんなことすると思えないと驚愕する。

いくら賢さが足りなくても今の力じゃ異変なんて起こせるはずないと。

「地上を灼熱地獄にさせようと思いました」

「なんだって……でも今のお空じゃ……？」

「何処からか力を入れて、また灼熱地獄が戻るようです」

「止めないと……」

「ダメです」

「さとり様……何ですか？」

「これが彼を地上に戻した理由でもありますが……。賢者との約束により異変は起こした以上、止める事はできません」

「……そんなことが。でっでもまだ未然ですし」

「いいえ、起こさせます。止めたら何が起きるか分かりませんし」

「でも……そしたら地上が……」

「そうしないようにこちらで調整します。彼は優しいですから止めようとしてはしょうが……。そうするわけには行かないので」

「分かりました……。ただ一つ聞いていいですか？」

「なんですか？」

「さとり様理由はそれだけですか？」

「……彼は前世でここに来たときは自暴自棄でした。ですが今は十分前を向けたので」

「あたいにだけでも教えてくれませんかね？」

さとり様の友達にでもなれそうな人物だったのにと。

「……元の私は家族のように大切に思っていたようですよ」

「だったらなんで……!!」

「怖いんです」

「やっぱ信じ切れないんですか？」

「いえ……少なくとも信じたいとは思いました」

「……」

「人の一生は短いですが……それ以前に彼が住むには適した場所ではないし、呆気なく死ぬほど弱い存在です」

「まあ人間ですもんね」

「そしてその死んだことさえ彼は覚えていて……私には見えない。後何回、彼を失えばいいんですか？後何回、死んだ彼に謝ればいいんですか？」

「さとり様……」

必死に目を押さえるも溢れてきた滴に燐は焦り出した。

「すみませんが、私にはそれが耐えられません」

「さとり様は悪くないですよ。本当にすれ違ってしまっただけですって」

もしかしたら兄のように弟のようになれる存在かもしれない……だからこそ何度も失うのは耐えられないだろうと。

「せめて幸せになってくれればいいんですけどねえ」

「そうですね……」

結局泣き止むのに大層時間をかけてしまった。

「さて……」

理由は分からないが追い出されてしまった。

ただ……さとりさんなら地霊殿に来た事情は分かっただろうから一応はよしとしよう。

「地上で生きていけるか……」

確かに地底の方が生きていくには心地よかったが……あの頃程は地上のトラウマは無くなっている。

本当にさとりさんのお陰だ。

ただ……最後のありがとうございましたって言葉が聞こえて無ければまた自暴自棄になってた気がするけど。

「ただ……正直やりたいことが無いんだよな……」

こいしさんに地霊殿で生きて行くって言ったばかりだったしな……地上に戻ると思わなかったし。

と言うか結局緊急事態とは言えあの時の約束裏切っちゃったな。

「嘘吐き」

「え？」

慌てて周囲を確認するが誰もいない。

ただ鈴の音がチリンと聞こえた気がした。

『あれ？今私なんて言ったんだっけ？まあいつか。分からないし』

こいしさんも記憶が無いはずだし何よりここにいるわけないから幻聴だろうなど。

ただ……恩返しをしたって言ったのに返せてないって……

「恩返しか」

地底に戻るのとは違うだろう、だったら地上で出来ること……

「博麗の巫女……」

確かさとりさんが言ってたな博麗の巫女が異変を解決するって。

起きるかどうかは分からないが……起きた時のために巫女さんに会っておいた方がいいのかな？

「ただ……見た目が分からないな。」

巫女って言ったって巫女服とは限らないし……ってか外の世界巫女服じゃ無い巫女たくさんいた気がするし。

それなら分かる人探した方がいいか……

「あの箒に乗っていた魔女さん」

確か魔理沙って名乗ってたよな。あの人をまず探そう。

見た目は覚えている。

「それに、確かあの時博麗神社って言ってたし何か知っているだろう」

そう信じて新たな目標を立てた。

前世で返せなかった恩を返せたらいいなと思いつながら。

next episodes

く森の魔法使い編く

十七話 森の中で見たものくthe forest.

とりあえず……現場というわけではないが、ルーミアと戦っていた場所へと向かう。
当然だが地霊殿に先に寄った事もあり、双方そこにいることは無かった。

「流石に居ないよな……。まあ近くを探すのは手だが……」

近くにあるのは森だが……

魔女が森にいるって考えるのは安直だろうか？

「そもそも童話の知識を幻想郷に結び付けていいのだろうか？」

有名な童話では魔女は森に住んでいて主人公達に接触してくることが多いと思う。

ただそれは思うだけでもあるし……

「ただ……確かめる価値はあるか」

目印は立てたところでパンクズとかは鳥が食べるのがオチだ。

だから直進を繰り返す。どうしても見つかりそうになればUターンしよう。そんな無謀に無謀を重ねたような意思で森へと入って行く。

「森が違う……？」

いや森に違いなんてないはずなのだが……

ただ空気が違うと言うか、違和感がある。

「いししさんが見ているわけでもあるまいし」

疑問に思いながらも進んでいく、そうして当然の如く……

「…………おつかしいなあ」

一度状況を再確認しようと森から出ようとすることも、出る事が出来ない。通常の森でさえ目印が無ければ帰れないのに…………帰れるはずがなかった。

「適当に行ったらどうなるか…………ただ迷うだけだよな」

どつか目印について思ったけど、同じような木ばかりだし…………傷を付けても見付けられない自信がない。

「誰かいればいいんだけどな…………」

勿論人もいなければ、動物すらもない。

迂闊に入るべきでは無かったんだなと…………

一瞬だけ後悔したが足を止めても意味がないので再び進み始めた。

「お腹減った…………」

森の中で食糧は何かないかと探すが、見つからない。
と言うよりも……何が食えるか分からない。

「死んでもいいかも知れないが……辛い嫌だしなあ」

死ぬなら一瞬でっと思うのは共通認識だと思う。

苦しんで死ぬのは勘弁してくれ……拷問とかされた事ないけど耐えられなさうだな
俺。

「キノコとかどれがセーフとか分からないよな」

木の実ならまだ賭ける可能性はあるが……キノコはヤバイって知ってる。
なんかベニテングタケみたいなのをはじめ毒キノコ多いんだろ？

「進まなきやな……」

どつちに進めばいいか分からないが……食べるものがない以上は進むしかない。
見たことあるような物生つてないかな……
無謀に思いながら更に足を進めた。

—————

「魚あ……魚あ」

あれから進んでやつと池らしい場所に出た。

木以外の物に感動を覚えるとともに、それ以上に魚がいたことに感動した。

「生き物がいるんだなこの森にも……」

お腹は空いてるものの魚を取る手段がない。

このままじゃどうしようもないが……

「火もないよな……これじゃ手掴みしても無駄か……？」

諦めは付かないので池の周りをぐるっと回ることにした……
水辺だしなんか成長してないかなと。

「……?」

水辺を回っていると確かに木の実等は無いのだが……なんかいる。

「釣りしてる……?」

俺の予想が正しければ妖精? いや人形にも見える。

ただ……明らかに釣竿よりも小さい子が釣りしてるのは分かる……大丈夫なのか?

「ツレネーナ」

「喋った!」

「!？」

唐突に声をかけてしまったせいで驚いている。
すまないことをしたかもしれない。

「ナンダテメーヤンノカコラー」

「ごめんなさいって……」

「シカシ、マホウノモリニニンゲン？メズラシイコトモアルナ」

「魔法の森？」

「シラナイノカ…… ツテカナニミテンダヨ!!」

「すみません気になったので」

「フンッ」

怒らせてしまった……しかし見た感じこの子人形なんだが……喋る人形もいたんだな幻想郷に。

「マダナンカヨウアンノカ？」

「森で迷ったのですが……出口とかわかります？」

「シルカヨ、カツテニシロヨ」

口悪いなこの人形……急に話しかけたこつちが悪いのかもしれないけど。

「それじゃあ貴女も迷子つてことですか……？」

「ハア？」

ダメだこの子……関わって欲しくなさそうにしてる。

話せる対象に会えて舞い上がっていたが……しゃあない離れるかこの子も心配だけど……

「つと君!!」

「マダナンカヨウカヨ?」

「釣竿!魚が!!」

重石を乗せていたらしき竿が揺れている。

魚が引っ掛かったようだ。

「ヨッコイセツト」

若干おっさん臭さを見せながら釣竿を持つ。

だが魚も魚影が大きそうだが……大丈夫か……?」

「グツ……」

「大丈夫ですか!？」

「ウルサイナア」

悪態をつかれるも状況がヤバそうに見える。

腕が取れそうなような……いや今ブチって言った感じがするぞ!？」

「(昔だったら見捨ててただろうが……)」

わざわざ威嚇してくる人を相手にしたくないし無視していたと思う。

ただ……嫌われ者も受け入れてくれたあの人が……見捨てないだろうしなっ
て思うと走って行っていった。

「ナンダヨ、ジャマスルキカ？」

「手伝います」

「イラネーヨ！」

「腕が取れそうな癖にぐだぐだ言わないでください！」

「…… ウツセーナ、スキニシロ」

取れそうな腕を自分で見ながら諦めたように受け入れる。

あと少しでお手手がバイバイになりそうだったし本当に良かった。

「それじゃ釣りますよ」

「ダイジヨウブナノカ？」

「大丈夫ですよ、一般少年くらいは力あるんで」

そうして思い切り引つ張り上げる。

糸も心配だが釣りがよく分からん……持ち上げることだけを考える。

「ぜあああああああ」

魚が見えてきた、あと少し。

「アミカ」

「いえ気持ち嬉しいですが腕取れるの見たら悲しくなるので待つててください」

「……」

大人しく待つてくれた。

そのまま空腹や疲れもあったものの、ここで逃すとまたそのまま腹ペコに倒れそうな気がしたので本気で釣り上げた。

「チカラダケハアルンダナ」

「どーも。」

「シカシ、ワザワザナンノタメニテツダツタンダ？」

「前に自分が嫌味言つてたはずの相手に助けられたしね」

「ダカラ……」

人形が返事をしている時にうつかり腹を鳴らす。

それを見て呆れられる。

「ケツキヨクジブンガハラハツテルカラジャンネーカ」

「いや、そう言うわけじゃなくて……」

「ナライラナインダナ」

「……少しだけいたただけたら」

カッコつけようとしたのに締まらないのが少ししんどい。
ただ……背に腹は変えられないわけで。

「…… ショウガナイ、ツイテコイ」

「はい」

そのまま言われるままに着いて行った。

口は悪いけどいい子が幻想郷に多い気がする。

「ウデガトレソウジャンカッターラ、モドルキナカッターカラ…… ウンガヨカッターナ」

「それなら良かったですが」

「ホラツイタゾ」

そう言われて見てみると、一軒家が……森の中に。

「こんな所あったんですね」

「シラナカッタノカ？」

「はい、初耳でした」

「ソウカ、ココハオソロシイマホウツカイガ、スムイエナンダゼ」

「魔法使い!？」

「ナンダヨ!？」

「いえ、俺は魔法使いさんに用があつて森に来たので」

ようやく見つけた。森で迷うこともあつたが、早いうちに見つけられてよかつた。

「ソーナノカ」

「失礼します！」

「アツオイ…… サキニハイリヤガツテ……」

やつと会えたとドアを開ける。

「あら？お客様？」

「あれ？」

「イチイチナンナンダオマエハ」

「いえ、考えていた人と違いまして」

「シツレイナヤツダ」

「どうかしたのかしら？」

「いえ、迷子になりました」

「そうだったの、大丈夫だったかしら？」

「はい」

「オマエ……」

「迷子だったのは事実ですし」

「上海、一緒だったの？」

「アア、タスケラレテナ」

そうやって腕を見せている。戻るまでに取れなくて良かったな。

「そうだったの、ありがとうね。私はアリス・マーガトロイド」

「小野寺蓮司です」

ひとまず……死ぬことはなさそうかな。魔法使いで知らない人だし上海さんと呼ばれたこの人形が怖いと言っていて少々不安だったが。

「困ったことがあつたら言ってね」

「分かりました」

上海さん同様この人も心優しそうな人だなって思った。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

十八話 人形屋敷と少女く doll house.

空腹時には何を食べても美味しいと聞すが、更に言うなら純粹にこの人は料理上手な
んだなと思う。

「しかし……なんで魚釣ってるかと思えばこう言う事だったんですね」

「モンクアンノカ？」

「いえ、ありませんが」

「フンダ」

「こら、上海ダメでしょ。ごめんなさいね」

「いえ、心優しい事は分かって……痛い痛い突かないで」

チクチク痛い、手加減はされてるんだろうけど。

「ヨケイナコトハイウナツテノ」

「分かりました……」

やっぱりと言うか……この子人形だけど絶対自我あるよな？

「そう言えば小野寺君ちよつといい？」

「どうしましたアリスさん？」

「どうしてこの森に入ったの？」

「ああそれはつすね。探してる人がいます」

「この森にいるかな……いれぱいいんだが。」

「それって森の住人なのかしら？」

「分かりません。ただ森にいそうかなって」

「誰が？」

「魔法使いが？」

「私のことかしら？」

「すみませんが違います」

髪の色は一緒だが根本的に違う相手だしな。

「じゃあ魔理沙？」

「知ってるんですか!？」

「ええ、この森に住んでいるもの」

「やっぱり魔法使いって、森に住むのが定番なんですか？」

「別にそう言うわけじゃないけど……。図書館に住んでる人も居るし」

「図書館に!？」

「ええ、魔法使いは何処にだっているもの」

「それは凄いですね」

確かにさとりとか火車とかもいたけど、魔法使いだとファンタジー感が増す気がする。

「オマエハナンカアンノカ？」

「いや……人間に期待されても」

「マアソウカ」

「……それで、魔理沙さんは何処に？」

「ひとまず明日ね」

「分かりましたが……。」

「なんでそんなに焦ってるの？」

「すぐにやらないといけない事がありました」

「分かったわ。なら明日連れてくわ」

「いいんですか」

「困ってるんでしょ？」

「ありがとうございます。……ただ何も聞かなくていいんですか？」

「言いたくないものを聞く必要ないし、必要なら話すでしょう？」

「アリスハオメーヲシンジテنداヨ」

「さつき会ったばかりなんです」

「ヤサシスギンダヨ」

「確かに……それだと優しすぎますね」

「ダカラ、ミハンネートイケネーンドヨ」

「そう言うところが、上海さんも優しいですよね？」

「……」

上海さんがそっぽを向く、口調的に褒められ慣れてないのかな？

「それじゃあまた明日って事で」

アリスさんがそう言つて上海さんに案内される。

午前中までの状況ではあり付けると思わなかつたベッドだあ。

今日の自分本当に助かつて良かったとベッドに潜つた。

そのまま寝つこうとするが……少しは寝たものうまく寝付けない。

……枕が変わると寝れないなんてタイプじゃないと思ったんだがな。

明日が肝心だしあまり部屋を探索するのはよくないと思いつつ、まだ明かりが付いているようなので少し気になる。

「見に行くだけですか」

何をしているのかなと見に行く。

そこではアリスさんがまだ起きていたようだ。

「アリスさん魔法の練習ですか？」

「まだ起きていたの？」

「はい、目が覚めちゃいました」

「そうだったの」

「えつと……魔法じゃなくて人形？」

「そうよ、今縫っているの」

「新しい人形ですか？」

「ええ、いつもこうやって夜に増やしているの」

この部屋の周囲を見渡すと確かに人形だらけだ。

ただ、日本人形とかとは違って見た目が可愛らしいから囲まれていてもほんわかする……って言うか日本人形に囲まれたくない!!

「折角起きてきたなら少し話していいかしら？」

「勿論です」

泊めてもらってる立場だし文句も何もない。

「上海のことどう思う?」

「どうって? 口は悪いけどいい子だと思ってますが」

それもそれで理由があってみただったし文句はないが。

「そう言うことじゃないのだけど……」

「え? どう言うことですか?」

「普通は人形とかが喋ってたとか、動いたとかで……気味が悪いってなると思ったの
だけ」

「え……そうなんですか……!?!」

「誰かが操ってるなら分かるけど……勝手に自立して動いているところを見たらしいし」

「別に、妖怪だってなんだってこの世界で普通じゃないですかね？」

「そう……」

「もしかして……何かやらかしました？」

妖怪では無いけれど、驚く事が喜びだつて言う人だつて存在してるしそうやって驚かせたかったのかもしれない。

それだつたらやらかしたわけだが。

「いえ……色々と思うところがあつただけよ」

話しながらも黙々と人形が完成していく。
相手手先器用じゃ無いとここまで出来ないぞこれ。

「なんかすみません」

「いえ、私からしたら嬉しい事だし問題ないわ」

「あつ嬉しいんですね」

「そうね、自分の人形達を褒めて貰えてるしね。勝手に動いたって怖がられる事が多いのだけど」

「だってこの見た目可愛いですしね」

なんとなくアリスさんに似てるような気がするが……流石に可愛いと言った以上それ言い出すのはヤバイやつだ。

「変な人とは言わないけど、本当に他の人と違うわね」

「そうなんですかね？分らない」

一匹の人形が完成してまた一匹の人形が作り始められる。

一体何匹作る気だろうか？

「そう言えば思うところって何ですか？」

「……それを聞くの？」

「いや、自分が不手際してたらまずいなと」

出来るだけいい子でいたいのは事実だし、機嫌を損ねたりさせるのはよく無いしな。
気をつけるところは気を付けないと。

「少しとある事に気付いただけよ」

「とある事ですか？」

「ええ、単純な事だけどね」

「聞いていいんですか？」

「貴方のことだしね」

俺の事……一体何なのだろう？

「貴方、結界の外の人間でしょ？」

何？この子もさとりなの？

魔法使いつて超能力者なのかなって思わされたのだった。

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

十九話 人形裁判（優しめ）
girl is asking me.

「なんでそう思ったんですか……？」

服装は確かに目立つものかもしれないが……普段森から出ている様には思えないが。

「どうしてかって顔してるわね」

「そりやどうしてかって聞きましたし」

「……里の人間と貴方は全然違うのよ」

「そうなんですか……？」

見た目等はそりや違いあるけど……そこまで一緒に過ごして違いは感じなかったが。

「だからこそ森に住んでるのもあるけど、あまり人間には私はいい目で見られないわ」

「……まあ、そうかもしれませんね」

「困っている人がいれば助けるけど、どうしても仲良くまでは踏み込めないから」

「そう言いながら曇る顔も、先程までの楽しそうな顔も人間と差異ないと思うんだけどな。」

「気にしないどころか、知ってなおむしろ友好的に取るのは本当に外の人間よ……」

「嫌われてるって事は無さそうですけど」

「結局助けても怖がられるの、魔法使いとしてもね」

「あー……」

確かに里の人達も妖怪って過剰に反応してたしなあ。
そう言った異端なものに過敏なのかもしれない。

「魔理沙を探しにきたのもそう言う事でしょう？」

「お願い事があったわけで」

そうだよな、外の世界じゃ無ければ妖怪の事について全く言わないのかもしれない。
だからそう言った件でもバレていたのかな。

「それじゃあ聞きたい事があるのだけどいいかしら？」

「構いませんが、知ってる事少ないですよ？」

「大丈夫。外の事についてだから」

なんだそれなら簡単……つとアリスの方を見ると目が輝いている様な
……あれー？これは夜眠れない気がするぞー？

—————

外はどんな所なの？

大体幻想郷に似ている所だらけですよ。

外には何があるの？

自然とかなら同じですがビルとかだったり。

こちらの世界と大きく異なるものは？

人間の多さと妖怪とかがいない事ですかね。

気付けば沢山の質問をされていた気がする。

夜はまだまだ長いとは言え元気だな。

「甘いものとかは……?」

「ありますが……作れるかどうか……」

俺はそもそも菓子作りなんざ出来ないし材料もあるかどうか。

「材料ならあるわ」

「そうなんですか?」

「ええ、近くの店に色々あるからね」

聞けば香霖堂と言うらしい。

スーパーはないにしろそう言ったものがあつたのか。

「後は私が出来るだろうから、後で大体を教えてくださいければ」

「いや……レシピとかは分かんないんですけど」

「そう……」

本当に、なんというかごめんなさい。

「あつ後もうーつだけ聞いていい？」

「構いせんが……明日に響きません？大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫……。と言うかこれが一番大事な話だから」

「そつそうなんですか……？分かりました」

何質問されるんだろうか……

今までののは全部お遊びでしたーとかありそうだし若干不安が残る。

「えっとね……外の人形ってどう言う感じか知りたいなつて」

「乙女か！」

「え!?!」

「いや、なんでもないです」

つい口に出してしまったのを抑える。

と言うかアリスさんが乙女ですねごめんなさい!!

「人形と言うか……ぬいぐるみと言うか……テディベアですかね？」

「テディベア？」

「クマのぬいぐるみですよ」

「クマって恐ろしくない……?」

ふむ……一先ずこれくらいなら描けそうだが。

「こんな感じですが……」

「……確かにクマね」

「はい、クマです」

「確か魔理沙が紅魔館にこんな感じの見かけたってそう言えば言ってたわね」

「紅魔館……初めて聞きました」

「吸血鬼達の住む館よ。この前魔理沙が異変解決に向かっていたわ」

「異変……」

「何？」

「やっぱり存在してるんですか？」

「ええ、俗に紅霧異変と呼ばれたのだけど、存在していたのよ」

「色んな異変って起こるんですか？」

「昔から異変は所々起きてはいたけど、それを解決する人がいて成り立っているの」

「なるほど」

そう考えるとある意味空さんの行動も異変に繋がるのか？

なら……起こる前に伝えてはおきたいんだが。

「異変ってまた起きそうですか？」

「分からないわ。起きては欲しくないけどね」

「そうですね……」

異変が起きれば誰かに何かが起こる。

地霊殿の皆も他のみんなも平穏でいたいだろうし。

「それじゃあ、このくらいにしておきましょうか」

「はい、アリスさんは？」

「さつき言ってたテディベア、少しだけ作ってみようって思ってたね」

「寝たほうがいいのでは……？」

「少しやって終わりにするわ、じゃあおやすみなさい」

そしてベッドへと戻った。

「異変か……」

外の世界とは違って妖怪とかもいれば神まで居るらしいし、そりゃ全員が仲良しこよしというのも厳しいのかもしれないな。

紅霧異変つてのも人じゃなくて吸血鬼が起こしたらしいし。

「と言うか……吸血鬼いたんだな」

少々驚くが、外の世界で妖怪とかお化けとか言われてるものはなんだったっていそうな気がする。

実際鵜とかぬらりひよんだっているかもしれない……分かんないけどさ。

「もしかしたら異変だったのかもしれない」

妖怪に襲われたことも、人里で起こった春に雪が降り続ける事も。

俺が神隠しでここに来たのだって異変かもしれない。

ただキリが無さすぎてそれは置いておくが。

「そもそも、何も分からねえし」

自分はまだ、この幻想郷の事を何も知らないに等しい。

人里は閉鎖的だったし、地霊殿は地下で幻想郷の事を知る機会も無かった

元の世界に帰るかどうか、帰れるかどうかはまだ分からないが、今生は魔理沙さんに伝えたら幻想郷を回ってもいいかもしれないな。

「まあ……この前は何も考えずに落ちたが……今回の人生が最後かもしれないし」

だったら一度回ってみるか……ただ妖怪も多いし即死しそうだが……

誰か一緒に旅してくれないかなと思いつつ、まあそんなの無理だし迷惑だと思う。

「まあ周りながら考えるか」

どちらにせよ帰る為には幻想郷内でそれを探さないといけないしと。明日が肝心と言いつつ、それ以降のことを考え過ぎて、夜が殆ど眠れなかった。それで後悔しながら起きると。

早く寝ると言っていたらしき人物が未だにテディベアを作っている姿が発見されたのだった。

重要：夜はちゃんと寝ましょう！

t o b e c o n t i n u e d

二十話 霧雨魔法店 where is owner.

——
「どんどん森を抜けて行く。」

自分には周りが何も変わってない様に見えるが、アリスさんは自信を持った様に進む。

「よく分かりますね」

「慣れてるからよ」

「自分は慣れても分かる気がしないですが……」

「この森を今後也使うと思うなら慣れなさい」

「頑張ります……」

「この先よ」

アリスさんの後を続けると家に思える場所があった。

少々寂れているようだが……ちようどと言うべきか魔女が住んでそうだなって場所に見えた。

「魔理沙、いるかしら？」

アリスさんが探しながら店へと入って行く。

ただし……いるなら気付きそうだが、誰も出てこないな。

「小野寺君、貴方も」

「良いんですか？」

「だって居ないんだもの」

「居なかったら普通は帰るべきなんじゃ？」

意外とアリスさんっちはつちやけてる？

まあ新たな一面が見れた様でよかった。

「魔理沙ったらまた散らかして……っつて魔導書？」

「どうしました？」

「こんなもの、何処で見つけたのかしらってね」

アリスさんに渡されてペラペラ見るが……読めない。

「アリスさんは読めるんですか？」

「結構難しいけど、読めなくはないわ」

「凄いですね……、俺なんざ永久に読める気がしないや」

「練習すれば読めるだろうけど……やめときましようか」

「え？なんで!？」

「ロマンだと思ったんだけど……ダメなんだ……」

「魔法使いはなんかそう言う掟でもあるのか？」

「貴方にはやる事があるんでしよう？」

「そうですね……」

「この世界を旅するなら魔法を覚えている余裕もないか。と言うか、覚えられる可能性がある程度だろうし。」

「魔理沙に黙って持っていていっても悪いしね」

「そりやそうでしょう……人の物持ってつちや泥棒ですよ」

「それよ」

「え？何が？」

「魔理沙は人の物を勝手に持っていくのよ」

「え……？泥棒なんですか？」

「本人は借りて行くって言ってるけど実質ねえ……」

「そんな酷いんですか？」

助けてもらったしヒーローみたいなイメージあったんだけどそう言われると凄く悲しくなるんだが。

「死んだら返すって言ってるのどう思う？」

「……泥棒です」

積み上げたものがすっごいガタガタに崩れていった気がした……

なんで……泥棒なんだよ……

「と言うかこの魔導書って……」

「……ほぼどつかから持ってきたんでしょうね」

「泣いていいっすか？」

「ダメよ」

「分かりました。それでいつ帰って来ると思います?」

「分からないから一度戻りましょうか……」

「了解しました」

「魔理沙は、よく外に出て行っていつ戻ってくるのか分からないのがいつもだから……
どうしようもないのよね」

「色々と自由奔放な人なんですわ……」

「そうね、正直頭抱えさせられるわ」

「俺も正直不安になってきた」

「でも会う必要あるんでしょ?」

「そうですね……」

異変解決の専門家だと言うなら助けて欲しい。

異変を未然にが出来たらいいんだが……それじゃ動けないと言うならば早く。

「どうしたの？」

「いや……なんでもありません、帰りましょうか」

さっき通った道だつてノリで先行したら何回も違うつて言われた……全然ダメじゃんか俺……

「オウ、ウンガワルカッタナ」

「え？何かあつたんですか？」

「マリサガキテタゼ」

「え？」

入れ違いしたのか……運が悪いつたらありやしない……

「魔理沙は？」

「スマネエ、カエツタ」

「そう……被害は？」

「……ワカンネエ、カリテクゼトハイツテタガ」

「探してみるわね、ありがとう」

そう言つてアリスさんは家へと戻るが……必要なもの盗られてなきやいいが。

「オメーハモドラネーノカ？」

「あつ……そうですね。入ります」

そうして家に戻ろうとするとバンツと大きな音が鳴つて扉が開いた。

「あつアリスさんどうしま……」

「行くわよ」

「何処に……？」

「霧雨魔法店に」

「え？」

「上海、お留守番お願い。粘るから」

「アツアア……」

そうして結局往復することになった。

「あの、アリスさん？」

「何？」

「何盗まれたんです……？」

「……テディベアよ」

「は？」

「昨日言われたの急いで完成させたいって言って作り上げたんだけど……」

「そりゃ盗んじやダメだろ」

「……え？」

「あつすみません……悪気はないんですが」

ね？
流石にアリスさんが昨日頑張つてたの分かってるしキレかけた。でもキレていいよね？

「どうするつもりなんですか？」

「魔理沙帰ってくるまで張るつもりだけど」

「協力します」

「ありがとう」

絶対に取り返すとそう決めて俺もこれは手伝うわ。

と云うかアリスさん何も悪くないじゃん……幻想郷に警察はないみたいだし自分達でどうにかしないと。

そのまま待つと、数時間後に音がし始めた。

「いやあ、今日也大収穫だったな」

全然悪びれてない……まあそうだろうなどは。

「えっと……あれ？魔導書は何処だ？」

「……よ、魔理沙」

「ちよつとアリス!?なんでお前が持ってんだよ返してくれよ」

「その前に私のティディベア返しなさい」

「これは借りただけだったの……」

「大事なものであつて貴女だけじゃなく誰にも貸せないのよ……」

「嫌だ、借りたものは死ぬまで返さない主義なんだ」

「魔ー理ー沙ー？」

「……分かったよ、返せば良いんだろう？」

「珍しく聞き分けいいわね」

「いつも以上に怒るからだろうか？」

「それだけ大事なのよ」

「はいはい……。それで……。そいつは誰だ？」

「小野寺蓮司つて言います」

「ふーん、それでウチに何の用だ？」

「彼は外の世界の住人で元の世界に戻るためにまずは魔理沙にコンタクトをと」

「え？」

そんな話聞いてないんだが……。と言うか別に今すぐ出ることって出来たのか？

「え？」

「え？」

……え？何が起きてるんだこれ？
誰か説明してください。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二十一話 疑惑と信頼 < doubt girl > t r

u s t g i r l .

「それを信じろってのもだいたい無理があるぜ？」

「信じてくれとしか言いよう無いんですが……」

「未来から来たってことだろ……？」

「正確には死に戻ったせいで、少し進んだ未来で死んで戻って来たわけですが」

「……どちらにせよ、言ってることだいたいぶやべえのは分かってんのか？」

「はい……。それで助けを求めたのも事実です」

死に戻りのことなどを全部二人に話した。

当然さとりさんのようにすんなりと受け入れてくれるとは思っていなかったが、それでも信じてもらうしか無い。

「つたくよお……、いきなりすげえこと言い出すしなアリス」

「……」

「アリス？」

「一つだけ聞かせてもらっていいかしら？」

「なんですかアリスさん？」

「なんで隠していたの？」

「なんでって……頭おかしいとしか思われる気しかなかったですし」

「私がそんな信用出来なかった？」

「いや……あの日は色々と限界でしたし……追い出されたらどうしようもなかったの
で」

「確かに……そう言われるとそうね」

「おいアリス……？」

「魔理沙、私は信じていいと思うわ」

「本当か？」

「ええ」

「アリスさん……!!」

信じてくれるんだ。

本当にありがたい……

「……じゃあどうしろってんだ？ 確か地底を助けてくれだっけか？」

そもそも地底なんて何があるんだと文句を言う。

「地底の住人達はある事は知っていたけど、正直殆ど知らなかったわ。」

「こいつがデタラメ言ってるだけかもしれないぜ？」

「わざわざ言う意味ないでしょうよ」

「そつそれでもなあ……」

「第一貴女に会うために命懸けで魔法の森に入ったのよ？少しは信じてもいいんじゃない？」

「……ぐぬぬ」

本来はこれが正しいんだろうが……なんか説得出来なそうだなあ。

「第一私は何も出来ないぞ？」

「なんでですか……？」

「異変は起こってからじゃないと動けないんだよ」

「ああ……」

確かにそうだ、警察とかは未然で抑える事は出来るかもしれないけど……異変は起こす気があった無かった等で色々と面倒になるのか……？

「第一、お前の事を信用してないしな」

「魔理沙!!」

「アリス、これはこいつと私の問題だ」

「……」

「なあ、アンタ……もつとないのか？」

「もつととは？」

「そもそも私達は地底の場所すら知らないレベルだしな」

「それはそうですが……」

「だからもつと無いのか？ 異変までとは行かなくてもいいし、異変があるなら」

「……」

異変異変、何かあったか？

俺達の身に起こる災難……

「ありました」

「まあないよな……つてえ？」

「もう一つ、異変と言えるか分かりませんがありました」

「……聞かせな」

「……今年の春が来ませんでした」

「は？春が来ないってなんだ？」

「前の人生の中で、四月になっても雪が降っていて……それで明らかな異常気象が起きました」

「それで……どうなった？」

「死にました」

「……何を言っているんだ？」

「その時は人里に受け入れてもらったんですが……春が来ないのは余所者のお前のせいだと殺されました」

その時紹介してくれたのが魔理沙さんなんだが……それはそんなことしてないで終わりそうだしやめておこう。

「……………そうか」

「その後は地上で春まで生きてきた記憶がないので、毎回同じか分かりませんが……………恐らくは誰かが起こした異変ならまた起きると思います」

「……………なるほどな、春に雪か。それなら分かりやすい」

「それじゃあ……………」

「起きたら信じてやるよ」

「はいっ!!」

「どうやら一先ずは信じてもらえたようだ……………」

「いや、正確には起きてから信じるだろうけど。」

「しかし、死に戻りねえ……………なんでそんな能力が人間に……………」

「彼は外の人間よ？」

「そうだけどな？」

「……」

地霊殿のこととかは言ったけど、能力を持つてるのはやつぱおかしいのかな？
いや、普通はおかしいんだらうけど。

「んー、確かに外の人間なら特殊な能力持ちもいるのかもしんねえな……。」

「外の人達ってそんなやばい集まりみたいなんです……？」

「少なくとも幻想郷の人間は大人しいぜ」

「貴女も人間でしょうが……」

「そうなんです……?」

「むしろ人間に見えないとかあったか?」

「いや、アリスさんも魔理沙さんも正直どちらも差が分からないので……」

「どちらも可愛らしい女性と」

「まあそうですね」

「実際嘘じゃないしな……どっちも外の世界ではアイドルって感じで人気出るような人だろうしさ。」

「お世辞なんて言わなくていいわよ」

「ん……」

「もしかしてアリスがこいつを助けたのって惚れたから？」

「全く……そんなじゃないわよ」

「つかー、少しくらい照れてくれりゃ面白かったのによ」

俺達で遊ばないんで欲しいんですが……

いやまあ……打ち解けられたならいいのかな？

「しかし、アリスのこんな態度見たのは久々だぜ」

「そうなんですか？普段から笑ってそうですが」

「いやいや、笑わない所か仏頂面で痛い痛い」

「いい加減にしなさい」

「悪かったよ」

「本当にいい加減にしなさいよ」

「そーいやあれだけ激怒してたのは初めて見たな……そーいやあのテディベアってまさか？」

「呪詛じゆそ【首吊り蓬萊人形】」

「待てって、スペカは無しだったの……」

「知った事じゃないわ」

「いや……今はそれだとまずいだろ？」

「何よ」

「この後行くところあんだろ？」

「何処よ？」

「連れてったほうがよくないか？」

そう言うときアリスさんは人形を下ろす。

と言うか連れて行くってどう言うことだ？

「それじゃあ、今からついて来てもらうことになるがいいよな？」

「え？何処に行くんですか？」

「異変解決の専門家だよ」

「確か巫女さんでしたっけ？名前だけしか聞いた事ないんですが」

「ああ、その通りだ。紅霧異変では先を取られたが……悔しいが何も言わないのは違うしな」

「出来るだけ異変は解決したほうがいいですもんね」

「どんな異変が起きるのか分からないが……まあ専門家がいる以上無くなることはないだろうな。」

「さて、それじゃあ博麗神社に行くぜ！着いて来い！！」

「そうして魔理沙さんは箒で飛んで行く。」

「そう言えば前も飛んで行ったな。」

「一つだけ聞いておくれ、貴方って飛べる？」

「無理です」

「よね……」

結局そのまま歩いて行くことになって魔理沙さんに怒られた。
解せぬ……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二十二話 博麗の巫女（shrine maiden）

魔法の森を抜けて、人里で一晩泊めて貰った後博麗神社へと着く。
長い階段で足がパンパンに腫れながらも、なんとか登りきった。

「お前達遅すぎだろ？ふざけてんのか？」

「いやいやいや……そもそも遠くまで頑張って歩いて来たんですよ!？」

「あー……飛べないなら言えよな？」

「言う前に飛んでっちゃったでしょうよ……」

「そうだったか？」

「……………」

諦めた目で見つつ、境内へと辿り着く。

ただ……見た感じ寂れているように見えるんだが……

「あれ？巫女さんは？」

魔理沙さんに尋ねると親指でこつちこつちと指示する。

宿舎のようだが……昼だよな今？

「まだ休んでるの霊夢は」

「え？これが普通なんですか？」

「普通よ。神社に一人だからってダレてるわ」

「ええ……」

巫女だったり魔女だったり、この幻想郷に来てから色々と夢がぶち壊されてる気がするんだけど。

強く生きよう。アリスさんと言う希望がまだいるし。

「え？ 宿舎行けばいいんですか？」

「機嫌悪ければぶっ飛ばされるぞ？」

「酷くないですか？」

「だったら機嫌良くなるようにすればいい」

「どうすりゃいいんですかねえ」

「神社に来たらやる事あるだろう？」

「……いや神社って年始しか来なかったので正直何をすればって」

「魔理沙、本当にあの巫女にお賽銭なんて必要だと思ってるの？」

「いやあ、私はご機嫌になる方法を教えたただけだぜ？」

「それもそうだけど……」

「お賽銭ですね、分かりました」

拝殿前まで歩いて行ってお賽銭を用意する。

えっと……あまり出せないし無理もないように千円くらい……

「あつ……」

やべえ……ここの通貨持ってないじゃん。

特に小銭ならまだしも……お札なんざ入れても価値無いよな。

「……また今度つてことにしよう」

そうして後ろを向いて戻ろうとするが。

「……」

「宿舎の方から誰かが顔出して睨んでいる。

あれが……博麗の巫女……あれが!?

「……入れられるものはないんだ」

「お賽銭入れてくれたの?」

「拝殿から戻ってきた時に巫女さんに声をかけられた。

と言うか……こつちに恐ろしく速いスピードで掛けてきたし。」

「えっあの」

「幾ら!! 幾ら入れてくれたの!!」

「霊夢、彼が困ってるでしょう?」

そのままアリスさんが助け船に来てくれた……助かった。

「そっそうね、ごめんなさい。久々にお賽銭が入ったことに驚いちやって」

「そっそうですか……」

入れてないなんて言い辛いんだが。

「それで、幾ら……」

「霊夢、こいつが面白そうな情報持って来たから来たんだぜ？」

「え？何よ？」

「春に異変が起きるらしいぜ？」

「はあ？この前吸血鬼達が異変起こしたばかりじゃない。第一なんで知ってるのよ」

「未来の事を知っているらしいぜ」

「……能力？」

「正確には死んでこの時期に戻ったから知ったので、そう言う能力ですが」

「ふーん」

そう言うのと賽銭箱の方に向かう、あつまずい。

「で？どうすんだ霊夢？」

「どうもこうも、紅霧異変の時は私だったし魔理沙が解決すればいいんじゃないの？そもそもそう言う話は信用できてないし」

そう言いながら賽銭箱を漁る、そしてこっちに詰め寄ってくる。

「ちよつと入ってないじゃないの!!」

「すみません……幻想郷の通貨持ってなくて」

「……はあ？」

「彼は外の世界の人間なのよ」

「そんな事言われたって元の世界に戻す方法なんて知らないわよ」

「彼は今すぐ戻る気なんてないから」

「え？」

「まあ……その前にやらなきゃいけないことだらけですからね……」

「そう……なら戻りたい気持ちは？」

「なくは無いですけど……だんだん薄れて行ってますし……その前にやる事全部やってからですかね」

「結構わがままなのね……死に戻りなんてあるらしいのに」

「まあ、そうですね」

「要件は分かったわ、ただそれについては魔理沙に任せると思うけど」

「霊夢もやる気出せよな？」

「巫女は起こってから動くのよ」

「なんかそう聞いた気がします……」

「まあ、何か異変が起きていたら言っただい。未来の話は許さないけど」

「分かりました」

「それと……次はお賽銭持ってくる事。分かった？」

「分かりました、出来ればですけど」

「気概があるだけいいわ。それじゃあまたいずれ」

そう言って去っていく。

その姿は凄くカッコいい気がした。

「アイツあの後ゴロゴロするだけだぜ？」

前言撤回した。ダメな人だ。

「それじゃあどうすんだこれから？」

「伝える事伝えましたし、少し幻想郷を見てみたいなど」

「ダメだ」

「ダメよ」

一斉に却下された……なんでだ？

「まず、貴方はこの幻想郷について知らな過ぎるでしょ……そうするとしても少し勉強してからにしないさい」

「えー」

「我儘言うんじゃないの……寺子屋みたいにキツくはしないから」

「分かりました……」

「それにだ」

「え？まだ何かあるんですか？」

「春に何もなかったとかあるかもしれないしな。逃す気はないぜ？」

「……マジですか？」

「逃すわけないだろうよ」

「分かりました……それで俺はどうすれば……？」

「アリス、大丈夫か？」

「構わないわよ、まだ聞きたいことも多いし」

「と言うわけで異変解決まではアリスの家な」

「ええ……」

「文句あんのか？」

「無いですが……」

緊急事態の一昨日みたいではなく長期滞在になるのか。

何というか地霊殿と違って本当に一軒家でそこまで広いわけじゃ無いし……流石に緊張するんですがねえ。

ただ……拒否権も無いか。

「分かりました、迷惑じゃ無ければお願いします」

「迷惑では無いわ、上海も喜ぶだろうし」

「ほんと……分かっていますけど彼女完全に人形とは逸脱してますね……」

しかし幻想郷について学ぶか……魔法とかについても教わるのかな？

そしたらもしかして空飛べるようになるのか？

「少なくとも、終わっても常識を覚え切るまでは帰さないから」

「やっぱスパルタなんじゃ……?」

「スパルタ?」

「慧音が言ってたぜ鬼みたいだって」

「へえ……」

「違います!!違います!!」

そう言いながら逃げて行く。

それを追っかけてくる。

その姿は本当に鬼教官のように思えたが……

「ちゃんと覚えますから、しっかり教えてくださいね」

「分かってるわ、ただ今はそれとは別よ」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

そのまま階段付近まで追いかけられたのだった。

二十三話 魔法の才能く not talented boy.

それから、アリスさんの元で勉強を何度もした。

自分は幻想郷の知識を知らな過ぎた。

「弾幕勝負……それが幻想郷は普通なのか」

「案の定と言うか知らなかったのね」

「ああ。正直妖怪とかもいるし普通に殺し合うと思ってた」

「そんな物騒にしないようにこのスペルカードルールつてものが存在するのよ」

「大変なんですわねー」

「このルールのおかげでパワーバランスが保たれてるのだけどね」

「バランス？」

「人間と妖怪って力の差が歴然だもの」

「あの二人……そこまであるように思えないですけどね」

「それでも必要なのよ。この幻想郷では妖怪が異変を起こしやすく、人間が異変を解決しやすいように」

「そんなことが……？」

「だから貴方の言う通り、幻想郷では異変が頻繁に起きてもおかしくないのよ」

「そうだったんですね……」

「だから私は貴方の事を信じるし、魔理沙は信じない……そう言う事よ」

「異変と解決で幻想郷は大体回ってるんですね」

「一般人には殆ど関係無いんだけどね」

「そのせいで俺、人間の里で一度死んだんですけどね」

「……」

「つつ次の話をしましょう」

「ええそうね……」

今のは余計な一言だった

気を取り直さないと何というか気まずいな

「魔法……魔法を教えてくださいって話ですよね」

「構わないけど……人間には無理だと思うわ」

「覚えられたら良いんですけど」

「なんでそんなに覚えたいのか分からないけど……人間にとって明らかに異端な物でしょ？」

「そりやそうですけど……。」

それでも譲れない物がある。

「だってロマンですから！」

「そっそう……」

あれ？引かれてない？大丈夫かこれ。
やっぱりロマンは女子受け悪いんだろうか？

「いや、恐らくは無理だつて言ってるのにロマンだつて言われてどうしろつて言うのよ……」

「そこは……期待するとか？」

「……魔理沙でさえ相当苦労したのに？」

「……え？」

魔法を使う程度の能力だよな……？

それでも……その名の通りに至るまでは相当かかったのか……

「今だって箒無しでも空を飛べるらしいけど……見たことないけどね。箒があった方が飛びやすいから使ってるし、悪いわけじゃ無いんだけど……」

「なんか意外ですね」

「何がかしら？」

「彼女の言動とか泥棒って周りから言われている以上、それをこなすために最初からなんでもこなす天才だと思っていましたか」

「逆よ、魔理沙はああ見えて死ぬ程努力するタイプなの」

「……驚きです」

「そのおかげで魔法を使う程度の能力って言えるほど人間の中で最高クラスの魔法使いになったけどね」

「だったら俺も死ぬ程練習すれば……」

「やめておいた方がいいわよ」

「なんでか聞いていいですか？」

「まず一つに小野寺君、貴方そんな練習してる暇ないでしょ」

「無いかって言われると……」

「幻想郷を回るんでしょう？ならそうしてる暇なんてないわ」

「そうですね……」

片手間になんて言えるわけが無い。

文字通り死ぬ気でやらなきゃ無理なんだろうから。

「それに、貴方が死んだらまた1からやり直しよ？その度胸は貴方にあるの……？」

「え？やり直し……？」

「特に優れた魔法の才能とかを持っているわけでも無いしそう言ったタイプは努力が必要なもの。コツを覚えたところで……流石に普通の物とは違って魔法のコツは死んだらリセットされるわ」

「そうですか、そうですよね」

「ロマンって言いたくなるのかもしいけど……魔法使いを舐めないで」

「申し訳ありませんでした!!」

つい、全力で土下座をする。

出来たらいいな感覚だったがそりゃ本職には不快になるか、軽率だったな。

「分かればいいの」

「ただ、だったらこの冬はどうするか……」

やる事が全く無いと言うわけでは無いが、それでも大半を練習しようとしていた予定が潰される。

外に出ようにも、一人じゃ迷うだろうし。

「そう……ね。魔法の代わりにおまじないを一つ教えてあげるわ」

「なんででしょうか？」

おまじないは女子たちの間で流行ってたが興味なかったな……一般男子高校生として誘われたら反応したかもしれないけど。

それで、如何にも本格的な魔法使いだし、可愛い女の子だし信じるしか無いじゃ無いですか。

「これは願いを叶える人形。心を込めて作るとどんな願いでも叶うって聞くわ」

「人形……？」

アリスさんのいつもとは違う人形の雰囲気は驚く。

何というか木製？のようなロープで縛られてるような。

ただ……この男女2組の人形、外でも見たことあるような名前は知らないけど。

「と言うか作るって言いました？」

「それがどうかしたの？」

「え？作るんですか……？俺が……？」

「私が教えられるのって人形作りくらいなもの」

「いや……アリスさん色々と出来そうですが……料理とか」

「それはまあ……教わるのはむしろ私の方だしね」

「料理できない人間なんですけどね」

「後はテディベアだったり、外の人形には色々興味があるし」

「そう言えば必死に取り返しましたもんね」

作った後にテディベアが、置かれていた場所に帰って来ている。

魔理沙さんが返すのが珍しいって言ってたし、相当大事だったんだろうなと。

「それだけじゃ無いわ、お菓子作りだって教えてもらおうわよ」

「一回言ってますが再現の自信が無いですからね？」

「雰囲気と、元の料理を知ってる人がいるだけでも大違いよ」

「それはそうですけど、いやアリスさんに期待しましょうか」

「後はー後はー」

「何というか……楽しそうですねアリスさん」

「誰かとこうやってするのは久々だしね」

「あつごめんなさ……」

これあれだ、抉っちゃいけない傷を抉ったパターンだ……そうだよな……村人に怖がられている言つてたもん

「構わないわよ」

「いや……それでも」

「だって今は私と小野寺君で友達なもの」

「そりゃ……そうですけど」

「だからそうね……言葉に表すならば……もう何も怖く無い。」

「それダメなやつうううううううううううう」

あたふたしたり、人形を覚えて不器用ながらも作ったり、有り余ってる時間を使いながら料理も最低限作れるようになったりと俺の女子力が上がってきた気がする。外に戻ったらずやらないだろうけど。

そんなこんなで色々な仕事を覚えているうちに時は過ぎて行った。
ふと、ドアを開けて外を見る。

外では今の時間でもしんと雪が降り積もっていた。

「凄い雪ね」

「はい……もう4月なのに凄いですよね」

外では、俺にとって2度目の春雪異変が訪れていた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二十四話 二度目の春雪異変
return spring
ng winter.

「小野寺、ちよつといいか？」

「何の用ですか魔理沙さん？」

予想外の来客に驚いた。

冬になってからこの所ずっと来てなかったわけだったし。

暦では5月になってるし何かあったのかな？

「単刀直入に聞くが、心当たりあるか？」

「何のことですか……」

「今回の異変だよ」

「言った通り春に雪が降ってる時点でおかしいと思いますが……」

「そうじゃ無い、元凶とか知らないかって」

「流石に分からないです……。見当たらないんですか？」

「ああ、色んな場所探してるんだがな」

「ならば新しい場所とかなんですね……」

「分かんねえけどな。アリスは？」

「何の用よ」

「アリスはまあ心当たりなさそうだけどさ」

「……紅魔館は行ったの？」

「行ったけど、違うってグングニル投げられたぜ」

「大丈夫なんです？」

「まあな、それくらいなら」

「だったら他の場所探すしか無いでしょ」

「予想付くんですかねえ」

「何を目的としてるか、だけどさ」

「春が来ないって言うんだから、誰かが冬のままの方がいいってことじゃ無いんですか」

「？」

「……つてなるとまた湖の氷精辺りが何かやらかしたか？」

「そうとも限らないわよ」

「え？何かありますかアリスさん？」

「誰かが春度を集めているのかもしれない」

「春度……えつと春度つてなんですか？」

「春度は春度よ」

「だよな、と言うかその可能性を追ってなかったな」

「ええ……」

いや春度って何？俺達の世界でそんな言葉なかったんだけど。

「んじゃ、探してみるとするぜ、ありがとなアリス！」

そう言つて魔理沙さんは去つていったが……

「早く春が来て欲しいわね」

「そうですね……外出れないし」

特に俺の場合は雪と森のせいで外に出たらロクな未来にならないのが分かっている
ので自重する。

ちよつと手軽な遺体が出来上がりそうだしな……

「おかげさまで、人形作りの技術は何故か上がりましたけどね。」

「良かったじゃない」

「何かに使えるのかなこの技能……」

「少なくともコツとかは覚えたでしょうし別に今回じゃなくてもね」

「今回以外に使うところってあるんですか……？」

「例えば……次の周回とかで私に証明するとか？」

「確かにそう言ったことは出来そうですね……」

そう言ったことに使うのは本来の役目じゃ無い気がするが……

と言うかだ、アリスさんの人形と違って動かないから信じて貰えるかも不安ではある。

「ただまあ料理は役に立ちますね……。」

最近俺が料理すること増えたし……外に出ると迷う以上それしかすることがないってのも事実なんだけど、せめて人里なら……

「まあ、元気を出してね。貴方も外に出れないのは不便そうだけど」

「あれ？アリスさん外行くんです？」

「ええ、ちよつと確認したいことがあるから」

そう言つてアリスさんは外へと出ていく。

俺はこう言うところが手伝えないのが本当に……

「イチイチ、ナニウジウジシテンダヨ」

「いや、だって上海さんだって分かるで……あれ？服どうしました？」

明らかにどっかに引つ掛けたようで破けている。

ただ……大きな傷じやなさそうで良かった。

普通に修繕できそうだな

「あー、ナオシテクレ」

「かしこまりました」

この数ヶ月で慣れた裁縫でぱっぱと直す。

最初の頃はヘタクソで上海さんに何度も怒られたが……

最初の頃文言言いながらも色々実験体？みたいなものになってくれたし本当に口が悪いただけでいい子だよなど。

「ドウシタ？」

「あー、えつと……」

ただそれを言うのと怒り出すのは分かるので、言い出すわけにはいかない。

「グズグズスンナヨナ、ミットモナイ」

「すみません。この冬はいつ終わるかなって」

慌てて誤魔化すことにした。

「ワカルワケネーダロ」

「上海さん的にはどう思いますか？」

「ン、ソーダナ」

そう言つて上海さんは少しだけ悩んで。

「スグ、ジャーネーノカ？」

「すぐですか？」

「アア、アノマホーツカイガホンキダシタンダ」

「確かに魔理沙さんは解決すぐに出来そうですね」

ただ……さつきここに来て数日で終わるのもおかしいと思うんだけどな。

「マ、キタイシテロヨ」

「分かりました」

そんなに凄いものなのかと思いつつながら数日待つことになったのだった。

—————

——西行妖が満開になれば、私も蘇る

——そうね……数ヶ月とは言え貴方だって待っていてくれたものね

——吸血鬼が異変を起こしてもうすぐ秋になるわね……だったら次の春かしら？

——私だけじゃなくて貴方も……

——ごめんなさい。そう言えば、貴方はまだ死んでは無かったのよね……

——でも小野寺君……貴方は……

何か大事な夢を見ていた気がする。

「小野寺君、起きて」

「なんですか……朝ですら無さそうですが」

まだ夜がギリギリ明けたかくらいの時間に起こされる。

アリスさんが起こしてきたのもそう言えば初めてのような……

「(可愛い子に起こされるって外の世界じゃあり得なかつたよな)」

「ブーツとしてないでほら外」

慌てて外へと連れ出される。

こんな時間に本当になんなんだ……？

雪と森に加えてまだ若干暗さも残ってるから迷うぞ？

「……つてえ？」

目を擦ってまた地面を見る。

積もりに積もっていた雪が一切なくなっている。

それどころかいくつかの木が花を付けている。

「……春が来た!？」

「そうね。魔理沙か霊夢か分からないけど……やってくれたみたいね」

「……上海さんの予想がマジで当たるとは思わなかったんですけどね」

「上海と何かしたの？」

「上海さんにこの異変が後どのくらいで終わるかって話してたんですよ」

「それで、なんて言ってたの？」

「数日には終わるだろうって。本当に終わっちゃいましたねって」

「そうね、あの子の才能が恐ろしいかもしれないわ」

「はははは、ただ雪がなくなってこれで……やっと外に出れますね」

「ええ、そうね……」

あれ？ やっと森とかの地形を覚え始めることが出来て役に立ってるかって思ったけど。

アリスさん複雑そうな顔をしている？

「ん？そんな顔してどうしましたアリスさん？」

「いえ、もうそろそろ小野寺君ともお別れねって」

「あ……」

魔理沙さんに異変が起こるまではここにいろって言われて、外に出れなくなっ
て居させて貰ったが……元々は今生は幻想郷を回る予定だったしな。

そっか、雪が消えて出られるようになったからもうそろそろ出発し始めなきやなら
ない。

そう思うと、寂しく感じるのだった。

to be continued

二十五話 森を出る魔法使い
with the wi
tch.

「それじゃあ、忘れ物はない？」

「はい……と言うかここに来る時に大したもの持ってませんでしたし」

数ヶ月前、この森に来た時は本当に食糧すら無かった状態だ。

本当に持っていくものなんて無いに等しいだろう。

「何か持ってく？」

「いや、流石に何か持ってくつてもなあ……」

「じゃあ人形だけにする？」

「いや……流石に人形持つてくのも……見栄えはいいんですけど。流石に男だと周りの目が」

「だったら他に何か欲しいものとかないの？」

「欲しいものと言われましてもね……」

「この数ヶ月の間お世話になったしなんだっていいのよ？」

「と言つても欲しいものなあ……」

物は持つのもかさむし……人間の里で買い足すと思うし

それよりかは……

「うーん、アリス？」

「え？」

「いやうん……これは言い方が悪いな」

「私が欲しいってこと!？」

「ああごめんなさい、やつば言い方が悪かった!!」

そうだよな……これダメなやつじゃん。

「え？」

「いやあのですね、実はですね……この言葉についてはなんです……」

弁明しようと早口になる。恩人になんてこと言ってたの。

「無理だつてことは分かっていますが、この旅……幻想郷を回ったことはなくて不安な自分には誰か一緒にいてくれたらと甘えたわけです」

「ああ、旅の道連れが欲しかったってわけね……」

「悪く言えばそうです」

「紛らわしいのだけど」

「ごめんなさい」

今のは100%俺が悪い。

と言うかアリスさんが無理なの分かっているのに調子乗ってるんじゃないぞと。

「……とりあえず何も無しでいいのね」

「はい……本当に申し訳ありませんでした」

「それじゃあ、森を抜けるから付いてきて」

アリスさんの後を追って森を抜けていくのであった。

「上海さんは結局来なかったですね」

「多分、上海は貴方になんて言えばいいのかわからなかったのよ」

「そんなもんなんですかね？」

嫌われてないならいいけど……アリスさんがそう言った以上は信じるとしようそんなこと思っていないって。

「森の中、ちゃんと地図を覚えておいてね」

「……流石にキツすぎないでしょうか？」

森の地形覚えるとか難儀すぎないか……？

馬鹿ではないけどどこもかしこも似たようにしか思えないんだが。

「覚えてないと不都合生じるのよ」

「何かあるんです……？」

「もううちに来れないわよ？」

「あー……」

「万が一死んだ時もう辿り着けなくなるの不都合に思えたけど」

「死ぬ気で覚えます!!」

そう言いながら必死に覚えようとしてみた。

と言うか覚えきれないので何往復かして貰ってやっと覚えることが出来た。

「もう大丈夫そう?」

「大丈夫だと思います」

「それじゃあ、これでお別れね」

「そうですね……本当に数ヶ月有り難うございました」

「外の世界から来た貴方の話を沢山聞けて良かったわ」

「はい……俺もそう思います」

「何暗い顔してるのよ」

「いやあ……しんどいなって」

何処に行けばいいのかとかもあるが、不安がまだまだある。

「しっかし本当に色々とおったわね」

「ありましたね……思い出しても悪い記憶がないのは恐ろしいんですが……」

アリスさんの家に泊まつてる間文句も無かったし、聞くこともなかった。勿論喧嘩もない落ち着いた生活だった。

……相手に無理させてた可能性はゼロじゃないけどさ。

「私も上海も、これだけ誰かと仲良くしてたのは久々だしね」

「魔理沙さんや霊夢さんは……？」

「知り合いってだけよ……私は……いえこれはやめておきましょうか」

「まあ、仲良い人は一人でも多い方がいいですからね」

「また、いつでもいらっしやい。歓迎するわ」

「多分、こうやって過ごしたアリスさんとはもう会えないんですけどね」

多分この世界を回る以上は死ぬだろうしな。

大まかな地図は見せてもらったけど危険そうな場所ばかりな気がするんですけど……と言うか三途の川なかったっけ!?

「……」

「どうしました？アリスさん？」

「ちよつとだけ待ってて貰っていい？渡したい物があつたの忘れてたわ」

「え……分かりました」

そう言つてアリスさんは森の方に戻つて行く。

地形の確認ついでに俺も戻つた方がいいんじゃないか？とは思つたが残ることにした。

「……あー」

ただ問題が一つ発生した。

これ以上留まると躊躇つてしまいそうで。

この楽しかった数ヶ月を思い出して旅に出られなくなつちやうんじゃないかって。

「……アリスさんには悪いけど」

決心が鈍る前に……行かないと。

じゃないと俺はずつと踏み出せないんじゃないか……？

【嘘つき】

「っ……っ」

またあの言葉を思い出す……そっかそうだよな。

また約束を放って行っちゃならないって。

そう思って待つことにした。

「……」

数十分であるはずが凄く長く感じる。

まだまだアリスさんに聞きたいことや教わりたいことがあるなって。

徐々に足が重くなって行く。

「……ダメだダメだ」

異変が起こる可能性もある、その異変を探しておきたいのもある。

たったちっぽけな人間だからこそ死んでも記憶しなきやと。

「大丈夫!？」

「うえっ!?!アリスさん」

「何よ……?？」

「いやちよつと……ダウンーになってまして」

「……ちよつと反応に困るわね」

「ごめんなさい」

そう言いながらアリスさんの方を見る。

あれ?何も持っていないようだけど。

「何か渡す物があつたんじゃ……?」

「プレゼントは私、と言うのが外の世界では流行つてゐるって聞いたけど」

「は?」

「冗談よ。プレゼントではないわ」

「いやいや、そう言うことじゃなくてどう言うことなんです?」

「混乱してるのですが」

「私もその旅に付いて行くつてこと、上海にその事伝えてたのよ」

「大丈夫なんですか? 森の方は」

「上海がいるし大丈夫でしょう、それに……」

それについて……まさか俺がついて来て欲しいって言ったから無理させちゃったんじゃない？

本当に申し訳ないって可能性ががが。

「私もね、この幻想郷を少し回ってみたいって思ってたのよ」

「魔法使いだし結構あちこち言ってるのかと思いましたが」

少なくともあの森だけじゃ、魔法使いってなれるか不安だし

「生まれ育った場所が特殊だったのよ」

「そうですか、予想は付かないですけど」

「それより、私も同行していいかしら？」

「喜んで。むしろ願ったり叶ったりです」

「良かった……」

「良かったって、むしろこちらが喜ばしいばかりなんですが？」

「っ……あつああ、こっちの事情だから」

もしかして、久々に仲良くって言ってたしアリスさんも寂しかった？

いや……恩人に対して偏見で見るのはまずいか。

「一人より二人のがいいのは当たり前ですし、色々と回っていきましようか！」

「そうね、エスコートお願いね？」

「いや、俺ほぼ場所わかんないんですけど!？」

正直な話一人では少し不安だった。

だからこそアリスさんが居るだけでも凄い安心するし、なんだかんだ聞きたかったこととかまだあつたしな。

「それじゃあ行きましようか！」

「ええ」

この後すぐに地底で異変が起きるかもしれない、ただそれは既に魔理沙さん達に伝えてるし他を回ろう。

この世界で生きて行く以上、もつとこの世界を知るためにも。

next episodes

く妖怪の山編く

二十六話 鴉天狗推参!! く b a d r e p o r t e r .

結局何処に行こうかと、地図を広げて目的地を決める。

一緒に旅をすると思気込んだところだが、目的地が決まっていない。

「いっつてどうですか？」

太陽の畑って言うし気になりはする。

異変とはほとんど関係なさそうだが。

「流石にそこはダメよ」

「マジですか？」

「そこは命の保証ができないから」

「安全そうなんです、アウトなんですか?」

「ええ、ちよつと少なくとも貴方じゃ話し合うのが無理な相手がいるわ」

「では紅魔館……。確か霊夢さん達が紅霧異変の時に行った場所ですよね?」

「……冒険すると言う意味では悪くはないけど、結構リスクを伴うわ」

「ここも不味いですか?」

「太陽の畑よりはマシだと思うけど……異変前よりは人間に対してすこーすこーしだけマシになったみたいだし」

「そのマシってのはどのくらいでしょうか……?」

「人間は玩具だと思ってるし平気で壊すわよ。ただ……気に入られれば生きられそうだし」

「いや……危険過ぎませんか？」

「私が居るから殺されることは無いと思うけど……。追い出されることはあるかもしれないわ」

「なら気に入って貰えるように動けばいいのかな……。なら紅魔館行ってみます？ 気に入ることもあるし」

「気になることって？」

「異変関連です、少しでも情報を得られるかなと」

「やめといた方がいいわ」

「なんでです?」

良い案だと思ったんだけどな。

ダメなら仕方ないがそんなダメだったか?

「紅魔館の主、レミリア・スカーレットは異変を起こして霊夢にしばかれた身よ……。異変については間違いなく不機嫌になると思うわ」

「確かに……自分の失敗談を語ってくれてダメそうですね」

候補ではあるけど……ここで良いのかと不安でもある。

「それならここは如何ですか?」

そうやって地図を指差された場所を見る。

その場所は……

「妖怪の山？」

「ええ、妖怪の山です」

「あそこは人間どころか余所者はキツいんじゃないの？」

「いやあ、それがですねえ……諸事情がありましてアリスさんがいれば受け入れてくれると思います」

あれ？なんかおかしく無いか？

「諸事情って……？」

「山の娯楽不足ですね。ですのでアリスさんの力を借りられればとも思ってるわけですが」

「それは構わないけど……私も妖怪の山って気になってたし」

「それなら良かったです」

「……」

「おや? どうしました小野寺蓮司さん。」

「あのー……どちら様でしょうか?」

さつき入ってきたタイミングでは違和感に気付かなかったが……流石に一人増えたらある程度すれば分かるわ……誰この子?

と云うかアリスさん今更ハツとしないでください……色々と悲しいです。

「あやややや、これは申し遅れました。私鴉天狗の射命丸文と申します」

「天狗……?」

「私は鴉天狗なので小野寺さんの思ってる天狗とは違うかと」

違うのか……確かに赤かったり鼻が長くないから違和感を持ったが。

「と言うか名乗った記憶は無いんですが……」

「それでも私、新聞記者をやっておりますである程度の情報は入ってきてます」

「幻想郷に新聞ってあったのか……」

いやよく考えたら核シエルターとかもあつたしおかしくないのか？

「何の用よ」

「おや？アリスさん不機嫌ですね。」

「正直、貴女がやらかしに来たようにしか思えないもの」

「やらかしに来たとは酷いですね」

「え?と言うかやらかしってなんですか?」

何?新聞って人が見るものなのにそんな大変なことやってるのか?

「この鴉天狗は面白そうなことを自分の主観で面白おかしく書くから風評被害が凄いのよ」

「うわあ……」

それは不味いしやつちやならないことなのでは?

「心外な……!!そもそも新聞つてのは主観はどうしても入るものです。じゃないと写真だけで良いになってしまうじゃ無いですか!!」

いや……それで良いのでは？ ニュースとかみたいに関心を持って、真実をそのまま映すって。

「ちなみにだけど、私たちに接触してきたってことは何を書くつもりだったの」

「えー」

「えーじゃないの、答えなさい」

「天才人形師アリス・マーガトロイドに男の影ありですね」

「やっぱ風評被害じゃないの」

「本当ですか？」

「本当よ」

「えー、面白そうな記事だったのだけど残念。ですが妖怪の山でその二人の真相を暴いて見せます!」

「ねえ……本当に行かないやダメ?」

「申し訳ありませんが、妖怪の山気になっていきますし……アリスさんがいないと今後も妖怪の山は行くのが厳しいと思うので……」

「はあ……分かったわよ。このまま太陽の畑とか行かれても困るしね」

「ありがとうございます。」

「来ていただけるんですね。面白いことが起きそうで今はワクワクが止まりません」

「ああそうだ、一つだけ聞いて良いかしら?」

「喜んで」

「春雪異変、起こしたの貴女達かしら？」

「いえ、断じて違います」

「そう、分かったわ」

「アリスさん？」

「異変を探しているのに、異変が起きた場所では意味ないでしょう？」

「そう言われると……確かにそうかもしれませんが」

でもただピンと来ない。

今度の異変は何処からか分からないしな。

「前回の異変は白玉楼と言う、冥界からです」

「そっか冥界……冥界!？」

「相変わらず情報収集は早いわね」

アリスさんも順応してるしすげえなっとは思った。

俺冥界言われたってピンと来ないし。

冥界の幽霊達が、春を集めてるのって言われたって驚くな。

第一冥界って歩いて行けるとか思えるが解決に行ける位置にあるのか……落ち着かないな。

「あつ小野寺さん」

「なんででしょう？」

「山へ来た際にですが、一人では山であまり動かないように」

「そんな……」

「残念ながら受け入れてくれる妖怪達だけではないので」

「そりゃきついな……」

「ええ、排除しにかかると思うのでご注意ください」

「分かった注意する」

「本当に妖怪たちにとって異端なものは即排除したがるらしいので」

「仲間以外はみんな敵、それが妖怪の山でしょうしね」

「だんだん不安に思えてきたんですが」

「そればかりは願いましょう」

「そうですね……」

どうか、妖怪の山でも少し仲良く出来るといいなっと思う。

厳しいかもしれないけど100人が100人は流石に無いと……思いたい。

そう願いなから3人は妖怪の山へと向かった。

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

二十七話 彼女達の住処く mountain of specter.

妖怪の山、そこは一見見た感じは普通の山と違いがない。

もう夏とも言える季節の中、山は緑に染まり自然が生い茂っている。

付近まで辿り着けば、その壮大きさに驚かされた。

「気を付けて下さいね。まだ麓にすら着いてないとはいえここからは妖怪の山ですか
ら」

「え？ 行つた瞬間余所者来るなになるんですか？」

「いえ流石に河童も天狗もここまでは降りてこないので問題はありませんが……」

「そういえば、山って私達の住処が無くないかしら？」

「麓付近の集落に空き家があると思うので、其方を使ってください」

「空いてればいいのだけど」

「二軒はあると思いますが二軒はどうでしょうねえ」

二軒は厳しいって言っても、空いてくれなきゃ困る……
流石にここらで野宿する気はないし。

「二軒空いていれば十分じゃない？」

「え？」

「何よ、今更気にしているの？」

「いや……森では他に家が無かったから仕方ないつてのもありましたが……普通に二軒でいいのではと思います。何より貸家な以上狭いでしようし」

正直都市部みたいに1LDK酷ければ1DKとかすらなんじやないかって思う。それだと流石にアリスさんの家に比べてまずすぎるでしょ……

「ダメなの……?」

「いやなんでむしろそうなるんです……?」

「上海どころか皆もないし……」

「寂しいんですか……?」

返事の代わりに俯いた……

確かに人形多いなとは思ったが、なるほど……

「本当にこれ記事がガセなんです？」

「俺の胃が痛くなるのでガセにしておいてください」

「言い方がもう完全にガセじゃない気がするんですけど!？」

まあいいですと切り替える。

このまま続いてたら面倒くさかったし助かった。

「山のルールは沢山ありますが、まず集落付近に着く前は一つだけ」

「なんででしょう?」

「野宿禁止です」

「そりゃ……危険でしょうし……何より今家借りましたしね」

「それは緊急事態であっても。小野寺さんは絶対に麓まで戻ってきてください」

「山が迷いやすいからか？」

「いえ……ここが自然な山だからです」

「自然ってそりやそうでしょうと……」

「人間の手が加わっていない本物の生きた山。自然な山だからこそ……人は耐えきれず魅入ってしまうのです」

「なっ……!?!」

人が山に魅入るなんて聞いたことがない。

と言うか生きた山って色々と理解が追いつかないんだが……

「気のせい、ですよね？」

「やはりと言うか……予想通りと言うか……外の世界では入っちゃダメな山とかなかったんですか？」

「いや……迷うからとか危険だから入るなとかはありましたが……何処の山も誰かしらが登っていましたね」

「ですよね……でしょうね……」

「あの、射命丸さん？」

「だからこの山の妖怪は人に入られることを嫌うのです。人間が山を荒らすから。人間が歩むことが出来るものへと作り替えるから」

「……」

おちやらけた態度とは違う真面目な表情に変わり息を飲む。

自分達の住処な以上守りたい気持ちには分からなくない。

「今の妖怪の山はそれこそその名の通り妖怪にとつて天国なのよ。だからそれを作り替えようとする人間は嫌われるわ」

「あの射命丸さん口調、口調！」

「あつとごめんなさい、新聞記者な以上口調には気を付けているのですがつい素が出てしまいました」

「そうですか……」

なんか普段丁寧に振る舞ってるけど素がつて似てるような気がする……気にしたところでも何もないが。

「と言うか、それなら俺もこの山に入るのまずいんじゃない？」

「いえ……貴方一人に山を変える力は無いでしょう？」

「そりや無いですが……」

あるわけがない。工器具も人手もないのに出来た方がおかしい。

「だから良いんです。むしろ都合良さそうですし」

「都合良いって何……？」

「それは言いませんけど」

「そうですか……」

正直嫌な予感がするが……まあいいやもう何も変わらんだろうし。

「最後に、山を魅入ってしまうとどうなってしまうんです？」

「簡単です、山になろうとしてしまうのです」

「それは……朽ち果てると？」

山と一体化してしまう、そんな感じなのだろうか？

それならば不味いけど。

「勿論その可能性もあります。ただ普通は山の怪になるでしょうと」

「……山の怪ですか？」

「ええ、天狗であつたり河童であつたり……果てまた見知らぬ妖怪になる事もあります」

「……分かりました、しっかりと麓まで戻ります」

「一日二日なら大丈夫かも知れない……ただその大丈夫はあくまでかもと言うわけで

す」

「小野寺君、私はやめた方がいいって言うけど……」

「いや……行きます」

「そう……やっぱり変えないのね」

「はい、アリスさんを頼ることになりますけどね……」

「構わないわ。そのために来たのだもの」

今後もしアリスさんが居なければ妖怪の山には入れないだろうし、そもそもアリスさんが着いてきてくれるとは思えない。

だからどれだけ危険であつても今しかないのだ。

「さて！着きましたよー！」

確かに集落がある、妖怪の山に近いのによく住めるなとは思う。

俺も泊めさせてもらうことになるんだけどさ……数日でも怖い気がするのになんと住んでるし。

「では私が入るわけにはいかないので一旦これで！明日麓で会いましょう！」

「ありがとうございます、射命丸さん」

そうして一度射命丸さんと別れる。

アリスさんはまだ見た目は大丈夫だけど射命丸さんは完全に見た目が天狗だししうがない。

「それじゃあ行きましょうか」

「ええ」

集落へと足を進めた。

「どうしたんだい？わざわざこの場所まで」

「少し用がありましたね」

「ああ、アンタ達も豊穰神様への祈願かい？そうじゃ無くとも歓迎するが」

豊穰神？知らないって素振りもまずいだろうし一応答えは濁しておこう。

妖怪達に用があるとか言い出すのはあの時みたいに怖いし。

「貸家ってありませんか？」

「あるが暫く人が来ないから汚れている……。そうだなあ……。今後も使う人いるかどうか怪しいし掃除とか管理とかしつかりしてくれるならタダでいいよ」

「本当ですか!？」

「2軒でいいかい？元から貸すための家だしそこまで広くはないんだけどさ」

「そうですね……二軒空いてるなら……。」

後ろを向く、フルフルしている。

「……一軒で大きい家無いですかね？」

「貸家には無いな悪いが」

「……」

後ろを向く、フルフルしている。

「……一軒でお願いします」

「いいのかい？」

「はい……ダイジョウブデス」

「恋人だったかい？なら悪いことを」

「ソウイウノジャンナインデ」

「……気にしない事にしよう」

「ありがとうございます」

「それじゃあ鍵だ」

鍵を貰って家へと向かった。

開けてみると本当に1部屋分くらいしか無いが……その分掃除が行き届いている……お金普通に取りられそうなくらいだがこれ。

「一部屋だけだけど、必要な設備は整っているわね」

「むしろ無かった方が良かったのまであるなあ……」

風呂とかは部屋についていずに温泉とかあれば良かったんだが……付いてますかー
そうですかー。

まあ外出てればいいか……しんどいけど。

「急いで仲間達縫えばいいんじゃないですか？」

「それは山で必要って言ってたし、何より借家で持ち帰れない量を作るのも……」

「常識あるなら2家にしません？」

「……ダメ？」

「……分かりましたよ」

結局押し切られてしまった。

山は大変だろうし山登りとかあるのに俺は夜寝れるのだろうか？

「明日から妖怪の山に入ります」

「そうね、トラブルを聞いたり……は私しか出来ないけど、地形を把握したりとかね」

自分が異変を解決する事にはまずならないが、何処で起きたかとかは重要だし。
なによりも怖くてもちやんとこの目で見たいしな。

「地底も仲が最初は良く無かったけど……それどころじゃないんだろ。人間受け入れられないみたいだし」

豊穰神や妖怪の山とか気になる事だらけな場所だ……

だからこそ細部まで調べないといけない。

「(そして万が一異変があつたら)」

自分じゃ何も出来ない分、解決できるようにすることだな……

「どうしたの？」

「アリスさん……いえ大丈夫です」

外が暗くはなっていたが……そうだ、アリスさんがいる……一人じゃないんだ。
あの時みたいに孤独じゃないんだ。

「うん頑張ろう」

神様の事もっと知る。

異変のこともっと知る。この幻想郷でただ無駄死にするような人間にならないようにと意気込んだのであった。

t |
o |
b |
e |
c |
o |
n |
t |
i |
n |
u |
e |
d |

二十八話 秋を待つ姉妹 *little god.*

翌朝、事情を話して山の方へと向かう。

驚かれると思ったが……ああやっぱりみたいなき感じだった。

疑問には思っていた、が豊穰神様によるしくなつて話を聞いて昨日話していた神様達かと理解する。

「神様つて幻想郷では多いんですか？」

「そうね……、貴方達の世界よりは……ちよつと待つてね貴方達の世界も八百万だったかしら？」

「そう言えばそうですけど……そうでは無くて目に見えて私が神様だ！つて本物の神様は居ないので」

「そうね……そう考えると多いのかもしれないわね」

「身近な神様っていいのか悪いのか分からないですが……。」

身近な神様っていい神様よりも好き勝手やるようなイメージあるし……俺が現れたんだから色々やれつてみたいな。

空さんに必要以上に力を与えたのも神様だっけか。

「会ってみれば分かるわよ」

「気軽に会っていいのか不安なんですけどね……」

「会わないとどうしようもないでしょう？ 麓な以上会わないと進めないし」

「お土産とか必要ですかね？」

「いえ、必要なら集落の人たちが言うから大丈夫でしょう」

「そう言われればそうですね、分かりました」

納得しつつ麓へと辿り着いた。

射命丸さんが来てるかと思えば来ていない。

「♪」

「ん？」

何らかの歌声がしたようでその方向へと向かってみる。

見れば少女が歌っていた。

「こんな所に少女一人じゃ危ないんじゃない？」

なんだか美味しそうな匂いがするんだが……もしかして少女何かを焼いてる？

「そうねえ……確かにここだと山から来た妖怪とか近くに住む妖怪とかに食べられそうだけど……」

「ちよつと注意しにいつて来ます!!」

「ただそれなのにいる場合つて大抵はただの少女じゃ無くて……あら?」

アリスの言葉を途中まで聞き駆け寄る。

「ちよつと、危ないよ」

「いきなり何の用?と言うか危ないつてわけ分からないんですけど」

「ああ、それはそうだなすまない……。ただ山の付近に少女一人じゃ危ないでしょうが」

「ここから出て行けつて言いたいわけ?」

「出て行けって言うか……ああもしかして集落の子だった？だとしても一人でここ来ちゃ危ないと思うんだけど」

「……」

よく見れば少女は裸足なんだが……

捨てられたとかそう言った感じ？

「もし、集落でなんかあったって言うなら相談にだけでも乗るけど……」

「……態度は態度とはいえ純粋な心配からのようだから許すけど、だいぶ不敬だからね？」

「え？」

「その人……多分神よ」

追いついて来たアリスさんがそう告げる。

「…………え？」

いやいや、多少の違いはあるものの見た目人間と変わらないじゃん……
神様もこんな似ているものなの？

「豊穡の神と言えば分かるかしら？」

「…………集落で言われてましたね」

「秋になれば集落だったり人間の里へ行ったりするのだけど…………今は夏だしね」

明らかに神様を騙ったやべー奴とか言う雰囲気は全く無くて…………本当に神様なんだ
ろうなつて。

…………俺まズくない？

「かかかか……神様とはいざ知らず申し訳ありませんでした」

「神様であろうと無かろうとふざけた態度だったら許さなかったけど、さっきのは純粹に私のこと心配してくれたみたいだからいいわよ」

「……なんとか済んだのかな」

「それよりも……人間が来るなんて久しぶりね、五穀豊穡の時期だから頼みに来た感じかしらっ？」

「いえ……すみませんがそうではないですが……」

「確か豊穡祭って収穫時期にやるもんじゃ無かったっけ？」

「そう……豊穡祈願って本来は収穫前にするはずなのに毎年誰も来ないのよね……」

「前なんです？」

「獲りきってから何を祈るのよ」

「ありがとうございます、みたいなですかね……？」

「豊穰神としては豊作にしてくださいみたいな時期に来ずに戸惑っているのだけどね」

「神様も色々な意味で大変なんですネ……」

「姉に比べればマシなんだけどね」

「姉が……いるんですか？」

「神様でも姉妹や兄弟とかは無い話では無いが意外といえは意外だ。

この子しか見てなかったし。

「私達の季節は秋だって言ってる今はただらだらしてるわ……暑いしって」

「……そうですか」

博麗の巫女さんとかがだらだらしているのって神様がだらだらしているからなのは……？

「起こしてくるわね」

「いやわざわざ寝ている方を起こさなくても……」

「お客様が来ているのに寝ている姉が悪いのだから」

そうしてフツと何処かに行ったかと思うと、タンコブを付けた神様と思われる方がもう一人来た。

「なによろ穰子、まだ六月で夏真っ盛りじゃないの」

「お客様が来てるんだってば、シャキツとして」

「お客様は神様って言ったって、私達の方が神様なのよ」

「ほらいいから」

イヤイヤとしている姉を無視して話を進める。

「改めて自己紹介するわ。さっきもしてなかったしね。私は秋穰子。豊穰の神よ」

「秋静葉、紅葉の神よ」

姉の方は少々不満げに答える。

と言うかそもそも対話出来る時点で中々に人間に対して優しいのだろうか。

「小野寺蓮司です、人間です。ここに来ましたが本当に人間です」

「アリス・マーガトロイドよ」

「げ……魔界の神の……」

「余計な事は言わなくていいわ」

「でも……流石にこれは……」

「私達は妖怪の山へ遠足に来たみたいなものだから何かするわけじゃないわ」

神様相手に対等に話してる？

と言うかさつき妹さんの方から何やらヤバイワードが聞こえた気がするが気のせいかな……？と言うかなんて言ったのかあまり分かってないし。

「遠足って……人間じゃ無理だと思わよ？」

「そうね、でも必要だからやるの」

「……あまり人間に限度を超えた無茶はして欲しくないのだけど」

「話ももつとしてみたい事はあるけど、今は山の鴉天狗にお呼ばれしているから行くわね」

「待った」

「まだ何か用があるのかしら？」

「魔法使いの戯れに付き合える程の人間だとは思えないわ」

「なんか酷い事言われてない？」

「でも事実かあ……そっかあ……そうだよなあ……」

「だったら、少しテストをさせて貰うわね」

「時間がないのだけど……」

「だーめ、神の忠告は守った方がいいわ」

「……え？俺何させられるんです？」

「ちよつとした無理難題お遊びよ」

t o b e c o n t i n u e d

二十九話 神様の無理難題～god☒s play.

言われた事をこなすのはだいぶ無理難題な気もするが、弾幕ごっこことか言われるよりはマシだと思った。

ただどうしたものかと頭を抱える。

「それじゃあ頑張ってね」

「……」

遊びたかつたんじゃないのか、と言うくらいに単純なゲーム。

外の世界では宝探しと呼ばれたものだが……何故やらされているのか。

姉妹の言い分としては私達の欲しい物を持ってきてっつてらしいが……それがどっかに埋まってるって言ってたしな。

「見つけたら通すからそれまではダメよ」

「いや……見つからなくても無理でも行く予定ではありませんが」

「ダメ」

「ダメなのは分かっていますけどさあ……」

だからってこれどうしろって言うんだよ。

そう思っているがカウントダウンを始めてしまい、仕方なくスコップを持つ。

「アリスさんも頭抱えてるよ……」

正直今日から行く気だったし何してんだって話だもんなこれ……

先行ってていいとは言ったけど……残ってくれてはいるのはありがたい……手伝えないのは分かるけど居てくれるだけでも嬉しい。

「ただ……なんだって話だけだな」

何かと聞いても答えてくれない……埋まってるって言ったけどそれ片っ端から探せと？

「せめてどの辺とか……？」

「さあ、何処かしらね？」

知ってた、どうせ教えてくれないんだって。

諦めて土を掘り始める。

石が出て来た……が流石に石を渡したら怒られるだろう。

「何処か埋まってるなら分かるはずなんですけどね……」

「ここら辺が掘り返した跡がない……ならここら辺じゃないのか？」

ただ妖怪の山の方かと向かおうとすると怒られるし。

「まだー？」

「まだ掘り始めたばかりなんですけど!？」

「えー、飽きたんだけど」

「マジですか……?？」

「いや飽きてはないけど秋姉妹として言わなくちゃとね」

「……」

しょうもないギャグにも付き合う気はなく黙々と掘り進める。
二人共文句言ってるけど今それどころじゃ無いんで……

「ん……………」

何か光る物がと……………これって宝石だろうか？

生憎宝石とかには詳しく無いが……………これなら大丈夫だろうか？

「あの穰子様……………」

「様付けじゃなくていいわよ、どうせ信徒じゃないんだし」

「それでは穰子さん、これはどうでしょうか？」

「何？」

そう言つて宝石らしき物を見せる。

宝探しながら間違いないか当たりの品だと思ふが。

「ダメよ」

「なんで!？」

ええ? お宝探してこう言ったものを探すんじゃないのか……? 違うの。

「私達が求めてるのはこう言う物じゃないわ……ちゃんとしてちょうだい」

「だからどう言う物なんですかって!？」

「頑張りなさい」

「ぐぬぬ……」

これよく気が付いたらケチ付ければ永久にお宝じゃないって出来るんじゃない? それだったら俺、確実に神様の玩具なんじゃ……? ?

「……」

勝てないとは思うけど……このまま玩具扱いされてた所で未来が無いか？
そうなるくらいなら……

「つと風が……」

突風が吹いて尻餅を付く。

アリスさんに心配されるが慌てて立ち上がる。

「……あれ？」

よろけて一瞬だけ地面から目を逸らしたが、よく見ればなんか埋まっている？
さつきまであつたつけ？

「よいしょつと……」

慌ててそれを引っこ抜くと……

「…………芋？」

あれ…………今夏だよな？

なんでこの時期にこんな出来の良い芋があるんだ？

分からないけど…………とりあえずこれはアリだろうか？

「あの穰子さん…………？」

「宝石とか持って来ても認めないわよ？」

「何故か薩摩芋が出てきました」

「本当？…………。」

穰子さんに芋を渡した、それをマジマジと見ている。

「かなり質の良い物だけど……本当になんで埋まっているの？」

「申し訳ありませんが……流石に俺だって分からないですよ」

「まあ……いいわ。秋を象徴とする薩摩芋……これを奉納品として受け取るわね」

「えっやった……。やった!!」

この一日中何をしていたんだと思うのもあるが、達成感もあり歓喜する。
豊穰の神の名の通りにそう言った物を探せつてことだったのだろうか？

「小野寺君、終わったで良いかしら？」

「大丈夫みたいです……今日から……は遅いですから明日から登りましょう」

射命丸さんが待つてたはずが申し訳ない事をしてしまった。

ただ……流石に許してくれないかなあ。

「貴方達二人に神のご加護があります様に」

「加護などもやっているんですね」

「やってないけど、神様だものいいじゃ無いの」

「実際に神様に言われると嬉しすぎるんですけどね」

「本当は人を山に入れるのは不安なのだけど……生きて戻ってね」

「分かりました！」

そうして俺達は一度集落へと戻った。

「大分遅いお帰りですね」

「射命丸さん!？」

なんで家の中にいるのかと言う最大の疑問があるが……ひとまずそれは置いておいて。

「集落の中にいて大丈夫なんですか？」

「あまりやりたくは無いです、バレないようにすれば良いだけです」

「凄いですね……」

少なくとも人にバレないように建物の中に入るのは無理だと思う。

「それより酷くないですか？今日待っていたのに」

「いえ……事情があるんですよ」

「まあ……分かってはいるんですけどね」

「え……？流石は鴉天狗という所でしょうか？」

「分かってないんですか？」

「え？」

何かあったのだろうか？

飛んでたような姿は見えなかったが……

「季節にそぐわないものがありましたよね？」

「あー……」

やっとそれで気付いた、射命丸さんが助けてくれていたのか。そうじゃなきゃ確かにあったらおかしいものでもあったけど。

「あの姉妹が喜ぶものって分かっていたので」

「わざわざ貴重でしように……ありがとうございます」

「こつちが誘った身ですしね。それに貴方がいないとアリスさんが山に登ってくれないので」

「あくまで、小野寺君が今回のメインだしね」

「だからそこまで気にしていただかないで大丈夫ですよ」

「感謝だけは忘れないようにします」

「ついでに山から降りることも忘れないでくださいってことで」

「念を押しますね……」

「射命丸さんも山の妖怪だしそこまで気にしないとだったが。」

「自分の故郷で人間が失踪とか気分が悪いので」

「あー……」

「確かに地元とかは特殊な思い入れとかはあるものだし分かるわ。」

「流石に明日遅れたら私も怒るかもしれないのでご注意を」

「気を付けます……」

「それではまた明日！」

そうして窓から猛スピードで飛ばたいて行く。
そう言えばどうやって入ったんだろうか……

「まあ明日でいいかな」

そうして席に着くと疲れが一気に来る……一日中力仕事だったしな。

「お疲れ様」

「アリスさんもずっと見ていただいてありがとうございます」

「構わないわそのくらい」

本当に一々こちらに気遣ってもらって有り難いばかりだ。

「でも明日が本番だからね」

「分かっています」

妖怪の山……神でさえ入る事を止めに来た。

そこには何があるのだろうか。

不安も期待もそれ以外の感情も様々抱いて明日に備えるのであった。

t o b e c o n t i n u e d

三十話 人を退けし山～lost child climbing.

姉妹の神様に見送られながら山を登る。

正直神様達も危険と言ってるし本当にこの山はヤバいのだろうけど今更止まらない。

「いやしかし……、これを登るのかあ」

「小野寺さん、早くして下さいな」

「飛べる人たちはいいつすよねえ」

「いや、それは分かかってましたよね？」

「分かっていますけどさ」

二人は空を飛ぶ中追いかける様に山を登る。

勾配はまだ楽な方だが上の方は想像したく無い。

「足元注意しなさいよ」

「そう言えば飛んで居れば足元が大丈夫ですもんね」

「ただしアリスさん、スカート気をつけてくださいねえ」

射命丸さんの言葉にハツとする。

アリスさんが慌てて抑えるが別に見てません!!信じてください!!

「と言うか、このペースだとすぐ夜ですよ?何も分からないままじゃないですか」

「そうは言われても……射命丸さん運べたりしません?」

「出来はしますが……出来るだけ自分の足で歩いて山を見てくださいな」

そうしたい気持ちもあるんですよ俺だって……

ただ富士山かそれ以上のクラスありますよねこの山？

ただ文句よりも足を動かさねばと歩き続ける。

「ここ山って誰が住んでるんです？」

「河童だったり天狗だったり山姥だったり、後は時折神様が住んでるって噂もあります」

「ああ麓の……」

「いえ、彼女達じゃありませんよ」

「だったら山のでっぺんにドーンと構えてるんです？」

「……何故そう思いました？」

「いやあ……神様つて上からドーンと構えてるものかと」

「なるほどなるほど」

「もしかして……合ってた上で何か不都合とか？」

「いえ？そんな事はありませんけど？」

「なんだったんですか今の……？」

「いえ、山の上に神様つて言うのが興味深かったので」

「え？そんな興味深いことですか？」

神社とか神聖な場所つて、階段を果てしなく登って高い位置にっと思っただが……

「外の世界ではそんなイメージなんですか？」

「どうですかねえ……なんかふわっと高い場所にあるってようなイメージはありましたが」

「でしたら、この妖怪の山の頂上にもそのうち……」

「あり得るんですか？」

「無いでしょうけどね。この山はそういった類のものも受け付けたく無いでしょうし、妖怪の山自体頂上に何か建ちそうにも思えません」

「まあ……ここまで明らかな高さの山に建てても誰も来ないですから信仰集まらないでしょうしねえ……」

「どっかの神様がこの山の神に成ろうとしても、山の住民が神に成ろうとしても……」

どっちもどっちで異変と思える様な事ですね」

「異変……」

「あれ？探しに来たんでは無いですか？」

「いや……それでも異変は起きない方がいいので」

「あー、そういった感じでしたか」

「……射命丸さんは異変起きて欲しいんですか？」

「一応妖怪側ですしね……まあ妖怪と言う事を抜きにしても」

「抜きにしても、なんですか？」

「記者な以上スクープが必要なので！」

「あー……」

確かに射命丸さんらしいなとは思った。

—————

山に入って多少は経ったもの……地形の都合上登り下りを繰り返している内に木の量が増えてきた……

「まさかすぐに森があるなんて思わなかったな」

「小野寺さーん大丈夫ですかー!？」

「大丈夫です!!」

「小野寺さーん!!」

ダメだ……森のせいで視界に入り辛いだけではなく、声がこちら側からはくぐもつている。

なんとか付近を飛び回ってくれているお陰で心細くは無いが……向こうに伝える手段がない……

「と云うか……失敗だったな。声が聞こえる方を追いかけて行っていたが大人しく森に入ったと思っただら出るべきだった」

お陰様でこつちからは大体射命丸さんのいる場所が分かるのに、絶賛迷子だ……どう言う事だよ。

「アリスさんに至っては声も聞こえないし……」

実際は射命丸さんが場所が分からぬまま高速で動き回って叫んでいることが聞こえる理由なのだが、そんな事は気付きもしない。

「と言うか……森は厄なのかもしれない……」

行きたびに迷う、そう考えると近づかない方がいいのかもしれない。

今回の場合は予想外のケースだったが……地図を覚えたアリスさんの家以外に向かうのは危険なのだろうと思う。

「上海さんも今回は確実にいない……人形を自分で作っても魂は宿らない。」

運良く山の妖怪を見つけれられても排他的な上に妖怪だ……

むしろ殺しに来たっておかしく無いわけで……

「山の麓にあるのは樹海って言うんだっけ……」

確か磁力か何かでコンパスとかも狂って方向感覚も滅茶苦茶で、決して出られないの
な……

「……」

慌てて木を揺らしたりするものの、当然気付く素振りはない。
歩いて探しに行つた結果これって……って気持ちで凹みながらも少し歩く。

「木だらけ……葉っぱだらけ……最近こう言つたのばかりだな……」

そう思いつつ前も見ると、やっぱり葉っぱが……

「……ん？」

ただの葉っぱかと思つたが違う？

緑色で擬態している様で見えなかつたが。

人？妖怪？とにかく誰がいる。

「あの……」

「っ人間!？」

「あつすみません……驚かせて」

やっぱここの妖怪達は人間に良い印象を持ってないんだろう。

「急いで人差し指と中指を交差させて」

「え？」

「早く!!」

「はっはい!!」

慌てて急かされて交差させる、一体なんだというのだ？

「えんがちよつて」

「えっえんがちよ……」

「もつと大きな声で!!」

「えんがちよ!!」

よく分からないまま叫んでしまった……なんだと言うのだ？

「間に合ったみたいね」

「あの……何が？」

「ちよつとしたおまじないよ、気にしないでちょうだい」

「すつごい気になるのですが……」

「しかしこの樹海に人がいるなんて珍しいわね」

ああ話す気はないんですねわかりました。

「諸事情で妖怪の山に入ることになりました……」

実際のところは完全な私情だが、それで迷子が笑えないし誤魔化す。

「そうなの……大変ね」

あれ？なんかあまり無碍にされないな……

射命丸さんの言っていたことが適当は無さそうなんだが……

「出口って分かります？」

「分かりはするけど……遠いわよ？」

「いいんです……夜までに山を降りないとダメなわけですし……」

「事情は分からないけど……分かったわ」

「いいんですか？」

「どうして？困ってる人を見捨てろと言うの？」

「いえ、山の人達は排他的って聞いたので」

この優しい人が特別なのか、実は山全体が優しいんじゃないかと疑いたくなる。

「実際そうよ、人間に優しい妖怪なんて少ないわ」

「えっでも……？ああ貴女のような人が人に優しい珍しいタイプですか」

「私が妖怪に見える？」

「いえ……分からないですけど……実は人間……でも無さそうだけどなあ……」

だったらなんだって話になる。

知能のある獣には見えないし。

やっぱ妖怪なのかな？

緑の髪に赤いリボン、それだけでなく全身を覆う真っ赤な服は何処か人形をも彷彿とさせたが。

「その通り、人間では無いわ」

「では貴女は一体？」

「私の名前は鍵山雛、厄神様をやっているの。厄神様とでも呼んでちょうだい」

「厄神様？」

貧乏神や疫病神とかの一種なのかと考えるが……

「貴方のような厄まみれの人間から吸い取るのも私の使命だから」

射命丸さんの言っていた神様とは彼女のことだろうか？

って言うかですね……

やっぱ予想通りとか何とか……厄まみれなんだな自分つと。
頭を下げてガツクシしたのであつた。

t o b e c o n t i n u e d

三十一話 七色の人形と流し雛～lost child
and dolls.

流し雛、それは外の世界でも風習があつた。

穢れを払うとかさういった事を願つてやつてた気がしたが……正確な事は覚えていない……男だしほぼ関係なかつたしな。

「どうかしたのかしら？」

「厄神様つて聞く限りは不吉なように感じるんですけどね……」

「あら？ 本当に危険よ？」

「ただ、信じるしか無いので」

「理由を教えてもらっていいかしら？」

「死にたく無いので……」

この樹海に放置されたら間違いなく死ぬだろうし……それだけはあつてはならない。

神様相手にはぐらかしとか死にそうだし……言っただけなのか不安があるが本音で話す事にする。

「そう、少なくとも私が貴方を害するつもりは無いわ」

「そりゃよかった……」

神様にもいい人がいるんだなって思わされた。

あの姉妹悪くは無いらだけど……豊穰の神だし、いい神様ではあるんだけど……ちよつとねえ……

「どうかしたの？」

「いや神様って色んなタイプの方が居るんだなって」

「え？私は神様じゃ無いわよ？」

「……厄神様って聞いた気がするのですが」

「そう言う種類の妖怪なの」

「俺騙されたんです……？」

「失礼ね、見えるかって話で妖怪じゃ無いなんて言っていないもの」

「それって屁理屈なんじゃ……」

「いいじゃないの」

「まあいいですけど……ああ俺の名前は」

「必要ないわ」

「え？」

「他人のことを知る事はタブーなのごめんなさいね」

「タブーって多いんです？」

「本当は話すこともタブーなのだけど……さつきのおまじないでなんとかなってるわ」

「さつきのですか……」

「ええ、じゃないと厄が降り注ぐから……近付くのもやめてね」

「分かりました……」

扱いが酷い気がするけど……流石に厄が積もりに積もっているようだし、ロクな目に合わなそうだ。

「それで、どうすればいいですか？」

「ここから南西の方に行けば夜までには出れると思うわ」

「分かりました……が」

分かったのは分かったが南西をずっと進める自信がない。

そう言った問題は魔法の森で何度もやらかしたからこそ覚えた。

「案内は……出来ませんか？」

「ごめんなさい、タブーなの」

「またタブーですか……分かりました」

どうしようもないが進むしかない……

本当は厄なんて気にせずって言い出せばいいが……その結果他人を巻き込むわけにはいかないし。

「……」

「それじゃありがとうございます、厄神様」

「一つだけ聞いていい？」

「尋ねるのはダメだったのでは？」

「だから一つだけ」

「分かりました」

「人形って作れる……?」

アリスさんが人形作る予定だったし、それに合わせて一応俺も持つて来てたし人形を作れはした。

出来は外に出しても恥ずかしくなくらいだが……アリスさんには全然及ばない。

「上手じゃない」

「習っていましたので」

「へえ、上手な人形師がいるのね」

「はい、俺には勿体無いくらいの素晴らしい師匠です」

「勿体ないねえ、私には七色の人形使いくらいしか知らないわよ？」

「そんな凄い人が居るんですか？」

「アリス・マーガトロイド。妖怪の山でも有名なの」

「あー俺の師匠と同じ……って俺のことバラして大丈夫なんですっけ？」

「ええ、問題ないわ。そのために人形を作ったの」

「どう言うことです？」

「その子が貴方に溢れそうな厄を全部吸ってくれるから」

「自分の子供みたいなものですから複雑なんですけどね……」

「代わりに守ってくれる守り神よ」

「分かつてはいるんですけど……」

「全ての厄はその子が受け入れてくれるから……。代わりに外に出たら流してあげてちょうだい」

「分かりました……」

「じゃあ着いて来て」

彼女の案内の元、着いて行く。

途中人形が重くなったが離さないように持ち続けている。

「本当だったら貴方のお師匠様に会いたかったのだけどね」

「ダメなんですか？」

「彼女は一応は妖怪なのだけど……厄を振りまいちやったら嫌だから」

「あー……残念ですね」

「貴方も褒めるような人形、見てみたかったのだけどね」

「見てみたかったですか？」

「私も流し雛、同じく人形みたいなものだしね」

「アリスさんの人形も似ていると言うか生きてるようなものですしね……と言うか今回みたいにアリスさんも同じく人形を作れば……」

「貴方は例外よ、本当だったら作ったところで厄が降り注ぐかもしれないけど……今助けなきゃ死ぬもの」

「まあ……そうですが」

「だからもつと人形使いとして成長してね」

「どうしてですか？」

「七色の人形使いと出会ったってするためよ」

「え？でも？」

「だから貴方もアリスさんと同じくらい成長してねってこと」

「無茶言いますね」

「だって七色の人形使いと流し雛ってロマンがあるじゃない？」

「似ているようで違います……確かに何か感じ取れるものがあるかと」

「そう言うこと、だからお願いね」

「……厳しいですが少しずつ」

まさかやることがないからって覚えることになった人形作りがここでこうなるとは思わなかった……

無駄になることってやっぱ無いんだなどは。

「それじゃあ後は正面に行くと出れるわ」

「ありがとうございます」

「頑張つてね、人形使いさん」

「はい」

そうして樹海を抜け出すとまだ夕方でギリギリ間に合いそうであった。そして誰かいないかと思っていると速攻で射命丸さんが駆け付けた。

「ちよつと!!心配かけさせないでくださいよ」

「すみません、うっかり追いかけていたら樹海に入ってしまったようで……」

「よく出られましたね……本当に」

「そうですね……運が良かったです」

「おや?その人形は?」

「ああこの子は……大切な流し雛ですよ」

「流すんですか?よく出来てるのに」

「はい、ありがとうございます。ありがとうございました。流します。」

「それは止めませんが……流したら今日は戻りませんからね。」

「はい、分かりました。」

ひとまず戻ったらアリスさんに今日のことを伝えよう。

厄神様のお話を、会う事は出来ないと思うけどその分知って欲しいから。そうして樹海に向けて一礼をして山を下っていった。

t o b e c o n t i n u e d

三十二話 様々な問題点～don't sleep.

結論から言うと夜前に山から降りることができた。

自然なままの山は狂うと言っていたが、どの道樹海に取り残されていたら狂っていただろうし、夜の山の中に潜ったままにいる度胸もないしな……

そのままアリスさんに心配はされたが怒られはしなかった。

「そして疲れて寝ようとしたんだが……」

はい、いつも通り眠れません。

疲れてるしゴリ押せるかなって思ったんですけど無理です。

やつぱ一部屋って少ないだろって思うんですけど……

「仕方ないか……」

アリスさんが部屋の中にいることを確認して風呂場に入る。

万が一鉢合わせるわけにはいかないし……

そしていつも通り空になった浴槽で寝る。

当然身体を痛めるが……自分が部屋で寝れない以上仕方ないのだ……自分が悪い。

「……寝ない方がしんどいしな」

やっぱり人形を作った方がいいんじゃないかと思いつつ眠りにつく……。

「小野寺君？」

「……」

部屋の方から声がする、寝ようとした身体を起こして部屋へと向かう。

「はいはい、なんですか……？」

「何処行つてたの？」

「いやいや家に居ますからねもう時間も時間ですし寝ましょう」

「そうね……」

そうして安心したのか就寝する。

夜になると不安になるのか、それとも俺が心配なのか分からないが……最近こんな調子で心配になる。

「やっぱり森から出たのも関係してるかな……」

住み慣れた家を出て行くとかは不安になるのも分かるし、人形……いや家族と暮らしていたなら尚更かな。

上京してホームシックになった人とかの話もよく聞いたしなあ。

「だったら部屋で寝ろって話かもしれませんが無理です。諦めてください」

再び浴槽に戻って目を瞑る。

流石に起きてこないだろうとそのまま就寝する。

まだ学生だから数徹くらいは耐えられるが……このまま続くとぶつ倒れるんだよな

……

「恩人に迷惑を掛けたくないのと、帰られると俺が詰むって言う二拍子があるせいになにかと口出しは出来ないんだけど……」

そうやってどっち付かずの状況が続いているのが現状である。

「明日人形試しに作ってみるだけ作ってみるか……」

結局最近ベッドよりも浴槽の方が慣れてしまったかもしれない……

それがいいことなのか、悪いことか悩みながらやっと就寝したのであった。

「人形を作る？」

「はい、ダメですか？」

「本格的に天狗とかと会いに行くから、作る余裕なんてないわよ？」

「ああ自分で持ってきた素材で作るんで……」

「それならいいけど……必要なの？」

「はい、必要かなって」

「別にいいけど……それじゃあ今日はどうするの？」

「すみませんが、作ろうって思っているので」

「分かったわ」

そう言つてアリスさんを送り出して人形を作り始める。

厄神様にも言われたし上達もしないと……と。

樹海では厄を吸わせるために急いで作れつてことだったし急いで作つたが今回は逆にいつも通り丁寧に作つた……そのため日が暮れてやっと一人完成する……当然喋らないけど。

「一人いるだけでもマシかな？」

もう一人と言いたかつたが……深夜になるだろうし今日は待つことにする。

改めて自分の出来を見る。

よく出来ているが……外の世界にいた頃なら、人形を作るのもあり得なかつただろうし……むしろ何やってんだって言い出しそうだな。

「ただ……この子がいれば」

アリスさん少しは寂しさ薄れないかなって……
そう思いながら出来上がった人形の頭を撫でる。

「頑張れよ」

返事があるはずのない人形にそう声をかける。

「戻ったわ」

「アリスさん、お帰りなさい」

山から帰還したアリスさんを迎え入れる。

昨日のこともあつてかだいぶ早く帰ってきたようにも思える、まだ日は落ちきつてないし。

「どうでした?」

「河童達は機械じゃないのかって興味なさげにすぐに去っていったけど、天狗達は興味持っていたわね」

「そりゃ良かったですね。アリスさんの人形は皆興味津々でしょうし」

「そう言えば、河童でも一人だけ興味を持っていたわね」

「へえ、気になりますね、会えればいいですが……でも恐らくはいい顔されなそうですけど」

射命丸さんが言うには、河童はメカニックス系ばかりって話で他にはあまり興味がないって聞いていた。

だからこそ、異端とは言わないが珍しいタイプの河童ならもしかしたらなどと考える。

「小野寺君の方はどうだったの？」

「ああ自分の方は……丁寧に作ったんで一人だけですが」

そうして完成した人形をアリスさんに見せる。

「……何回もの自信作でもある。」

「凄いわね……たった数ヶ月教えただけなのに、もうここまで出来るなんて」

「本当に付きつきりでしたからね……」

「この子はどうするの？」

「アリスさんにプレゼントします」

「嬉しいけど……理由を聞いてもいいかしら？」

「アリスさんは森にいる頃人形達と当たり前のよう暮らししていましたし、やっぱいな

いと寂しいかなって。アリスさん自身は人形を作って置いておくことが出来ませんし」

「今日もあげちゃったし、今後もそうなると思うわね」

「だから寂しくないようにって、その子がいれば紛らわせられるでしょう」

「小野寺君は？」

「いい加減別の家に移りたいなって……。寂しいのはその子で解消されるでしょうし」

「どうして？」

「いやー……正直言い出し辛いです」

本当に、そう言う話はやめましょう……。はい。

「で、移るだけダメよ？」

「えー、その子がいるし夜とかも大丈夫じゃないですか？」

「私が怖がっていると思っっているの？」

「……」

違うんですって言い掛けたけど口を噤む。

危ない……危なかったな。

「元は魔界暮らしだったし、独りには慣れてるの。それでも誰かいた方がいいとは思っているのだけどね」

「まあ、誰かと一緒の方がいいのは分かりますが……プライベート空間が一切ないこの部屋は……」

「あの鴉天狗に貴方を見張るようにも言われてるのよね」

「そう言うことももしかしたらあるかなとは思いましたが……やっぱりあるんですか……」

「前に聞いたでしょう？山に魅入られるって」

「はい……聞きました」

その話は身体が震えるほどだったし今でもちやんと覚えている。

「ただ、魅入られるじゃなくて山に誘いざなわれるのよ」

「え？誘われるって？」

「その名の通り、山に無性に入りたくなるとか……やっぱり山の一部になりたがるのよ」

「勘弁してほしいですね」

「今日、聞いたのだけど……貴方が昨日樹海に入ったのも山に誘われたから……そうだと思われるって」

「アレは射命丸さんが樹海の方へ……」

「行っていないらしいわ」

「!？」

「幻覚を見たって、バカらしいと思うけど……特に人がよく失踪する場所では幻覚なんて起こって当然とか」

「……。正直帰りたくなつて来ましたが、樹海しか見てないのに帰るつてもあんまりですし怖いですが続けます」

「何を調べたいのか分からないけど……危ないわよ？」

「だからこそ、今後本当に来なくていいように」

「……明日からは射命丸さんに捕まって山の登り降りしてもらおう」

「……大して行けないのにまた樹海に入るとですしね」

「だから残念だけど、別の家は許されないの。貴方がいつ山に向かってしまうか分からないし……」

「分かりました……」

残念ながらこの生活をやめられないのかとガックシする。仕方ないけど身体を痛めるしかないか……死ぬよりマシだ。

「ねえ、何が不満なの？」

「不満って？」

「不満があるから分けたいんでしょう？だから言っただけじゃない」

「これは言っただけと言われて言っただけのものなのか……」

「ただ言い訳が思い浮かばず観念する。」

「夜が寝れなくて」

「不眠症？」

「いえ、アリスさんの家の頃はまだ別室で大丈夫でしたが……同じ部屋だと緊張して眠れず……最近浴槽で寝ています」

「だから居ないことがあるのね……」

「ええ、毎日確認してるってことを知らずに申し訳ありませんでした」

「身体は大丈夫なの？」

「多少は痛いですが……大丈夫です」

毎回心配して探しに来ることがなければ寝不足も解消されるし痛みは耐えれば……

「ただ山に登る以上翌日に痛みとかは……そうだわ」

アリスさんは何かを思いついたように提案してくる。

その晩……

「……眠れはする」

浴槽に一人、それはいつもと変わらない。

ただいつもと違うのは浴槽の中で布団を敷いている。

「身体も大丈夫だし」

ツツコミどころは満載な状況であるが、この家について初めて気持ちよく寝れたのであった。

……残念なことに納得は出来ないけど。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

三十三話 河城にとりく only understan
der.

山の中腹、河童達の住処、そこにアリスさん達と共に訪れた。

「さて、今日も来たけど……」

河童達の住処に着くも誰も出てこない……そりゃそうだろうけどさ。

「一応言っではおいたんですが、河童達は興味がないのでしょうか」

「じゃあ昨日の通り天狗達にですかね？」

「ええ。同胞は楽しみにしていたので、今日も迎え入れてくれるでしょう」

「それじゃあ行くわよ」

「了解つと……」

出ようとするど何やらこちらの方をチラリと見ている。
確認しようとするど……見えなくなつ……消えた!?

「何やってるんですか、小野寺さん置いてくわけにはいかないんですから」

「あの射命丸さん……?」

「なんででしょう?」

「この山って幽霊つています?」

「まあ、居るんじゃないでしょうか?妖怪の山ですし」

「確かにそう考えるとおかしくないのか？」

「何より、失踪者が多いので誰かしら幽霊になっているのかもあるんじゃないでしょうか？」

「そう言われるとそうだった……」

と言うことはアレは幽霊だったのか？

あれー？急に怖く感じてきたぞー？

「……幽霊でも見たんですか？」

「かもしれないですね……」

「ちなみに、興味があるのでどんな見た目でしたか？」

スクープだと思ったのか射命丸さんが興味を持つ。
いや、俺幽霊なら関わりたくないんですけど……

「えっと帽子を被っていて」

「ほうほう、普通の幽霊のイメージと違いますね」

「リュックも背負ってました」

「……」

「あの……どうしたんです？」

急に残念そうなものを見る目になって戸惑う。

え？なんか不味い発言した？

「それ……河童です」

「え……河童？」

河童つてもつとそうじゃなくて……

いや目の前の射命丸さんみたいな天狗がいる以上河童もそう言うものか……

「しかし河童がこちらに興味を持つのも気になりますね」

「そうなんですか？」

アリスさんは確か一人だけ興味を持ってたって言ってたし……実際珍しいのだろうけど。

「アリスさんすみませんが、小野寺さんと私は予定を変更させてもらいます！」

「え？何するつもりなの？」

「河童を追います！アリスさんはそのまま頑張ってください！」

「ちよつと!!」

「行きますよ小野寺さん！」

そのまま俺は連れて行かれた、ただし河童が見えなくなるって言うなら……無理じゃないのかこれ？

まあ……探すの頑張ります。

—————

「居ましたか小野寺さん？」

「見たの一瞬ですし分かりませんって……」

結局、調査のために河童達の住処にお邪魔させていただいている。

鴉天狗には逆らえないのか従っているが……勿論俺を見る目が怖い……

「早く帰りましょ……?」

「ダメですよ、人間に興味を持つ河童なんて面白いんですから」

「そもそもそのいた人物もチラッと見ただけであって河童であつたとは限りませんよね
!？」

と云うかこの河童達……俺達のせいで開発の邪魔されまくってるじゃん……

「すみません、人間に興味津々な河童って知りませんか？」

「知らんよ」

「またそう言つて……実は知ってるんじゃないですか？」

「知らんつての……」

「本当のところは？」

「射命丸さん、本当に知ってなさそうだしやめましょう……」

「えー、知ってるかもしれませんよ」

「そもそもその人間のような異邦者を好む奴など河童にはおらんよ」

「はははは……」

目の前で大嫌いって言われるの少しだけしんどいんですが……

まあガツカリしながらも次々聞いて……作業妨害してるようにしか見えないなこれ。

「見つかりませんでした」

「でしようね……」

「でも……絶対に特ダネでしようから諦めきれません」

「……そう言われてもですね」

「あつ天狗のお姉ちゃんだ」

「おや？子河童ちゃん達？どうしたの？」

「遊んで遊んでー」

「今は忙しいので後でね」

「えー」

「えーじゃないの、忙しいのを邪魔しちゃダメって言ったでしょ」

「はーい」

「あの射命丸さん……?」

「あつすみません、お恥ずかしいところを」

「いえ……問題ないですが懐かれていますね」

「子供達だけですけどね」

口調も記者の固い時とは違って親しく接してるようだったし。本当に懐いてるからなんだろうなって。

「そう言えば君達、人間に優しい河童って知らない?」

「えー?人間に優しい河童なんていないんじゃない?」

「やっぱそうよねえ……」

「そんなのにとりお姉ちゃん位でしょ……」

「あー……。そう言うことですか」

「え？どうしたんです？」

「人間好きな河童いました……山の中でも異端ですけどね」

「異端……まあ普段が人間をよく思わないって感じですしそうですか……」

「彼女なら確かにアリスさんの人形にも興味持ちそうですね……」

「何処にいるか分かりますかね……」

「迷彩スーツを着ているので分からない気もしますが……」

「迷彩スーツ……そんなものが……見えなくなった理由もそれか」

「キュウリもありませんしどうしたものかと……」

「アリスって昨日のお姉さん？」

「おや、知ってるんですか？」

「お父さん達から駄目って言われたけど……。昨日の人形凄かったなあって」

「なるほど、アリスさんの人形は凄いですもんね」

「彼女呼んでこないと駄目ですかねえ？」

「まあ動きはしませんが人形は俺も作れますよ」

「ほうほう、作ってもらっても良いですか？」

「了解」

ただ普通の人形は駄目って言われたようだし……

河童全体が好きそうなもの……機械とか弄ってるし、アリスさんや自分が普段に作るのとは違う、ロボットのような人形を作った。

……慣れてないし急がなきゃで出来はそこまでだが。

「凄いかっこいい！」

「そりゃ良かったです」

「なんですかこれ？アリスさんの人形とは違いますね」

「河童的にはこう言うのが良いかなって」

「良いね、私もそのフォルム気に入った……頼んだら貰えないかな」

「!？」

慌てて振り返るが誰もいない。

「でもちよつと話しかけるのは……」

「にとり聞こえていますよ」

「げっ、えっ!？」

慌ててドタバタしながら逃げていつている……多分。
しかし足音等で位置がバレて射命丸さんに捕まった。

「離せよー」

「捕まえましたよ」

「え？確かに探しにきましたが……これどうするんです？」

「どうしましょうか？」

「ええ……？」

どうしようかって……それじゃ駄目なような。

「まあ各々お願い等もあるでしょうし、自己紹介から始めましょうか」

まだまだグダグダなのは抜けていないが……一度自己紹介から始めるのであった。

……河童の方が泣きそうな顔で正直不安だが……頑張ります。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

三十四話 河童の野望く gigant ic dream

s.

「さーて、キリキリ吐くんだ！お前の罪状は明白なんだぞ!!」

「……」

「ダンマリか？よくないな、地元でお母さんが泣いてるぞ？」

……なんだこれ？

「あの……射命丸さん？」

「とつとと自首を……つと小野寺さんどうしました？」

「何してるんです？」

「いや、河童の尋問ってカツ井とこう言った感じってしきたりがありました……」

「ないだろうが!! 鴉天狗、人間に嘘を教えるんじゃないやい」

「でも、喋らない河童の口を割らせるのはこれが一番だつて……」

「がるる……」

「まあまあ……相手困らせちゃダメですよ」

「なんですか小野寺さん、長年寄り添った私よりその河童を選ぶと言うんですか？」

「いや……少なくとも今回は射命丸さんが間違つてるようにしか思えないので……」

「ぐぬぬ、そんな薄情だとは思いませんでした!!」

「助かったよ盟友！」

「いや……無事ならいいですが……つとと言うか盟友？」

「ああ、仲良く出来そうだったしな……それとも出来ないかい？」

「そう言うことはありませんが……」

「だったらいいだろう！」

まあ、この山で仲良く出来るに越した事はないが……一体どうしたんだ？

「相変わらず人見知りですか？」

「うるさい、天狗は早く帰れ！私は盟友に用があるんだ!!」

「残念ですが、彼を送るのも仕事なので帰ること出来ないんですよ」

「……この天狗を足に使うって何者だ？」

「いや……普通の人間ですけど……」

と言うか射命丸さんさつきこの子が人見知りって言ってたな。

……ってことはそれを解消させて、なんとか仲を取り持つ……いやこれマッチポンプじゃ？

「私は河城にとり、見ての通り河童だが」

見ての通りってなんだろう？皿があるとかそう言ったイメージしか河童にはないが

……

帽子かぶってるから分らないし……

「小野寺蓮司です」

「そうか！じゃあ蓮司！私にもさっきの作ってくれないか？」

「そりゃ構いませんが……」

　　そう言つて裁縫セットを……

「待つて、何をする気だ？」

「何をつて……人形を作る気ですが……？」

「人形……もしかしてアレつて人形なのか!？」

「え？勘違いしてました!？」

「新型の機械か何かかと……」

確かにそう見えるようには作ったし、河童の専門分野的には仕方ないのか？

「だったらいいんです？」

「いや、用意してくれ」

「人形ですがいいのですか？」

「ああ、フォルムとかを見たいしな」

そう言うことならと見栄えだけは良くして作る。

時間かけさせて苛立たせてはいけないし……とパツと作り上げた。

「おおーーーーー」

「そつ……そんなにいんですか？」

「ああ、見たことない感じだな」

「機械作ってるのでは？」

「そうは言ったって、ロボットだっけか……こういった技術はない」

「なるほど……」

「と言うかだ……人間でここまで知識ある奴がいるとは驚いたな」

「小野寺さんは外の人間なので色々と知識があるだけですよ」

「ちよつ射命丸さん!？」

「なんでいきなりバラしてるんです？」

「折角仲良くって思ったのに異邦中の異邦ですし追い出されるんじゃない？」

「なんだと!? 外の人間なのか!!」

「山から追い出さないでいただけると嬉しいですが……」

「とんでもない、蓮司なら分かってくれそうだな!」

「え? 何がです?」

とりあえず外の人間に悪い印象が無いようで良かった。

「巨大ロボってどう思う?」

「いいんじゃないでしょうか……いや実際にあつたら最高か?」

ロボット物とかキャツキャするのは一応卒業したが……

それでも男な以上は一度は巨大ロボとかに乗りたいたい物であろう!!

「やっぱり君は盟友だ!!」

「それなら良かったですが」

「色々と外の世界のロボットについて教えてくれ!!」

「そこまで知識があるわけではありませんが……出来る限りなら」

「あの……」

「なんだ？ 私は蓮司に聞きたいことだらけで忙しいんだ」

「山に被害がでるほどのロボットはやめてくださいね？」

「知ったことか！ ロマンが一番だ！」

つい同意しかけたが、そこまでのロボットは正直やばいと思って言い止まる。
ってかこの子一人で作る気なのか？

「他の河童達は？」

「いいや、アイツらの手は借りない」

「流石にキツ過ぎませんか？そうなつてくると」

「巨大ロボのロマンを分からないものに手伝わせるものか!!」

「言い分は分かりますが……」

もしかしてこの子マッドサイエンティスト系なんじやつて思い始めてきたんだが
……

「巨大ロボのロマンが分からない奴らに見せびらかして、ギャフンと言わせるのが私の

野望だ……」

「ギャフンと言わせるのはいいですが……あまり人里や山の外に迷惑かからないようにしてくださいね」

下手したら異変になる可能性がある以上やり過ぎは止めなければならぬだろう。
と言うか俺が原因で異変が起きましたとかになったら勘弁だし。

「まあ流石に妖怪の山程になるのは自重する」

「当たり前です、河童だけの山じゃないんですからね？」

「だが蓮司が手伝ってくれる以上は彼の名を傷付けないように最大級のものを作らねば失礼だろう？」

「え？」

流石に規模ヤバすぎるなら躊躇うのだが……

「手伝ってくれないのか？」

「まあ……知識くらいなら貸しますけど……」

「だったら今から」

「にとりさんを探したり人形作ったりでもう夕方なのでまた明日以降で……」

「なんでだ？場合によってはウチで泊めるけど、聞きたいこともあるし」

「天然の自然はまずいって言われたので……」

「あー……そうだなすまない」

それで納得してくれたようで良かった。

と言うか射命丸さんの誇張じゃなくてやっぱやばいんだよなあ……と思わされる。

「じゃあ今日は情報集めもしたいし……あの子達の人形も貸してもらうか？」

「え？子供達から人形奪うんですか？」

「いや、そうではない。ただ一つ一つが差があるから多少の参考にと」

「本当に根っからの職人だなと……。」

と言うかあの子達もういないんじや……？

と振り返るとまさか居て驚いた。

「あれ？君達帰ってないのかい？」

「帰ったって何も無いから……それならお兄ちゃん達と一緒にいいかなって」

「何も無いって……」

確かにゲームは無いと思うし、子供は外で遊べって言うんだろうけど、もう夕方でも無いって言うのも……

「どうしたんですか？」

堪らず射命丸さんが子河童達に尋ねた。

「親が構ってくれないんだ」

「あややや、手が離せないとかが無ければ河童も四六時中工房に潜ったりしませんが、夜はいるはずなのですが……」

「いることはいるんだ……」

「だったらなんで……」

「信じて貰えないかもしれないけど……親も皆も……宴会ばかりしてるんだ!!」

to be continued

三十五話 異変の前兆～upset Alice.

「それは、異変の可能性があるわね」

河童達の話伝えてアリスさんはそう答えた。

「異変？今までののに比べてしょぼいと言うか何というか……」

「しょぼいもヤバイも異変には無いわ。起きたか起きてないかだけよ」

「では、アリスさんは起きたと考えるんですか？」

「ええ、だって妖気が溢れているもの」

「場所は？まさかこの山だとは言いませんよね？」

射命丸さんも焦っているようだけど、確かにこの山だとまずいかもしれない。
異変に対処出来る力はないし……

「この山では無いと思うわ。ここではまばらだし……」

「でしょうね、私だってこの山を常日頃隅々まで見てますので」

「だから、何処で起きたかも探す必要があるわ」

「なるほど……私が探し回って来いと……」

「悪いけど、お願い出来るかしら？」

「構いませんが、妖気を探し切るのは難しいかもしれません……期待しないで待っていて下さいー！」

「こう言う場面で貴女を期待しないでどうするのよ……」

「やれるだけはやってみますよ」

そう言いつつ射命丸さんは飛んで行ってしまった。

大丈夫だよな……？

「じゃあ、待つだけね」

「大丈夫ですかね……？」

「あの天狗の事そこまで信用してないのかしら？」

「いや……してはいますが……異変と言うものはそれでもって」

「信じるしか無いわよ」

「そうですね」

今回の異変がそもそも何を及ぼすか分からない……
無事に済めばいいなと思うことしか出来なかった。

翌日朝一で射命丸さんがやって来て、一先ずは無事だったかと安堵した。
それと同時に頭を下げられた。

「ごめんなさい！無理です!!」

「そつそれは分かりましたがどうしました!？」

「少々無理な出来事となりました……」

「…………理由を聞かせてもらっていい？」

「…………鬼が関わっています」

「鬼!?!」

あの人達地底から出なかったんじや無かったのか…………?
それとも、空さんが地底で異変が起こしたから!?

「場所は分かるかしら？」

「いえ…………申し訳ありません…………鬼は厳しいんです」

「そうなんですか？」

「妖怪の山の妖怪達は鬼に頭が上がらないんです…………」

「見つけれないなら仕方ないですが……」

「しかしそれだと見つけれないわね……」

「あの……地底はどうですか？」

「地底？ああ、前に言っていた地底の住人って奴かしら？」

「はい、鬼が起こしたって言うなら……」

ただあの時起こしたのは空さんのはずだ……それに買い出しの時に街は見たが宴会の様なものばかりしていたようだし……

「それは無いですね」

「え？そうですか？」

「地底の鬼達にわざわざ地上に出て宴会する意味が無いですから」

「そうは言っても……」

「それにはんつつつつつとうに嫌ですが地底への道も一応見張りしましたが何かが出ていた形跡はありませんでした……」

「なるほど……」

「なので……何処でかは分かりませんが……異変の元凶は残念ながら予想が付くんですよね」

「付くんですか!？」

「地上の鬼と言えば彼女しかいないので」

「聞いていいかしら?？」

「……元妖怪の山のトップ、鬼の四天王の一人……伊吹萃香だと思います」

「鬼の四天王……？」

そんなものあるのか、と言うか……太刀打ち出来るのか？

「地上にいるのはまず彼女でしょうし……宴会が多いのも納得出来ます」

「そんなの……どうすればいいんですか？」

「私が行くわ」

「アリスさん!？」

アリスさんが行くと宣言する……正直行かせるわけには行かないが……

「怪我でもしたら大変ですし、辞めましょうよ……」

「勿論私が戦う気なんてないわよ……霊夢達に伝えに行くわ」

「それなら良かった……」

「だから、問題ないわ」

「でもそれなら射命丸さんが行ったほうが早いんじゃないか……？」

「申し訳ありませんが、私博麗の巫女と仲良くないですし……異変と言っても信じて貰えないんですよ」

「え？なんでですか？」

「あの新聞のせいでしょうよ……」

「失礼な！新聞の何処が悪いんですか!!」

「……この前の新聞見たけど？」

「ちよつと用事が……」

「何があつたんです？」

「森の人形師に男の影アリって……本当に記事にしたのよね」

「いやあ……結果的に人気でしたし」

「だから私が行かなきゃならないの」

「そうですか……」

「少しの別れになるわ、多分異変が解決しても暫くは戻れないでしょうし」

「そうなんです？」

「ええ、多分異変後に色々あるでしょうからね」

「寂しくなりますね……」

「きつと、また会えるわよ」

「そうですね、そうに決まっています」

「……ちゃんと人形師としての腕も上げておくのよ」

「勿論ですよ、ですので安心してください」

「それじゃあ、人形大事にするから」

「今度会うときはその子以上の子になるでしょうけどね」

「頼もしいわね」

「行けるところまで送りますね」

「ありがとう」

こうしてアリスさんは山を降りて行った。

自分は一人暮らしになったが、夜間に外に絶対出ない事を条件に続ける事になった。ついて行くことは鬼が危ないらしく許可は出なかった。

だからこそ俺は、アリスさんが無事である事を祈るばかりだった。

「……射命丸、彼を任せられたわよ？」

「分かりましたが、だいぶお熱じゃないですか？」

「外の間人はそれだけ貴重なのよ」

「まあ、にとりもいますし彼女の周りには他の妖怪達も近寄り難いでしょうしねえ……」

「……それならいいけど」

「それで、実際どうなんです？」

「貴女何か言ったら新聞にする気でしょう」

「今回だけはしませんよ、山でだいぶお世話になったので」

「そうね……私には子煩悩の母は居たけど、それでもいつも孤独だったから……彼の隣は落ち着けたわ。一人じゃないんだって」

「……無理して帰るくらいなら私が土下座でもして伝えに行きますが」

「いいえ、彼を危険に晒したくないもの。一刻も早く終わらせるわ」

「なるほど、でも無茶しないでくださいよ？彼泣いちゃいますから」

「気を付けはするけどね」

「……約束ですからね？」

「ごめんなさい、私は森の悪い魔法使いなの」

そう言いながらアリス・マーガトロイドは夢げに笑うのであった。

t o b e c o n t i n u e d

三十六話 早々たる異変の解決～the banquet ends.

アリスさんと別れて初めに射命丸さんに言われたことは、私か河城にとりから離れるな……だ。

異変の間誰かしら信じられる相手が側に居た方がいらしいし、他の妖怪達は宴会していて頼りにならないと。

「やあ盟友、今日も来てくれたのかい？」

「射命丸さんも忙しいですし、にとりさんの作るロボットも気になりますしね」

異変が起きた現状、スクープも含めて射命丸さんは飛び回っているようだ。そのせいである程度はこっちに来ることになっている。

「蓮司の作るロボットの人形は私の経験値になるからねえ」

「喜んでくれるのは嬉しいですが……人形だらけになってませんか？」

「なってるけど、それもこれも全部贈り物でもあるしね、貯まれば嬉しいものだよ」

「それならいいですけど……」

「それで、そろそろロボットを作りたいんだけど……」

「ダメみたいです。ロボットは異変が解決されたらって射命丸さんに何度も言われましてから……」

「ちえー、つまんないの」

「まあそう言わずに……今日もまた気に入らぬ人形を作りますから……」

「しようがないなあ……」

にとりさんの元で人形を作る日々が数日続いている。

解決までは作ることになりそうだと思っただが……それはそれで楽しい事だし十分だなど、今日は何を作ろうかと考える。

「蓮司は、今まで作ってきたようなロボットに乗りたいつて感じかい？」

「そうですねー。最初のはロボットってこんな感じだろうってみたいなのを渡しました
が……今にとりさんに渡してるのとかは結構ロマン込みですね」

「やっぱか、分かってるじゃないか蓮司」

「そりゃあ……って何してるんです？」

何やら巨大な模造紙のようだが……一体何を？

「作るのダメって言われたけど、流石に設計図を作るくらいはいいだろう？」

「それは……流石に構いませんが」

「ふんふん」

そうして設計図を書き上げて行く。

見ていて分からないが、楽しそうに描くのと見かけだけとは言えロボットが完成して行く所を見ているとこっちも楽しくなるし。

当然、そうしているとすぐに日が傾き始めた。

「そろそろ休んだ方がいいのでは？」

「後ちよつと……と言いたいが……そうだね、だいぶ疲れた」

「お疲れ様です」

「おや？あの鴉天狗はまだ来ていないのか」

「みたいですね……自力で降りるには結構遠いですし困りました……」

「ふむ、そうだな……ちよつと待っていてくれ」

そう言うてにとりさんは奥の方に潜って行き……何かを持って来た。

「さあ、どうぞ」

「なんですこれ？」

見るからにお酒のようだが……

「なあに、異変とは言え他の皆が宴会してるのに私達だけしないのもなんだかなって思ってたな」

「そんな事言つても酒は呑めませんよ？」

「全く外の世界の倫理など気にしなくてもいいだろうに……酒じゃないのも用意してある」

「それなら良かったですが……」

「それじゃあ、異変の解決を願つて乾杯」

——酒は呑まないつて本当に真面目だなあ……

——まあこの酒は人間が呑めたものじゃないし仕方ないけど

——酒の匂いだけで酔つたつて？弱いな本当に

——あー、はいはい……いつももの酔つた大法螺だろう？

——はっはっは、これだけは嘘じゃない”つて？

「――鬼に誓ったその言葉、忘れるなよ？」

「小野寺さん!!」

「つとはいいはい起きます!」

あの時と同じ様に何か夢で見ていた気がするが思い出せない……と言うかあの時つて……まさか!!

「速報です! 異変が終わりました!」

「……早くないですか!?! まだアリスさんが離脱してから一週間経ってないですよ?」

「それもそうですが……鬼も事前準備していたものの、宴会をしたいただけと色々と雑でしたし……何より単独犯だったことが早期の解決に繋がりました」

「アリスさんは!?!」

「無事ですが、後始末等があるので暫く来れそうにありません」

「無事なら良かったです」

「私も私で新聞発行とかあるので暫くはまだ同行出来ませんが……どうせ河童の元で何か作るのでしょう?」

「そうですね……だいぶ待たせていたので……優先して作ると思います」

「それが終わつたくらいに私も予定が空きますかね……」

「ん?何かあるんです?」

「特には無いですが……頂上行きたいのでしょうか?」

「行きたいのは事実です、でも頂上には何も無いのでしょうか?」

「何もありませんよ、だからこそ何も無いってことの証明を見せるってわけでもありませんが……」

「なるほど……」

この前、射命丸さんが言っていたように何も無いのは事実なんだろうなって……だからこそ、神に成り上がろうとしている妖怪達に目を光らせてるって話は聞いたし。

「まあ、異変にならない程度にロボットでも作りながら待っていて下さいな」

「確かに……そうですね」

「こちらとしましても、ロボットのせいで妖怪の山で異変が起きたりとかは勘弁ですの
で」

「気を付けないと、にとりさんがやらかしそうで怖さがありますね」

正直、俺もやらかしそうであるが……作った場合の失敗パーツなどの処理などが巨大ロボでは面倒だし、大きさに拘って他がダメだ等とか出来るだけやらないように心がける。

「本当に……小野寺さんが頼りですからね？」

「それは……分かっております」

「それでは、河童の元へと案内するので捕まってくださいな」

「了解です」

そうして今日もとりさんの元へと向かう事となった。

アッサリ終わったからこそ何故だろうと異変について考えるばかりだった。

ただそれは一刻も早くロボットの製作を進めたいにとりさんへの助言などが止まっ

てしまうので不都合そうだが……

それに俺も俺で巨大口ボットが早く見たいと言うことで、助言が一層過大になって、にとりさんをもつと燃えさせてしまい、より一層設計図が一回り大きくなったことを見て少しだけ後悔することになるのであった。

to be continued

三十七話 河童、ロボを作る
g i s o u | t e n s
o k u .

異変も無事に終わり、にとりさんが念願の巨大ロボを作り始めた。

本来であれば、もっと巨大な物を作る気だったが流星にそれは止めた。

「よーっし作るぞー!」

「おっおー……」

「なんだ、気迫が足りないぞ!やる気あるのか?」

「二人でって言っても俺は作れないですし一人で何ヶ月計画ですか……」

「2〜3ヶ月もあれば終わると思うぞ！」

「だいぶ掛かるんですが……」

「それはそうだ、ロボットにかける情熱はそれくらいかかるんだ!!」

「分かりましたって……」

にとりさんにせがまれるままロボット作りを見学する。

「こんな感じでいいかな？」

「多分いいんじゃないでしょうか？」

「多分って言われても困るぞ？」

「だって……ロボットの内臓部分までは分からないですよ自分も」

「そんなあ……」

「動くようにとかって難しいですか？」

「当然だろ!? 作ったことないんだから」

「えっ……そう言えばそうですよね」

「アリスも2、3ヶ月のうちに戻って来てくれれば助かるが……分からないし一人で作りきる気で頑張る」

「荷物持ったりは手伝いますので……」

「ああ!」

そうしてにとりさんとのロボット製作が始まった。

最初は一週間で結構進むものかなと思いきや……流石に甘かった。

「何も取りかからないのですか？」

「まずはプログラミングとか土台作りだ、その後エンジン作りとか……」

「……」

何を言っているのか分からないので任せることにしよう。

と言うかよく考えたら単独で数ヶ月ならヤバいのも事実だよなあ……

「どうした？」

「荷物持ちに徹します……」

「ああ、そうしてくれ」

毎日通いながら一月が経った。

正直休んだ方がいいと思いつつも、にとりさんがずっとやってるのを見て自分もって頑張ってしまう。

「少しだけ出来上がりましたね」

「当たり前だ……そんなすぐに出来るわけ無いんだから」

「いや、逆ですよ。よくここまで出来てるなって」

「私が天才なのもあるし」

「確かに……それは分かりますが……」

ただ自分で天才って言い出すのはどうなんだろうなってとは思う……いや実際天才か。

「それに、蓮司もいるからな」

「俺は……荷物運んでるだけですけど……」

「いや、間違いなく君のおかげだよ」

「……?」

俺が何かをしたって記憶はないんだが……

「私にロボットを覚えてくれたのは君だ、見せてくれたのだって君だ」

「それは……そうですが……」

「それに、一人ならどうしても飽き性だしね……。君が居てくれた事は何よりの頑張り
になっている」

「それならいいですけど……」

「だから……本当に」

「色々な感謝は全て終わってからにしましょう」

「そうだね……」

そうして9月が始まった頃……ついに巨大ロボットは完成したのであった。

「遂に……遂に完成したぞ蓮司!!」

「ええ……完成しましたね!!」

「じゃあ乗るかい？」

「乗らせてはもらいますが、ロクな操作も出来そうにないので……乗るだけに留めようかなってとは思いますが」

「ああ、動かすのは勘弁してくれ……」

流星にこれが動いたら妖怪の山で問題になるだろうししない。
にとりさんに案内されて、そのコクピット内に入る。

……なんだこりゃ？

「あの、中が全然分からないんですが……」

「そうか？蓮司なら分かってくれるって思ったんだけどな」

「いや……巨大ロボットだってアニメとかの世界で実在してたわけじゃありませんし……」

「分からないなら仕方ないが……私もこれを動かすのはまだ不安があるな」

「そうなんですか？」

「天才とは言ったがまだ経験もない未熟だしな……いずれこれ以上のロボットを作ってやるって」

「応援してますよ、俺は」

ロボットに乗れてワクワクが止まらなかつた。

実際、降りた今でもまた乗りたいと思うほどには男のロマンがあの中には詰まっていた……

「今はまだ……腕が未熟で所詮は偽想天則でしかない……。だがいずれは本物の非想天則って奴を作り上げて見せると！」

「非想天則？物凄い名前ですね」

「そしたら一番に乗ってくれるか？」

「断言は出来ませんが、一番に乗れるものなら乗りたいですし動かしたいですね」

「そこは嘘でも断言しろよ、盟友だろう？」

「盟友だからこそ絶対ではないものに嘘はつきたくないですけどね……」

「……それで蓮司、これからどうするんだ？」

あつ唐突に話を変えた……

まあ構いませんが……俺もなんだが恥ずかしいこと言ってるなあって思いましたし。

「それで、どうって言うのは？」

「これからだよ、アリスはまだ帰ってきていないようだけど異変は終わっただろう？」

「ああ、そう言われるとそうですが……」

異変が終わってから二ヶ月くらい経ったが未だに帰って来ない。

射命丸さんが言うには用があつて紅魔館に籠もっていると聞いたが……吸血鬼達の元で大丈夫なのだろうか。

「そうですね……一旦頂上には行ってみたいと思つています」

「人間が行くには適した地では無いと思うが……」

「それでも気になるので、山も全部回つてみたいですしね」

「……何も無かつた気がするが、気を付けろよ蓮司」

「了解です、にとりさん」

頂上には本当に何も無いんだろうとは思う。

ただ……それで俺の妖怪の山探索は終わりなのかな？

そう思うと、確かに余所者的なムードはあちこちにあったけど、それでも優しい妖怪達が多かった気がする。

麓の方では人間に友好的な神様達だったし。

「にとりさん。」

「なんだい？」

「またいずれ、この山に来たいって思いました」

「そりやそうだろう、だって非想天則に乗ってもらわなきゃならないんだからね」

「そうですね」

また山に来なきゃいけない理由もあつたなつて思いつつ、今回の調査が終わってもい

ずれまた来ようって笑うのであった。

t o b e c o n t i n u e d

三十八話 山の頂上～forgot something.
g.

思い残す事はあるとは言えいずれは行かなきゃと思っていた。

射命丸さんも危険な場所が多いので小野寺さんも気を付けてと言っていたが……

「では頂上に向かいますよ」

「何も無いみたいですけど危険みたいですね……」

「落ちたら間違いなく死ぬのと、普段の位置よりも空気が更に薄いので心配になることが多いのですよ……」

「ただ、行かないってわけにもいかないでしょう……」

「そうですかねえ……。まあ行くと言われた以上は連れて行きますが本当に気を付けてくださいね……」

「それは……分かってます」

「アリスさんに死んだとか報告したくないですからね……」

愚痴を散々言われながらも連れて行ってもらえた。

いつもよりも捕まっている距離は長いし、呼吸も多少辛くなる。倒れる程薄いわけではないが……

「間も無く着きます、落ちないように」

「はい、気をつけますね。」

色々と言われつつも山の頂上へと辿り着いた。

当然と言えば当然だが、そこには何も無い。

「何も無い……けど」

「どうされました？」

この場所は知らない、初めてだと断言できる。

ただ……なんだろうこの違和感は。

「大丈夫ですか!？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

一体なんなんだ？分からないからどうしようもないんだが……

「もつと奥の方行きましょう、崩れたりしたら怖いので」

「えっはい」

崩れそうには見えないけど……万が一崩れたら怖いのは事実か。射命丸さんに従おう。

言われるまま進んで行くが、舗装がされているわけもなく足の痛みが少しずつ溜まってくる。

「少し休みますか？」

「すみません……」

1、2 km程歩いたかどうか調べてくれないだが、山の形状に登り降りどころか這い上がったししなければならぬ位置もあるために苦労する。

「大きな石ですね」

「鬼がかつて置いたとの噂もありますが……知り得ない事なので……」

「まあ、昔のことまで知ることは難しいですよね」

「実質この山の神様はこの岩かもしれないですね……」

「神様……」

「先程から、どうしたんですって」

「何か引つかかるんです」

「何かってなんですか本当に……」

「分からない、けどなんだ……」

「地霊殿の時や、麓では感じなかったのに……なんでここに来て？」

『神様つてのは高いところでドーンって居座ってるんです、だから神社は高い方がいい』

のですよ』

「射命丸さん何か言いましたか!？」

「いっついえ……何も言つて無いですが……」

今のは……何処かで聞いたことある台詞だが……何処だ？

『え？それでご利益があるのかつて？ご利益が欲しいのに来れない人なんてもつてのほかだつて○○○○様が』

そうだ、確かこれを聞いたのは外の世界だ。

何故今思い出すのかが分からないが……

それで確か彼女に今ここで君に祈ればご利益があるのかつてふざけて……

『だったら奇跡を信じてみます？○○○○○だつて……こす……から。』

思い出せない、確かなんて言われたっけ。
そもそも彼女の名前は確か……

禁止されている

「あ……ああああ “あ” “あ” “ああ”

「小野寺さん!?!何があつたんです!!」

「頭が……割れる……」

「落ち着いて……!!落ち着いてください!!」

思い出すな、思い出しちやいけないいけない。

頭にそう言い聞かせながら悶えている。

何が禁止なんだ……?そもそも禁止つてなんだ?

そう思いながらも痛みそのまま……気を失った。

目が覚める……一体何があつたんだっけ？

「小野寺さん!!」

射命丸さんの声で思い出す、そうか気絶したんだつた。

「申し訳ありません……」

「貴方は何度驚かせるつもりですか!!」

「気を付けては……いるんですけどね」

「自覚が足りて無いんじゃないですか？」

「自覚って言われても……」

「とにかく今日は降ります！これは決定事項です！」

「分かりました……」

流石にぶつ倒れたとなったらもうダメなのは分かっている。

「空気が足りなかったんですか？」

「いえ………忘れた何かを思い出そうとしてこうなったみたいです」

「忘れた何かって………本当に」

「外の世界での記憶………覚えてたかなって思ってたんですが………抜けがあつたようでそれをここにきて思い出しました」

「ここは何も無い場所の筈なのですが……」

「今日は俺もまた倒れそうなので厳しいですが……またくれば……何か思い出せそうな気がします」

「正直、記憶よりも体の方を大事にして欲しいんですが」

「すぐにとは言いませんが……、またいずれ来ます」

「異変は探さないでいいんですか？」

「探しても見つからない時は見つからないですし……それよりは分かりそうなことをやって行きたいです」

「まあ……確かに知りたい事は分かる事ですし私に止める事は無理そうですね」

「無理言ってしまうってすみません」

「モヤモヤを取り払いたいのには誰だって一緒です。分かりました、叶えますよ」

頭痛は引いたものの、流石に今日は継続するわけにも行かず、一度退くことになった。

「では明日は一度休んでください、用があれば来ますので」

「分かりました……」

「それと、くれぐれも夜は外に出ないように……」

「施錠を気を付けます……」

それだけ言うと射命丸さんは会釈して帰って行った。

今日も含めて助けられてばかりな気がする。

「なんで妖怪の山で名前も思い出せない彼女のことを思い出したか分からないけど……」

通っていけば思い出せるかな？」

禁止されていようが無理にでも暴いてみせる。

何か大切な事の気がしたから……

そう思っていた……

…

「天魔様、一体何故ですか？」

「理由を言う必要はあるか？ 彼はこの山を汚した」

「人を嫌うのは分からなくも無いですが……彼が何かしたわけじゃ……」

「河童との建造物、知らないとは言わせないよ？」

「……っ!!」

射命丸文もその事実は知っている。

ロボットと言っていたものを山の中で作っていた事を……

「人と妖怪、確かに仲良くする事は出来るだろう。しかしこの山を人間の好き勝手にさせる気はない」

「彼が言うにはあと少しで忘れた事が……せめてそれだけでも」

「ダメだ、彼を山から追い出す。これは決定事項だ」

「……そんな」

「好きな所に連れて行っていい。だがもう山に立ち入れさせないようにしてくれ」

「……」

言い返す事が出来ずに唇を噛み締めるだけだった。

「それにだ、彼自身間違はなく山に魅入られている。このまま死ぬよりはマシとそう思えばいい」

「……分かりました」

上司には逆らえない、それどころか今の山のトップだ。

それに……彼が危険な山にアリスがいないのに、居続けようとするのも心配に思っていた。

「小野寺さんを山から連れ出します」

それは、少女の悲しい決意だった。

t o b e c o n t i n u e d

三十九話 禁じられた土地～important thing.

翌日、射命丸さんは用があれば来ると言われていた。
だから来たと言う事は用があるって事だが……嫌な予感化する。

「小野寺さん、こんにちわー」

「射命丸さんどうしたんです？」

「いや、久々に山以外行きませんかっ？」

「え？ いや今日休み言ったのは射命丸さんの方じゃ？」

「いいから行きますよ！」

「何かあつたんですか？」

「いえ……何も……」

……当然と言うレベルで挙動がおかしい。

絶対に何か隠しているが。

「なんですか？そんなジロジロ見て……私の可愛さに気付いたんですか？」

「射命丸さん、らしく無い事言いますね……」

「うぐ……私だって乙女なんです、こう思ったっていいじや無いですか」

「それは……確かに可愛いとかは事実なんです……」

と言うか幻想郷の皆は明らかに可愛いし……
射命丸さんじゃなかったら騙されてたと思う。

「……何があつたんですか？」

「いえ、何も無いです……心配する事はありませんってば」

「……だったら今から妖怪の山行つてもいいですよね？」

「ダメです!!」

「何故ですか？」

「いや……身体もまずいでしょうし……」

「だから何があつたんですか？」

「……妖怪の山の現トップから貴方に妖怪の山の追放令が出ました」

「え……?」

「最初に言いましたよね……外の手を加える事を嫌うって」

「何かしました……?」

「河童と一緒に作りましたよね?」

「え?アレは……むしろにとりさんに頼まれたものですし」

「河童に知識与えたの貴方ですよね?」

「まあそうですね……」

「それに対して天魔様がだいぶお怒りのようで……」

「そうですか……」

大きくし過ぎないように……いや十分大きいですが、それでも配慮した気でいたが……
そもそも存在することすら許されなかったらしい。

「申し訳ありません……」

「私もすみませんが……今回の件は庇ってはいけないらしいので」

「……せめてあと一回頂上だけでも」

「ダメです」

「そこをなんとか……!」

「見つければ貴方は高確率で天魔様に殺されるでしょう」

「死ぬくらいなんともありませんよ」

「……貴方は!!」

「どうせ死んだら戻るだけです」

「何を……言っているんですか？」

「死に戻りつて言うんですかね……死んだら元の場所に戻るんです。残念ながら紅霧異変と春雪異変との間ですが」

「寝惚けているんですか？そんなことある筈ないですよ」

「実際に何度か死んでるんですよ」

「……」

その言葉に射命丸さんは黙る。

しかしその顔は怒り混じりに見える。

「……だったら何故貴方は異変について探っていたんですか？」

「死にたくないからですよ」

「だったら今探る事は死に繋がる事では？」

「……死んでも得るべき情報と考えたまでです」

忘れた何かがそこにある。

だから、今見なければならぬ。

「……何を犠牲にしてもですか？」

「ああ、今回の事は命より大切な事だと思ったから」

「……他人の思いを踏みにじっても？」

「……」

「アリスさんの思いを踏みにじってでもですか？」

「……ええ？」

「アリスさんは死に戻りのこと知ってたんですよね？」

「伝えましたから」

戸惑う俺の胸倉を掴む。

え？ 一体何が……？

「アリスさんに異変の時私は聞いたわ、危険なものになぜ行くかって」

「……」

「異変解決のためもあるけど……貴方のために行ったのよ!!」

「苦しつ……」

「死ぬのは恐れてないんでしょ？だったらそれが何？」

射命丸さんの言う通り……なのは分かるが……呼吸が……

「貴方が死ぬるのを知った上で生きてて欲しかったんだから、だからその思いを踏みにじるな」

「ゲホッ……カフッ……」

振り落とされて息を吸う、苦しさにむせる。

「分かった？」

「すみません……。無力な癖に調子に乗っていたようです」

「無力までとは言わないけど……。人間である事は自覚して」

「はい……」

「最初から本当に言うこと無視して連れて行けば良かった……」

「本当にすみません……。そして目が覚めました。ありがとうございます」

「別にいいわ。これが仕事の一環だし」

アリスさんも射命丸さんも、わざわざ戦っているのに……。俺は一人だけ立ち止るどこ

ろか足を引つ張ろうとしていた。

「それで、貴方を何処かへと連れて行かなければならないのだけど……希望はある？」

「希望って？」

「何処でもいいわよ、変な場所選んだら怒るけど」

自由な場所と言われても困るものは困る……

そもそも把握しきっていないものもあるし。

だから……俺は出来る事をだ。

「射命丸さん。」

「文でいいわ。貴方はもう生きると決めたんだから」

「では文さん、次の異変が起きそうな場所って何処ですか？」

「……それを聞いてどうするんですか？」

「その近くをお願いします」

「……散々あれだけ言ってまだ分かっていないようね」

「いえ……違うんですって」

「何がよ」

「アリスさんが言っていましたか……異変の主は時と場合によつては人を殺すかもしれないけど、異変自体は人を殺さないって」

紅霧が出た、春に雪が降つたなどを始め過去に異変が起きたらしいが、春雪異変で俺が死んだもののそれらは直接人を殺すわけではない。

勿論それは異変が解決されたため……その異変が成された時どうなったかを知らな

いからであるが。

「……まあそうですね、異変で虐殺とか起きたら博麗の巫女がどうするかって話だし」

例外といえば地底だろうけど、少なくともその件はさとりにさんに伝えてある。

だから地上が焼き尽くされる事はないだろう。

「俺とアリスさんが一緒に異変を探していたのもそれが理由です」

「……分かったわ、その理由なら手伝ってあげる。幸いその付近には協力者になってくれそうな人がいそうだし」

「本当ですか!？」

「と言うか文さん、異変が起きそうな場所探し当てていたのかよ……恐ろしいな」

「今は迷いの竹林付近に歪な気が集まっているのよ、だからその竹林に貴方を送るわ」

「迷いの竹林……」

地図を見た時は博麗神社の近くだったイメージだが実際はどうなんだろうか？
人里を挟んで妖怪の山と真反対の位置に存在しているって話は聞いた
場所はともかく……そこで何が起きるか……か。

「竹林では、友好的な人間がいるだろうからその人を頼ってちょうだい」

「いいんですかね？」

「どうせお節介焼きの暇人だろうし頼ってあげなさい」

「はっはあ……」

一体どういう人なんだろう？

「それじゃあ、送って私の役目は終わり楽しかったですよ小野寺さん」

「こちらこそ数ヶ月の間ありがとうございました」

文さんにお礼を言いつつ竹林へと運ばれる。

なんだかんだ森だの竹林だのと幻想郷には多いなと思った。

ただ、ここで異変を知りつつ人を頼って生きていこう、そう考えていた。

一つだけ言えるのは、山で死なずにこの異変を知れた事がまだマシだったのだろうか？

異変はただの人間が敵うわけがない、そんな事は当然だ。

しかし春雪異変の真意など、異変の本質を全くもって知っていないなかったため俺は迂闊過ぎた。

悪夢の様な終わらない一日が始まる

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

く終わらない悪夢く

四十話 迷いの竹林くmystery rabbit.

迷いの竹林

ここは名前の通り魔法の森同様迷う場所……本当に幻想郷迷いやすいような……
文さんの話では、この竹林には心優しい少女が住むと言うが、何処にいるんだろうか
？

「と言うかだ……良い人ほど僻地に追いやられてないか？」

アリスさんもさとりさんも、心優しい人達が日陰どころか不便としか言いようが無い
場所に追いやられている気がする。

俺が叱るのは筋違いかもしれないけど。

「とにかくその人を探して会えだっけ……」

文さんでも迷うらしいこの竹林だから少し戸惑うが……

間違はなくこの竹林で異変を感じ取ったと言われた以上は探しながら異変の調査をするしかない。

「まあ今回はあの時のように迷いはしないんだけど……」

今回は秘策がある、文さんにあらかじめ迷いの竹林だつて聞いていたしな。

そして糸を取り出して一つの竹に括り付ける。

長さだけは数キロ分になるまで繋ぎ合わせてきたし大丈夫だろう。

と言うか周囲数キロで見当たらないなら諦めざるを得ないし。

「……ダメそうなら人里へ行かないとな」

そうして糸を握り締めながら竹林へと潜つて行つた。

だが潜つて早々の感想としては、方角が分からない。

方位不明は正直慣れて来た気がするのが嫌だが、糸がなければ今回も同じ目に合っていただろう。

まだ大丈夫だと糸を伸ばしながら足を進める。

「ここら辺はずつと竹と……」

と言うか、流石に樹はあちこちに生えているし当然なんだが、真面目に竹を見たのつて初めてな気もする。

実際に触つてみると硬いんだなつて思う。

「つといけない……いつまでも竹を見ている場合じゃないか」

進んで戻つてを繰り返しながら周囲を散策する。

本当にこの竹林に家なんてあるのか？

「うん……？」

そうしているうちに足跡を発見する。

ただ問題が一つあって……人間の足跡のようではあるが……

「小さいな」

その人が背が低いとかなら分かるけど、それでも子供くらいのとしか思えない。

こいしさんくらいかそれ以下だぞこれ……

「協力してくれるであろう人が小さい可能性もあるが……と言うかこの足跡竹林の外に向かっている?」

正確には外がどつちだか分かり辛いけど、なんとか糸の方向でそうだと考察する。

「追ってみるか……つて……え?」

弛んだ糸を直そうと軽く引つ張る、しかしそれが直らない。

ここで急いで戻れば良かったが、慌てて糸を引つ張ってしまう。

「千切れないようにしたはずなのに……」

切れた糸の端を見て顔が青冷める。

切断面から見るに……切られた？

「誰がこんなことを……」

まさか例の人が？ いやそれは無いと信じたいが……可能性は0とは言いつれない。

「……迂闊だった。手繰り寄せるんじゃないやなくて糸を辿るべきだった」

後の祭りだし切り替えないといけない……

とにかく周囲を散策……

「兎……？」

兎のような耳をした少女が周りをキョロキョロしている。
背はかなり小さい……さっきの足跡もこの子か？

「あのっ……!!」

「っ!？」

こっちが声を掛けると慌てて逃げ出してゆく。

急いで追いかかけようとするが、流石に迷いの竹林の名だけあって見失う。

「驚かせちゃったかな……。」

唐突に声を掛けられたらそりゃ驚くか……

あの子が迷子かどうかは流石に分からないけど……

「オマケに……落とし物までさせちゃったようだし……。」

落とした物を拾う、どうやら刃物のようだが……その刃物を見ると……

「……!？」

糸屑が付いていた、慌てて切れた糸を持つてくると一緒だ……

「あの兎……!!」

まさか切ったのか!?!と問い詰めようと慌てて走り始める。

当然見つからず挙げ句の果てにはつまづいた……

「……真実だったら許さねえからな」

負け犬のように吠えつつ地面から身体を起こす。

目に見えた怪我はしていないようだ……この先が思い知らされる。

「空も……だいたい暗いしな」

竹林の中は元々暗かったが、日光がそれでも差し込んでいた。今はそれも無くなったため夜に近いか、夜になったのだろうか。

「誰か居ませんか!!」

当然誰も聞いていないだろうと思いつつ諦めていた。

「誰? 誰か居るの?」

「っ!? ここです!!」

誰かが声を聞いてくれたようで慌てて反応する。

誰か居たんだ……

「良かった、夜になる前に見つけられて」

銀髪の少女、リボンやら服やら白と赤の二色で髪も含めて単調な色合いをしている。

ズボンを履いているけど女の子かなとは思っている。

幻想郷の子は皆スカート履いてたし自信はあまり無いが……

「あれ？もしかして自分の事を探してたんです？」

「そうではないのだけでも、竹林で一晩迷子にさせなくて良かったってね」

「あー確かにそれだったら辛かったかもしれない」

「私の名前は藤原妹紅、この竹林に住んでいるんだ」

「小野寺蓮司です……つと竹林、つてことは貴女が文さんの言っていた……」

「何を言っているのか分からないけど、今日はもう竹林の外も危険だしウチに来な。事情はその時間くよ」

「有難うございます」

「しかし君も運が良かったね」

「ええそうですね……何も無くて」

「そうじゃ無いよ、明日が満月だから」

「満月だと何かあるんですか？」

「妖怪達が一番力を手に入れる時だから、人間程度じゃねって」

「確かに太刀打ち出来ないどころか、直ちに餌でしょうね」

「そう言うこと。だから今日見つけたのも運が良かったし、明日じゃ無いのも良かったのよ」

「なるほど……」

「とにかく、今日は夜でも問題ないけど……戻るなら早い方がいいだろうし案内するよ」

「有難うございます」

「いえ、家に返してあげられなくてごめんね」

元から恐らくは貴女に用があつたので大丈夫です。

あくまでほぼこの子で確信でいいだろうと思つた。

迷惑はしないようにしないと……

「それじゃあ色々聞かせてもらおうから」

「了解です」

そのまま藤原邸へと案内される。

本当に一軒家建っていたんだなって。

「明日……」

彼女が言っていたように、満月である明日こそ異変が起きそうだと思っている。少しでも解明できたらいいなと思いつつ明日に備え始めるのであった。

t o b e c o n t i n u e d

四十一話 竹林の少女～kind girl.

竹林の中に一軒家に案内される。

正直建物が建っているなんざ思つてなかったが、文さんにあるとは言われていたがさつきは全く見当たらなかったし……

「それで、竹林にどうしたの？嫌なことでもあつた？」

「いや、別に無いですけど……」

「それだったらこつちが近道だったとか？ダメだよ！近くても迷いの竹林に来ちゃ」

「いや、用があつて来たのですが」

「永遠亭？」

「えっ永遠亭？」

そんな場所あつたっけ？

確認不足だったかな……と言うか地図も竹林の途中で切れてた可能性まであるけど。

「だったらどうして竹林に入ったの？」

「えっと……異変が起きそうなくらい竹林に違和感がつて聞いたからです」

「は？なんで明らかに危険なことしようとしてるの」

「調べないといけないからと」

「……事情は知らないけどただの人間がやることじゃ無いよ。大人しく帰って欲しいな」

「……あのそれで、竹林に協力してくれそうな優しい人がいるって聞いたんですけど」

明らかに……この藤原さんだよなあ……

「……竹林に住んでるのは私だけだ」

「異変を解決は流石に無理ですけど……調べたいかなって思ってるんですが」

「そもそもここで異変起きるの？」

「なんだか、普通の竹林に比べて違和感があるって聞きました」

「誰に？」

「鴉天狗の、射命丸文って方ですが……」

「あの新聞屋かあ……新聞は胡散臭いし天狗を信じたく無いのだけれど……」

やっぱり文さん……周りから嫌われ過ぎなんじゃ……？

「ただ、ただの人間に嘘なんて吐いてもメリットも無いし……気を付けた方が良さそう
ね」

「それじゃあ……!!」

「ただ、今日は遅いし……明日は満月、どっちも避けた方がいいかな」

「……満月」

「ええ、さつきも言ったけど妖怪達が一番力を手に入れる日。竹林にも住んでいる妖怪
達がいるし危険だよ」

「……ただそれこそ、明日何か起きそうな気がするんですけど」

「……それもそうね……明日に何か起こる可能性があるなら動かなきゃか……。ただ離れないでよね。流石に君を見失うとどうしようもないから」

「分かりました……ただ藤原さんは大丈夫なんですか？」

「何が？」

「人間なのに大丈夫なんです？って」

「ああ大丈夫だよ、私は戦えるから」

「なるほど……」

幻想郷の女性って本当に強いんじゃないかって思わされるばかりだな……

「とりあえず今日は休んでって事で！枕投げしよつか！」

「え？枕投げですか？」

「一人じゃ出来なかったしね」

「……分かりました」

俺だって枕投げはいつ振りだろうか……

と言うかカツコいいとか思ってたイメージが一気に幼いように思えて来たが……理
想押し付けてもだしなあと。

ちなみに枕投げは楽しかった。

「それじゃあ離れないように」

翌日になって外に出ることになった。

今日は満月らしいから早めに何かを見つけたいが……

竹林内を着いていく、気になった事は藤原さんが通る道は妖怪がチラホラ見える。

「多くないですか？」

「君が言ったんでしょ？今日は満月だって」

「だからですか」

「そうね、妖怪達も待ち遠しそうよ」

「それがいいものなのかどうなのか分からないですけどね」

「探し回るよ」

「はい！」

一応、藤原さんに竹林の道の覚え方を聞いたが無理と言われた。魔法の森のようにはうまくいかないらしい。

「やっぱり……妖怪達がいつもよりも活発になってる……何か起こりそうね」

「何処でか分かりますか？」

「いや、ちよつと厳しいかな」

「やっぱり広いからですか？」

「それもあるけど……そもそも異変が起きるって言っても何が起きるかとか分かってないしね」

「それもそうですね……」

「夜を待ちましょうか……危険だけど」

「その方がいいかもですね……」

夜に行動する可能性が高い以上今寝ておいた方がいいか……

納得しつつ戻って就寝に入る。

今日も枕投げを提案されたが……流石に今日は疲れるとまずいのでやんわりと断つた。

「……ん」

時計を見る……まだ0時か……

藤原さんも寝てるし……何より眠い。

本来であれば起きなければならぬ筈の夜なのに眠気が勝りそのまま眠ってしまう。

「……よく寝……って何してんだ!!」

「うわっ!?!」

その後爆睡してしまい慌てて起きる。

藤原さんを驚かせてしまったようだがそれどころじゃない。

「寝過ぐしました……」

「何言ってるんだ……確かに寝過ぐしかけたけど、まだ夜だよ」

「さつき目を覚ましたときは0時でした……」

時計を見て表情が険しくなる……

針は0時を差している。

「あれ？時間が止まっている？」

「寝ほけただけじゃ無いのかな？」

「とにかく外へ行きましょう!!」

慌てて外へと向かった、見た所何も起きてないように思えるが……

「見て」

「藤原さん、何かあったんですか？」

「空が……」

藤原さんに言われて空を見る。

月があつて星があつて普通の筈だが……

「いや違う……何処が……」

空の何かがおかしい……一体何が……

「今日は満月……」

「月が……欠けているのか？」

「どうやったのかとか欠けたからなんだとかあるが……一体どう言うことだ？」

「大変なことだよこれは」

「え？何がですか……？」

「月を頼りに生きている妖怪達だっているんだ……それが満月が来ないと……」

「なるほど……」

「状況を整理したら向かう場所があるから、着いてきて」

「了解です！」

一度家に戻り準備だのなんだのを始めた。

藤原さんが言うには心当たりがあるらしい。

話を聞いてその心当たりである、永遠亭へと向かう事になった。

：

時同じくして魔法の森には2人の魔法使いが集まっていた。

「アリス、霊夢が言うには妖怪達が夜を止めたらしいぜ」

「そうね、これで時間の引き延ばしは出来た」

「でも今日中に異変を解決するってマジかよ」

「そのために今日まで準備してきたしね……」

「地底だと思っただけだな」

「結局鬼の異変が終わった後、ずっと地底の穴付近で張りっぱなしだったものね」

「なーんか異変対策が無駄になったって感じがするんだけどなあ」

「結局早めの準備になって良かったじゃ無いの」

「それもそうか、満月が無いのは妖怪達にとって良く無いことだしな」

「そうね……」 妖怪の山 〃にいる彼の事も気がかりだし」

「やっぱ小野寺の事が大事なんだな」

「貴女が天狗を追っ払ったせいで彼の話が聞けなかったのもあるのよ!!」

「悪いな、つい泥棒だと思っただしな」

「全くもう……」

「やっぱその……お熱なのか？」

「そんなんじや無いわよ」

「だったらどうなんだよ……同居してたとかもう聞いたぞ？」

「貴女や霊夢とかよりも私の理解者で、……一番大切に失いたく無い友人よ」

そう言つてアリスは貰つた人形の頭を撫でた。

「へえ、小野寺からアリスの面白い話が聞けそうだな。異変が終わつたら逢いに行くか？」

「もう、そんなこと言つてないで早く終わらせるわよ」

「おう」

二人は迷いの竹林、そしてその奥の永遠亭へと目指して飛び始めた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

四十二話 狂気の瞳～Invisible Full
Moon.

藤原さんが竹林を駆け抜けて行くのを慌てて追い掛ける。
家で話し合った永遠亭と言う場所に向かうために。

「永遠亭……そこには月人が住んでるって本当ですか？」

「ああ本当だ、そして月に何かするのならアイツらしか考えられない」

「永遠亭では何をしてるんですか……？」

「患者の診察とか……病気とか怪我とかの治療をしているみたいよ」

「病院みたいな感じですか」

「病院……はよく分からないけど、薬師の真似事してるみたいよ」

「ここに患者つて来るんですか……？竹林深くですよね」

「分からないよ流石に……。ただやりたいからやつてるかもしれないしね」

「今日寄る時に、どう言う場所か確認……。でも異変の元凶だし嫌な予感しかないかな
……？」

「そもそも輝夜の所なんて利用してもロクな目に遭わないよ？」

「元凶に心当たりあるつてような雰囲気でしたし……。やっぱり知り合いなんですか？」

「嫌なほどね……」

「……」

その怒りに込み上げた顔に、続けて質問する事は出来なかった。
触れてはいけない気がしたし……

「さて、もうすぐだよ」

未だに竹林が続いているが……終わると言うならばそうなんだろうなと
妖怪達もだいぶ数が減って来たが……あれ？妖怪に見えない誰かがいる？

「あっ!!」

「どうしたの蓮司君？」

「あの兔……!!」

竹林に入った時に糸を切りやがった兔だ……見つけたぞ!!

「ん？どうしたのお兄さん？」

「糸を切った兎だろ？」

「いきなりそんな事言われても困るんだけど……」

「いや……そのせいで迷ったんだからな!!」

「だからお兄さん、どうしたんだって」

「蓮司君、いきなりどうしたの？」

「あつ藤原さん……実は俺がこの竹林に迷う原因になった兎が……」

「だからー！私は知らないって!!竹林は似たような兎だらけだし誰かじゃ無いの？」

「誰か？何を言っている……？この竹林には兎人はもつといるのか？」

「むしろ竹林にしか兎人は居ないからね……集まってるんだ」

……確かに見ただけでついカツとなってしまうが、別人なら冤罪だし、いい迷惑か。

「すみません……確証がないのに疑ってしまつて……」

「別にいいよ、私だつてこの竹林でそんな事する兎とか許せないしさ」

「……そうなんですか？」

「一応私はここの竹林と兎達のリーダーだしさ」

「リーダーとか居たんですね」

「そうだね……私の名前は因幡てる、竹林内ではトップと思つてくれて構わない」

「小野寺蓮司です」

「で、その兎だっけ？私が探しておくよ」

「ありがとうございます……」

「おい」

「おやおや、どうしました？」

「お前だろ」

藤原さんが会話に混ぜられて来たと思ったらしいきなりお前だろって？

「何のことやら」

「確かにこの竹林には兎は多いが、竹林入口に頻繁に来るのはお前くらいだろ」

「……」

「一体何が目的だよ」

「逆にこつちの話さ、何が目的だったのかってね」

「この異変を解決しないと」

「させないよ」

「え？」

「お師匠様の邪魔をさせるもんか!!」

そうやって何かを投げ付けられる痛い……やりやがったな!?

「待て!!」

「とっ捕まえて話を聞かせてもらわないとな!!」

そうして二人で追いかける。

しかしそれがてゐる罠だったのか……藤原さんとはぐれてしまったのだった。

—————

……迂闊だったってよりは、藤原さんが一人でガンガン進んで行ってしまったため、はぐれてしまったのもある。

「急いで合流しなきゃ……」

迷いながら周辺を探る。

何も無いと思っていたが……運が良いのか悪いのか何か建物に辿り着いた。

「これが永遠亭……?」

恐らくはそうだろうと思いつつ、建物の周辺を探る。

また兎がいるが、先程の探してる兎では無かった。

「あの……」

後ろを向いている兎に話しかける。

髪の色は紫で、てると呼ばれていた兎より一回り二回り大きい。

ただし、耳は同様に兎の耳をしている。

「つ侵入者!」

「いや……そう言うわけじゃ……。ただ探し人がいて……」

「お師匠様達が人間が来るって言ってたけど……まさかもう来るなんて」

「お師匠様……さっきの兎も言ってた……」

「どうしよう……撃退しなきゃダメなのかな？」

「お師匠様って誰ですか？ 一体この異変は何が!!」

戸惑っている彼女の肩を掴む、絶対に聞かなきゃならない事だと。
そして……

真正面からその真っ赤な瞳を覗いてしまう。

「ああああああああああ」

なんだ、何が一体何が起きたんだ？

「瞳を正面から覗いちやダメなのに」

世界が、世界が何か起きて……

「さしずめ、お前はもう狂っている。って所かな」

狂気を操る程度の能力、この能力の一端ではあるが……彼女の瞳を覗いたものは狂気に襲われると言う。

それを正面から覗いてしまった。

「誰だよ!!誰なんだよお前達は!!」

何かに見られている?笑っている?

来るな来るな、俺をそんな目で見るな!!

「もう声は届いて無いかな、とりあえずお師匠様に伝えて来ないと」

その兎は去っていったが、それさえも気付かない。

ただ悪夢に、幻覚に侵され続けている。

「悪夢だ……こんなあり得っこ無い……」

先程までの妙な視線が消えたかと思えば……その跡地に、見知った人達の死体が並んでいる。

異変解決に竹林に潜ったであろうアリスさんが……
俺を助けようとして死んだ藤原さんが……

「やだ、そんなの嘘だ!!」

そんな事あり得るはずがない、皆死ぬ様な弱い人達じゃないし……あり得無いはずなんだ……なのになんで目の前に映っているんだよ!!

「悪夢だ、目の前のこれは全部嘘っぱちだ!!」

堪らなくなって走って行く、後ろから声が聞こえながら。

「置いて行かないで」

「このままだと死んじゃう」

先程見た姿は、腹に刃物が突き刺さっていたり……全身が燃え尽きていたり、身体がもげていたり……明らかに死んでいて喋れるわけがないのに……

「なんで置いて行くの？」

何人ものアリスさんが俺に問い掛ける。

落ち着け……アリスさんが何人も居るわけないし、これはただの悪夢だ

まるで本物にしか見えないけど……本物であるはずが無い。

「そもそも文さんがアリスさんは無事だと言ってたんだ……こんな事になっている筈がない」

目を閉じる、それでも脳裏に焼き付いたように目の前に映る。
俺を責め立てる幻聴が聞こえる。

「これは悪夢なんだ……早く終わってくれ……」

終わらない悪夢は、徐々に少年の心を蝕んで行つた。

t o b e c o n t i n u e d

四十三話 乗り越えられなかった夜～fine souvenir.

迷いの竹林では、新たに二人の迷子が彷徨っていた。

異変があると駆け付けた二人だが、初めて来る土地に迷うのは道理とも言える。

「やっぱり知ってる人頼るべきだったんじゃないの？」

「そしたら遅れるだけだろう？それじゃ負けるじゃんか」

「その結果がこれだけどね……」

「……竹林にいる奴をとつ捕まえて聞けばいいだろ！」

「そもそも行かないでしょ……」

何度も同じ場所を進んでいるような、同じ場所を繰り返しているようなそんな錯覚に追われながら竹林を飛び続ける。

「おおい、誰だー！」

「おっと」

飛び続ける最中誰かが飛んで来て衝突仕掛ける。

慌てて止まって事なきを得たが……いきなりなんだって言うんだ!?

「いきなりぶつかって来そうになって危ないな」

「この先は危ないから人間は帰ったほうがいいよ」

「そんな事言ったって、ここで異変が起きている以上私達には用があるんだよ」

「貴女達も？」

「貴女達……って他にも居たのかしら？」

「っ!! そうだ、貴女達、人を見なかった!？」

「人って……目の前にいるアンタしか見てないけどな」

「そうか……何処に行ったんだ……!!」

「あの、誰か竹林に入ったの？しかも今日？」

迂闊な人間がいるなとアリスは思う。

……よりによって満月なのだから、里の人間だって気を付けるだろうし。

「蓮司……何処へ行ったんだ」

「蓮司……!!?」

「おいアリス……これって……」

「どうした、二人とも?」

「その蓮司って……もしかして小野寺蓮司?」

「……!?!、知り合いか?」

「ええ、彼は此処にいない筈なのだけど……」

「天狗に言われて異変を見に来たらしい」

「……魔理沙!!」

「悪かったって……ただ言ってる場合じゃないだろ！」

「ええ、探すわ」

一緒に来た筈がお構いなしに解散して探す。

異変の解決よりも彼が心配だから……

無事で居て、そう思いながらアリスは竹林を走り回った。

—————

今度は何を見せられるんだ……

何を見なきゃいけないんだ？

いつそ自分の目を扶ろうかとさえ考えたが……目を閉じても見えている以上続くんだらうなつて。

「また誰かが……」

何時間経ったのか、或いはまだ何分しか経っていない程度なのかもしれない。

「いつになったら終わるんだ……」

狂気が終わることがない……それすらも思いながらも苦痛に悶える。

いつそ死んだほうが楽だろうか？

「彼女達は本当に死んでいるのか？ だったら俺はなんで……」

徐々に心が溶けて来た、本当に生きているのか疑念に思えて来た……俺さえも生きているのかって。

「生きている……生きているから苦しいんだろ……落ち着け……」

まだ俺は生きている……きつと皆も生きている。

そう願っていると……竹林が燃え始めた。

「これも幻覚だ……嘘のはずだ……」

灼熱地獄を思い出す、あの時は動けなくなつて……身体が炭になつていつて……

「暑い……暑い……？」

幻覚だろ？なんで暑いんだ？

そう認識してるから？

それとも燃えている……？

「どっちみち……本当でも嘘でも……変わりはないか」

このまま居れば死ぬ……正確には死ぬるなのかもしれないが……

「どうせ死ぬなら諦めたくねえな……」

立ち上がり走り出す。

竹林の妖怪達が燃えている、助けてつて声も聞こえる。

それさえも気にせず通り抜ける……火の無い方へと。

「こっちは火が無い……」

燃え尽きずに済む……そう思って思い切りジャンプして飛んだ。
そしてその先は……

「え……?」

何も無い? 足場がない? なんで?

燃える場所が無かった場所、崖に突っ込んでしまったらしい。

そのまま落下して行く。

「うわああああああああああ!!!」

地面に衝突し、そのまま潰れる……そうなるかと思われていた。
しかし……そのまま穴に落ち地面より深く落下する。

迷いの竹林には噂話がある

竹林には何処かに地霊殿に伝わる通路があると

—————

何処だ此処は……それさえも分からない。

身体は動かないし……見える物はまた吐き気がする。

「こんな動けなくなっても……幻覚を見るのか」

だったらもう死んでしまいたいと……

何か分からない物が俺を殺そうとしている気がする……

「来世はどうなるか分からないけどさ……少なくとも俺はもう疲れたよ。」

来世も幻覚を見続けるのかもしれない……
そしたらどうしようか……分からないや……

「……………誰か？」

足音がする……誰か近くに来ているのか？

これさえも幻聴なのかもしれない……

「……………酷い怪我ですね」

「誰かいるのか……………？いないのか？」

「……………これは……………そうですか」

何を納得したんだ……………？

分かったなら俺を殺してくれ。

「想起 ♪ファイブ♪ スーヴニール」

「何……?」

心から? 何かが届み上げてくる。

楽しかった時の記憶。

地霊殿で皆と過ごしたこと。

アリスさんの所で人形の勉強をしたこと。

妖怪の山でワクワクを沢山体験した事。

これも幻覚なのかな? でもこれはさつきまでの死にたくなる様な物ではなくて……

「助けられなくてごめんなさい」

「さとり……さん?」

さとりさんが目の前に居る……居る筈がない……これも幻覚か。

「久しぶりですね小野寺さん」

「……久しぶりです」

本当に幻覚なんだろうか？さっきまでと違ってしつかりと見える気がする。それと同時に痛みを認識する。

「……痛っ……なんで痛い」

「残念ですが、貴方はもう助かりません」

「そう……ですか……」

口から、身体中から血が流れるのを感じる。

自分の身体がどうなっているのか分からない……

「さとりさん……俺は今回は皆を助けられましたかね？」

「少なくとも、前の週の私みたいに助けられた人は沢山いると思いますよ」

「それなら……良かった……」

「……もう喋るのも辛いでしょ」

「そうですね、眠くて眠くて……仕方ないですよ」

寝てはならない。そうは思っているのに……目蓋が既に閉じようとしている。

「話したい事もありますが……今は眠りましょう？そして……それはまたいつか、貴方と会った時に」

「そうですねか……さとりさん……有難うございました」

「私は何もしてませんよ」

「死ぬ時は、いつも一人だったので……」

「確かに今回は私が居ますけど……」

「さとりさ……前の周も今回も置いていってしまつてごめんなさ……」

最後の言葉を話す前に、身体から熱は無くなる。

ゆっくりと眠り始める。

「……やっぱり、思った通りじゃないですか」

彼に何回謝ればいいのか、彼を何度看取ればいいのか……何度も耐えられる物じゃないと。

また家族になりたいとは思つた……でもその度に何度も私は泣くんだろうなって。ただその言葉をグツと堪えて……

く紅魔館編く

四十四話 進んだ世界く in the summer.

もうこの場所で目を覚ますのは慣れたと言っても過言でない気がして来た、そんないつもの場所。

「……大丈夫かな？」

幻覚の類は一切ない、脳内もスッキリしている。

さとりさんのお陰だと思うけど……地霊殿には行ってないしアレは恐らく幻覚だったのかな？

「どちらにせよ、またさとりさんに助けられたな……」

そのうちまた追い出されるだろうけど地霊殿に向かわないとなつて。

「今は、優先する事があるけど」

アリスさんの元へ行かないと……異変について話さないと……
森へと足を運ぼうと向かう。

「しかし暑いな……」

こんなに暑かったっけ……もうすぐ冬だと言うのに……
不安に思いながらも魔法の森へと足を踏み入れた。

「流石に木陰が多い森は涼しいな。」

魔法の森を歩いて行く、迷いの竹林と違ってこちらは妖怪などが居ないので寂しく感じる。

妖精はいるらしいけど……

「まあ今はそんな事はどうでもいいんだ」

それよりも優先する事があるし……

アリスさんの元へと向かわないと。

「……だ」

覚えていた道筋を辿ってアリスさんの家へと辿り着いた。

そう言えば今回は上海さんが居なかつたな……

「すみません」

ノックをするが反応が無い。

寝ているってことは無いだろうし人形作りに集中しているのかな？

「アリスさーんいませんかー!!」

声を出して呼ぶが反応はない。

せめて上海さんでもいるかと思つたら居ないのか……

「どっかに出掛けている？それだと珍しいが……」

分からないけど留守の様だ。

魔理沙さんの所も確認してみたいとは思つたが、場所を記憶していないし……留守が多いし多分居ない気もする……

「博麗神社……いやその前に人里に行くかな」

博麗神社の近くの人里、前に博麗神社に寄る時に一度だけ行つた事がある。

最初の頃に寄つた集落に比べて、だいぶ賑わつていたよなど。

数日したらアリスさんも戻つて来ているだろうと思ひながら。

—————

人里に着いても、違和感だらけだった。

確かに暑いのは分かるけど、薄着というか……明らかに冬の準備をしていない。

「兄さんどうした？」

「え？ああ宿って空いてないですか？」

「空いているよ」

「それじゃあ……」

と慌てて確認する……危ない……死に戻ったばかりだったからお金なんて持つてるわけ……

「……あれ？」

「どうした兄さん？」

「いえ……一晩お願いします」

「はいよ。」

確認するとお金が入っていた。

しかも盗んだような物では無くて、ちゃんと自分の財布の中に……
何故だ？外の通貨が入ってるわけじゃ無くてこの世界の通貨だぞ？

少々疑問に思いつつ、部屋へと入る。

「やはり変だ……」

今までの流れと違っている。

そりゃ毎回違うのは当たり前だが……それでも今回は……

「あの時は、地霊殿に寄ったとは言え……アリスさんは確か俺が来る前までは冬が近い

し外出する事はほぼ無かったって言ってたんだよな……」

ついつい人形ばかり作っちゃうしいざという時のために上海がお留守番してるって……なのに上海さんすらいた気配は無かったし。

「過去が変わった？」

戻ったのに変わるなんてあるわけないか……

前と同じ事が繰り返されるからこそ、前の事を覚えてる意味があるって思ったんだし。

「……明日主人に聞いてみようか」

死んでから戻ったばかりで脳の整理も追いついていない。今日は一度休まないと、異様な暑さからの寝苦しさを感じながら寝床についた。

「よう、よく眠れたかい？」

「暑かったですけど……無理のない程度には」

「そりゃ仕方ねえか、災難だったな……」

「主人、変な事を聞きますが今何月ですか？」

「あ？七月だろうよ」

「有難うございます」

礼だけして宿を出たが……七月だと!?

冬間近にしては暑いと思っていたが多少ズレているのはあるかと思っただ、流石に夏真つ盛りだとは思わなかった。

「万が一、あの忌々しい冬が終わって、時が進んだのだとしても……それは春では？」

なんで夏なんだ？夏に何か……

「あつた!!そつかあつたな!!」

俺が直接関わらなかつたし、異変も早期解決して記憶から薄れていたが鬼が起こした異変か……その前後にいるって事かな……

「何故進んだのか分からないけど……異変の最中、或いはその前後の可能性がある」

文さんが言うには異変は博麗神社で起きていたと言っていた……

ならば、博麗神社に霊夢さんや、アリスさんとかが集まっているなら家に居なかつたのも理解出来る。

「もしかしたら昨日のうちに向かっておけば良かったのかもしれないけど……」

今となつてはもう遅い、ごねるよりは足を急いで動かさなきゃいけないだろうと博麗神社へと全力で駆けて行った。

「相変わらず段差はキツいな……」

多少の疲れを感じながらも石段を登って本殿の方へと辿り着いた。そこには予想では、誰かが居ると思っていたが、誰も居なかった。

「おかしいな……異変はもう終わったのか？」

過去の約束通り、お賽銭を少しだけ入れつつ周りを探す。

アリスさんとか以前に、誰も居ない様子だ……

「神社を空けていていいのかな……」

そう思いながら探してみるもやっぱりいなかった。ここでも出掛けているのか？

「だったら何処に行くのが正解なのだろうか？」

何処に行つても誰も居ないような気がしつづどうしようか考える
迷いの竹林は……もう行きたくないし……

「……とりあえず、誰か来ても対応出来ないし一度帰りますか」

「あら？ここの神社では巫女だけじゃ無くて神主も雇つたのかしら？」

「え？」

そう言いながら日傘を差した少女が階段を登ってくる。

よくあの背丈で登れたなと思いつつ、一緒に登ってきた隣にいる銀髪の人にも目が行く。
く。

え？カチューシャ付けてるしあの人もかしてメイドさん？

「それで……ここの巫女に用があるのだけど、何処に行つたのかしら？」

「すみません……分かってないです」

「そう、帰って来たら伝えて」

「そう言われましても……えつと」

名前を聞いていないけど、明らかに貴族とかそう言った部類なんだろうなって……メイドとかいるし。

「ああ、そう言えば名乗って無かったわね。正直見て分かってくれるとも思っただけどね」

見た目だけなら少女Aって答えたんだが……明らかに喧嘩を売ってはいけないお金持ちのタイプなので何も言わない。軽率な行動を取ってはいけない気がするし……

「私の名前はレミリア・スカーレット、以降は覚えておきなさい。とても面白い運命をし

「
ている人間t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

四十五話 甘く無い現実～subject of fear.
a r .

レミリア・スカーレット

人間では無く吸血鬼と聞いている……

青みがかかった銀の髪に薄いピンクの、レースをあしらった服

顔つきはこの前の兎同様、真つ赤な目をしているだけで表情には高貴さを感じる気品
はあるものの……あどけなさが残っている。

どう見てもただの少女にしか見えないが……

「翼……」

人間には存在していない異質な物。

翼、それが彼女に生えており人間である事を否定している。

そして何より、春雪異変の前……紅霧異変を起こした張本人だ。

「それで、私は名乗ったのだけど」

「あつすみません、小野寺蓮司と申します」

「小野寺ね、それで貴方は何をしているの？」

「博麗の巫女に会いに」

「巫女に懸想しているようには思えないけど、何かあつたのかしら？」

「異変の相談に……」

「異変ねえ……」

異変と言う言葉にクスクスと笑っている。

一体なんだって言うんだ……？

「小野寺」

「……なんででしょうか？」

「異変はもう解決したわよ」

「え……？」

そんな馬鹿な……あの異変はもう終わって？

「貴方が頼もうとした博麗の巫女が異変を解決したわよ」

「なるほど……終わったなら……良いですが」

「しかし不思議な異変だったわね、宴会だらけだなんて。ウチでもやれば良かったかし

ら」

「違つ……」

その異変じゃない、俺が言いたい異変は……

「何が違うのよ」

「その異変ではないです」

「だったらなんだって言うのよ？変なこと言ったら命は無いわよ」

少なくとも紅霧異変とさえ命は無いだろ？……、ただ嘘を言っても見破りそうなの透き通る目をしている。

……信じてくれるか分からないが、話すしか無い。

「満月が欠けて、夜が永遠に終わらない異変です」

「そんな異変、存在しないわ」

「これから起きます……」

「そう……それで貴方は未来でも見えるのかしら？」

「いいえ、その異変で死んでここに戻って来たんです」

「死んで……ねえ……」

「だから、霊夢さんにお話を……」

…

「あれ？」

俺は博麗神社に居たよな……？

なんでまたここに……

「まさか……死んだのか俺は？」

ここに來たって事は死んだのだとは思う……ただしなんで？

「状況的には吸血鬼、レミリアさんか」

見えないレベルで殺されたと言うことになる……

「近づかない方がいいか……？」

また彼女に殺される。そう思うと身体がゾツとした。

……一瞬で死んだから認識できなかつたんじや無いかつて思う。

「そもそも危険でしかないし……。」

ただ……異変解決には霊夢さん達の力が必要か……

「面白い運命つてのがなんだか分からないけど……」

怖いのは事実だが、もう一度だけ行くか……？

命を大事にしろつて文さんに言われたけど……必死に生きたからこそ手に入れた情報を抱え落ちる方が最悪だ。

「それに、あの吸血鬼は名乗った」

元は敵対しようとする雰囲気は無かった。俺の失言が原因だろうし……失言じゃないんだけど、聞く話では馬鹿にされたようにしか思えないか……

「……話し合える筈だ」

そう思い、同じ行動を取って博麗神社へと向かった。

当然と言えば当然だが……博麗神社で待っていると彼女が来た。

「あら……貴方、待っていたって顔ね」

階段を登って来て俺の顔を見るなりそう呟く。

一応あちらからは初対面の筈なんだが……

「顔に出ていました?」

「ええとても、まるで最初から来るのが分かっていたよう」

「殺されましたからね」

そう言うのと笑い出す、失言ではなさそうだが。

「貴方が本当に殺されたとして、また同じ所に来るなんて馬鹿じゃないのかしら？」

「馬鹿なりに話したいと思ったので」

「へえ……」

そう言いつつ俺の方をじつと見てくる。

背筋が凍りそうだ……

機嫌を損ねていつ殺されてもおかしくないと不安が募る……

「馬鹿だって言う割には心得ているわね。自分は死なないとも思ってそうなら殺したのだけど」

「一度殺されてますしね、もう一回殺すなんて容易……」

「止めなさい咲夜」

「しかしお嬢様……」

「私は止めろと言ったの」

「はっ」

なんだ今？身体が固まった？

話を聞くにメイドが何かをしようとしたのか？

「ごめんなさいね、躰のなっていないメイドで」

「何が起こったかさっぱりなんですけど……」

「戻ったと抜かす癖に？」

「はい、何で死んだのか分かってませんので」

「……」

「何かダメでした……？」

「貴方、名前は」

「小野寺蓮司です」

「そう、じゃあ小野寺……この私に何を望む？」

「滑稽こっけいなお話を聞いて貰もらえませんかと」

「……いいわ、話しなさい」

危ねえええええええええ、こう言う感じの話し方で良かったのか……

前回ワケも分からず殺されて、そのまま会ってムツとすることもあつて強気で出たが

合っていたようで良かった……なんかカッコいい話し方とかに憧れるタイプ？

ともかくこれで舞台は作れた

「この後、秋に異変が起きます。俺はそれを霊夢さんに伝えるために来ました……ついですがこの話をしたら俺は殺されました」

「……」

「心当たりありますか？」

「ええ。最初に滑稽な話つて言うのと、殺されたと話をしていなければ私は貴方を切り刻んで居たでしょうから」

「……お気に召していただけたのなら結構です」

「それで、貴方は何を見たの？」

「止まった夜と、欠けた満月です」

「へえ、それで何が困るの？」

「竹林に住む少女は妖怪達が満月の恩恵を得れずに苦しんでいると」

「なるほどね」

「異変は人間が解決するもの、そう聞きましたから博麗の巫女、或いは霧雨魔理沙さんを頼りにここに来ました」

「面白い冗談ね」

「生きてと言われた俺が命を掛けてこの嘯が浮かんだってわけです」

「秋でいいのね？」

「はい。秋にありました」

「咲夜」

「お嬢様、本気ですか？」

「ええ、咲夜は人間だし私達でも問題ないわね」

「え？」

「どうしたの？貴方が言い出したのじゃないの？」

「それはそうですが……」

「所で、先程の嘶家の様な口調はどうしたの？」

「道化ぶってる方がいいと思ひまして……」

「その理由は？」

「吸血鬼にとって人間は餌だから……ならば人より道化になろうと」

俺はさつきから何を言っているんだろうな。

生きようとするために、口だけがペラペラ話してる気がする。

「道化師としての貴方も面白いけど、人間としての貴方の方が面白みがありそうね、それで居なさい」

「分かりました……しかし何やら嫌な予感がするんですが……」

ご名答と言わんばかりに距離を詰めてくる。

逃げたくなるが、その微笑みに背筋が完全に固まる。

「脆弱^{ぜいじやく}で滑稽な人間よ、紅魔館へいらつしやいな」

わざわざ寄せて、耳元でそう囁くがそれと同時に爪は胸へと触れている。

逆らえば心臓に突き刺すぞと言わんばかりに。

こうしてハイエースと言わんばかりに俺は紅魔館へと連れて行かれた。

t o b e c o n t i n u e d

e. 四十六話 紅魔館と言う場所～can't escape.

デカ過ぎんだろ……と言わんばかりの巨大な館が目の前にある。

紅魔館ってこんなに大きいのか？

そして何より俺はここで何をさせられるんだ？

「どうしたの小野寺、入らないのかしら？」

「入ります。このまま逃げると命が危ういんで……」

「いい心掛けね」

「やはりですか……」

悪意を一切感じられないのがやはり人間との違いなのだろうか……
失礼しますと門を通り入っていいこうとする……

「ちよつと待ったああああ！」

「え？なんですか？」

いきなり声をかけられた。

見た目は中華っぽい？カンフーとかかなこれ？

如何にも戦えるって雰囲気を出した赤髪の人だが……

「なんですかじゃ無いですよ！何堂々としてるんですか！侵入者は排除します
！」

「??」。何を言っているんだこの人は？」

「問答無よ……」

「美鈴、何をしているのかしら？」

「はっお嬢様、今侵入者を排除しますのでお待ち下さい！」

「私が連れて来たの、見えなかったのかしら？」

「え……いえ……お嬢様が友人などを連れて来るなどあり得ないので！」

「咲夜、今日は休んでいいわ。美鈴、貴方が咲夜の仕事の代わりに全部しなさい」

「え……？」

「では、そうさせていただきます」

レミリアさんに頭を下げて休みを貰った……のかな？このメイドさんは咲夜と言う

らしいが正式に名前は聞いていない。

銀髪の有能そうなメイドさんで、なんか特別な能力を持っている様だが……

「ちよつと貴方、貴方が紛らわしいのが悪いんだから手伝いなさいよー」

「ええ……」

「私が連れて来たって事は彼に用があるのにそれさえも分からないのかしら？」

「ひえ……」

「咲夜のお休みが増えて行くわね」

「勘弁して下さいよ……」

そのままメイドさんに引きずられていった……どうやらマジらしい。

「ほら、障害はもう無いでしょ？」

「分かりました」

結局そのまま館内に連れて行かれた。

ボタンつて音したしもう本格的に逃げられない気がして来た……

「さあ、お掛けになったらどうかしら？」

「有難うございます……」

見た事もない調度品だらけで戸惑う。

芸術に関する知識が薄いのもあるが、お金持ちとしか言いようが無いくらいお金持ちに対する語彙力が無い……

「そわそわして、どうかしたかしら？」

「いや……慣れてないですもん……レミリアさんとかとは違った凡人ですし」

「様でしよう？」

「……レミリア様」

「冗談よ。貴方は本当に見せかけ程度で、あの時みたいな事は本気では出来ず、本質的には道化師になれないのね」

「……」

「気を悪くしたならごめんなさいね」

「いえ……問題無いです。意外と話しやすいなとは思ったので……」

「さあて、どうかしらね？」

「そうであると良いですね……」

「所で咲夜、紅茶はまだかしら……」

「……」

しかし誰も反応しない。

「ちよつと咲夜!!」

「あの」

「何よ?」

「確か今日は休みなのでは？」

「……」

「……」

え？もしかして忘れてたのか？

まあいつも頼っているなら、唐突だとうっかりする場合もあるけど……

「美鈴、紅茶はまだかしら？」

「……」

また反応していない。

「美鈴が咲夜の様に呼び声に気付けるわけなかったわね」

「……そうですか」

「……………」

また沈黙が始まる、何をしたって言うんだ……

「小野寺」

「なんででしょうか？」

「紅茶淹れられる？」

「いや……少しは出来ますが……正直まだまだですね」

アリスさんは紅茶を好んでいたし少しは俺も淹れる事はあったが、正直経験が足りない……彼女にとっての紅茶は大事そうだし適当だと怖い。

「……………」

「……………」

少しの沈黙をした後。

「咲夜ー、紅茶ー」

直接部屋まで向かった様だ……………遅しいな。

「今日は休みだったのでは？」

「だって美鈴が紅茶淹れてくれないのだもの……………」

「私基準で考えてもダメです」

「だったら人員を増やしたら良いのかしら？」

「どうするつもりですか？」

「小野寺、異変解決の対価としてここで働きなさい」

「え？」

「え？じゃ無いわよ。タダで引き受けてもらうつもりだったの？」

「……」

「元は他の人に頼むつもりだったし、なんだかんだ攫われたんだが……」

「お嬢様が異変を受けたいから強引に受けたのでは？」

「いいでしょ別に、そんな忙しくさせるつもりはないわ」

「何をすれば？」

「出来る事と、精々話相手くらいいしなさい。私も暇な事が多いし、ここには籠りきりのもいるしね」

「そこまで話せるか分かりませんよ」

「いいえ、断言出来るわ。そのくらい不思議な運命をしているのだから」

何より貴方は私相手に巫山戯ふざけて噺を通したのだからと。

外の話はして良いものかと悩む、それ以前に失態すれば命で払えとかになりそうで怖いんだけど……

「別に何かあつて命をとつたりしないわよ」

「ははは……そうですね？」

「よほどの事がない限りね？」

シヌンダア……つまらなかつたら俺死ぬんだ……

正直プレツシヤー等で、一度死んでリセットした方が楽になれるんじゃないかと考えてしまいが……

異変解決に乗り気だしなあ……もうあの兎の目は二度と見たくないし……

「話し相手になってくれるのならば、改めて貴方を客として迎え入れて、ある程度の事は許容するわ」

正直な話、話す事をどうするかと困っているだけであつて、こつちにとっては願ったり叶ったりなんだよな……

異変を起こした妖怪から話を聞く。

異変自体は話してくれないとは思っているが、それでも分かる事が増えるはずだから。

「逆に……何をしたらダメなんですか？」

「……喧嘩でも売っているのかしら？」

「いえ……飲んででも飲まなくても、それは守らなきゃいけない事なので……」

「なるほど」

どうやら納得してもらえたようだ……知らないうちにタブーとか勘弁して欲しいし。

「今のところは地下に入らなければなんでも良いわ」

「地下ですか……？」

「詮索しないでちょうだい」

「分かりました」

地下に何かがあるのか気になるが……破る意味もないだろう。

そしてそれだけで済むなら断る理由もないか。

「分かりました、話のネタは多くはありませんが話し相手となります」

「そう言ってくれると思つたわ、それじゃあ改めて……ようこそ紅魔館へ。この館の主レミリア・スカーレットは貴方を歓迎するわ」

大変なことになつてしまつた気がするが……

この幻想郷にいる以上大変なのは何処にいても変わらないか。

それなら……世界が先に進むために自分が出来る事をどんどん成して行こうと目標を掲げるのであつた。

t o b e c o n t i n u e d

四十七話 お嬢様の暇つぶしくscarlet lad

y.

話し相手と言っても何を話し出せばいいものやら……
面白ければなんでも良さそうだが、だからこそ難しい。

「こつちに来てからの話……は興味無さそうだし、外の世界の話は避けたい」
何が起くるか分からないのが一番。

最悪な未来も考えている……

「レミリアさんはそうでは無いと思いたいけど……」

ルーミアさんがかつて言ってた筈だが、外の人間は食べて良いと……

少なくとも吸血鬼である彼女にとって人間を餌とする事は可能だろうし……

「下手を言わず話を続けるか……」

「どうしたの？」

「あえつと……」

咲夜さん、なのは分かるが……この人のことはまだあまり知らない……

「そう言えば名乗って無かったわね、十六夜咲夜、紅魔館のメイド長をしているわ」

銀髪でいかにもなメイド服、カチューシャまで付けた徹底ぶりのメイドさ……

うん？メイド長？

「メイド長……ですか？」

「何か？問題でもあるかしら？」

「いえ、若いなって」

もしかしたら一緒に吸血鬼で若く見えるのかもしれないけど……人間だって言ってたよな？

「年齢だけが全てじゃないもの。なる必要があったから私になったのよ」

「そうですか、すみません勝手な決めつけで……」

「構わないわ。それよりどうしたの？」

「ああ実は……レミリアさんの話し相手を頼まれましたが、何をすればいいのかって」

「話し相手になればいいのでしょうか？」

「いや……何話したものかって……」

「呆れた、話題で困っているなんて」

「実際困るじゃないですか」

「話し相手を勤めるって言った癖に話題で困るとか言ってもどうしろって話なのだけ
ど」

「……下手なこと言ったら命すら危なくないですか？」

「……まあそうですね」

やっぱり……死が隣り合わせなんだよな……正直勘弁して欲しい。

「……お嬢様は外に出られないわ」

「え？前に博麗神社に来てましたけど」

「日傘があつたからね。夜はともかく太陽の下を歩けないからそこまで遠くには出られないの」

「確かに……そう言われると弱点も様々ありますね……」

「確か流水もダメなんだっけ？」

「それじゃあ尚更遠くは不可能だ……」

「だからその分、紅魔館の図書室とかで……冒険譚を読み漁ってるわ」

「冒険譚……」

「お嬢様が知らない話なら喜ぶんじやないかしら？」

「……知っていたら？」

「さあ？」

冒険譚は確かにアリだと思うが……さあって怖いんですけど……

「どっちみち逃げ場はないのよ頑張りなさい」

「はい……」

思い浮かぶ冒険譚って何かあったつけと……考えながら、そろそろ呼ばれそうだなと察して部屋へと向かうのであった。

「あら、来たのね？」

「すみません……時間を間違えました!!」

昼だけど、よく考えたら夜行動するんだもんな……

席につきながらもネグリジエ姿の彼女を見て扉を閉める。

「早く入ってきたら？」

「でも今!!」

「構わないわ、それとも話が聞けないの？」

「分かりました」

観念して部屋へと入る。

普段は館内でも外すことないキャップを外しており少しだけ尖った耳がよく見える。

服装はピンク色のネグリジエ……いや詳しく考えるのはやめよう。変態みたいだし

……

「座つたら？」

「では失礼します」

対面の席へと腰を掛ける。

しかし違う違うとモーシヨンをされる。

どう言うことだ？

「そこじゃあ貴方の声届かないでしょ」

そうしてベッドの方を指差し……

「……棺桶？」

「何か？」

「いえ、ベッドの上に棺桶が置いてあつて驚いただけです」

「当然じゃないの吸血鬼だもの」

そうだな吸血鬼だもんな棺桶で寝るんだったな。

「ただベッドの上なんですわね」

「何かおかしい？」

「ベッドから棺桶が落ちたりしたら大変だなんて」

「……大丈夫よ。ええ大丈夫」

「……」

もしかしてよく落ちるんじゃないかと……と、いや……触れるのはやめておこう。
無事じゃ済まない気がするし。

ベッドに腰掛けるが棺桶のせいで狭い……

「それで、何の話をしてくれるのかしら？」

棺桶に潜りながらレミリアさんは待ち望んでいる。

こうなったら腹を括るしかないと……

「大切な人のために死んでも帰ってくる人の話とかは……」

「どうせ貴方の事でしょ？パス」

「じゃあ一人の少女の冒険譚にしましょうか」

「へえ、楽しそうね」

初めは御伽噺や童話の類も考えた。

ただ……それは既にこの世界に流れ着いてるかもしれない……

それだと良くない、何故俺が知ってるのかになる。

「その少女は……」

外の世界の漫画やアニメ、これなら流れ着いている事はまず無いだろう。

冒険譚となるとそこまで種類を知っているわけではないが、最悪それ以外に行けばいい。

「えっと……ワクワクはするわ。ただ言っている事が難しいのだけど」

「あー……レミリアさん人形ってあります？」

「……無いわ。正確には持って来れるのが」

「……？」

言っている事が良くわからないが、無いものは無いのだろう。

「それじゃあ布と糸ってあります?」

「それはあるけど……どうして?」

「人形を作ります」

「……作れるの?」

「習ったので」

自分でもバトルシーンとか説明するのは難しいと思ったし、人形があるところだろうといいかもしれない。分かりやすいだろうし。

「それじゃあ、今日のお話はどうするの?」

「あー……」

確かに話しながら縫うとかアリスさんみたいに器用な事は出来ない。

「今日は作るの………また後日………いや明日って事で」

「………」

やっぱダメだよなあ……

もつと情景とか説明しやすい癖を……

「いいわ、その代わり作ってる所を見せてちょうだい」

「了解しました」

人形劇で使うから見栄えも耐久も良くしないとすぐにダメになってしまう。
だから丁寧到人形を縫う。

「こう言う特技があったのね」

「ありはしますが……説明した所で使うように思いませんでしたし」

「それもそうね」

レミリアさんは縫い終わるまで食い入るように見ようとしていたが、途中で寝てしまったようだ。

そして夜まで何人かの人形を作り上げて、達成感からかそのままベッドに寄っかかるように寝てしまったようだ。

目が覚めた時には、メイド長がナイフを構えながら見てましたとき。

……生きててよかった。

to be continued

四十八話 最悪な一日
messed up day

y.

仕事を覚えようとするなら教えてくれるらしいが……給仕を覚える意味は……無くはないがどうなのだろう？

「どっかに仕える可能性も考えた方がいいのか……？」

実際には分からないけど、それなら給仕も覚えた方がいいかもしれない。

「やいそのの」

「……確か美鈴さんでしたっけ」

「そうだ、じゃあ行くぞついて来い」

「何故でしょう……?」

「お嬢様が彼に仕事を教えるかもしれないって咲夜様に話してたしな、門番の仕事を教えようとな」

「……?」

え? 門番……俺が覚える意味……ある?

「では行きますよ!」

「えっちよわあああああああ」

そのまま外へと連れて行かれた。

「さて、門番の仕事だが分かるな！」

「侵入者から館を守るとかじゃ無いですか……？」

「違う！」

「……じゃあなんでしょうか？」

「侵入者なんて甘い事を言うから忍び込まれるんだ！近付いたもの全てを排除する！」

「ええ……？」

いやそれは……ダメなんじゃ？

客とかも普通に倒しちゃうじゃん……

「お客様とかは……」

「甘い甘い、それだからあの泥棒に好き勝手させてしまうのだぞ！」

「泥棒って……?」

「霧雨魔理沙、図書館から魔導書を盗んでばかりで手を焼いている」

「あー……」

「そう言えば、アリスさんも紅魔館の方でも盗難の被害に遭っているって言ったな

……

「本当にあの節操ないな……」

「なので、周りの人物全員を倒せる力を入れて貰います」

「……俺が?」

「貴方以外誰が居ると?」

「……人間なんですが」

「人間だから諦めると言うのは理由にはなりませんよ？」

「そうですけどさ……」

「と言うわけで実践です！敵が居たら全て倒して下さい」

「……え？」

「頑張ってくださいね」

そう言つて美鈴さんは何処かへと行つてしまう……マジで？

流石に門番が全くいないのはまずいと思われるので代わりに着くが……

「何もしないのはアレだと思つたけど……出来ない仕事はしなくていいって感じだった

よな……………」

戦えやしないのに、なんでここに居るんだろう……

「なんだ？いつもの門番は居ないのか？」

「ああ、忙しいみたいで代わりにやっております」

なんだ？羽が生えてるし吸血鬼……はなさそうだ。

妖精って奴かなこれは？

「なるほどな、入っていいか？」

「レミリアさんから許可を得てます？」

「何の話だ？」

「……お引き取り願います」

「えーなんでだよー!!」

「ダメなものはダメです、帰って下さい。」

「いつもの門番は通してくれるぞー」

「申し訳無いですが……方が一で怒られると困りますので……」

「ぐぬぬぬ……」

「と言うか……美鈴さんいつも通しているんですか？」

「そうだぞ、いつも寝てるから好きだけ通りたい放題だ！」

「……」

もしかして美鈴さん今も寝に行ったのでは無いだろうか？
それなら色々何というか……何というかだ……

「ええい、それなら無理矢理突入だー」

「ちよつと!!と言うかそもそも君達入った所で何も無いだろう!!」

「禁止されてると入りたくなるだろう!」

「そんな無茶苦茶なあ……」

ただの一般人である故に、妖精にすら力負けして侵入を許す。
やっぱり少しは鍛えなきや行けないかもしれない……

「よーしとつげ……」

すると入って行った妖精達の頭にナイフが刺さっていた。

「ぎゃーす!」

「勝手に紅魔館に入るとはいい度胸ね」

この声はメイドさんか?

しかし美鈴さんが仕事代わって今日も休みだったんじや……?

「逃げろー!」

妖精は全力で飛んで逃げようとしたがピチューンって音がした。

大丈夫なのかあれ……?

「さて美鈴、貴方何で……あら?」

「い……こんにちわ」

「……………何してるのよ」

「いやあ、美鈴さんに門番の仕事押し付けられて逃げられまして……」

「……………そう、通したのはクビ上等だけど、無理矢理やらされたようだし今回は見逃すわ」

「ありがとうございます……」

とりあえずは自分の失態を巻き返してくれたし深く問われなくて良かった………そう
なると色々とメンタル的にきついし。

「連れ戻して来るわ」

「お願いします……」

数分後、ナイフにあちこち刺されてる美鈴さんが帰って来た。

えっと……その程度で済んで良かったが正しいかなあ……

「なんでえ……」

「なんでえじゃないでしょ、貴女何やってるのよ」

「いや、門番の大変さを知ってもらおうと」

「人間にやらせる仕事じゃないし、何より見てないと意味ないでしょうが」

「それは……そうですね」

「それよりも貴方も仕事頼まれてたのじゃないの？」

「頼まれては……いきましたけど、今ではないかなって……」

「お嬢様カンカンに怒ってたわよ……」

「…………マジですか？」

これは俺が悪いのだろうか…………？

ただ絶対言い訳聞いてくれないじゃん……

「とりあえず美鈴が全部悪いと伝えておいたから命までは取られないと思うわ」

「…………言ってなかったら命すら危なかったんですか？」

「分からないわ。気紛れだし」

「…………まあこれ以上は死ぬかもしれないんで行ってきます」

「ちよつと！私がいまずくないですかそれ！！」

「自分で撒いた種でしょ？しっかりしなさいな」

「いやだああああ」

「ならちゃんと門番しなさいな」

「します！しますからどうか咲夜様！お嬢様に一言助命を!!」

「しつかりとしていたらね」

そうして紅魔館内に戻って俺は叱られた。

あれだけ言ったのに来ないとはなんだと。

そこまでキツくは無かったが、待たされた事はそれでも我慢出来なかつたらしい……
そりやそうか……相手に事情があつても約束に遅れられたらムツとはするし

「美鈴さんよりはマシだけど……」

あの後また居眠りをしたらしい。

本当に度胸があると言うか何というか……

折檻というか地下送りにされて悲鳴を上げていた。

地下ってそういう場所だったんだ……覗いちやダメだなこりや。

「地下送りだけは気を付けないといけないか……」

仕事は手を抜くつもりは無かったが、一層頑張ろうと思うのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

四十九話　メイドの休みは何処行つた？　maid holiday.

翌日から紅魔館をうろつくことが多くなつた。

忙しそうな場所があれば手伝つたりするのだが……この紅魔館では忙しい場面が少ないどころか滅多にない。

「妖精メイドも数は見かけるんだけど……ほとんど仕事してないんだよな……」

サボつていると言うわけでは無くて、仕事が無くなっているようだ。

これも咲夜さんが全部の仕事をすぐに片してしまふからだが……

「大変じゃないんですか？」

紅茶を淹れて足を止めているタイミングに尋ねてみた。

本当は今聞くことじゃないんだろうけど……それ以外の時間は彼女が捕まらないのだ。

「何がですか？」

「この館を全部一人で請け負うって」

「自分でやった方が一々確認せずに完璧かどうかを分かる事が出来るので」

「それはそうかもしれませんが……」

「任せたとこで、杜撰だったらただ掃除するだけよりも尚更面倒なだけだもの」

「自信家なのは分かるレベルの腕だが……それじゃあちよつと妖精メイドさん達が可哀想な気もする。」

「身体は大丈夫なんですか……?」

「問題ないわ、私は人よりは特殊なもの」

「そうは言っても……」

「だったら貴方は完璧に出来る?」

「え?」

「どうかしら?」

「毎日だと……自信は無いですね」

「そうでしょ、だから気にしないで大丈夫よ」

「そうは言っても心配なのだが……」

休みの日どころか休んでる姿すら見てないし……

「言うのは野暮なんだろうけど……」

少しレミリアさんに聞いてみるか……

多分レミリアさん的にはこれでいいんだろうけど……ただ心配だ……

どうにかならないものかと考えながらレミリアさんの部屋へと向かった。

—————

「咲夜が気になるって?」

「まあ大まかに言うतそうですね……」

わざわざ誤解を招く様な言い方をしているが……大雑把だと事実だし、否定すれば面倒になるのがこの人だ……

「恋人って冗談は面白くないわね」

「遊ばないでくださいよ……」

「小野寺、ワーカーホリックって知ってるかしら？」

「仕事をしなければならなくて、しないと不安になる人ですかね？」

「それもあるけど、仕事が楽しくて仕方ない人もいるのよ」

「咲夜さんはそうだと？」

「ええ、予想は付いているでしょ？」

「……それはそうですが」

「それに、咲夜に仕事時間なんて無いわよ？」

「え？」

「仕事時間がない……どう言うことだ？」

「咲夜には好きな様に働いて好きな時間に休めと言っているわ。紅茶だけは淹れて貰う事があるけど」

「……ありましたね」

「つい最近見たばかりな気がする……
ただ……休みは自由にか。」

「そう言うと、責任感を感じたり……」

「咲夜は無理な時は休める人間だもの、私から言い出す事はないわ」

「そうなんですな……」

「それに、休めと言われて休むのはそれももう仕事よ」

「そう言われると……そう……なのか？」

確かに言われた休憩は取りたい時じゃないのが殆どだし、嫌な事もある。
そう言われると確かに取れるなら言うよりも取って貰うべきだっと思った。

「まあ、そうね……一応私も心配ではあるのだけど」

「……休めって言い出すのもちよっとって話だったって事ですしね」

「そうなる……小野寺、ちよつといいかしら？」

俺は一体何をさせられるのだろうか？

「あつ咲夜さん」

「何かご用でしょうか？」

「資材を運んでいる様だ……何処で使うんだこれ？」

「持ちますよ」

「大丈夫です、やりますから」

「持つくらいなら咲夜さんも見れるでしょう？」

「……分かりました。お願いします」

「……そうして渡されるが……結構重いな。」

これを持ち運ぶのは大変そうだが……

「……お嬢様に何か言われたんですか？」

「え？」

「大方休ませろとか、手伝えとか」

「言われはしましたけど……」

「なら必要ないわ、私は大丈夫だから」

そうして咲夜さんは預けた荷物を取ろうとするが……

「いえ……別に仕事を手伝えって言われたわけではないです」

「じゃあなんて言われたのよ……」

「昨夜さん同様に自由にしていと、俺の場合は紅茶を淹れるでは無く、レミリアさんの話し相手をするってわけですが」

「……そう」

「だから自由でいいなら迷惑にならない様に、咲夜さんの手伝いをすればいいかって」

「貴方じゃ到底終わらないわよ」

「勿論、全部はやれないって思ってますし出来ることくらいですよ」

「……」

その言葉に黙る、あれ?なんか悪い事言ったっけ?

「常人とは違うのよ?」

「それは知ってます」

「時を止められる……だからこのくらいの仕事は短い時間にサッと終わるわけよ」

「……時を……ですか？」

そんな能力があつたんだ。

あの時レミリアさんが止めたのも恐らくそれだろうし……何より、俺が博麗神社で死んだ原因つてまさか……レミリアさんの方じゃ無くて？

ただ今の問題はそこじゃない。

なによりも大変な事が……

「だから心配ないわ、一般人の貴方に頼らなくて……」

「だったら人一倍疲れてるってわけじゃないですか！」

「え?」

「ほら残りの荷物も持ちますよ!全部持ち運びますから」

「え……?」

「やっぱりと言うレベルに凄く重い……」

「ただそれ以上に仕事をしている咲夜さんの方が疲れているはずだ!」

「これなら大丈夫って仕事は俺もやっていきますから、好きな様に頼ってくださいな。その方がいいんで」

「えつと……」

「じゃあ運びますね」

返事も待たずに運び続ける。

重いがなんとか踏ん張ったおかげもあって大丈夫だった。
そしてそのままポツンと咲夜さんだけが取り残される……

「……変な人」

そう言いながらも咲夜さんは微かではあるが、蓮司にバレないように笑っていたのであった。

to be continued

y. 五十話 お嬢様の暇潰し②～vampire lady.

太陽が一番高い頃、レミリアさんの部屋へと赴く。

廊下も夏の日が差しているはずなのだが……涼しくて驚く、なにか魔法の類なのだろうか？

そうして部屋のドアをノックする。

「入ってらっしゃい」

「失礼します」

そしていつも通り人形を使って話し相手をする。

「一ついいですか？」

「何かしら？」

「廊下や部屋が涼しいのって何かあるんですか？」

冷房の類は幻想郷で見たことはないし、何か仕掛けはありそうだが……

「ああ、そう言えば会ったことなかったわね」

「会ったこと？」

「図書館に熱対策してくれる友人がいるのよ、そう言えば最近図書館に籠りつきりね」

「聞いたような聞いたことないような……どっちみち図書館つて入らない方がいいって言ってた場所ですよね？」

「そうね、禁止はしてないけど……絶対迷うからね」

「確かに館も大きいですが……図書館でも迷うんですか？」

「この紅魔館以上に大きいもの」

「……え？」

「魔法でね、図書室を大きくしてるのよ……正直どのレベルかは分からないわ」

「……見ただけでも大きいのに、この紅魔館まだまだ広そうですね」

拷問部屋らしきであろう地下もあるって話だしな……本当に広いな。

「図書館は起きたら案内するわ、だから今はお話してちょうだい」

「分かりました……が本当に好きですね」

「そんなことは無いわ」

そう言いながらレミリアさんがワクワクしているのが伺える、さて今日は何を話した
ものか……

頭の中で物語を思い出しつつ、人形を動かし始めた。

—————

「絶望的な状況の中……少女はどう立ち向かうのか」

「……」

ソワソワして見ているのが分かる。

と云うか寝る前に話すって事だったのに、いつも終わるまで寝そうな雰囲気はないよ
なあ。

「それでは、続きはまた次回」

「は？」

「え？」

「今やればいいじゃ無いの」

「……」

ああそうか、幻想郷にはアニメ等無いから次回へ続くが無いのか……ただ困った、このままじゃレミリアさん寝る前に夕方になる。

……寝なくても良さそうだけど……何か理由は……

「人形を明日までに作るので……」

「あら、人形はあるでしょう？破れたりしてないし」

「数を増やしたいので」

「……この後図書館行くのでしょうか？」

「まあそうですね……その後に作ります」

「無理はするなと伝えた筈なのだけ……」

「やりたいようにやるのは許してくれるって話ですしね」

「結局貴方もワーカーホリックじゃない」

「いやいや、咲夜さんと比べると全然どころの話では無いですよ」

「だったら貴方だって妖精メイド達よりも働いているわよ」

「それはそうかもしれませんが……」

それも全部咲夜さんが頑張っているからであって、俺がやってるって言うよりも完全にやる事が無いような……

「それとも、貴方にとっては働く事が当たり前だったの？」

「まあ、働かないとどうしようもないですしね」

高校生でもバイトだってしたしな。

お嬢様だから優雅に過ごしているし、使用人にも優しいけど……色々とズレている？
咲夜さんにも自由って言うてるし正確なのが分かっていない？

「そう、学生しながらは大変でしょうに」

「それでもないですよ、慣れてしまえば……!?!」

ちよつと待て……今この人なんて言った……？

「クスツ」

「……なんで？」

「外の知識を全く知らないと思った？」

「まさかアニメとか知っていて……」

「アニメ……？いいえ、それは知らないわ。だからこそ楽しみなんだし」

「じゃあなんで……」

「幾ら何でも知らないことを知り過ぎてるからよ」

「それは……話さないと何があるか分からないですし」

「そこまで知ってる事は無いけど、当たったようで良かったわ。それともこれも運命なのかしら」

「運命ですか……」

そうして彼女はクスリと笑う。

「まあバレたのなら仕方ないですけど……」

「妖怪と外の人間の関係については知らないの？」

「……知ってますけど」

「だったらどうなるか分かるわよね？」

「……レミリアさんがその気なら」

「そう、ならいいわね」

首筋へと牙が入る。

直後、虚脱感を感じる……血を吸われている……？

そう言えばそうか吸血鬼だもんな……血を吸ってもおかしくないか……？

「……」

無言で血を吸われ続ける。

このまま渴き果てるのか……

「ふんっ」

「……全部吸わないんですか？」

「吸って欲しかったの？」

「そうではないですが……」

結果的に献血とかよりも吸われた血の量は少ない。

少しでもくらくつとするが問題ない。

「いつもは咲夜から血を貰っているのだけど、貴方が働き過ぎだと言ってたから貴方から貰う事にしたわ」

「言ってくだされれば良かったのに……」

「内緒にしていた貴方へのケジメもあるしね、それに……」

「それに……?」

「いえ、やはりいいわ」

「そうですか……」

何を言い出したいのかは気になるが……今はそれ以上に少しだけ休みたい……

「一つだけ聞かせて」

「なんででしょうか？」

「私が怖くないの？」

「怖いんですけど？」

「え？」

「いや……前にも言ったじゃないですか。恐れているって」

「だったらなんで落ち着いていられるのよ」

「逃げれるなら逃げますけど……ここに来てしまった以上はもう死ぬ時は簡単に死ぬしとは思ってますし」

「軽いのね」

「少し前に見た地獄……あれだけは二度と起こしたくありませんから……」

「だから媚売っておこうと？」

「そう言うわけではありませんが……。後は……」

「後は？」

「怖いですが意外とレミリアさんが優しい人物だって事も知れたので運が良ければ生き残れるかなと」

「運……ね」

「ダメでした……？」

「運命を操る私に対して言い切るなんて大した度胸ねと」

「それ以上に情があるって思うしかないのよ」

「やっぱ、道化らしい部分は見せかけだったのかと思いきや、少しだけ残っているわね」

「不満ですか？」

「いいえ、ただの扱いやすい人間なんてつまらないもの。だからこそ面白いのよ」

「お気に召したようで」

「図書館の友人も気に入ると思うわ、予定通り行くから今は一度休みなさい」

「そうしますね……少し疲れたので……」

「なんだつたら棺桶にでも入る？」

「……遠慮しておきます」

「遠慮なんてしなくていいのに」

笑いながらそう答える。

恐怖はあるって言ったばかりだし、それ以外の意味でも絶対に楽しんでやっってるなこれ……

純粹な恐怖も嫌だが、こう言ったのも正直苦手だ。

「それじゃあ夜に部屋に来るように」

「分かりました」

こうして一度休息をとって図書館へと向かうことになる。

何があるのか、異変についてあつたりするかな……？

……外の世界についてあつたりするのだろうか？

そんな事を考えていた。

t o b e c o n t i n u e d

五十一話 魔法図書館～little demon.

魔法図書館、何が魔法なのかよく分からないがそう呼ばれているらしい
確かに言われた通り広さを感じる。

「どうかしら?」

「正直舐めてたかなって思ってます」

「構わないわよ、正直驚いた顔を見るのが楽しいからね」

「何処が良いのかは分かりませんが……」

「迷わないように気を付けなさい、私でも見付けられるとは限らないから」

「迷いますよねこれ……」

「でしょうね、私ももつと見分けが付くように本の置き方考えてとか言ったのだけどね」

「それで済むレベルじゃない気がするのですが……」

「それもそうだけど、仕方ないわ」

迷いそうだから離れないようにとレミリアさんの方をチラチラ見ながら進んで行く。
しかし曲がり角で彼女の存在を見失う……

「え………?」

迷いの竹林とかみたいに幻覚とか迷う要素は無かったよな？

離れるような事はなかった筈だが……

「……」

一方のレミリアは本棚の上で彼の事を見下ろしている。
飛んで本棚へと乗ったまま彼の慌てる様を見ているのだ。

「さて、暇つぶしにはなりそうね」

「何処ですか!？」

慌てて戻るのが見当たらない。

一人になると不安で出口を探すが……何処だったつけ？

「あれ?ここら辺に小銭を落としておいた筈なだけどな……。」

予め回収されていたそれは見当たらない。

だからこそ目的の場所以上に戻って行って更に迷う。

「行き過ぎた……?」

行ったり来たりするが結局見当たらない。

図書館内だし風とかが吹いているわけではないんだが……

「レミリアさーん!!誰かあああああ!!」

叫ぶが誰もいない……誰かが図書室ではお静かにとか言い出せばむしろ安心するんだが……誰もいねえ……

そのまま辺りを駆ける、途方もなく走り続ければもしかしたら誰かに会えるかもしれないと……

無我夢中に走り続けた。

—————

どれだけ走っても終わりが無い、奥が闇に染まっており壁がない事に少し絶望する。

「誰か……居ませんか？」

希望薄めに探しはするものの、誰も居ないだろうと……
そう思っていたがガサガサし始めた。

「誰だ!？」

慌てて見ると赤髪の少女が……

いや少女と言うには人には無い翼、そして尻尾が生えている。

「……と」

「うん？」

「ボクと契約して魔法少女になってよ！」

「え……? なりま……せんけど？」

「ですよねえ、私もこんなものじゃありませんし、何より今じゃ低級悪魔だつてこんな勧誘
しませんよ」

「え？はい……」

「それで貴方は？忍び込んでるのがバレるとお嬢様に殺されますよ？」

「いや……レミリアさんに案内されて図書館に来たのですが。はぐれてしまいました
……」

「レミリア様に友人なんているわけないじゃ無いですか」

「美鈴さんもそうですがそのイジメ流行ってるんです？」

「別に……イジメってわけじゃ無いですけど」

「イジメにしか思えないんですけどね……」

「それで、図書館に探し物ですか？」

「なくは無いですけど……それよりもレミリアさんを探さないと……」

「あー、確かにそれはそうですね」

「見たりしましたか……？」

「……」

目の前の少女は無言になるが……

「そう言えば見たわ」

少しだけ間を置いてそう答えた。

「本当ですか!？」

「付いて来ててくださいいな」

「分かりました……えつと……」

「……そうね、小悪魔とでも呼んでください」

「小悪魔……さん？分かりました」

自分で悪魔を名乗るんだ。

悪いとは言わないけど、不思議な感じがする……

「何かありました？」

「悪魔って自分で名乗るんですねって」

「契約では無くても、悪魔は悪魔である事を隠しませんよ。本当の名前は伏せますけど」
「なるほど……」

そう言いながら案内された先にはやつと壁が見えた……
壁伝いなら外に出れるかもしれないが……本当にレミリアさんがここにいたのか？

「あの……本当にレミリアさんを見たんですか？」

「うーんこつちの方には来てないんじゃないですか？」

「え？」

そう言うのとポスンと身体を預けてくる。

……どう言う事？

「あの気難しいお嬢様が気にいる人間だなんて興味が湧きました」

「……殺意を向けられるよりはマシですが……色々とツツコミたいんですが」

「不満ですか？」

「えっ？て言うか戸惑っているんですが」

「全て私に任せて……っ!？」

慌てて小悪魔さんが離れるが何が……

それと同時に何か隣を過ぎて行って……目に入った時にはそれが槍だと悟った。

「やだなあ、お嬢様……彼は心配してたんですからもつと早く出てあげればよかったですかあ」

「遺言はそれだけ？」

「いやいやいや、なんで急に殺伐になってるんですかあ？」

「私のに手を出そうとしたじゃない」

「ん？」

レミリアさんになった記憶はないんだが……

と言うか槍のせいで尚更恐怖度が増しているんですが。

「そんな気に入ったんですか？」

「別に、ただ見てない所で掠め取ろうとしたのが気に入らなかっただけよ」

「色々と理不尽だあ」

「……と言うかレミリアさん見てたんですね」

「ええ、ずっとね」

「わざわざ放置してたと」

「その方が面白いじゃない」

「……」

本当にこの人は他者をいじめる事に事欠かないんだろうな……

「つといつまでも構ってる場合じゃなかったわね。パチエは何処かしら？」

「……パチユリー様ならいつも通りの場所に居ると思いますよ」

「そう、分かったわ」

「パチュリーさんって人がここの図書館の……」

「ええ、貴方が思っている通り、図書館を魔法で広げた魔法使いよ」

「なるほど……と言うか用があつたんですね」

「ええ、結構大事な事がね」

「大事……？」

「貴方が……いえ、後で話すわ。今行きましょう」

「分かりました」

そうしてパチュリーさんの元へと向かう事になった。

……大事な話、俺も関係してそうなんだけど、一体何を話す気なんだろう？

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

五十二話 日陰の少女～locked girl.

パチュリー・ノーレッジ、またの名を知識と日陰の少女

ここの主はそう呼ばれているらしい。

そして……目の前にいるこの少女こそがその人物なのだろう。

俺達が来たのにも気付かないレベルで黙々と本を読んでいる。

「今なら何しても気付きませんよ？」

「……何を言っているんですか!？」

「いいの？好きにしても気付かれないのよ？」

「レミリアさんまで何を……」

「つまらないわね、男でしょ？」

「問題起こすなんざよりマシだと思いますけどね」

「つまらない男はモテないわよ？」

「モテる代わりに命の危機は勘弁なんですけど……」

「まあいいわ、用があるのだから呼びなさい」

「……俺ですか？」

「貴方以外に誰が居るのよ」

「……分かりました」

そうして彼女に声を掛ける、しかし反応しない。

「…………失礼します」

そうして彼女の肩を叩く、しかし反応しない。

「…………どうしろと?」

「さあどうかしらね?」

笑ってるし…………これでも気付かないならどうすっかな。

「ほらほら、どうするの?」

「なんでむしろ気付かないんですか?」

「知らないわよ、それで分かったでしょう?パチエは何しても気付かないのよ」

「……むしろなんでそこまでやらせたがるんですか？」

「わざわざ来たのにスルーされるのも癪じゃない？」

「それはどうかと思いますが……」

「それで、どうするのかしら？」

「……こうしますよ」

少女が読んでいる本を取る。

目線で追って行くが、目線外に動いた事でやっと気付く。

「何……誰？」

「小野寺蓮司と言います……ずっと反応が無いためやむを得ずこの対応をとりました」

「……レミイもいるのね。と言うことはお客様と言う認識でいいのかしら?」

「……そうですね、お邪魔させていただいています」

「図書館から滅多に出ることはないけど、よろしくね」

本の虫ではあるものの、常識人とは思えない。

咲夜さんも常識的だが……それ以外のメンツが……ねえ……

「それで、レミイも来たと言うことは何の用かしら?」

「一応、俺の案内には言われましたが……」

「何も無さそう……ではないのよね。用件を手短に言ってくれと有り難いんだけど」

「まあ、それは後にするわ。今は新人も来たしそちらを優先させましょう?」

「……分かったわ」

「別に用があるなら優先していただいても構いませんけど」

「いいのよ、まずは互いに知り合いなさい。パチエの胸を触っただけじゃ物足りないでしょうし」

「触りませんでしたよね!!」

「あらどうだったかしら?」

おい!!勝手に嘘を吹き込んでるんじゃないよ!!
ほら、パチユリーさん俯いちゃったじゃない!!

「してないです」

「そう……」

信じてくれた……？のかは分からないけど今はそう思っておくとしよう

「この図書館を拡張させたって聞きましたが」

「ええそうよ。このくらい無いと本が収まり切らないもの」

「ここまで必要なんですね……」

「これでも足りないくらいよ？」

「うわあ……」

ビブロフィリアって言うんだっけ？確かここまでの本狂……いや本好き。

「全部覚えられるんですか？」

「当然でしょ？」

「俺、一冊を完璧に暗記するのすら厳しいんですけど」

大まかに覚えているのはあるが、一冊であつても所々抜けが出てしまうだろう。

「それはそれぞれだし仕方ないわ。魔法使いなら頑張つて欲しいけど」

「えつと……魔法使いでは無いです」

「でしようね妖怪さん。なんの妖怪かは分からないけど」

「……人間です」

「え？」

「人間ですが……」

「冗談でしょう？」

「見えないですか……」

「……レミイの婚約者？」

「なんでそうなるんですか!!」

「それでも無いとレミイに人間のお客様なんてあり得ないわよ」

「相変わらず言われてますね……」

「パチエ、私がおかしいとでも？」

「人間は玩具だ餌だと言って下等扱いしている貴方が突然彼をお客様として扱うなんて

異常なのよ」

「そうかしら？」

「みんなにも言われているでしょうよ」

確かに言っていたが……友達がつてより、人間を対等に扱っている事が異常だったのか……

「それに、貴女に友達が出来るとも思わないし脅して恋仲にでもなったとしか思えないわよ」

あつそつちも間違つてないんすか。

「さあ、どうかしらね。」

「脅されてるなら言つてちょうだい、流石に友人の凶行を黙つて見過ごすのもいい気が

しないわ」

「酷い扱いじゃない」

「それぐらいの事をしてるのよ……」

なんだか予想以上にやばい事に巻き込まれているんすか俺？

「まあ、どうしようもない時は図書館に来るといいわ。ただし、気付かないと思うけど本は取り上げないで」

「了解しました……」

そう言えば正面から見てなかったが、目尻に涙が溜まってたし本を取られて泣いていた……？

いや流石に読んでた本に感動しただけか……

「それで、貴方も何か読みたい本があるかしら？」

「読みたい本ですか？」

「ありとあらゆる本が置いてあるから、予想していなかった本まであると思うわ」

「それじゃあ外……いや……」

もしかしたら外の世界への手掛かりがあるかもしれない。

実際に出るかではなくて、確認するだけだが……それを今伝えるのは厳しいし、レミアさんに明らかに聞かれてはならない事柄だろう……それはまた今度にしよう。

「……なんでもある」

なんでもあるなら今の自分にとって何が必要か……

魔導書？人形本？いや違う

避けてはいたが避けては通れない事がある。

「パチュリーさん、永遠亭についての本ってありますか？」

「……あるはずだわ。小悪魔案内してあげて」

「かしこまりました」

「よりにものチョイスで驚いたけど、満足いくといいわね」

「はい」

そうして俺は案内された。

そこは幻想郷の歴史みたいな場所で。年表を始め様々な過去の出来事の本が置いてあった。

「これか……」

そうして……迷いの森や、永遠亭についての本があった。
これで少しは知っておいた方がいいだろう。
今度こそ、あの異変を終わらせるために。

t o b e c o n t i n u e d

五十三話 自慢の自慢の大図書館～mystery
and memory.

永遠亭、ここにあるって事は古くからある場所なんだろうけど……
それでもよくあるなと思いつつも案内された場所へと向かう。

「ここがそうですね」

「探すのは大変そうだな……」

「ここからここまでですよ」

「多く無いですか？」

「それでも無いと思いますけど……」

そう言ったつて1冊あるだけでも驚きなのに、数冊あるなんてマジかって思うわ。

「それじゃあ、待ってますので終わったら言ってください」

「あれ？戻らないんですか？」

「戻って欲しいんですか？」

「いえ……そう言うわけでは無いのですが」

「それに帰っちゃっていいんですか？」

「なんでですか？」

「また迷うと思われれますし、大丈夫なんですか？」

「それもそうですね……そっちの事を全く考えて無かったです」

「それに……」

「？」

「あの時と違って今度はお嬢様見つかりましたよね」

「確かにそうですが……それがどうしました？」

「さっきの続き、 出来ますよ？」

そう言いながら小悪魔さんが近づいて来る。

その顔は妖艶さを秘めている。

「小悪魔さ……」

「さて、小野寺さん……どうしたいですか？」

「……」

慌てて本の方を見る、ついついそっちの方を見掛けるが……今はこっちに用があるんだろう!!

「ふふふ、いつでも言ってくださいね」

「やめてください!!」

本気なのか遊ばれてるのか分からないまま、多少そっちに気を取られながら本を漁り始めた。

「永遠亭については……これか……。こっちもそうだけどまずはこれから」

永遠亭……そこには月人が住んでいて……いきなりなんだこれ？

「月の住人……？月に人なんて住んでいたのか？」

八意永琳……蓬莱山……てるよ？

「いや違うか、読み方はかぐや……かぐや姫!？」

どう言う事だ……？かぐや姫が実在しているのか!?

物語だと思っていたのに……

「因幡てゐに……この兎は……!!」

鈴仙・優曇華院・イナバ……間違はなくこの兎だ……兎でいいのか？

能力は……狂気を操る程度の能力……これか。

「幻覚……発狂……これは……」

アリスさん達も、レミアアさん達も危険だと思う。

自分でその恐ろしさが分かっているからこそ……尚更そう思う。

「瞳を見なきやいいのかな……？」

他のメンバーの確認もするが……薬を作ったり幸運だったり……対応しようがないか？

そう思いながら次の文を読む。

「……………え？」

不老不死……？妖怪みたいな長命じゃなくて……永遠亭の蓬莱山輝夜は不老不死……？

不老不死の薬は物語ではかぐや姫から渡されて富士山で焼いたんじゃないのか？
本人が飲んだのか？

「老いる事も死ぬ事もない……俺は戻るから違うんだけど……それでもこう言った事を知っているかもしれない」

会いたい……会って話を聞いてみたい……

「ただ……今は無理だろうな」

明らかに異変を起こす寸前だし今行言っても前のように。

……もうあの瞳は勘弁してくれ。

「どうですか？」

「小悪魔さん!？」

何かして来たわけではないが、つい身構えてしまう。

さっきのあったし仕方なくはあるが。

「いきなりその態度はこちらとしても悲しいんですが……」

「申し訳ありません」

「構いませんが、大丈夫そうですか？」

「はい、レミリアさんとかにも伝えたい事が出来ましたし」

「では戻りますよー」

小悪魔さんに連れられるまま元の場所へと戻った。

絶対小悪魔さん居なければ迷ってたなこれ……

蓮司が書物を漁りに行ってすぐにレミリアは話し始めた。

「彼はどう思う？」

「どうって言われてもまだ分からないわよ……少々特殊には感じたのだけど」

「まあそれでいいわ」

「……何隠してるのよ」

「いずれ彼から聞きなさい」

「……そもそも彼、いつから紅魔館にいるのよ」

「だいぶ前、とだけ伝えておくわ。貴女がずっと図書館から出なかつたのだもの」

「……それで、用件は？」

「後一月程で異変が起きる」

「根拠は？」

「さあどうでしょうね、それで私と咲夜で異変を解決しに行くわ」

「異変を解決？ 貴女が？」

「ええ、異変を起こせる私にとってその解決なんて暇潰しよ。つまらなければ丸ごと潰すわ」

「……面白ければ？」

「全力で潰すだけよ」

「……」

「何かおかしいかしら？」

「おかしさしかないのだけど……妖怪が異変を解決するの？」

「あくまで咲夜が解決すれば人間が解決したってことになるわ」

「屁理屈じゃないの」

「何か悪いかしら？」

「……しかしそれでも随分と唐突ね、そしてそれを私に伝える理由は？」

「その間、妹と彼の事を頼むわ」

「妹の件は分かっているけど……彼もなの？」

「ええ、ちよつと死んでは困るの。お願いしたわ」

「何？さつきは巫山戯て言ったけど……本当に彼に惚れ込みでもしたの？」

「色恋なんて、人間らしい事は正直どうでもいいわ」

「でも惹かれているのかも？」

「さあね、面白いかどうかだけ。そう言った感情はどうでもいい」

断言するように言い切る。

彼を他の人間と違うようには見ているが……ただそれだけだ。

何より死んで世界が勝手に戻されるのは苛立つし。

「……どうでもいい……としてもレミイが本当に入れ込むなんてあの時以来ね」

「あの時……？」

「……なんで貴女が覚えてないのよ」

「そんな記憶はないもの」

人間は彼と咲夜以外誰かいた？

気に入らない巫女達の記憶しかないけど。

「……私は興味が無かったから顔を合わせなかったけど人間の男がいたでしょう？」

「いつの話よ」

「去年の話よ、貴女がその事を話したんでしようよ」

「……え？」

自分にそんな記憶はない。

パチエは何のことを言っているのだろうか？

「……そもそもレミイ……貴方が異変を起こしたのつてその彼が貴女を唆したからでしよう？」

「いや……私は自分で異変を……」

起こしたはずだ……だつてそんな記憶がある……

多少抜けてる気がするが……それでも異変は起こしたしパチエの言う男の記憶はない。

「その男の名前は？」

「知らないわよ、そこまで聞いてなかったし」

「だったら他に特徴は!!顔が良いとか背が高いとか……変な言語で喋るとか」

「そんな事も話されてないから分からないわよ……と言うか急に迫ってこないでちょう

だい」

「……ごめんなさい」

「でもそうね……一つだけ言っていたのを思い出したわ」

「聞かせて」

「貴女は私に、まるで道化師の様な恐れを知らない話し方が気に入ったって言っていたわ」

t o b e c o n t i n u e d

五十四話 地下の騒音く nothing to know

W.

「小野寺、図書館にでも行って来たかどうかしら？」

「え？急にどうしたんですか？」

「そのついでにパチエを呼んできてちょうだい」

「用件があるならそう始めから言えばいいのでは……？」

「……」

「すみませんでした」

不機嫌そうになるレミアさんの顔を見てそれ以上は何も言わないことにした。
そのままレミアさんが用があると図書館のパチュリーさんに伝える。

「分かったわ」

「やけにアツサリですね……」

「何か？」

「いや……パチュリーさん籠っている割には簡単に出るんですねって」

「それはそうよ。だって……いえ、今はいいわ」

「？」

「私が帰ってくるまで図書館から出ない事、何かあったら小悪魔に言いなさい」

「分かりましたが……気まずいんですが」

「どうして？」

「遊びなのか本気なのか分かりませんが……迫られてまして……」

「あら？男冥利に尽きるじゃない」

「はあ……」

唾然としながら、パチユリーさんを見送った。

その直後耳をピョコピョコさせながら小悪魔さんが出て来た。

「男冥利に尽きるですよー小野寺さん」

「そうですか」

「なんかアツサリとしてますね今日は」

「ペースに乗せられるとロクな目に合わない事を分かっていますので……」

「Booo!」

「膨れたって困ります……」

「もう……可愛げがないですねえ」

「可愛いと言われて喜ぶ男は少数ですよ……」

「じゃあ少数なんですなね！」

「……それで、パチュリーさん達は何の用があつたんですか？」

「うん？」

「いや、何か重要な用があったんですよね？」

「それはそうだけど……お客様にはあまり伝えたくないかな」

「伝えたくない……？」

「すみません……」

「……いえ、構いませんが」

俺に伝えられないってことはなんだろうって思うけど……

もしかして人間だから？

「（人狩りとかしてるのだろうか？）」

流石に目の前に小悪魔さんが居るのに言い出しはしないが……その可能性すらも考えられるんじゃないかって。

「顔色が悪いですがどうしました……？」

「いえ……大丈夫です」

「……！ああ一つだけ言っておきますと非人道的な事ではありません」

「そうなんですか……？言えないからそう言うこととばかり」

「……ただの身内の恥ですよ」

「……フラン、またなの？」

紅魔館の地下、レミリア・スカーレットは現在そこに居る。

その先には閉じ込められた部屋に一人の吸血鬼がいた。

フランドール・スカーレット

レミリアの妹であり、髪の色は金髪でその翼は七色の水晶で飾られている。

「魔理沙は？」

「魔理沙は来てないわよ」

「なんでなんで!!魔理沙は来てくれるって言ったのに」

「……そのうち来てくれるから待ちなさい」

「嘘」

「……何がよ」

「来てくれないんでしょ？」

「私にだって分からないわよ」

「そっかー、そっかそっか。魔理沙は？を吐くんだ！」

フランは拳を握る、それと共にドアが壊れる。

「……落ち着きなさいフラン、いい子にしないと来てくれないわよ」

「どうせ来てくれないもん……だから会いに行く」

「ダメよ……」

粉々にされた扉を見ながら制止する。

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力。

その名前に恥じない事はこの扉が証明してくれている。

「フラン……」

「あっはっはっはっは。」

「咲夜、パチエ……やるわよ」

二人に言って妹を止めようと動き始める。

三人でも精一杯なのだ……

「くっ……」

どうすればいいのか。

いつも通り行けばいいが……毎回うまく行くか不安がある。

「ダメだよお姉様、余所見しちゃ」

「うあっ……」

直撃を避けるが……破壊された床に足を嵌めてしまう……次は避けられない。

「フラン……」

「バイバイお姉様」

どうにか躲そうとするが……遅れる。

全く……小野寺を死なない様に避難させたのに自分が死ぬなんて……

「……お姉様？」

「どうしたのフラン？」

「お姉様……それ何？」

フランの狂化が少し治まった？
一体何に興味を持ったの……？

「それ……人形？」

「ええ……人形よ」

小野寺が物語に必要なだからと言って作った霧雨魔理沙の人形。
何故幻想郷の住人を人形に……？と思ったが結果的に助かったかもしれない。

「フランお嬢様、それは霧雨様がまだ忙しくて来れないからと。」

「ええ本当!？」

「咲夜……。」

咲夜は口到人差し指を当てる。

喋るなって事だろう。

「本当は弾幕ごっこしたいけど……早く来ないかなー」

人形をズタズタにしながら喜んでいる。

もうアレは人形の機能を成していないが……フランが落ち着いたならいいだろう。

「意外な才能と思ったけど……私だけじゃなくてフランにも効果があったのね」

「それで、どうするのレミィ」

「どうするって?」

「その人形を作った彼の事よ」

「……そう……ね」

元々彼は暇潰しも兼ねて招いた人物だ。

それがこの紅魔館に必須の人物となってしまうたならどうすればいいのだろうか？

「彼が紅魔館から去るって言ったら大問題よ」

「媚びでも売っておくべきかしら？」

「似合わない事はするべきじゃ無いと思うわよ」

「でも男なんてそう言うのでイチコロでしょうし」

「小悪魔に迫られて困ってると言ってたけど？」

「……万策尽きたわ。」

「早過ぎないかしら？」

「だったらどうしろって言うのよ!!」

ウーウー言いながら文句を言う。

本当になんでこんな悩まなきやいけないのか理不尽だ。

「……普通に頼めばいいんじゃないの?」

「それは私のプライドが許さないわよ」

妹の為ならなんだってする気でした。

その妹が少しでも暴れなくなるって言うなら嬉しい事この上ない……

まだ外には出せないかもしれないけど……人形は壊しても手当たり次第壊すことが
無くなれば……

「……。」

「……対価は保留にしたら?」

「……そうするわ。」

悩めば悩むほど分からなくなる。

彼にはお願いするとして、褒美は後で考えましょう。

妹が落ち着ける事を願いながら、いつかまた二人で館の中で笑い合えると信じて……

t o b e c o n t i n u e d

S. 五十五話 自分なりの上海人形～what's this.

「人形を作れ……か」

レミリアさん本当に気に入ったんだなど。

アリスさんに教わった事を無駄にしないからいいけど……このままじゃ俺も人形師になりそうな気もする。

「外の世界でも食っていけるよなこれ……」

師匠が優れ過ぎていたのもあって戻れたとしたら将来設計が安心出来るかもしれない。
い。

……そもそも現状は外に戻れる手筈がないのだが。

「図書館に行けば何かあるかもしれないけど……」

図書館に殆どの物があるって言ってたし……加えて外の人間は殆どが餌になつてゐるって事は幻想入りする人間は少なくとも他にも存在しているって事だ。

「ならば本はあるとは思う……。」

問題はそれを読む事をよしとしてくれるかだけ……

……レミリアさん所かパチュリーさんにすら見つかるとまづいかもしれない。

「今は……先に頼まれた人形を作りますか」

「何をしている?」

「あつ美鈴さん。今日は休みですか?」

館内で会うのは珍しいな……いつも門番しているイメージあったし。

「そうだな、四六時中仕事しているわけでもないし……休日だって時折ある」

「……」

門の近くを通るけど普段から寝てるし、ある意味仕事が休日なのでは無いだろうか？

「で、何やってるかですが……レミリアさんに頼まれて人形を作るところです」

「ああ、お嬢様が大層ご機嫌になる奴か」

「人形で喜んでいただけるなら嬉しい限りですけどね……」

「そうだ小野寺！私をイメージした人形も作れないか？」

「美鈴さんをイメージした……？」

「お前なら出来そうだしな！」

出来そうって理由で押し付けるのが一番良く無いんですが……
それで美鈴さんのイメージ……？

「……一応試してみます」

「そうか、出来たら教えてくれ！」

そのまま美鈴さんは去って行く。

イメージと言うか……ひとつ浮かんだ物はある。

上海人形、アリスさんが一番大事にしていた人形。

俺も作れない物かと……完全に一緒にはなる事はないしさせるつもりは無いが、自分
なりの上海人形を作ってみようと思った。

—————

「頼まれた魔理沙さん人形は作ったけど……」

この前作ったような……？作ってなかったっけ？

いや作ったな……あれはどうしたんだろう？

「気にしても仕方ないか……」

自分だけの上海さんを作ってみようとする。

服装は上海さんは青だけど美鈴さんを考えると緑で……

「顔付きはどうしようかな……イメージって言われたし完全に被せるのも違うな……」

着々と進めて行くが……そこで問題が生じる。

つついイメージしてチャイナ服を作るが……センチティブだなこれ……

「いや……流石に人形にチャイナ服は変態って言われるかもしれないしな……」

だから切れ目も縫い付けて……いつそ洋服みたいに上と下別にするか……その方が問題ないだろう……

「スカート……でなんか言われるのもやだな。」

普段はスカートなんて気にしてないんだが……一度気にし始めてしまったせいで、余計に気になってしまってスカートも違うんじゃないかと陥ってしまった。

「……上海の服装をどうするか」

その結果……だいぶ迷走してしまったのだろうと自分でも思う……

「なんだこれ」

人形だけならまだマシだった、出来栄も自信があったし。

ただ……最初のチャイナ服からなんか人形に着せる服じゃないと迷走し始めたのが

行けなかった……

「……その結果が……これか」

外の世界ではジャージと呼ばれていた物になってしまった。

これだったらチャイナ服の方が良かったと思う。

「服装だけは悪いけど……この子も大事な子供の一人だし……無碍に扱うわけにはいかないよな」

人形を大事にする。

フランドールの元へと送られた人形がどうなったのかを知らないまま、アリスさんの教え通りに大事に扱う。

「ただ……この服は本当に大事に扱っているのだろうか？」

考えてみよう……親として……娘がジャージを着ていたら……うん悲しいかな。

「作り直そ……」

「出来たか!!」

「うわっ!？」

ノックもせずにドアがバンと開かれる。

ひっくり返るまではしなかったが、ビクツとする。

「おー、ちゃんと出来ているじゃないか!!」

「美鈴さん……ノックはちゃんとしてください……」

正直心臓に悪いんで……未だに吸血鬼の住処という事で夜も怖く感じる時もあるのに。

「……はい、気を付けはする」

返事はするもののこっちは向かず人形の方見ており空返事だ……本当に大丈夫か？
と言うか人形も人形で大丈夫か？

「ふむふむなるほど」

「……」

本当に分かっているのか疑問に思いつつ答えを待つ。
この子はウチで引き取って作り直しだと思っけ……

「気に入った!!」

「え？」

「え？つて自信作なんだろう？この人形は」

「いやちよつと服g ……。」

「分かるぞ！服が一番力を入れたんだろう!!」

話を遮る勢いで喋って来て反論し返せない。

と言うか……時間は色んな意味で掛けたけど力はどうだろう？

「この服装が特に気に入った！なんて言うんです？」

「えつと……ジャージ？」

「ジャージですか、お嬢様に頼めば私も用意できるかな」

「え？」

「どうした？」

「着たいんですか……?」

「偶にはこう言う服もアリかなって。いつもチャイナ服ばかりですし」

「確かに何処かで売ってるかもしれませんが……」

「何より、動き易そうですしね。」

「あつそれははい……動き易いでしょうね」

「元々体育とか運動用の服だしな……そりゃ動き易いだろう。」

「この服だと蹴り上げると見えてしまうので……」

「そう言う話はどうでもいいですから……」

「それではこの人形貰ってく。ついでに咲夜さんにこの服あるか聞いてみるとする」

「……分かりました」

まあ美鈴さんは確かに門番だし……動き易い意味では正解と考えよう……絶対に門番がする服装ではないけど……

「最悪なのはパチュリーさんとかだしな……」

パチュリーさんは運動あまりしないって言ってたし……ジャージは楽だから慣れると多分後悔する事になるし……

レミリアさんもお嬢様としての品格が消えるし……やっぱ失敗だったのでは？

「師匠……まだまだ俺の腕は未熟なようです」

これからも練習はするものの、なんだかんだから回った物が出来て師匠は追い越せない気がしてきた……頑張らないと。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

五十六話 近づく満月く great vampire.

「小野寺、分かっているかしら？」

「はい……もうすぐですね」

満月が近づいて来ている、もうすぐ異変が起きる。

「貴方の言う通りなら、この後満月が欠ける」

「そうですね……俺は見て来たので」

「嘘だったらどうしようかしら？」

「勘弁してくださいよ……」

「自信があるんじゃないのかしら？」

「ありますけど……春雪異変は起きましたし」

「春雪異変は？つてことは……」

「一つだけ起きていない異変があるんです」

「……何かしら？」

「後にします……今は恐らくは起きるであろう異変に集中して欲しいですし……」

「……分かったわ」

話すべき、なんだとは思っている。

ただ……話せない……地底の異変は……

俺も迂闊だったけど……このお嬢様下手すりや地底侵略とか言いそうだしそれは勘弁して欲しい。

「ただ、起きなかった話があったとしても私を動かしたのだから。起きなかったじゃ済まさないわよ」

「……まあそれはそうですね」

「安心なさい、一生従者で許してあげるわ」

「それはいいのか悪いのか……まあ命あるだけマシと考えるべきか」

「実際従者になったらどうすんだろと考えつつ、異変が起きないのが一番だが……起きてもこの人なら大丈夫だと感じる。」

「……」

「どうしました？」

「一つだけ聞いていいかしら？」

「構いませんが……異変については前に言ったことくらいですよ」

「そうではないの」

「では何か？」

「貴方……前に会ったこと無かったかしら？」

「……前も話しましたが一度会ってますよ？殺されましたし」

「そうでは無いわ、それよりももっと前」

「もっと前……？いつの話でしょうか」

「紅霧異変、貴方に記憶はあるかしら？」

「いえ……俺は……紅霧異変の後に幻想入りした筈ですから」

「本当に？」

「え？」

「それが本当かと聞いているの」

「……その記憶がないのはおかしいですし……レミアアさんは俺に会ったんですか？」

「分からないわ」

「分からないって……」

「ただ……記憶の齟齬があるの」

「齟齬ですか？」

「ええ……私は確かに自分で異変を起こしたはずなのに……パチエが言うには……私は唆されたらしい」

「……レミリアさんを唆せる人って居るんですか？」

「居るわけないでしょう？」

「でしょうね」

「この人を騙す度胸なんてある人が居るわけ無いじゃん……」

いたらその人に最強人類の座を渡してもいいレベルだ。

「一人を除いてね」

「……居るんですか？」

正直驚き以外の言葉が出ないんだが……レミアアさんに物申せる人間がいるのかつて。

「貴方よ」

「……俺ですか？」

「ええ、と言うか貴方くらいよ」

物申した覚えはないんだが……それでどうしたんだろう？

「そうですか……」

「だから、貴方は記憶がない？ って。」

「いや……紅霧異変を起こしたって……そんなこと言われてもねえ」

「やはり心当たりはないのね」

「……異変を起こす側どころか、解決しなきゃーっしてしてる側ですし」

「それもそうね」

「だからそれは……俺じゃあないかなって思います」

「そう……分かったわ」

「それでレミリアさんはどうするんですか？」

「うん？何のことかしら？」

「そのような人物がいるとしたら……と」

「まずは探すわ、私の記憶の中からも消えた人間の事を」

「それはまあ……普通ですね」

「パチエの記憶違いかもしれないけど……それが真実なら私には知る権利がある」

「権利……ですか？」

「何故異変を起こさせたのか。何故貴方の記憶が無いのかってね」

「なるほど……ただレミリアさん」

「まだ何か？」

「レミリアさんは何故異変を起こしたか理由は覚えてますか？」

「勿論覚えてるわよ」

「聞かせてもらってもいいでしょうか」

「と言っても、予想付くでしょうか？外に出るためよ」

「外に……」

「日傘を差せば確かに外に出ることは出来る……ただそれは実際は一步でも日傘の外に出れば命の危険がある」

「確かに……そうですね」

「だから紅霧を起こした、自分が外に自由に出れるように……」

「……成る程、確かに分かるかもしれないね」

「あら？自分勝手だとは言わないの？」

「生まれついた種族のせいで自由が縛られるなんて辛いですから」

「……っ」

「どうしましたかレミリアさん!？」

「いや……痛い所を突かれたわねって」

「痛い所？」

「いや、こつちの話よ。気にしないでちょうだい」

「分かりましたが……」

何かを隠しているのは丸わかりだが……わざわざ聞き出す必要性も無いな。

「吸血鬼のせいで日の下を歩けない……それは仕方ないもの。それでも、どうにか出来る可能性があつたならしたかつた」

「ただ……太陽が必要な種族は存在するし、植物にだつて必要……と」

「そうよ、だから私達は博麗の巫女に懲らしめられた」

「五体満足で良かったとでも言うべきですかね……?」

「……異変は自分だけの為を思つて起こす。だから異変になるのよ」

「まあ……全員がいいなら解決する必要もないですし、異変と呼ぶかすら分からないで

すしね」

「月だってそう、必要な種族もいるわ。勿論吸血鬼にとっても満月と言うものは重要なもの」

「確かに満月の日に強くなっているイメージはありますね」

「だから、貴方の意見なんて本当は関係ない。自分達の満月を奪われたのが許せないから私が解決しに行く」

自分のためだけでは無く他の妖怪達を助ける気もあるのだろう。

プライドの高い彼女は絶対言わないだろうけど：

「それに……私が失敗した異変を勝手にこなしたりしたらズルいしね」

「……」

もしかしたらこの嫉妬が理由の大幅だったりするんじゃない？

……やめておこう。

「だから、手に入れた知識を改めて全部渡しなさい。完膚無きまでに叩き潰してくるから」

「頼りにしてますね」

「だから待ちながら、私の帰る場所を作っておきなさい蓮司」

「かしこまりました……え？」

「あらどうかしたのかしら？」

「今蓮司って……」

今まで小野寺って呼んでいたよな？

これはレミリアさんが認めてくれたってことか？

「初めての人間の友となる事を許すわ蓮司」

「ありがとうございます。レミリアさん」

霊夢さんや魔理沙さんは友達じゃ無かったらしい。

……今気にする事じゃないか。

「友だつて言ったのだけど……」

「えつと……レミリア……でいいんでしょうかね」

「ええ」

「それじゃあレミリア、永夜異変は任せた。君が頼りなんだから」

「月兎に蓬萊人。心の底から知るといいわ、吸血鬼の恐ろしさを」

レミリア・スカーレット、彼女と友達にはなったが、彼女に対する恐怖心は絶対に消えることはないだろう。

それが吸血鬼と人間の関係性なのだから。

ただ、怖くもあるが……今はそれ以上になによりも頼もしい存在に見えたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

五十七話 夜が止まった日
my own battle

e.

そして数日が経った……今日は本来であれば満月のはずだ……
しかし予想通り、その月は欠けていた。

「咲夜、準備は出来ている？」

「ええ、いつでも大丈夫です」

「それじゃあ頼むわね」

「ルナ・ダイアル」

懐中時計の時を止める。

いつもならば全てが止まるが、数日の間で時計を弄り夜だけを止めた。

「これで夜は終わらない。さてこの間に解決するわよ」

「いいのですか？」

「何がよ」

「最後に彼に会っておかなくて」

「最後について……別に終わったらすぐに帰ってくるでしょうが」

「何かあるかもしれないですが」

「咲夜……私に何かあるとでも？」

「いいえ、彼の方です」

「……それこそ馬鹿馬鹿しいわ、私が認めた男だもの。少しは頑張つて貰わないとね」

「ならいいですが……」

「ただそうね……早く帰るようにはしようかしら」

「……」

「……」

窓から二人を見るがすぐに飛んで行ってしまった……

異変の解決と、無事を願いながら二人の帰りを待つことだけだった。

「外なんて見てどうしたのよ」

「パチユリーさん、図書館から出てるんですね」

「貴方にこの館を好き勝手歩かれても困るからね」

「……すみません」

「別に歩き回る気は無いと思うけどね、それでも行ったらまずい場所があるのよ」

「……地下ですか？」

「……レミイから聞いたの？」

「地下に入ってはならないと……」

「そう、分かっているのね」

「何があるんでしょうとは思ってますが……」

「……知りたい？」

「……嫌な予感はしますけど。いいなら」

「と言うか言っておくべきね」

「……分かりました」

正直恐怖がある、ただ……聞かないとまずいんだろうな……
観念しながらパチユリーさんの話を聞く。

「レミイに妹が居るって言ったらどう思う？」

「え？……妹」

居なくはないのか？さとりにだって妹がいたんだし。

「その妹が……地下にいるの」

「地下に……!?閉じ込めているんですか?」

「ええそうよ、理由は分かるでしょう?」

妹が嫌いだから、いや違うだろうな……

嫌いだったら妹でも手を掛けそうだ……だからそうでは無くて。

「危険なのですか?」

「ええ……それもレミイと比べ物にならないわ」

「レミリアも危険度だけで言うなら大分危険なだけだな……それ以上か」

「あら?レミイに認められたの?」

「まあ……友人だつて言われましたよ」

「そう……なら尚の事死なせるわけには行かないわね」

「……地下へ行かなければいいですか？」

「それもそうだし……出来れば図書館にいて欲しいのだけど」

「一日だけですし分かりました」

「不便させてごめんなさいね」

「いえ、完全に俺の為ですし文句なんて無いですよ」

パチユリーさんがそこまで言うつて事は相当なんだろう……

見た目とかは一切分からないけど話を一切聞かないレミリアと考えておこう。

「……今までに会ったことない人に注意すればいいですか？」

「ええ、私は今夜だけは図書館の外にいるから何かあつたら小悪魔を介して言つてね」

「了解です」

そのまま図書館へと入った。

迷いの竹林のように何度入っても迷う事は確実なので小悪魔さんを頼る。

「……」
「応探してみるか」

とある本を探しながら。

「外の世界に関する本ですか？」

「はい、見ておきたいなって」

「確かこつちの方だったかな？」

いつもよりも悩みつつ小悪魔さんに案内された。
確かに外の世界の本が色々あった。

「……なんだこれは？」

他とは違う雰囲気を持った本を手取る。

異変ノ断章？気になるタイトルだ……

「これを読めば何か……」

「いい本ありましたか？」

「うわっと!?!小悪魔さんですか」

「……なんでそんな驚くんですか」

「いや、パチュリーさんに妹様に気を付けてと言われたので」

「ああなるほど……迂闊過ぎましたね申し訳ありません」

本当はそれが理由じゃないが、正直に話せるわけもないので体よく誤魔化す。

「あつそうだ……小悪魔さんこの本ってなんだか知ってます?」

「え?どれですか?」

そう言いながら異変ノ断章を見せる。

「……なんですかこれ?」

「やっぱ知らない本もあるんですね」

「いえ……私は中身はまだしもタイトルは全部把握している筈なのですが……」

「え？」

だったら本当になんなんだこの本は……

「一先ず読んでみますね……」

そう言つて小悪魔さんは本を開こうとするが、本が開かない。

「ぐぬぬぬ……あれ？開きませんね」

「それ危険なんじゃ無いですか？」

「ただ……気になるのも事実ですし……小野寺さん開けられます?」

「……試してみますけど」

渡された本を開こうとする。

本当にこの中には何が書いてあるんだ?

本当に外の手がかり……

「小野寺さん!!」

「わつと!?!いきなりなんですか!?!」

唐突に驚かささないください……本開けさせたく無いんですか?

「……予定が変わりました。急いで逃げてください」

「え?」

「図書館を闇雲にでも構いません。とにかくお二人が帰って来るまで逃げてください」

「まさか……」

「パチュリー様からの報告で妹様が……」

「嘘だろ……」

いつも出て来る事は無かったんだろう？

レミアも毎日見に行ってたみたいだが行く前に確認したってパチュリーさんが
言ってたぞ？

なんでこんな急に？

「とにかく……逃げないと……」

本のことにも気になる、ただ……前にそれをやろうとして射命丸さんに叱られたことも

あるし。

何より二人が頑張っているのに死んで無駄になるなんてしたくない……

図書館のどちらかに逃げればいいなんて分からない、ただ闇雲に逃げることにした。

「少し……少しだ」

レミリア達は絶対に異変を解決する……それは断言してもいいレベルだ

あの人が失態をするわけがないと。

「最悪死んだって構わない……ただそれは異変が解決してからだ」

異変が終われば先に進む。

勿論そんな確証は無い。

ただ、何もせずに死ぬなんざよりマシだ……

「異変解決みたいな立派な事は出来ませんが……こつちでは俺なりの戦いをしますよ
！」

見つかってたまるもんかと全力で図書館内を走り回った。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

五十八話 満月に狂う～lunatic fullmoon.
on.

ただひたすらに逃げる、危険が迫っていることが分かる。

背後から爆発音がする……まだ遠いが……何処からだろう？

「パチュリーさんや……小悪魔さんや……妖精メイドさん達は大丈夫だろうか？」

他人を気にしている余裕なんて無いが、それでも心配なものには心配になる……

それでも人間では無いし俺よりはマシか……

「なんで……迷いの竹林へ行つたわけじゃ無いのに……迷いの竹林みたいな事をしてい
るんだろな」

あの時だつてそうだ幻覚に侵されつつ出口のない場所を逃げ出した……
今回はむしろ幻覚じゃ無い分タチが悪い。

「……聞こえるか」

後方から爆発音が聞こえる。

距離は感じるが、規模が大きいのであろう……音が凄まじく響く。

「姉妹ってなんだろうな……」

レミリアと全然違うだろと思いつつ逃げ出す。

早く異変を解決してきてくれと思いつつ……

「次の曲がり角を……」

本棚を曲がり腰をつく。

本棚を背にして十秒ほど休む、そうしてまた走り出す。

「何を追って来ているんだよ……」

目印なんて無いはずなのに、何故正確に俺の方へと向かってきているんだ？
明らかに音が離れないどころか近づいてきている……

「……見つかったら即アウトかは分からないけど」

逃げろと言われた以上は逃げるしかないよなど。

余計な考えをするとドツボにハマると……そう考えながら走った。

「……一時間くらい経ったかな？」

実際はどれだけ経ったか分からないが、それくらい経ったと思い込む。

そうしないとやっていけないから。

「いつそ吸血鬼の本とか探したほうがいいか？」

勿論それは願望でしか無いのだが……時間が足りない。
本を読もうものなら捕まりそうだ……

「……弱気でいちゃダメだな」

逃げるのは間に合う、そう思い直しながら弱い気持ちを抑えて走った。
ただ……もう近い、何かが聞こえる。

「あっはっはっはっは」

「え!?!」

その囁い声は……もうすぐ側だった。

「パチュリー様！大丈夫ですか!？」

「ええ、大丈夫よ」

多少の怪我をしたものの、大怪我などはしなかったようだ。
一方の小悪魔の方は無傷のようだ。

「貴女……無事なの？」

「……そうですね。攻撃はしたんですがスルーされました」

「貴女もなの？」

「……はい、見向きもされませんでした」

「……何処へ向かったの？」

「……図書館です」

「なんで？あの子は何を感じ取ったの？」

「分からないです……ただ……彼について気付いているのでしょうか？」

「そこまでは分からないわよ……そもそも妹がどうやって小野寺蓮司について気付くのよ」

「あり得ないはずですよね……」

「一つだけあるとしたら……」

「パチュリー様、何か心当たりあるのですか？」

「月に狂わされてるのじゃ無いかしら？」

「月に？しかし今日は満月……」

「そう、本来ならば満月なのよ。妖怪達は月が欠けていて力を失っているのだけど……」

「けど……なんででしょうか？」

「力のある妖怪は満月を求めて暴れ回る……レミイだって誤魔化してはいるけど結局欠けた月に狂っているのよ」

「それじゃあ……」

「あの子はどう言う目的で暴れ回るのかは分からない、でもそれを満たしてくれるのが彼だって本能で悟ったのでしょね」

「そんな……小野寺さんじゃ無理ですよ色々……」

「図書館に急がないと」

「それでも無視されるんじゃない？」

「無視されてもいいわよ、結局彼一人じゃどうしようもないんだから」

「……それはそうですが。間に合いますかね？」

「間に合わせるしか無いのよ、見つかったら手遅れでしょうし」

「まさか……もう見つかったとかは無いですよね？」

「無いでしょう、空も飛べないし人間な以上ずっと全力疾走は出来ないだろうけど、それでも命の価値は分かって居るでしょうし」

「……でも満月ですから」

「そうね……」

二人は少年の無事を願いながら図書館へと入った。

惨事になっているからこそ場所は分かりやすい、壊れた道を追って行った。

「ちゃんと逃げ切りなさいよ」

「みいつけた」

—————

「……はっはは」

目の前に圧倒的絶望がある。

なんだこれは……威圧なんてものじゃ無い、死というレベルな気がする。

「お兄さんだよね？」

「……何がですか？」

「この館で何してるの？」

「レミリアに許可が出て居候させてもらってるよ……」

「聞いてない」

「そりゃ……俺も君と会うのは初めてだしね……」

なんとか出る言葉でギリギリ話す。

正直自分で何を言っているのか分からない……

「まあいいや、今はどうでもいいし」

「そうですか……」

「なんだか満月の筈なんだけど力が出ないんだよね」

「……不調の日は大人しくしてなきやダメですよ」

「でも魔理沙がお見舞いに来てくれないんだもん」

「あの人は気紛れですからね……そのうちポツと来ると思います」

「えーつまんない」

「そう言われましても……」

「だからお兄さん遊ば」

「……」

遊ぼと言う言葉に重圧を感じる……

その瞳は正気じゃ無い、まるで遊ぶ事を強いられているかのごとく狂って見える。
残念だがこれは死んだか？

「何を……して……でしようか？」

「弾幕ごっこー！」

俺に弾幕ごっこは出来ない……そのまま弾幕に押し潰されて死ぬだけか。

「後少し……耐えないと……」

せめてでもレミリアさんが解決するまで……生き延びないと……

「どっかーん」

少女はそう眩くと同時に何かが潰れるような音がする。

慌てて足を見るがなんとも無い……良かった無事か……

「あ………」

何かを気にしているようだが分からない。

何もなかったなら逃げるだけ……

「すぐに壊れないでねお兄さん」

「え………？」

目の前の恐怖に怯えていたのもあって気づくのが遅れていた。

彼女が何をして何が起こったのかをもっと気を付けておくべきだった。

背後の本棚が倒れ込んでくる。

「まじ………で s ……」

考えるよりも早く動かなければ死ぬ……どうすればいいか分からなかったが……全力で横へと飛び込んだ。

—————

——ふうん、ただの人間の癖に面白いじゃない

——誰もが求婚してくるから嫌になったのに、話し相手としてなら貴方は良さそうね

——へえ、面白い事をしようとしているじゃない、私にもそれを手伝えって言うの？

——いいわ、ただ一つだけ条件を与えるわ

——五つの難題、貴方に解けるかしら？

「……はっ」

気を失ったのは一瞬、まだ生きている。

重圧に押し潰されかけていた意識は、心臓は一瞬痛みのような物を感じて一気に動き出す。

何が……あったのか？

「逃げないと……」

あれ？あしがうごかない？どうなってる？

恐る恐る脚を見てみると……本棚に押し潰されている。

「折れて……いや？折れてるじゃ済まないのか？」

わからない、わからない本棚の底は赤く染まっている……

これは俺が流したのか？

「あーあ、これじゃあすぐに壊れちゃうな」

少女はつまらなそうに押し潰していた本棚を破壊する。

それと同時にこつちへと近付いて来る。

「もー、逃げないから壊れちゃったじゃん、ダメだよ」

「脚……」

少女に壊れたと言われて慌てて脚を見る。

まるでそこには何も無いかのように、潰れた何かが目に見える。

「……ははは、嘘だろ」

脚がない……ない……そこに俺の脚はあるはずなのに……

「もう、心まで壊れちゃった？それじゃあバイバイ」

そうしてフランが最後まで遊ぼうとすると……

「あれ？お兄さん？そんな状態でも動くんだ」

脚がなくなつて状態でも、腕を使って這いずっていた。

たとえ脚が無くても生きなきやいけないから。

一秒でも、一瞬でも耐えればそれで異変が終わるかもしれない……

「……最初……から……戦うって……決めたんだ」

レミリア達のように、アリスさんのように戦闘できる力はない。それでも俺なりの戦いがあるってことは分かっていた。

「そっかそっか、じゃあもつと遊ぼうよ」

「……」

既に答える力も減少している。

思考も動くことに割いている。

「それじゃあ頑張って避けてね、禁忌：クランベリートラップ!!」

少女がそう眩くと弾幕が図書館中に舞った。
それは臃げな少年は別に見えて……

「喉が渴いた……」

血を流し水分が不足している身体には弾幕が果物に見える。

それはまるで名前の通り潤ったベリーのように……

それに手を伸ばそうとする。

「あー、もう終わっちゃうんだ」

本当はそれを取りたかった、喉が渴いた。

ただ……既に手が届かずに諦めて進むことを選ぶ。

しかし、結局はその後自分で取るまでもなく弾幕が迫って……

「コンティニューは出来ないよ」

やっと果実に届くんだってそう思いつつ、それを食べてでも一秒でも生き残らないとって……

「お待たせ、とでも言おうかしら」

弾幕は即座に消え去った。

一体何が……？

「咲夜、治療は後。まずは彼の出血を止めなさい」

「はっ」

感覚さえ失っていた脚が動かなくなる。

時を止められたのだろうか？

「すぐに治療します……しかし妹様が終わるまで待っていて……」

「いいわ咲夜、すぐに治療しなさい」

「しかしお嬢様……」

「蓮司が今の今まで生き延びられた褒美よ」

「分かりました……」

「レミリア……?」

正直前すらも見えないが……それでも帰って来たのだろうか?

それなら異変は終わった……?俺は間に合った?

「少し休んでなさい。続きは後で聞かせてもらおうわ」

「お姉様帰って来たの?遊ぼう遊ぼう!」

「フラン、ダメじゃ無いの。図書館を壊しちゃ」

「だって暇だったんだもん！」

「満月の日は……、そうねフラン、退屈にさせちゃつてごめんなさい。ただ貴女に壊されたく無い物を壊されかけたし……貴女にも少しお仕置きが必要ね」

「そんなのはどうでもいいよ、遊ぼー！」

既に小野寺への興味は一切無くなっている。

追われたら面倒だったが、こっちに集中出来そうだ……

「それじゃあ来なさい、少しお灸を据えてあげるわ」

「わーい、楽しみー」

理解をしていないように返答をされる。

「ふふふ、こんな月も丸いから」

「楽しい夜になりそうだね！」

「煩い夜になりそうね」

t o b e c o n t i n u e d

S. 五十九話 悪魔の姉妹～scarlet ladies

「……は……？」

何があつたのか状況整理をしながら周囲を見渡す。
側には咲夜さんが居た。

「咲夜さん、一体何が？」

「目を覚まされたのですね」

「……お陰様で」

脚を見る、包帯が何重にも巻かれていて見ただけでは判断出来ない。が……感覚が無
い事から脚を失ったのだろう。

「遅れて、申し訳ありませんでした」

「え？」

頭を深く下げて謝られるが……そんな咲夜さん達が悪い事をしたわけじゃないだろ
うに……

「私達のせいで、小野寺さんにここまでの重傷を負わせてしまうだなんて」

「いえ、頭を上げてください。異変解決を頼んだのは俺なんですから」

「身内の問題事に巻き込んでしまうだなんて……」

「いえ……俺も迂闊で……って今はそうじゃない」

慌てて起き上がろうとするが痛みで起き上がれない。

「痛っ」

「小野寺さん、無理に動かれては……」

「そうは言ったって……今はそれどころじゃ無くて……咲夜さん!!俺はいいのでレミリアの手助けを!!」

「ああ、そう言う事ですか」

「のんびりしてないで急がないとやられ……」

「ああそれなら大丈夫ですよ」

「なんで……?」

「お嬢様はいつもと違って本気ですから」

「本気……」

「破壊とかの分野では勝っていませんが、万能な方なのであちこちフランさんに勝って
ますし負けませんよ」

「……それでも」

「お嬢様は貴方の身の安全を頼みました」

「……」

「貴方の言う事も分かるけど……理解して」

「……分かりました」

レミリアの事は心配だが……それに気になる事も沢山あるし……

「咲夜さん……」

「何かしら？」

「異変って解決したんですよね？」

「ええ、首謀者の八意永琳を止めたわ」

「それなら良かったです……」

「つてカツコ付けられたら良かったのだけどね……」

「え？何があつたんです？」

「ウチのお嬢様は見事に騙されたのよ」

「え？騙されたって？」

「……異変の主は八意永琳だったのだけど、偽りの月を掴まされて」

「偽りの月？」

「ええ結局博麗の巫女が真実を突き止めちゃったの」

「ああ……霊夢さんですか」

「そうよ、だから異変はもう終わったの。問題ないわ」

「良かった……」

「良かった、ね」

「何かありました？」

「貴方、自分の事はどうでもいいの？」

「自分の事ですか？」

「脚よ脚」

「ああ……脚ですか」

「そうよ、なんで気にしてないの？」

「……治るなら治りますし、治らないなら仕方ないかなって」

「仕方ないって……貴方の脚でしょ？」

「それはそうですけど……異変を止める事が大事だったので」

「そう……まあこつちでもやる事はやって見るわ」

「ありがとうございます」

こつちの問題は済みそうだ……だからレミリア頑張ってくれ。

「お姉様、もつともつと」

「フラン、焦らないの」

レミリアは妹の攻撃を軽くないです、パチュリーと美鈴がいるがそれでもやはり辛い。

「咲夜は？」

「私達で時間を稼ぐわ」

「……なるほど、分かったわ」

パチュリーは了承して戦う。

しかし妹の名に恥じない強さだ……

「神槍：スピアザグングニル！」

「日苜：ロイヤルフレア」

フランの周りを弾幕が、槍が包む。

これで止まってくれればいいのだが……

「あっはっはっはっはっは」

「やはり無事ね……」

これくらいでは余裕だと言わんばかりに、それどころか……

「禁忌：フォーオブアカインド!!」

フランドールが四人となる。

危惧していたが結局は発動させてしまった……

「まだなの？」

「後少し……」

「いっくよーお姉様!!」

そのまま暴れ始める……そう思った時……

紅魔館の窓が割れた。

「お届け物だけええええええ」

「魔理沙!?!」

魔理沙が紅魔館の中に入ってきて、全フランの目も釘付けになる。

「魔理沙……来てくれたんだ」

「おうフラン、遊ぼうぜ」

そのまま外へと出て行く、フラン達も追いかけて行く。

「間に合ったわね……」

「レミイ、間に合ったけど……魔理沙は大丈夫なの?」

「ええ問題ないわ。本来であれば宴会を開く気だったのだもの」

「だったら何よ」

「宴会だもの。彼女がいるに決まってるでしょ？」

そうして外では、魔理沙だけではない。

紅白の衣装をした巫女がフランの前へと立ち塞がっている。

「夢想封印」

「霊夢ー、それはー」

四人いたフランドール達が打ち落とされる。

妖怪退治専門の巫女が相手じゃ敵わない。

「全く……なんで異変解決したばかりでコイツの相手しなきゃならないのよ」

「いいじゃないの別に、その分食べ散らかすのでしょから」

「紫、でも紅魔館被害が大きいわよ？」

「そうね、でも貴女はそんなの気にしないでしょ？」

「勿論」

「……まあ貴女らしいですけど」

紫は紅魔館の方を見る、そして気付く。

「ごめんなさい霊夢、やっぱり私は帰るわ」

「何？勝手にしたらって思ったけど、アンタが帰るのは意外ね」

「ちよつと会いたくない人がいるのよ」

「ふーん」

興味なさそうに返答する。

実際に紫の行動には興味が無い。

「まあ、誰か居るのかしら？」

既にスキマ妖怪への興味は失せており、それよりも紫が何を嫌がったのかに興味を持った。

「宴会はこれでもするでしょうし、その時分かるでしょう」

つまらなそうな人間ならどうでもいい。ただそんなつまらない人間を紫が嫌がるわけがない。

「まあ、出て来たただけだね」

そもそも人間かも分からないし、何よりレミリアが隠してくるかもしれない。
それは全く分からない……

「はあ……また紅魔館から異変が起きないといいけどね……」

わざわざ異変を起こそうとは思わない。

ただ……何があるか分からないし……

「まあ疑うのは後でいいわよね」

宴会が始めるしそつちを優先しようと、博麗霊夢は頭の中を空っぽにするのだった。

to be continued

六十話 少しズレた世界Ⅰ, m not.

宴会が行われると咲夜さんは言っていた。

勿論、俺は参加する事は出来ないのだが……

「……まあこの脚じゃ行きようもないしな」

車椅子なども存在しているように思えない。

魔法で空を飛べるなら歩けただろうけど……

「はあ……まあ異変は終わったんだからいつか」

今は今後をどうするかだけ……

咲夜さんは足を治すと言っていたが……正直そんな希望は無いか。

「一人だけ……可能性はあるけど……」

永遠亭の住人、月の頭脳こと八意永琳。

彼女なら俺の脚を治すことも可能なんだと思う。

ただ……少し前まで異変を起こしていた上に、退治されたばかりだし色々と言わないだろう。仕方のない事だ……

「入るわよ」

「えっ」

返事も待たないまま入って来た。

声だけだと誰だっと思ってたけど……霊夢さんか……

「……」

「……えつとこんにちわ」

「……脚、どうなってんのよ」

「少し悲惨な事故がありましたして……」

「悲惨って……それほどで済むレベルじゃないでしょ」

やはりと言うか何と言うか……皆脚の事を話すか……

正直どうしようもないから放っておいて欲しいのだけど。

「まあ……異変は終わりましたし……」

「……」

「霊夢さん、どうしました？」

「アンタ……元は私に異変解決の依頼をするつもりだったみたいね」

「そうですね、異変解決と言えば霊夢さんですし」

「……アンタ、何処でその話を聞いたのよ」

「え……？」

……俺の記憶が正しければ、俺は霊夢さんに元は春雪異変の解決をお願いしに話に行っただけだ。

話し方も既に俺を知っていると思ったのに違った。一体何が……？

「え？つて何よ……戸惑われても困るんだけど」

「すみません……気になった事がありました」

「宴会に戻りたいんだけど」

「そうですよね、一番の功労者引き留めてすみません」

「……」

「どうしました？」

「何？気付いてないの？」

「何がですか？」

この異変で脚を無くした明確な被害者なのに、そういう態度を取られる方が逆に罪悪感がある。

……ただこの男は無意識なんだろうなど。

「……お酒持ってくるわ」

「えっと……分かりました」

「そしたら色々話さない。気になるし」

酒を呑んで話を聞けるのだろうかと思いつつ、彼女の帰りを待って話し始めるのであった。

「……それで、死に戻って異変解決をお願いしたって？」

「そうですが……信じられませんか？」

「正直、どうでもいいわ」

「はあ……」

何と言うか変わらないなこの人……

そこが魅力なのだろうけどさ。

「アリスさんや魔理沙さんとかも似たような感じでしたか？」

「あー……そう言えばあつたわね」

「何がですか？」

「魔理沙とアリス、萃夢異変が終わってから地底をずっと見張っていたわ」

「地底を……」

「何故かって聞いたら、異変が起きそうだからって」

「……」

俺が言った……からじゃなくて、起きそうだからか。

本当に俺がそこには居ないのかな……

季節が先に進んだから多少は覚えられてるかと思っただけ……無理なのかな？

「大丈夫？」

「ええ、大丈夫です……教えていただきありがとうございます」

「……」

「いえ、そんな暗い顔されなくても俺は大丈夫ですって」

「そう言えばもう一つあったんだけど……」

本当は話す気なんて無かった、どうでもいい事だから。

だけど……黙っているのも辛かった……

「何かあったんですか？」

「アリスが……」

「アリスさんがどうしたんですか!？」

「ついつい乗り出すように言葉を遮ってしまふ。

勿論乗り出せる事は出来ずに、身体を痛めるだけだったが、それでも……アリスさんに何かあったのかと心配になる。」

「そんなせつつかないでちょうだい」

「ごめんなさい……」

「それで、アリスだけに見慣れない熊のぬいぐるみを大切にしていたわ」

「……ええ？」

さつきまでの話なら……なんで熊のぬいぐるみがあるのかって話になるんだが……
存在しないって事になるんじゃない？

「やっぱり貴方関係だったのね、熊のぬいぐるみと上海に似た人形を誰から貰ったか覚えてないけど。って言ってたけど大事にしたわ」

「そう……ですか……」

少なくとも全部が消えたわけではないと言うことを聞いて安堵する。

この世界に存在しないとか無くて良かった……

「他には……別にいいか」

「気になるんですが……」

「少なくとも貴方関係ではないもの」

「それなら確かに仕方無いんですかね……」

「まっ気が向いたらそのうち話すわ」

そう言つて霊夢さんは空になった酒瓶を持って立ち上がる。
飲み干すのが早いなと思いつつ見送つた。

「少なくとも、俺が幽霊とか存在しないとかは無くてよかった」

幽霊が人形を作れるとかまで言うならどうしようもないが、流石にそれは無いと思うし。

ただ……記憶からは……辻褃合わせの様になっているのか。

「そう思うと……さとりさんは本当にチートだな……」

心の中で証明してくれた。

あの人がいなきや本当に俺は壊れていたと思う。

……永夜異変の時にあったさとりさんも本物なら、俺は何度救われたのだろう？
流石に偽物だろうけど。

「記憶は残らないなら……また俺がここに居たって証明をしなきやいけないかな」

もしかしたら、記憶の果てにうつすらと俺のことがあるかもしれないけど……

そうじゃなくても、アリスさんが言つてた通り人形作りで証明するとかあったし……
そつちでもあり得るか？

「まあ考えてもしょうがないか……逢えないだろうし」

脚を見る、包帯で巻かれているが……やっぱり動かそうとしてもそこにそれが無い。

咲夜さんのお陰で痛みはほぼ無いのだが……来世で歩き方忘れてなきやいいけどな
……

「これじゃあ誰にも会いに行けやしないし、出歩けない。レミリアさんの部屋を訪れて

人形劇することすら不可能だろう」

「また……来世かな？」

紅魔館にとつてもお荷物で、頼まれていたことすらこれではこなせないだろう。

どうせまたその前に死んじゃうんだろうと思うが……

「異変は過ぎたから頃合いではあるのかな？」

前回進んだだけであつて、また永夜異変前に戻るかもしれないし……迂闊には死ぬ事は出来ないが……

「ただ……どうしようもないよな」

これ以上生きていたって……お荷物で……

「邪魔するわよ」

「レミリアア？」

何と言うか宴会中だろうに客が多いな……
何より主賓が消えて大丈夫なのだろうか？

「どうした……？」

「なあに暇してるかと思ってね」

「確かに暇はしてるけど……」

「ふーん、そう」

……それだけ？逆に悲しくなるんだが。

「あの、何用得？」

「ちよつとね、別にいいでしょう？」

「そりゃ構わないが……」

むしろレミリアに用があらうとも無くとも暇をしてたのは事実だし。

「大事な話をするわ、聞いて」

何を話すのか分からないが、ここで大事な話とは身構えそうになった。

ただ……動けない自分は何も出来ないし身構えたところで……

そのため、純粹に自分にとっての何かがあると信じて友人の話を聞くことにした。

to be continued

六十一話 これから～our way.

先程までの出来事について聞かれるのかと思っていた。
しかし、彼女はそう言った類の事は聞いてこなかった。
心配させまいと思わせてしまったのだろうか？

「予め聞いておくわ、次の異変には覚えがある？」

「いや……無い」

「そう、残念ね。次は私が解決しようと思ったのだけど」

「そもそも次の異変を知ってるって事は永夜異変が解決済みって事なんだが……」

「それもそうだったわね」

こう言う話でも今は有難い。

やっぱり少し滅入っているのが分かったし、話しているだけでも安心する。ただ……それだからこそ逃げっぱなしじゃいけないか……

「レミリア、大事な話って……？」

「ああそうね……まず一つ、貴方の脚は絶対に治すから安心なさい」

「……無茶じゃ無いか？ 咲夜さんも出来るだけって言ってたし」

「いいえ、絶対に治す。それは私の名に懸けて断言するわ」

「分かった、レミリアがそうするのを待ってる」

「それで……終わったらだけど」

「……」

「この屋敷から出てもらおうわ」

やはりか、用済みかな……

異変が終わって利用価値は無くなつたし、明らかな邪魔者だ。

「住む場所の保証はする。既にそちらであるなら私が決めた場所とは言わないけど」

「分かった……」

脚は治るしどうとでもなる……

ただまだ図書館で調べたい事はあつたが……どうしようもないな……

「何かあつたら咲夜に伝えてちょうだい、脚が治るまでの間叶えて見せるから」

「……分かったよ」

「それじゃあ。またいずれ」

本来ならば、はいつて言うはずだった……

ただ……言えなかった。

自分がどうしようもないことになっているのに……女々しいように……

「レミリア」

「何かしら?」

「理由だけ聞いていい?」

「……どうしてかしら?」

「話さないと分からないから」

さとりさんと会ってから気付いた、すれ違いと言うものは起きるのだと。誰でもさとりさんの様に話さずに伝わるわけじゃない……だからこそ話さないといけない気がした。

「あまり……言いたくなかったのだけどね」

「……」

やはりか、レミリアとしてもあまり悪く言いたくなかったんだろうなと……
これじゃあ悪い事を……

「フランが居るからよ」

「……ええ？」

しかし帰って来た答えは予想外だった。

「……何を驚いているのよ」

「いや……てつきり俺がお払い箱なのかと」

「そんなわけ無いでしょうよ……そもそもそうなるなら脚すら治す気はないわ」

「いや……まあそこは優しいからそれくらいって」

「そうじゃ無いわよ」

少なくともお払い箱じゃなくて良かった……

「フランの危険性は分かったでしょう？」

「そりや……まあ……」

「だから、この館に残るのは危険よ」

「アレは……俺も悪かったですし」

「蓮司、フランに何かしたの？」

レミリアがじとーって見てくる、違うやましいことでは無い信じてくれ!!

「彼女遊びたいって言ってたんですよ」

「……それで？」

「俺は何も出来なかったんで……」

「それはそうでしょう、フランにとって遊ぶは他者を壊すことだから……」

「……」

あれ？もしかしてフランさん予想以上にやばい？

「だからこれ以上居ると死ぬわよ、出て行ってくれないかしら？」

「……残っても迷惑ってわけじゃあないってことで大丈夫？」

「……死にたいの？」

「いや、流石に自殺願望はないが……」

「だったら……」

「どうせ死ぬし」

「……………は？」

「異変を解決するに至ってどうせ最後まで生きるのは俺には無理だと思う。それはまあ仕方ないんだけど」

「ふざけてるの？」

「いや、ふざけてるわけじゃなくて……………前に妖怪の山に行った時は怒られたけど……………」

「だったらなんで？」

あの時と同じく無駄死にするって言うなら文さんに殴られる所だろう。それでも信じたくなるものがあつた……………

「フランさん、残骸ではありましたが俺の人形を持ってました」

「そう……………」

追われてる時は恐怖心で気付かなかった。

でも、落ち着いて見ると片手で抱えていたのを思い出した。

「だからレミリアさんもしかして人形って妹のためだったのかなって」

「……私が純粹に気に入ったのもあるけど合っているわ」

「あつ気に入ってはいたんだ……」

普段の雰囲気はマジだったらしい。

「姉妹だもの、趣味は似るわ」

「そう言われるとそうか……それで、もしかしたらレミリアとももしかしたら今回だけかもだしフランさんとも話せるのは今回だけかもしれないから」

「あら？私が忘れると思うの？」

「霊夢さんの記憶の中からは俺が消えてましたから……」

「そう……でもただ危険なだけよ」

「それでも、一度きりしかないかもしれないなら、繋がりを大事にして行きたい」

仲良く出来るかはまだ分からない。

でも糸口があるなら……命が懸らないなら彼女の望み通り遊ぶことも出来たかもだし……

「立派な志だけど、なんでも壊すフランをどうやってあやす気よ」

「そこはまあ……普段は大丈夫そうなので……紅魔館の皆に手伝ってもらおうと言うことで」

「結局は人任せじゃないの……」

「弱いことには自信があるので」

「……まあいいわ、折角の友人とこれでお別れというのも残念だったし」

「それで……脚はいつ治るんですか？」

「まだ暫くは掛かるわ、話すら聞いてもらえないでしょうし」

「……脚がないままフランさんとどうにかしろと？」

「人形を作ればどうにかなるかもしれないわよ？」

「大変だ……」

「まあいいわ、安心しなさい」

「何を？」

何も安心出来そうにない気しかなかった。

「知り合いを呼んだから、貴方一人で無理することにはならないでしょう」

「居たの……？ ああごめんなさい凹まないで!!」

やっぱこの手の奴本人には酷く効くじゃないか……

本当に申し訳ない。

「…………ふ…………ふ…………ふ…………楽しみに待っていないさい」

ダメージを受けながらもレミリアは不敵な笑みを浮かべる。

「嫌な予感がしたけど…………大丈夫かな？」

「ええ、恐らくは貴方が会っておいたほうがいいと思った人物なもの」

「……え？」

「一体誰なのだろうか？」

…

「あら？紅魔館からの招待状？」

「オイ、ドーシタンダ？」

「ああごめんなさい上海、紅魔館からお茶会のお誘いって珍しいものが来ててね」

「タシカニ、メズラシーナ」

「あそこのお嬢様、私の家すら知らないと思つていたけど」

「ソレデ、イクノカ？」

「ええ、行くわ。上海お留守番お願いね」

「ワカツタ」

普段の自分なら行かないと思う。

遠いし、あの吸血鬼が何を考えているのか分からないから……

ただ異変が終わつて宴会をやつてすぐその後と呼んでくるのにも違和感があった。

「それだけじゃあないけど」

今回のお呼び出しには得体の知れない何かを感じた。

何故か逃してはいけないようなそんな気持ち……

そのためアリス・マーガトロイドは今回のお茶会を受けることにした。

そこに行けばその何かが分かると信じて。

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

く魔法使い集結編く

六十二話 お茶会のお知らせくtea break.

紅魔館での暮らしも慣れて来た、その中で気付いたことがあるんだが……

「魔理沙さん……またですか？」

「お邪魔するぜ」

「また来てるんですか……？」

「ああ、図書館寄ったからな」

「また盗って来たんですか……？」

「ああ、読むか？」

「後でちゃんと返して下さいね」

「死んだら返すぜ」

「……それやって前にアリスさんに怒られましたよね」

「何のことだ？」

「……いえ」

魔理沙さんにも記憶はない。

霊夢さんに記憶が無かった以上、ない事は分かっていたが……

「そうか、なら私は帰るが」

「まあ少し待って下さい」

「まだ何かあったか？」

「はい」

「それなら構わないが、早くしてくれよ？」

「ええ、すぐ終わりますので……」

「そこまでよ!!」

ボタンとドアが空いてパチュリーさんが現れる。
それに魔理沙さんは驚く。

「なっ蓮司騙したな!!」

「騙したって言うか……流石に毎度魔導書を持ってかれるとですね……」

「裏切るなんて卑怯者ー」

「少しは反省しようとしなさいよ……」

「やなことだ、私は悪いと思ってないしな」

そうやってその場に座り込む、なんで？

「そう、反省して貰わないと困るのだけどね」

そうやってパチュリーさんはその場に正座する。……だからなんで？

「あの……二人とも？」

「何？」

「何だぜ？」

「何故ここで座り込むんです？」

「そりゃ此処の方が話しやすいしな」

「そうなんですかねえ……？」

「それに、貴方だって偶にはワイワイしないとダメよ」

「一応、レミリアは毎日来ていますが……」

「また人形劇見に来てるのね……まだ歩けもしないのにレミイは無茶させて……」

「腕はあるので、人形を作ることは出来てはいますが」

「アリス並みに上手だよな」

「……そうですね」

「……?」

魔理沙さんには死に戻りのことは話していない。

最初に話す余裕が無かったこともあるが、図書館の本が犠牲になると共に、仲良くなってしまうため話すのが怖くなってしまった。

レミアア同様に、話さなきゃって思う気持ちもあるが……これは話さなかった事で何か不都合があるわけじゃないしと。

「そう言えば……」

何かを思い出した、と言うよりもこちらの顔を伺う様に話し始める。

「明日、お茶会を行うわ」

「そうなんですわ、まあ俺は行けないでしょうけど」

「もしかして私がわざわざここに追い詰められたのって……」

「ホールを汚されたら困るからよ」

「しまった、それならホールからなら逃げられたな……」

「魔理沙」

「悪かったって……それで私も参加していいのか？」

「本を返したらね」

「うぐつ……」

「いや返しなさいよ、全部とは言わないから」

「……ただで飲み食い出来る方がマシか、少しだけだからな！」

「本当は全部返して欲しいのだけど、まあ仕方ないわ」

「賑やかになりそうですね」

「貴方も参加するのよ？」

「いや……俺まだ辛いのですが」

「そうも言つてられないわ」

リハビリとか兼ねてなのだろうか？

それだと脚すら戻ってないのにリハビリなんて不可能だが……

「アリス・マーガトロイド、彼女も参加するわよ?」

「本当ですか!？」

「ええ本当、だから貴方も参加しなさいって」

「アリスも参加するなら蓮司も居た方が良さげだな、人形遣いの先輩として教わる事多いだろうし」

「同じ人形使いとして教わる事が多いと」

「いや違うぞ?」

「え?何がですか?」

「アリスは人形遣いだ」

「ですから人形使いですよね？」

「ニュアンス？よく分からないが違うんだ……」

「はっはぁ……」

よく分からない、何か違う？

悪くない事ではあるが……なんとというか複雑に感じる

「しかし……それなら参加しますけどどうしましょうか？」

「こう言う時こそ妖精メイド達を酷使させるから気にしないで」

「分かりました……」

何というか……申し訳ない気持ちで一杯になるが……

「なるほどな、明日のお茶会は凄い賑やかになりそうだな」

「魔理沙さんが一番賑やかそうですけどね……」

「まあな、貰えるもの全部貰っていくし」

「……」

「この人、また本を持ち帰る気しかないのだけど……大丈夫なのだろうか？」

「あーパチユリー」

「何？」

「明日に備えて今日泊まっていくから。部屋の準備とか伝えておいてくれると助かる」

「……図々しいわね」

「別にいいだろう?」

「……本はどうするのよ?」

「それはだな」

魔理沙さんは服の中をガサゴソしている。

一体何をする気だ?

「は、い、これ」

魔理沙さんから取り出されたのは数冊の魔導書だった。

「……これは?」

「今日借りてくつもりだった本だ、残念だけどな」

「……」

「ちゃんと約束通り返したからいいだろう？」

魔理沙さん、ちゃんとパチユリーさんの方を見てあげて下さい!!

今パチユリーさんしちやいけない様な顔してますから!! 気付かないとヤバイですか
ら!!

「それじゃあ、レミリアに飯をタカリに行くか」

「どんだけ傍若無人なのよおおお」

そのまま厨房へと向かった魔理沙さんへとため息を吐く。

俺でも吐きそうというか、今吐いた気がする……

「本当に自由過ぎるわね」

「放置で良かったんですか？」

「魔理沙に関しては良くない事だらけだけど」

「でしようね……」

「久々にアリスに会えるし問題ないわ」

「俺のためにわざわざすみません」

「構わないわ、別に用もあつたし」

「そうなんですか？」

「気にしなくていいけどね」

「分かりました」

気にしなくていいってより聞いて欲しくなさそうに見えるし諦めた。

「しかし……またアリスさんに会えるのか」

紅魔館に来てから一度も会ってなかったし、本当に久々だ。
少しでも話せたらいいなと思うばかりだった。

そして翌日、今からお茶会が始まる。

そこにはアリスさんもいた。

ちやんと話さないと、色々と話したい事を……

to be continued

六十三話 再会（happiness and emb
arrassment

椅子のまま運ばれる経験なんて二度とないと思う。

ただ……助かったのは事実だ……

お茶会になんとか参加が出来た。

「あら？どうかしたの？」

「いえ……問題ありません」

「急に变なこと言つてごめんなさいね。私はアリス・マーガトロイド、アリスとでも呼んでね」

「小野寺蓮司です……」

「そう、小野寺君。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

元から覚えてないことなんて気付いていたはずなんだ……
だから、切り替えよう。

「……しかし凄いわね貴方」

「何かありました？」

「紅魔館に人間が居候してるって相当よ」

「だから言ったら？ 凄い人間がいるってよ」

「魔理沙の話なんて信じられるわけ無いでしょうが」

「いつも嘘ばかりじゃないだろう？」

「それはそうだけど……」

やっぱりこの二人は変わらないんだなって。

「小野寺君、どうかしたの？」

「え？」

「笑ってるわよ？」

「ああ、変わらないなって」

「え？」

「いや……なんでもないです」

「そう……何かあつたら言つてね」

何かあつたら……

本当は言いたい。久しぶりつて……ただ言い出したところで戸惑われるだけだ……

「……」

「緊張させちゃったかしら？ごめんなさいね」

「……こほん、咲夜そろそろ始めようかしら」

「分かりました」

俺の反応を察してかレミリアが流れを断ち切った。

助かった……このままじゃ暗いお茶会になりかけたし……

「それじゃあ皆様集まってくれて感謝よ、楽しいお茶会にしましょう？」

「お菓子は全部いただきだー」

「こら魔理沙!!意地汚いわよ」

「いいだろう、待ったんだからよ!!」

「……そんな問題じゃないでしょう、溢したりして」

「お前は私のお母さんかよ!!」

「違うわよ、だからそんな真似させないでちょうだい」

「だったら放置で良いだろう？」

「よくないから言ってるのよ……」

「なんでだよー」

「少しは淑女らしさを持ちなさいよ」

「女らしさなんて私には関係ないんだよ」

「もう……一応招いて貰ってる側なんだからね？」

「別に気にしてないわよ、魔理沙らしいわけだし」

「ほら、レミリアもこう言ってるぜ？」

「ほんと……ごめんなさいね」

「気にしてないわよ」

「堅苦しいより、楽しい方がいいですしね」

「そう言うこと、蓮司の言う通りよ」

「……」

「どうしたのアリス、驚いた顔をして」

「レミリア……貴女がそこまで人間に優しいのは予想外だわ」

「蓮司が特別なだけよ、他の人間に優しくするつもりなんてないわ」

「……一つだけ聞いておくけど」

「何かしら？アリス」

「その子を玩具とかにしているなら許さないわよ？」

「そう見える？」

「ええとても」

「？」

「何とぼけた顔をしているのよ……心当たりがないの？」

「無いですけど……」

「それなら大丈夫そうね……でもその脚、レミリアの気紛れで挽がれたのじゃないの？」

「ああ……これですか。違いますよ」

「……私の失態のせいよ」

「アレはレミリアのせいじゃ……」

「私が言った以上、絶対に治すわ。だから安心しなさい」

「……ああ」

「本当に信頼されてるのね」

「俺も嬉しい限りです」

「それで、彼を信頼してるからこそ貴女にお願いがあるの」

「義足を作れだったら怒るけど？」

「いや違うわ、彼に人形作りを教えて欲しいの」

「え？」

「貴方の人形も好きだけど、やっぱり本職の人に教えてもらった方がいいしね」

「それは……そうだけど……」

「私が師匠をしろってこと？」

「そう、ダメかしら？」

「ええ、断るわ」

「え？」

正直……アリスさんが断るなんて驚きだが……

嫌われる様なことしたっけか？

「理由を聞いてもいいかしら？」

「ダメも何も、もう教える事は教えきったわよ」

「……え？」

「……ちよつと待って、どう言う事？」

「それは……あれ？なんでかしら？」

「ふざけてるのかしら？」

「いえ……ふざけてるわけじゃないわ……本当になんで？」

アリスさんが戸惑っている。

どう言う事だ？覚えてないんじゃないのか？

「蓮司」

「どうした？」

「聞いわ、アリスには会ったことがあるの？」

「初対面のハズだろう？」

魔理沙さんが口を挟む。

その通り初対面だ……ここでは……

「ある……」

「ごめんなさい、覚えてないわ」

「それは、当然です……」

「どう言うこと？」

「……死に戻りつて分かる？」

レミリアが口を挟む、俺から言い出しても信憑性低いし有難い。

「初耳だが？」

「……死んでこの世界に戻るってこと？」

「ええそうよ、信じられない？」

「……ごめんなさい、自覚はないわ」

「それでいいわよ、私だって最初は自覚なかったもの」

「なんで分かったんだ？私だって記憶がないんだが」

「目の前で戻ってる事が分かるように言われたからね……」

「それは……私も違和感があるけど」

「ならば暫くウチに泊まっていったらどうかしら？モヤモヤしてるのも嫌でしょう？」

「それもそうだけど……」

「それにだけ……」

「まだ何かあったのかしら？」

「彼も来ると喜ぶわよ」

「ちよっ!？」

「え? どうして……?？」

なんで知ってるんだ!？」

と言うかアリスさんのこと知らないと思っただのに何故だ……?？」

「パチエが話してたのよ、貴方がアリスが来ることに喜んでるってね」

「……それは……言いましたが」

「てつきり人形遣いが来るから喜ぶって思ってたけど、今の話で理解したわけよ」

「……ああああああああ」

急に恥ずかしくなってきたて叫びだす。

それを見て魔理沙さんが大笑いをする。
もうやめてくれ……

「えつと……よろしくねでいいのかしら？」

「胃が死にそ……」

「七色の人形遣いの弟子だって言わなかった罰よ、諦めなさい」

「うわああああああん」

何というか顔が真っ赤なんだが……誰か助けてくれ!! 本当に!!
叫ぶが誰も助けに来てくれなかった、当然だが。

to be continued

六十四話 泥棒と青年 doesn't change

p e r s o n .

「小野寺君、調子はどうかしら？」

「身体自体は大丈夫ですよ？」

一晩経ってやっと落ち着いた。

あの時は自分でも暴走し過ぎていたと思う……

「その脚は確かか……」

「はい、止まっています」

「本当にメイド長は凄いわね……」

「皆凄いですよ」

「私はどうだったのかしら？」

「アリスさんですか？」

「ええ、聞きたいのだけど」

「自慢の師匠としか言いようないですが、まだまだ教わりたいことが多いくらいです」

「そうなの……？」

「はい、まだアリスさんに全然敵わないって思ってますし」

「そんな事ないわよ、貴方の作った人形見せてもらったけど中々だったわ」

「アリスさんのお陰ですよ」

「そう、貴方にとっての私がいい人だったようで良かったわ」

本人は信じられないことのはずなんだが、それでも信じようとしてくれている。それが嬉しくてたまらない。

「あの、アリスさ……」

「ちよつとお邪魔するわよ」

「パチュリーさん、どうかされました？」

「あら、アリスも居たのね。邪魔したかしら？」

「いいえ、彼に用があるなら出て行くけど……」

「いや、大したようじゃないってどころかもう用は済んだわ」

「え……何がしたかったんです？」

「魔理沙を探しているのよ」

「あれ？昨日帰りましたよね？」

「……さつきまで読んでた本が消えたのよ」

「それは確かに……魔理沙さんっぽいですが……」

「ただ……何処にもいないのよね……」

「魔理沙……いい加減にして欲しいのだけど」

「まあいいならいいわ……他を当たるだけよ。二人とも時間取らせてごめんなさい」

「……パチュリー、私も探すわ」

「彼に用があつたんじゃないの？」

「それよりも探さないといけないだろうし……」

「それじゃあ頼むけど……ごめんなさいね」

「え？俺にですか？」

「折角来たの楽しみにしていたのにつてね」

「皆でからかわないでくださいってば!!」

クスリと笑ってパチュリーさんは出て行く。

その後を戸惑うようにアリスさんが出て行った。

……これ俺が悪いの？

「ああもう……何が正しいんだこれは」

「そんなクヨクヨするなつての」

「うわっ!？」

唐突にベッドの下から魔理沙さんがヒョッコリ出て来て驚く。
なんとかベッドから落ちずに済んだが……

「いつから居たんですか？」

「寝てた頃からだか？」

「何故……?？」

「いや、ここで隠れとけば安全かなって」

「魔導書……返す約束じゃ？」

「ああ、だから返したぜ？」

「……。」

返したからまた持つて行くは絶対違うと思う。

と言うか……反省とか全くないんだ……

「……図書館だつてそうだろうよ、貸したものを返してまた借りるしな」

「図書館には返却期間があるでしょうよ……」

「ああ、死ぬまでが返却期間だぜ」

「……」

この人は一度しばかれた方がいいと思う、割と本気で。

「とりあえず、二人を呼び戻さないといけません……」

「おいおい、そりゃ無しだろ」

「だったら魔導書を返してくださいよ……」

「へへん、実際は呼べないことくらい分かってるがな」

「……」

凶星である、動けないし、二人がだいぶ離れた位置から探し始めたため、通信手段はあるが、それを見せた瞬間逃げるだろうし……

当然だが今の俺じゃ捕まえる余裕も無い……

「……勘弁してくださいよ」

「……これでも、そっちの世界の私よりマシだろうよ」

「どうでしょうね……あまりそんなイメージが……」

どっちの魔理沙さんも正直やらかし回ってるし……

手を付けられない意味で言ったらこっちの魔理沙さんも負けてないぞ？

「なんでだよ!!」

「いや……向こうの方が反省してたしまだマシだったかもしれない」

「なんだそいつ聖人か？」

「ただ貴女の方が悪人ってだけな気が……」

「人を悪人扱いなんて最低だぞ!!」

「だったら借りる前に許可取りましょうよ……」

「出ないからやだ」

「それじゃあ図書館で読めばいいじゃ無いですか……」

「手元の方が安心するじゃんかよ」

「……」

「なんだよ、お前も結局悪者扱いかよ!!」

泥棒なのは事実じゃ無いですか……

ただそんなこと言ったって聞く人なんていないし、だったら言いたいのはそのうちよりも……

「勿体無いじゃないですか」

「何がだよ、魔導書がか？」

「いや、魔理沙さんが」

「私が勿体無いって意味が分からないんだが……」

「努力家なのに、周りからの評価が泥棒になるなんて」

「っ!?!」

「勿体無いって言い方はおかしいかもしれませんが」

「なんで……ああそうだな……そういやお前は死に戻ってんのか……」

「そうですね」

「ただ……それを知られる程仲がいいのは予想外だが」

「……まあ」

実際はアリスさんから聞いた話だが、ここは言わない方がよさそうか
騙してしまっていたのかってなるが……

「ただ……それならなんでアリスが来るまで黙ってたんだ？死に戻りの事」

「それは……」

すぐにバレるじゃ無いですか……

「いや、言いにくいじゃ無いですか……。信じてくれそうにないし」

「……それもそうだな……。悪かった」

「……泥棒を控えていただければ」

「いや、断るけど？」

「え!? なんですか!？」

「だって、私のそういうところ知ってる人がいるって分かったんだしな。だったらいいだろう」

「悪影響した!？」

「へっへん、お墨付きが出たし今度から……」

「……尚更問題児じゃ無いですか!!」

「しようがないなあ」

「？」

「借りていいか？」

「うん？」

「それじゃ借りてくぜ」

「え？」

作り終えて隣に置いていた人形を持って行かれた……
そのまま笑顔で部屋を去って……ええ？

「……聞いて来た分マシなのかこれ？」

成長はしたのだろうか？

いや……俺も戸惑ってつい返事してしまったがやらかしたなこれ……

「……成長したと信じる事にしよう」

持って行かれた人形の方を見ながらそう言い聞かせる。

「あっ……。」

そう言えばあの人形レミリアから頼まれてた奴だ……

俺この後無事だといいなあ……

肩を落としながらそう思った。

t o b e c o n t i n u e d

六十五話 新訳：竹取物語～work neat.

「それでは、今から質問をするわ。尚、答えなかつたら徐々に尋問や拷問に変わる可能性もあるから注意しなさい」

「なんでいきなりこんなピンチなんです？」

「心当たらないの？」

……パチユリーさんに詰め寄られる。
本当に何が……？悪いことした？

「魔理沙の件どうしてか聞いていいかしら？」

「……気付いたんですか？」

「ここにあつた人形、消えてるしね」

「あつ……」

レミリアが持つていったと言えば言い訳は出来たかもしれないが……流石に嘘吐くわけにもいかないしな……

「それで、見つけたら言うように言っただけど、どうして逃したの？」

「実は……最初からこの部屋に居たらしくて……」

「え？」

パチュリーさんも驚いている。

そうだよな、俺もいるとは思わなかったし魔法使いは尚更察せただろうし……

「話して程々したら、その人形を持った上で帰られまして……」

「連絡は？」

「したら逃げますよ？」

「それも……そうね」

霧雨魔理沙と言う少女を理解しているからこそ逃げるって分かっている。
逃げられたら……実際どうしようもないし……

「だから無罪に……」

「なるわけないでしょ」

「そんなー」

残念ながら罰が下されるらしい。

仕方ないけど……どうしようもなかったと思うんです。

「何すればいいんですか？」

「そうね……学力はどのくらい？」

「高くはないし低いって程でも無かったです」

「翻訳って出来るかしら？」

「いや無理ですよ!?!英語そこまでの才能無いですし」

「ああ、英語じゃないわ」

「他の言語は尚更無理ですが……勉強して無いですし」

「そこら辺ではないの、出来ると嬉しいって程度だけ……」

「……無理だと思いますが、なんの翻訳をやらせたいんですか？」

「……古典って出来ない？」

「古典ですか？」

「紅魔館に訳せるのが居ないのよね、しょうがないんだけど」

「そう言えば名前的に考えると全員外国人か、咲夜さんは違うけど古典とかよりは英語向きだろうし……」

「それじゃあ確かに無理か……」

「古典なら完全に無理なわけでは無いんですが……使えますか？」

「ええ、ちよつと使えるかなつて」

「………？」

何をする気か分からないが、パチユリーさんの話を聞く。

翻訳する場所やその意味を……

「助かるわ、これで少しはマシになるかもしれない」

「何故そんな、急にこんな事をし出したのでしょうか？」

「永遠亭との件で少し必要なのよ」

「永遠亭と交渉するんですか？」

「ええ、それで姫様が云々つて」

姫様……蓬萊山輝夜か……

彼女は一体何を……？

「彼女達が勧めてきた本をそのままじゃ読めないから悪いけど頼んだわ」

「了解……ただ……その本はかぐや姫のか」

話になる程の有名な人だ、達筆で読めないとか難しい言葉を使ってきたら……と思
う。

不安ながらも本を取り訳し始めた。

—————

古文そこまで得意では無いが、赤点を取る程ではなかった。

だけど……相当難しいんですが……

「流石平安時代って言ったところなのかもしれない」

正直分らない単語もある……

そう言ったのは全て飛ばして、分かるところを訳して行く。

「しかし……なんだこれ？」

竹取物語とかかと始め思ったが……

最初が同じなだけで全然違うぞ？

「働きたく無い姫が如何にサボるか……？」

本当に何が書いてあるんだこれ？

訳は間違っている気しかしないけど……こう書いてあるよなあ……

「五つの難題とかも……これが現実だったら正直ドン引きするぞ？」

見てはいけない物を見てしまった気しかしない……

ただ翻訳を続けるしか無いか……

「最後はマシになる事を祈ろう……」

そう祈って最後まで翻訳する。

……ダメでした。

「突っ伏してどうしたのよ？頭痛くなった？」

「いえ……翻訳終わりました」

「早く無いかしら？」

「一応古語とは言え母国語なので……完全な翻訳では無いですが……」

「読めればいいのよ」

そう言いながらパチュリーさんはページをめくり、翻訳された文を読んでいく。そして……そのまま険しい顔になった。

「巫山戯てるの？」

「いえ!!それちゃんと訳したらそうなたんです!!」

「なんか引っかけとか、貴方が騙されたとかあるんじゃないの？」

「……いえ、完全に全てが読めたわけではないですけど、それでもその文は大体そうなんです」

「そこまで言うのなら信じるけど……」

正直信じ難いのは分かります。

翻訳してた俺でさえ信じきれてないんですから……

「このまま言えばいいのかしらね……正直怒らせる気しかないのだけど」

「……信じて下さい。と言いくいなあ」

「でもあつてるんでしよう？信じるわよ」

「訳したせいでこんな微妙な雰囲気になるとは思わなかった」

「これは……送られて来た物が悪いから仕方ないわよ」

不死になったから好き勝手にやって自由に生きる

まるで最近流行ってる感じの漫画の様なお決まりパターンにかぐや姫までもがなつてしまったとか信じたくないんだが

「……そう言う本もあるって割り切ろう」

歴史マニアとかが見れば間違いなく卒倒するだろうけど……

ただ少なくとも幻想縁起では蓬莱山輝夜が本物のかぐや姫だつてあつたし……
わざわざ嘘の書かれた本を大々的に出版もリスク高いよなつて。

「また……そのうち永遠亭のメンバーについては読んだ方がいいかもしれない……」

じゃないとギャップ差に押し潰されるかもしれないし……

ああ、藤原さんもそのうち探してみようか。

「それじゃあ今日はありがとう。巻き込んでしまつてごめんなさいね」

「俺が出来る事はこれくらいですから……」

「実際、一般人以上に頑張つてるわよ。だからむしろ誇つてちょうだい」

パチユリーさんに最後褒められて、部屋を去つて行く。

翻訳は、最初は不安しか無かつたが……ちゃんと出来てよかつたなと思う。

これから先も出来ることをうまく使つて、みんなの役に立てたらいいなつて、そう願

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

う
ば
か
り
だ
っ
た
。

六十六話 記憶のカケラくteddy bear.

「人形作りを教えてくださいの」

「???

アリスさんに唐突にそんな事を言われた。

いや、どちらかと言うと教わる方は自分なんじや？

「え？俺がですか？」

「他に人形を作れる人なんて居ないわよ」

「そう言われると……そうですが」

「だから、教えてくれないかしらって」

「アリスさんに教えられる事ってあるんですか？」

「あの子について教えて欲しいのだけど……」

「あの子って誰ですか？」

「えっと……クマの……」

「ああ、テディベアですね」

「そうなのかしらね……？お願い出来るかしら」

「分かりました」

今回は教えるのでは無くて、自分が作ってみる。
自分が成長したのも見せたいし。

「さっし」

黙々と縫って行く。

まだ一つに集中しているので返事が適当になってしまうのが課題だが……

「やっぱ丁寧ね」

「……」

「前のは覚えてないけど……今回、貴方が作っている所を見るの初めてだから……本当に、驚かされるばかりだわ」

「そうですか？」

手を止めてアリスさんの方を見る。

そんな出来なのかは不安しか無かったが……

「どうしたの？」

「いや……褒められるのが嬉しくて」

「レミリアは褒めてくれないの？」

「いや、褒めてはくれますが……やっぱり師匠からって言うのは特別でして」

「本当に師匠だった事思い出せないのが残念で仕方ないわ」

「……欠片すらも思い出せませんか？」

「ごめんなさい……」

「いえいえ、こつちとしては……」

「どうしたの？」

「いや、なんでもないです」

また会えてよかったと、今更どの口が言えるのだ……

こつちは異変解決してもらってる側なのに勝手に死んで……よくそんな事が言えたなって話だ……

「……だから、いいんだ」

「……辛いなら話して構わないからね。勿論話したくないなら無理やりとは言わないけど」

「有難うございます……」

だからこそ……辛いのだ……

その後は何も言わずに、人形作りに集中した。

「出来ました」

「家に置いてあるのと比べても、やっぱりどっちも可愛いんだけど……後で私も作ってみようかしら」

「俺もアリスさんが作ったのを見たいです」

「数日あれば作れると思うし、出来を見て欲しいわね」

アリスさんのぬいぐるみは一度見たし明らかに出来が良かった。確かにそれはもう見るまでも無いのだが……

「ああそうだ、アリスさんどうぞ」

「いいの……?」

「むしろ二匹目になってしまいますし、そっちがいいのなら……ですが」

「構わないわ、ありがと……」

アリスさんに渡そうとすると……

「蓮司、いるかしら?」

「レミリア?」

「あら、ちょうどいいじゃない」

「うん?」

「蓮司そのぬいぐるみ、貰うわ」

「え……？」

「フランが痲癩起こしちゃってね……」

ああそうか、フランさんか……

なら仕方ないのかな……

「しょうがないわ、私は客だし主人優先よ」

そうだ……だから仕方ないのだ。

人形をレミリアさんに……

「レミリア、ごめん」

「え？」

気付けばレミリアに謝罪していた。

レミリアもアリスさんも……自分でさえも驚いてる。

「小野寺君……私は……」

「アリスさんに渡すって約束したんだ。だから……」

「今の優先は私じゃないでしょ!!」

「一度決めた事は覆さない……」

「……これでムキになれるのは予想外だけど。分かったわ」

「レミリア!!」

全力で頭を下げる、感謝してもしきれない。

「ちよつと……じゃあ代わりの物はどうするのよ」

「私のコレクションから出しておくわ」

「いいのかしら？」

「構わないわ、その分新しいのを二人に作って貰うもの」

「なるほど、それは名案だ」

「……方が一満足してくれなかったらアリス、お願い出来るかしら？」

「分かったわ、向かえばいいかしら？」

「ええ、最近ちよつと暇そうではあるし時折癩癩起こすけど……それでも満月が終わっ

て落ち着いてるから」

「彼女も、落ち着いてるといいわね」

「あの……」

「どうしたの、蓮司？」

「その時、俺もフランさんのところについて行っていい？」

「……は？」

「前に俺、言った通り……今、彼女と話すことが出来そうだと言うなら……」

「だからフランとも話したいと？」

「……ダメか？」

「死ぬ気なの？」

「いや、そんな気は一切ない」

絶対に死んでたまるか、アリスさんとまだまだ話す事あるし……

「だったら死なないとも思ってる？」

「紅魔館はそもそもいつ死ぬか分からないとすら思ってるし」

「……そう言われると痛いんだけど。でも貴方脚がないじゃない？」

「一人じゃどうにも出来ないけど……どうか」

「小野寺君、レミリアの好意に甘え過ぎてない？」

「過ぎてるのは俺自身が一番……でもこのままでいたくもないんだ、お互いが仲良く出
来ないままってのも……」

「蓮司、貴方は会って何がしたいの？」

「レミリア、妹さんに渡すぬいぐるみ、作ってもいいかい？」

「目の前で？」

「目の前でかな」

「理由は？」

「仲良くなりたいは言った通り、後は保身もある」

「保身？」

「ただの獲物って認識を、人形を作る人になれば少しは生きながらえられるかなって」

「面白さだけは認めるわ。……数日内に決めるからその決定に従いなさい」

「……ダメな可能性あるのか」

「当然でしょ、家主に逆らう事ないように」

「考慮してくれるだけでも有難い……」

「それじゃあ後はお若い二人に任せて……かしらね？」

「俺で遊ぶなあああああ!!」

「ふふっ」

一言笑ってそのまま去ってしまった。

畜生……俺で遊ぶなんて酷いや!!

「と言うわけでアリスさんどうぞ」

「……と言うわけでじゃないでしょ」

「すみませんが、今回は絶対に変えませんので」

「……強情ね」

「つてわけで受け取ってください!!」

溜息を吐きながらも受け取ってくれる。

紆余曲折したけど、アリスさんの元に届いて良かった。

「全く貴方はっ……」

「アリスさん!？」

「一瞬だけ歪んだような顔をした……大丈夫だろうか？」

「大丈夫よ」

「それならいいですが……」

「しかし……今回の熊のぬいぐるみは誰にも取られなくて良かったのかもしいけど……」

「え？記憶が……?？」

「さつき頭痛のような仕草だったが……記憶が戻ったり?？」

「完全にじゃないわ、ただそう言うこともあった気がするって思えただけで……」

「そう言うこともあつた気がするって……」

「記憶が塗り潰される……は違うけど、あつたような気がするってね」

「……それ、大丈夫なんですか？」

あの日の言葉から、記憶の中に俺が全く居ないとは思わなかったが、思い出してくれるのは嬉しい。

ただ同時に……それで消えちゃいけない記憶とか消えてしまったらどうかと思う。

「ええ、大丈夫よ」

本当は思い出して欲しい、ただそれで塗りつぶしてしまつたらどうなんだろうと思う

……

本当にこのままでいいのかって。

「なら……いいですけど」

「弟子との記憶を思い出せない方が正直最悪だからね」

「分かりました」

「そんな暗い顔しないの、私が望んでるんだから」

「そうですね……」

正直な話をすれば、思い出して欲しいし……無理をして欲しくない。
何が正解なのかは俺には分からない。

「アリスさんが無事でありますように……」

ただそれを一番に願うだけだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

六十七話 地下の少女～c a l m d a y i n s i s t e r .

紅魔館地下、実際のところ案内されたのは初めてだ……

フランさんの危険性も分かったし、禁止されて無くてもあまり近寄ろうとは思わないから正しいことなのだけ……

「……準備はいい？ 後戻りは出来ないわよ」

「ああ、問題ない」

決意してドアを開ける、そこには荒れ果てた部屋に一人の少女がいた。

「あれ？ お姉様どうしたの？」

「フラン……また貴女散らかして……」

「だって、退屈なんでもん」

「退屈だから、じゃないでしょう?」

「だってだってー!!」

駄々をこねていると、こちらの方を見てくる。

……「一体何が?」

「あれ?お兄さんまだ壊れてなかったんだ」

「ちよつと言い方……」

「凄いね、初めてなんじゃない?こんなに持ったの」

「フラン」

姉からの拳骨が入る、痛そうだ……

「なによようお姉様……」

「まずは蓮司への謝罪でしょうよ」

「え？」

「アンタどんだけやらかしたと思ってるのよ」

「なんで人間に……？」

「だったらもう人間である魔理沙は呼ばなくていいわね」

「なんで!？」

「同じ人間の魔理沙だけ特別なのはおかしいでしょう」

「うぬぬぬ……」

「フラン」

「……ごめんなさい」

「……」

嫌々した謝罪……彼女なりにはすることすら嫌なんだろうけど……これは……
ただわざわざレミアに舞台を作ってもらって……暴れられても困る場面か……

「もう脚を潰されなければ……」

「え？もうないのに潰せないでしょ？」

「……そうですね」

「それじゃあお兄さんも遊ばつか!!」

「……壊さないでくださいね？」

「うん、何しよつか！」

「フランはいつも通り人形遊びでいいでしょう？」

「うん、分かった!!」

レミリアの提案に従う。弾幕ごっことか始まらなくてよかった……
それも危惧して提案したのか……？

「じゃあお兄さんこれ！」

フランさんからボロボロの人形を渡される。
前に渡した奴だがだいぶロボロボになったな……

「少し待ってくださいね」

「えーなんでー？」

「少し……作りますので」

「うん？」

人形を縫い始める。

それをフランさんは興味深く見ている。

「お兄さん作れるの？」

「はい、作れますよ」

「すつごい、私お人形で沢山遊ぶんだー」

「それじゃあ沢山作らないとダメですね」

「うん、いっぱい作って!!」

「了解です」

認識は変わったようで良かった……

ここから先はレミリアにお願いした通り、俺の仕事だ。

「あはははははははははは」

狂気に満ち溢れた様な声で楽しんでる……んだよな？

とにかく時間をかけて作った人形が一瞬で壊される姿を見た。

「もつと無いの？」

「ありますけど……もうちょっと大切に扱ってくれれば嬉しいですね」

「だって壊れちゃうんだもん」

「……」

レミリアから能力は聞いている、だから鉱物とか使って頑丈にした所で、壊れる物は壊れるしどうしようもない。

フランさんなりに大事に扱っては……ないけど、それでも壊す気でやってるわけじゃないしなあ……

「割り切るか」

自分の作品たちが容易く壊れるのを見るのは辛いけど、それでも満足するまで使って貰ったんだって……

正直割り切れないけど飲み込む。

「お兄さんは楽しい？」

「楽しいって言うよりは驚いていますね」

「どう言うこと？」

「正直フランさんの事知りませんでしたけど、恐怖の対象でしかありませんでしたから」

「……そもそもなんでそれなら来たのさ」

「あの時、俺の作った人形を持ってましたし、話せないかと思いましたが」

「そうなんだー。それでお兄さんは話してどう思ったの？」

一瞬歳相応と言いかけたが、何倍も生きている相手にそれはいかんだろう!!と……

「レミリアと似た、女の子に感じました」

「あら、それは私に喧嘩を売っているのかしら？」

「なんで!？」

今の失言!?!それとも女の子扱いがダメだった？

「貴方はなんでフランが閉じ込められているか忘れたとは言わせないわよ」

「それは……そうだけど……」

ただ今日はその片鱗を見せていない。

ちよつと物を壊しちやうけど、大差はないって思ったが……

「あらいいじゃないの、レミアアだってフランと一緒にの方がいいでしょう？」

「アリスはなんの根拠を持って、そう言い出せたのかしら？」

「極度のシスコンの癖に、一緒な事嬉しいんでしょよ」

「問題児扱いされて嬉しいわけ無いでしょうよ」

「実際問題児じゃない」

「何処が？」

「紅霧異変とか」

「あれはもう過ぎたしいいじゃない」

「外の人間を攫って玩具にしてるとか」

「蓮司が来てからはしてないわ」

ん？

「博麗神社に届いた物時折拝借してるのも知ってるわ」

「別に……茶葉くらいじゃない」

「ちよつとタイム……」

「どうしたの？蓮司」

「外の人間を攫うって……」

「あら？だって私は吸血鬼よ」

「それは理由になつてないんですが……」

「フランに必要なだったのよ。貴方みたいに代わりになる人形が無かったから」

「代わりがないからって……人をそうするのは……」

「血だつて必要だし、吸血鬼には食事も遊びにも人間が必要なのよ」

それは分かっているんだが……

死んだ人を悼む事はすれど、話を掘り返したところでその人達が報われるわけじゃないか。

初期のレミリアを考えれば人を殺す事に躊躇いなんて無いんだし。

「だから、本当に貴方には感謝しているわ。フランの手を血に染める必要はなくなった

し」

「でも人形ならアリスさんも……」

「手伝う理由がないわ」

「え？」

「今回は何かあると思ったから来ただけで、貴方が居なかったらもう既に帰ってたわよ」

「アリスさんが……意外ですね」

「あら？どうしてかしら？」

「人助けを生業にしている様に思えたので」

「正直、紅魔館に力を貸す気はなかったしね」

「初耳なのだけど」

「折角作り上げた人形を躊躇いなしに壊すのに手伝う気なんて出ないし」

「それは、私ではどうしようもないわね」

「小野寺君も本当はそこは流石に不満だと思うわ」

「……本当？」

「正直……俺が折角作り上げた人形を即あさかれて、悲しい気持ちもありますよ」

「それは……本当に申し……」

レミリアを謝らせる前に遮る。

レミリアは悪くないし、フランさんもわざとでは無い……そして何よりだ。

「でも使ってくれてる人が笑顔になるならそれが一番って奴ですよ」

フランさんの方を見る。人形を使いながら笑っている。

それだけで良かったと思える。

「そうね、それだけでも私も良かったと思えるわ」

「このままフランさんが落ち着いていればいいんですけどね……」

一先ず、一回目の顔合わせは大成功だったなと思うばかりだった。

t o b e c o n t i n u e d

y. 六十八話 本の行方は?~lost property

小悪魔さんが見守る中、俺がパチユリーさんに怒られている。

ずっと寝たままでもアレだと言われ、図書館まで運んでもらったが……着いた途端怒られ始めた。

……正直パチユリーさんに説教されるのは何回目だろうか？

「なんで私が説教しないといけないのよ……」

「そう思うのなら……別に無理されなくても」

「あゝ？」

「ごめんなさい」

ここまでマジギレするパチュリーさんは初めて見たんだが……いつもの比では無いらしい。

「レミイも伝えて来ないし……貴方達纏めてどれだけやらかせば気が済むのよ」

「おっしやる通りです……」

フランさんのもとへ行ってはい終わりだと思っていた。

ただ、アリスさんとレミアアの三人、他には誰も告げずに行ったため……迂闊すぎたことにブチギレるわけになったわけだ。

「全く……今日の予定取り消そうかしら」

「何かあるんですか？」

「……行く場所があるのよ。ただ貴方を置いて行くのが不安なんだけど」

「外出って珍しい予定ですね」

動かない大図書館と、図書館からすらも滅多に出ない彼女が外出する用があるなんて本当に珍しい。

「それだけ、大事な用なのよ」

「だったら行かなきゃまずいじゃ無いですか」

「悩ませるのは誰のせいだと思ってるの?」

「……」

言い返せない、俺なのも自覚してるし。

「はあ……小悪魔、任せたわよ」

「大丈夫ですか？」

「ええ、彼が何かやらかしたら好きにしていいいから」

「え、良いんですか!？」

「ええ、文字通り好きにして良いわよ」

「ちよっ……」

「図書館で大人しくしてなさい」

「……分かりました」

正直、小悪魔さんが何をして来るか分からない……大人しくしてるのが吉だと思う。

小悪魔さんがそわそわ?こあこあ?してるが気にしないことにしよう。

「何か読みたい本はありますか?」

「読みたい本……」

つい最近、頼んでおいた車椅子に似た物が完成した。

脚が治るのはすぐでも今後も役に立つ可能性はあるしと。

これで一人で動けるようにはなったけど……それでも、流星に図書館の本探しは厳しいので小悪魔さんに任せる。

正直読みたい本だらけでもある、ここ最近読むことが出来なかったし。

ただし……優先度の高い本は……

「小悪魔さん、異変ノ断章ってありますか?」

「異変ノ断章……ですか?」

「この前見かけた謎の本です」

「ああ！分かりました、すぐに探して来ます」

そうしてパタパタと飛んで行った。

一先ずはあの謎の本から情報を得ないと……

そして小悪魔さんが帰って来たが、何も持っていない。

「あれ……本は？」

「すみません……見当たりませんでした」

「え……？」

「そこら一帯をはじめ、周囲をくまなく探したのですが見当たりませんでした」

「そんな……」

「あの魔法使いに盗まれたのかもしれないし、何が起きたのか分かっていません……探しておきますね」

「……有難うございます」

「一番今必要な本が見当たらなかった……非常にまずい事態だ」

「代わりの本を探します、何が良いでしょうか?」

「それじゃあ、永遠亭や竹林についてお願いします」

「かしこまりました」

「そうして本が目の前に積まれる。」

「永遠亭についても後で読むが……まずは竹林だ。」

「藤原妹紅……彼女だな」

竹林で会った少女を思い出してその内容を読む。

また会って、感謝などを彼女に伝えたいと思う気持ちや、色々とまだ聞きたい事があるなど思いながら読み進める。

「不死……本当に幻想郷は長命や不死が多いよな」

もう幽霊とかもいるんじゃないかって思っている。

「つて思ったがよく考えたらあの人も……」

ちょっと待て、あの人って誰だ？

俺は幽霊に会った記憶は無いんだが……

もしかしたら忘れちゃいけない事かもしれないが……恐怖心からそっこのけでペー
ジを進める。

「……………」

気になる言葉があつた、と言うか本に載るんだなとも思つて驚いた。

『迷いの竹林には、地底へと繋がる道がある』

「もしかして……………本当に?」

あの時、俺は本当に地底でさとりさんと?

分からない、この事実があつても結果は誰も知り得ない事か…………

「……………終わりか」

気付けば、本も読み終わっていた。

「まだまだ情報が足りない……………特にあの本が必要だ……………」

「異変ノ断章……次魔理沙さんに会った時に聞いてみよう」

あの本が、異変について何か聞いて当てがあると思ったから。
解決を始め、役に立ってくれると信じて……

∴

永遠亭、そこに招かれた客パチュリー・ノーレッジは訪れていた。

「いらつしやい、本当にあの本を吸血鬼が訳したですって？」

「ええ、協力者ありきだけど」

「別にそれくらい構わないわ。協力者なんてそもそも出来ると思わなかったけどね」

「伝手くらいこちらにもあるわよ」

「じゃあその伝手の才能を見せてもらおうかしらね」

パチュリーと対応している少女、蓬萊山輝夜はその訳を受け取る。

「正直……感想を聞きたかっただけで、訳して来いとは言っていないだけどね」

「どうせ訳さないと読めないわよ」

「それもそうね」

そう言いながら輝夜はページをバラバラと捲る。

そしてそのまま吹き出す。

「ちよつと……これ……」

「大丈夫と信じたけどダメじゃないの……最悪じゃない」

「誰が訳したの？」

「言った通り協力者よ」

「興味が湧いたわ」

「え？」

「全部を訳せたわけじゃないけど……概ね期待以上の出来だし、文句無いわ」

「本当にそれがあつてるなら、幻滅なのだけど」

「いいじゃない、働くだけが全てじゃないわ」

「……それで、どうするのよ？」

「いいわよ、こいつに興味が湧いたから見に行かないとね」

「勿論、永琳もお願いね」

「流石にそこまでは捻くれてないわよ」

パチュリーは、永遠亭に小野寺蓮司の脚を治すようにお願いしていた。

その条件として、私が興味を持つかどうかと。そのために古書を使ったようだ。

そして、彼女に気に入られたようであり、問題は無いだろう。

「脚だっけ?永琳が居ればすぐとはいえ、本当に治す必要あるのかって思うけど……」

「無いと不便じゃ無いかしら?」

「そう言われると否定は出来ないけど……」

「貴女だつて気に入った相手には尽くすタイプじゃないの?」

「何処のチヨロインよ……」

「チヨロインじゃないにせよ、こつちのお願いはそれよ」

「興味は確かに持ったし、この訳を書ける人間をどんよりとさせたままにするのは勿体無いわ。だから叶えるから安心しなさい」

元より彼は脚がなくなつてどんよりはしてないが……確約してくれて助かった。

これで、彼の脚が治る手筈は整つた……

頑張つた甲斐があつたもんだ。

「近いうちに紅魔館へと向かわせて貰うわ」

「そうしてくれると助かるわね」

「それじゃ、今後も良い関係を」

「ええ」

二人の少女は握手を交わしたのだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

六十九話 異変ノ断章くstrange book.

「で？私を呼び出してなんだよ？」

「わざわざ来ていただいてすみません」

「今日パチュリー呼んだらキレるからな」

「流石に呼びませんが、返していただいた方がいいですからね……？」

「べーだ」

「……まあ今は置いておきましょうか」

「……それで、私は何をすればいいんだ？」

「探してる本があるんです」

「それは私よりパチュリー達案件じゃ無いのか？」

「いえ……その本が見当たらないので魔理沙さん案件だと思ってます」

「返さないぞ？」

「そこをなんとか……」

「私のだぞ!!」

「違うでしょうが……」

魔理沙さんの本じゃないでしょうに……

文句いったところで聞きそうにないんだが……

「異変ノ断章と言う本なのですが……」

「あー……見た事あるな」

「本当ですか!!」

「あー……だったら来てもらうぞ、家分かるだろ？」

「……すみません」

「あーそうか……ただもうすぐ一月経つんだぞ？まだなのか？」

「もう少しらしいですが」

「まあ私からは深く言わないが、最悪疑えよ？」

「流石に疑えませんよ……」

「好きにしろよ、で異変ノ断章だな了解した!!」

そのまま魔理沙さんは箒に乗って出て行く、その後ろ姿を見ながら……

「もうすぐ満月か……」

今月は何も無いと良いんだが……

ただ、そう願うばかりだった。

「よっ、持って来たぜ!」

「有難うございます」

「私の本なんだから大事に扱えよな」

「……」

違うだろと心の中でツツコミながら本をめくる。

あの時はフランさんが暴走して読めなかったが……

「……よしっ！」

今回は何も起きないと信じながら本を読み始める。

「しかし、その本読めるのか？」

「読めますがどうして……？」

「私は読めないんだよ」

「……マジですか!？」

「ああ、だから気になってはいるんだがな」

「そうなんですな」

それならばと音読するように読み始める。

「……三途の川!？」

最初から唐突な単語で驚いたが……

確か、幻想郷にも三途の川はあつたはずだな。

「三途の川で目を覚ます……もうそれ手遅れなんじゃ無いのか？」

「それでも無いぜ。船に乗っちゃいけないが、飛んでいくなら大丈夫らしい」

「しかし三途で目を覚ましたって……どんな事やらかせばそんな事に」

「続き読もうぜ」

「了解です」

続きを読んで行くと、死神と話したらしいが……
死神と話すってどんな経験だよ。

「と言うか、死神と話すってまずいような……？」

「ああ。普通なら船に乗っちゃまうだろうしな」

「……実際乗ったりしてたり？」

「そしたら本になれないだろうよ」

「それもそうですな……」

続きを読むが、探し人がいるだけで乗る気はないらしかった。

「しかし……誰かを探しているようだな」

「三途の川でか？」

「そりや……ここで覚めたのならそうでしょうよ」

「それもそうか……」

そのまま読み進めていると、違う場所へと向かっていた。

「無縁塚……？」

少し聞いた事があるが……行ったことはないがそこはどんな場所なのだろうな……話の内容はそこには誰かいるらしくて……話したと書いているが……その誰かが書かれていない。

「知らない場所、知らない人物……誰が……」

何故だろう……話を読んでいただけなのに、頭の中にうつすらとその姿が浮かんだ。その人物は誰だか分からない……初めて見たはずの人だ……ただなんでこんな……懐かしさを覚えるのだろうか？

「どうした蓮司……？」

「あの魔理沙さん、無縁塚って行けないですよね？」

「行けなくはないが……三途の川よりは簡単だし」

「だったら……」

「だがお前、魔法の森を抜けた事あるのか？」

「魔法の森を……ですか？」

「ああ、魔法の森の更に奥だ」

「……無いです」

「だろ？だからほぼあり得ないはずだぜ」

「そうですね……」

そもそも顔も見えない相手だったのにそれを気にしたって仕方がない。何より、地上にいるはずがないのだ……角の生えた少女なんて。

「話はここで終わりみたいだな」

「続きは無いんですかね……?」

「少なくともうちには無かったぞ」

「無いんですかね……?」

「さあな、図書館に無いなら他の場所にあるかどうかだしさ」

「あるなら見つければ良いんですけどね」

「私も興味湧いてきたしな」

「魔理沙さん、見つけたら教えてくださいな」

「えー、私が見つけたら独占したいんだが……」

「どうせ見つけても読めないでしょうよ……」

「む……そう言えば……」

魔理沙さんも開けられないって言ってたしな……

こればかりは俺も読みたいし俺が必要だと思う。

「そう言えばどうして蓮司は出来るんだろうな？」

「流石にそう聞かれても困りますが……」

「悪い悪い、気になっちゃまってさ」

「まあ俺も気になってますしね……」

実際のところ外の人間だからくらいしか浮かばないが、本当にそうなのだろうか
疑問がある。

確かめようが無いから諦めるけど、そのうち調べてみたくもある。

「それじゃあ私は行くからな」

「有難うございま……え？」

「え？つてなんだよ」

「あの……本は……？」

「持ち帰るが？」

「図書館のですよね……？」

「今日はそういう話じゃ無いんだろう？」

「いや、だからって……この本は必要だって」

「また必要な時持つて来てやつからさ！」

「いやそうじゃなくて……」

気付けば魔理沙さんの姿は無くなっていた……本当に速いな……

「はあ……結局本を取り返せなかった……」

またパチュリーさんにどやされるかもしれないがこればかりは仕方ない……

「もう満月か……」

今日読んだ本で少しは今後の方針を決められた気がする。

流星に一月の間成果無しとかにならなくて良かった……

「やる事が気付けば増えて行きそうだ……」

まずは脚を治すことが最優先とは言え、異変の解決やら、本を探したりもしたい。

「三途の川に無縁塚……」

三途の川へは行けないって言ってたが無縁塚は行けなくないらしいし……

「……後は」

もつとアリスさんと話したい。

許されることでは無いのかもしれないけど……

「クヨクヨしてても仕方ないか……」

考えてる事を全部こなそうと頭を回すのであった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

七十話 地下の少女② ～ uncontrolable

i m p u l s e .

紅魔館地下、再び俺達は訪れる事となった。

きっかけはレミリアがまたフランさんの人形の在庫が切れたって事に加えてフランさんが俺を待っているって聞いたからだ。

「レミイ、正気なの？」

「何がよ」

「もうすぐ満月よ？」

「だから今日なのよ、満月の後になってわけにはいかないでしょう？」

「それはそうだけど……」

満月の時のフランの機嫌を良くしたいのもある。
危険なのは分かっているが……だからこそだ。

「……それに、今日のメンバーは生半可じゃないわ」

パチュリーに美鈴、咲夜にアリスまで……

流石に小悪魔や妖精メイドは居ないがオールスターが揃っている。

「これでも不満かしら？」

「不満かどうかは私が言うべき事じゃ無いでしょ」

「それもそうね。蓮司、どうかしら？」

「いや……どうかと言われましても……」

「不安なの？」

「油断して無くても一瞬で死ぬような相手だし」

「あら？そんな警戒してたかしら？」

「ただ、信じては居るしそこまで心配しては無いけど……結局考えた所で死ぬ時はどうせ何処にしよう」と一瞬だから……」

「妹が劇物扱いされてるのだけど」

「何より満月が近いのが……」

「やはり心配？」

「先月がね……」

「そう……ね。もう無いと良いけど」

「それは皆思ってるさ」

「そうね」

そして扉を開ける。

フランさんがテクテクとこちら側に来る。

「来てくれたんだ!!」

「人形直さないとって話だしね」

「うん!でも今回は頑張ったよ!!」

人形を見てみる。五個あつた人形が三個壊れている。逆に言えば、二個壊れずに残っている。

「凄いな、てつきり壊れると思つたけど」

「ふふん、私だつて成長するんだよ！」

「……」

頭を差し出してくる、頑張つたのは事実だ。

自分も大丈夫つて言つたばかりだろ!!

そう言い聞かせながら少し震える手で、頭を撫でた。

「えへへ」

彼女は壊す事しか考えてなかつたのに、変わろうとしてくれている。だつたらこつちも応えるべきだ。

「フランさんは今日はどんな人形がいいかな？」

「フランでいいよ、お姉様と一緒に」

「それじゃあフラン、どう言った人形が希望ある？」

「可愛いのを！」

大雑把なの来ましたか……それでも希望に沿うべきと。

「手伝いましょうか？」

「いえ、アリスさんはアリスさんでお願いします。フランの要望のはこちらで作るので」

「分かったわ」

そのまま人形を作り始める。

お気に召さなかったらどうしようと思うが、それでも作るしか無いと。

「……うーん」

「まーだー？」

「もう少し待っててね」

これじゃ無いこれじゃ無いとうんうん悩んでいるうちに夜になった。
ただ、満足いくのが出来た……一個だが。

「わあ、本当にいいの!!」

「フランの為に作ったしね」

正直自分の腕で作れた事が驚きだが、マトリョーシカを作り上げた。

「蓮司、後で私にも作ってくれないかしら？」

「それはいいけど……」

「じゃあ後でね」

マトリョーシカも意外と人気出るんだなって……

作るのには手間だけど、これからも少し作って行こうかなって。

「レミイ、そろそろ……」

「あら、もうこんな時間？蓮司、皆、帰るわよ」

「後少しだけ……」

「もうそろそろ時間もまづい……」

その瞬間、時計の鐘が鳴った。

0時を示す鐘が……

「ほら蓮司、もう0時だから」

「0時か……フラン、悪いけどって……」

「ぐう……」

「フラン!？」

フランの様子がおかしい、何があった……？

「蓮司!!」

慌てて近寄ってしまったのをレミリアに叱られる。

「お兄さん逃げ……」

その途端、フランの目の色が無くなる。
引つ搔かれるが軽傷で済んだ。

「下がりなさい!!」

レミリアの言葉に下がりは始める。

ただし、まだこちらの方へと飛んで来る。

「くっ……」

「ほらちゃんと来なさい」

「アリスさん!!」

アリスさんに引き摺られなんとか攻撃を避ける。

「……大丈夫よ。」

アリスさんも引つ搔かれたようだ、幸い怪我は大きく無いが……

「……貴女達には悪いけど、正直助かったわ」

「パチュリーさん？」

「先月の様に被害が出る前に済みそうで良かったわ」

「まだ終わってないんですが……」

「確かにまだだけど、大丈夫よ今回は全員いるもの」

「それならいいですが……」

「治療は悪いけど終わるまで待つてもらおうけど」

「それは構いませんが……」

フランが捕らえられている、まだ反抗しているようだが時間の問題そうだ……
今回は大きな怪我無くして良さそうだ。

「しかし……今回はどうしてかしらね？」

「何がですか？」

「フランが狂気に囚われるのは確かにある事だけど……それでも満月の日が多くて、その数日前なんて無かったはずだけど」

「……理由はあくまで推測ですが」

「聞かせてちょうだい」

「先月、満月が無かったのがあるかもしれませんね」

あくまで推測ではあるが、満月がないせいで周期がズレた可能性はあるかなと思っ
ている。

「そう言われるとそうね、盲点だったわ」

「あくまで推測ですけどね」

実際の所どうか分からない、満月で暴れられるよりはマシンなのかもしれないが……

「実際、いつもの満月以上に力は出てないおかげで対処しやすくなっているわ」

「でも満月の日は……」

「問題ないわ、フランの衝動を減らすと同時に、今日のうちに疲れさせるから」

「疲れさせれば大丈夫なんですか？」

「今回は特に自発的じゃ無くて発作だしね、数日は動けない筈だわ」

「そうですか、それなら本当に……」

「ええ、無事に済むわけよ」

「良かった……フランも怪我が増えずにすみそうだ」

「そうね、貴方が来てくれてフランも破壊衝動が弱まって来たし……助かってるわ」

「……俺も色々してる自覚はありますが、それでもなんでもかんでもいい傾向になるのは予想外ですけどね」

「私だつて驚きよ、図書館で見た時は不安しか無かつたんだし」

「……ははは、一般人ですしね」

そのままフランがボタンキューと倒れる。

外傷は少ないようでホツとひと息つく。

「終わりましたよ皆様！」

美鈴さんがご機嫌に伝えて来る。唐突に始まったけど無事に終わったよう良かった。た。

「パチエ、どうかしら？」

「はいはい、凄いわよ」

レミリアが自信満々に見てた見てたつてやってるのを軽く流す。むすーってしてる

けど正直今関わる気はない。

「ほら皆帰るわよ、アリスも起きなさい」

倒れているアリスさんをレミリアが起こす。

今まで、パチュリーさんやフランの方を見ていたせいでアリスさんの方を見ていなかった……

怪我しているのに、大丈夫だと思い込んで……

「アリス!? 咲夜、ちょっと来なさい!!」

「アリスさん!?!」

咲夜さんが向かう中、慌てて俺も駆け出す。

もつと気にするべきだったんだ、大丈夫だろうと思うべきでは無かった……

「どうして……」

怪我は大した事はなかったが、それでもグツタリとしたアリスさんの姿があった。

t o b e c o n t i n u e d

e. 七十一話 病に臥す～vampire disease.

俺のせいだ。

俺が迂闊だったせいでアリスさんは怪我をした。

もっとアリスさんの方を見ていれば、異変に気付いた筈だ……それなのに。

「蓮司、アリスの調子はどうかしら？」

「……まだ、苦しんでいます」

夜の事故から数時間しか経っていない。なのにアリスさんの消耗は激しく見える。

「原因は分かかったりしたり……？」

「ごめんなさい、分からないわ」

「パチュリーさんの方は……？」

「数時間で見当たらないらしいわ……普段読んでる癖に」

「いやいや……パチュリーさんが悪いわけじゃ」

「数日すれば、見つかってくれると思うのだけど……」

「数日……」

アリスさんの顔を見る。

顔色は青くなって、苦しんでいるのが目に見える。

治療の時、日光を浴びてから症状は更に悪化したように思えた。

「まるで私達のようなね」

「私達って……?」

「日光が嫌いだななんて似ていると思っただけよ」

「吸血鬼……」

「どうかしたの?」

「いえ……」

確か、そう言った症状の病気を聞いた事がある気がする……

ただし……名前を聞いた事あるだけで、その病気を全然知らない。

「……変わるわ」

「問題ないよ」

「寝てないでしよう?」

「一徹くらいは大丈夫、それよりも戦い疲れがまだあるんじゃないか?」

「……そこまで言うなら分かったけど」

「ああそうだ、レミリア」

「何?」

「今回の件、フランに伝えないで欲しい」

「とんだ甘ちゃんね」

「お願いします……」

「…………分かったわ」

決めつけではあるが、アリスさんは絶対フランさんを恨まないだろう。
俺だって彼女を恨む気はない、悪いのは知っていたのに迂闊過ぎた俺だ……

「…………アリスさん」

まだまだ話したい事だらけなのに…………なんでこんなことに……

「うう…………」

「アリスさん!？」

うなされているようで足の付いた椅子を動かして慌てて近寄る。
触つてみると熱い。高熱まで加わったのか……

「タオルを……」

部屋の近くにいた妖精メイドさん達に声を掛けてタオルと水を持って来てもらう。

「……熱下がつてくれるといいですけど」

苦しむ彼女を見て、そう願うばかりだった。

—————

寝ちゃダメだ……

頭がぼーつとして来たが頬を叩いて目を覚ます。

「……アリスさんはまだうなされて」

ただの高熱ではない、原因不明だ。

体調管理などはレミリアがしっかりしてたし、本当に唐突でしかない。

「こうなるなら医学に精通しておくべきだったな……」

俺はただ、祈るしかないのは分かっている。

「あの時は俺が心配させてばかりでしたね……」

魔法の森の迷子から始まって、妖怪の山でも散々彼女に心配させていた。

「まさか、同じ部屋内でも心配されるとは思いませんでした……」

今となっては俺の事を考えての事だったって分かったが……当時はドギマギしまくりだったな……

「人形も教わってばっかで……今回教える側になるとは思いませんでしたけど……」

確かにあの時もデイベアを教えていたが、あの時作ったのはアリスさんだ。

当時の俺は人形作り出来なかったし仕方ないけど……

「でも……本当に俺成長したんですからね……」

流石に雛さんに七色の人形遣いだって言える程ではないが、あの時よりも成長している。

「だからちゃんと……元気になってくださいよ……」

泣きそうになるのを必死に堪えながら呟く。

このまま目覚めない事なんてあってはならないと思いながら、拳を強く握る。

「小野寺……君……?」

「アリスさん!」

少しだけ目を開いた彼女を見る。

思いが通じたのか……？どちらにせよこのままうなされているだけで目覚めないなんて事はなくて良かった……

「ちゃんと生きているの……？」

「はい、生きていますよ。アリスさんが死ぬわけなんて無いじゃないですか!!」

「……そうじゃなくて」

……？意図が読み取れない。

熱で色々と混濁しているのか、それとも俺が理解出来ないだけか？

「小野寺君が……」

「俺……？俺は大丈夫ですよ？」

「迷いの竹林で……貴方を探して……」

「!？」

また欠片を思い出しているのか？

やっぱり前世の記憶が片隅にあるのか……？

「アリスさん……それは」

「熱にうなされながら、頭だけはぼんやりと前世の記憶が浮かんでいたわ。……ふつつ、自分の記憶なのに自分じゃないみたい」

「ごめんなさい……」

「なんで謝ってるのよ」

「今のアリスさんを否定してしまうような気がして……」

俺がいた記憶が存在する。

俺にとつては嬉しい事だけど、アリスさんにとつては今までの記憶と違うって事だ……本当にそれが良いことなのかと思ってしまう。

「私が思い出したいって……言つたでしょ？」

「それはそうですけど……」

「小野寺君……」

「起きつばなしは辛いでしょう、そろそろ寝た方が……」

「ただいま」

「お帰りなさい」

色々と言いたい事はあつた、ただそれでもお帰りなさいとだけ伝えた。

少なくとも俺が長い間一緒にいたアリスさんなんだと。

「今は休んでもらって、元気になったらまた色々話しましょう」

「……」

「アリスさん？」

「ごめんなさい」

その口元からは血が垂れていた。

無理させてしまった……いやそれ以上にどうすれば……

「今誰かを……」

「……」

しかしアリスさんは何も答えない。

かろうじて呼吸をしているようだが……もうそれさえも小さくなっている。

「また……会えたのに……」

そんなの耐え切れない、思い出してくれたのにこんなので。

「……苦しいですよね」

返事もままならない程だ、相当辛いに決まっている。

ならば……答えは一つだ。

「もしも次会った時に思い出せなくても構いません。それが普通ですから」

そうして小刀を取り出す。

「自分の命を軽く扱ってる癖に、他の人が大変な目に遭うのは看過出来ないなんて自分

勝手かもしれませんが……」

だけど、アリスさんを失ってこの先真っ直ぐに生きていけるとは思えない。ただ一つだけ、こうなるならもう少し話しておくべきだったと。

「……レミリアも色々としてくれようとしてたのにごめん」

来世で、仲良く出来るか分からないけど……それでもやるだけやってみるんで許して下さい。

そのまま短刀を自分へ突き刺す。

そして世界は巻き戻……

「家主の話だと、この部屋ね」

蓬莱山輝夜によって紅魔館へと向かわされていた銀髪の医者がこの部屋へと訪れた。

「脚の治療だと聞いたのだけど……どう言う惨状かしらこれ？」

一人はベッドで倒れている。

普通ならその人が頼まれた患者だと思いが、脚の無い患者は車椅子に座って短刀が刺さっている。

「よく分からないけど……治して話を聞いてから考えましょうか」

世界は巻き戻らなかった。

to be continued

七十二話 本当の再会くAlice Margatrol

i d.

目を覚ます、ここはいつもの野原ではない？
と言うか……ここは紅魔館だ。

「……」

念のため、自分自身を確認するが……

「脚がある……」

元通りに戻っている。

納得した、やっぱり死に戻ったんだなって……

「動く……動いた!!」

自分の脚が帰って来た事に喜びを覚える。

しかしすぐに、その表情は変わる。

そうだ、紅魔館から出ないと不法侵入者扱いされる。

「……皆記憶がないから、咲夜さんとかに見つかったら完全にアウトだ」

そっか、改めて記憶が無いんだと自覚する。

ただ、それ以上にアリスさんが死ぬ事が耐えきれなかった。

「折角思い出してくれたのに……アリスさんには悪い事したな」

「本当にね」

「!？」

慌てて身体を起こす、近くでアリスさんが椅子に腰掛けていた。

「アリスさん……?」

「ちゃんと目が覚めた?」

「はい」

正直、現状が理解出来ずに混乱している。

どう言う事だ?

「どう言う事ですか……?」

「いや……それだけ聞かれても分からないのだけど」

「なんで記憶が……?」

「これは、怒れって流れなのかしら？」

「なんで……!?!」

マジで状況分かってないんですって!!

「そもそも、死んで無いわよ」

「え?でも……俺もアリスさんも……」

「死んで無いわ、お互い死にかけだったけど……医者が間に合ったの」

「医者、八意永琳さん……」

「そうね、私の病気も、小野寺君の脚も身体も全部治療されたわ」

「……どのくらいで？」

「貴方は丸一日寝ていたわ」

「二日で脚が治ったんですか!？」

「そうね、聞いた話だと咲夜が時を止めていたから、壊れていたけど状態が良かったのがすぐに治った理由みたい」

「……咲夜さんにも感謝ですね」

本当に、一月近く時を止めていてくれた彼女には感謝の言葉しか出ない。

負担も相当なものだったろうはずなのに……

「それじゃあ、永琳さんの所に感謝の言葉を伝えに行きますね」

「やっと休憩に入れたからもう少し後の方がいいわ」

「分かりました」

流石にこっちの都合って訳にもいかないし、すぐに帰るわけでも無いだろう。
もう少し落ち着いてから向かうか……

「それに、私からも話したい事があるし」

「アリスさん……」

そうだよな……記憶が戻ったんだ、俺だって話したい事が沢山あるんだ。

「小野寺君」

「はい!!」

「正座」

「え？」

「私、久し振りに怒っているの」

「……」

怒気が混じる声に汗が流れる。

これは分かる、まずい奴だ……

「前の世界だけじゃなくて今回も……覚悟しなさい」

「分かりました……」

……流石に覚悟するか、100%悪いのは自分だし。
ベッドを降りて、その場に正座した。

「残された人の事を考えた事あるかしら？」

「いえ……無いです」

生ききれなくて死んだケースばかりで、残された人を考える余裕なんて無かった。

数日前だけは余裕があったが……それでも……残された人には謝罪しか出来ない
なあって思った。

「死んだら皆が覚えてないから、どうせそう思う気だったでしょう？」

「……そうですね」

自分の命は軽い、そう思っている。

正確には、知り合いの命が失われるのを納得出来ないから、自分が死ねばどうとでも
なると……

「……貴方が皆の死を受け入れられないように、私達だって貴方が死ぬのは耐えられないのよ」

「……」

分かつてはいるんだ、それでも納得が出来ない。

「迷いの竹林で、住人が貴方とハグれたと言われて……私はどうしたらいいのかと」

「……あの時、アリスさんも竹林に居たんですね」

正直、怒られると思ったが……心配されたり。不安そうにしていたりアリスさんの顔に陰がある。

泣きそうなその顔は……正直怒られるよりも辛い。

「貴方は異変に対して諦めないのは覚えている、だけど他人よりも命の天秤が軽いのも」

「……」

事実だ。生きようとはするが、代わりに知り合いが死ぬとか言うのなら喜んで命を捨てるだろう。

天秤を……下げてしまう。

「……までだと、正直もう貴方には異変に関わらせたくないのだけど」

「……それは困りますが」

「なんであの時教える事は教えきったって言ったのかしらね……まだまだ教えるべき事あるじゃない」

「えつと……すみません」

「本当にね……」

遂に溜息を吐いてしまった……まあ俺が原因だけど。

「……どうせまた行くんでしよう、付いて行くわよ」

「いいんですか？」

「今度は甘やかさないから」

「……はい」

「まだ言いたい事はあるけど……いい頃合いだと思っわ。会って来たらどうかしら？」

「もうこんな時間経ってたのか……分かりました一度失礼します!!」

部屋を後にする、決して逃げたわけじゃない。

「はあ……」

残った部屋で再びアリスは溜息を吐く。

彼の言い分も分からなくはないのが辛い。

「生きてて良かった」

気を失う寸前、自分を刺す彼を見て無事だった事に様々な感情を抱くのであった。

「貴女が八意永琳さんで合ってますよね？」

「ええそうよ、脚ももう動くかしら？」

「はい、元あった頃と変わらないくらいには」

「メイドに感謝するのよ、本当にすぐに治ったのは彼女のおかげなんだから」

「ええ、本当に感謝してもしきれません」

「……そう、それならいいの」

「永琳さんも有難うございました」

「私は、頼まれただけよ姫様が気に入らなければ間に合わなかっただろうし」

「気に入ったって？」

「あの竹取物語よ」

「ああ……あれで良かったんですね」

「大好評だったわ」

「なら良かったですが……」

アレを気に入る姫様って本当に何なんだろうか？

「それで、聞きたい事とかはあるかしら？」

「ああ、ありますよ……アリスさんの病状って結局何だったんですか？」

「自分よりも先に彼女なのね」

「本当に心配でしたから……」

「ヴァンパイア病って知っているかしら？」

「名前だけは……」

「まるでヴァンパイアみたいに、日光を浴びると身体が崩れて行く、恐ろしい病」

「でもアリスさんがなった理由って……」

レミリア達も驚いてたし、紅魔館でも起きた事が無かったのだろう。

なんでアリスさんだけが発症したのかも気になる……

「幻想郷特有の病気なのだけど……アリスさんだけが感染したのにも理由があるわ」

あれ……ヴァンパイア病は外の世界でも聞いた事があるような？

ただそうか、外の世界に吸血鬼はいないもんな……

「……吸血鬼の血を魔法使いや妖怪が取り込むと発症するわ」

「人間は違うんですか？」

「人間は、満月の夜に血を取り込むと眷属になる……気を付けなさい」

「レミリアはそう言う事はしなそうだが……つと魔法使いや妖怪の場合はどうなんですか？」

「そこら辺の種族はそれぞれ妖怪、魔法使いなどといった種族であつて、血が反発し合うの。ただ結局夜の吸血鬼の血には勝てなくてヴァンパイア病が起きる」

順応性の高い人間とは違い、妖怪などはそれぞれが独立しており、別種になれないため受け入れられなかった身体が壊れていくと。

「……あの時フランの血がアリスさんに」

「満月じゃなくて良かったわね……満月だったらすぐにでも身体が壊れていたでしょうから」

もつと勉強しておくべきだったかもしれない……

「だけど、血は取り替えたし、もう抗体を身体に取り込んだから今後は平気よ」

「……良かった」

今後アリスさんが紅魔館に来れないかと思ったけど……そんな事は無くて良かった。

「それで、貴方の方は……特に無いわ。普通に怪我を治療しただけ」

「それでも驚きなんですけどね……本当に有難うございました」

「……そう言えば」

永琳さんが何かを思い出したようだが……

大変な事じゃなければいいけど。

「本人には伝えてないんだけど……アリスさんの血液を取り替えている最中に不思議な物を発見したわ」

「不思議な物って……?」

「頭にも血管があるし、一度頭も切ったのだけど……脳に穴と言うか……スキマって言うのかしらね?何か不思議な物があって……除去はしたけど」

「スキマ……?」

「一体どう言う事だろう、分からない。」

「脳には存在しない物だから……ただこの先彼女に異変があつたら伝えてちょうだい」

「分かりました」

「一体何があつたって言うんだ?」

「脳だと言うなら……記憶に影響している?」

「永琳さん……」

「何かしら？」

「少し質問いいですか？」

「構わないけど……」

記憶喪失の例えを出して色々聞いた。

「そのスキマが原因かもしれないと」

「脳にあるって事は可能性も……」

「興味深いわね……取ったら消えちゃったし調べてみないと」

「消えたんですか!？」

「ええ、消えたわ」

「本当に分からないわね……」

頭に気に留めておくだけにしよう、そのうち何かあるかもだけど……正直見当が付かない。

「それでもう一つ、時折思い出したって言ってたわよね」

「何か理由、あるんですか……？」

「完全に機能していたわけじゃなさそうなのと」

「なのと……なんででしょうか？」

「熱で脳の機能が弱まって、抑える機能も弱まったとかあったかもしれないわね」

「……つまり高熱が原因と？」

「だと思わわ。医者な以上高熱で良かったとは言わないけどね」

「それは……そうですね」

あの時のアリスさんは本当に苦しそうだったし。

「それらの件は此方でも調べてみるわ。最後に、お代の方だけど」

「……」

足りると思わない、どうしよう……

奴隷にでもなればいいですか？

「紅魔館の皆にはもう伝えただけど、数日間永遠亭で姫様のお遊びに付き合ってもらわわ」

「永遠亭……」

行つてみたかつたと同時に、あの兎がいるトラウマの場所でもある。
ただ……呼ばれた以上は行かないと。

トラウマを乗り越えて見せると決意したのであつた。

：

人里からだいぶ離れた寂れた場所、一匹の妖怪とその式が辺りを覗いていた。

「紫様、別の要因が原因で切除されましたが」

「仕方ない事です、諦めましょう」

「いいのですか？」

「ええ、こうなった以上は受け入れましょう」

「でも、確か彼……」

「藍、余計な事は言わないように」

「はっ」

「別にいいのよ。彼がこれが原因で“不幸”になっても、それも運命なのだから」

「これより先は、私達は何もせずに見守るだけです」

「分かりました」

そう言い残し、一匹の妖怪はクスリと笑うのであった。

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

く永遠亭編く

七十三話 白玉楼の二人組くghost girls.

永遠亭、再び来ようとは思っていたが……あの兎が居ないことをここまで願うとは思わなかった。

「蓮司」

「どうしたレミリアア？」

「どうしたって言うのは私の方よ……なんで私の後ろに隠れているのよ」

「……会いたく無い人が」

「グチグチ言っても仕方ないでしょうが、しっかりしなさい」

「分かってるけど……」

死因となった相手には流石に警戒するし、怯えもする。
ルーミアさんだって未だに怖いし……

「そう言えば……」

「どうしたのよ蓮司」

「レミリア達も来るんだなって驚いてる」

レミリアだけじゃ無くて、咲夜さんも来るとは思わなかった。
大丈夫とは言っていたが満月が近いが……

「二人一組で呼ばれちゃったんだから仕方ないでしょう？」

「何をする気なのか……」

「分からないわ、行つて確かめるしか無いわよ」

「それもそうですが……別の不安も……」

レミリア・スカーレットと十六夜咲夜が紅魔館から数日間居なくなる分、仕事が滞る。特にメイドが居ないのは致命傷であり、代わりの仕事要員として兎達が今紅魔館で働いている……

正直不安しかない。

「着きますよ」

永琳さんのその言葉に、俺は一層後ろに回る。白い目で見られたが……つい反射的に……

「おっ蓮司達も来たか」

「魔理沙さん……来てたんですね」

「ああ、呼ばれたしな」

「霊夢さん達は？」

「ああ、紫が都合が悪かったらしくて来てないな。本人も乗り気じゃ無かったし」

「異変では無さそうですね……」

余計な労力は使いたくないのだろう、会えないのは残念だが仕方ない。

「後は……アイツらだが気を付けろよ？」

「アイツら？」

魔理沙さんが言う方向を見る、そこにも二人組がいた。

—————

ピンク髪のミディアムヘアで白と青の服。

年齢は見ただけでは分からないが、幼くも見えるし大人びているようにも見える。

「……」

そこまでなら、普通の女性なのだが。普通の人と違う場所は……周りで人魂が浮いている。

まさか彼女は……

「お前の予想通り死人だ、連れて行かれるなよ？」

「気を付けますが……何故ここに来たんでしょうか」

「まあ、アイツらも呼ばれたんだろうな」

「色々と姫様も遅しいんですね……」

しかし、ピンク髪の方は何処かで見たとような……

「……夢の中？」

正直自信は無い……ただ夢の中で会った気がした。

「あら？ 貴方も参加者かしら？」

「すみません、参加者って何のことだか分からないのですが……」

「私も分からないわ。呼ばれただけだもの」

「あつ……そうですよねすみません」

「それでも、皆と楽しみたいと思ってるわ」

「それはそうですね……」

「蓮司、言ったらろう!?!」

「魔理沙さん……?」

「だからコイツら不味いつて……」

「あら、魔理沙久し振りね」

「げっ……幽々子……」

幽々子……もしかして彼女は？

「なんでお前達も居るんだよ」

「だって私達も参加したでしょう？」

「……」

参加した、どう言う事だろうか？

「西行寺幽々子さんですか？」

「そうよ、よろしくね小野寺君」

「はい、よろしく……あれ？名乗りましたっけ？」

「さつき魔理沙が言ったでしょう？」

「ああ……聞いてましたもんね」

「改めて、白玉楼の主西行寺幽々子よ、よろしくね」

「よろしく願います」

その名前は聞いた事がある……

春雪異変、あの異変を起こした張本人だ。

あの異変が原因で俺も死んだしよく覚えている。

「どうかしたのかしら？」

「いえ、そうでは無いですが」

「それじゃあ小野寺君、私と……」

「幽々子さま」

「あら妖夢、どうしたの？」

銀色……よりは白よりのボブカット、普通の女の子のように見えるが……異質な物が二つ。

まずは刀、と言うか幻想郷に刀つてあつたんだな……そしてもう一つは……

「なんですか……それ？」

「いきなりなんですか貴方は」

「ああすみません……気になったので」

「半霊に何か用ですか？」

「半霊……」

気になって触れてしまう。
少しヒヤツとしている。

「ひやつ!!」

「え?」

「何をするんですか!」

鞆で突かれる、思い切り刺さる。

「グフツ……ごめんなさい!!」

そのまま突き飛ばされた。

「蓮司!」

「ダメよー、妖夢だって女の子よ」

「…………えっと、ごめんなさい」

正直よく分かってないけど……

ただ反応的にやらかした……？

「半霊と妖夢の感覚は共有なのよ、ダメじゃない」

「……………って事は？」

「妖夢を触ったって事と同じよ？反応的には胸だったりお尻だったかしら？」

「ちよつと幽々子さま!!」

「すみませんでした!!」

一瞬の隙もない土下座、最近こんなことばかりな気がする。
迂闊な俺が悪いんだけどさ……

「もう勝手に触ったり抱きしめないでくださいね」

「あら？じゃあ言えば抱きついていいのかしら？」

「っ……そんなわけ無いでしょうが!!」

え？ちよつと待って許されたの？

外の世界だとセクハラで勾留されるんだが……

ただもつと罰してくださいとかはやばい人物だし甘んじよう。

「魔理沙さん、悪い人達に見えないんですが」

「春雪異変だけは許せないが、悪人では無いからな……」

「だったらなんであんな事を？」

「逆だ、気に入られるとまずいんだよ」

「何故？」

「私や霊夢ならまだしも、お前が連れてかれると帰って来れないぞ？」

「え？」

「冥界暮らしを人間が出来るわけ無いだろうし、そう言った意味で危惧している」

「そんな事しないわよー」

「本気で気に入ったらするだろう？」

「まあ……本気で気に入ったらするかもしれないけど」

「だから気を付けろよ？」

「はい……気を付けます」

「幽々子さま、攫わないように」

「えー、でも結構気に入ってるのだけど」

「もう既に危機?!」

「……ふうふう」

嫌な予感がして、後ろへ引く。

つと永遠亭の方から誰かが出て来た。

「永琳さん」

「待たせたわね、姫様の準備が出来たから。今から案内するわ」

「分かりました」

後ろでニコニコしてる幽々子さんに若干怯えつつ永琳さんの後へと続く。
ただ、聞いたって話で俺もお付きの人も自己紹介し忘れてたな……そこだけはしないと。

「…………あれ？」

「どうしたの？」

「…………いえ、大丈夫です」

そう言えば彼女なんて言った？

魔理沙さんが俺の事を言っていたから分かったと……

「蓮司」

自分で自分の名前を呼ぶ。

魔理沙さんは下の名前で俺の事を呼んでいた。

ただし幽々子さんは苗字で呼んだ。

一体どう言う事なのだろうか？

t o b e c o n t i n u e d

七十四話 常世の姫君～beautiful princess.

「やっと来たのね、待ちくたびれたわ」

「えっと……待たせてしまつてすみません？」

なんと返せばいいか分からず、謝つてしまう。

ただ……今部屋に呼ばれた気もするが……

「霊夢達^が来れないのは残念だけど、他の皆^が集まつてくれてよかったわ」

改めて部屋の中を見渡す。結構集めたみたいだが……

「アリスさんに魔理沙さん、レミリアと咲夜さん……それに幽々子さん達二人組に俺か多い……と言うかなんで本当にこのメンツに俺がいるんだ？」

「何をする気なのか聞かせてもらっても？」

「せっかちなね、まだその男に自己紹介すらしてないのだけど？」

「正直な話、貴方達を送って来た兔を信じてないのよ」

レミリアが若干苛立っている。

確かに兔を信用するのは厳しそうだが……

「真面目でいい子ばかりよ」

「……」

正直……因幡てると言う存在のせいで、兎全体が信じられないんだが。

「とにかく、彼の脚治した対価なのは分かっているでしょう？」

「うぐ……」

「俺だけの筈じゃ？」

「そうよ、でもやる事に人数が欲しかったからね。そう言っただけだよ」

「うわあ……と言うか聞いてないんですが」

「言うまでもなく聞く気だったしね」

「俺のせいで面倒な事に……」

「元からアリスの治療もあったし恩を返したかったのがあるし構わないわよ、その原因

も妹だし」

「……そうね、私にも原因があったわ」

「気にしないでいいわ。貴女の人形のお陰でだいぶ助かったのだから」

「そう、じゃあ好意として受け取っておくわね」

「なんだか無事解決したみたいだけど、無視しないで欲しいわね」

「まだ話終えてなかったのかしら？」

「馬鹿にしてる？」

「蓮司聞いてあげなさい」

「え？はい」

すつごいこつち見てくるんですが、俺何も悪く無いのにぐぬぬぬって顔されてるんですが!?

「元月の姫、永遠の姫こと蓬萊山輝夜よ」

一目見て思った事は本当に美しい女性だ。

黒い髪は艶を出しながら無駄なく伸びている。服も普通の服と思いきや月や山を始め、スカートにも彼女に合うように模様が描かれている。

五人の男性や帝が求婚しあつた理由も分からなくない。

「小野寺蓮司です、こちらの事は知られていたようですが」

確か本では永遠のお姫様って書いてあつたが、流石に自分の事をお姫様っていう人じゃなくて良かったと思つている。

「ええ、あの訳をした人物でしょう?」

「そうですが……本当になんですかあれ？」

「お気に召さなかったかしら？」

「戸惑いの方が大きいです」

「そう、でもああ言った生活こそ素晴らしいと思わないかしら？」

「……答えかねます」

「自分の事をお姫様と呼ぶタイプのヤバい人では無かったが、そういうタイプのヤバい人かあ……」

「いいのよ、働けって言うてくれたって」

永琳さんが口を挟んでくる。

言ってくれたってと言う割には明らかに言つて欲しいようにしか見えないんですが

……

「ちよつと俺には……荷が重いと言いますか……」

「そうよね、重いものは持ちたく無いわ」

「違う意味と分かつて言つてますよね？」

「いいじゃ無いの」

「ダメでは無いですが……」

結婚してから妻が変わったとかそう言う話は聞いたことがあるが……当時の帝達はこれを見たら泣いていたと思う。

つと気付けば話が逸れていた。

「自分が呼ばれた理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ああ、貴方を呼んだ理由は人数合わせもあるのだけど」

「人数合わせ……？」

改めて振り返るが、自分を除いて6人だ。

7は素数だし合わせにならないと思うが……

「理由はそのうち分かるわ」

「……分かりました、それで何をすれば良いんですか？」

「満月の日に、皆で肝試しをやろうってね」

「肝試しですか？」

「そんな事の為に私達を呼んだのか？」

「あら？ 魔理沙は不満なの？」

「私だって忙しいんだよ！」

「どうせまた盗みを働くだけじゃ無い」

「借りてくだけだ！ それにアリスはなんで乗り気なんだよ!？」

「こう言った行事をするのも久し振りだからね。それに……」

「……?？」

今アリスさん、こつちの方を見たか？

「それになんだよ」

「なんでも無いわ」

「気になるだろー」

しかし、アリスさんはその後は何も言わなかった。

「アリスは予想付いてるみたいだけど二人組で肝試しを行うわ」

「メンバーは、自由に良いのかしら？」

レミリアが尋ねる、くじ引きとか言われても怖いしな……

「いえ、うちに来たときのペアで組んでもらうわ」

「はっ。」

「何、不満なの？」

輝夜さんの提案にまず難儀を示したのが予想外な事にアリスさんだ。

って思ったがああ二人は分らないが主従っぽいしレミア達が拒むわけないし当然ではあるのか……？

「流石に二カ月連続で、満月の日に魔理沙の面倒なんて見たくないんだけど」

「辛辣過ぎないか？」

「前科多すぎるでしょうよ」

確かに俺が見ただけでも前科マシマシだしなあ……

「だったら、小野寺君は誰と組むのよ」

そうだ、だからこそ疑問を持ったんだ。

一人多くないかって……

「私と組むわ、肝試しは私も参加したかったし」

「魔理沙と交換するべきよ」

「アリス、そろそろ泣くぞ？」

「予めそう決めておいたの、我慢しなさい」

「そこまで言うなら分かったけど、彼に迷惑をかけない様に」

「ただの保護者じゃないの」

「ほんと……この問題児の保護者になるとか勘弁して欲しいわ」

少しだけ、文句を言いながら結局は折れて従った。

しかし輝夜さんが相方って本当に何が起きるか分からないし不安もある。

「しかし期待させておいてシヨボかったらタダじゃ置かないからね」

「レミリア、期待してるんだ」

「そうじゃないわよ」

そう言いながらも羽がパタパタと動いている、予想以上に期待しているらしい。

「今晚急に始まるわけじゃないから、焦らない様に。だけどその分出来は保証するわ」

正直な話、肝試しに参加する事になるとは思わなかった。

しかも相方が何をするか分からない不明瞭な部分がある。

それでも、不安以上にワクワクが上回って、楽しみに思いながらソワソワするのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

七十五話 嘘吐き兔を追いかける～scam rabbit.
i t.

肝試しは正直何処でやるとか何しとけばいいとか疑問はあるのだが……まだ教えてはくれなかった。

相方が輝夜さんな以上は最悪向こうが分かっているしいいかなって思いはしたが……

「……準備した所で、持って行っちゃならないとか言われたらしんどいな」

「お兄さん何か困り事？」

「ああ、肝試し何か準備すればいいのかなって」

「ああ、セット一式売ってるよ。買うかい？」

「セツトなんてあるのかどれどれ……」

声ができる方へと振り向いて、商品と売り手を見る。

「あつ詐欺兎!!」

「出会い頭に詐欺って言われるの酷くない?」

「前に騙して……」

そう言えばこの世界では無いか、騙された事に憤慨してすっぱ抜けていたが。

「騙してないよ」

「すまない、勘違いしていた」

「ふんだ、肝試しセット売らないから」

「と言うか見えないんだけど、そのセット」

「盗まれるの怖いから裏に置いてあるしね」

……胡散臭え、騙す気満々じゃないか。

「後悔したって知らないんだからね！」

「いえ、要らないです」

「これ無いと参加出来ないよ？」

「それでは皆に買わない様に言っておきます」

「なんでさ、自分の責任だろう？」

「皆で買わないのなら対策できないって事で肝試し終わりますし姫様は怒るでしょうね」

「……鬼」

輝夜さんの名前を出して無理して押し込める、これ以上騙されたら食われるだけだ。

「それで、その商品は何処ですか？」

「無いよそんなもの」

「やっぱ騙す気だったわけじゃ無いですか」

「ふんだ、むしろなんで分かったんだよ」

「……」
「ここまで堂々と自分は悪くないオーラよく出せるな……」

「前に騙されたんですって」

「私としてもそれはうっかりだな……」

「輝夜さんに言いつけますからね」

「だつ旦那あ、そりゃ勘弁してくださいませえ」

「なんだよ旦那って……と言うか急に下手に出始めたな。」

「ダメです、そのままにしていると人の良いアリスさんは特に騙されそうですし」

「そんな……出来心だったんですって旦那あ」

「……」

なんか楽しくなって来た気がする。

「でも、またやりますよね？」

「あつしを信じて下さいって！もうしませんってば」

「そう言われてまた騙されたんですが……」

「……だったら貴方達を騙さないって事でどうかあつしを」

あつさり翻すのか……たださっきの言葉以上には信じられるか。

「分かりました……次やったら今度こそ言いますので」

「旦那あ……」

「一応アリスさんだけは騙されそうなので伝えておきます……」

そう言い残してその場を去る。

流石にここまで言えば少しは警戒するだろうしやらかせないだろう。

「……ちよつろ」

その言葉は俺には届かなかった。

—————

一応聞いておく必要はあるかと輝夜さんを探す。

約束通り輝夜さんに伝える事はしないけど、何か必要だったら嫌だし。

「あつ輝夜さん」

「蓮司、どうしたのかしら？ 肝試しが待ち切れないの？」

「いや……ああでも肝試し関連ではありませんが」

「何か不備でもあつた？」

「いえ、ただこちらの準備つてやはり何か必要なのかつて」

「大丈夫よ、ただ楽しんでくれればいいわ」

……やっぱりか、アレだけ言つてさらに騙す様な人だし念のためと思つたが大丈夫だった。

「有難うございます。楽しみにしてますね」

「ええ、私も今から……」

「あら2人ともこんにちわ」

「アリスさんこんにち……」

アリスさんの方を見てみると、何か持っている。

……嫌な予感がするなあ。

「アリスさん、それは……？」

「ああ、これは因幡さんが在庫処分に困っているらしくて……」

「……見るからに日用品っぽいですが在庫に困ります？」

「そうよねえ……」

「二人共どうしたのよ」

「いや……兎狩りをしようかと思ひまして」

「どう言う事？」

「ちよつと注意したんですがあの嘘吐き兎……」

「ああ……またてゐがやらかしたのね」

「俺に対しては未遂ですが……アリスさんが被害者なので……流石に狩るべきかと思ひました」

「私が言っても聞かないのよね……まあ大怪我しない程度に懲らしめて構わないわ」

「いいんですか？」

「実際私達も被害に遭つてるのよ」

「分かりました」

輝夜さんに許可を貰い、先程の場所へと戻る。

案の定と言うか、今度は幽々子さんに高価で売りつけている様だ。

「……流石に現行犯を見る事になるとは思いませんでした」

「ん？げっ……」

しかもげってまで言い出したし……

確信犯じゃないか。

「いや、これには理由があるんですってば」

「理由……」

疑わしき目でてるさんの方を見る。

相場の倍くらいだがこれに理由があるねえ……

「いや今回だけはマジなんですって」

「聞いてあげてもいいんじゃないかしらー?」

今回カモられそうになったの幽々子さんなんですけどね……本人がいいって言うならいいですが……

「理由は?」

「食費です」

「食費って確かに多いけど、輝夜さんが呼んだんだし問題ないくらいだったのでは?」

「本当は私達もそう思ったんですけどね……その幽霊だけ別格なんです」

「ええ……?」

そもそも幽霊が何か食べるのか？
胡散臭いんだが。

「だってお腹空いちやうし……」

「だからって他の全員の足してもその何倍もってどう言う事ですか!!」

「え？」

このメンバーの更に数倍？嘘だろ？

「これでも我慢してるのよ」

「……」

これだけはマジらしい、そんなに何処に入るんだ？いや何処にも入らないのか……？

「流石にその人にだけ食費払って貰わないと火の車になってしまふんですって!!」

「確かに……それはしようがないか」

破産されても困るし、流石に払えないって事は無さそうだしさ。

「払うのかしら？」

「そうしないと不味いんですって!!」

「幽々子さん……流石に食費が跳ね上がるなら」

気付けば俺もてるさんの同情側に回っていた。

ほとんど無意識と言うか、計り知れない量に怯えてしまったのかもしれない。

「でも、小野寺君が今言ってたわよね？」

「何をですか……?」

「相場の倍だつて」

「……」

確かに言ったな、倍にする理由はよく考えれば無いじゃないか!!

「いやあ、それは」

「兎つて美味しそうよね」

てゐさんの耳元で幽々子さんが呟く。

てゐさんが震えているのが分かる。と言うか俺も無関係の筈なのに震えている。

「……タダでいいです」

「あら、じゃあご馳走になるわあ」

そのままニコニコとしながら食材を持っていった。
残されたてゐるさんはその場に座り込む。

「なあ……人間」

「なんででしょう」

「本気で今回だけ嘘吐くのやめる……命が危ない」

「それがいいと思います……」

笑顔で息をする様に嘘を吐く兎がこの永遠亭で一番の問題だと思った。
ただしそれ以上にヤバい存在が今は居るのだと思いきらされたのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

七十六話 トラウマの月兎 Lunatic rabbit

i t.

姫様の暇潰しに付き合えと言われたが、こちらのお嬢様もだいぶ暇しているらしく……かなりの頻度で呼び出される。

「蓮司、暇なのだけど嘸は無いの？」

「……こつちの姫様にも何かないか絡まれるんだけど」

「つて事はあるじゃない、話しなさい」

「人形持ってきます」

永遠亭でも忙しなさは変わらない。

部屋へと戻り、人形をバッグから持って行く……

「あつすみません」

「えっ……」

油断していたわけではないが、自分の部屋にあの兎がいる……

俺を狂気に陥れたあの兎が……

「なんで……ここに……？」

「姫様から部屋の掃除を言われまして。お客様が居ない時間をお思ったのですが申し訳
ありません」

天井を見る事で視線を逸らす。

真正面からは無事だとしても見る気はないし、無事だとも思えない。

「あの……何をなさっているのでしょうか？」

「目を……見ないように」

「ああそうですねすみません、瞳を見せるわけにはいかないですもんね!!」

やっぱり、あの瞳は覗き込んではいけないものらしい。また見たらアウトだった。

「兎に角……部屋から……」

「あつすぐに出来ますね」

そうして近付いて来るが、一向に出る気配がない。何があつた？

「あのすみません……」

「……………何？」

「どいていただけると」

「ああ、そうか……………」

脚が竦んでいて、うまく動かせない。

そのせいで兎も外に出れずに半ば詰みなんじゃないかと思いはじめて来た。

「後少し……………動いていただけると」

「分かっては居るんですが……………」

俺が邪魔で外に出られない。

慌てて探す、そして上を向いてそのまま下がるといった無謀な行為を行った結果……………
つまづいた。

「危ないです!!」

そのまま手を引かれたが、結局もつれて倒れる。瞼を開けると、赤い瞳に吸い込まれる程近くにある。

「わああああああああ!!」

「なっなんですか!」

「何があつたの!」

レミリアが慌てて部屋から出て来る。

あつこれは不味い……

「……蓮司、頼んだはずの事をせずに何してるの?」

「あのレミリア……これには理由が、がふっ」

頭を踏まれた。そう言うのがご褒美の種族では無いので勘弁して欲しい。

「あの……私は……」

「勝手に手を出そうとしたんだし、相応の目をあつてもらわうべきね」

「そんなつもりじゃああああああ!!」

廊下に二人の悲鳴が轟いたが、誰も助けには来なかった。

「酷い目に遭った……」

「大丈夫ですか……?」

「大丈夫で……あれ？」

「どうかしたんですか!？」

「いや大丈夫だなんて……」

「だからそう聞いたのですが……」

狂気の瞳を見たはずなのに、平気だった。

慣れたとかそう言ったのは無いはずだが……どう言う事だ？

「あの……その瞳って」

「どうかしました？」

「見ても大丈夫なんですか？」

「はい……と言うか日常的に能力が使われてると支障しか無いでしょう?」

「そう言われるとそうですね……」

「だから大丈夫です、狂気に陥ったりしません」

「……良かった」

「なんでそこまで瞳を怖がるんですか?」

「いや……実際に狂気は怖いですし」

「なんで知ってるんです?」

「いや……本で読んだので」

「ああ、あの本ですか……本当に面倒です」

「ダメなんですか？病院の存在を分かってもらえるいい機会だと思ったのですが」

「能力まで全て晒されていい気分な人は居ませんよ……」

「そう言われるとそうですね……」

「と言うわけで私は安全なので見てもらっても大丈夫ですよ」

「なるほど」

大丈夫と言われてじーっと見る。

紫の髪に、瞳を前は見れなかったが……ルビーのように透き通った赤だ。
兎の目は赤いと言うが、本当に赤いなあと。

「あの……」

「どうしました？」

「そこまでマジマジと見られると恥ずかしいのですが……」

「あつごめんなさい」

慌てて目を逸らす、つい見過ぎてしまった事に申しわけなくなる。

「私もこうやって真っ直ぐ見られたことがないので……」

「ついと言うかなんというか……」

掛けるべき言葉が分からないので曖昧な回答になる。

「まだ自己紹介すらしてない気がするのですが」

「そうですね、ついつい名乗り忘れてた……小野寺蓮司、一般人です」

「一般人？吸血鬼に好かれているのに？」

「はい！一般人です!!」

「分かりました……私は鈴仙・優曇華院・イナバ元月の鬼です」

「月の……」

「おかしいですか？」

「いえ、ただ月の住人そこまで居るんだなと」

「あくまで永遠亭内だけですけどね」

なるほど、月人がここら辺に集まっているのか。

「しかし、挨拶もしてなかったって言うのに。色々とすみませんでした!!」

「謝罪……なのですかね？」

「だったらありがとうございます?」

「なんで感謝してるんですか……?」

「おかしいですか?」

「おかしいですよ」

うん、そりやおかしいよな……

……この感謝はただのヤバイやつじゃん、よく考えたら……

「適度に、ですかね?」

「適度って言葉をこう言って使う人は初めてですが……多分そうだと思います」

「姫様とかにあまり変な事言わないでくださいね……悪影響受けやすいので」

「確かに……悪ノリしそうなタイプですね……」

「本当にお願ひしますね……あの泥棒が来てる時点で怯えてるので」

「了解しました」

「そこまですつと見てないならいいですけど……本当に見過ぎないでくださいね!!」

そう言われるとつい目が行ってしまふ。

そしてそれに気付いてまた逸らされる……申し訳ない反射と言うか……

「しかし……」

「どうしました？」

「瞳だけで、警戒してて……話してみたら予想以上にいい人だと思ったので……自分が恥ずかしいと」

「いえ、これから大丈夫って分かってもらえたなら大丈夫です」

「この子もなんだかんだいい子だったんだ……能力は許す気ないけど、色々と改める必要があるな。やっぱり能力は許す気ないけど。」

「と言うわけで、数日の間かもしれないませんが改めてよろしく願いますね!!」

そう言いながら手を握られる。警戒心は無いのか……？

一応はこっちは散々警戒した身なんだけど。

「よろしく願います」

流石に永遠亭で彼女もやらかすわけではないか、信じるでしょう永遠亭内でまずい人はいないと。

「蓮司、人形はまだかし……」

レミリアが扉を開ける。

今の俺は……手を握られている。

「懲りてないようね」

「レミリア!!話を!!」

今度は踏まれるなどではなくて、部屋へと引きずられて行った……何が起きるか分からないくて怖い。

「……警戒するべき対象を間違ったな」

「何言ってるのよ?」

一番の恐怖は、どうやら友人らしい事が身をもって分かった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

七十七話 問題児と問題児く outbreak of quarrel.

「すみませーん……」

「あら？どうしたの？」

「傷薬ありますか……？」

「あるけど、ウチそこまで怪我するような場所無かったと思うけど」

八意永琳の診療所、そこに俺は訪れていた。

傷は……あまり言えた事がないがレミリアが……

「引つ掻き傷……貴方のところのお嬢様を怒らせてもしたのかしら？」

「……仰るとおりです」

「ダメよ、仲良くしないと」

「分かってますよ、流石にレミリアと喧嘩しつぱなしは良くないですし」

「そもそも喧嘩したんだらうか？」

「勘違いさせてしまったのは悪いが折檻されたわけだし……」

「ほら、治療は終わったわ。早く行きなさい」

「有難うございました」

そのままレミリアのもとへと向かうが、機嫌が非常に悪かった。

事故だつて言っても信じてもらえないし……何より咲夜さんの目がマジなのが怖い。

「肝試しまでには仲直りしたいが……」

「調子はどう?」

「永琳さん? 診療所は良いんですか?」

「別に四六時中開けてるわけじゃ無いわよ」

「それは……確かにそうですが……」

「だからこっちは気にしなくて良いわ、それよりも貴方よ」

「……あまりよろしくありませんね」

「あの子そこまで貴方に対しては怒りっぽくなさそうだったけど……何したのよ?」

「実は……」

正直他人に話すのはまずい気がするが、意を決して話す。
セクハラとか言い出されたらどうしようもない気がするが……

「……弟子が迷惑かけたわ」

「弟子……ですか？」

「ええ、あの子は薬師見習いなの」

「成る程……鈴仙さんも薬師だったのか」

その割にはそう言う事は何も言われなかったが……研修生クラスとかなのかな？

「あの子が迷惑を掛けたなら手伝わないとまずいかしらね？」

「え？」

「仲直りの薬とかあるけど」

「なんですかその恐ろしい薬……」

「使えばどんな男女でも仲良くなるのだけど」

「絶対まずいやつじや無いですか、使いません」

「少量だけで良いから」

「……さりげなく俺を実験体にしようとしてませんか？」

「……」

「勘弁してくださいよ」

「……そう言えば貴方に恩があったわね」

「その結果命を失う以上の事になる可能性が高いのでやめたいです」

本当にそう言う怪しさしか無い薬はダメだつて。

しかもそれ惚れ薬系のヤバイやつじゃん……

「分かったわ、ならどの薬なら良いの？」

「俺が仲直りする事から永琳さんの薬飲む事に変わってませんか？」

「私が居なくてもなんとかかなりそうだし、それならこっちの用件も済ませたいじゃない？」

「え？飲むの確定なんです？」

「だから何がいいかなと」

「……いやあ、肝試し前に何かあると嫌ですし」

「効果は保証するわよ？」

「薬には相性が有りますし」

「それも含めてのだけど？」

「けっ健康ですので……」

どうにか逃げる方法を探す。
誰かいないか……？

「……また？」

「レミリア……?」

「ふん」

見下したような表情を一瞬したかと思っただけを向かれる。流石に今回は追い掛けた。

「あつ……逃げられたわね」

ただ、今回の場合は仕方がないと永琳は諦めた。

「何か?」

「咲夜さん……レミリアは?」

「生憎通すなど言われてるわ」

「そこをなんとかならないですかね……？」

「……」

「咲夜さん？」

「正直な話をすると……お嬢様が機嫌悪い姿をここ数日見かけて心配しかないわ」

「……そうですか」

「貴方のせいだと自覚して欲しいのだけど」

「いや……まあそれは分かっていますが……」

「どうせわざとでは無いと思っっているけど」

「……信じていただけのんですか？」

「なんだかんだ貴方は巻き込まれ体質なのは分かっているから」

「そうなんです……?」

「なんで自覚してないのよ……」

「……まあそう言われるとそうですね」

「殆どは、貴方がクビを突っ込んでってるのが原因だけど……それでも巻き込まれてるのかなり見てるわ」

異変に関わろうとしている以上は自然とそうなってしまうが、確かに巻き込まれもそこそこ増えてる気がする。

「ただし……」

「なんででしょうか？」

「例えそうだとしても全く持つてお嬢様は納得してないわよ」

「……籠ってる以上はそうですよね」

「正直、見ている此方が胃痛する事になるとか勘弁して欲しいのだけどね」

「それは……そうですね。俺もさっきのように会っただけで見たく無いもの見るような顔されたく無いんで……」

「……そこまでのの？」

「そうですね……」

「……ここを通すから、お嬢様と絶対に仲直りしなさい」

「それは……流石にするつもりですが」

「いい、絶対によ？」

「そこまで念押しされるのは予想外ですけど」

「それ程にまずいのよ」

「……何がですか？」

レミリアにそんなまずいものがあるように思えないが……一体何があるって言うんだ？

「満月の肝試しの日、お嬢様が妹様のように暴走する可能性あるわよ」

「……は？」

いやいやいや、冗談だろう!?

レミリアがそんな事するわけ無いって……

「お嬢様は成熟なさっているので、多少の事なら気にしないけど、何より衝動を抑えられないしね……問題が無ければ」

「その問題は……？」

「純粋な怒りか、嫉妬か、不甲斐なさからの憎悪とか理由は分からないけど……お嬢様は今状態が危ういだし危険なのだけど」

「そのまま満月を迎えると……」

「いつもと違って抑えられない可能性が出てくると言うわけよ……」

「マジかあ……」

「なので絶対に満月までに仲直りしなさい。最悪貴方を殺してでも止める事が候補だから……」

「……嘘ですよね？」

「暴走するお嬢様を見たく無いわ」

……目がマジだこれは間違い無く死ぬ。

元々俺も仲直りする気があったからどうかにかしたい。

頼むからせめて話し合いはさせてくれ。そう思いながら扉を開いた。

t o b e c o n t i n u e d

七十八話 ツエペシユの末裔く vampire by
nature.

紅魔館の主レミリア・スカーレット

今は、紅魔館内には居ないもの……与えられた部屋で自宅の様に振る舞っている。

「入るなど言っただけだ？」

「話が出なかったわけだし……」

「ふーん、口説きにでも来たのかしら？」

「何故そうなる……」

「なあんだ、違うのね」

良かった……機嫌は良さそうだ。これなら話を聞いてもらえそ……

「さっさと部屋から出て行って貰えないかしら？」

「え？」

「何を勘違いしたのか知らないけど、部屋に入れないでって言った以上は私は機嫌が悪いの」

「……」

敵意剥き出しの彼女に思わず後ずさる。

ダメだ、退いちゃいけないのに……

「そもそも貴方、私に恐怖心があるって言う割には本当に好き勝手よね」

「それ……は」

「それに咲夜に入れるなって言ったのを無視して一人で入ってくる程迂闊だし、救いよ
うないのじゃないかしら？」

確かに俺のどうにかしなきゃと、永琳さんのどうにかしてくださいの利害があつて単
独で来たが……迂闊過ぎたのかもしれない。

「もしかして自分だから大丈夫だと思つたのかしら？」

「……」

恐怖心が全く消えたわけじゃないが、大丈夫だと自信を持っていたのは事実だ……

「……」

「レミリア……」

「何かしら？」

「事故なんだ、悪いとは思ってるけど」

「全部全部が事故だともいう気かしら？」

「実際そうだから」

「咲夜も一応はそう言ってたわ」

「それが事実だし」

「納得するかは別だけど」

「……まあ」

そもそも最後の永琳さんはただ話してただけな気がするんだが……

「……すつごいムカつくのよ」

「そう言われてもなあ……」

嫉妬……ではないだろうな。

どちらかと言うとお気に入りの玩具を取られたとかそう言った類のが近いと思う。

「私に構う暇があったらあのお姫様の所でも行ったらどうなの？」

「そう言うわけにはいかないだろうよ……」

「ほんと、他人の都合を気にしなくて良いわね」

「話聞いて貰えないとどうしようもないしな……」

「……」

本当に重い空気は嫌だつて……

最初とかの間違えたら死ぬつて様な場面よりも、正直今の方が俺にとつては嫌だ。

「……だつたら何を話す、いつもの謝罪かしら？それとも機嫌を良くさせようと称えでもする？」

正直、いつもの様なお話で済むなら一番なんだが……当然それじゃダメな事が分かっている。

レミリアにするつもりが結局鈴仙さんと話してこうなつたわけだし。

「レミリアの事について聞きたい」

「……」

「ダメかな？」

「ダメも何も、唐突に何よ」

「正直に言うんだけど」

「……」

「約束すっぽかして他の人と話してたり、尚且つそこで手とか握り合ってたらいらってくるのは分かる」

「分かるから何？」

「そう言う場合は好きな物とか買つて来ながら謝罪するんだけど……人形とかはそうだなあつて思つても結局何が好きとか分かりきつてないし」

「ご機嫌とりつてわけかしら？」

「つて言うより……どうせ今何か言った所で聞き流されるだけなので」

「当然でしょ、宥めるの下手なのだし」

いや……レミリアを宥められたら正直大した物だろ……

「だからレミリアの話の逆に聞くなって事で……」

「正直追い出したいのだけど……」

「そこをなんとか……」

「やっぱり自分なら大丈夫って思ってるじゃないの……」

「これもダメなら実質詰みなので」

「浅くない？」

正直、もつと話題の広げ方を勉強しておくべきだったと後悔はある。

「とつとにかく、お願いして良い？」

うん、我ながら色々と酷い。

「はあ……少しだけよ、色んな意味で疲れさせられたし」

「ありがとう」

「……誇りなさい、図太さだけは妖怪にも引けを取らないわ」

そうしてレミリアは話し始めた。

「ヴラド・ツェペシユ、その方が私達の偉大なる祖先で私はその末裔よ」

「……」

「何、どうしたのよ蓮司」

「いや……好きな物とか聞こうとしたら何故か壮大なものが始まりそうだなと」

「当然でしょう、ちゃんと聞いてくれると言ったしね」

「……聞くけどさ」

かつて存在したと言われる外の世界でも有名なドラキュラの由来になった人。

そう考えると本当ならそうなんだと思うべきだが……

資料とか読む限り、あの人は本物の吸血鬼じゃないし、末裔なのかは謎に思える……
ただ本人が言ってる以上信じなきゃダメだな。

「つまり串刺し公が先祖ってことはレミリアは生まれながらの吸血鬼？」

「いいえ、私は違うわ」

「私はってことは……？」

「と言うか、生まれながらの吸血鬼じゃないって事は、やっぱりヴラド公の末裔では無いのでは？」

「フランは生まれながらの吸血鬼よ」

「……色々とおかしく無いか？」

「どうして？」

「なぜ姉妹で違うのかと」

「母がフランを身籠っているとき、私と母は吸血鬼になったわ」

「え……？」

「お腹の中の子さえも吸血鬼になり、フランは生まれながらの吸血鬼だったのよ」

「それは……」

生まれながらの吸血鬼も最悪だが……レミアも五歳で人生が滅茶苦茶に……何故そんな目に遭わなきゃならないんだ。

「だからこそ、私にとってフランは大事なの。たった一人の妹だから」

「母親は……どうなった？」

「……その胎児は吸血鬼となってしまったせいで最初から能力があつたわ」

「ああ……それは殺せる訳がない」

小さい頃から監禁される事が決まってしまうて……人間すらも見た事が無かっただろう。

ただそれでも、妹なのだ……誰だって手を掛けたくない。

「だからこそフランが少しずつ良い傾向になって助かっているわ」

「暴走しなければ、普通の女の子だからなあ」

「だから、その暴走が少しでも減るといいわね」

「そう……それが一番……」

「そのまま、私は吸血鬼となったの」

「聞かせてくれて有難う」

「まだ続くわよ？」

「今から衝動抑えられる薬ないか聞きに行きたかったんだが……」

「後にしなさい、ここからだし」

「え？」

「次の話行くわよ」

極端過ぎる気がするなあ……

ただまだまだ聞きたい事だらけだな。

正座をしながら再び聞く体勢へと入った。

—————

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

七十九話 吸血鬼と魔女～vampire meet
witch.

話はそれからも続けられた。

殆ど自分がいかに凄いかを語られた気がするが……話してくれる状態なだけいい傾向なのだろう。

「と言うか一番驚いた事はレミリアが外の住人だつて事だけだ」

「あら、全ての生物が幻想郷生まれじゃないわよ」

「それは分かっているけど……幻想郷に来るまで妖怪って存在してないと思つたしなあ」

「実在はしてたわよ」

「してたって……?」

「条件が合つて幻想入りした、とは言つても妖怪の山に元から住んでた種もいるけどね」

「条件つて何かあつたりするの?」

「一番単純なのは忘れ去られる事。忘れ去られた者は幻想入りする」

「え……いや実在するつて言い続けてる人達は居るはずじゃ?」

「ええそうね、だから住む環境が無くなったから幻想郷に移転したのだと思うわ」

妖怪達が住む環境が無い、確かにそれは理解出来る。

人間がよりよい住処にしようとしてるし。

「だから妖怪達は幻想入りしたと」

「妖怪だけじゃ無いわよ」

「……人間もそりやいるだろうけど、例えば？」

「魔法使い……魔理沙は幻想郷生まれだし、アリスは特殊だけど幻想入りしたタイプも多いわ」

「その言い方だと……」

「ええパチエは元々外の世界の魔法使いよ」

「外の世界に魔法使いが……？」

「じゃなきや魔女狩りなんて起きないわよ」

「確かに……そう言われるとそうか。と言うか……もしかして2人は外の世界からの知

り合い?」

「そうよ、私とパチエは外の世界で知り合いだった」

「その頃から仲良かったってことか」

「何言ってるの、当時は最悪だったわよ?」

「なんで……?」

「あのものぐさが誰かと仲良くなる気あるわけないでしょう」

「いや、最初から紅魔館の皆と仲良かったんで分からないですが」

「そう言われるとそうね……」

「それで、パチュリーさんとどうやったら仲良く……」

「それを今から話すわ」

レミリアは嬉々として話し始めた。

「500年近く前、世界はどうなってたか予想が出来るかしら？」

「先程の話から魔女狩りってわけであってる？」

「ええそうよ、そこに魔女パチュリー・ノーレッジと吸血鬼になって10年ほどの私が居た」

「……480年以上……結構付き合いは長いんですね」

「ええそうよ」

「もしかしてすぐに魔女狩りが起きたりして……?」

「全然」

「え? 当時の魔女狩りは熾烈と聞いたけど……」

「だからこそよ、実際に力ある妖怪や魔法使いが目の前に居るのにそれを無視して告発を受けた一般女性を焼き尽くす。それが魔女狩りよ」

「マジか……?」

「ええ、空を飛んでいても何も言われない。むしろ幻想郷の方が奇異の目で見られてるしあの時代の方がマジと思ったことさえある」

「助けたりは?」

「私は吸血鬼、彼女は魔女。人間に手を貸す理由はないわ」

……やはり、この人達は憎悪こそ無いもの人間達はどうでもいいんだな。

「だからこそ私は人間と関われなかったし、パチエしか居なかったわ。当然パチエは関わる必要がなかったし鬱陶しそうだったけど……」

「フランは……?」

「あの当時は最悪だったわ。いつまでも衝動しか無かったから監禁して餌だけを渡していた」

「……」

フランは本当になんとかしてあげたいと思った。

俺じゃ出来ないかもだけど……永遠亭なら解決方法がって。

「恐れの対象、吸血鬼は特にな。仕方のない事だけど勝手にされたのに恐れられるのが気に入らなかつた……たつた十年じゃ割り切れなかつた」

「レミリア……」

「だからこそ、嫌われては居たけど怖がられなかつた彼女を気に入つたわ」

「唯一話が出来る相手と言うのは掛けがえのない存在か」

「そのまままた数年流れたわ。仲良くなれなかつたけど」

「数年後……一体何が？」

「魔女狩りがあつたわ」

「いやでも……魔女狩りって」

「その付近の女性は全て殺されて、それでも災害が起こってやっとパチエに目が行った。本当に滑稽よね」

「……」

「当時は本当に酷かったんだな。」

「聞いた話な以上、想像するのも難しいけど……」

「それで、捕まらない為に逃げたと」

「いえ、向かって来るもの全て串刺しにしたわ」

「え？」

「だって私の分かり合える相手を奪おうとしたのだもの」

「それで……串刺しに？」

「ええ、ヴラド公の子孫だもの」

もしかして……この人は、子孫になりたかったとかじやなくて、吸血鬼なのをいい事に友人を守る為に子孫を名乗ったのか？

「その後は……？」

「幻想郷に迷い込んで今ここに至る」

「なるほど……」

「だったら良かったのだけどね」

「違うの？」

「当時のヴラド公も患ったのかもしいけど死霊に祟られた」

「吸血鬼が？」

「ええ、肉体は特殊な措置をしなきゃゾンビになったりしないし。怨念が強く無ければ幽霊になったりもしないのだけどね」

「それで……大丈夫だったのか？」

「その時、パチエに助けられたのよ」

「え？面倒臭がられてたのに？」

「諸々の動向を気付かれていたみたいだね。助けたのとかもバレてたみたいなのよ」

「でもどうにかなるのか？」

「本の知識と、六曜で私達三人は忘れられた存在となった……亡霊からもね」

「忘れられたってことは……」

「ええ幻想入りしたのよ」

吸血鬼の姉妹と魔女は幻想郷にそこから流れ着いたのか。

「その後は美鈴や咲夜と会って今の紅魔館があると」

「そこら辺は今度か？」

「ええ日付が変わったしね」

「明日が……満月か」

「少なくともモヤモヤとかも愚痴も兼ねて話してマシにはなったからもう満月で暴走したりはしないわよ」

「気づいてた……?」

「ええ自覚すらもしてたわ」

「ただ……暴走しないなら良かった」

それなら話を聞いた価値があると言うわけだ。

明日まで仲良いままでいたいな。

「それじゃあ蓮司、血を戴くわ」

「なんで?」

「対価と怒りを収めるためよ、満月だと眷属化させてしまうし」

「分かった」

そうして吸いやすいように手を出した。

そのまま吸い付くが、その直前耳元で囁かれた。

「幽霊と言うものは、未練、特に憎悪が原因で残る物が多いわ。だから魔理沙にも言われただけど西行寺幽々子には気を付けなさいと」

にこやかだがその腹には憎悪が隠れているとでも言うのだろうか……
ただ幽霊なのに無警戒だったのも自分で不味かったかもしれない。

「魂取られたりしないように」

「ああ」

注意だけされて部屋を出た。

咲夜さんは安堵の表情を見せていた。

幽霊やら危機なる存在は多いが……もう満月が近い気合を入れないと。

そして肝試しが始まる。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

八十話 輝夜さんは告らせたい
operation
failed.

満月の夜、肝試し大会が行われる。

異変解決に参加した霊夢達以外の三組と俺と輝夜さんの四組なのだが……

「迷いの竹林をですか……?」

「ええ、何か問題あるかしら?」

「問題しか無いと思うんですが……」

「私がいるから大丈夫よ」

「……他のグループは？」

「何とかなるでしょ」

「……マジですか？」

「それよりも、願いは決まったのかしら？」

「……優勝したチームの願いを一つ叶えるでしたっけ？」

「そもそも肝試しの優勝ってなんだ？」

「怖がらないとかそういう類は競えない気がするんだが……」

「私は勿論休日を貰うとして」

「……一応は主催者側なのは？」

「妖怪は別に仕込みじゃ無いし問題ないわ」

「いいんじゃないですけど……」

「それで、貴方の願いは？」

願いが叶うのは謎といえど、決まっている。レミリアとも話したしな。

「まあ間違いなく私って言うでしょうk……」

「フランの衝動を抑える薬を作って欲しいのですが」

「薬……?」

「え?今何か言いました?」

「……何も」

「ならいいですが」

運悪くタイミングが被ってしまったせいで聞き取れなかった。
重要なことなら言い直すだろうし大丈夫だろうけど……

「……ぐぬぬ」

「なんでそんな悔しそうな顔してるんですか……」

「もういい！行くわよ!!」

「分かりました!?!」

兎にも角にも優勝しない事には薬が作ってもらえない可能性がある……
流星にそれは不味いし頑張ろうと輝夜さんの後について行った。

納得が出来ない、少しは面白そうな男だと思つたのにどう言う事なのか。
蓬萊山輝夜は蓮司の態度に苛立っていた。

「……こんな事今まで一度も無かつたのに」

「何か言いました？」

「なんでも無いわよ!!」

「……分かりましたが」

かぐや姫とも呼ばれた私は多くの人間から求婚されて、それこそんざりする程であつた。

会うたび会うたび口説かれるのが日常であつて、願いが一つ叶うと言うのに全く気にされないなんてあり得ない筈だと……

無視する人間も居るのかと思おうとしたが、普段から慣れてるせいで逆に苛立った。

「そこ危ないわよ」

「あつすみません」

「本当に、ただの人間じゃない」

「そりやまあ……最初からそう伝えましたし」

ただの人間の癖に、何故ここうも苛立たせるのか。

「ねえ」

「どうしました？」

「貴方好きな人とかいないの？」

「少なくとも肝試し中にそんな質問が出て来て驚いているんですが」

「答えなさい!!」

「いや、特には居ませんが……」

「紅魔館に居たのでしょうか？彼女達はどのようなのよ」

「友であり恩人です。ただ、彼女達はそう言った関係であり、恋慕などは流石に無いで
す」

「恩人、ねえ」

「ですのでその恩を返すためにも今回は優勝出来るならしたいって話なわけです」

「ほんと……よく分からない人間ね」

「そう言われましても……」

恩人である以上仕方がない、そう思つて納得しようとはしたが……やはりそれでも納得出来ない。

それくらいには当たり前であつたから。

「もう一つ願いがあつたらどうしてた？」

「もう一つつて……今回はランプの魔人ではないんですから……」

「答えなさい!!」

こうなればどうしても言わせてやると言わんばかりに聞いた。

恩はもう関係無いだろうしそれなら言う筈だと。

愛されガールだから仕方ないよねと。

「えーつと……」

迷うほどのことじゃ無いでしょう、迷ってるフリよねって……焦らさないで答えなさいと。

「魔理沙さんが持ってた図書館の本を全部取り返すですかね……」

「なんでそうなるのよおおおおお!!」

竹林に叫び声が響き渡った。

正直な話、彼女が何を求めているか分からない。

それに応じた答えを出来れば良いんだが……ただの一般人に汲み取れって言われてもだな……

「輝夜さんはもう一つ願い事があつたらどうするんですか？」

「なんで私？」

「いえ、輝夜さんも何か願いがあつたから聞きたいのかなと」

「別に、私は休みを増やすだけよ」

「そうですか……」

特に目的はないと……だったら尚更なんなんだ？

まさか相手から求婚して来ない事に文句があるなんて想像出来るわけが無い。

「まあ俺はフランさんの症状が良くなればいいので、願いが複数なら譲りますので」

「本当に、貴方自身に願いは無いの？」

「幻想郷では助けられてばかりだから、その恩返しに全力を注ぎたいです」

「そう……なんか深く考えるのが馬鹿馬鹿しくなってきたわ」

深く考えてたのか……？

いや、余計な事を言うのは止めておこう。

「俺個人はって言うけど、結局は知り合った人達が笑顔で居てくれりやそれでいいんですよ」

悲しんでいたり苦しんでいると、自分が死んでも助けようとしてしまうから。変な所で自分も歪んでしまったなど。

「それじゃあ自分本位な私が悪いってわけ？」

「そもそも自分本位なんですか？」

「あの本のこと実現してるレベルよ？」

「あー……」

確かにあの本の事を考えると自分が中心でサボれるならサボりたいって人だった。

「他人に迷惑を掛けないならいいと思いますけどね」

「それはどれくらいの規模で？」

「そう言われましても……」

何処からが迷惑かと言われても正直その人次第だろうと。

「ってかそう言う考えの時点でダメなんじゃ……？」

「まあ悪いとは言いませんけどさ」

「ニートを認めてくれるの？」

「肯定はしませんが、自由に生きる事を咎めはしませんよ」

場所が場所なだけあって、働いている人を殆ど見たこと無いし……この姫様が一般人
ほどもかもしれないしな。

「それじゃあ勝つわよ」

「それは構わないのですが……そろそろ行きませんか？」

「……え？」

気付いたようだが、俺達は殆ど進んでいなかった。

輝夜さんが喋る時足を止めてしまってそれに合わせてしまったからである。

「やばいやばいやばい急ぐわよ!!」

「焦ったら逆に不味そうですが」

「一位じゃなきや働かないといけないのよ!!」

「その言い方だと流石に働けつて言いたくなりますが」

焦る輝夜さんを追い掛ける様に竹林を更に深く潜って行った。

尚、結局輝夜は告らせることに失敗したのであった。

t o b e c o n t i n u e d

八十一話 肝試し full moon night.

迷いの竹林の中を歩いて行く。

力を得た妖怪達が飛び出してこようとしますが、輝夜さんに威圧されてすぐに引込む。

「上下関係出来てるんですね……」

「当然でしょ？竹林で私達に逆らう妖怪なんて居ないわ」

「……それじゃあ肝試しの意味ないんじゃないあ？」

「でも楽しいでしょ？」

「……まあ」

楽しいのは事実だ。肝試しなんてやる機会無かったし……

実際にやると怖いのが、彼女によって安全が保障されているからこそ楽しめる。

「兎だけかと思いきや、意外と色々な妖怪が居るんですね」

「ええ、兎だけが我が物顔で居るのも納得出来ないしね」

「……そんな理由なんですか？」

「わざわざ竹林に住まないかってスカウトしたのも居るほどよ」

「……マジですか」

色々と力を入れる所が間違っているなって思えてくる。

本人が満足してるならあまり言うべきじゃないんだろうけど……

「ああそうそう忘れてたわ」

「何かありました？」

「一人だけ気を付けないといけないのが居たの」

「何かこの竹林にいるんですか？」

「狼女には気を付けて」

「狼……女？」

「知らないかしら？」

「そう言う訳ではありませんが……」

狼男じゃ無くて女なのか……確かに妖怪も女性型が多い気もしたしそういう事なのだろうか？

気を付けてと言われた存在をあまり警戒しても仕方無いは無いのだが……

「そう言えば輝夜さん」

「まだ何かあったかしら？」

「いえ……何処まで行けばいいとか聞いてなかったの」

「あー、そう言えばそうね。今回はとある家を目指してもらおうわ」

「とある家って……？」

「目指せば分かるわ、着いてらっしゃい」

不安に思いながらも輝夜さんを追い掛け竹林を潜って行った。

「家つてまさかここですか……」

輝夜さんの後を追い掛けて着いた場所は……一度来たことある。

「妹紅さん……」

満月の夜、永夜異変が起きる時に一度泊めてもらったから印象に残っている……
枕投げとかもしたな……懐かしいや。

「誰!?!」

「えあつ!?!すみません」

唐突に声を掛けられて驚いてしまう。

声からは予想出来たが妹紅さんだ、家の前だしな……

「一体何を……?」

「友人と肝試しに来てまして……あれ?」

慌てて周囲を見渡すが輝夜さんの姿がない……何処へ行ったのだろうか?

「誰も居ないのだけど」

「そうみたいですわね……」

「第一、満月に肝試しとか巫山戯てるの?」

「俺も……そうは言ったんですけどね」

「巻き込まれたの……でも本当に危ないんだよ」

「確かにそうですね……」

正直な話俺じゃあ妖怪退治なんて出来ないのに輝夜さんが気付けばいない……
これじゃあただ喰われるだけだろうと思われるだろうし、俺自身も危険だった。

「……仕方ない、今日はウチに泊まって明日竹林の外に連れてくから」

「すみません……本当に」

流石に一人で永遠亭までは戻れない。

本当に申し訳ないが……彼女の好意に甘えるしかない。

「ただそうだな……そうになると友人も探さないといけないか」

「勝手にどうにか出来そうな人だと思ってますけど……」

「そんな強いのか……」

「弱くはないでしょうね……」

「なんだか歯切れが悪いな」

「戦ったところは見た事ないので……」

しかし霊夢さんとかレミリア達と戦えたと言うならそれなりの実力があるだろう。
何より竹林の妖怪に恐れられてる程だしな……

「それじゃあ……今日は探しに行かなくていいか……ただ特徴を教えてくださいませんか？」

「ん？ああその子は蓬莱山輝夜って言うのですが……」

「輝夜……？」

「え？どうされました？」

「おかしいと思ったよ、こんな満月の夜に肝試しをしてるって言うのもさ」

「妹紅さん……？」

「私の事も輝夜から聞いたか？」

あの時の妹紅さんと違う……目から憎悪を感じる。

一体彼女に何が……？

「いや、妹紅さんを知ったのはそう言うわけじゃ……」

「輝夜!!考えたじゃないか!!ああそうさ、ただの人間にしか見えなかったから騙され掛けたよ」

「いや……俺が妹紅さんに何か出来るほど力があるわけじゃないじゃないですか……」

「どうせまた殺しに来たんだろう!!」

「え……?」

そう言えば……妹紅さんは不死だった。

ただ本に乗っていたのはそこまでだった……

輝夜さんがそんな事をしていただけなんて……

「ごめんなさい……事情を知らずに」

「もういいよ」

「……」

許されたのか……?」

「全て燃やし尽くして考えるから」

「ちよつ妹紅さん!?!」

「燃え尽きる」

周囲に炎が回る、服に付きかけて慌てて離れる。

幻覚含めていい加減炎がトラウマになりそうなくらい炎に囲まれてるな俺……

「いいのか輝夜、コイツ燃え尽きるぞ?」

「……」

彼女が何処に行つたか分からない、ただ来た所で間に合うとも思えない……

迂闊に事情を知らずに肝試しに乗った事が間違いだつたか……次からはもつと勉強を。

「獄神剣！業風神閃斬！！」

「え？」

それと同時に風が吹く。

火は消えるが……なんでこの身も毛もよだつ様な風は……？
身体がそのまま崩れて膝をつく。

「妖夢ー、ダメでしょ人間が浴びてはいい風じゃないわ」

「しかし幽々子さま、こうでもしなければ彼を助けられませんでしたよ？」

「それはそうだけど……彼崩れちゃったじゃない」

「そうは言っても……仕方ないじゃないですか」

「なんだ、輝夜が来ると思ったら予想外のが来たな」

「あまり敵対する必要はないかもしれませんが、知り合いが炎に巻き込まれていたのを見て無視は出来ませんので」

「妖夢」

「どうされました？」

「そいつはダメ、ただの人間じゃない」

「……人間にしか見えませんが」

「呪われた存在、存在そのものが禁忌よ」

「……禁忌ってなんだ？妹紅さんはそんな罪人には思えないけど。」

「幽々子さん、妹紅さんに何が……？」

「眠りなさい、ここから先はただの生者が見るべきでは無いわ」

「それは一体……？」

そのまま聞こうとするが目の前には季節外れとも言える蝶がいた。

「なんで蝶が……？」

まだ、妹紅さんや幽々子さんに聞きたい事があつたのに……
そのまま鱗粉を吸い込み、意識を失った。

t o b e c o n t i n u e d

八十二話 満月の次の日く full of thing

s t o d o .

朝起きるたびに自分が死に戻って無いか確認する。

今回もなんとか生き延びたようだ。

ただ……昨日の夜の出来事を覚えている。

「起きたかしら？」

「アリスさん……」

「大丈夫かしら？ 魂取られたりしてない？」

「それは……大丈夫ですけど」

と言うか魂取られるとか何故かいきなり物騒な事起きかけてないですか？

「冥界組が貴方を運んで来たから心配してたのよ」

「あの二人が……本当に助かりましたね」

「ちゃんと礼を言っておきなさい。ただ今は休んだ方がいいだろうけど」

「そうですね……」

身体に多少の異常が見られる、永琳さんが見てくれただろうから爆弾を抱えている事は無いだろうけど。

「何があったか聞いていいですか？」

「……恩人を怒らせてしまいました」

「恩人を？」

「はい、藤原妹紅さん……永夜異変の時に世話になったのに」

「ああ……竹林で会ったあのよね」

「そうです……」

「だったらそっち方面でもなんとかしないとね」

「そうですね」

困ってる人を助けるいい人なんだ……

輝夜さんに憎悪を持っている事を知らなかったけど……

謝つても許されるどころかそもそも警戒されてそうだ……

それでも話せるなら話したい。

「そう言えば一つ言い忘れてたわ」

「ん？なんででしょうか？」

「永遠亭からの褒美と言うか……最初から優勝決めるのは無理だったと思うけど」

「それは……そうですね」

正直優勝なんざわけ分からんになっていたし……

「だから、各チーム願い事が一つだけ叶うって方針に変わったわ」

「……良いんですかそれ？」

「実際そう言われたしね、私のチームはまだ決めてないけど」

「でもまあ俺の願いは……」

フランの衝動を抑える薬を用意して貰う。最初からそうすると決めていた。

「それなんだけど、レミリアがその願いをするから小野寺君は別の願いにしてちょうだいって」

「え……?」

「流石に妹の事は姉にさせて、だそうよ」

「そう言われるとそうですが……」

ただ土壇場で言われて何を願えば良いと言うのだろうか?
考えておくか……

「それじゃあ起きたって伝えてくるしまた後でね」

「アリスさん有難うございました」

その後レミリアがやって来て騒いで言ったがいつもと変わらない日常に死なずに戻ってこれたのだと思った。

それと同時に問題も解決していかないとなと……まだまだ多いな。

「何かご用ですか？」

「幽々子さんに昨日のお礼が言いたくて」

部屋へ向かおうとしたら、従者が部屋の前で警備していた。

永遠亭内は安全だと思うし、真面目な人なのだなと思う。

「では伝えておきますので、帰ってください」

「何か不都合ありました？」

「いえ、ただ単純に幽々子さまは今食事中なので、邪魔されると不機嫌になります」

「ああ……」

確かに大食いで大変だって言ってたな、あの兎も食べようとしてたし邪魔すると不味いかもしれない……

「それじゃあ帰りま……」

「入って来て良いわよ」

「幽々子さま!?!」

部屋の中から声がする。それも彼女が言ってたように怒ってる様子ではなくて、普段

の朗らかな感じだ。

「そっそれではどうぞ……」

若干驚かれつつ部屋を通される。

中には予想はしていたが……空の食器が積まれていた。

「まずは助けていただき有難うございました」

「どういたしまして」

そう言いながら彼女は箸を置く。

「食べ切らなくて良いんですか？」

「小野寺君が来たしねえ」

「俺を優先してくれるのは有難いですが」

「どうせ昨日の事が気になったんでしょう?」

「お礼を言いたかったのもありますが」

「律儀ねえ……」

「それで……妹紅さんは?」

「なんでアレに肩を持つか分からないけど、倒したわよお」

「え?それじゃあ妹紅さんは!?!」

「死んで無いわ」

「良かった……」

「だって死ねないもの。四肢をもういでも、業火で炙っても」

「え……?」

「だから彼女は危険な存在なのよ」

「不死とは聞いてましたが……」

「食べたら輪廻がおかしくなるから食べれないのよ?」

「なんでも食べようとしなくてください!!」

「やっぱこの方、人も喰おうとするじゃんか!?

「えー、とにかく不死だったわ」

「何故か分かりますか？」

「輝夜に飲まされた薬のせいで不死になったと」

「……やはりか」

本では蓬莱山輝夜も藤原妹紅も不老不死としか書いてなかった。

ただ……訳させられた竹取物語に似た何かには不死の薬を焼かさずに飲ませていた描写があった。

やっぱリアルレはあの二人の……

って事は俺がすべきは……

「どうしたのかしら？」

「いえ……なんでも」

「心ここにあらずって感じね」

「そんなわけでは……」

「いいわ、行ってらっしゃい」

「でも俺、幽々子さんに聞きたいこともありまして……」

「何かしら？」

「俺の苗字どうして知ってたんですか？」

「魔理沙が呼んだでしょう？」

「名前であつて苗字は言っていないはずですが」

「……それもそうねえ」

「理由を言えないなら無理にとは言いませんが」

特別な事情があるかもしれないし、幽霊の固有スキルかもしれない。だから無理して聞き出す気はないが。

「西行妖が満開になれば、私も蘇る」

「え？」

聞いた事があるような無いような……正直聞いた自信はない。

「聞いた事ないかしら？」

「……無いです。すみません」

「構わないわよ。それで理由だけどまた今度話すわ」

「分かりました。」

「だから用があるのでしょ？行ってらっしゃい」

この人は本当になんでも見透かしているとも言えるのか？

「では失礼します。本当に有難うございました」

もう一度礼を言って部屋を出て行く。

それと同時に妖夢さんが部屋へと入っていったようだ。

「とりあえず輝夜さんの所行かないと……」

そう考えながら、部屋へと向かって行った。

：

「幽々子さま」

「どうしたの妖夢？」

「異変解決にも関わって無い彼が西行妖なんて知るわけないじゃ無いですか」

「それはどうして？」

「縁が無さ過ぎでしょうよ」

「本当かしら？」

「……何が言いたいんですか？」

「自分の記憶にある事だけが全て真実だとは限らないわ」

「……変な幽々子さま」

幽々子の言葉を理解し切れず、いつも通りふわふわし始めたのかと、従者は落胆するのであつた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

八十三話 命の賭け所くbet!bet!bet!!?.

「やっと来たのね、随分待たせるじゃない」

「すみません、ついさつき起きたばかりなので」

「まあ良いわ、肝試しどうだったかしら？」

「どうだったって……死に掛けたんですが」

「それは私でも予想外だったってわけよ」

「明らかに嘘だろうな……予想外って言って姿が全く見えなくなるのはあり得ない話だ。」

「予想外ですか……」

「ええ、その事については幾ら私でも申し訳ないって思ったの。だから今回は各チームに一つずつ願いを叶える事にしたわ」

それはアリスさんに聞いた通りだ。

貴女の方から言われるとは思わなかったが……

「それで、願いは何かしら?」

「願いですか……」

「ああ、妹の衝動を抑える薬って言うのは既に吸血鬼から聞いたわ。だから別の願いで大丈夫よ」

別の願い……か。

正直浮かんでいるし直ぐにでも言い出す事は出来る。
ただし……博打に近い。

「まだ決まってるのかしら？」

「いえ……決まっています」

「まあ、当然よね」

何故確信しているのかは正直不明だが……

こちらを見通していると言うよりも何かを願うと予想が付いているのか？

アリスさん辺りとかから話を聞いたのだろうか？でも俺言っていないし……

「それで願いますが……輝夜さん」

そう言った瞬間彼女の口角が上がった気がする……どう言う事だ？

「やはりそうよね、私よね。嬉しい話だけど、でもそれはちよつと……」

「妹紅さんに謝って下さい」

「……は？」

「それが俺の願いです」

「……どう言うつもり？」

「かつて自分は妹紅さんに命を救われた事があるんで」

「……初耳なのだけど」

「正直、二人の関係とか知りませんでしたし……」

「……」

「輝夜さん？」

「嫌よ」

……正直答えとしては断られると思っていた。
だが一度賭けた以上は貫き通すと決めただ。

「それが俺の願いです」

「ぐぬぬぬ……」

妹紅さんも憎悪の目で輝夜さんを睨んでいた。

本来であれば介入する事じゃないのかもしれない……

ただ俺も妹紅さんを苦しめた加害者なのだから……責任を取るべきだ。

「そもそも貴方が何をわかっているって言うのよ!!」

「輝夜さんが本物のかぐや姫で、妹紅さんが不死の薬で不死身になってしまった事は」

「かぐや姫……」

「竹取物語で読みました」

「竹取物語……?私を書いたあの本じゃ?」

「いいえ、違います」

全部情報を出してやる。冥界組に知られるとどうなるか怖い所はあるが……もう退けないんだ。

「外の世界で読みました」

「……まさか、外の人間なの?」

「はい、何故か幻想入りする羽目になりましたが……」

「……だから人嫌いの吸血鬼達とも仲良くなれたのかしら」

「だと思いません。初めに会った時は命懸けでしたが……」

実際は死に戻りがあるからだが、流石にそこまで晒すと間違いなく不死である彼女は試しにと殺すだろうし言い出さない。

「紅魔館の中でも異質だと思ったけど……それなら確かに異質ね」

「……それで紅魔館に辿り着く前に妹紅さんに助けられたんです」

「本当に？」

「ええ本当です」

嘘は言っていない、その間に死にはしたが紅魔館の前に命を救われている。

「少なくとも……その恩人にやらかしてしまった以上はどうかしたいわけですが……」

「……悔しい程に筋が通るわね」

少なくとも彼女は俺の存在もまた輝夜の仕業かと言っていた。
だからここで何もしなければまた続くだろう。

「なら、条件があるわ」

「………なんでしょうか？」

「小野寺蓮司、私の物になりなさい」

嘲笑うかのような表情で彼女は呟いた

「……断りますけど？」

当たり前だがその言葉に乗る必要はないし、乗る気も一切無い。

「……そこは普通了承する所じゃないの？」

「……俺はそもそも物ではありませんし」

「だったら物扱いしなければ良いと？」

「いいえ、そうでは無いです」

「……貴方は最初から交渉する気無いのね、分かったわ」

「……どうせ俺を妹紅さんに見せびらかすつもりでしょう?」

「刺客を送ったり、直接殺しに行かないだけマジじゃない」

「殺伐しないで、仲直りどうにか出来ませんか?」

「出来るわけないじゃ無い、あの子との因縁は1000年をも軽く超えると言うのに、今更仲直りしましょう?そんな事出来るわけ無いでしょ?」

1000年……20にすらなっていない俺の何十倍の人生だ。

当然それだけの期間ずっと敵にいるのであれば、仲直り出来るとは思えないが……だからと言って何もしないまま終わらせるのは悔いしかない。

「俺が輝夜さんの友人とかで気軽に言ってるわけじゃありません。願いが何でも叶うと言う物を使ってでもどうにかしたいって……」

「ただの外の人間風情が、どれだけ吠えれば気が済むのよ」

「……」

一瞬気圧される。だがこのまま怯えて引つ込んだ所で悪印象が残るだけだ。

「ただの人間だからこそ彼女に恩義を感じてそうしたいと……」

「やっぱり私より妹紅なのね」

「……」

一瞬意味に惑いかけたが、そう言う話では無く俺が誰の味方するかって話だろう。それは当然、味方するなら妹紅さんの方だと。恩を仇で返したままは絶対にしたく無いから。

「いいわ、ただし条件を付けるわ。私の頭は安く無いの」

「俺をコレクションアイテムにしないでくださいね……？」

「しないわよ、正直いらないわ」

「……」は悲しむべきなのか悩む。悲しんだら隙を突かれそうだが。

「竹取物語読んだのでしょうか？」

「読みました……教科書にも載る程ですし」

「だったら分かるわね、かの皇子達が結婚と言う願いを叶えるためにした事を」

「……難題ですか」

「ええ、良く分かってるじゃない」

「しかしアレらは少なくとも幻想郷には無いのでは無いでしょうか？」

「そもそも貴方には彼等ほど人望も金も無いでしょうし期待してないわよ」

「……それは確かに事実ですが。では何をすればよろしいでしょうか？」

「簡単な話よ」

簡単な話と聞いて息を呑む、態々彼女がこれだけ言う事は間違い無く簡単では無いからだ。

「私達が互いに殺し合った長さを知らないから軽口を叩けるのですよ？だからこそ、その永夜を知りなさい？」

「何を……？」

「永夜返し」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

彼女のその言葉と共に、辺りは何も無い闇に包まれたのだった。

八十四話 欠けた記憶くdon't know.

永遠と須臾を操る程度の能力。

それが蓬莱山輝夜の能力であり、時間を一瞬であったり永遠であったり縮めたり伸ばしたりする事ができる。

その為どれだけの期間を過ごそうとも周りにとって一瞬だと言うこともあり、誰も気付けない。

「……俺は、永遠亭に居たはずだよな？」

辺りを見渡しても真つ暗闇だ。

月すらも見えないし夜とも思えない……ただ彼女は言っただ……永夜返しと。

「暗いな……不安になる」

誰か居れば良いと思っただが、当然そんな事は無い、一人でこの闇の中を佇む。

「これが難題か……」

辺りを確認出来ないのは時間経過が長く感じる筈だ……だからこそいつまで待てばいいか分からない今、不安がどんどん募って行く。

「確か外の世界でもこう言ったの聞いた事あった気がするな」

ネットか何かで聞いた事があった気がする。正確には何かは思い出せないけど、暗闇の中で一人で長い時間いるって、実際狂うのかもしれない……

「正直な話、寝るのが一番楽なのだとは思う」

と。どれだけの時間を寝ればいいか分からないが、余計な考えをする必要はないし……

そう思いつつ、身体を倒して横になるも眠る事が出来ない。

「……人は暗い方が寝やすい筈だと思うのだけど」

周囲すらも見渡せない暗闇では、不安過ぎて寝付く事が出来なかった。

この見えない先には何が潜んでいるのだろうと、潜んでるとは思えないが……それで
も恐怖心が消えない。

「難しいで済むレベルじゃないでしょこれ……」

不安な気持ちを必死に押さえ付けてテンションで乗り切ろうとする。

最初はそう決めたが……終わらない闇に気付けば心は擦り減っていつていた。

「どれだけ経った……?」

時計の針すら見えないこの世界に、俺はどれだけ閉じ込められているのだろうと……数時間どころか、数分しか経ってないかもしれないが、そこを確認する術は無い……体力も分かりやすく消耗している。

「……」

いつ終わるか分からない。だからって諦められない……そもそもどう諦めるか分からないけど。

「……何か考えたりで体力使いたくないけど。何か考えないと潰される」

幻想郷内での事を考えたが……正直周りのせいや暗い過去ばかりを思い出した。

「死ぬなよ俺……これ以上に辛い過去はあつたらうよ」

幻覚に侵されていたあの時よりはマシだが……これだけ周りが見えないとまた幻覚が起きそうで怖いな……

「いつそ……幻覚じゃない方が恐ろしいまでもあるけど」

「1000年分の殺し合いと言っていた……そちらを見せられた方がまずいのは事実だ。」

血で血を洗う光景が永遠と流される。そうなった場合は俺ではキツそうさ。

「むしろそれが来たら心が壊れる可能性まであるか……？」

心壊もあり得るかもしれないが……あくまで嫌悪感やそれによつて心がダメージを負うだけだ。

それは問題ではないが……ただ、輝夜さんの言っていた憎悪とどう結び付くかが分からない。

「……」

そのままただただ身構えてしまい体力を無駄に消耗してしまう。

ただし、幸運だったのは……限界を迎えて暗過ぎて眠れないを通り過ぎて、自然と寝てしまった事だろうか……

「やっぱりそう上手くはないか……」

目を覚ましたものの、周りはまだ暗いままだ。

このままでは結局また体力を失うか……

「いい加減寂しい……」

言った所で何かが変わるわけではないが……どれだけの時間が経ったか分からないのに、事態は何も変わらず暗闇のまま……

「子の刻、丑の刻とスペルカード自体も進んでいるのかもしれないけど……当然それすらも聞こえない」

本で多少読んで夜明けで終わりだとは知ったけど……と言うか難題と言うよりもうこれ苦行なんじゃ……？

「確か神社とかでやる奴で……」

確かそう言ったら、あの子は苦行は僧侶がやる事で神社じゃなくて寺ですよって言うて……それで……それで……

「……君は一体」

無理やり思い出そうとしても頭の中に禁止の二文字が流れ出す。

正直禁止と言う言葉の意味が分からない。何を禁止しているんだ？

「あの時と違って……時間はある」

頭痛で頭を押さえながら、それでもなんとかゆっくり考えようとするが、結論は一つ

しか浮かばない。

「何かを思い出すことを禁止されている……？」

そう考えると自分は何かを忘れているのだろう……

問題は何をと言うよりも、どれだけ忘れているかだ……

「……流石に幻想郷に来る前の事だけだと思うけど」

外の世界で友達だったはずの人が思い出せない。

他のメンツも殆ど居たしそんな話をしたな程度だ……外の世界を思い出す事を禁止されている？

「それとも……それだけじゃない？」

必死に考えようとすると、まるで幻覚かのように暗闇のはずの辺りに友人達の姿が思い浮かぶ……ただし禁止を表すかのように×印が付いており、さしずめホラーだ。

「疲れてるからだろ……？疲れてるからだよ……？」

疲れてるからこんな得体の知れない幻覚を見るんだと、そう思いながら冷静になろうとするも全くなれない。

「誰なんだよ……なんで思い出せないんだよ」

そう言う能力を持った妖怪に出会った？

そんな筈はないか、文献を読んでも記憶を弄ったりする妖怪は……

「八雲紫？」

勘でしか無いが違う気がする。境界を操れると表記されていたし弄ることは可能かも知れないが……読んだ内容的には違和感がある。

「ただそんな妖怪は他には……」

さとりさんとかなら調べられるかと思っただが……そもそも心の底に浮かぶ事すら出来ないから無理か。

「輝夜さんが介入してるのかもしれないし……休もう。これも難題が理由とか言われたら嵌ってるわけだしな」

そうだ、その可能性があるんだ……だから耐えないといけないし一度寝るか……
そう思いながら目を閉じる、その瞬間何かを見た気がした……

「にとりさん……?」

あの人が妖怪の山から降りるわけがないし、何より髪の色が違った気がした……
恐る恐る目を開ける、それと同時に酷い頭痛がした。
それを思い出してはならないと言わんばかりに……

「あがつ……」

君なのか？この頭痛の原因は。一部が欠けているのは……

「にとりさ……」

慌てて手を伸ばすが通り抜ける。

やっぱり心身共に疲れて見た幻覚なんだなど。

ただ……それなら俺は何故彼女の様な姿を浮かべる事が出来たのかと。

それもふわつとじやなくてクツキリと……見た事ないと出来ない様な姿で……

「だったら君は一体……」

しかし限界はとうに超えており、そのまま気絶した。

辻褄が合わない事を時折感じていたが……もしかしてその子が何か知っているのでは？との思いだけ記憶しながら。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

八十五話 兎、策を練るゝmilitary office
cer rabbit.

「……」

目覚めはどちらかと言えば最悪だろう。

ただ眩しいって事は夜が終わった？

「予想以上に凶太いのね」

「凶太いって……」

「そうでしょうよ、どれだけの時間寝ていたと思うの？」

「分かりませんが……」

「子の刻から夜明けまで……ずっとよ」

「……六時間くらいですか？」

それしか経ってなかったのか？

「正確には能力で伸ばしているから相当な時間になってるけど……あの何もない空間で不安がらずに寝れるなんて正直驚きだわ」

「……丸一日くらい寝てたんですか……それは他の人にも驚かれそうですよ」

「いいえ、経ったのは一瞬だから問題ないわよ」

「ちよつと何を言っているのか分からないのですが」

「そう言う能力なのよ」

「……だから永遠と須臾」

「そうね、言ってしまうけど幾らでも時間の引き伸ばしが出来たわ」

「……凄まじいですね」

永夜なんて関係ないだろう。彼女の望むままに時間を操れる筈だ。夜も昼も関係無く彼女の好きに……

そう思うと多少の恐怖を感じた。

「ええ、少しは常人との差が分かったかしら？」

「……簡単にどうとでも出来ると言うことは」

改めて妖怪や超人だらけの幻想郷では人間はちっぽけなんだなと思いき知らされた。

だが、約束は約束だ。

「難題クリアしましたよ」

「貴方の命を配慮して中断してあげただけよ」

「それは流石に……酷くないですか？」

「……他にないの？」

「他に……」

気絶する前に見た少女は誰だったのか……

この幻想郷にいるのか、そう言ったのも調べたい。

だが、それは今するべきじゃないし自分で探す必要があるか……

「変わらないです」

「……」

「輝夜さん？」

「考えておくわ」

「ちよつと!？」

輝夜さんに逃げられた。そんなのありか……
追いかけるも籠られてしまった……どうすればいいのだろうか？

「やあ旦那、調子はどうだい？」

「詐欺兎……まだそれ続けているの？」

「いいじゃん、どうせ暇だし」

「暇って理由が繋がる理由が分からないんだが」

「まあまあ……」

「……」

流されてる気がするんだが……まあそこはどうでもいいか。

「と言うかさ兄さん」

「結局戻ってるし……」

「そうじゃくてさあ、なんか私だけ敬語じゃないし敬ってなくない？」

「……詐欺師の何処を敬えと？」

「えー」

「えーじゃない……」

初対面から酷過ぎたし今後絶対敬うことが無いのは分かる。

「じゃないよ……そうだそうだ、姫様どうしたのさ」

「あー輝夜さんは……」

「何かしたの？」

「妹紅さんに謝って下さいと」

「……自殺願望？」

「違いますけど……」

「いやだだって姫様があの子と仲直りは無理でしょ」

「せめて謝るだけでも……」

「無理無理、そんなん出来てたらこうはなっていないって」

「そうだとっても……約束したしなあ」

「約束したんだ」

「はい、願い使って難題もクリアして」

「……難題クリアしたの？」

「永夜返しだったけど」

「姫様はなんと？」

「貴方の身が心配だからやめただけと」

「ふーん」

「ん？何かあった？」

「いや、別に？」

「……それでどうすればいいかなと」

「しーらない」

「え？」

そのまま去ってしまつた。

本当に聞く気しかなかったんだなど……

「当てにしたのが間違いなのは分かるけど……」

せめてもう少し聞いてくれるかなと思つていた……勝手に思い込んだ方が悪いか。

「話聞いてくれるかな……」

正直面倒な事態になりそうな気しなくなくて、レミリア達のように紅魔館に帰りたくはあつた……頑張るけど。

…

「よっー」

因幡てゐは竹林の奥、とある家を訪れていた。

何処かと言われれば……竹林に家などそうそうないが。

「燃やされに来たのか？」

「いやいや、いきなりそんな喧嘩腰なの酷くない？」

「輝夜の所の兎を信用しろって言うのか？」

「いや、確かに永遠亭にはいるけど竹林の兎だよ？」

「信じられないんだけど」

「信じてとしか言いようがないけどさ」

「うーん………用件は？」

「……だいぶ柔らかくなってない？」

「つい前にボロボロにされたばかりだしね」

ああそうか、肝試しがあつたなど。

そこばかりは姫様に感謝しよう。

「それで用件だけど」

「輝夜関係だったら断るよ？」

「……」

「ほうら結局そう言う用じゃないか」

「まあね、それは事実だ」

「永遠亭にいけとか言うのだったら燃やすよ？」

「……姫様に謝る機会を与えて欲しい」

「……巫山戯てるの？それともまた変なのに私を巻き込む気？」

「……こればかりは真面目なんだなあ」

「第一謝る気無いでしょ」

「無いよ」

「だったら……」

「でもアンタの事を気遣って、本気で謝らせようとしてる奴がいる」

「……いやいや」

「この前肝試しに来てた筈だけど」

「……あの子？」

「だと思う、妹紅さんに助けられたらしいよ？」

「そんな記憶はないけど」

「まっいいじゃん」

「……」

そのまま話は続けられる。

「だから、どうしてもでも約束を守らせる気だから、私たちがじゃなくて彼を信じて欲しいと」

「今更輝夜を許せとか巫山戯てるとしか思えないけど」

「許さなくていいよ」

「なんで？それが目的じゃ？」

「彼の目的は謝らせる事であって、仲直りじゃないからね」

「なんだそりや……」

「だから一先ず状況を作らせてくれないかなって」

「なんでこうなったか分からないけど、前向きに考えるよ」

そのまま感謝の一礼をして出て行った。

元から姫様を説得しても意味がないと分かっていたがもしかしたら彼のお陰でどう

にかなるかもしれないと。

いい加減この二人の確執にうんざりしていた所もあれば、時折竹林や永遠亭を焼かれて忙しくなるのも困っていた。だからこそ彼を使って少しはマシになるようにしよう
と兎は動き出すのであった。

to be continued

八十六話 かぐや姫包囲網く why is this.

あれから一日経ったが、一向に輝夜さんが出てこない。
声を掛けて見ても反応が無いんだが……どうしろと？

「へそ曲げられたなあ……」

正直どうしろって言うんだよ……

言ったこと間違つてないしこれでダメならどうしようもないんだが……

「……はあ」

「どうされました？」

「鈴仙さん……」

ずっと部屋の前に居た俺を心配したのか鈴仙さんが顔を覗かせる。

「姫様の話は聞きましたけど……」

「怒らせてしまったんですかね……？」

「いえ、姫様はいつもこうですよ」

「ええ……」

「恐らくは気に留めてない所か、どうせやらないって気にして無いですよ」

「はっ」

「そこは私達も困っているんです」

「……レミリア達は傲慢だけど約束は守るんだが」

あの人は本当に……

「すみません……」

「いえ鈴仙さんが悪いわけでは……」

少なくとも今回は鈴仙さんが何かやらかしたわけじゃ無いしなあ。

「……そう言えば」

「どうしました？」

流石に気になった事がある。

と言うか予想通りな気しかしないんだが……

「レミリアさん達の願いだけはお師匠様が」

「……他は？」

「幽々子さん達は食糧って言われてどうしようもない気はするんですが……」

「ああ……あのチームはそうですね……」

あの二人の要求する食糧は払い切れないと……言いたくなるのは分かる。
現代では例えるのならば給料とか軽く一食で弾け飛ばし……

「アリスさん達の方は……？」

「それが、まだ願い事を言われてないんです……」

「え？」

アリスさんに言われた事だしてつきり既に言っているのかと思っていた……特にアリスさんはまだしも魔理沙さんがいるし。

「姫様はどうせまだ出てこないでしょうから、二組に聞いてきて貰いたいです」

「分かりましたが……」

「こちらも流石に姫様を看過出来ないのでお師匠様達と話して来ます」

「分かりました」

少なくとも自分ではどうにもならないだろうと、永琳さん達に少なくともこの場は任せてアリスさん達、幽々子さん達の方へと向かう事に決めた。

「……なんでこいつらが一緒なんだよ」

「まあまあ……魔理沙さん落ち着いて下さい」

魔理沙さんが文句を言うのを宥める。

流石にここで喧嘩されるわけにはいかないし……

「小野寺君、急に集めてどうしたの？」

「いや、鈴仙さんに願い事を聞いて来いと言われまして……」

「私達は言ったわよー」

「それは勘弁して下さいと言われましたが……」

「なんでえ……」

「普通に食糧が尋常じゃないと言われました」

「ええ……」

「それは事実ですから、少しでも減らせればと思っただんですが……」

妖夢さんが悔しそうにしている。

やっぱり量が量なんだろうな……

「こんな時でも食糧なんてたまげたまんだな」

「むっ……量が分かってないからそんな事言えるのでしよう!!」

「妖夢ー、喧嘩はダメよー」

「幽々子さま……貴女のエンゲル係数がおかしいんですからね!!」

「むー」

「ところで魔理沙さん達は……？」

「私は本当は魔導書を願うつもりだったんだが……」

「私が反対したの」

「本当になんでだよ!!」

「貴女が持つてって終わりでしょうが」

「私が頑張ったんだからいいだろうよ」

「そしたら私が頑張った功績0じゃない」

「……」

魔理沙さんらしいと言えはらしいが……流石にそれはダメだろうと。独り占めは色々と良くない。

「小野寺君」

「幽々子さん、どうしました？」

「小野寺君は何を願ったのかしら？」

「俺ですか？」

「さっきの話だと既に小野寺君は決めていたって事でしょうし」

「そうだそうだー、一方的なんてずるいぞー」

ずるいのだろうか？言う分には全然問題ないんだが。

「ただ、謝って欲しいって言ったただけですよ？」

「……なんだそれ？傲慢か？」

「いえいえそうじゃなくて、今回の被害者の妹紅さんに」

「なんで……？」

「なんでって恩人が酷い目に遭わされましたし……」

「成る程……」

アリスさんだけは察する。むしろ幽々子さんは驚いた顔をする。

「あの子は呪われた禁忌の子よ」

「不死だからって話ですよね……？」

「聞いていたの？」

「気絶する前に少しだけですわ」

「その通りよ、彼女は常軌を逸している」

「お前が言うのか……」

魔理沙さんが呆れている。

そう言えばそうか、幽々子さんも幽霊なら逸してるな……

「そうよ、蓬莱の薬を飲んだ人間は不老不死になる。その人間の生き肝を食した人間も不老不死になる。ただし……亡霊が喰らうと死ねない亡霊。成仏も転生も出来なくなるわ」

「……」

確かにそれは大変だ……生きる事も死ぬ事も矛盾する。

この世のイレギュラーになってしまおうとどうなるか分からない……
ならばどうすれば……

「じゃあ食べるなー!」

「………そうですよね!?!」

食べなきゃいい話じゃん!! うっかりしたわ。

と言うか恩人が喰われかけてるのなんで俺は止めなかった!?

「だって美味しそうじゃない」

「恩人なんですつてば……」

「まあ……巻き込んでしまったのは事実だし、あの姫様が実行犯なのも分かるから道理ね」

「……ただそう言ったら逃げられました」

「ええ……あの人間くだけだったんです？」

妖夢さんが啞然とした。うん、俺も全く同じ反応だった。

「だったら願いは叶わないと考えた方がいいって？」

「いえ、レミリアは叶ったみたいですし、そう言うわけでは無さそうですが……」

既に薬を持って帰ったらしいが。また訪れてくるかは分からない。

「成る程ねえ……」

「幽々子さま？」

「妖夢、願い事使ってしまったていいかしら？」

「それは構いませんが……」

「小野寺君。確か私達は、願い事を変えて欲しいだったわよね？」

「それはそうですが……」

「それでも私達は食糧が欲しいので……そうですね、変えないのならば、必要分は足りなくても多少は貰えるのかもしれませんが……」

「いや、私達も小野寺君と同じにするわ」

「……え？」

「実際あの子には迷惑かけたしね、それに結局仲良しが一番なもの」

「いや……仇敵レベルなので仲良くなれるとは思わないですが……」

自分は妹紅さんと輝夜さんを天秤にかけて妹紅さんを選んだだけだし……

「それじゃあ私達もそうしましょうかしら」

「アリス!? ちょっと待ってって考え直そうぜ?」

「別にいいでしょ? 私も恩があるしね」

「そうなのか……?」

「一応貴女も関係してるわ」

「……ああそう言うことか、でもなあ」

「魔理沙」

「分かったよ、やりやいいんだろ!!小野寺、私達もそれで!」

「え?全員で同じにしてどうするんですか……?」

「包囲網みたいになったわねえ」

「より一層まずいのでは?」

「試みましょう、ここまで追い詰められた姫様はどうするのかしらーってね」

「……」

何故か予想以上に壮大なケースになってしまった気がする。

ここまでやれば輝夜さんは後戻り出来なそうだが……やり過ぎな気も……

だが、こうなってしまった以上、せめて仲良くは無理だろうけど……少しでも一触即発状態が良くなればいいなどだけ思う事にした。

t o b e c o n t i n u e d

八十七話 より一層悪くなる～worst girl.

翌日、全員に伝えておくべきだと思い永琳さんの元へと向かった。

永琳さんは忙しそうにしているが……タイミングが悪かっただろうか？

「どうしたのかしら？」

「今大丈夫ですか？忙しそうですが……」

「いつもこのぐらいだから問題ないわ。用件があるのなら」

「願いの件なんです……」

「それは悪いけど輝夜に……あああの子出て来ないのね」

「そうですね……」

更に言うなら聞いたところでだったしなど。
永琳さんに言っただけでどうかなればいいが……

「聞かせてちょうだい」

その後、永琳さんにも同じ事を話した。
当然と言えば当然だが頭を抱えてしまった。

「正気？」

「はい」

「そう……」

「輝夜さんにも事情はあるんだとは思いますが」

「……まあ、そうね無くはないわ」

「しかし恩人にああされてしまうと……」

「そうね……殺し合いするのも放置してたけどいい加減どうにかするべきでもあるわね」

「当たり前のように殺し合われても困りますし……」

俺は死にかけて済んだ……済んだと言っていいのだろうか？とも思うが。

実際竹林に迷い込んだ人が死者とかになってるのでは無いかと思う。

「……理由はあるのよ」

「理由ですか……？」

その点是我儘や自分がやりたいからと考えていたが、理由はあるのだろうか？

「あの子が不老不死なのは知っているでしょう？」

「分かっています、色んな書庫にありましたし」

「どうしても、永久を生きるとなると……出来る事はなんでもし尽くすわけなのよ」

「そうですね、実際の所時間が無限にあるならなんでもやり尽くせます」

「そしたらどうなるか分かる？」

「……暇だからとか言い出しませんかよね？」

「違うわ、生きている実感が無くなる。何もする気が起きなければ死んでいるのと一緒になるわ」

「……分からなくもないですが」

「……だから姫様は自分が生きている事を実感する為に」

「……色んな手を使って殺し合いをするんですか？」

「そう言う事」

「……」

何もやる気が起きなければ、人は朽ちていくのみ、確かにその通りだ。
人が人らしく生きるには刺激が必要になる。

ただし、そんな綺麗事だけでは収まらないだろう。

「……妹紅さんにとっていい迷惑ですよね」

「そうね。彼女はただ巻き込まれているだけだもの」

「……ダメじゃないですか」

「甘やかし過ぎたかしら」

それ以外の点を見ても、普段から永琳さんは甘やかしている印象がある。
特にやり過ぎでは？と思うケースが何度か見られた。

「だから皆、あの願いです」

「……あつてはいるんだろうけど、飲まずに部屋に籠ったと」

「……はい」

「プライドが異様に高いものね、認めたくないっていつも通りやってるのが目に浮かぶわ」

「だから仲良くしろとまでは言いませんが、どうにかならないかなと思ひまして……」

「いい加減、立ち向かわなきやいけない問題ね」

「……」

各々がどうにかしようと思つてももどかしいと思うケースはよくある、もう一度話せないものか……

「着いてらっしゃい」

「うん？」

「姫様の所へ行きましょ」

「……何？」

「何じゃないでしょ、意地張ってるのは貴女じゃない」

「ぐっ……永琳に言ったの？」

「皆に話しましたよ……願いの話になりましたし」

「そう……」

「貴女が好き勝手やってその結果がこれじゃない。どうするの？」

「永琳……どうするって言われてもねえ」

予想は付いていたけど……やっぱ輝夜さんは永琳さんには弱いのか。

「ええ……」

「一応、他の人はどうなったの？」

「全員、同じになりました」

「……は？」

そりや驚くよな、実際に俺もこれは驚いたし。

「全員で私を追い詰めたいわけ？」

「……そもそも追い詰めるとかそう言った気は一切ないですし、先にやったのは輝夜さんの方では」

「そう言われると言い返せないけど」

「私からも今日は言わせてもらいますからね」

「永琳……?」

「かつて来たメンツならまだしも一般人さえも巻き込んで、それで願いをつて事で許しただけどその結果がこれですか」

「ちよつと待って永琳、これにはワケが……」

「ならそのワケは……?」

「……」

輝夜さんが悩み出す、その時点でアウトなのでは?

「………そうよ」

「ん？」

「私は永遠亭から出られないの。だから妹紅が永遠亭へと来たら考えるわ」

「ちよつと輝夜さ……」

「分かったわ」

「永琳さん……？」

「流石永琳分かってくれるじゃない」

「妹紅さんが来た場合、土下座ね」

「え？」

「来た場合土下座して貰います」

「……何を言っているのかしら永琳？」

「いいわね？」

「……」

「あの、輝夜さん……？」

「いいじゃないの……」

「え……？」

土下座までしろって言った覚えはないしそもそもこれ何が起こっているんだマジで
!?

「へえ、良いって言ったわね」

「元々蓮司との約束ではあったしね、それで半端とは言えこなして見せた」

「……」

え？アレ、マジで半端扱いなのか……？

まあそれは置いといたとしても……謝罪の気はないかやっぱり……妹紅さんは来ないだろうし

「だから私はそうそう永遠亭から出られないから、あの妹紅が来た場合はしてあげるわ」

……肝試しの時に普通に出回ってた気がするんだが、注意しようにも永琳さんが良い笑顔してるし何か企んでいるのか？分からない

「言ったわね」

「言ったわよ、断言したわ。まああの妹紅が万が一……いや億が一来る事なんてあり得

ないでしょうけどね」

「それは良い事を聞いた」

「え？」

入り口の方を見る、妹紅さんがいる……え？なんで!?妹紅さん絶対に来るタイプじゃないでしょうよ!!

「妹紅……?」

「よう来たぜ輝夜」

色々と混乱している。てゐが隣でピースしてるけど理解出来てない。

永琳さんもガッツポーズしてるからこれが目的だったんだろうけど……俺何も聞いてないんですけど!?

「とりあえず……状況説明してください……」

突然動き回った状況に、一人だけ追いつけずに困惑した俺は、深刻な空気をぶち壊したのであった。

to be continued

八十八話 冥界へのお誘いくpast self.

「なんで妹紅……アンタがいんのよ」

「おいおいそりや無いだろ、来たらするってのは輝夜が今言ってたじゃ無いか」

「ぐっ……凶ったわね!!」

「いや全く状況が掴めてないんですが……」

「そうそう姫様私達が姫様を騙すわけなんて無いじゃん」

てゐる……俺の記憶が正しければ君はさつきピースしてたはずなんだけど……

「私達の中で話し合いがあったのよ」

「聞いてないのだけど」

「そりや姫様に言っちゃダメでしょうよ」

「む……」

「やっと姫様を場に立たせる事が出来たのだから、これ以上は逃すわけにはいかないよ」

「だからって卑怯じゃない!!」

「この二人は卑怯じゃないだろ。って事で輝夜土下座してもらおうよ」

「……分かったわよすれば良いんでしょ!!」

「おや意外、案外姫様あっさり折れたね」

「土下座なんてパフォーマンスでしょ!!」

パフォーマンスなのかどうかは知らないが……一先ずこれなら大丈夫かな？
そつと部屋を出ようとする。

「あら？小野寺君何処へ？」

「もう大丈夫でしょうし、俺も流石に見てない方がいいかなとは」

「どうして……?」

「ただでさえ嫌がってたのに、人が多いのも嫌でしょうと」

「旦那そういう趣味じゃないんすか？」

「おいコラ」

「ひえ……まあ旦那がいいならいいんじゃないっすか？それじゃあまた後で」

「ちよつと蓮司助け……」

「謝る事に助けも何もないでしょう……」

後ろから懇願する声を後に部屋を出て行った。

そのまま部屋に戻ろうとするも、輝夜さんの部屋の付近で幽々子さんと遭遇した。

「あら、小野寺君。ここに居たって事は」

「幽々子さん、どうされました？」

「いえ、小野寺君がここにいるって事は、お姫様に何かあったのかなって思っただけよ」

「そうですね……用があつて彼女の部屋に行っていました」

「と言う事は、例の願いの事かしら。それで状況は良くなったの？」

「最後までは見えてませんが……マシになればいいなと」

「ふむふむ」

「幽々子さんはどうしてここに？」

「小野寺君を探していたのよ」

「え？俺ですか？」

俺に用があるとは思わなかったけど、それでも何かあるなら聞かないとな。

「少し話さないかしら？」

「構いませんけど……」

改まってって感じだな、重要な話なのだろうか？

急に真面目な話になるだろうと思いき息を飲む。

「部屋に来てちょうだい」

そのまま幽々子さん達の部屋へと案内された。

—————

「そんな緊張しなくていいのよ、取って食うわけじゃないのだから」

「……ならいいですけど」

取って食う、その言葉に少し身構える。

不死の人間を食べようとしたばかりだしあまり信じられない……

「それで、何の御用でしょうか？」

「そうねえ……単刀直入に言うわあ」

「……」

「小野寺君、白玉楼に来ないかしら？」

「白玉楼……ですか？」

白玉楼は確かこの二人の住んでいる場所で、異変が起きた場所だったな……そもそも何故俺が勧誘されたのだろうか？

「ええそうよ。そこに妖夢と私と貴方……素敵じゃない？」

「唐突に言われても困りますね……」

素敵じゃない？と言われても何をどうしてそうなったのかが欠けている。
思い付きなのかもしれないが、やはり現状を理解しきっていない。

「純粋に気に入った、じゃダメかしらねえ」

「何故の方が強いですね」

「むー強情」

「そう言われましても……」

「妖夢だって喜ぶわよー」

「……なんで妖夢さんが」

幽々子さん以上に関わりがないんだが。唐突に居候が増えるのは、正直喜びよりも戸

惑いの方が大きいだろう。

「なんでだと思う?」

「いや……そもそも喜ばないでしょう」

「いやいや、確証出来るわよ?」

「……それはそれで怖いんですが、どうして?」

「知りたい?」

「まあ……知れるなら」

ふざけた理由だったらどうしようか、この人の場合どうしようもない気もするけど
……

「貴方の思い出せない記憶の中が関係しているわ」

「……え？」

「知りたいでしょう？その記憶……」

「これは罠だ……きつと罠だ。」

幽々子さんが知るわけもないし。魔理沙さんが言っただように俺をどうにかする気だっただけ……

「なんで……」

「驚いてるでしょ。でもね幽霊だから分からないけど、私はずっと貴方のことを覚えてるの」

「俺の記憶が欠けてるはずが……そんなわけ無い」

「本当に？」

「……」

罨だと分かっているのに、つい嵌りかける。

いや……もう嵌まっているのかもしれないな。

「白玉楼に来れば……思い出せるかもしれないわよ」

「俺は……」

「幽々子さま」

「なあに妖夢、今は……」

「生憎ですが……今は1週間程度白玉楼を留守にしていた為、人を迎え入れる準備が出来ていません」

「それくらいはどうか……」

「幽々子さまの食べる量だいぶ減りますよ？」

「……しよぼーん」

「なのでその話はまた今度にしてください」

「妖夢う……」

「泣いたってダメです」

そのまま幽々子さんはシクシクと部屋を出ていく。

色々はまだ聞きたい事があったのだが……話してくれなかった。

「妖夢さん……一体？」

「すみません、割と強硬策を取りました」

「強硬策？」

「小野寺さん、白玉楼は冥界で……人が住む事はだいぶ厳しい土地となっております」

「だいぶ厳しい……」

「それこそ幽霊達の土地ゆえに、通常生活でさえ命の危険が沢山あります」

「……」

今更命の危険は……つて感じだが態々自殺行為をする気もないか。

「なので、無理やりにも来させないように先程のような事を」

「成る程……」

「本当に、私らしく無いんですけどね」

「そうなんですか？」

「もしかしたらですが……私自身異様に小野寺さんへの好感度が高いと思っていますし、私も過去に小野寺さんに会った事があるのかもしれないですね」

「そんな運命的な事を唐突に言われても困るんですが……」

「それこそ幽々子さまが言うように私にも欠けた記憶があるのかもしれないですね」

「だったら聞かないと……」

「そちらは私がやっておきます」

「いいんですか？」

「貴方には命を賭けないでもする事があるでしょう？」

「分かりました」

とりあえず現状は紅魔館に戻ってから考えるかな……？

「それじゃあ俺はこれで」

外がドタバタして来て、幽々子さんが帰って来そうだと思いついて部屋を出た。
忘れていた記憶……本当に。

「そこだけじゃ無い、どれだけの事が」

明確に何処に何があるのかは分かっている。

記憶も全部あやふやだ……ただ一つだけ思った事がある。

「無縁塚……」

前に俺が引つかかったワード。恐らくはそこにも忘れている記憶が存在すると思っ
ている。俺はそこで誰かと約束した気がする。

そこに行けば何かがある、ずっとそう思い続けたのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

八十九話 輝夜常務、貴方には土下座をして貰います
f a r e w e l l i s n e a r .

幽々子さんから白玉楼へのお誘いがあったて少しの時間が経った。
部屋へ戻ると、正直予想外の人が待っていた。

「よっ」

「妹紅さん……?」

「お邪魔してるよ」

「それは構いませんが……」

もう帰ったと思っていた、だからいたのは驚きだな……

「あの妹紅さん……このたびは……」

「ああ、そうだなすまなかつた。土下座した方がいいか？」

「え……？」

謝るのは俺の方じゃ無いのか？

なのに何故妹紅さんの方が謝っているんだ？

「何驚いてるんだ？お前殺されかけただろう？」

「あー……まあそうですね……」

「おいおい、しつかりしてくれよ？」

「しっかりはしてませんが……」

そうだよな、本来であれば幾ら恩人だって殺されかけたのに彼女の為に全力を尽くしたのは違和感がある……

死生観が薄れているのだろうか？

「と言うわけですまない。私は殺そうとしたのに全力で私の事を考えて動いてくれたって聞いて……本気で申し訳なく思ってる」

「俺としてはかつて助けられた側ですし……二人の関係を知らなかったせいと嫌な目に合わせたのもあったので……こちらとしてもむしろ申し訳ない限りですが」

「……正直どつちもどつちとは言えないけど、お互い様という事にしようか」

「了解しました」

確かにこのままだと自分が悪いとネガティブの連鎖が続くだけか、大人しく一度切っ

た方が良さそうだ。

「それで、結局輝夜さんはどうなったんです？」

「ああ、適当な土下座に挙げ句の果てに帰れだってさ。自分で言ったのに酷いもんだ」

「……」

もしかして妹紅さんを更に不快にさせてしまったか？

「後は私含めて皆永遠亭から早いうちに出て行ってだそうだ。聞いた話だと輝夜が呼んだって話なのにな」

「あの……妹紅さん……」

「おっと勘違いしないで欲しいけど、私の溜飲は幾らか下がったし、輝夜以外の永遠亭のメンバーとは仲良くなれたしな」

「……それなら良かったです」

「それで、お礼というか願いをその事でふいにしたみたいだし、こっちで叶えられる事は叶えるけど何がいい？」

「いやいや、こちらの恩返しって話だったはずですが」

「それじゃあ私が納得出来ないんだよ」

うーん、予想以上に強情だ……ただ彼女に願う事なんて何も無い……いや知っているかどうかだけはありますか？

「無縁塚って知ってます？」

「まあ知ってはいるよ。行った事はないけど」

「あつ竹林からほぼ出ないからでしょうか？」

「いや……死ねないし行く必要がないからだけど」

「……ごめんなさい」

「別に怒ってはいないけど」

「それじゃあ無縁塚の事、分からないですよね？」

「申し訳ないけど、分からないね……と言うか君にも関係ない場所なんじゃ？」

「ちよつと……気になったんです」

「夢のような記憶だけど、無縁塚……そこで誰かが……」

「だったらどうするの？本を漁るの？」

「いえ、直接行ってみようかなって。見れば何かあるかもしれないし」

「そっか、どうしても行く気なんだ」

「はい、だから少しでも知ってる事があればと思ひまして」

「成る程成る程……」

「妹紅さん？」

「一人で行く気？」

「いえ、それは怒られるので誰かと共に行こうかなと」

「誰か一緒に行けるか決まっているの？」

「いえ……アリスさんが一緒に行けないかなって……」

相手の都合も聞いていないのに、あくまで願望でしかないが……アリスさんなら許してくれるだろうし行けるだろうと言う無茶振りを信じている。

「着いて行くのか？」

「え？」

「どうせ竹林にいと暫く輝夜が何かして来そうだしな。それなら逃げようかなって」

「着いて来てくれるって言うなら……有難いですが」

「それより君の方は大丈夫なの？」

「え？何がですか？」

「……あの吸血鬼達に気に入られていたようだけど、紅魔館から出れるの？」

「それは流石に大丈夫じゃないですか？レミリアが何かするわけ無いだろうし」

「監禁とかされたり……？」

「流石に無いと思いたいが……」

「いいならいいけど」

「正直俺も寂しい気持ちもあるし、紅魔館でまた皆と色々騒ぎたい気持ちもあるけど……」

それでも俺はまだ幻想郷中を回りきつてないし、色々調べてみないと行けない場所がある。

レミリアにまた色々と言われそうだが、今回は最後じゃ無い。また絶対に紅魔館に来るし、たとえ俺が死んで相手が忘れてようと友達として凶々しくね。

「いいって言うなら止めないよ、男の子らしく冒険心があるのはいい事だし」

「なんか初めて褒められた気がする……」

「どう言う事？」

「大概是危険だの無茶だの言われましたし……いや俺の事考えて言ってくれてるの分かってるので文句は言えませんが」

「結局、皆連司の事が大事なんでしょ」

「そうですね……本当に有難い限りです」

「この後の予定は決まった、後はアリスさんや、紅魔館へ行つてレミアに伝えるだけだ。」

「一先ずは先に永遠亭にいるアリスさんに……」

「呼んだかしら？」

「え……？」

流石に言った瞬間に出てくるのは……俺も驚くんですが……

「ああ、もしかして驚かせたかしら？ごめんなさいね」

「いえ……それはいいんですが」

「それで、私に何か用があったのかしら？」

「はい、肝試しが終わったので……無縁塚に行こうと思っっているんですが……」

魔法の森のその先にあると聞く、少なくともアリスさんに一切伝えないと拗れるだろ

うし……

「成る程、私も着いて行くわ」

聞かなくてもそうしてくれる、勝手に思っていたが本当にそのようで良かった……

「と言えれば良かったのだけどね……」

「え？」

「ごめんなさい小野寺君。私も魔か……行かなければならない場所があつて……だから無縁塚は諦めてちょうだい」

予定を聞かなかつた俺が悪かつたが、アリスさんが無理だとは思わなかつた。決め付けた予定はやはりよく無いって事か。

「それなら問題ない、私が着いていくよ」

「妹紅が……?」

アリスさんは一度妹紅さんの方を見る。

「まあ、私以上に大丈夫そうと言えば大丈夫そうね……用件は分からないけど無理はしないように」

「分かりました、気を付けます」

妹紅さんが着いて来てくれる、決まっておいて良かったかもしれない。

流石にアリスさんも単独じゃ許してくれなかっただろうし、俺も危険だらけなのは理解している。

「まだ決まってるないけどね」

「え?」

どう言う事だ……？まだ何か？

「レミリアとちゃんと話しなさいよ」

「分かってます」

何を言われるか分からない、でもこれは絶対話さなきゃいけない件だ。

「寂しいけど……今までだってそうだ」

地底での出会いと別れもあった。妖怪の山でも出会いと別れがあった。人は出会いと別れを繰り返すから……

「しっかりと話さないとな」

そう意気込んだのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

九十話 さよならよりも～Let's meet again.

「貴方を含めて皆にはお世話になったわ。姫様達はまだ溝が深いけど、それでもね」

「いえ、元はと言えば俺やアリスさんが永琳さんに助けられたことから始まりましたわ」

「そう言えばそうだったわね、でも正直呼んだ時はこうなるなんて思いもしなかったわ」

「それはまあ……共通認識でしょうね」

「まつ姫様以外は結果良しで万歳って事で」

「その姫様は？」

突如混ざって来たてゐに質問をぶつける。

輝夜さんが本当にどうなったか分からないし……

「あーそうね……不貞ゲーしてるんじゃない？」

不貞ゲーって……相変わらず遅しいな……

彼女らしいと言えば彼女らしいけどさ……

「まさかこんな面白い事になるとは思わなかったしね。改善したかは微妙だけど新たな一歩って事で感謝するよ」

「……結局てゐが何をしたかつたんだか分からないんだが」

「私？私は自由気ままにやりたいようにってね」

「……………」

間違いないく夕チが悪い奴だ……

「それでは皆様お元気で」

最後に鈴仙さんが別れを告げ永遠亭を出て行く。

次来る時にはもう少し輝夜さんがどうにかならないかな……と思いつながら。

「それじゃあ小野寺君、絶対に気を付ける事」

「アリス、大袈裟すぎやしないか？」

「これだけ言っても前にやらかしたしね」

「うへえ……マジか気を付けろよ！またアリスが説教臭くなるのは嫌だから……痛!?!」

人形の針に突かれている……実際に刺さると痛そうだ。

「また用が終わればすぐにでも会いに行くから、死なないように」

「大丈夫ですつて」

そのまま、アリスさん達とも分かれた。

幽々子さん達は気付けば居なくなっており、残念ながら別れの挨拶は出来なかった。ただまたいつか何処かで会うだろう。そう思った。

「なんか少し引つかかるな」

「妹紅さん？」

「いやなんでもない」

妹紅さんは何か疑問に思っているようだが、それが何か分からない。

とりあえずはそれは後回しにしよう。

「紅魔館で良かったんだよね？」

「ええ寄り道お願いします」

そのまま紅魔館に向かおうとしたところ……

「レミリア？」

帰ったと思っていたが、レミリアが永遠亭の付近で待っていたのであった。

「うまく行ったの？」

「あれ？レミリア紅魔館に戻ったんじゃない？」

「フランに薬を渡しに行つて一度戻つて来たのよ」

「なるほど、確かにそれが最優先事項だったろうけど」

フランの薬が無事に届いたようで良かった。

「それで効果はどうだった？」

「少なくとも良い傾向になつてゐるわ。フランが落ち着くつて……やばい薬じゃないかつて意味で心配になつて来たけど」

「まあ……確かにそれだけの効果が出るとそちらの面でも心配になるか」

よく考えたら衝動を抑えるつて、違法な物も混ぜつてる気がして来たし……

薬学知識はないので、永琳さんだし多分大丈夫と思つておこう。

「まあ、直接見てみれば分かるわよ」

「え？」

「えって……肝試しも終わったしそろそろ帰るでしょう？」

「ああ……それはそうか」

本来ならば、その筈だよなど。

「だから蓮司も紅魔館に帰るし、私が来ないとねってわけでわざわざ来てあげたのよ？」

「ああその事なんだけどレミリア」

「うん？」

話し合いで決めた事をレミリアに伝える。

「俺は紅魔館から一度離れることになるって伝えないとって」

「……理由は？」

「また幻想郷中を回ろうかなと」

「そんな死に急ぎたいなら殺してあげるわよ？」

「そうではないけど……」

「まあ当然でしょうけどね」

流石に自殺願望では無い、と言うかむしろしぶとく生き延びないとまた何か言われる

……

「それで、本当の理由は？」

「本当の理由って……?」

「本当は吸血鬼とか怖かった……」

「それはない」

力強く否定する。

「え、でも蓮司は言ってたじゃない」

「確かに怖いのかはあったし、今だって舐めた態度取れば死ぬくらいには警戒してるよ……でもレミリア達が原因で紅魔館から出るわけじゃない」

「……そう」

「前にレミリアが言ってた、昔俺と会ったって話覚えてる?」

「それは……覚えてるけど」

「俺も最初は無いと思ってたけど、もしかしたら何かあったのかもしれないって」

「……理解が出来ないわ」

「もしかしたら俺自身でも忘れてる事があるかもしれないって」

「そんな……無茶苦茶じゃ無いの」

「無ければそれでいいんだけど、あった場合探しに行かないとって」

「蓮司はあると思ってるの？」

「……思ってる」

幽々子さんにも言われたし、何か思い出せないものは存在していると思っ

その話をすればレミリアは幽霊を信じるなって言いそうだけど……真面目に何かありそうだなと考えている。

「そこまで言うなら止めはしないわ」

「有難う」

「なんで感謝してるのよ……」

「いや……レミリアが俺の事信じてくれたんだなってこと……かな？」

「なんで疑問形なのよ」

そう言いつつもレミリアは笑う。

散々に言われるかと思つたし、なんなら都合の良い玩具として監禁されるかと思つたけどそんな事は無くてよかつた。

むしろ笑ってくれるなら安堵出来るかもしれない。

「何処へ行くのかしら？」

「無縁塚へ行くこうかと」

「……何も無い気がするのだけど」

当然と言えば当然の反応ではあるが……何かありそうだと思っている。
誰かが呼んでいる、そう思いながら。

「それならまあ良いんじゃない……」

「いやいや、絶対になんかあるって示して見せるから!!」

「そう言われても困るのだけどね」

確かに……ここでの力説はレミリアを困惑させるだけの気もするな……

「紅魔館には戻らずそのまま行くの？」

「悪いけどそうする……紅魔館に戻ると決意が鈍りそうで」

「成る程ね、それじゃあ蓮司さよなら」

「いや違う」

「何が違うのよ……」

「例えまた死に戻っても紅魔館にはまた訪れるからさよならじゃなくてまたねだ」

「……変な事拘ってるんじゃないわよ」

「いいや大事な事だ」

確実にまた帰ると決める事は、レミアアにとっては違っても俺にとっては大事な事だ
と思っている。

「分かったわよ」

「……本当に申し訳ない」

「蓮司の無茶振りは今更でしょうよ」

「それもそうか」

「いや反省しなさいよ」

最後までこんなノリだ。ただ湿っぽいよりは何倍もいいか。

「またね、傲慢だけど可憐で優しい吸血鬼」

「またね、弱く大胆不敵な癖して面白い夢を見る人間」

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

く魔法の森のその奥へく

九十一話 不思議な同行者く destination
is the same.

久々に魔法の森を訪れる事になった。

死に戻りしてからは初めて故に何もかもが懐かしく感じる。

「蓮司の行き先って、この奥であってるの？」

「そうですね。前見た地図では、魔法の森のその奥に無縁塚がありました」

「成る程ね、じゃあこのまま森を突っ切っていけばいいんだ。分かったよ」

「ただ……無縁塚までの行き方を分かっていないんですが」

「地図を見たんじゃないの？」

「森の中まで詳細に書いてある地図なんてまず見つかりませんので……」

「確かにそれはそうだね。私も魔法の森の存在は知ってるけど見た事ないや……迷いの竹林の地図もないけどさ」

「なのでサツパリです!!」

「……いや、それはあんまりだと思っけど」

「あの時はアリスさんが来ると考えていたので……」

「いやいや、それって他力本願じゃない」

「まあ……そうですね」

「それに、アリスに地図でも描いて貰えば良かったんじゃないの？」

「……」

「あのさあ」

「……すみません」

「……まあいいや、行くよ」

「そうですね、森の地形もアリスさんの家周辺を始め少しは覚えているので迷子にはならないかなって……」

「違うよ、いきなり森に入るわけ無いでしょ」

「え？どうするんです？行かないって言われたら少し困りますが……」

「人里へ行つて、知ってる人とか居ないか探した方がいいよ」

「アリスさんが迷子になった人里の人を送ったりはして居るらしいですけど、あくまで皆迷子ですし……森内を詳しい人つて人里に居ますかね？」

「居るか居ないかじゃないよ。大事なのは居たらいいだから」

「そう言われると……そうですね。探さなければ話にすらならないと」

事前情報を怠ったのは俺だし、方針としては一番正しいと思う。

納得しつつ人里に向かおうとする。

しかしそうした途端、魔法の森の茂みからガサガサ音がする。

「誰かいるのか？」

「……むしろ僕の方こそ驚きなんだけどね。魔法の森にでも用があるのかな？」

銀髪に眼鏡。頭の先にはアホ毛のようなものが生えているようにも見えるが、雰囲気的には堅物そうに見える。

服装を見ると、本当に驚くような物だ。和服にも洋服にも見える。

人里の間は和服どころか作業着だったからビシツとしている事にも。洋服に感じられる服にも驚かされた。

しかしそれ以上に驚くのは、目の前の人が男性である事だろう。……男装麗人とか言った言葉も存在しているみたいだし、そう言う格好をしているだけかもしれないけど……声からして間違いなく男性だろう。

驚いた理由でもあるが、幻想郷に来てから人里以外で男性を見たのは初めてだな。

「無縁塚に用がありました」

「……あんな場所に用って、何も無いと思うけど」

「知っているんですか？」

「今無縁塚から帰って来た所だしね」

「!？」

無縁塚の事を知っているどころか、今行つて来たばかりだつて？

正直案内して欲しいんだが……

「何を驚いているのか分からないけど……」

「無縁塚、案内して貰つてもよろしいでしょうか？」

「え？君達今から行くんじゃないのかい？」

「実は場所を分かっていなくて……」

「ますます君達の行動が謎なんだが」

「無縁塚に行かなければならないんです」

「……まさか幽霊の類じゃないだろうね？」

「違いますよ!?!なんでそうなるんです!?!」

「既に君は死んでいて、眠る場所を探していると考えた結果だが」

「生きてますからね!?!」

「そうか、なら別の理由か」

「そうですね……お願い出来ませんかでしょうか？」

「……僕は今帰って来たばかりだ、ここらの物も運んでおきたいしね」

「ここらの物って……」

彼の手元を見ると確かに何か持っている、森の中で邪魔じゃ無かったのだろうか？

「意外と重いのもあったし少し軽くしたい気持ちもある。すまないがこれの一部を店に運ぶのを手伝ってくれないかい？」

「それは……構いませんが妹紅さんもいいですか？」

「まあ構わないけど、人里で探すのも苦労しそうだし。私も持つよ」

「ああそれは俺がするんで大丈夫です。持ちますよ……えっと」

「ああ僕の名前は森近霖之助だ。近くの香霖堂で店主をしている」

「自分は小野寺蓮司と言います」

「藤原妹紅だ」

「了解したよ。ただ残念な事に店もあるし今日明日案内するってわけにはいかないが……数日以内には無縁塚へと案内する事を約束しよう」

「有難うございます!!」

流石に魔法の森をどうにかすれば抜けられると思ったのは早計だったのだと思う。

ただ結果的に案内出来る人を見つけたのでプラスだプラス。誰が何を言おうとも結果がよければ全て良しなんだ……

それに、霖之助さんは香霖堂って言っていた。

「魔理沙さんの霧雨魔法店は店主が居ないから何か違うし……人里のお店は結局寄れないし」

どう言ったものが売っているんだろうと気になっていた。

流石にコンビニどころか商店街などで売っているような品物も幻想郷には流れ着い

ていないだろうし……売っては無いだろうなどは。

「だからこそ楽しめそうな気がする!!」

「蓮司、何かあったのか？」

「いや、店って言われて気になってるわけでした」

「人里にもあると思うが……あーそーういや香霖堂か」

「妹紅さんは香霖堂の事、知ってるんです？」

「慧音が確かその話をしてたなって、普通とは違う珍しいものばかり置いてあると」

「本当ですか!？」

「いや、私も行ったことないからね？」

「それはそうですけど、実際そうだったら良いじゃないですか」

「そういうもの好き……あー君ロマンが好きだったもんね」

「当然、ワクワクが止まりません」

無縁塚に行くという目標もまだあるが、今はそれ以上に香霖堂が楽しみで仕方がない。

霖之助さんの後について荷物を運びながら、香霖堂へと辿り着いたのであった。

t o b e c o n t i n u e d

九十二話 香霖堂～mystery shop.

香霖堂。妹紅さんが言うように確かに不思議な雰囲気があつた。

店内は何というか……

「この店……普通の店と言うよりかは骨董屋に近いような……」

「骨董屋？」

「いえ、こつちの話です」

流石に急にそんな事言つても分かるわけ無いな。

むしろそうだろうとか骨董屋をモチーフにしたとか言い出されても逆に困ったけどさ。

「気になる事はトコトン突き詰めるタチでね。その単語について聞いてもいいかい？」

「ええ……？」

変なところで熱心だなど。

熱心なのは嫌いじゃ無いけど、熱を入れるタイミングが間違っている気がする。

「何というか、昔の道具や美術品とか……年季が入ったものを始め、如何にも古くて歴史を感じるような物を売る店？うまく説明できないな」

少なくとも自分が知る意味での骨董屋って言うのはこんな感じだが、正直説明しきれ
てる気がしない。

古臭いものとか怪しい物とかを売る店とかなら簡単に言えるが、流石にそれをいうの
はあんまりだろう。

「つまりは古い物を売る店か」

「まあ雰囲気だけですし、何より古い物には普通以上に希少価値があったりしますからね!!」

「希少価値か、確かにあるだろうね」

「まあ俺が勝手にそう思ったくらいですから……」

「簡単に言うところらの商品は殆ど外の世界のものだ」

「え……?」

慌てて周囲を見渡す、本当に外にこんなもんあるの? って思う。

ただ明らかに変なマスクとかはパーティーグッズに使う用途とかの物だったか?

「ん……?」

よく見ればカメラまである……久し振りに見たとは思ったが……流石にレンズが割れてるし使えないな。

「カメラが気になるのかい？」

「え？名前知ってるんです……？」

「その口ぶりだと、君も知っているようだが」

「……」

迂闊過ぎるな本当に……

つついっい珍しいと思っていたが、口を滑らせてしまうのは良くない。

「そう言う機会があつたんですよ……」

「なら深くは問わないが……使い方は分かるのかい？」

「分かりますが……流石に壊れているので使えませんか？」

「それは残念だ……」

「と言うか壊れた物売っていて良いんですか？お客さんに怒られそうですが」

「壊れているか分からなかったしね、客もどうせ分からなかっただろう」

「……壊れてるの分からないのに名前は分かるんですね」

「それは僕が理由だよ」

「能力ですか……？」

妹紅さんとかも能力があるのは知っているが……この店主にも能力あるのか。と言うか男だから能力は手に入らないと思っただけ少しずい。

「道具の名前とその用途が分かる程度の能力と言うんだが」

「あーはい、聞いただけでわかりました」

地味どころかかなり便利だな。

霖之助さん相手だと能力でダミーとかがあっても見破られるんじゃないだろうか？

「だから、カメラと言うものは写真を撮る為の物だと言う事までは分かっているけど……その使い方が分からない」

「なるほど……どっちみち使えないんですけど」

「そのようだね、どこを触っても反応しなかったし」

もしかしたらにとりさんなら直せるかもしれないけど、それはもしかしたらであつて、そもそも彼女と会う事は今は難しいだろう。

「……そんなノリで商売成り立って居るんですか？」

「元々趣味でやっている店だし問題ないよ」

「趣味で外の物を集めて……」

好事家でもありそうだし……いよいよ骨董品屋だなこの店。
ダメなわけではないけど……使い方を説明出来ないのに買う側もそれで良いのかに
なる。

「まあ気になる商品があったら言ってくれたまえ」

そのまま霖之助さんは倉庫へと入る。

まだまだ倉庫内に外の商品があるのか……？

正直気になったが倉庫にまで入るわけにはいかなかったので妹紅さんの方へと足を向けた。

「ん？どうしたの蓮司。めぼしい物でもあつた？」

「いえ……どちらかと言うと勿体無い物が色々」と

「どう言う事か聞かせてもらってもいいかい？」

「店主がどう言うものかは分かっているようなんですが使い方が分からないようでした……宝の持ち腐れが多いなと思ひまして」

「確かに分からないのは勿体無いけど……仕方ないんじゃない？」

「それはそうですね……」

「店主がそれで満足しているならそれでいいじゃない」

「それ言われると何も言えなくなってしまうんですが……」

「分かるって言うなら教えてあげればいいし。そう言うって事は少しは分かるんですよ？」

「少なくとも分かるやつはあるなって程度でどれくらいかは分からないですね」

「まっ私達は一応は客だしな、出来る程度でいいんだよ」

「そうですね」

「それで、欲しい物は見つけたか？」

「流石に無駄遣い出来る程は持っていないので、欲しいとかは考えてなかったですけど」

「興味があつて来たんじゃないの？」

「興味やロマンって物があっても!!予算という言葉が邪魔するんです!!」

「そっそう……」

若干引かれてしまった気がする……

確かに金がないロマン人間はやばいか。

「どうしても欲しい物があるなら最悪ここで少し働けば良いんじゃない?」

「どっちみち働いたら妹紅さんを待たせる事になるでしょう……」

無縁塚に用があつて付き添つて貰っているのに、余計な寄り道ばかりしてどうするって話だ。

「別に良いけどね、数日なんて私にはあつという間だし」

「それでも俺が気にするんです」

「律儀だね」

「常識かと……」

親しき中にも礼儀ありつて言葉が存在する様に、いくら許してくれる存在であるから
と言って好き勝手するのは違うだろう……

何より不死だから待たせても大丈夫は流石に違う。

逆に今まで何度も待っているのだから、待たせる事を出来るだけ減らしたほうがいい
だろうとすら思える。

「でもそつか、気に入っても買わないっていうなら。全力で今見て楽しんだ方がいいん
じゃない？」

「それはそのつもりです。ここでしか見れない物は沢山あるでしょうし」

カメラを始め外の世界の物はまだまだあるだろう。そう考えると全部見たいって気分になる。

少なくともここだけでは、外の世界を思い返せるだろうから。

「私も慧音に自慢出来るような物探しに行こうかな」

「……自慢出来るんですか？」

珍しいとは言え、この店は普通の店だ。

VIPしか入れないとかそう言った扱いは一切ない。

なら……自慢出来ない気がするけど。

「慧音はなんでも褒めてくれるしな」

「それは……凄い知り合いですね」

ただ店見に行っただけで言う凄いで褒めてくれる人は、流石に恐怖かもしれないな

い。

「それじゃあ蓮司」

「え？何かあります？」

「いや、店の商品多少は分かるんでしょう？」

「まあ……確実な自信は無いですが……」

「それでもいいよ、分からないやつ教えてね」

そのまま手を引かれて店の商品を案内する。

振り回されたものの、偶には良いかとそのまま二人で店を回り始めた。

to be continued

九十三話 騒がしいお客様 I , m n o t s k i p
p i n g .

それからまた一日が経ち、明日案内してくれると言う話になった。

今日はジツとしているのもなんだと言われて、一日だけバイトさせてもらっている。

ちなみにだが妹紅さんは一日猶予があるならと人里に行ってしまった。良く話題に出る慧音さんって人だろうか？

骨董屋と思っているのもあり、客層もそう言った物を求めてくるのかと思っていたが……本当に色々な客が来るんだなど。

「どうしたんだい？」

「いえ……冷やかしい多くなってしまいました」

「そもそも売ってる物自体少ないしね」

「え？売ってないんです？」

「正直手放すのが惜しいからね」

ええ……それでいいのか？色々な意味で。

「本人がいいならいいんですが」

「これくださいーい」

「それは売り物じゃないよ」

「えー」

「残念ながら売るつもりは無いよ」

「ガーン……」

意気消沈のまま客は帰って行く。

本当に売る気はないんだな……

「と言うわけだ」

「分かりました」

とにかく売らなければいいのだろうか？

いや……それはおかしいか。

「おや」

「どうしました？」

「ちよつと珍しいお客様がね」

「あの人ですか？」

「ああ合っているね。……そうだと対応して来てもらえるかい？」

「それは構いませんが……」

元々さつきまで居た客は見ていただけなはずだけど、何故対応するのだろうか。
万引きとかしそうには思わないんだが……まあいいか。

「あの商品眺めている子ですよね？」

遠くから見て分かった事は、黒髪に三つ編み、首元にスカーフのような物を巻いているように見える。

幻想郷では色々な種族も見ていて、日本人離れたような見た目の子が多かったが。

輝夜さんとかみたいに良くいるようなタイプの人に見える。

「あの人はどうにも苦手なんだ……」

後ろからぼそつと聞こえた気がした。

いや……嫌いだからって押し付けなだけでくださいよ。

「いらつしやいませ」

「……この店、店員雇ったの？と云うか客のもとに来るなんて聞いてないけど」

「まあ自分も行って来てくれと言われたものでして……」

「ふうん……まあどうせ対応を面倒くさがったんでしょう」

「ええ……それでいいんですかね」

「どうせあの人は真面目に働く気ないでしょうしね」

その後も霖之助さんの事を良くも悪くも色々と話した。
悪い子では無さそうなんだが……面倒くさそうな理由は分かった。

「一応俺も仕事中ですから……」

「どうせ今はもう他に客はいないわよ」

「そうですね……」

つまりはだいぶ話し込んでしまったらしい。

霖之助さんが何も言わないし問題は無いのだろうけど。

「まあいいわ。あまり話過ぎても営業妨害言われそうだし………売る気がない癖に営業妨

害って本当に好き勝手言うわよねって」

「偶に売ってるらしいですから……」

「でも貴方もこんな店で働くだなんて災難ね。好き勝手やる店主に振り回されそうだし」

「……成美くん。そろそろやめてくれないか？」

「やつと重い腰をあげたんですね森近霖之助さん」

「一応客と店主ってだけじゃなくて知り合いなんですな二人とも……」

「一応ね。魔理沙の友人の友人って感じだけど」

「ああ魔理沙さんの……」

「ちよつとアンタも魔理沙と知り合いなの!!」

「え? まあ少しはつてくらいですが……」

「今何処に居るか知らないかしら?」

「いえ……今は流石に……」

永遠亭で別れてから何処に行ったかっでは聞いてないしな……
と言うかまだ戻って来てないのだろうか?

「ほんと……いつもふらつとして居なくなるわね……香霖堂に通い詰めても来てない
し」

「……だから冷やかしはよしてくれと言ったはずだが」

「ならこの前の商品を」

「非売品だ」

「やっぱり売ってくれないじゃない」

魔法の森に近いのもあるせいかな魔理沙さんの知り合いはこの辺は多いんだな……
と言うか恨むよりも心配してくれる人もいるんだって驚いたが。

「まあそうですね……魔理沙を見かけたら魔法の森に報告しに来てちょうだい」

「え？魔法の森ですか？」

「何かあった？ああ迷うのね……」

「と言うよりもアリスさんと魔理沙さん以外にも森に住んでいる人って居るんですね」

「……成美くんどころかあちらこちらに妖精までもいるが」

「……マジですか？」

「偶然合わなかったは無いだろうし、森に入った事があるのならばその妖精達に何かされてたのかもしれないね」

「……あの時迷子になったのは!？」

同じ所を何度も回っていたのは……妖精のせいだったって言うのか。

「それは純粹に迷子だと思うがね。迷うには迷うし」

「そうですか……」

勝手に犯人にしてごめんなさい妖精さん。

「よく魔法の森に入ったわね。一般人なら無謀でしょうし」

「あの時は……まあ色々ありましたので……」

「そう……」

そう言いながらこちらの方をマジマジと見てくる。

一体どうしたのだろうか？ 森に入れる肉体じゃ無いとか？

「貧相ね」

「……うぐ」

「ああごめんなさい。肉体がつて意味じゃ無いわ」

「じゃあどう言う意味なんです……」

悲しい事は起こらないで欲しい。

「魂がよ」

「魂が貧相つてどう言う事ですか？」

チキンとかそう言う意味だろうか？それならむしろ逆な気もするが……

「魂が消えかかっている……いえ、これはもう消えている？」

「え？俺死んでるんです？」

「いやいやいや、冗談を急に言わないで下さい。」

「いえ、ほんの僅かね……これじゃあ生きていけないはずなんですけど」

「第一なんで分かるんですか？」

「私はちよつと特殊だね。生命操作に長けてる魔法使いだからその延長線みたいなものよ」

「この子も魔法使いなのか……能力も多種多様なんだなと。」

「救済しなければいけない程……弱々しい」

「救済って俺殺されるんです!？」

弱々しいって言った後にだと死は救済とか言われるタイプなんじゃ無いかって思ってしまう。

「いえ、私は地蔵だから。人は皆救済しないとイケないのよ」

「地蔵……?？」

どう見ても地藏には見えないんだが……

「ちなみに魔理沙が言う事には触ると柔らかいらしい」

「煩いわよ変態メガネ」

「ははは……」

苦笑いをする。じゃあ触ってみるなんて恐ろしい事は出来ない。

「とにかく風が吹けば消えるような生命をしているわ。気を付けなさい」

「…………ご忠告ありがとうございます」

「不満そうね」

「いきなり貴方死ぬわよって言われましたらそりゃ……」

「それもそうね。言い方はあつたかもしれないわ」

生命力が薄いつてどう言う事だ？

俺はもう死に掛けたのだろうか？

それとも……死に戻りし過ぎて生命が弱つて来るとか……？それは分からないしどうしようもないけど。

「それじゃあ帰るわ」

「次からはもうちょっと別の商品に興味を持ってくれると嬉しいね」

「だったら興味を惹くものか魔理沙でも用意しなさい」

「……君には危険過ぎて魔理沙を売る事は出来ないかな」

「買うわけじゃないわよ!？」

少し怒声を混ぜながら彼女は外へと足を向ける。

「えつと有難うございました……」

「君、名前は」

「小野寺蓮司です」

「じゃあ蓮司さん、もしも何か分かったりしたら魔法の森に訪ねて来なさい」

「何かと言われましても」

「人間は皆救済するのが仕事だから」

「なんで人間って分かったのかも不思議ですが……」

少なくともこの霖之助さんは半妖らしいが俺と区別は付かないと思うし。

「この矢田寺成美に不可能は無いのよ、地蔵が救うべき対象を分からないなんてあつてはならないわ!!」

「……あつはい」

大した自信だなと思った。

「それじゃあまた今度魔理沙が来てる事期待するわ」

「僕に言われてもね……」

彼女は帰って行つたが……残念ながら魔理沙さんが来るのは本当に誰も予想が出来ないだろう。

「……それじゃあ最後の客も帰つたし、今日は店じまいだ。明日は無縁塚でいいんだね

「？」

「はい……有難うございます」

「ん？どうした？」

「いえ……さつき言われた事が気になりました」

「ああ魂が貧相って話か……気にしても仕方ないだろう」

「そうですかね……」

「どちらにせよ知ったところで行動は変わらないだろう？」

「そう言われるとそうですね……」

「だから君らしく居ればいいと思うよ」

「有難うございます」

俺の魂が弱りかけているのは何が理由だか分からないが、心当たりがあり過ぎるかもしれない……

ただそれでもやる事は変えてはいけない。その通りだ。

「……深く考えずに寝るか。重要なのは明日だ」

いつそ忘れてしまえば楽になるだろうと思いつながら、目を閉じたのであった。

t o b e c o n t i n u e d

九十四話 消えた人物は何処に? ~ f i n d h i m .

魔法の森、前は何度もここで迷う事になった。

今ではアリスさんの家までは分かるが……無縁塚までは分からない。

「お願いします」

「そこまで緊張しなくてもいいんだがね……」

「それはそうですが……」

無縁塚に辿り着くために霖之助さんの後について魔法の森へと潜って行く。
いきなり道を逸れて驚く。

「気を付けないと迷うよ」

「そうですね……置いてかれたら迷いそうです」

「蓮司、迷いの竹林と違うから私に期待しないでね」

「すぐ終わりは無さそうですが……それでも危険な事には間違い無いですしね」

黙々と付いていく、アリスさんの家を過ぎ魔理沙さんの家へと辿り着く。

「魔理沙さんの家だ……って何してるんです？」

「ちよつと魔理沙が帰ってないのかと……少し部屋のチェックをね……」

「勝手にしていいんですか？」

「じゃないと汚部屋になる可能性があるからね……」

「そんななんです……?」

「アリスさんと僕がいないとね……」

「それで、見た所掃除は必要なんです……?」

「そもそも今はする気がないから問題ない。余程酷ければまた明日訪れるつもりだったけど」

「大丈夫そうだと」

「そもそもまだ帰って来てないみたいだしね」

「ああ、そう言われるとそうでした」

「早く帰ってくると良いんだがね」

「心配ですか？」

「どちらかと言うと、誰かに迷惑を掛けてないかって意味でね」

「あー……」

納得せざるを得なかった。

妹紅さんも理解出来たようで少し明日の方を見ていた。

「それじゃあ行くかうか」

そのまま霖之助さんは外へと出て行く。

そして……その姿は消えた。

「霖之助さん何処ですか!？」

妹紅さんと慌てて探すが見当たらない。

森に深く入り込んで迷ってしまっても仕方ないためあくまで魔理沙さんの家周辺だが……

「居たか？」

「居ません……何処に行っただんですかね」

「普通なら拐われたとかだけど……音すらないのはおかしいね」

「そうですね……全く音がしなかったですし……消えたとかの方が正しそうですが」

「全く……これじゃあまるで神隠しだ」

「神隠し……」

まさか、俺と同じ事が起こったのか？

ただそれだと霖之助さんが何処に行ったってなる。

まさか幻想郷外への神隠しなんてあり得ないだろうし……

「決まったわけじゃないけどさ」

「そうですね……ただそうやってひっそりと消えてしまったならどうすればいいか？」

「……………る。……………ね」

「妹紅さん、何か言いました？」

「言っていないけど」

「じゃあ一体誰が？」

「何か聞こえたの?」

「誰かが囁いたような……?」

「……そう、どの辺で?」

「この辺ですが……」

探してみるが誰も居ない、動物が居た形跡すら無い。

「ごめんなさい、やっぱ気のせいのように……」

「ちよつと試してみようか」

「え?」

そう言う妹紅さんの手に炎が灯る。

「ええええええええええ」

「そろら燃えるぞ」

「ちよつと止めなさい!？」

慌てて何かが姿を現す。

見た目は子供とも一瞬見えたが……それ以上に小さいな……妖精だろうか？

「君は……」

オレンジの髪に赤いリボンでツインテールを作っているようだ。

服装は白がベースで赤いスカートの上にこれでもかと言うほどフリル状になっている。

「サニーミルクよ。この森に住んでいる妖精ね。」

「初めて見ましたね……」

「普段は姿を隠しているから」

「姿を隠している？」

「私の能力よ、光の反射を利用して他の人から色々な物を見えなくするの」

「え？つまり霖之助さんが今居ないのって？」

「……」

「あの……」

「2人共！戦闘準備よ!!」

そう言うとはも居なかつた位置から二人がひよつこりと出てくる。
この子達も能力で隠れていたのか……

「何やっているのよサニー、バレちゃったじゃない」

「どうせ疑われてたわよ。問題ないわ」

「ああもう！人間達！懲らしめてやるんだから!!」

「纏めて燃やしてやるから安心しな」

「妹紅さんここは森いいいいいい!!」

「安心しな、火加減はするさ」

そのまま三対一のスペカ勝負が始まり心配しか無かつたが……少し経って焦げた妖精達が出来上がった……妹紅さん強い。

……と言うか森が燃え尽きないで良かった。

「……やられたー」

「呆気なかったな」

「強過ぎるでしょ……」

「弱くは無いしな」

「負けるなんて……」

「それで、あの眼鏡はどうした?」

「今出します……」

追い詰められた妖精達は、自分達のように見えなくなっていた霖之助さんの姿が見え

るようになる。……良かった。神隠しなどでは無くて。

「……すまない助かった。彼女達の悪戯で迷惑していた所だ」

「無事なら良いんだよ。で、コイツらどうするよ?」

「え? いや……どうするってどうしたいんですか?」

「蓮司の用があつたのにその妨害を散々されたし……そこも言いたい事あるだろうし」

「そののつて……」

「妖精にいいようにされている人が何か……?」

「……個人的には彼女達に思う事はあるけど。なんだかんだ魔理沙達も世話になつてい
るらしいしね」

「魔理沙さんの知り合いなの!？」

「……そもそも君達とは良く会う筈だが？」

「あつ香霖堂の店主じゃん」

「……むしろなんだと思っていたんだ君達は」

「泥棒」

「魔理沙さんの家を荒らす不届き者」

「とっ捕まえようとしたの」

「……」

「確かに……そう考えるとおかしく無いのかな？」

確かに側から見れば泥棒にも見えるし、そう考えると霖之助さんが悪いのか……？
ただそれで一方的に霖之助さんのせいって言うのも違う気がする。

どっちも悪かったが妥当なのだろうか？

「霖之助さんがお咎め無しと言うならそれでいいんじゃないでしょうか？」

「甘いけど、蓮司がそれでいいならいいか」

「妹紅さんが後は何かしたければですが……」

「もう十分に焼いたしなあ」

焼いたって……合ってるけど本当に色々突っ込みたくはなる。森が無事だし文句は言わないけどさ。

「ああそうだ、霖之助さん」

「どうしたんだい？」

「魔理沙さん最近見ないんだけどどうしたんですか？」

「ああ、まだ帰って来て無いね」

「そんなー、魔理沙さんと遊ぶって約束だったのにー」

「何というか……本当に人気ですね魔理沙さん」

「え？ 貴方も魔理沙さんの事知っているの？」

「知っていますが流石にいつ帰ってくるかまでは分かりませんか？」

「ふうん、名前は？」

「え？小野寺蓮司ですが……」

「それじゃあ蓮司さん、これからの予定は？」

「無縁塚に行く筈なんです……」

君達に邪魔されました……

「あー……ごめんなさい」

「それは良いって話になりましたから」

「それなら良いのだけど……今日とは言わないから、それが終わったらまた来てくれませんか？」

「うん？」

「魔理沙さんが居ないから暇なので……」

「余裕があればで良いんですが」

「それで問題ないわ。どうせ暇なら悪戯しに行くし」

「悪戯……」

「あつやばつ逃げろおおお」

サニーと呼ばれていた妖精はさつさと姿を消す。

流石に消されては何処にいるか分からない。

「サニーが本当にごめんなさい……」

「……元気があるのは分かりましたが」

「それじゃあ考えておいてください。少し叱っておきますので！」

そう言つて残り二人も帰つて行つた。

台風のようにやりたい放題やられた気がするが……まあ致命的な時間ロスじゃないしよしとしよう。

「僕が原因とは言え幾ばくか時間が経ってしまった。少し急ごうか」

「了解です！」

霖之助さんの後を追いながら更に森の奥へと潜つて行つた。

t o b e c o n t i n u e d

九十五話 無縁塚くmouse girl.

無縁塚へと続く再思の道。

枯れかけ始めているとは言え、彼岸花が咲き誇っている。

「凄いですね……」

「もう少し前ならもつと咲いていたんだがね」

「誰が育てたんでしょねこれ……」

「知らないね、元よりこの道に興味すら無かったから」

「いつもこの道を使われているのでは？」

「それはそうだが……一々気にする物でも無いだろう？」

「そう言われると……そうですね」

特定の場所なら覚えるが通り道だつて全場所を気にはしないな……

「それで……この先を抜けると、無縁塚だ」

「そう言えば霖之助さんつてどうして無縁塚に来たんですか？」

「どうしてつて？」

「いえ……身寄りのない人達に関わりが合ったのかなと」

「そうでは無いよ、無縁塚には物拾いに来ているんだ」

「物拾い？」

「そもそも無縁塚にはどう言った人が眠っていると思う？」

「……身寄りのない人ですよね？」

「外の人間達だよ」

「……」

「流石に死体から剥いだり、墓荒らしをしたりはしないが……この場所は人もそうだが物が流れて来るんだ」

「……もしかして、香霖堂の商品って？」

「予想通りここで拾って来た物だよ」

「だからですか……」

あの時大量に商品を持ち歩いていたり、香霖堂の商品が壊れていたりしたのか。

「……だからって言葉で締められても困るが、合っているとは思うね」

「すみません」

「まあ、そうやってなんだかんだしているうちに目的地だ」

目的地へと辿り着いたが……思った以上にここには何も無いな……

墓と言える物すらそこには無く、大小様々な石がそこら中に転がっている。

ただし……夢の中で見た場所はここだ。

「本当に無縁と言うか何というか……」

「それで……君の用件は済ませそうかな？」

「探してみますね」

そのまま無縁塚を歩き続ける。

夢で出会ったあの少女はいるのかと……

「……………うん？」

正直誰も居ないかなと考えていた。

しかし奥の方を見てみると誰か居るようだ。

「あの……………君は……………」

「誰だい？無縁塚に誰か居るとは珍しい」

夢で見た少女は確か角が生えている鬼に見えた少女のはずだった。ただしこの子は……………丸い耳。その姿は鼠の様に見えた。

「君は一体？」

「まあいいか……煮詰まっていた所だしな。私はナズーリン。妖怪鼠でもある」

銀髪の少女はそう答える。

妖怪鼠……確かに普通の鼠は喋ったりしないが、それでも強調するものなんだ……

「いきなりですみませんね。と言うより、何か煮詰まっていたんですか……？」

「おいおい、私には話させて自分の事は話さないつもりかい？」

「ああそうですね、こちらにも名乗るべきでした。小野寺蓮司、人間です」

「人間が無縁塚に？本当に理解が出来ないが……」

「探している存在がいます」

「ふうん……ソイツが無縁塚にいますか？」

「記憶の中ではここだったので」

「残念ながら君の手伝いは出来ないが」

「うん？元よりその気はなかったですが」

「てつきり私の能力を頼りに来たと思ったけど」

「能力？」

「気にする必要はないよ」

「逆にそこまで言われると気になるんですが……」

「そこまで人間に優しくする気はない」

「……」

元々人間への好感度が高い妖怪は少ないが、話せると思った相手がこうなってしまうと悲しいなと思う事はある。

「なんなら、君を小鼠達の餌にする事だつて出来るんだけど？」

そう言うナズーリンさんの肩に小さな鼠が座る。

「それは困りますね……」

「そうは言ってもこの子達はお腹が空いたと言っているが？」

「ちよつと、いきなり同行者を食べようとされるのは困るのだけど」

そう言いながら妹紅さんが後ろの方から歩いて来た。

ナズーリンさんに敵対する気はあったのか……と言うか脅すだけで本気だったのかは分からないけど……間違いなく安全になった事には変わりないだろう。

「おやまた人間……では無いな」

「失礼な、私だって人間だよ」

「人間と言うには……大分特異すぎると思うが……しかし私では勝てない存在だな」

「特異って……確かに事実だけど」

認めるんだ……まあ不死は普通の人間じゃ無いし、仕方ないか。

「それで、こんな場所で何してるのさ」

「それはこっちの台詞だつて言いたいけど」

「どうせ蓮司が話したでしょう?」

「……そうだね、彼から聞いている」

あつやっぱり察されるんですね。

まあスムーズに進むのは良いことか。

「探し物だ」

「なんだ大体似たような……」

「いや、物と一緒にされたらソイツも怒ると思うぞ」

「それじゃそうですね……」

「正確にはここでも探し物があるとはいえ、それ以上にお宝探しをしているんだが」
「お宝探し??？」

え？無縁塚で？流石に色々違うような？

「だって埋まってそうだろう？」

「いやあ……厳しそうだと思いますが」

「そこは私の能力でどうにかして」

「能力……？」

「いや……なんでもない」

「ちよーつと気になるなあ、それをお姉さんに教えてくれないかな？」

「うぐ……探し物を探し当てる程度の能力だよ」

「探し物……ですか？」

「でも人に使えるとは限らないぞ？」

「それでも可能性はあるんだな？」

「妹紅さん？」

「余裕があればいいが手伝ってくれないかってな」

「忙しそうなのでは？」

「お宝探し以外もやらないかって話って事で」

「手伝う義理も無いんだが……」

「いいだろう？ どうせこれも縁だ」

「勝手な縁の押し付けじゃ無いか」

「ほら、なんとかかなりそうだって」

「あの妹紅さん……？」

「蓮司、お前から……」

「そもそもまだこちら辺を一切探索していないので……少なくともそっちが先かなと」

「……まあそうか、確かに順序を間違えていたかもしれないな」

「……もしも見当たらない場合はお願い出来ませんか？」

「……考えておく。私はこちら辺か小屋にいるから」

「え？小屋があるんですか……？」

「ああ近くに建ててある」

それなら霖之助さんは知り合いなのだろうか？

後で聞いてみようかな。

「それじゃあ周囲を探索してきますね」

「一応言つてはおく。奥の方までは見ていなかったが誰も居なかったぞ」

「それは危険な生物もですか？」

「ああ、一通り見て回ったが何も無かったぞ？」

「早いですね……」

「必要そうだったしな」

「有難うございます」

「嘘かどうかは気にしないの？」

「妹紅さんが嘘吐くメリツト無さそうですしね」

「それもそうか」

「ああ。じゃあ危険な事が有れば大声で呼びなよ」

「あれ？妹紅さんは？」

「一応彼女の手伝いをしようかなと。手伝っておけば後で手伝ってくれそうだしな」

「は？」

「一人で宝物を探すより何かあるかもしれないよ」

「それはそうだが……」

「妹紅さんが探すなら俺も……」

「蓮司はまず見なきやダメだろ……？」

「何も無かったのでは？」

「それは私視点であって、ここに用があった蓮司には何かあるかもしれないだろ？」

「確かに……そう言われるとそうですか」

「いいか、遅くなるようなら探しに行くが何かあったらすぐに叫べよ」

「間に合うんですかね……?」

「私だってそこそこ速いんだよ。それに何も見つけれなかった私が側で待機していても何かあったらそれこそ私が居たところで……だろうし」

「それじゃあ叫んでもダメなのでは?」

「一応だ一応」

「分かりました」

俺の目でも見て回リたかつたし、無縁塚を歩いて回る。

一部が霧が濃いせいか……妹紅さん達の方が見えなくなるがそれでも進んでいく。

妹紅さんは誰も居ないと言っていたが……目の前に人影がある。

ああもしかしたら霖之助さんかもしれないな。と言うか他で見えてないしそうだろうな

「霖之助さ……?」

「……残念ですが貴方の待ち人はここから去ったわ」

「え?」

しかし霧の先から聞こえる声は女性の声だ。

その姿は霧で見えない……誰だ?

「どう言う事ですか?」

「言っただままの通りだけど?ここまで言っても分からないの?」

「……………それなら何処へ行ったのでしょうか？」

「そこにまで答える義理はないわね」

またか……………ただ知っているならそれを答えてくれないのはあんまりだろう。

「すみませんが教えてください」

「その前に貴方についてですが……………」

霧が徐々に晴れてくる。

その姿が段々と見えるようになってきた。

「ああすみません、俺の名前は……………」

「いいえそれは大丈夫。問題なのはそこではないわ」

「どういう事ですか？」

何を言いたいのか分からなくて戸惑う。
霧が晴れてその姿がくつきりと映った。
そして目に映る少女は口を開いた。

「貴方は些か業が深過ぎる」

t o b e c o n t i n u e d

k. 九十六話 黒に染まる過去～sin in black

「業……ですか？」

「はい、貴方は余程深く見える」

霧が晴れてまず目に入ったのは珍しいタイプの帽子である。

過剰な装飾と言わんばかりに金色の縁取りがされており光ってすらいる。

そのように堅苦しいかと思えば、まるで服かのようにフリル状にも見える。

ただしその帽子の下から覗かせる緑髪が彼女に似合っていると思わせる。

背は、少し低めに見えるが……それすらも気にさせないような威厳さを彼女から感じる。

「そこまで俺って業深く見えますかね？」

「余程、自分自身の事を気付いていないらしいわね」

犯罪をした記憶はないが、そもそもそれを言い出す彼女は何者だ？

「俺の事を知っているようですが、そこまで有名人になった記憶は無いのですが」

一部の人達は知っているかもしれないが、それでもごく一部でしか無いだろう。街を歩けば多くが気付くなんて事はありはしない。

「記憶が貴方と言う全てを物語っているのよ」

「記憶………？」

「………そう言えば貴方は記憶を一部失っていたわね」

「……………やっぱりそうなんですか？」

幽々子さんにも言われたが……………やはり自分は何か欠けているのか？と、誰かも知らない相手に尋ねる。

口ぶりから、もしかしたら記憶を失う前の知り合いだったかもしれないが……………

「ええ、貴方が持っている記憶は全てではないわ」

「そこまで分かっているって事は、知り合いだと思うのですが……………全く思い出せなくて申し訳ありません……………」

「いえ、私と貴方は初対面で間違いないわ」

「だったら何故俺の事を知っているのでしょうか……………？」

「浄玻璃の鏡と言う物を知っているかしら？」

「聞いたことはある気がしますが……思い出せません」

名前から特別な鏡である事は分かる。
ただしそれがどんな鏡かまでは……

「本来であれば死者を裁く為に使う物。しかし……奴から聞いたのだけど貴方は把握し得ない存在である為、急遽使わせて貰ったわ」

「死者を裁く……まさかそんな閻魔様みた……」

言葉が途切れる。そうだ、確か浄玻璃の鏡と言うものは閻魔様が罪人の過去を見るために持っていた物で……

「四季映姫・ヤマザナドゥ。私が誰なのかは……そうね貴方の思った通りよ」

「……」

閻魔様って地獄に居るのでは無いのか？

確かにここは無縁塚で死と隣り合わせな場所なのかもしれない……ただそれにしたって地上だぞ？

「それで……閻魔様は鏡を使い何を見たのですか？」

「貴方の今までの人生よ。行って来た善行も悪行も全て……死んでまた蘇る輪廻から逸脱している死に戻りと言う行為もね」

「……本物、ですね」

流星に死に戻りと言う存在を知っているものは限られるし。

前に知っていても他の皆のように記憶は消されているはず……幽々子さんは分からないけど。

なら本当に浄玻璃の鏡を使ったと見るべきだろう。

「疑っていたのかしら？」

「……流石に唐突に言われても信じ難い存在ですよ。死んでも居ないのに閻魔様が目の前に現れました！つて言う事は」

「……いい加減にしないと本当に輪廻に戻れなくなるわよ？」

「したくてしているわけでは無いのですが……」

一種の妹紅さん達のように死ねないに近い形であって。自分の力で……では無いと思う。

「と言うか閻魔様……何が俺が死に戻る原因となったのですか？」

「それすらも失われているの？……貴方自身が交わした事だと言うのに」

「はい申し訳ありませんが……え？今なんて？」

聞き間違いじゃなければこの原因は俺にあると聞く。

なんで？俺が何故死に戻りをする事に？

「……止めておいた方が良さそうね」

「なんでですか!!貴方は何を知っているんですか!!」

「……言うべき事では無かったわ」

「何を……見たんです？」

「今のままの貴方であれば徳を積み続ける事は可能でしょう」

「……そうじゃなくて何を!!」

「断言するわ。取り戻さない方がいい」

「……なんだよそれ」

俺は何をしたんだよ？ 思い出さない方がいい事までもをしたのか？

「それなら尚更過去を知るべきでは無いのでしょうか？ 同じやらかしを再発するわけにはいきませんし……」

「少なくとも、今の貴方に言うべきでは無い」

「……」

また情報を目の前にして立ち止まれと言うのか……？
何度も何度も……

「諦められません。叶わないと思っても」

「貴方の記憶を奪った存在がこの幻想郷に存在する」

「それは……一体？」

八雲紫……なのだろうか？

「その子には必要があるから、貴方の記憶を奪ったの。私が好き勝手言いふらすわけには
いかないの。見た所今の貴方はマシな筈よ」

「……それで納得しろとでも言うんですか？」

「納得するしないの話ではないわ。そうする必要があるからするだけなの」

「なら、何も知らないまま幾度も死に戻りを続けろと？」

「世界を混乱に巻き込むのはいただけないけど」

「何も知らないままならそうしかないでしょう」

……閻魔様に言われるなんて相当だが、本当に何をしたと言うのだろうか？
今が幸せだとしても欠けたままのモヤモヤは永久に消える事がない。
何より、知らないままならまた俺はいつまでも死に戻り続けるだけだろう。

「私から言うことはこれ以上は無い。小野寺蓮司、去るといいわ」

「こちらで勝手に探させて貰います。いつまでも死に戻るわけにはいきませんから」

「そこまで言うなら止めはしない。ただ貴方は絶対にまた……」

「こんな異変のようにも思える死に戻りを続けることは……もう……」

「異変……ね……」

「何か？」

「なんでも無いわ」

「そうですか」

「……来年は六十の時が巡る。精々罪を消せる程の徳を積むことね」

「……知りもしない罪を背負わされても困りますよ」

悪態を吐きながら来た道に戻って行つた。

思い出さない方がいいと言われた。

自分が何をしでかしたかの不安はある。

ただそれでも知らなければ対応も出来ないだけでは無い……また死んで巻き戻るそれが永久に続くだけだろう。

そんな事を続けなければ俺だって壊れる。

だからどんな最悪で罪深い過去でも知らなければならぬと改めて思わされた。

—————

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

九十七話 探し物は何処に～her ability.

また霧の中を潜り、妹紅さん達の方へ辿り着く……が何をしているんだ二人は？

「あの……」

「蓮司、戻ったか」

「助かった……」

「真面目に何があつたんです???」

「いや、私の能力は話しただろう？」

「探し物を探す程度の能力ですよね？」

もしかしてそれで妹紅さんが好き勝手やったと言うか……何か探索をお願いしたりしてやになったとか？

「……ああそうだ、ただ全く話を聞く気がないんだ」

「………どう言う事です？」

「だって、今までもずっと能力を使って探してただろう？それで見当たらないって事は掘らなきゃ始まらないだろうって」

「それは否定はしないが……」

周囲を見渡すとあちらこちらが穴ぼこだらけになっている。手当たり次第にやった感じか。

「ダメなんです……?」

「見れば分かるだろう?」

「いえ……教えていただけると……」

「失せ物ではないし、確かに能力では見つけれない事には気付いていた……だが、それでも何日も何日もかけて目印を付けながら少しずつ進めていたんだよ」

「……あー」

周囲を見て察する。確かにこれでは何処だか分からないか……

「ならいつそ全部掘つちまえばいいだろう?」

「土を置ける場所が無いに限るね……ちゃんと埋め直しておいてくれ」

「……すまなかつた、これが一番だと思ったんだけどな」

「悪気が無いせいで逆に怒れずに困っているよ」

良かれと思つては流石に違うが、彼女なりに考えた結果が空回つたのだろうな……
確かに全部掘っちゃえばいいじゃんは考えはする。

「そーいや蓮司。どうだった？」

「別の人はいましたが……探し人はいませんでした」

「むしろ他の人居たんだ。私が行つた時は居なかつたと思うけど」

閻魔様だし不死である彼女にはもしかしたら見えないのかもしれないが……そこは
分からない。

「その人が言うには去つてしまつたと聞きましたが」

「あちゃー遅かったか……何処か行ったかは？」

「分からないと」

実際は知っていたのだと思う。

しかし明かされなかった……だから自力や他の人を頼って探すしか無い。

「さつきははぐらかされたけど……ナズーリン、能力は人に使える？」

「物と人は違うとさつきも言ったはずだが」

「でもさつきの反応的には人とかにも多少は反応しそうだと思ったけど」

「本来の用途から離れているんだが？」

確かに妹紅さんは行けそうというが、ナズーリンさんの言う通りダウジングで人を探

すなんざ前代未聞だしなあ……

金属探知機みたいな方法だとしても反応しないし、どう見つけるんだって話になる。

「物は試しにって事もありじゃ無いかなんて」

「何故手伝わなければってさつきも言ったが……」

確かに無理だろうな……手伝わメリツトも無いしなあ……

そう思っているとナズーリンさんはこちらの方をチラツと見る。

「ただ……いつまでもここに居られるのはいい迷惑か」

「え？良いんですか？」

「もう一度言うが、いい加減一人で探したいからだよ」

「いえ……それでも有難い限りです」

「それで、その子の名前は？」

「……分らないです」

「は？」

ナズーリンさんに凄いい形相で睨まれた。
ただし仕方ない……分らないんだから。

—————

「名前が分からずに探して無縁塚まで来たのか？」

「はい、ここにいると思っていたので……」

実際は去ってしまった後だったわけだが。

「見た目は？」

「説明出来るほどくつきりとした記憶が……角があるくらいですかね」

「……」

改めて考えると、見た目も名前も分からない相手を探してつて凄まじい事を言ってるなど。

ただし……彼女は何か知っていそう。そう思い続けているが。

「何処であったの？無縁塚？」

「いや……実際に会った事は無いです」

「……誰かから聞いた？」

「夢で出会いました」

「……」

今、彼女には呆れられてる気がする……

「それは元々君の妄想の産物の可能性すらあるの分かってる？」

「……あり得るんです？」

「君は実に馬鹿だなあ」

「なっ……」

「見たこともないなら自分が会いたいような想像の人物を作り上げてるようにしか思えないよ」

普通ならそうなのかもしれない……

ただ、考えている彼女は本当に想像の中の生き物なのだろうか？

何より頭で浮かべていた無縁塚が実際にこうあったわけだし。

「蓮司。一先ず思い浮かぶ事を言ってみたら」

「思い浮かぶ事……」

「まあ、そう言うのがあった方がいいしね」

「背は……低めだったと思います」

「ふむふむ」

「それで……さつき言った通り角が生えていて、話した感じ嘘が嫌いそうでした」

「そもそも嘘吐かれて喜ぶ人なんて限られるよ」

「まあ……それはそうですね」

実際俺も喜ぶ人間はやばいと思うし。

「それで……それで……」

髪の色や服装が思い出せない……ぼんやりしている。

「これだけだと厳しそうなんだが……」

「まだ何か無いの？」

「思い出せ」

頭を捻る……何かを忘れ……

「思い出した」

「髪型？ 服装？」

「いえ、彼女は確か鬼だったはず……」

「……そういうのは先に言いたまえ地上の鬼は限られているんだ」

「すみません……焦りまして」

「まあいい、鬼だな」

能力を使って失せた鬼を探す、見つかるかは祈るしか無いが……決まってくれればいいな。

「見つけた」

「え？早く無いですか？」

「元から少ないし、ダウンジングが優秀ってわけだ」

「なるほど……」

「それで、何処にだ？」

「今は博麗神社にいる」

「博麗神社に鬼が居ていいんですか……？」

「分からないがあそこは寛容だしな、あり得るかもしれないな」

「霊夢さんはガメついイメージとかあるが、やっぱ優しい所は優しいんだなって思わされた。」

「ナズーリンさん、お陰様で助かりました。有難うございます」

「礼には及ばないよ、むしろ帰って欲しいとまで言ったしね」

確かにそうか、それなら早く出るべきなのだろうか？

とりあえず今日は帰った方がいいかもしれないな。

「それじゃあ霖之助さんを探しましょう」

「ん？協力要請かな？」

「いえ、純粹に一度戻るので。考える事も多いですし」

「成る程な、世話になったし後で改めてお礼しないとな」

「そうですね」

俺が出来る事はそこまでないかもしれないが、何かあつたら全力で手伝おうか。

「博麗神社……」

寄るのは久々だが、そこに鬼がいるなら行くしかない。

彼女は果たしてどう言った鬼なのか、何か知っているのか……様々な疑問を持ちながら一度無縁塚から帰る事を決めたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

九十八話 鬼に会うために Lots of prep
a r a t i o n .

本来であればすぐにでも博麗神社へ向かおうと思った。

しかしそれは霖之助さんに止められた。

何故かと言うと、霖之助さんが鬼は危険すぎると言ったためだ。

「行くなどは言わない。ただ無策すぎるのはあんまりだ」

「また移動でもされたらたまったものではないですし急ぎたくはあるんですが……」

「そもそもだ、ただ何も考えずに言ったって話してくれるわけは無いだろう」

「そうなんですか？」

「……君は他の種族を知らな過ぎる」

「……確かにそうかもしれませんね」

幻想郷を歩き回っているが、まだ半分どころかどの程度なのかすら分からない程だ。知らない種族もまだまだいるだろう。

「鬼、吸血鬼、神にドラゴン……いや幻想郷にドラゴンは今のところ居ないか」

「そこら辺の種族は危険だと……」

「当然とでも言うべきだろうね、出会ったらすぐに逃げるべきだ」

「それはそうですね……」

誇りが高い、と言うよりも独自のルールを貫き通す力を持った者達と言ったところ

か。

その点はレミリア達によって身に染みている

「先程も言ったが、関わるなどは言わない。だけど僕達は力が無い事を自覚して格上の存在達と付き合っていかなければならない」

「あれ？でも霖之助さんは？」

「確かに僕は半妖だが……力なんて君と相違ないよ」

「流石に勝てなそうですが……」

「所詮は例えだ。そんな物程度と思えばいい」

「分かりました」

「だったら、どうすればいいか分かるかい？」

「どうすればとは？」

「鬼や神など自分より上位の種に用がある場合だ」

「……貢物ですか？」

「惜しいが違う、何も知らぬ相手に唐突に貢がれたって怖いだけだろう？」

「確かに……それはそうですね」

「そう難しくはない……単純な事だよ」

「単純な事……多分上司とかそう言った考えがダメだから……」

「興味を持ってもらう、ですか？」

「その通りだ、それが難しい事なんだがね」

霖之助さんの言う通り難しい事なのは分かる。

殺された身だし、興味を持ってもらうために何をしなきゃいけないかは難しい。

「ただ、その点まだマシか」

「何がですか？」

「鬼の好きな物……分かるだろうか？」

「……喧嘩？」

さとりさんも喧嘩が好きだって言ってたな。

「いや……違うだろうよ。と言うか君は喧嘩したいのかい？」

「したく無いですが……となると酒ですか？」

「それであっている。むしろすぐ出ると思ったが……」

「酒の知識無いですし。何より鬼って自前で良質な酒あると思っていましたので……こちらがって考えはなかったです」

「だから喧嘩を手土産には相当な頭だと思いが……」

「そうですね……即死んで終わりそうです」

「私は死なないし出来なくは無いけど……出来ればしたく無いな」

妹紅さんが会話に加わり始める。

いくら不死だって痛みや苦しみがあるのは分かっている。

「安心してください。浮かんだだけでする気もさせる気もないので」

「そうしてくれると助かる」

「しかし酒ですか……」

「私は少しは知ってるけど、正直鬼が満足出来るかは不安だな」

「いえ、あると無いじゃ大違いですが……」

「そもそも全部飲んで残ってなかったな！」

「……あつはい」

そうするとどうしたものか？

紅魔館ならワインテーゼワインは何本もあるだろうけど……

幾らかかるか分からない……予算超える可能性も十分にあるし。

何より鬼って日本の妖怪だろうからワインが合わなかったらどうしようなども考え

る。

「……仕方ないね、こちらで仕入れておこう」

「有難うございます」

「いや買うんだからね？」

「……破産しない程度の額なのでお願いします」

「これで数日すれば届くだろう」

「数日……待たなければならぬのが辛いですが」

「印象を悪くして、酒も受け取ってもらえなきや最悪だろう？」

「そうですね……」

「だから我慢したまえ」

「……その間にそれ以外の品も揃えますか。霖之助さん何を持っていけばいいと思いますか？」

「豆以外ならなんでもいいんじゃないか？」

「……それなら適当に……いや適当はよくないな」

「僕からのオススメとしては」

「オススメあるんですか？」

「他の物を考えた方がいい」

「他の物って……なんですか？」

「簡単な話だが、君が用があつたのが鬼では無かつた場合だ」

「……そんな事あるんです？」

「僕はナズーリン君の能力を目の当たりにした事はないしね。それに君だつてくつきり浮かべたわけじゃないし鬼に似た何かの可能性だつてあるだろう？」

「確かに……」

「だからそう言った時のための物を買うといい」

「成る程……確かにそうですね」

「菓子とかがいいと思うよ。鬼には不満だろうが、鬼の場合は酒で十分だし。鬼で無くとも酒でいいなら済む話だしな」

「ああ飲めない人にはって考えるとその方がいいかもしれないね」

「ここで売っていたならば儲けられていたが……うちの店はまあね……」

流石に香霖堂には甘味は売っていない。

むしろ売っていても怖くて買いたくないが……

「それじゃあ数日バイトしたりなんだりで時間を潰してくれ」

「了解しました」

中々スムーズには行けないなと思いつつも、着実に目標へと進んでいる。

鬼だと思われる少女はどんな妖怪で、何を知っているのか、そう思いながら出会う日を待ち続けるのであった。

九十九話 妖精とお地蔵様
o r r o w . p r a y f o r t o m

「ちよつと！何してるのよ!!」

「何をしているって……バイトですが？」

「暇があったら来るって話だったじゃない」

「今バイト中って言ったはずなんですけどね？」

「バイト？それがどうしたのよ」

妖精は本当に気楽だなと……

確かに働く妖精は少ないだろうけど、紅魔館の妖精達は働いていたぞ？

「働いているので後にして下さい」

「えー、やだやだ」

「……どうしたものか」

自分から酒が届くまで雇って下さいと言ったのに行くわけにはいかないし。
と言うか何するかも分からないのが怖い……

「また来てるのか……」

「あつ霖之助さん、皆揃って来てるらしいですが」

「客なら大歓迎だが……彼らは本当に客か悩ましいな」

「……」

絶対に買う気はないのは分かるが……店も店で売る気がないような？
何を言うのが正しいのだろうか？

「はあ……すまないが彼女達の相手をしてくれないか？」

「え？相手って？」

「……店を荒らされても困るし森に行って対応してくれ」

「バイトは？」

「……彼女達を置いておく方が面倒だ。給料は出す」

「いや、それはそれで問題なような……」

「どうせ居たところで大して変わらないしな」

「いや、それは霖之助さんが商品売らないからですからね??？」

そう言いつつ荷物を片付けて森へと向かう。

本当にいいのか？サボリでは無いとはいえ色々……

「ほら早くー！」

「分かりましたって」

そうやって話しながら森の中へとまた入って行った。

いい加減アリスさんの家方面も覚えて来たので無事目的地へと辿り着いた。

—————

魔理沙さんはまだ帰って来てないんだろうけど……前にこの子達に会って翌日な気

がするんだけどなあ。

「何するんです……?」

「かくれんぼがいいな」

「……サニーさんの能力を使わないなら」

「えー、なんでー!？」

「見つけれないでしょう……」

「じゃあ私じゃ無くてルナの」

「……そもそも名前すら初めて聞きましたが嫌な予感がするんですが」

「あつそつか。私以外名乗ってなかった。ほら二人とも」

「ルナチャイルド。周りの音を消す程度の能力だから大した事ないわ」

そう名乗った妖精は。オレンジ髪のスニーさんとは違って、髪は金髪だ。

服もまるで昼を思わせるスニーさんとは正反対のような白をベースにリボンなど所々がルナの名に恥じない夜を表しているようだった。

「つとと言うか……あの時霖之助さんの姿が見えないと思っていただけ、声が聞こえなかったのは君が理由か」

「そうよ、音を消したの」

「姿が見えずに音も聞こえない……行方不明になった人は探せなそうだ」

あの時声が聞こえたのは油断していたからだろうか……

「当たり前じゃ無い、絶対見つかるわけないわ」

「それはかくれんぼの趣旨に反している気がするんですが……」

場所を使って隠れるもので、能力を使って隠れるのは色々と違うだろうと。

「それで君が……」

「スターサファイア。能力は動く物の気配を探る程度の能力」

「ちよつと待て！」

「安心して、動かなくても生き物がいるかどうかは判断出来るわ」

「……かくれんぼするべきじゃないでしょうこれ」

鬼をやった瞬間一瞬で終わりそうなスターさんは黒髪に服は青色だ。服は夜空と星の土台を強調しているのだろうか？よく分からない。

「じゃあどうするのさ」

「能力の無い俺でもどうにかなるのだと助かりますが……」

鬼をやっても隠れても貧乏くじ引かされるのが目に見えているからなあ……

「じゃあ木の実を取りましょう」

「……この森には無かったはずでは？」

「あるわよ。入り口付近には無いけど」

「色々と何故と思う事だらけですが……」

「人間達から盗み聞きした話だと、子供達が迷い込まないようらしいわね」

「迷い込まないように……」

確かに、入り口付近に木の実などが生えていなければ子供達はそれ目当てに森に入ったりはしないか……

そうなると可能性を潰せる上では強いな。

ただ……そのせいであの時空腹で困ったんだけどさ……

「つてわけで木の実の場所へ案内するわね」

「……と言うかさりげなく自分達の必要なもの取らせようとしてません？」

「だってしようがないじゃん、人間は森のもの食べられないし」

「そうなんですか？」

「と言うか一月前は孢子が酷くて人間じゃ森に入れない程だったからね？」

「……大丈夫ですが、今はなんですぬこれ」

「もうキノコの季節も終わったし、お兄さんでも大丈夫でしょう。大丈夫だし手伝ってって」

「……分かりました」

あの約束をしていなければ断ったかもしれないが約束したしな……
そのまま森へと潜り木の実を取り続けた。

「このくらいでいいかしら」

「本当に遠慮無く行きましたね……」

「どうせ私達以外は食べないしね。いいでしょう」

「確かにアリスさん達も木の実を食べてなかったですが……」

「だから今日一気を取っておくの」

「その理由は？」

「私達だけだと大して持てないからよ」

ルナさんが自慢げに答える。

ああ俺が荷物持ちなんですね……

渋々とそのまま目的の大樹まで運ぶことになった。

「有難う。これで暫くは取りに行かずに済むわ」

「確かに……木の実なら保存ききますでしょうし、これだけあっても大丈夫そうですね」

「それじゃあお礼代わりに木の実を持って行ってください」

「……食べられないのでは？」

「……」

「ちよつとどうするの」

「これ渡しちやダメでしょサニー」

「だって他には……」

何やら三妖精が騒ぎ出した。給料は出るとはいえタダ働きでしたは嫌だが……

「ちよつと待つてなさい!!」

「あつああ……」

そのまま三匹は家へと帰って行った。

取り残されて暇だと辺りを見渡すとお地藏さんがある。

「そう言えばここに来る前にも見かけたな……」

人間が通る場所ではあるまいし、それでもあるんだなと。

「徳か……」

徳をお地藏さんに祈るものではないだろう。だからそうでは無くて、鬼と言う存在に会うわけだし少し安全祈願をと。

「お供物は……明日持ってこよう」

明日には霖之助さんも届くと言っていたし、博麗神社に行く前に改めてお参りだけして行くでしょう。人里で甘味も多めに買ったわけだし。

「生きて帰れますように……」

散々無謀な事をやっておいて今更な気がするが……それでも無事を願って。

「何してるの？」

「お祈りを」

それから少ししてお祈り中に三匹は帰って来た。
手には瓶を抱えている。

「それは……？」

「果実酒よ。本当は皆でこつそり飲んでたんだけど……これくらいしか渡すもの無くて」

こつそりつてどうやって入手したんだ？

もしかしたら作ったまであるのだろうか？

「そうは言っても俺は未成年で……」

「ミセイネン？」

三匹が困惑した姿をする。

そう言えば未成年って概念は無いのか……そうだよな。

「大丈夫これは飲みやすいから。ダメならあげてもいいし霖之助さんも喜ぶと思うわ」

「分かりました……」

皆には悪いけど……俺は流石に飲むわけには行かないし、持ったままなのも外の世界での認識な以上あまり良く無い。

仕方ないから霖之助さんに……

「あつ」

「どうしたの？」

「いえ、有難うございますって」

「……そう」

果実酒は喜ぶかは分からないけど、お酒の種類を霖之助さんが仕入れた一種類だけで考えるのは良く無いと。

もしかしたらこう言うのが好きかもしれないって……選択肢が多い方がいい。

「これも安全祈願なのか？」

「安全祈願？」

「ちよつとお祈りしたんですよ」

「なるほどねえ」

もしかしたら、さつき安心を願ったからこそ……こうやって高いアイテムが入ったのかもしれない。

違ったとしてもそう思うことにしようと、お地蔵さんに向けて礼をするのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百話 罪と忘却 from now on.

「それじゃあ博麗神社でいいんだよな？」

「その前に魔法の森へ行ってもいいでしょうか？」

「構わないけど、何する気？」

「お地藏さんを見掛けたので折角だしお供えしてこうと」

「別に構わないけど……今更感無くない？」

「それはそうですが……供え物買いましたし……」

「本当にお前さあ……ピクニックじゃないんだからしつかりしなよ？」

「……そうですね、気を張らないと」

「それじゃあ行くよ」

「いいんですか？」

「いいって言ったじゃん。それに神頼みでもするだけマシだろうしさ」

そのまま森へと潜って行くが、予想以上にお地藏さんが多かった。

流石に多めに買っておいたのもあったから足りたが……少しはご利益があればとも思ってしまう。

「つとこれで全部だね」

「妹紅さん有難うございました」

「しかし……こうやってお供物をするのもいつぶりだろうか」

「うん？」

「神様じゃ無くて輝夜が悪いのは分かっているけどさ……それでも神様のこともその頃から信じられなくてさ」

「……事情も知らずに、俺は」

「いや、今言っただけど恨む事はないしな」

「それでも、思う所はって考えますと」

「と言うかだ、死んだら仏になるって話あるけど私は不死だから死ねないし、生涯神や仏に関わりなさそうなんだよね」

「確かに……それに加えて竹林で過ごしているわけですし関わり無さそうですね」

「まあそれでも、友人の助けになるって事なら祈って損ないだろうなって」

「いい心がけね」

「うん？成美さんですか」

「なんで意外そうな顔してるのよ」

「いや、森に住んでいるのは分かってましたが……」

「言ったでしょうよ、私は地藏だって」

「……全部見ていたって事ですか？」

「何を言ったのかまでは分からないけどね。お供えしていたのは見たわ」

「成る程……」

少しでもマシになれば良いな程度に思っていたが、こうなるなら、恥ずかしいような有難いような……

「それで、ここまでするって事は何か願いに来たの？」

「安全祈願と言うか……そう言った感じですよ」

「遠くでも行くの？」

「鬼に……会いに行くんです」

「は？」

当たり前前と言えば当たり前だが……また驚かされている

確かに俺もアリスさんや霖之助さんとかが鬼に会いに行くって言えば驚くしな……
妖怪の山の時だつてそうだ。

もしかしたらあの時と同じ鬼だつたりするの？

「自殺願望は感心しないわよ」

「いや、自殺願望では無いです」

「だったらなんで……」

「……全部では無いですが自分は記憶喪失らしいんです」

「そうなの？」

「はい……それで、思い出せない記憶に無縁塚とその鬼が居たんです」

本当に合っているかは不安だが、鬼でサーチされたし合っているとは思う

「……だから会いに行くと」

「はい。危険だとは思っていますし、だからこそこうやってお参りに来たわけですが」

「だからって、万能じゃ無いわよ」

「一応、お酒とかは用意したんですけどね」

「正直馬鹿な行動としか思わないけど」

「……まあ、それでもって事で」

今更言われてやめるなら、正直とつくにやめているしな……

「流石にこれだけ供えられたら何もせずに戻すつてのは主義に反するわね」

「それは有難いですが……何を？」

「私は生命を操作する魔法使いだからね。前に言った貴方の死にそうなの命操らせてもらおうわ」

「どう言う事で……」

「本当は弄るのは良く無いんだけどね……でもこのまま連れて行ったとかだと死にそうだし……」

心臓を掴まれるような苦しみがある。

なんだよこれは……痛みで死にそうだ……

まるでそれを拒絶しているかのような……

「ちよつと……」

「どうしました……？」

痛みで胸を押さえながら返答する。

「おい、蓮司に何するつもりだよ」

「蓮司さんはせめて消えかかってるようなその命を増幅させようとしたのだけど……まさかの反発されたわ。貴方、本当に死んでるんじゃないの？」

「そんな筈は……」

死に戻りしているし、それはあり得ないだろうと……死人がもう一度死ねるわけ無いだろうし。

「一応、強めにやるわ。先程の感じから苦しいかもしれないけど……」

「ちよつそれは……」

制止の言葉も聞かずに身体がぐしゃぐしゃになるような感覚までする……
鋭い痛みにも命を失うんじゃないかと思いかけたが……なんとか生きては……

…

「よう蓮司、酒をちゃんと持ってきてくれたか？」

「ここは何処だ？ いや無縁塚だ。」

ただ無縁塚に今いた記憶はない筈だが。

「はい、萃香さん。ただ萃香さんのお酒の方が上質だと思いますが」

あれ？俺が喋ってる？……と言うよりも俺がいる？

と言うかだ……萃香さんって前にやっぱアリスさんが言っていた人物のような？

「それじゃ、呑もうか。待ってたんだぞ」

「だから呑めませんって言ってるじゃないですか」

「酒は呑まないって本当に真面目だなあ……」

あれ？この言葉は確か前に何処かで聞いたような？

「年齢が……ってか萃香さんのそのお酒はそもそも人間じゃダメでしょう!!」

「まあこの酒は人間が呑めたものじゃないし仕方ないけど」

「分かってますよ、ああもういつも通りクラクラします……」

「酒の匂いだけで酔ったって？弱いな本当に」

「萃香さんが強いだけでしょう……」

そのまま普通の会話が続いて行く。

これが実際にあつた事なのか？

「それで蓮司、○が言つてたんだが本当なのか？」

あれ？今なんて言つた？聞き取れなかつた……

「本当ですよ。幻想郷で○○○○○○○ます」

「あー、はいはい……いつもの酔つた大法螺だろう？」

頭が痛い……何かが禁止されている。

禁止つてなんだ？何を禁止されているんだ？

「いや俺が【禁止されている】……だからこれだけは嘘じゃないんです」

「はっはっは、これだけは嘘じゃないって」

「そうしないと、俺が……」

だんだん言葉が遠くなって行く……

聞きたい筈の言葉が聞き取れない。

そうしないとなんだよ俺。

「鬼に誓ったその言葉、忘れるなよ？」

最後に何処かで聞いた筈のその言葉を聞いて目を覚ます。

「蓮司、大丈夫か？」

「妹紅さん……すみませんが気を失ってました」

「無事なら良いんだ」

「ごめんなさい、流石にここまで反発されると思わなかったわ。人間の筈なのに不安に

なるのだけど」

「俺は人間ですって……」

少なくとも妖怪でも幽霊でもない。その事に自信を持っている。

「大丈夫身体への負担とか、余計な事とか無いかしら？」

「身体の負担はともかく余計な事って……？」

「無理にでも生命力をこじ開けたみたいだから、リミッターみたいなものが解除されて無いかと」

「リミッター……」

もしかして禁止が何か分からないけど、そのリミッターが少しだけ剥がれて先程のような物を見たのか？

それならやはりあれは過去の……

「今日は霖之助に無理言つて一日休むか。そこのせいで身体がキツそうだしよ。」

「いえ、妹紅さん。そのまま行きます」

「大丈夫なのかよ」

「ええ、むしろ今は生命力に溢れていますから」

「なら良いけど」

「それに萃香さんは気紛れですから、いつ居なくなるか分かりませんし」

「萃香つて……」

「伊吹萃香、地上の鬼です」

「ちよつと待つて!!流石にそれは危険じゃ無い!？」

流石に成美さんもその危険性は分かっていたか……
でも大丈夫な筈だ。

「あの人は忘れていませんよ」

「……前にマジで会ったのかもしれないが確証は？」

「鬼は嘘を吐きませんから……俺は忘れて嘘を吐きましたが」

今でも思い出せない。だからずっと彼女に嘘を吐き続けている事になる。
彼女が一番嫌う事だと言うのに。

「だったら……」

「全力で謝って、全力で思い出します」

閻魔様は思い出す事が罪だと言う。

またするかもしれないから。

記憶を消した人物は前の俺がしていた行為を嫌ったからだろう。

俺は記憶を無くす前に誰かと契約して幻想郷で何かをやらかしたんだ。

「思い出す事は罪でも、忘れている事は彼女を騙し続ける嘘を吐き続ける事になる。それだつて罪だ」

それは良くない。これから何をすべきかもその記憶の中にあるかもしれないから。

記憶を思い出して、今度は同じ事をしないようにしないといけない……

「……こうなったら幻想郷に来たのも意味があつてのことかもしれないな」

「何か言つた？」

「いえ……」

最初は幻想郷に拐われたとでも思っていた。

だがこうなつて来ると何かをしようとして自分から来たまであるかもしれないぞ……

当然その事全てを萃香さんが知つていとは思えないが少しずつ思い出していけば良い。

「まあ……まずは話す事だな」

鬼が嘘を吐くわけ無いから、忘れないと思ひ込んでいるが……アリスさん達のように、特別な事情があつて忘れているかもしれない。

逆に覚えていても今度は俺が明確な嘘吐きだし機嫌を損ねて会話すらして貰えないかもしれない。

根気良くやる事になるだろうなと思いつつ、博麗神社へと向けて歩き始めた。

—————

n e x t e p i s o d e s

次回は101話では無く、あらすじに近い100話までの簡易的な流れとなります。

く鬼と嘔吐きく

百一話 神社にてくbad impression.

博麗神社に最後に来たのはいつぶりだろうか？

紅魔館に来る前か……本当に久々だな……

「何の用？」

「あつ霊夢さん」

「………参拝客？」

そうか、博麗神社には来たけど……あの時は霊夢さんと会ってなかったな。
今回はまだ初対面なのか。

「いや、少し異なるのですが」

「理解出来ないわね。この神社には何も無いわよ」

「自分で言うんですか……」

「賽銭泥棒とかしに来たところで何も無いからねって」

「する気はないですよ……」

「と言うか博麗神社の賽銭箱は異変を解決してると言うのに……相変わらず入ってないんだろな……」

「少し会う人がいまして……」

「……妖怪退治は今休止中よ」

「え？」

「それとも異変解決？流石に今は異変が起きてないと思うけど」

「そうでは無くてですね……」

「蓮司、お前の行動が異常なんだから……話さないとどうにもならないぞ」

妹紅さんに注意される。確かに博麗神社に会いに来たつて事はそうなるか……

「萃香さんに会いに来たんです」

「はあ？」

驚かれるのは予想出来ている。

ただ博麗神社から去ったと言う事は無いだろう。

「巫山戯た事言ってるんじゃないわよ」

「いや、真面目なんです!!」

「ただの人間を会わせられるわけないでしょうが」

「そのために私も来てるんだよ」

「えっとアンタは……輝夜と同じ感じがするわね？蓬萊人？」

「輝夜と一緒にすんな!!」

「妹紅さん落ち着いてください……」

悪気はないのは分かるが、妹紅さんの逆鱗に触れてしまったせいで暴走しかける……
何というか……ツイてないな。

「楽しそうね」

「いや霊夢さんのせいで大変な事になりかけてますが……」

「知らないわよ」

「……そうですね」

「とにかく……そこのが不死なのは分かったけど、アンタはそうじゃないでしょ？」

「それはそうですが……」

「うちの神社が血の海になるとかはほんと勘弁して欲しいの」

「それは分かりますが……そこまで危険ですか？」

「鬼ってそんなものでしょうよ」

少なくとも、喧嘩好きなのは分かるが……

あの時の記憶はそこまで乱暴者には見えなかったが……

「宴会やお酒好きなイメージが強いですが」

「は？ 萃香と知り合いなの？」

「一方的かもしれませんけどね」

「なんか煮え切らないわね……」

「最悪が起きても、私達の自己責任って話だから」

「それが許されないのが博麗の巫女なのだけど？」

「大変なのは私だって分かるけどさ」

「それ以上に神社が壊れそうなのが嫌って言うてるんだけど？」

「まあいいじゃん」

「ちよつと萃香?!」

神社の境内の方から萃香さんが歩いて来た。

あの光景で見た姿と瓜二つだ、間違いない。

「それで、アンタが私に用があるって……」

「ああお酒を……」

持ってきたお酒を取り出そうとする。

「要らない」

「え？」

「帰りな」

「……」

それだけ言うと萃香さんはまた境内の方へと戻ろうとする。

「すみませんでした」

「……何をだ？」

「それを思い出せないんです」

「……また明日来い。今日は気分じゃない」

「……………分かりました」

「今度は破るなよ」

「……………はい」

それだけ言い残して完全に境内の方へと戻って行つた。

「大丈夫か？」

「大丈夫かって何もされてないですが……………」

「いや、気圧されたりとかだよ。正直私でもキツかったしな」

「ああ……………冷や汗は出ましたが……………大丈夫です」

「大丈夫ですじゃないわよ、アンタ萃香と本当に何があったのよ!」

妹紅さんとの会話中に霊夢さんが混ざってくる。

「何があったって……大体今の通りですが」

「鬼相手に嘘吐いたの?」

「吐くつもりは無かった……は言い訳ですね。嘘を吐きました」

「馬鹿じゃないの? 殺されたっておかしくない事を……」

「記憶を失っているんです」

「……はあ?」

「彼女と確かに忘れるなって約束をしたんです……ただそれを思い出せない……嘘を吐

「いってしまったんです」

「それって事故じゃ？」

「事故でも約束ですから……それでもまだ何も無かっただけマシなんでしょうけど」

実際に嘘でも吐こう物なら、舌を引き摺り出されていたかもしれない。

「それで？わざわざ萃香を何故怒らせに来たの？」

「その忘れた記憶を思い出す事と……忘れた事を謝りたかったから」

「忘れた事自体存在を知ったのは朝の事だ……今までの間ずっと裏切っていたんだ。」

「やっぱり、さつき思ってた通り無謀じゃない」

「……」

「それでどうせこの後も続けると……」

「続けますし、明日来なきやまた嘘を吐く事になりますから」

「……万が一神社に何かあったらしっかりと修理しなさい」

「……それは、そうですね」

「はあ……壊されるなんて無いで欲しいけどね」

「気を付けます」

「と言うか蓮司を鬼に会わせていいのか？力づくでも止めてくると思ったが」

「……止めたら間違い無く萃香が暴れるしね……それよりはマシよ」

「壊さないように……気を付けます」

これで壊そうものなら本気で何が起きるか分からないな……

「それで、ん」

霊夢さんが手を差し出してくる。

「ここで握ったりする不埒はぶっ飛ばされるのがオチか。」

「お賽銭ですか？」

「いや、酒。持つてるでしょう？」

「これは萃香さん用に……」

「知らないわよ、飲まなきややってられないの」

せがまれ続けた為、観念して酒瓶を取り出した。

給料代わりに貰ったとはいえ、俺は酒飲めないし……どうせ果実酒は流石に萃香さんが呑むようにも思えないし、霊夢さんが使ってくれるのが一番だと。

「はあ……不幸だわ」

そう言いながら霊夢さんは溜息を吐く。

第一段階は萃香さんには最悪な印象が付いてしまったが、記憶があるだけ良い。

もしかしたら嘘吐きだって記憶だけかもしれないが何も無い無関心よりはマシだ。

最悪な印象でも当初の予定通り興味を持ってもらう事は出来たのだから。

「……………ここからが本番だ」

階段を降りながら明日こそはと決意するのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百二話 去年の事を言うと鬼は怒る～demon
a t h .
w r

「正直、良く逃げなかったと言いたいが」

「……そもそも逃げるなら博麗神社に会いに来ないですよ」

「それもそっか」

萃香さんは見た感じは笑顔に見えるが、汗が止まらない。

明らかな作り笑いのせいか、殺意を向けられているよりも恐怖を感じる。

「どうした？ 怯えたような顔をして」

「いや怯えては……」

「ん？」

「……」

強がりを言い出すところだった。正直昨日はアレだけだったのにニコニコ笑っているのが分からなすぎて多少怯えてはいるしな。

「……ん？」

「どうした？」

「いえ……」

嘘を吐く……のは鬼相手にするわけにはいかない。

だからって正直に言えば、何かと言い張って話はここまでになるだろう。

……もしかして詰んでる？

「おーい大丈夫か」

「はい、なんとか……」

「気分が悪いなら……」

「そう言えば萃香さん！昨日も言いましたがお酒持ってきました!!」

「……話を逸らす気だな」

「……」

どっちみち詰んでる気がするにで許してください。
嘘を吐くわけには行きませんし。

「まあいい、そこで拘っても仕方ないしな」

助かった……気がする……

「それで、これ？」

「……萃香さんのお酒に負けそうですが、それでも良いものを選んだ筈かと」

霖之助さん任せとは言え、流石にダメな酒を用意したりはしないだろう。

萃香さんの酒自体がヤバいものだが……これだってタチの悪い酒では無いはずだ

……

「負けるもの用意されてもなあ」

「そもそも萃香さんの酒自体が上質すぎるんじゃないですか……」

「へえ、よく覚えてるじゃん」

「あやふやですが……それ以上に酒の印象が強過ぎたので」

「ふーん」

酒の話聞きながら飲み干す……え？飲み干した!?

「一気ですか……!?!」

「何か？」

「いや……驚いただけですが」

「これくらい普通らつての……」

「バリバリ酔ってるじゃないですか……」

「へーきへーき」

話は通じるのだろうか？

酔って覚えてないとか言われたらどうすれば良いのだろうか……？

「……と言うか本当に覚えてないんだな」

「すみません……」

「まあ今のお前も面白そうだけどさあ」

「面白そうって言われて喜んで良いのか悪いのか……」

やっぱりと言うか……萃香さんは覚えているのか……

「良いんじゃないの？ どうせ記憶が無いならそれが今のお前だし」

「いや、忘れてるから今こうなっているんですよ……」

「別に良いんじゃない？ 嘔吐きなんてどうでも良いし」

「おい、流石にそれは」

「ちよつと、今私と蓮司で話してるんだから邪魔しないで」

妹紅さんが話に入ろうとするが、萃香さんがあつきりあしらう。

「いや……そうは言ってもだな」

「……鬼に対して約束したんだ。その覚悟は分かっているだろう？」

「……分かっています」

「なら、私から言う事は……」

「幾ら何でもじゃ無い？」

「霊夢……お前には特に関係無いじゃないか」

「そうは言っても昨日に今日にあれだけ大声ならこつちからも少し言いたくなるわよ」

「だったら何を言いたいんだ？」

「昨日の話からして彼は記憶喪失なんですよ？」

「それはまあそうだな……」

「だったらイレギュラーじゃない、それにいつまでも拗ねても仕方ないでしょう？」

「いや、拗ねてるわけじゃないんだが……」

「だったらいいじゃない」

「……良くない」

「……はあ、確か小野寺だっけ？」

「はい、そうですが」

「根気よく出来る？」

「どう言う事です？」

「ほんつつつつつとうに嫌だけど暫く通わないところになった萃香はどうしようもないわ」

「……」

「今日はこれ以上話さないだろうし、暫く通って話よ……神社壊したら怒るけど」
「いいんですか？」

「正直な話、事情を聞きたいのだけどね」

「事情って言われても記憶が……」

「そうじゃないわよ、なんで今記憶を戻したがるの？」

「少しだけ……思い出せたからです」

成美さんのお陰で少しだけ思い出せない記憶が戻った。

「忘れた記憶を思い出したいのは普通なのでは？と思います」

「それはそうだけど……本当にそれを思い出すのがいい事なのかしらってね」

「……………どう言う事ですか？」

「記憶喪失には種類があるからね、自分の嫌な過去から逃げる様に忘れる事だつてある」

「……………」

間違いなく自分の過去はそう言った類のものであると思う。

だからこそ思い出すなと言われたし……………」

「そうだとしても、自分の過去から逃げ切る事なんて無理ですし。なら知りに行つた方がいいですよ」

「そう……………」

「結局思い出せない事が幸せだったとしても……………逆に言えば忘れた時に何か不幸だったことがあつたらそれを忘れちゃいけないって……………」

「取り返しのつかないことでもか？」

「萃香さん？」

「……」

それ以上は何も言わなかった。

取り返しのつかない……？そこまでヤバいことしたの俺……？比喩だよな？

「だったらその償いをしないとダメかもしれないですし……」

「本当に……」

「ん？」

「本当に何も覚えてないのがよく分かるな」

「萃香さ……」

そのまま萃香さんの姿は見えなくなる。

消えた……？魔法使いじゃなくて鬼だよな？

「能力まで使うつてどんだけ話したくないのよ……」

「能力ですか……」

「まっ来るなどは言っていないし一月でも半年でも通い続けなさい」

「……半年？」

「償いなんでしょ？」

「そうですが……」

それまでに何も無いといいが……

地底や妖怪の山などあちこちの異変が起きるかもしれないって場所の話は紅魔館や
魔理沙さん達には話したし気には掛けてくれると思うが……

ただそれでも異変はいつ何処で起きるか分からないしな……

「……あ」

「何？」

そう言えば霊夢さんも異変解決の巫女だったな。

「いや、異変が万が一起きた場合はと」

「唐突に何よ……」

「起きた場合ってだけですよ……」

「そうそう起きるわけ無いでしょうが」

もしかしたら萃香さんは永遠に許してくれないかもしれない。

それは俺のせいだから仕方ないが……それでも忘れた事は思い出したい。自分の過去の問題を探りたいから。

終わりどころか道筋すら見えないが……一歩ずつ進める事を祈りながら頑張る事にした。

t o b e c o n t i n u e d

百三話 今年の事を言うと鬼は答えなく demon

silent.

最初の出会いから一週間くらいが経った。

今だに萃香さんから事情は聞けてないが、少しずつマシになっていつている。

「来たのね、萃香は相変わらずよ」

「いつも通りならまだマシですが」

「あらそう？事態が変わらずに嫌になってそうだけど」

「流石にいつもの感じなら話は聞いてくれるかな……とは思ってますし」

「知らないわよ？明らかにいつも不機嫌そうだし」

「来るなどは言われてないんで」

「強情ねえ……正直私なら償い切れたと考えるけど」

「いや、許されてませんし」

「一生かかっても知らないわよ」

「俺のために言ってくれているのは分かるんですが……それでもです」

「別にやりたいなら止めはしないわ。ただもう冬な事を理解しておいてね」

「了解です……」

11月ももう終わりを告げる、冬に入ったと言っていていいだろう。

いい加減、神社への階段を登る最中に手も悴んでくる。

「分かってます……」

心配と神社を滅茶苦茶にされたくない心境が混ざっているせいかな、本気で危惧されている。

意地の張り合い……とは違うが……

「最悪寒いなら私が火を出せば良いんじゃないの？」

「境内燃やそうものなら全力で退治される気がします……」

妹紅さんの言葉に霊夢さんがギラリと睨んでくる。

皆本気では無いんです……

「あっじゃあ行きます!!」

その場に居座るのも心境的に辛くなり、境内の方に居る萃香さんの方へと向かっていった。

「萃香さん来ましたよ」

「……酒は？」

「そう何度も持ってきたら破産しますって」

「なんだつまらない」

「お酒が好きなのは分かりますが勘弁してください」

「……またそれも嘘かもしれないけどな」

「嘘じゃ無いですって……」

少しずつ話してくれる様にはなったかも知れない。

ただし本題に入ろうとすると聞く耳を持たずだし……どうすればいいか。

「……」

酒に頼れば口を開いてくれるかもしれない。

ただ相当な量になる……それにそれじゃあ解決になつたとは言い辛いし、なにより懐
が消える。

「萃香さん……」

「……」

力尽くは違うと思う。しかし、もう少し強ければなと思う。

こう言う時こそ全部吐き出すために喧嘩が出来ればなのかも知れないと。

ただし……この普通の肉体じゃ一撃で死ぬのがオチだ。

「話す事はない」

「……どうしてもですか？」

「そもそも知る意味がない。今のお前には関係無いだろう？」

「いや、過去でも自分に変わりがないですから」

「……強情だな」

本当だったら妖怪の山で思い出せたかもしれない……でも思い出そうとして止められた。

永夜の中でも忘れた何かに触れられたかもしれない……ただ肉体が耐え切れなかった。

何度も逃している……

「第一お前は償いたいんじゃないのか？」

「勿論、忘れた事も……やらかした事もどうにかしたいと思っています」

「どうにかねえ……」

悩む様に萃香さんは頬杖をつく。

「自分がどう言う事したと思ってるんだ？」

「予想出来ませんね……」

悪事、と言ってもピンからキリまである。

流石に殺人などはして無いだろうけど、それでも多い。

「この幻想郷でやってはいけない事ってなんだと思う？」

「やってはいけない事ですか？」

いつもと違う切り口に驚く。

ただ……やっつてはいけない事だつて？

「盗みや殺人……嘘を吐くとかですかね？」

「まあそうだな……盗んだりする魔法使いはいるがあれはダメだし、殺人もダメだからスペカルールがある」

「やっぱりそ……」

「だがそれは人間のルールだ」

「え？」

「それがダメなら妖怪は外の人間すら食べないしな」

「あれは妖怪達が好き勝手にやってるんじゃない？」

「いや、そもそもルールに定められていない。流石に里の人間を襲うのは禁止だけだな」

「里襲ったら大変ですしね……」

「そのように、人間には人間のルール。妖怪には妖怪のルールがある」

「一緒だとは思っていませんでしたが」

流石に妖怪にもルールがあるとは思わなかった。

「それで……そのルールがどうしました？」

「人間には人間のルール、妖怪には妖怪のルールがあるように……逆が許されるわけはない」

「逆が……許されるわけではない？」

「人間が妖怪のルールでやるわけにはいかないし、妖怪が人間のルールに従うわけがない……」

「そうだな」

「それじゃ俺は妖怪のような事をやったとかですか……？」

誰かを殺した……？そんな事を俺がした可能性があるのか？

「どうだろうな」

「え？」

「そこまで言う気はないよ」

そう言いつつ話が途切れる。

急な話だったが、どう言う事なのだろうか？

「……」

忘れる、だけじゃなくて人間ではならない事をした？

大した事がないなら里で怒られるくらいだし……それなりのレベルの事を？

「分からないです……妖怪の真似事をしたのか……？」

「……さあどうか、正直今を捨ててまで思い出す事とは思えない」

何度目かの警告、今の方がいいのは完全に分かった。

「興が冷めた、帰ってくれ」

「……」

こうなってしまうと、萃香さんと今日これ以上話すのは無理だろうと諦めた。
ただ、帰り際に先程の気になった事を思い出す。

「……妖怪のルール」

これはあり得ない仮定だ、俺が殺人並みにする事とは思えない。
ただし……一人の言葉を思い出した。

『パチエが言うには……私は唆されたらしい』

「大丈夫……仮定だ」

「何がだ？」

「いえ……」

異変は妖怪が起こし、人間が解決する。

それが普通であって、逆ではならない。

ただ……俺はまず異変を起こす理由が無い。

「他にも色々……」

異変の脅威は身をもって知っている。それなのに他人を気にせず起こせるか。
わざわざ自分を危険に晒してまでする事とは思えない。

「だが方が……」

それが本当だったらどうすればいいんだろうなど。

あくまで想像の域であってくれと願いながら……今日は神社から降りていった。

—————
t o b e c o n t i n u e d
—————

百四話 来年の事を言うと鬼は笑う～demon laugh.

二週間は経つただろうか……去年の今頃には雪が降っていた気がする。
春雪異変もあったせいで、去年の雪は非常に長く感じた。

「最近になってやっと萃香さんと話せるようになってきてるな……」

呆れられているだけかもしれないが、それでも前進したつちや前進したんだ。

「飽きないわね本当に……」

「霊夢さん……飽きる飽きないの問題じゃ無いです」

「まあそれもそうね」

「通い続けますよ」

「本当に……何も無くて良かったわ」

もう完全に大丈夫と思っているのだろうか？

確かに最初に比べて命の危険を感じる事は減ったが。

「それじゃあ失礼します」

そのまま境内の方へと向かう。

「……」

「心配してないんじゃないのか？」

「妹紅……何の用よ？」

境内の方を不安げに見る霊夢に妹紅は話しかける。

「いや、偶には話そうと思つてな」

そう言う妹紅の手には酒瓶がある。

「……アイツを放つておいていいの？」

「流石にもう大丈夫だと思つてるしな。偶には私だつて気を抜きたいんだよ」

「まっただ酒を貰えるならいいけど」

「それに、聞いちゃいけない事な気もするしな」

「そこまで話すかしらねえ」

「さあな。ただいちいち気にしたって仕方ねえしな」

「乾杯」

外気は寒いにも関わらず、石に座りながら二人は呑み始めた。

「あつちは酒を呑んでるのに、持ってこないってどう言う事だ？」

「いや、色々とおかしく無いですか？」

最初にいい酒を選んだ事もあって、最初以降は持って来れていない。

安酒何本の方が良かったのだろうか？分からないな。

「まあいい、次は用意しておけよ」

「辛いですね……」

そのようなたわいもない話から……と言うかいつも通り酒の話から始まる。
萃香さんは出来上がっているが、俺も匂いで酔っ払いそうだ。

「なあ蓮司」

「どうしました？」

「お前はどれだけ覚えてる？」

「どれだけと言われましても……萃香さんと会った事以外殆ど記憶が無いですよ」

「ああ、そうじゃ無くてだ……お前自身がどんな人間かって話だ」

「……え？」

「前のお前からも聞いたが、今のお前からも聞きたいしな」

「それは構いませんが……」

「それに、目的については喋ってたけど……自分の事はそこまで話したがって無かったし」

「……よくそれで俺の話の話を聞きましたね」

「私にとっては面白そうだったしな」

「一体何を企んでいたんだ……と言いたくなりますね……」

過去の俺に疑問を持ちつつ、自分自身について考える。

ただの取引相手だとしたら……信用が必要であり、尚更覚えている事が必要な関係だし……忘れたってどんだけだって話になるか。

そして……俺についてか。

「正直、記憶が残っていない部分は話せないのですからね……」

「それで構わない」

「分かりました」

外の世界の事は正直覚えていない。

だから外から来た人間だと言う事だけを話した……詳しくは話せないし。

それについては聞いてないものの、最初から予想がついていたらしいが……そんなに分かりやすいものかな？

「それで……特異体質なんです……」

死に戻りにしても改めて話した。

これが一番俺を悩ませている原因でもあるから。

「……改めて聞くともう呪いレベルだなそれは」

「……身に染みんでいます」

今は生きたいから良かったが、あの時の俺は何度死んでも元の場所に戻るだけだったし……地獄にも思えた。

「そのために色々な奴と出会い、異変を解決して来た」と

「いや……解決出来る力はないので完全にはお願いしていませんが」

「まあそこは重要じゃ無いしな」

「重要そうな気はしますが……」

誰がやったとか言った責任や成績は重要そうだが……

「それで残された記憶頼りに、妹紅と一緒に私の元を訪れたわけか」

向こうで酒を呑んでる妹紅の方を向く。

本当に……飲み始めるまでお酒持って来てた事気付かなかったな。

「そうですね……あると思わなかった、過去を知るために」

「そんな大事か……？」

「死に戻りの原因があると思っっていますし」

「あー……ある。ただ私も詳しいわけじゃ無いが」

「やつぱり……記憶だけじゃ無くて、それさえもですか……」

「ただ死に戻りの何が嫌か分からないがな」

「何故？」

「……死に戻ったって事は、死に戻らなきゃそのまま死んでたって事だろ？」

「それはそうですが……」

「後がなくなるだけだぞ？」

……言われている事は理解出来る。

死に戻りの保険が無きゃ、ただ野垂れ死ぬだけかもしれない。

「それでもです」

「……納得させてみる」

「今は12月ですが、その12月を超えられるか分からない。原因が分からないなら探

りにいけない……何かあつたら何も得られぬまままた巻き戻しです」

「そしたらどうなる？」

「来年……いや未来に進めません。いつまでもそこで止まったままです」

前に言っていた事だつて真実だ、だが何も知らずに死に戻るのなら未来へ向かつて進むことが出来ない。

不老不死と同じでそう言ったのに憧れる奴はいるかもしれないが誰しもがそうでは無いのだ。

「成る程ね、未来のことをが理由か」

「こう言う時は来年の事を言うと鬼が笑うでしたっけ？」

「なんだそれは……」

「あれ？すみません」

流通していない言葉らしい、選び方を間違えたか？

「だがそうかそうか、酒飲んで笑ってる方がいいしな。……来年の事を言うと鬼は笑うか」

そう言いながら萃香さんは笑い始めた。

笑顔を見たのは今の俺では初めてかもしれない。

「本当に文字通りに笑うとは思いませんでしたが」

「いいじゃん」

「構いませんが」

そのまま笑い続けた。文字通りってよりも言葉に対して萃香さんがそれに付き合っ

ているだけのようにも思えたが……

「覚悟出来てる？」

「覚悟？」

「聞く覚悟だよ」

「……勿論、何があろうと俺は俺ですから」

かつてしでかしたことによる償い、過去にやった事についての事柄、他にも未来に進むために死に戻りについては分からないかも知だが過去の行動を知らなければと。

「分かった、お前の覚悟は受け取ったよ」

「萃香さん、それじゃあ！」

「ああ」

皆の決意は決まった。自分のした事が閻魔様が言うように罪深いのだろうか？

永遠亭でレミリアに言われた、あの過去が存在したりするのであるのか？

それを含めて知らなければいけない事だらけだ。

自分自身を落ち着かせながら。萃香さんが口を開くのを待つ。

そして意を決したように萃香さんは口を開いた。

「蓮司、お前は……」

t o b e c o n t i n u e d

百五話 過去の事を言うと人は死ぬ～curiosity
killed the cat.

「蓮司、お前は異変についてどう思う？」

「異変についてですか？多くの人間や妖怪に影響を及ぼすとか……妖怪が起こすとか」

「ああ、その通りだ。妖怪が起こすんだ……」

「そこまで言われて理解する。」

「ああやはりそうなのかと……」

「異変を起こそうとしていたんですね……」

「ああ、その通りだ」

「理由はなんなんですか……?」

「詳しくは聞いていないんですが……」

「やっぱりか……目的しか話してないと言われたし、大して話してないんだな。」

「証明したいからとは言っていた」

「証明したいから?」

「どう言う事だ? 誰かに脅されていたとかでは無さそうなんだが……
むしろ逆にも思える。」

「その事を詳しく聞きたいんですが……」

「……」

「……なんで話さなかったんだ自分」

「……紅魔館に行くとは言っていたが」

紅魔館にか……レミリアが言ったように一度俺は訪れていたのかもしれない……
それだけじゃ無い、恐らくは幽々子さんの反応的に白玉楼にも……

「……いや、どうだ？」

「どうした？」

「いえ、少し考え事です」

白玉楼にそもそも行けるわけがない気がするが……色々と謎だらけだな。
少なくとも幽々子さん達と何処かで出会ったのだろうけど……

「しかし異変ですか……」

「目的はあるだろうけど……言われたことだけじゃ私もなあ」

「目的が……」

「証明したいからと言ったって正直今の俺には分からない。そもそも異変を起こすことと何かを証明することなんて出来るのだろうか？」

「……今の蓮司は」

「起こすわけがないですね……理由も原因も分からないですし」

「そうしてくれるなら助かる」

「賛成側だったのでは？」

「あの頃ならともかく、一応私も懲らしめられた立場だしな。またやるって言われると少し面倒だった」

「あー……そうですね」

萃夢異変を起こし止められた鬼の少女。

それ以外の記憶のせいですっかり忘れていたが……確かに異変を扇動したみたいに扱われると困るか。

「……も神社ですしね」

「だろう？　そう言う事だよ」

異変を起こした原因……それも探らないといけないか？

「……からは私の推測だがいいか？」

「勿論、聞かせていただけけるなら」

「多分……アイツが関わってると思う」

「アイツとは？」

「八雲紫。名前は聞いた事あるだろうか？」

「あります……」

頭の中で何かがつつかえたように感じる。

……本当に、過去の自分は知っているんだなと思わされるように。

「アイツが何かを提案した。そう思っている」

「……聞いた話じゃ大妖怪の筈ですが、こんな一般人に関わるんですかね？」

「多分契約が関係している」

「契約？」

「死に戻りの関係も紫だと聞いたが……お前はアイツと何を契約した？」

「何を契約したって……」

そんな事言われても思い出しようもない。

当然彼女が嘘を吐く筈がないから少なくとも俺がそう話したのだろうけど。

「契約……」

ダメだ……全く思い出せない。まだまだ謎が残っている。

「……ただ……そうですね」

「なんだ？」

「その記憶喪失が……異変と共に治るとしたら」

「……何故断片的なのかは分からないが」

「でもそんな気がするんです」

俺は何かを忘れ、思い出すために異変を起こし始めた。

生きるためには……忘れてると命に関わる？

時折夢のように見るものは……それと同時に異変解決を告げられるのは一体……

「と言う事は蓮司の記憶を奪ったのも」

「八雲紫さん……？」

「あらあら、随分な物言いですわね」

「!？」

慌てて声のする方を振り向くと、空間が割れている。

これ……何処かで見えた事があるような？

そう驚いていると中から金髪の女性が現れる。

彼女が……八雲紫なのだろうか？

白い帽子に、全身は自分の名前を表すかのように紫色に染まっている。

「なんでもかんでも私がやった、私がやったと酷くありません？」

「紫、全く無関係な訳でも無いんだろう？」

「ええまあそれは。しかし彼の記憶喪失には私は関係ありませんわ」

「記憶喪失……スキマ……」

「そうだ、確かスキマとさえいえば……」

「アリスさんの脳に埋まっていたと言う奴……」

「ええまあそれは……ですが前に言った通りです」

「前に言った通りって……何も思い出せないんですが……」

「思い出さなくていいですわ。貴方が何故異変を起こそうとしたのか……そんな事は些細な事ですもの」

「些細な事って……こっちは必要な事で」

「本当に私のせいでは無いですが、記憶喪失のお陰で助かってますわね」

「さつきから何を……?」

「……そうですね……貴方達の言葉で表すなら知り過ぎたでしょうか？今はまだその時ではないのに」

その話に答えずに、ついには恐ろしい事を言い始めた。

「その時って……」

「知る必要はありません。ついでに言えばこれ以上覚える必要はありません」

「貴方は何を……」

カンカンカン

突如久々に聞いた音がする。

この音は電車の音……しかしなんで？

「良き旅を」

「え？」

「蓮司!？」

スキマから電車が現れる。

近くにいた萃香さんも、紫さんが現れて慌ててこちらへと近寄って来た二人も間に合わない。

「……なんで電車が?！」

そのまま猛スピードで蓮司を撥ねる。

身体は割れた筈なのに……まだ意識がある。

これが……死んですぐは生きていられると言う感覚なのだろうか？

「紫、貴女何を？」

「霊夢、ごめんなさいね。これはしなきゃいけない事なの」

「しなきゃって、人間を殺していい訳ないでしょうが」

「大丈夫か!？」

霊夢さんの怒号と、妹紅さんが慌てて駆け寄るのが分かる。

もしかして……まだ俺は元気なのか？

「生命操作を受けている？ならちようどいいでしょうか？」

生命操作？ああ、成美さんのか。

だから本来は即死の筈が、まだ四肢が砕けても意識はあるのか。

「一つだけ私から」

「そんな話はどうでもいい。さっさと蓮司を治せ」

妹紅さんの怒号も聞こえる。

……ダメだ、成美さんのお陰で生きていられると思っただが、意識が遠のいてきた。

「どうせこの世界は幕を閉じます。今更貴女が怒ろうと関係ないのよ」

「何を言ってる!!」

「小野寺蓮司」

妹紅さんの問いかけには答えず、こちらへと話しかけて来る。

「確かに死に戻る原因は私ですが……それを望んで契約したのは貴方ですよ？」

何を言ってる……

俺が何故これを望んだって言うんだ？

「これ以上は知り過ぎです、すべき事はまだまだあります」

彼女の言う事は全く理解出来ない。

「続きは、もつと異変を解決してからにしましょう」

異変を解決する事に何かがあるのだろうか？

意味なんて無いんじゃない？

「前の貴方も滑稽で好きでしたが。今の貴方の来世をもつと期待しています」

そう言うとスキマの中に潜って行く。

手を伸ばそうとするが、既に伸ばす手はない。

「ああ」

ダメか、ダメなのか……

油断をしていた気はないが、唐突に現れて殺されるようなヒットマンみたいなものは流石に警戒していなかった。

謝らなきゃいけない人は沢山いるな……ただ動けないし来世しかないか。紅魔館だつて、地底だつて……行かないと。

覚えててくれればいいが、流石にそれは望み過ぎか……

「……蓮司すまないな、余計な事を言い過ぎた」

萃香さんは何も悪くない、知りたい事が知れたから。

しかし……異変探しか。また大変そうだ。

次は何処で起こるか、考えようにも思考が曇つていき、魔法で無理やり生きていた肉体は……停止した。

この世界はまた消え、巻き戻った世界へと繋がる。

く太陽の畑編く

百六話 向日葵畑と妖怪くdanger apparition.

ここに戻って来たのは本当に久々だな。

肌寒い感触に冬を思わせるが……時は進んだのか？

「今から春雪異変とか言わないよな……」

気にした所で仕方がないか、行くべき場所に行こう。

「………続きは異変をもっと解決してから」

これから異変が起きる事を知っているのか？

或いは異変が俺に何か関わって来るのか、どっちみち分からないな。

「……自分で探るのは目を向けられてるのか？」

そんなんだったらいつそ教えて欲しいが……そうも行かないか。

「まずは萃香さんのもとへ……」

歩き出そうとするも、地面に穴が開く。

「え？」

気づくのが遅れ、踏み込む筈だった脚は踏み外し態勢を崩したまま穴へと落ちて行く。

「え？これは……」

色や形状を見るにスキマだろうけど……何が目的だろう？
結局態勢を戻す事が出来ずにスキマの中へと落ちて行った。

「なにが……目的なんだ？」

しかし誰も答えるまでもなく、地上へと落とされる。

一体ここは何処なんだ？

「連れて来たんなら何処かくらい言っただ欲しいが……」

当然だが既にスキマは無くて話を聞いていないと分かる。

……ひっそりといえるかもしれないが。分からないし仕方ない。

「何処だ……は？」

改めて確認するが何処かも分からない。

広大な大地が広がっている事だけは分かる。

「これじゃあ戻れずらしい。現状は詰みに近いか」

本当に何も無いな。人里からも離れてそうだが

「なんだこれ？」

最初は黄色に目をとられていて何だか理解をしていなかった。

ただ……少し落ち着いて周りを見ると違和感に気付く。

「つと……え？」

なんだこれ？向日葵……記憶が正しいならもうすぐ11月だよな？

唐突な向日葵に目を奪われながら色々と考えていると、近くから足音と殺気が感じられた。

「花畑に何か用かしら？」

「ああごめんなさい。何かするつもりではありませんでしたが」

「私にそれを信じろとでも？」

「……」

一目見た時は人間かと思つたが……明らかにオーラのようなのが人間ではないな……流石に妖怪だろう。

俺へと注意して来た妖怪は、視線が向日葵畑の方へと向いている。

この妖怪が管理人なんだろうか？

ここに送り込まれたとは言え急にいた相手側も驚くよな……

「どつちみち侵入者は始末しないと」

「待つてくださいい!？」

明らかに上位の妖怪だ……レミア……それ以上かもしれない。

このままだと無条件で殺されると不安しかないが……どうしたものか……

「事情があるんです」

「事情ねえ」

少しだけ落ち着く。話を聞いてくれるだけマシかもしれない。

「でも……」々命乞いしてくる人間の話を聞くのも面倒ね」

「ちよつと待つてください」

どうすればいいか分からず両手を上げる。

しかし額に傘を向けられる。

「送られたんです!!」

「へえ、誰から?」

「八雲紫……大妖怪からです」

確信は無いけど絶対に彼女だよな……

違ってたら……謝りはしない。

「へえ、あの妖怪が肥料でも用意したのかしら?」

「肥料じゃ無いです……」

「しかし面倒ね……」

「口が過ぎるかもしれませんが……何がでしょうか?」

「……言う必要もないのだけど。あの妖怪が関わる以上貴方を送り込んだ意味があるのよね」

「……」

正直何も話されていないし意味があるとも思えない。

ただそう言えはあつさり殺される気がする……ならば言う事はできない。

「……生かしていただけるなら人里の場所を教えてくださいいただけますでしょうか？」

少し震える声で彼女に尋ねる。

少なくとも面倒って話だし、追っ払えるなら互いにそれでいいと思うが……

「ダメに決まっているでしょう？」

「え？」

「本当に面倒だけど……あの妖怪が何か企んでいるならそれを利用させてもらおうわ」

「つまりは……?」

「死ぬか手伝うか選りなさい?」

「……」

もしかしたら一度死んだほうがいいかもしれないが、ただ……また次回も送られそう
な気がする。

「何を手伝うんですか?」

「花畑の管理よ。冬だから一人よりはマシだわ」

「冬なのに咲いている方が驚きなんです……」

「気にする必要はないわ」

「……分かりました」

改めて一面を見るが明らかに広い。

見るだけでも大変なことになりそうだ……

「逃げ出そうとしたら……分かるわね？」

「……はい」

幻想郷で速い妖怪達は見えて来たが……流石に脚が速いとは思わない。

ただ……平時から威圧されているようだし、逃げるとなると脚が震えて無理だろうな
これ……

ただ……ある意味これ奴隷になるんじゃないか？

「……よろしくお願いします。小野寺」

「いらないわ」

「え？」

「貴方の名前なんてどうでもいいもの。花が枯れないように見ていればいいわ」

「……分かりました」

今更なんだが神だったりしないか？

神だから高圧的とかだったり……分からないし答えないだろうなあ。

「花には勝手に触れないでちょうだい。正直そこまで信用してないから」

「花が大事なんですわね」

「見て分からない？」

「よく分かります」

これだけの花を咲かせ続けているし花が大事なんだろうなって。花の妖怪や神だとしても本気で大事にしているのだろうと思う。

「あの……」

「まだ何か？」

「……住む場所や食事はどうすればいいでしょうか？」

正直必要なものはそれ以外にも存在するが、生きて行くのに最低限必要なものだけをまず尋ねる。

「ああ……そう言えばそうね。人間は面倒だわ」

「すみません……」

正直俺も被害者なんだが……そんな事は彼女にはどうでもいいだろうし。

ただ冬間近で外で寝るとか言われても凍死するし……何より急に妖怪に襲われたりするかもしれない。

「小屋があるから勝手に使いなさい。食材は用意しておくわ。料理が出来ないとか言われても知らないけど」

「少しなら……出来ますので」

「ああ、火を使ったら殺すから」

「……」

花畑に近いのは分かる。ただ冬間近で火気厳禁は本当に辛いんだが。

「他の妖怪とか出たら？」

「そんな命知らずがいるなら花の肥料にしていいわよ」

「……」

本当に強いんだなって……これなら妖怪達も近寄れないのかもしれない。

「……何かあったら言いなさい」

「分かりました」

怖いけど……少しは話の分かる人で良かった……

「それが巫山戯た事だったら覚悟してもらおうけど」

「……分かりました」

話が分かる気がするけど……それ以上に不安も感じるのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百七話 苦勞だらけの新生活く don't e s c a

p e .

目を覚ます。もしかしたら昨日までの夢じゃ無いかと。

当然だがそんな甘い現実はないのだが……

「身体が痛いし……何より寒い」

小屋の中で目を覚ます。隙間風は入らないものの、毛布すらも無かった。

家の前に置かれた食材で料理を作るが……火が使えないのつてやっぱり不便だなと

……

そもそも……冬とは言え自宅の前に食材が置きっぱなしなのもまずくないか？

「文句は言えないんだが……」

その後は朝食を取り花畑を見て回る。

正直一日で回り切れる大きさじゃない。

外周だけでも果てしない距離なのに、中に入り込み一本一本見ていればどれだけの量になるのだろうか……それに関しては花に触るなど言われて助かったかもしれない。

「……昼でもだいぶ冷えるが」

ただ……これだけ向日葵があれば、風の通りが悪く、北風で凍えたりはしない……温度が低いから結局は寒いんだが。

「ただ……これだけ向日葵咲いてると、だいぶ季節感狂いそうだけどさ」

本当は夏ではないのかと思いつながら向日葵を回りきる。

回るだけでもくたくただが……部屋の中に鍬を見つけたので少しだけ耕す事にした。

「正直作業なんてやった事ないけど」

当然だが上げるだけでも精一杯で綺麗に掘り起こすことが出来ない。
と言うか痛いし辞めたい。ただこれしてないと冷えるんだよな……

「流石に花に触るわけでも無いし耕して気分が悪くなるとは思えないだろうしなあ
……」

いや……この惨事は流石に怒るか……

まともに耕せてないもんな……

少し真面目に鍛えた方が良くもしれない……

「逃げられもしないし、適応するしかないよな」

「あら？逃げられるなら逃げる気なの？」

「……滅相ありません」

唐突に声をかけられ、声が上がりにながら返事をする。

見かけても話しかけてくると思わなかったし……

「まあ、逃げたいって思うくらいならどうでも良いわ。逃がさないけど」

「どうぞどちらに行けばいいかわかりませんし逃げた所ですがね……」

捕まる捕まらない以前に、場所が分からないのに逃げた所でどうなるかわからない。食住は安定してるしまだ大人しくしていた方がいいと思う。

「まあ言った通りそこはどうでもいいわ。問題はそこじゃない」

「……何かありましたか？」

「……何してるのよ」

「耕しています」

誰が見ても耕しているようには見えないが……そう言う意思は一応あるので……

「花に触るなど言っただけけど？」

「触っていません。新しい場所を耕しているだけで……」

「……これで耕しているつもり？」

「……いずれは」

当然だが耕している判定には入らない。

そこは現状は見逃してください。

「勝手にやるなって言いたい所だけど……こんな事も出来ないの？」

「力ある無い以前に鋤を初めて持った人に完璧に出来るって言うのは無理ですよ」

里で生活した事はあつたが、教養があつたため經理の方に回されたし……あの時皆から農業を少し学んでいた方が良かったかもしれない。

……農業と一緒にしたらこの妖怪にぶん殴られそうだけど。

「……耕したければ勝手にしなさい」

「いいのですか？」

「花は多く咲いている方が良いもの」

「それならどんどん耕せば……」

現状が少しはマシになるかもしれない。

紫さんがこの場所に連れて来た理由は前からの発言的にここかその付近で異変が起きるかもしれないから。

そうなった場合……彼女の助けがないと何も知ることのないまま死にそうだし……

「あのねえ……」

「どうしました？」

「この土に花を育てろと言うの？」

「……すみません」

花を好く以上、その環境に徹底して拘るんだろう……彼女が満足する土壌を作れるようになるまでどれだけかかるのか。

正直それまでにこの場所を去るか死ぬかとなりそうとしか思えない。

「流石に勝手にしろって言ったし耕すのを辞めろとは言わないわ」

「有難うございます」

「じゃあ、好き勝手にして」

「あの……」

「まだ何か？」

こちらから話されるのが気に食わないのか睨まれる。

正直ここまで恐怖を感じるのとは無いは言わないがそうそう起こらないはずなんだが……

ただ言わなければならぬ。

「……風呂つてありませんか？」

「……は？」

「…………助かった」

五右衛門風呂に近いものだが、よくこんなものが作れるんだなと。

流石に道の上を歩き続けて、鍬を振るって泥だらけだし……水なんざ浴びるわけにも
いかないし……

魔法で炎を出さずに一瞬で水を温めたな……正直熱いし調整が出来ないのが難点だが、最初水しか使えないと思っっていたしマシか。

「温め直しが出来ないんだが……」

一度冷めてしまったらどうしようもない。

冷めてしまったのでもう一度とか言いに行く度胸もないし……

「茹でる……は流石に不味いし蒸すくらいか」

風呂のおかげで流石に食材をそのまま入れるわけにはいかないが、上で蒸すことくら

いは出来る……暖かいものが食える。

外の世界はともかく去年は相当恵まれていたなあと。

「アリスさんは本当に女神なんじゃないかって」

……そう言えばアリスさんは何処かに向かった筈だが、今はどうしているのだろうか？

記憶が戻りつばなしなら、違和感に気付くかもしれないし……

「現状は知ることが出来ないけど……」

また怒られそうな気しかない。

今回ばかりは俺何も悪くないんです……信じてください。

「それに遊んでるんじゃないやなくて異変を探して……いるのかな？」

異変が起きるかもしれないがあくまで仮定だし実際には何故ここに送られたのかが

分からない。

ただ……絶対ここじや自分の過去について探れないし……それだけかもしれない。それだと少し困るが……

「現状は……少しでも信用してもらえたら何か情報が入ると信じるしかないかな」

このまま時が進んでなんの成果もないじや笑えない。

異変を解決してからと言われたしあちら側もそれを望んでは居そうにないが……

「まずは……鋏を振るえるようにしよう」

鋏を振るつた事を思い出し、燃え上がるよりも疲れが来て寝かけたがギリギリ起きられた。

「……あれ？脅威は去ったと思ったけど。もしかして通常時でも今まで以上に命の危険なんじゃ？」

t |
o |
b |
e |
c |
o |
n |
t |
i |
n |
u |
e |
d |

気付くのは遅かった。

百八話 獰猛、時に慈悲く tough for me.

始めに言っておくが、やったのは俺じゃない。

ただし原因は分からない。

気付かれれば命の危険に及ぶし、どうすればいいのか分からない……

「花が……」

向日葵の花が一本折れて枯れている。

しかもよりにもよって耕していた土地の近くだ……他の人が見れば犯人と言われるだろう。

「ただ……言わないわけにはいかないんだよな……」

それこそ黙っているわけにはいかない……命がまず危ないし。自分がやっていないなら黙っていれば犯人になるだけだ……

「向かうか……」

彼女の元に……余計な事で来るなどは言われたが、これは余計な事じゃないし大事な
ことだよな……？

「……正直行くのが怖いんだが」

普通に怒る人ならまだいい、ただし余計な用で怒るなら話は別だ。

ただ……じつとしていても仕方がないと諦めて報告へ向かう事にした。

「何があつたんだらうな……本当に」

根を掘ってしまったとかそういう事はない、そこら辺は命に関わる事だから必死に気を付けていた。

「さて……行くか……」

観念して回れ右して足を進めようとする。
未遂だったのは真後ろにいた為だが……

「……」

「違うんです」

「へえ」

「自分では無いです」

「ここの周りは掘り起こされているようだけど？」

「そうですが……気を付けました」

「アンタの土造りがダメだったって可能性は？」

「それだと他の花もダメなような」

「それもそうねえ……」

土を耕して花がこうなつたはまず違うと思う。
流石に妖怪が命知らずの事をするとも思えないが。

「……」

ただ……それを信じてくれるかと言えば別だ。

正直……怪しまれるよなあ……

「……他に原因があるとすればなんだと思ってる？」

「……原因ですか？」

「分からないってだけなら貴方が犯人だけど」

「……妖怪はどうでしょう？」

「その妖怪を見たの？」

「見てないです……」

「ならしそうな妖怪でもいる？」

「……そんな命知らずの妖怪がいるかは不安ですが」

「……」

自分で自分の首を締めてる気がして来た。

やったわけじゃ無いのに、やった気が……

「……………退いて」

「あつ分かりました」

意地を張る理由は無いしそこを退く。

プロに見てもらった方が現状は分かるだろうし。

「……………ふーん」

「何か分かりました……………?」

「黙ってなさい」

「……………はい」

苛立った顔でまるで花達に何か語りかけているかのように話している。
花と会話ができるのだろうか？

「やってちょうだい」

「え？」

彼女がそう話すと一部の花が動く。

ちよつと待つてくれ……そんな事も可能なのか!?

全ての花がこうなるのならば、確かにこれだと逃げられないって言葉が分かる。

「……………これね」

そう言った彼女は土の中から何かを発見する。

目を凝らして見てみると……土竜？鼠？

正確にはよく分からないが、小動物の様だ。

「土の中に居たんですか？」

「ええ、食い荒らしたわけでは無いけど。散々荒らしてくれたわ」

「動物の仕業でしたか……」

確かに何も考えない妖怪は居るかもしれないが……流石には来ないだろうしな……

その点動物はそう言った点も感じにくいのかもかもしれない……だから無謀にも忍び込んだのだろうか？

「あの……すみません」

「何？今機嫌が悪いのは分かるでしょう？」

「気になった事があったので」

「そんな気になる事なんてあったの？」

「花と……会話したのですか？」

「は？」

「いえ、会話した様に思えたので……だからすぐ分かったのかなと」

「会話は出来ないわよ、花と友達では無いもの」

「違うんですか？」

「能力であって好きな物であって……友達では無いわ。それは違うでしょう？」

「そうなんですかね？」

「そうよ」

「ならば何故俺がやったのでは無いって思ったんですかね……？」

てつきり花から聞いたからだと思っていた。

それなのに確信もなく花を動かしたし。

「言う必要はないでしょ？」

「いえ……今回は流石に命懸かってたので聞きたいですが」

気紛れだとか言われたら正直運が良かったとしか言いようがないし……ただそれくらいしか理由が浮かばないし……

「……毎日土を耕しているのでしょうか？」

「はい……残念ながら成果はまだ薄いですが……」

「別にそもそも貴方には期待してないわ」

「……まだ暫くかかりますしね」

「態々しなくてもいい上、面倒な事を一々やる人間がわざと怒らせる事はしないでしよう」

「……そう言われるとそうですが」

だからと言ってそう信じられる物なのだろうか？

こちらとしては有難いが……

「以上よ、ちゃんと他に無いか探しておきなさい」

そう言いながら彼女は荒らしていた動物を逃がす……え？逃がした？

「荒らされたけど逃がしていいのですか？」

「別に、もう二度と来ないなら何かする気はないわよ。害意があつて来たわけじゃ無いのだし」

予想外の結果で驚いたが……その手心少しでもこちらに無いかなつて……

「手心を加えて欲しそうな顔ね」

「……声に出した記憶はないのですが」

「顔って言ったでしょう？」

顔見て分かる物なのか？正直驚いたが……

「そもそも貴方は私の視点では不法侵入者なのだけど」

「……そうでした」

そう言えば急に降って来た立場だもんな……

「今回は状況的のだけど貴方を信じきつてはないわ。信用して欲しいならもつと役に立つ事を覚えなさい」

「分かりました」

正直な話、何かをやらかせば命乞いしてもまだ簡単に死ぬ立場であろう。

レミリア達や萃香さん達よりも獰猛だろうし。

ただ……それでも心は残虐では無くて慈悲はあるみたいだ……

「ただ……成果を出さなきゃ速攻でクビを物理的に切りそうだけど」

……ちよつと畑作業をもつと頑張ろうと思った。

もつと信用してもらえない様に。命を散らさない様に。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

百九話 更なる侵入者 only confusio
n.

「寒い……」

季節は十二月を迎え既に昼でさえも出歩きたく無い程だ。

そう言えば前世は十二月に辿り着けなかったし……前よりは先に進んだのか。

「早めに回らないと……日が暮れるまで歩き続けたく無いし」

足を早め白い吐息を漏らしながら回り続ける……つとあれは。

「帰りなさい。貴方の様な妖怪が来る場所では無いわ」

「ひいつ!？」

脅された小さな妖怪が畑から出て行く。

最初の頃は殲滅でもするかと思ったが、そんな事はないらしい。

「全く……最近太陽の畑に侵入者が多いわね」

「ここは太陽の畑って言うんですか？」

「……関係ない話はして来るなど言ったはずだけど？」

「今居る場所は重要だと思えますが……」

名前すら知らなかったが……太陽の畑は聞いたことがある。

確か人里の南の方だった様な……

「知ってどうするの？逃げようとも？」

「滅相もございませぬ。即死する未来が見えていますので」

花が全て彼女の能力で動くのだから何度も言うが無理だつて……

「貴方が来てもう一ヶ月は経ったわね」

「そうですね……最初に比べると体力も付いています」

流石にもう鍬に振り回されたりはしない。

雨が強くて出れなかった日を除けばずっと振つてたしな。

「一月経って何も無かったわね」

「……結構努力したつもりでしたが」

「貴方の努力はどうでもいいのよ」

「……」

酷い……と泣きたくもなるが、今話してる事自体が違うのだろう。

そうは言っても約二ヶ月前に異変が起きたばかりだしすぐ起きられても困るのだが。

「紫が落としていつて、何かがあると思ったけど……見当違いかしらね？」

「それは……俺も分かりませんが……」

「……いつその事私が異変を起こしたほうがいいのかしらね？」

「……無理して起こすものでも無いと思いますが」

と言うか異変を起こして勝てる人間がいるのか？

俺も起きた異変はどうにかしたいと思ってるが……彼女が相手だと無理な気がするんだが。逃げたくなる

「まあ確かに……暇潰し以外に起こす理由がないわね」

暇潰しで異変を起こすつてのは流石に勘弁して欲しい。

「それに……異変が起きたら花畑がどうなるか分からないのではと思いますが」

「は？」

「いえ……ここで弾幕勝負とかになるとまずいでしょうしと」

「何が分かるつて言うの？」

「いや……それで花が犠牲になったら嫌だなと」

「だから貴方に花の何が……」

「一応……咲かせるために耕していますので」

「……分かったわよ。止めればいいんでしょう？」

「え？本当に起こしたかったんです？」

「暇だし、最近暴れ足りないのよ」

「……そうですか」

確かに……彼女が見つけた妖怪は基本逃しているしなあ……妖精は無残に散って行くけど。

「貴方が戦える程強ければマシだったのに」

「即死する自信はあります」

「……つまらない」

文句を言いながら向日葵の中へと潜って行く。

流石に追い掛けると命は無いし周回を再開する。

彼女の戦える相手と言ってもなあ……無理だろう。

「霊夢さんや魔理沙さんとかなら戦えるかもだけど……」

彼女達は異変でも無いのに動くわけが無いなど……

ただこれを言うとは異変を起こしそうだし本当に困ったものだ……

「どうしようもないから諦めるのが一番か」

ぎゅむっ

「うん？」

考え事をしていたせいか足元が疎かだった……

ただ花は踏んでないはず……一体何を？

「……………え？」

そこには見知った姿があつた。と言うか……踏んでしまった……

「すみませんにとりさん!!」

そもそもなんで妖怪の山から降りて来てるんだ？だったり何故太陽の畑にいるんだと疑問に思う事が多いのだが……流石にこの姿で別人つて事はないよな？

「痛いなあ……」

「申し訳ありません」

「倒れてた私も悪いけどいきなり踏むのもあんまりだからな!!」

「足元不注意でした……」

「……あれ？」

「え？どうしました？」

「一体何かあったのだろうか？」

「何故私の名前を知っているのかってのもあるし……何より自分自身が話せるのも違和感あるなと」

「……あー」

「そういえばにとりさんは人見知りだったな……あの時ロボットだヒヤッハーってノリだったせいで忘れていた……」

「色々あったんです」

「いや、記憶に無いが……それで納得しろって言われても無理だからな？」

「それ以前にこちらからも疑問があるんですが……」

「まあ答え辛いなら先にこちらが答えるよ。ただし言ってくれよ？」

「分かりました。納得出来るか分かりませんが後で……」

「そうだ、一番の疑問点が彼女にはある。」

「何故……妖怪の山から降りてるんです？」

「あー……」

「凄いバツが悪そうな顔をしている。」

聞くのは不味かったか？

「……追い出された」

「え？」

「冬の間だけだけどね」

「一体何があれば山に住む妖怪までもを……」

「いや……人里などにはストーブがあるじゃ無いか？」

「ありますね」

最初ストーブがあるのは驚いたが、流石に幻想郷でもあるらしい。

「それは鴉天狗の新聞で聞いたんだが……作れるかなと」

「作れるかなと……」

嫌な予感がして来たぞ？

「作ったんだが……山が燃える可能性があるだろと」

「そうですね……」

「前に作った建造物の件含めて火事が怖いし山を降りて反省しろと……」

「あー巨大ロボ……」

俺だけが追い出される事になったと思ったが……あの時の件も含めてと言ったところか。

「本当になんてお前は知っているんだ？設計図はいつ書いたか覚えてないが、一人で作

り上げたんだぞ？」

「……あー」

あの時は萃香さんが起こした異変の時、ロボットは製造はせずに設計だけしていた時期だったな。だから設計図だけ残っていたのか。

「って事で今度はそちらが」

「いや誠に申し訳無いと思いますが……」

「なんだよ、勿体ぶって」

「今すぐ逃げる事をオススメします」

「どう言う事だよ。こっちは空腹だし動きたくも無いんだけど」

「今……巡回中の管理人がいまして……」

「そんな事より今はそっちの話の方が重要だろう！」

「つまり忍び込んだ事は反省していないのね？」

「……」

危惧はしていた。しかしもう来るとは思わなかった……

「ははは、そんなわけ無いですよ」

若干命乞い気味に目の前の大妖怪と話す。

確かに雰囲気だけで勝てないと思うわ……

「さて……どうしようかね」

「助けてくれー!! 助けてくれ盟友!!」

「!？」

思い出したのか? いや、でも一体なんで?

「だいとうりよー、殿様ー、キングー」

あ、これ全く思い出せていないし煽ててるだけだ……
ただ行かないのもダメだよなあ。

「あの……少しは手心を……」

「そう言えば貴方も庇ってたわね」

「ちよつと待つてください!？」

抵抗虚しく二人で畑の餌になりかけた、なんとか生き延びはしたものの……やっぱり逆らっちゃダメだろうと。

にとりさんと大事な話をする前なのにだいぶ大変な目にあつてばかりなのであつた。

t o b e c o n t i n u e d

百十話 河童、革命をする
k u . m u s o u | t e n s o

「なあ蓮司……ちよつといいか」

「なんでしようかにとりさん」

小屋の中でにとりさんに声を掛けられる。

部屋が一緒ではまずい事を最初伝えたが、あの人に黙殺された……

「これ……奴隷みたいなものじゃないか？」

「……」

否定は出来ないしやっつてる事はそうなのかもしれない……

暖房一つ無いし環境が最悪だしな。

ただし逃げられな……否定出来ないどころかそれが本質な気がして来たな。

「これは幾ら何でも無いだろうよ……」

「慣れて来たら問題無いかなと」

「……私は慣れてないし慣れるつもりもないんだが」

「確かに……その前に帰るって話ですしね」

「だからどうにかしないかって話だけど」

「……彼女に何か言えるならいいと思います」

「なっ!?それは卑怯だろ?」

「いや、そうしなければならぬですよね？」

「何をしろって言うんだ!!」

にとりさんがだいぶ荒れている……

無理もないと言えば無いのだが……

機械弄りが好きな彼女が一切作るなど言われたら……

「……機械は便利なんだぞ？何故それを分ろうとはしないんだ!!」

当然だが大妖怪様には却下されたと……

機械は絶対に使うタイプじゃ無いだろうしなあ……

「何より……何よりだ!!」

「まだ何かあったんです……？」

「胡瓜が……胡瓜が作れない……!!」

「ええ……本気で花畑の近くで胡瓜作ろうとしたんです？」

「当たり前だろう？私をなんだと思っているんだ」

「……河童ですけど」

逆に言えば胡瓜があればなんでもいいのだろうか？

どっちみち俺では叶えられそうには無いんだが……

「いい加減私の我慢も限界だよ……」

わなわなと震えているが、まだ二、三日だけの気がするのだが……

「ふふふ、蓮司。産業よろしく発展には革命が必要だと思わないか？」

「立ち向かう力が足りないのでは……?」

「私に秘策ありつてね!」

そのままスカートの中から何かを漁る。

「ちよつと、はしたないですよ……」

「よし、これを……」

モーターやら基盤やら何処に隠していたんだ……

と言うか、何かを作るのか……?

「私は思ったんだ……相手がどれだけ強大だろうと……それに勝てるロボットを作ればいいんだって!!」

「……出来れば巻き込まないで欲しいんですがね」

「そうなるかどうかはこれからの質問にかかっている」

「……なんででしょう？」

「蓮司、ロボットの知識はないか？」

「……ありますけど」

「本当か!? だったら知識を貸して欲しい」

「……」

「蓮司、お願いだ」

「……分かりました」

正直な話をすると、あの人は悪い妖怪だとは思っていない。

だから敵対するのは違う気がするが……

それでも相変わらず熱心なにとりさんを見て手伝いたいと思ってしまうた。

「蓮司、聞きたいことがあるんだけど」

「にとりさんどうしました？」

「どっかでこう言う物作った事あるのか？」

「……なんでそう思うんです？」

「慣れているって思ったし、何よりロボットの知識を人間が持っているのが驚きだしな」

「まあ色々とありましてね……」

「後で聞かせてくれ。今は集中しようか」

「分かりました」

あの時の偽想天則は完全に置物だったけど戦闘用となるのか……
ただ……流石にそこまで酷いのはにとりさんでも作らないだろう。

「本当はもっと大きなロボットが良かったんだけどなあ……」

「太陽の焔をどうする気ですか……」

「だからしないってば」

……出来たらする気だったとしか思えないんだが。

まあ言ったところか……

「よし、完成したぞ」

「ああ……もう後戻りが出来ない……」

「しつかりしなよ蓮司。君とは盟友で君も共犯者だ」

「盟友……?」

「共犯者だしな、ここから先私達の革命の為の大切な人間だ」

「……分かりました」

正直また盟友と呼ばれる日が来るとはと思っただが……また君は呼んでくれるんだなと。

驚いたが、前の縁が関係しているのか？

「どうした蓮司？」

「いえ、色々と驚いていただけです」

「しつかりしろよ、今からが大事なんだから」

「面白い事をしたみたいだね」

「あっ……」

「速攻でバレた……幾ら何でも早過ぎやしないか？」

「幾ら待っても来ないと思ったら……何を遊んでいるの？」

「……すみません」

「何を謝っているんだ蓮司、革命は始まるのだろう!!」

「にとりさん……怪我はさせませんように」

「革命に犠牲は付き物だろう!!」

「ちよつと!？」

「あら……ガラクタを持ち込むなど言っただけだはすなんだけど」

「ガラクタじゃない!私の努力の結晶だ!!」

「そう叫びロボットを動か……え?自動で動いてないか?」

「はあ……」

溜息を吐きながらロボットを殴る。

しかし殴られた程度じゃ平気なように動き続ける。

「はっはっは、私の夢想天則を舐めるなよ!!」

新作の名前は夢想天則らしい……ただ本当に何が起きるか分からないし恐怖しかない。
い。

夢想天則の一撃が額を掠め頭から血を流しているようだ。

「へえ」

しかし取り乱す所か笑顔が見える……何故喜んでいるんだ？

「久し振りに……暴れられそうね」

「え？」

彼女がそう言った瞬間、つい恐怖で目を閉じてしまった。

見ておけば良かったかもしれないが……見続ける事は正直厳しかった。

「なっなんだと!？」

その後にとりさんの驚く声が聞こえた。

慌てて目を開くと、ロボットが押されている。

「にとりさんのロボットで相当完成度高かった筈ですが……」

それすらも優位に戦えるのかと思うと……本当に相手にはならない妖怪だなと思っただ。

「馬鹿な……このままじゃ……」

そのまま殴られ続けて、残念なことに叩き潰される。

確かに一日の出来だったが……それでもかなり出来が良かったのもありにとりさんがシヨックを受けている。

俺もシヨックを受けたくなるし分かるな。

「中々楽しめたかしら」

「……参りました」

そのままにとりさんは土下座する。流石に敵わないと感じたか。

「……」

「俺も同罪ですのでにとりさんだけをどうか責めずに……」

許されるとは思っていないがそれでも謝罪する。

ここで見捨てたりは流石にしない。

「ああ、貴方達二人なのね」

「はい……」

その言葉にゾクつとする。

俺達の処罰はどうなるかと。

「久々に楽しめたわ。ガラクタだと思ったけどそうでも無かったようね……サボったのは許すわ」

「……………え？」

「……………何？」

「いえ……なんでもないです」

「そう、あまりそのガラクタで好き勝手されても困るけど、偶には暇潰しにもなるし許すわ」

「いいの!？」

にとりさんが喜びの目で見ている。

「それで埋め尽くされても困るから偶にだけどね」

「了解した!!」

これは……結果的に良かったのだろうか？

にとりさんにもプラスになったし良かったんだらうなうん……

「そうだ、もう一つあるんだけど」

「好き勝手させる気はないけど？」

「胡瓜を植えたいんだけど」

「花畑に植える物じゃないでしょうが」

「うぐ……じゃあ今度買って来て」

「……分かったわよ」

「よっ、流石姉御!!」

そのままにとりさんに煽てられつつ戻っていく。
てつきり大変なことになると思ったが、むしろ褒められると思わなかった。

「世の中分からない物だな……」

「それでもいいじゃないか蓮司」

「そうですね」

正直この先異変が起きると言うならにとりさんのロボットは間違いなく役に立つだ

ろう。

だから許可が出ただけでも有難い。

「ただ……問題があるけど」

全部壊されてしまったら意味が無いと。

作ったロボット全部を彼女に壊されないようにと祈るばかりだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百十一話 河童と過去とく forgotten pass

t.

もう年も明ける。太陽の畑にいるからとは言え、マシに過ごせたとは思う。ただにとりさんのお陰でもあるけど。

「さて、何を作ろうかなあ」

「あの……にとりさん？」

「なんだ？ 私は今から忙しいんだが……」

「いや、昨日作ってましたし……怒られてましたよね？」

「まあそれはそうだけど」

「それで翌日作るのも中々度胸がありそうですが……」

「だって他にやる事ないだろう!!」

「分からなくても無いですが……」

十二月末ではあるとは言え雪が積もってしまっている。

ホワイトクリスマスとかだった気もするが……気にしてる余裕なんて無かったしなあ。

「外には出れないし、これしかないだろう?」

「そうですねえ……」

「だったら何かあるか?」

「何かと言われましても……」

実際娯楽などはないし、部屋内で出来る事など限られている。

「……あつそう言えば」

「何かあつたか？」

「聞きたい事があつたんです」

「構わないが……それなら私も聞きたい事があつたし、聞かせて貰えないか？」

「勿論です」

妖怪の山の時から暫く経つたし、その後の話など聞けてない事だらけだったから聞き
たかった。

それ以外の事も気になる事があるしな。

「蓮司も聞きたいことがあるだろうけど、その前にこれだけはハッキリさせておきたい」

「……なんででしょうか？」

「変な事を聞くが……蓮司、私と前に会ったことあるか？」

意外……と言うほどでも無いか。

実際にいつかは来るだろうと思っていたし。

毎回だが……この事情は信じてもらえるのかって少しだけ怖くなる。

「あります」

「やっぱ……なのか？　そう言う気はしたんだけど……すまない、記憶に無いんだ」

「それには……理由がありますので」

「なんだ？記憶を消したつても言うのか？」

「いや、少しだけ違うんですが」

「どう言う事？」

「死に戻りって一種の呪いのような違うようなものがありました……」

呪いにしか思えない、だが俺が望んで契約したと言った。

本当は突き止めたいが……そもそも会う手段がないしな。

全部話した死に戻りも、外の人間で、ロボットは外の世界の技術だと言う事も。

「大体予想はついた……何回くらいしてるんだ？」

「もう途中から数えてません……」

「なんでだよー、仕組みとか知りたかったのに……」

「いや……俺自身も理解してませんから……」

「残念……出来れば程度だったから無理に突き詰める気は無いけどさ」

「……まあ……原因とかは探りたいですが、途方も無さそうですし」

何よりまた殺されたくないし……探るにしてもどうにか目を盗めないものか……

「妖怪の山に来てたんだな……あの設計図は私じゃ作れないし」

「見に行つてないから分かりませんが……過去に作つた記憶はあるので、そうだとはいいます」

もしかしたら見た目が異なる可能性は0ではないが、見る事は出来ないしな。

「ロボットが作り終わって……その後の妖怪の山ってどうなったんです？」

「どうって言われても各自が好き勝手に生きていくくらいだよ」

「まあ確かに……妖怪の山らしくはありますが……」

「強いて言うなら巨大ロボット作ってから更に私の製作欲求が高まったってのはある」

「連日作りたがってましたもんね……」

今日だって話し合いしてなきや絶対に作ってただろうし。

「ああ……そう言えば一つだけあった」

「あったって、何がでしょうか？」

「鴉天狗なんだけど」

「文さん……でしようか？多分」

何かしたかと言うと、むしろ何もしてない方が驚くレベルだが……一体何を？

「人を探していたなって」

「特にニユース性は無さそうですが……」

妖怪が人を探すのはある意味事件なのかもしれないが、彼女に限ってのみ正常そうに見えるが……

「山で探し回っていたんだよ」

「ああ、それはおかし……」

ちよつと待て、山で探していた？

もしかしたらだが……

「あの天狗、誰を探しているか分からないって言いながら探してるしさ……もしかしたら蓮司を探していた可能性もあるなって」

「どうでしょうね……」

最後に文さんに会ったのは永夜異変前だが、俺はそれよりも前に戻ったし色々混濁しているのか？

「まあ後で顔を出した方がもいいかもしれないぞって」

「……暫くは太陽の畑ですけどね」

「……だね」

少しだけ肩を落とす。

もう問題はないんだが、いい加減やれる事も少ないしと。

「しかし、こう話してみると意外と互いの中に眠っていたなって」

「そうですね……異変が終わったら文さんにあった方がいいなって思いましたし」

「そうだな……」

にとりさんが急に暗くなる。

さつきまで元気だったが何が……？

「にとりさん、どうかしましたか？」

「ちよつとな……」

「心配ですが……」

「本当に記憶が無いのが残念だつてな……蓮司が見ながらやれば細かい点とかでもっと完璧になれたのかもしれないのに……」

それはそうか、職人の彼女にとって少しでも良い出来にしたいんだろうしこう言うのはつて。

「あー記憶を蘇れー、封印でもされてるのかー!!」

「記憶……」

「ん? どうした?」

「にとりさん、記憶が禁止されているって経験今までありませんか?」

先程から記憶って言葉に敏感なせいか、いきなり切り込んでいつてしまった。

「記憶が禁止……なんだそりゃ?」

「いえ、無いならいいですが……」

やはりこれも俺だけなのか？

死に戻りと影響している……？

「ただ……関わってないって言っていたよな……」

「ん？」

「ああすみません、独り言が漏れました」

八雲紫が関わっていないなら、一体誰が何をつてなってしまうんだよな……

「……前に言ったけど、私は蓮司を盟友だと思っっているからな。何かあつたら言ってくれよ」

「何か……」

「死に戻りだけじゃなくて、その禁止って奴にも苦しんでいるんだろ？」

「……慣れて来てはいるんですけどね」

「慣れてるとかは正直、今は関係ないかな。どんな感じなんだ？」

「思い出そうとすると、ガンガンと鳴り響くように禁止されていると」

「……なんだか能力みたいだな」

「能力なのかもしれませんが……」

ただそう言った能力を持つ人間や妖怪を今まで見ていない。

恨まれてとは思いたくないが……記憶はない以上確証はない。

「他に、思い出せることはないか？」

「思い出せる事……」

確か、永夜返しの中で……出会った彼女は……

「にとりさん」

「何か思い出したか？」

「姉妹、或いは親などいますか？」

にとりさんに似た子の存在を思い出した。

彼女が何かを握っているならにとりさんにも。

「いや、居なかった……筈だけど」

自信が無い振る舞いに違和感を覚える。
居るか居ないかなんて一目瞭然のはずだが……

「あれ？でもあれ……」

にとりさんが困惑し始めてそれを心配そうに見る。

「でもだって……おかしいな」

「にとりさん……？」

「ああすまない、少し混乱していた」

「それは問題ありませんが……」

「それで姉妹についてだが……」

にとりさんの言葉を集中して聞く。

「居た気がする……でもなんかおかしい。見たことない筈だし、色々と整理しきつてない」

知っているのか？

だったら彼女は空想の存在じゃない？

……髪が桃色に染まるにとりさんに似た子、彼女は一体何者なのか？、そう思いながら疑問が増えるばかりだった。

t o b e c o n t i n u e d

百十二話 彼女は何処にいる？ search sea
r c h s e a r c h .

混乱したニトリさんを收拾させるため、少しだけ休憩を取った。

正直な話をする、自分の方も整理がしたかったから。

「にとりさんも禁止されている……？」

ここまで来たらその謎の存在はいる事は確定で良さそうだが……何処にいらんだってなるし……

「見当も付かないし……あまり知り過ぎるのもダメなのか？」

だからって異変も起きなければどうしようもないと思うんだが……

正直ここで理不尽に動かれるならボイコットしたくはなる。

「すまない蓮司、待たせた」

「にとりさん、大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫だ」

「なら良かったですが……」

「ただ……悪いが思い出せなかった」

「いえ……それならそれで仕方がないですから」

「自分でもモヤモヤしているな……」

「死んだとかは無さそうですが……何処にいるものやら」

「山に戻ってから探すとするよ」

「人脈が多い方が良さそうですね……」

「嬉しくはないが、こう言う時はアイツが役に立つしな」

「あー……」

十中八九文さんだろう。

情報網の広さから見つかってくれれば良いんだが……

「……私には姉妹が居たのかな？」

「どうしました？」

そう言う話だった筈だが……急に元気が無くなり始めたようだし何が？

「いやさ、本当に姉妹が居たなら……私はそれを忘れたって事だろう?そんなのが許されるわけ……」

「にとりさんの場合は……理由がありそうですけどね。にとりさんが悪いってよりも……何かそう言う状況になってしまった的な感じで」

「そうだとしてもだ……」

「……それなら俺の方が薄情ですよ」

「……蓮司?」

「俺も居たと確信出来る家族の顔が思い出せないんですよ?」

前までは外の友人達や思い出そうとした人が思い出せないくらいだった。ただ最近……家族の顔ですら思い出せなくなっている。

母親も父親も居た事は覚えているが……その顔は既に浮かばない。

「それは……」

何度も死ぬショックが記憶を塗り潰していったのかもしれない。

死に戻って既に何年も幻想郷にいるから薄れていつてしまったのかもしれない……
だからって……まるで幻想郷に飲まれていったかのように徐々に忘れていつている。

「なので、忘れたが悪いじゃなくて探しましょう」

「……そうだな、会ってくれればいいけど」

「そこは分かりませんが……」

その妖怪が何を考えているかまでは流石に分からないしな……

「……やっぱりあの天狗に頼りきりも嫌だな」

「にとりさん?」

何やらガサゴソと準備を始める。

「今日はロボット作らないんじゃ?」

「ああロボットじゃないから安心していいよ」

「何も安心できないのですが……」

「いいっていいって、信じなよ」

結局止める術は存在しない。

まあ……騒がしくならなければいいんだけど……

「しっかし雪かきとかもロボットでやつちやえば楽に済むのに、導入しないなんてなあ

……」

「確かに楽にはなりますが……」

「だろー、やっぱ同意見じゃないか」

「……多分ロボット頼りの雪かきって、花巻き込みますよね？」

「……」

「流石に雪かきしながら花を避けるのは無理だと思えますので……」

「……必要な犠牲」

「やってみます？」

「……止めとく」

「それがいいと思います」

雪かきを全自動でやってくれるなら楽だろう。

ただ絶対にルンバとかみたいなのが完成するのはまだ不可能だろうし……作り方も知らない。

「まあいいや、今は優先するものはこれだし」

何やら完成させたようだ。

見た目だけを見るとレーダーのような感じがするが……

「それで対象が見つかるんですか?」

「よく分かってるじゃないか、その通りだ!」

「……そう言うのって何か対象の所持品等が必要なイメージですが、大丈夫なんですか

「？」

「大丈夫だと言いたいが、別の面で不安がある」

「珍しいですね、そう言ったので不安があるのは」

「なんせ有り合わせの材料だけだしな、精度が分からない」

「あー……まあ分かればいい程度に収めておけと」

「そう言う事だ」

もし見つかったらどうするべきなのだろうな……

少なくとも彼女は何かを言いたかったようにも見えていたし、話を聞きたくはあるが。

「さて、それじゃあ使うが、蓮司使いたいか？」

「……拘りは無いので製作者のにとりさんが使えばいいかと」

「分かった、それじゃあスイッチオン!!」

レーダーは動き出す、何処へと向かって居るのか。

確認するものの、すぐに察した。

「……ダメですねこれ」

「理論上は出来ていたと思ったんだけどなあ」

「内蔵部分とかは見ても理解が出来ないので、にとりさんを信じる事しか出来ませんが」

「だがすまない、失敗してしまったようだ」

「いえ、出来れば良いだったのでこれで気負う必要は無いと思いますが」

「ただ……どちらかと言うと材料を無駄にしたのがキツイ」

「無限ではありませんからね……」

何処から取り出しているのかはもう分からないレベルだが、それでも在庫はあるのだなと。

「これをバラすのは流石に嫌だし」

「勿体無い気はしますね」

不良品だが、非常に勿体無さが出てきてしまう。

「山ではちゃんとしたもの作ってやるからなあ!!」

負け惜しみ気味に自分の作った機械に当たる。

ある意味斬新な気もする。

「しかし……ここまで変な方向向くかあ」

「いや、針がもう何処向いても同じ気はしますけどね」

「それもそつかあ……」

「一先ず、雪は明日には外に出れるようになると思うので……そこ考えましょうか」

「そう言われるとそうか、明日はサボれないしな」

レーダーを置き互いに話し込む。

明日からはこうした方がいいと意見を出し合いながら。

一方放置されたレーダーはずっとマーカーが微動だにしていなかった。

普通に考えてあり得ないから、壊れたと考えている。

壊れたとしか思っていなかったレーダーは、「地底」を示していた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百十三話 信用、そして……～near spring.

新年を迎えたが大して実感はない。

そもそも正月も変わらさずだったし……

「なんだかんだこのまま暮らしていつても、問題なく感じてきたな」

最初こそ苦しんだものの、今じゃあ正直学校で勉強するよりはマシだったかもしれない。
い。

嫌いではないが……何と言うか気怠かったし。

「……」

「あっこんにちわ」

「何も言わずに気付くの……?」

「大体いつもこの辺にいるなと思いましたので」

「そんなどうでもいい事覚えてるのね」

「こっちにとっては半ば命がけでもあるんだけど。」

「まあでも、今日はもう切り上げても良いわ」

「了解しましたが……理由はどうしてでしょうか?」

「宴会するわよ」

「え?」

「なんでそんな意外そうなのよ」

いや……そりゃ意外としか言いようがないし。

何より……

「正月はもう終わりましたけど？」

「なんで正月にやらなきゃならないのよ」

「それが正月かなと思ったのですが」

「それは人間の都合でしょうが」

「……そうですね」

確かに妖怪が人間の行事に乗っ取る必要なんて無いのか。

「正月は人間は働かないみたいだから、終わった後にやるのよ」

「なるほど……そう言われるとそうですね」

「だからあの河童も呼んできなさい」

「分かりました」

一度小屋へと戻り、にとりさんを呼ぶ。

部屋の中で怪しい物を作っていたようで、未然に防げて良かった……

「宴会ねえ……」

「どうしました？」

「胡散臭い以外の言葉が無いんだけど」

「……そんなですか？」

「油断すると蓮司、頭から齧られるぞ!!」

「……」

ゆつくりと後ろを振り向く。

こう言うケースの時はいつも後ろに居たから……今回は居ないようで良かった……

「流石に人間を食べる程、悪食じゃ無いわよ」

「……」

いるじゃん、にとりさんどうするのさ？

「そうかい？妖怪は人間を襲ってなんぼだと思っただが」

「なら貴方はどうなのよ」

「山の妖怪は人間を食糧とは見ないからねえ」

「そう……」

怒っては居ないのだろうか？

とりあえず何ともなくて良かったと安堵する。

「私は友だったり協力者って考えるけど……文は間違い無くカモと見ている気がする
が」

「ネギ背負えば結局食糧なのでは？」

「食べないからねえ、食い物にはされるだろうけど」

「ははは……」

苦笑いをしつつ目的の地まで着く。

しかし……呼んで来いと言った割には何故来たのだろうか？

「さて、飲むわよ」

「おつ樽にしたのかい？」

「当然でしょ」

俺は飲めないし……飲めたとしても樽なのか……？

ああ……早く飲みたいから結局彼女も追って来たのか。

「しかし……こう言う時に何と言えばいいか困るね」

「どう言う事です？」

「いや、私達は妖怪だからな。新年おめでとは違うだろうし……」

「何でもいいじゃ無い」

「それもそうか、乾杯」

そして宴会が始まった。

この空気、本当に久々な気がするな……

そう思いつつ、こっそりと水を飲みながら宴会を進めていった。

「なあ、もう空かい？」

「そうねえ……追加持ってくるわ」

嘘だろ……たった二人で樽を空にしたのか？

やっぱ妖怪なのもあるかもしれないが、幻想郷全体が酒に強い気がする。

「それはいいね、折角のこんな日だし楽しませてもらうよ」

にとりさんも既に遠慮が無くなって来ているなあ……まあそこをとやかく言うべきでも無いか。

「じゃあ持つて……」

「幽香さーさーさーん!!」

「ん?」

遠くから声が聞こえる。

太陽の畑に誰か来るのは無謀じゃ無いか?

「幽香さん、注文されていた品です」

「ああ、有難う」

「それでは失礼します!!」

慌てて駆けて行く。一体何だったんだ？

「なんだ？脅したのかい？」

「元から酒を人里で頼んでいたのよ。太陽の畑って言われて嫌な顔されたけど」

「あー、そうかー太陽の畑には怖い妖怪がいるもんなあ」

「にとりさん!?!」

「いやあ、別に幽香の事言ったわけじゃ無いしー」

ダメだ……相当酔っている……止めないとまずいか？

「そうね、私とは限らないもの」

「ん？そう言えば幽香の名前聞いた事無かったけど」

「ん？私かしら？」

「そーそー」

「……風見幽香よ」

「なるほどなるほど、それで太陽の畑で怖いのは幽香と決まったわけじゃ無いしセー
フって事でー」

一言一言に冷や汗が流れる。

「あつ私は河城にとりねー」

「覚えておくわ」

気付けば追加の酒も凄いスピードで消えていつている……萃香さん並では？と言いたくなる程だ。

「貴方は？」

「え？」

「貴方の名前はって聞いているのよ」

「小野寺蓮司です」

正直、こつちの名前を聞いてくるなんて思ってもいなかった。どうでもいいと思われてるんだろうなと思ったし。

「蓮司ね……まっ覚えておくわ」

「有難うございます……かな？」

「蓮司は凄いいんだぞー、私には届かないけどな」

「あら、にとりはそれ程なの？」

「当然だろう？ 私は天才だしさー」

「だったら今度はガラクタじゃなくて、にとり自身と戦おうかしら」

「勘弁してくれよー」

そのまま宴会は続いて行った。

ただ俺は……幽香さんと呼ばれた彼女が俺の名前を覚えようとした事に驚いた。

宴会が終わった後も、ずっと悩んでいた。

「……飲んでは無いんだけどなあ」

匂いで二日酔いしたのか痛い頭を押さえる。

にとりさんは昨日の飲みっぷりに暫くは起きないだろうと、書き置きだけして外に出た。

「……」

驚いた事に幽香さんはもう外に出ているらしい。

二日酔いとかは無いのか？

「おはよう」

「おはようございます……あの、幽香さん」

「……ああそう言うことね」

何かを思い出したかのように振る舞う。

「昨日の記憶は正直無いわ」

「……無礼しましたかね」

「構わないわよ。今までの事から貴方は信用できそうだしね」

「そう言われるのは助かりますが」

「何より何かしようとするれば捻り潰せばいいし」

「……そうですね」

実際に出来る力があるからなあ……

「で、確か蓮司だっけ？」

「そうですね」

「正直漢字は面倒だから後で覚えるわ」

「あっはい」

やっぱり難しいのか……面倒な名前では無いが。

「昨日は酔っていたけど。元々そろそろ覚えようとしていたから……酔っていても殆ど変わっていないなかったようねと」

それだと……前から覚えようとはしてはいてくれたのか？

「そうね……人間の里に行く事も許すわ」

「良いんですか？」

「そろそろ暖房等準備しないとまずいでしょう。私はしてあげる気ないし」

「もっと早くしたかったですね……」

「花同様、甘やかすのは良くないのよ」

今の人間は冬にそのまま居れるほど適応できていないと思う。

「まあいつ異変が起きるか分からないけど……安全だけは保証してあげる」

「それだけでも十分ですよ」

頼もしい事この上ないなあ。

「だから、これからも仕事を頑張りなさい」

「了解しました幽香さん」

そのまま異変が起きずに冬の間体調に気を付けながら日常を繰り返していた。安堵もあるがこれからどうなるのだろうとも思う。

暖房も買ってきて来たし、火も気を付ければ使って良いと不満は既にほぼない。だからこそ……これで良いのかとも思うが。

「平穩が一番だけどさ」

そう願いながら、また日が進み……

冬が過ぎ、春が始まった。

— — — — —
t o b e c o n t i n u e d
— — — — —

百十四話 狂花異変～crazy bloom.

おかしい……おかしいおかしい。

一体何が起きたんだ？

「……昨日までは何も無かったよな？」

疑問に思いながら周囲を見渡す。

ここは太陽の畑であり、花畑である……それには変わりが無い。

「明らかに……増えてるよな」

花の数が昨日に比べて増えている。

耕して何か植えようと考えた場所にピツシリと……

「幽香さん……では無いよな」

少なくとも彼女は植える時一言話す筈だ。

少しだけ認められた場所があつたが、そこに植える時は話があつたし……

「異変……と決め付けるのは早いか」

花がより多く咲いているだけだ、これから何か起きるのかもしれないが……害意を感じないし。

「ふああ……どうした蓮司、小屋の前に突っ立っているなんてらしく無いが」

「あつにとりさん……実は」

「……って何だこりゃ!?!」

当然の様ににとりさんも驚く。

四季折々の花が咲き乱れているのはここでは普通だけど……昨日までは一切無かつた花が急に咲いていたらそりゃ誰でも驚くよなあ。

「幽香……じゃ無いよなあ」

「何も聞いてませんし」

「酔って暴走した……も無さそうだけど」

「ですね……聞きに行った方がいいかもしれませんね……」

そのまま幽香さんの元へと向かったが……正直後悔した。

「……何？」

「どうしたんですか……？」

聞くべきでは無かったかもしれない。

しかし明らかに苛立ちが見える顔について聞いてしまう。

「この顔で怒ってないとも思っているの？」

「花ですか？」

「貴方達が原因？」

「違います……種もありませんし」

当然だがやる意味もないだろうって……

「……花が苦しんでいるの」

「え……？」

「これだけ好き勝手に咲かれて、本来行くはずの栄養が全部奪われているわ」

「……ああ、確かにそう言われると」

「しかもその程度だったら我慢出来たけど」

「……まだ何かあつたんですか？」

「強欲なくらいに奪って行くの。向日葵が、他の花が枯れそうになろうともお構いなしに」

「そんな……」

「花が咲く事はいい事よ。でも不器用に咲いて周りを苦しめるところか、自分自身も苦しんでいるのを見ると……やり切れないわね」

「ああ……：てつきり関係ない花は枯らすとでも言うのかと思いましたが……」

「そんな事はしないわよ。咲いている花には罪が無いもの」

確かに、生き場所を選べない花にとってそこで咲く事が罪と言っても酷なだけだろう。

「ならばどうするんだい？」

ただただ殺意を当てられているのが嫌になったのか、にとりさんも口を挟み始めた。

「決まっているじゃない、元凶にこの花達の苦しみを味合わせてやるわ」

「待ちなよ幽香、闇雲に暴れまわっても仕方ないさ」

「何が言いたいわけ？」

「目標を探す道具を作るから、待ってくれよってね」

「一々そんなもの待たないといけないわけ？」

「闇雲に手当たり次第やった方が時間かかるしまずいだろう？喧嘩になるだろうし」

「別に、喧嘩はいいじゃないの」

「その元気は黒幕をボコすために残しておくといいさ」

「分かったわ、ただすぐに作りなさい」

「あいあいさ」

そのままにとりさんはこやへとかえっていった。

「蓮司」

「幽香さん、どうしました？」

「貴方は何が出来るの？」

「何がつて……」

「前にあの女が言ったように異変が起きた。態々貴方を残して異変に近いものが起きて……何か貴方が出来ることあったんじゃないのかつて」

「……人間に期待されても大した事は出来ませんよ」

「……使えないわね」

「……そもそもなんで自分がここに落とされたのかもイマイチですし」

「異変を解決するためじゃないの？」

「俺自身がどうにか出来る力があるわけではありませんし……」

「はあ……足を引つ張るなどは言わないけど、死んだりしないでちょうだい。面倒だから」

「え……？」

「何よ、心配するのが不思議？」

「いや……俺も行くんですか？」

「当然に決まってるでしょう？」

「戦える力無いんですが……」

「そんなの関係無いわよ」

「ええ……」

激戦区であろう場所に連れて行かれて、それでなおかつ死ぬなってかなり無茶振りじゃ無いか？

「それに」

「それに……？」

「貴方も自分の耕した土を荒らされて頭に来てるんじゃないかしら？」

「……それは」

正直自分が耕した土地に花が咲く事は悪くない。

むしろよく花が咲いてくれたと嬉しいばかりだ。

ただ……それが今ある花を苦しませると言うのなら話は別だ。

「花に罪はない……幽香さんが言った通りですね」

「ええ、分かったでしょう？」

「分かりましたけど……」

「まあ何かさせる気はないわよ」

「分かりました……」

幽香さんは俺に何を期待しているんだ？

「貴方の気持ちちをぶつけてちようだい」

「え？」

「えって……頑張って作り上げてそれを奪われて何も思わない事ないでしょうよ」

「……」

「言いたい事ぶつけてやりなさい、荒場は全部私がやるから」

「いいんですか？」

「暴れ足りないのよ」

「え？いつもにとりさんのロボットを……」

「いいでしょ？」

「はい……」

どっちも本音なんだろうな……

それなら存分に暴れてもらった方がいいが。

「おっと、持ってきて来たけど……何かあったのかい？」

「にとりさん」

手に持つ物を見る……あれ？あれ？あれ？前ダメだったレーダーじゃ？

「なんでもないわよ」

「そりやすまなかつたね」

「と言うかにとりさんそれって……」

「レーダーだけど？」

「ダメだったんじゃ……？」

「ちゃんと設定し直したつての!!」

「ああ、まあそうですよね」

「それじゃあ、さっさと使ってちょうだい」

「おや、使うかと思ったけど……使ってみるかい？」

「使い方分からないもの」

「はっは、まるでお婆ちゃんみたいじゃないか」

「何か言ったかしら？」

「いえ何も……」

何故にとりさんはこうも無鉄砲なのだろうか？

「じゃあ使おうよ」

そのままレーダーが指し示す、この場所は……

「壊れてるんじゃないですか？」

「なんでだよ!!今回は変な方向を指してないじゃないか」

「いや……これ変な場所ですよ」

「へえ、何処なの？」

「……無縁塚です」

前世で訪れた場所、だからこそ覚えている。

何故ここがと思う気持ちが強いが……

「行ってみましょう」

「ここに何かあるかと思いませんけど……」

「別にいいでしょ、虱潰しも偶にはいいわ」

「分かりました」

そのまま三人は無縁塚へと目指すことになった。

何かあるのか、誰が居るのかと疑問に持ちながら。

初めて解決に介入する異変に色んな事を考えたのであった。

—————
 to be continued

百十五話 死神少女～memories can't
remember.

魔法の森、その奥を抜ける。

二人は飛んでいるが俺は飛べないし……

「あれ？」

ここら辺で妖精達が出ると思ったが出ないな。

何かあったか……

「ああ、あるな」

空から明らかにプレッシャーが放たれている。

これ出たら死ぬって思ってもおかしくないレベルだしな……

「アリスさんも居ないみたいだけど……」

探すわけにはいかないが……どうしたんだろうな？

「今は急がないと……」

森を駆け抜けて、再思の道へと辿り着く。

秋の頃は彼岸花が咲いていたが、今の時期は他の花もごっちゃになっているとはいえ、桜が咲き乱れているのか。

二人が居ないのは驚きだが……誰かがいる。

「おや、まれびと稀人……いや違うな人間か」

「稀人……？」

赤い髪のツインテール。

背は明らかに高い……空さんくらいあるかもしれない……
何より驚いたのが……

「鎌……？」

「ん？どうかしたかい？」

どうかしたかって……普通に道で鎌を持つてる人が居たら驚くだろう……

なんでおかしいんだ？みたいな雰囲気なんですか？

レミリア達ですら持つてないぞ？

「いや、不審者ですら鎌を持ち歩いたりしませんか」

「不審者ってねえ……あたいは小野塚小町ってんだ」

「小野寺蓮司です」

不審者相手に自己紹介して大丈夫なのだろうかと思っただが……今更手遅れだし仕方ない。

「それで……鎌持ち歩いてるって言われてもなあ……私も仕事だし」

「仕事って……暗殺者でもやってるんです」

「あははは、暗殺者がこんな目に見える武器持っているわけ無いだろう？」

「それはそうですが……笑わなくても」

「いやあ、確かに暗殺者では無いけど似てるなって」

「似てるですか……？」

「死神って聞いた事ないかい？」

「!？」

あれ……？何処かで？

会ったことがあるように思えないが……

——やれやれ、三途の川に迷子だなんて面白い人間だねえ

——あたいが誰かって？

——死神って聞いたことないかい？

「三途の川？」

「ん？あたいの仕事場所だけどうした？」

「いや、そこに……でもなあ」

「……少なくとも人間が来る場所じゃないよ。偶に迷い込むけど」

「俺が行った可能性ってあるのでしょうか？」

「無くは無いだろうけど……兄さん生きて」

「どうしました？」

「いやでもこれ……どう言うことだい？」

「え？何が……」

「兄さんの魂……死んでるのと大差ないけど」

「……ええ？」

成美さんに言われた事をまた言われる。

あれから死んだと言うのにまだ生命力が薄いのか？

それとも……いくら変わろうとも俺は……？

だったら何が理由だって言うんだ……それが思い出せない。

「まあ流石に幽霊には見えないから狩りはしないけど……」

「それ以上に俺が死んでいるも同然と言われて何がどうやらと……」

「んな事言われても、あたいには分からないからねえ」

「……」

「まっ深く考えたって暗くなるだけさ、軽く考えればいいよ」

「そう言える問題ではない気が……と言うか言った割に軽いですね」

「多くの死者を送り出してゐるしねえ、そこまで気にしてないのさ」

「それは……どうなんでしょね？」

「少なくとも今兄さんは死人では無いし、生きている事には違いないんだ。だから僅かな灯火が消えないように生きるといいよ」

「難しそうですね……」

「死んだら終わりなんだから、必死に生きるとするだろうよ」

「それは……確かにそうか」

死に戻りなんて普通はあり得ないし、死にそうだと告げられても他の人は普通に生きようとはするか。

「さて……堅苦しい話はこのくらいにしておこうかな、あたかもいい加減飽きたし」

「飽きたで済まされていいんですか俺の人生……」

「まあ易者とも考えて、信じ過ぎずにつてね」

易者……確か占い師の事か。

「それよりも、気になった事が他にもあるんだよねえ」

「気になった事ですか？」

「兄さん、再思の道に何の用だい？まさかあれだけ言って死にに来た……は無いだろうし」

「死にに来たわけじゃ無いですが……」

「だろうねえ、だからって道を尋ねないと場所を見ると迷子でも無い……本当に何が目的か分からないのさ」

「無縁塚に行きます」

「それこそ謎なんだよ、死んでるから墓に戻りまーすじゃ無いだろうし」

「今異変が起きているのは知っていますか？」

「あー確かに起きてるって聞いたね……あたい達もそれで面倒を被ってるんだけど」

「花が咲く事が迷惑なんですか？」

幽香さん達のように大量の花を咲かせているならまだしも、他でも面倒事が起きてくるのか。

「えっ花が……ああいや、そう言う事かあ」

「どうしました……?」

「いや、こっちの話さ。でも無縁塚に行っただって花見なんざ出来ないよ？」

「いえ、違います。無縁塚にその元凶がいると言う事なので」

「元凶が……？でもあの人は元凶では無いだろう……？」

小町さんは何かを考えているようだ。

「だから無縁塚に行つて原因を探しに行きます」

「ああでもそうか……間違つては無いのか」

「さつきから何を……？」

「いやあ、ちよつと言えないかなあ。あたかも面倒事に巻き込まれたく無いし」

「はあ……」

面倒事に巻き込まれるような感じなのだろうか？

「多分求めてる答えは出ないかもしれない。でも止める気はないしご自由になって感じ」

「なら好きにさせてもらいますが……」

「そうかい、じゃあ好きにするといい」

しかし……意外だったな。

「どうしたんだい？その表情は」

「いや、死神って怖いイメージあったんですが、小町さんを見る限りそうでも無いのかと」

鎌は持っているが、あまり恐怖を感じない。

「へえ……それじゃあこうしてもかい？」

小町さんがそう言うのと首元に鎌が近付く。

と言うか……向こうに小町さんが居たはずなのに何故目の前に？

「驚いた顔だね、あたいの能力だよ」

「能力ですか……？」

「そうさ、だから優しそうに見えても油断するなつて事さ」

「分かりました」

「うんうんいい子だねえ、油断した奴等とは大違いだ」

「……それはどう言う？」

「それじゃあまた死んだ時にでも会おうとしよう」

「ちよつと小町さん!?!」

追おうとしたが一瞬で消えてしまった。

それと同時ににとりさんと幽香さんが現れる。

「畜生何が……って出れたか」

「にとりさんどうしました?」

「いや、今まで再思の道に近付けなくてね。急に近付けたわけさ」

近付こうとも近付こうとも離れていったらしい。

「なんででしょうか?」

「さあね、誰かの能力かもしれないし」

「……」

さつきの言動的に小町さんもあり得るのだろうか？

「それより、幽香の機嫌が今ので悪くなり過ぎたし行こうか」

「……そうですね」

確かに悪そうだが、一刻も早く向かった方がいい。

小町さんが言っていたが、無縁塚には誰かがいる。

それは誰なのか注意しながら……無縁塚へと足を踏み入れた。

—————

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

百十六話 白と黒、罪と罪～I judge.

無縁塚、実際に来たのは半年ぶりくらいになっているか？

よつほどの用が無ければ来る場所では無いが……その割にはすぐにも思える。

「……ね……何も無いじゃない」

花は咲いているものの、それだけだ。

明らかにここが現場と言う雰囲気は無い。

「……？」

「いや、リーダーはここだって示してるぞ!？」

「だったら壊れているんじゃない？」

「壊れてないやい！今でも明確にここを指しているんだから」

「そう言われてもねえ……」

「まだ何も探していないだろう！！だから探してからだ！！」

「なら行ってきなさい」

「私が!？」

「当たり前でしょう、後蓮司もよ」

「幽香さんは……?？」

「彼岸桜を見ているわ」

「……まあいいですけど」

にとりさんが周囲を探す中、自分は奥へと進む。

前にあの人に会った場所に……何かあるかもしれないし。

「春になってもここら辺は霧だらけなんだな……」

しかし、あの頃と違うのは足元に花が咲き誇っている。

踏まないようにするのが大変なレベルだ……

「ここら辺もか……本当に狂い咲いているな」

多種多様過ぎる匂いにくらつきながらも奥へと進む。

にとりさんのミスだとは思いたく無いが……流石に何も無いか？

「四季折々で綺麗だと言いたいけど……ここまで身勝手に咲かれると悪意を感じるな

……」

「概ねその認識で合っていると思いますよ」

「!？」

「この声は……前にも聞いた……」

「悪意ある花、確かにそうでしょう。六十年で一回りする罪の輪廻ですから」

「閻魔様……それは一体？」

「……私の事を知っているのですか？」

「はい、分かっております」

「……貴方という人間を見るべきな気もしますが、今はそれどころでは無いのでいいで

しよう」

「この異変ですか？」

「ええ、貴方はこの異変をどう思っていますか？」

「どう思いうるか……花が咲いている以外に何かあるのか？分からないな……」

「……花が咲き乱れているってくらいですかね」

「確かにそれは事実ですね。現に幻想郷中に四季を無視した花が咲いております」

「狂い咲き……さしずめ狂花異変とでも言わんばかりに」

「狂花異変……面白いですね」

「褒められた……何故そこを褒めたんだ？」

普通に考えるとおかしいがまさか……

「閻魔様が元凶ですか？」

「いいえ違います」

「でしたら元凶は？」

「元凶などいません」

「……え？」

元凶がない？何を言っているんだ？

元凶がいなければ異変なんて起きるわけ無いだろう？

騙されているのか？それとも理解していない……は無さそうなんだが。

「貴方はそもそも勘違いをしています」

「勘違いですか……?」

「この異変は貴方が言うような花が咲く異変では無い」

「……だったら何故ですか?」

狂花異変と言うのは俺の中でだけだったらしい。

まあ……悔しくは無いけど。

「先ほど言った通り六十年の周期が、悪意を引き寄せました」

「六十年周期……何を言ってます?」

「……六十年毎にこの幻想郷では博麗大結界が緩むのですよ」

「緩むって……大変な事では!?!」

そんな、花が咲いたとかのんびり考えていてはならない物では無いかと思う。

「それにより、幻想郷に多くのものが流れ込むようになります」

「……それは？ どうすれば」

「何もしなくてもいいですよ。花が咲き乱れますが、そのうち収束しますので」

「そんな……適当な気がしますが……」

「ですがどうしようもないのですよ」

「……それはそうですね」

結界をどうしろとか言われても俺は理解出来ない。

博麗大結界と言うからには霊夢さんが関係している可能性はあるが……実際何をど

う言えばいいのか分からないのもある。

ならば……収束を待つしかないか。

「結局悪意とは言われましたが……原因は何なのですか？ 結界が緩んだだけでは花は咲き乱れませんか……」

「ああ、簡単に言いますとそれは……」

「見つけたわあ」

その言葉と共に霧の中から光線のようなものが飛んで来る。

元から狙ってなかったのか当たらなかったが、直撃してたらそれはもう無残だっただろう……

「野蛮な……」

「野蛮なのはそちらの方でしょうか？」

そして光線の飛んできた方から幽香さんが現れる。

「幽香さん、動いてたんですね」

「気配がしたからねえ、それでウチの花達を穢した元凶がいるじゃない」

「元凶って……」

彼女の話では元凶ではないと言っていたが……

「にとりが居るって言ったから合ってるでしょう？」

「……愚かな」

「アンタに言われたくないわね、喧嘩ならいつでも受けてあげたのに」

「全く……妖怪は人の話を聞かないで困る」

「自分の罪を贖ってもらってからにするわ」

「罪深いのは貴女の方ですよ」

「……へえ」

「どうしよう、この場から凄く逃げたい。」

「絶対に俺が居るのは場違いなんだが……」

「人間であろうと、妖怪であろうと生き続ける事は罪なのです。貴女は長生きし過ぎたせいで罪深く残虐に生きる化物となった」

「好き勝手言ってくれるじゃない、自分のした事は柵に上げた癖に」

「私は裁く側の立場です。だから戯言に惑わされずに、一方的に裁かなければならない」

「自分が選ばれた立場だと勘違いしているようね……面白い」

……どうすりゃいいんだこれ、止めるったって無理だよな？

「蓮司蓮司」

「……にとりさん？」

小声でにとりさんが声を掛けてくる。

「これを着ろ！」

「これは……？」

「迷彩パックだ、少しでも巻き込まれないようにだ……」

着たら尚更危ない気がするが……

ただ幽香さんが見境無くなってしまった場合隠れていた方がいいか。
急いでパツクを付ける。

「私達じゃどうにもならないから見るに留めるぞ」

「ですが、彼女は元凶じゃないみたいで……」

「どちらにせよ幽香を挑発したのは事実だ、止まらないだろう」

「それは……確かにそうですが……」

「だから余計な事は考えず今は生きるのに集中しろ!!」

「分かりました……」

確かに、命の危険の方が高いな。

今死ぬわけにはいかないだろうし……
少しだけ離れながら二人を見る。

「ちやあんと虐めてあげるから覚悟なさい」

「貴女は、あらゆる生物を片端から攻撃し続けた。大した理由もなく」

「それがどうしたのかしら？」

「相応に罰を与えなければならぬ」

「本当……言っても分からないわねえ」

二人はスペカを構え出す。

今までのお遊びとは違い本気か……

どうなるか分からないが、互いの無事を願うだけだった。

「白黒はつきり付ける」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百十七話 弾幕勝負を見る者達〈spectators

standing.

「マスタースパーク」

先程の光線がまた襲い掛かる。

傘から放たれてるが……本当にこれスペルカードの域なのか？

「魔理沙さんが同じようなスペルカードを持っていた気がするけど」

「あまり乗り出すな！危険だぞ」

「すみません……」

確かに今の幽香さんの表情を見ると手当たり次第に見える。

いつものにとりさんのロボットを潰すレベルではない……憎悪も紛れているだろう。

「ただしまあ……」

「なんだ？」

「いつ飛んでくるかと考えると怖いですが……綺麗だなとも思います」

まるで花火を見ているようか、そんな感覚に陥る。

「スペカ勝負を見るのは初めてか？」

「少しだけありますけど……間近で見た事はないですしね」

「まあ……第三者がマジマジと見ることも無いだろうしな」

お互いがスペカを見せ合うと聞いたが……確かにスペカでさえこれなら……制度が無ければマジで死人だらけだっただろうなど。

「……にとりさん少しいいですか？」

「まあ……構わないが」

「今回の異変ってどう思いますか？」

「今回の異変か……そうだなあ」

閻魔様曰く元凶のいない異変。

何故花が咲いているのかは不思議だが……

「とてつもなく歪だね」

「歪ですか？」

「むしろ異変と呼べるか怪しいまであるよ」

「そこまで言う程なんですか？」

正直歪なのは俺自身も思っていたが、それは黒幕がないと聞いたからだし……にとりさんは何も知らない筈で断言出来たのが驚いた。

「何もかもがおかしいんだよ」

「おかしいと思いますが、何処がかとと言われると難しいですが……」

「まずは異変の内容だ、四季折々の花が咲く……異変ではあるが解決が本当に必要か？」

「異変なら解決が必要なのでは？」

「四季の花が咲いているだけだ、むしろ面白がつて花見をすればいいと思うがな」

「確かに……そう言われるとそうですが……」

紅霧や春雪のような平穩を壊す異変。

紅霧の異変もあつたが春が来ない春雪異変は相当だつただろう。

永夜や萃夢のような一部の人間や妖怪達が多大な迷惑を受ける異変だつてあつた

……

「今回の異変は花粉症の人はまだしも、被害よりかは皆喜んでいる程ですし……」

「そう、だから歪だ」

皆の笑顔が見たいとかではないだろうしな……本当に理解不能だ。

「他には……?」

「……黒幕が出てこない」

「……一向に姿を出してきませんもんね」

「出てこないはずないしな」

異変を起こしてここそこそするは本気で分からない。ただ……聞いた話だと。

「今回の異変は……黒幕がいないと聞きましたが」

「は……？ いやいや黒幕が居ないって無いだろう」

「ですが……そっちの方がしつくりきますし」

「……まあ分からなくもないな、だったら何が理由だ？」

「それを聞くはずだったんですが……」

幽香さんの方を見る。

それを見てにとりさんの方も察する。

「ああ……言っても止まらなかったしなあ」

「ですよね……」

「しかし……それも含めて歪なんだよな」

「え？」

「知らないか、異変について」

「あ……」

そう言われると理解する。今回の件は仕方ないかもしれないとは言え疑問しかない。異変の原因は分からないが……解決するのは幽香さん。つまりは妖怪が解決に向

かっている。

話では妖怪が異変を起こし、人間が解決するって事だったが……

「今回はでも……」

「元から宿命みたいなものだしな、妖怪が起こして人間が解決するのは」

「それ程なんですか？」

「特例があるとは思うけどね、全体的に合っている」

「確か……鬼が起こした異変は……」

「ああ、博麗神社で起きた奴だっけ？」

「そうです……確かあの時はアリスさんが……」

「え？あの異変は博麗の巫女が解決した筈だけど……」

「……え？」

いや……よく考えたらそうか、アリスさんの記憶もあの時は消えていた筈だし解決しにはいらないか？分からないが。

「だから……正直私にはお手上げだ」

「俺もですね……」

力も足りないし、根本が分からない……

二人の戦いが終わるのを見るしか無いのか。

「どっちが優勢とかも分からないんですが」

「途中からだし私も分からない」

ただただ、綺麗だと思ふことしか出来ない。

「……正直分らない以上、放置してこの後のことを考えたらどうだ？」

「この後ですか？」

放置していいのかとも思いつつ、安全な場所に離れたなとも考える。
集中したくもあるが、見ても分からないしな……

「ああ、どうせこれが終わり次第用済みになるんだろ？」

「確かに……異変が終わると言う事は当初の予定ではそうですが……」

「だったらどうするんだ？文には会うんだらうけど」

「会いますね、その話はしましたし」

「だったらどうする？妖怪の山にでもくるか？」

「出禁なんです……」

「えっ……ああそうなんだ」

「なので……文さん次第ではありそうですが……」

「うーん、私も正直山で色々作りたいたいが……」

「今まで抑圧されてた分が一気に爆発しそうですね……」

「でもさー……蓮司に着いて行っていいかい？」

「え？なんでですか……？」

「いや……今私山追い出された身だし、作る物が制限されそうだなと」

「どうでしょうね……」

「だから……いつそ私も着いて行こうかなって」

「それは構いませんが……結局大した物作れないと思いますよ？」

「えっなんで!？」

「何処に行くとしても巨大ロボは流石に……ですし」

「まあそれはそうか……作りたかったが流石に諦めるとして」

「まあ……何処でも作れなそうですしね」

「ただ……絶対認めさせるものを作るさ！人間を驚かせてやればいい」

「にとりさんなら出来そうですね……」

里などを見てもにとりさんの機械の方が凄いし……

「だから頼むぞ蓮……」

その言葉を言い切る前に近くで巨大な爆発音がする。

その爆発に紛れ岩の残骸などにぶつかると……ほほ粉々だから怪我はないが。慣れ過ぎたのか目を向けていなかったのが悪かった……何が起きている？

「……蓮司、あれだ」

「あれって……は？」

現場を見て啞然とする。

何が起きているんだ？あり得ない筈だろう？

「幽香さんが二人いる!？」

俺達の目の前には二人の幽香さんが向かい合っていた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百十八話 最強種の一角く high rank appa

r i t i o n .

蓮司がにとりと話し始めた頃、戦いは白熱していた。

風見幽香は戦い続ける。

花達の仕返しだと思うから。何より……それが楽しいから。

「やれやれ……少しは聞く耳を持つべきです」

「どうせアンタも楽しんでるのでしょう？」

「まさか、うんざりしている所ですよ」

「つまらないわね」

「修羅どころか畜生のように本能に明け暮れている妖怪とは違いますから」

「言ってくれるわね」

「愚かに突っ込んでくれるのは楽ですね」

怒りに任せて突っ込む幽香を相手取る。

「審判：十王裁判」

米粒弾を始め多種の弾幕が幽香へと襲い掛かる。

躲くスペースも徐々に狭くなるが……笑っている。

「さて、これで終わってくれと楽ですが……」

「そんなわけ無いでしょう」

幽香もスペカを発動する。

「春花：蒲公英の離散」

一つの弾が飛び、風に吹かれたように散る。

まるで綿毛のように一つ一つ互いの弾幕を打ち消して行く。

「こちらの弾幕を塗り潰しに来るとは……」

「こうしないと一撃が入れられないでしょう？」

「直接来る気ですか……」

「元々スペルカードルールは人間との力の差の為だし、私達には関係ないわね」

「そうして無駄な命を散らすと……犠牲になった妖怪達も少なくは無さそうですね」

「そんなの弱い方が悪いのよ」

「やはり長生きする事は罪でしかない。改めてそう感じさせられますね」

「いい加減口以外も動かしたらどうなの？」

徐々に詰めようとする幽香に下がる映姫、明らかに押されているように見える。

「逃げられるのはうざったいわね。夏花：朝顔の生長」

先程の花とは違い、映姫の周りを一本の弾幕が回り込む。

絡む朝顔のツタのように、締め付けようとする。

「可愛らしい花かと思えば、本当に貴女らしい攻撃的な花達だ」

「花達だつて生きているもの。当然でしょう？」

「善の心が無ければ、花もこうなりますか」

「アンタに復讐したくて仕方ないみたいね」

「私は関わっていません」

「どうでもいいわ。まだ暴れ足りないもの」

「大事にしている割には、花のせいにするのですか」

唾然としながらツタから抜け出す。

遅れていればピチュる事も十分にあり得た。

「やはり貴女を野放しにするのは危険です」

「だったらどうしたいわけ？勝てるだけでも」

「幾ら閻魔と言えど躊躇いも存在します……しかし使うしかありませんね」

「好きにしたら？ どうせ物足りないだろうけど」

「毒を持って毒を制す。貴女を一番正確に裁けるのは貴方自身だ」

「何を……？」

「審判：浄頗梨審判——風見幽香——」

「なっ……」

鏡の中から風見幽香が現れて本物と対峙する。

姿もそっくりで……何より庄が自分のものと同一程度だと察した。

「さて、自分自身に相応しいと思う罪を授けなさい」

そのまま、本人同士の戦いが始まった。

「……自分自身と戦うのは中々ね」

同じ行動を取るわけでは無いが、力は同じだしスペカすらも被せてくる。

「正直、憧れていたけど、戦ってみるとつまらないわね」

自分が相手と言う事で同じ実力の相手だと思っていたが、手の内が完全に分かる。新鮮味が全く無いのが正直退屈でしか無い。

「観客だつて……そう言えば二人が居ないのだけど」

戦いに集中し過ぎて周りを見ていなかったが、二人が消えている。

……逃げたは無さそうだがどうなのだろう？

「よそ見してるんじゃないわよ」

偽物が騒ぎたてる。

鏡のくせして同じ声で騒ぐのがやかましいと思ったらありやしない。

「幻覚を見せる彼岸花だって、私自身に効くわけ無いものねえ……」

この目障りな偽物を今すぐにでも叩き潰したいけどそう出来ないのが忌々しい。

「はっ偽物だろうとアンタと同じなのよ」

「言いたい放題言っ……」

「隙だらけですよ」

偽物に気を取られて映姫が弾幕を飛ばして来る。
直撃するがまだふらつく程度だ、問題ない。

「サシじゃなかったのかしら？」

「一言も言っていないんですが？」

「……」

「所詮は同じでしか無いので、私に加わればいい話です」

「閻魔の癖に公平さは無いのね」

「裁判官は公平ではありませんよ。罪人に慈悲を与える必要などありませんから」

「へえ……」

「罪人はただ淡々と裁かれていけば良いのです」

「分かったわ」

「珍しく物分かりがいいですね、ですが助かります。妖怪であろうと長生きするものは……」

「遠慮する必要が無いってことがね」

その途端風見幽香が分身し、偽物と合わせると三人となった。

「なっ……」

「さて、極大のいくわよ」

傘に魔力が集まる。それが両方の幽香に……映姫が流石に不味いと悟る。

「そんなことも出来たんですか……」

「流石に鏡風情じや分身までは出来ないでしょう?」

「ですが所詮は幻です、どうとでも」

「これが飛んでも?」

魔力が溜まる。恐らくは先程のだろう。

アレだけは直撃してはならないが、避けるのは厳しいかもしれない。

「ですが避けないとジリ貧」

本当に力任せの妖怪だと改めて感じる。

これで弱いもの虐めとか本当に残虐でしかない。

「……やめた」

しかし予想とは反し、幽香は傘を下ろす。
その姿を見て安堵する。

「賢明ですね、少しは貴女も分かる……」

「この程度じゃ足りないわね」

傘だけではなく、空いている手にも魔力が溜まる。

一体何が起きて……？

「地形が変わりそうね、ここまで好き放題するのも久しぶり」

「流石にそれは洒落に……」

「偽物も実力が同じなんでしょう？ だったら出来るんじゃない？」

それも考えた。ただ彼女であるとは言え、鏡が耐久できるのかが不安だ。更には相手は二人いる、やったところで焼け石に水だろうし、何より無縁塚が崩壊する未来しか見えない。

「四本なんて初めてだから感想を聞かせてちょうだい」

「貴女と言う妖怪は本当に……」

「クワトロスパーク!!」

四本の光が映姫と鏡を襲った。

t o b e c o n t i n u e d

百十九話 異変の正体～ghost turmoil.

「幽香さん!!」

「あら？二人共そこに居たの？見えなかったわ」

「それは姿を消していたんでいいんですが……幽香さんが二人……いや三人!」

明らかに人数オーバーしている幽香さんを見たが、一人は消えて一人は砕けた。

「別に……気にしなくていいわ」

「流石に凄く気になるんですが……」

「今はそれどころじゃないでしょ」

「そうだ……色々起きてるみたいですし」

奥の方を見る。土煙が一向に消えそうにない。

「やり過ぎたかしらね」

「かなりやり過ぎたかと……」

閻魔様は無事なのかと思いつつ、落ち着くのを待つ……つと誰かがいる。

「けほっ……本当に貴方は遠慮がありませんね」

「まだ無事だったのね」

「戦意はありませんがね。これ以上無縁塚を削るのも良くない」

煙が収まって来た現場を見ると、確かにかなり挟れている……幸いそこには仏さんは眠っていなかったが、かなり怖い位置でもあった。

「だったらさつきと元に戻しなさい」

「だから私ではないと……」

「だったら誰だと言うのよ」

「それを、その少年に話す前に暴れ出したのは貴女でしょう」

「犯人だと思っただし、暴れられると思っただもの」

「大方、後半が理由でしょう。本当に周りを考えない妖怪ですね……」

「そんな事はどうでもいいのよ、早く原因を教えなさい。とつちめるわ」

「今年は六十年に一度起こる博麗大結界の異変です」

「それがどうしたのよ？」

「それにより外の世界の人間が多く迷い込むようになります」

「え……？」

それって俺の原因でもあるか？

でも俺は幻想入りしたのは今年ではないな。

「それで？外の人間が増えたから何？そいつらがやったと言うなら肥料にでもするけど？」

「………外の世界の人間は生者とは限りません」

「…………え？」

「当然ですが死者も流れ着きます」

「だからどうしたの？大した量じゃないでしょ」

「今年は異常な程でした。罪人が多かったのでしょう」

「…………まあそれはどうでもいいわ。それが花となんの関係があるのよ？」

「増え過ぎたんです。全員が三途の川を渡るのには時間がかかり、どうしてもこちらに残されている亡霊がいます」

「まさか…………」

「その亡霊達が、花に乗り移ったのが今回の異変の原因です」

「……黒幕がないのは？」

「ただ、亡霊が三途の川を渡れるようになるのを待っているだけですから」

「それは……そうですね」

「だから、いずれは三途の川も掃け切れるようになって、いずれは収束しますよ」

「黒幕がない……ねえ」

「サボっている小町を連れ戻したのもうすぐの辛抱です」

「サボっていたんですか……」

確かあの時会った死神だよな？

だからあの時逃げたのだろうか？

「ええ、仕事は多いとは言え逃げるとは何事ですねと」

「逃げるのはちよつと……」

そのせいで色々と面倒が起きたしなあと。

それに……逃げると都合が悪いことがまだ……

「だったら暫くの間、花達に苦痛を強いると言うの？」

「それしかありませんね……」

「まだ、続きをしたいのかしら？」

「結構です」

「はあ……蓮司、にとり」

「なんででしょうか？」

「帰りましょうか」

「分かりました」

自力で異変を解決する方法はなく、結局幽香さん頼りになりそうだ。
抜くのは危険かもしれないし、少しでもどうにかなる事を祈るしかない。

「待ちなさい」

「まだ何か？」

「貴女はもうどうでもいいです」

「そう言われると苛つくけど……だったら何よ」

「その人間、貴方は何者ですか？」

「俺ですか……？」

「ここに来る自体おかしいですし、何よりその妖怪と仲が良いのも何故としか言いようがありませんし」

「……浄玻璃の鏡を使えば分かると思いますよ」

「何故一々説明しないのですか？怠慢は罪ですよ」

「……説明出来るレベルでは無いので」

「全く最近の人間は楽になることばかり……」

「もう帰りましょう」

「……そうですね」

このまま残つてもまた説教をされるんだろうとしか思えないし、正直一刻も早く帰りたい。

「待ちなさい!!」

しかし逃げきれなかった。残念だ。

「私との約束を破ったようですね」

「約束はして無いですが……」

「余計な事は知るなど言つたはずなのですが」

「蓮司、会つたことあつたのかい？」

「一応は……」

「何故するなど言った事をしようとするのですか？人間は皆、不正をすればカッコいいとも思っているんですか？」

「それはもう悪口ですが……」

「全く……今後改めるように」

「ちよつと、どう言うことか聞いてないのだけど？」

「風見幽香、貴女が知る必要はありません」

「それではい分かりました、とも言うと思うの？」

「……彼の過去にやらかした事についてです」

「過去に……蓮司は妖怪の山以外でもやらかしてるの？」

にとりさんも話に混じって来る。

こうなるともう何も知らないで去りようが無いな……

「妖怪の山ではむしろやらかしたって言われたくないんですが……」

「まあまあ真面目に見えて私のように、大問題児だったんだなあ」

「にとりさんほど問題行動起こしてはないんですけどね……」

「それで、何やらかしたんだい？」

「覚えてないんです……それを思い出そうとして思い出すなと閻魔様に」

「へえ……蓮司はそこまでの事をしたのかい？」

「少なくとも貴女達が納得出来ないことかと」

「……」

異変を起こそうとした、或いは起こしたと思っている。

幽香さんは多分、花に影響しなければ介入して来ないだろうけど……春雪異変とかあつたため怖いが……

「別に、自分自身の事思い出す事は罪じゃないでしょうよ」

「かつての彼に戻られても困るだけです」

「それを決めるのはアンタじゃない」

「……」

「四季映姫、他者を侮るな」

「幽香さん……」

「前の蓮司なんざ知らないし興味が無いけど、少なくとも今の蓮司がそうなるとは思わないわ」

「有難うございます」

「……どうせ思い出せないと思いますし、杞憂しても仕方ありませんね」

「あら、何処へ行くの？アンタに直接聞く事も出来るけど」

「いい加減仕事しないとイケませんか。サボる死神を叩き起こさないと異変が解決しません」

「それは困りますね……」

「いいの?」

「どうせ彼女は話してくれませんし」

「分かったわ」

幽香さんの一撃を喰らってよく普通に動けるなど思いつつ、閻魔様が戻るのが見送った。

「異変は……一応解決なのかな……?」

「まっいいんじゃないの?これでおしまいで」

この後どうするか考えながら、三人で太陽の畑へと戻った。

to be continued

百二十話 次の為に Good bye employ
e r .

「さて、無事異変も終わったけど」

「そうね……正直私一人だこの異変で、ただただ虐め回っていたでしょうね」

「幽香的にはそれでも良さそうな気がするけど」

「まあね。結局今回は満足したとは言え、一人でもやりたいようにやっていたらろうし」

「それはそうね」

「だからちよつとぐぬぬってなるのさ」

「別に、二人の存在があつた方がマシだと思つたからいいと思うけどね」

「おっと、いきなりデレられると思わなかつたな」

「本音を言つただけよ」

「それが本音なら嬉しい限りだねってね」

にとりさんも笑っている。

正直ここに迷い込んだ時からすると驚きでもあるが。

「それで、これからどうするの?」

「おや、てつきりまだ奴隷をやれとか言われると思つたけどね」

俺も正直そう思っていた。

「ここから逃すわけないとか、用済みだとか十分に考えていたんだが……」

「必要ないわよ。むしろこれから亡霊どもが消えるまで花に集中しなきゃならないから、二人に構ってる暇はないの」

「そうか、それは残念だね」

「あら？もっと奴隷でもやってたかったのかしら？」

「いやいや、ただ単純にここなら何作っても文句は言われなかったからね。そう言う意味では居心地が良かったのさ」

「文句は言つたつもりだけど？」

「それでも優しい幽香様は許してくれたからね」

その度にぶつ壊されていたけど……それでいいのか。

完成品を眺めるよりも作る事に価値を見出しているんだなあ。

それなら妖怪の山でも散々小言を言われていただろうし、にとりさんには都合の良い場所だったのかもしれない。

「どちらにせよここに残る気なんて無いでしょうし」

「まあね、私にもやらなきやならない事があるからね」

「どうせいつも通りロボット作りでしょう？ マシなの出来たら持つてきなさい」

「えー、幽香壊すじゃん」

「花のためになりそうなら残すわよ」

花のためになりそうな物も壊していた記憶があるんですが……
便利でも強そうなら問答無用で戦う気がするんだよなあ……

「難しいなあ……と言うか暫くはロボット作る予定無いけどね」

「……驚きだけど」

「太陽の畑を去った後は、幻想郷回るだろうからなあ。今回の件も含めて」

「にとりさん、今回の件とは？」

今回何かあったつけと尋ねる。

行く事は話し合ったが、それ以前はそんな気は無かったはずだし今回のつて言うのが疑問だが……

「蓮司の過去についてもついでに探るんだろ？」

「それが出来ればベストですが」

成る程そう言うことか。

ただ見つかるか分からないし……八雲紫がまた何かしてきそうで怖いのもある。

「ああ、結局一緒に行動するのね」

「へへん、羨ましいだろう」

「それは正直、別に羨ましくもなんとも無いのだけど」

「ちよつとー幽香ー、蓮司泣いちゃったじゃん」

「いや……泣いては無いですが」

「なんでだよー、泣けよー。今なら許されるぞ?」

「いや何故!?!そんな大事な事ですか!?!」

ノリに付いて行けず置いて行かれた気分になる。

ただ急に泣くのは無理だし、幽香さんの前で泣いたフリは命に関わる。

「ほんと見てて飽きないわね」

「いいんじゃないの、幽香も混ざりたければ混ざれば」

「柄じゃ無いわよ」

「そんなの気にしなくていいのさ。妖怪だろうと人間だろうと、自分本位で動くものさ」

確かに柄では無い気がするが、他人の目を気にし過ぎても仕方がないと。

自分のやりたいようにやればいいと思う。

「まっそのうち考えるわ」

「えー今」

「それはないわ」

「残念、残念」

そう言いながらにとりさんは俺の方を見て来る。
ん？どうしたんだろう？

「ほら蓮司、そろそろ行く準備は出来たかい？」

「今まで話してたんですけど!？」

準備していないのは目に見えた筈なんだが……

「全く、ちゃんとしなきゃダメだろう」

「ちよつと待つてください」

慌てて準備をする。

とは言つても……死に戻つてから初めに落とされたため、大した物を持ち歩いてなかつたが。

「出来ました」

「それじゃあ幽香、また次会うのはいつになるか分からないが……」

「安心しなさい、花を害するようなら、夜にでも枕元に立つてあげるから」

「そりや大変だ、大事にするさ」

大変なのは大変だが……むしろ方法はそれしかないのか!?

「それと蓮司」

「どうしました?」

「貴方が耕した土地……奪われはしたものの、コイツらはしっかりと育てるから安心しなさい」

「あつ管理してくれるんですね」

結局花は咲いているが、それをどうするか決めていなかった事もあり、こうなるならば有難い。

「前も言ったけど花には罪が無いもの」

亡霊には罪があらうと花には無いと。

どっちみち駆除は花ごとってわけにはいかないから暫くの間は一緒なんだろうなど。

「幽香さん、半年間有難うございました」

「……」

「あの……幽香さん」

「扱的に感謝されるのは予想外でしか無いんだけど」

「結果的ですが……ほぼ毎日回ったり耕したりして、体力ついたりもしましたし」

「何？貴方はドMか何かなの？」

「……違います」

流石に話がぶっ飛びすぎている。こう言うのは良くない。

「てつきり虐めてあげるから残りなさい。たとえば、太陽の畑に残りそうだったけど」

「勘弁してください……」

「分かってるわよ。私だって牙を抜かれた獣に興味は無いもの」

「蓮司は牙が生えてても獣程脅威は無いだろう」

「言えてるわね」

……悲しい。すつごく悲しい。

「それじゃあ、また気が向いた時があれば」

「分かりました。またいつか」

最後までこちらを見てくれる幽香さんの方を見つめ返しながら歩き始める。そうして二人は多少の名残惜しさを感じながらも、太陽の畑を後にした。

next episode

〈 廃洋館準備編 〉

百二十一話 行くべき道は 〉 next place o

f destination.

――

太陽の畑を抜けて、人里へと辿り着く。

妖怪が人里で歩き回るのもなんだとにとりさんは迷彩服を着ているが……あれ実は
 宿代払いたくないだけなんじゃ……？

「ふう、久々に床が硬くないぞー」

宿屋に着いた途端にとりさんは迷彩を脱いで畳に寝転ぶ。

はしたないと一喝するべきなのかもしれないが、互いに疲れているしなあ……

「にとりさん……宿代は払わなきゃダメですからね？」

一応はこの件だけ釘を刺しておく。

「黙ってればバレないって……」

しかしにとりさんも文句を言ってくる。

「やっぱり代金を払いたくないだけなのでは……？」

「そんなわけあるか、ただ単に人に見られたくないんだよ」

「目立ちますしね……」

見た目もそれなりにだが、なによりもその背中のリュックが人の目を惹きつけてしま
うだろう。

「違う!!蓮司は私が人見知りだって分かっているだろう!？」

「それは確かにそう言っていましたか……」

ただ、胡散臭いと言うよりも……それ盾にして好き放題やっているような……

さつきは目を逸らした際に店頭販売していた商品を取っていたような気がするし。確証はないけど……

「と言うか違うだろう。何処行くかって話だ」

「まずは妖怪の山だと思いましたが……」

「分からなくも無いが……大丈夫なのか蓮司は?」

「正直……分かりませんね」

「出禁って何があったんだ?」

「文さん曰く天魔様がもう山に来るなど……」

「天魔様が……」

「やっぱりヤバいんですか？」

「相当ヤバい、踏み込めば死ぬと思う」

「……マジですか？」

「マジだよ、蓮司に死なれると困るし妖怪の山に戻るのは無しだな……」

「だったら……文さんどうしましょうか？」

「どっかで会うだろ、気にしなくていい」

「いいんですかね……それで」

「どうせ悪口やイキリしか出来ないような天狗だ。もうちよい蓮司を見つけれずに苦しませておけばいい」

「はあ……」

やっぱり同郷の妖怪からも評判が悪いようだな……

ただ探するのはほぼ不可能だし、文さん……色々と頑張ってください。

「それで……何処行くかだな。正直あちこちへ訪れて、色々と見て回りたいが……」

「俺としては紅魔館とか久々に行きたいですが……」

「え？紅魔館行った事あるのか……？」

「はい……今回は無いですが」

「あー……でもなあ」

「どうしました？」

「吸血鬼と関わりたく無い」

「……悪い人達ではありませんよ？」

「それでもだ!!」

「分かりました……」

流星に会いたく無いと言っている以上、無理やり合わせるのもあれか。

にとりさん的にはなんでも好きな物作らせて貰いそうだけど……それこそレミリアと合わせると異変となりそうな物まで完成しそうか。

「永遠亭……は言っても仕方ないですし地底は？」

「は？」

「ごめんなさい……」

凄いい形相をされた、紅魔館の比ではない。

文さんも嫌っていたが、にとりさんも大差ないらしい。

「妖怪の山の妖怪達はなあ、鬼に死ぬ程会いたくないんだよ。わざわざ住処に行くなんて馬鹿げているだろう!!」

「それはそう……あれ？」

「何？」

「地底の存在をそう言えば知っているんだと」

飛び回っている文さんはまだしも、妖怪の山は閉鎖的だろうし全く知らないと思っ
いた。

「……人間達は知らないかもしれないけど、妖怪の山の近くには地底に繋がる道がある
からね。地底の妖怪達は出られないようになっていくけど」

「……マジですか？」

迷いの竹林にも存在していたのに、妖怪の山付近にもあるのか。

最初に落ちた場所もあったし、ヤマメさんが居たあの入り口も……

外の世界を嫌っているようだが……あちらこちらから繋がっているらしい。

そうになると、いつ地底に誰が訪れることになるか分からないし、気が気でないであ
うさとりさん達が心配にもなるが……

「だから鬼だらけなのも知っている、絶対に行かない!!」

「そこまで言うのならば……」

「正直だ」

「どうしました？」

話が続くように耳を傾ける。

「レーダーあっただろう？」

「ありましたが……それが何か？」

「あの時地下を指したのを覚えているかい？」

「ああ、故障してたと言う……」

今となっては本当に故障していたのか疑問に思うが。

「地下を指したから故障としか思えなかった」

「どう言う事です？」

「河童と鬼は相容れない。私に姉妹が居たとしても、地下で住む事はあり得る筈が無い」

「断定するんですか……？」

「ああ、するよ。少なくとも姉妹だとしても地底の住人なら私は用が無いから」

「そこまでですか？」

「あまり山の都合を話すわけにはいかないからこれ以上は言えないけど……地下に万が一にでも住んでいるとしたら。そんな奴は私の家族じゃない」

「分かりました……深く追求しないようにします」

流石に山の都合を聞くわけにもいかないしな……そもそも理解出来ない気もするし。ただ……疑問として核施設で河童が働いていた気がするが……余計な事は言うべきでは無いか。

「それで、何処行くかだけど……蓮司地図は？」

「はいここにあります。どうぞ」

持っている地図を渡す。

永遠亭とかは書いてないし最新版が出来れば欲しいが……無いよなあ。

「本当に行きたくない場所ばかりだな……」

「にとりさんの場合更に厳しそうですね……」

「そうなんだよな……今でも一刻も早く人里を去りたいし」

にとりさんがあちこちを指で追いながら一人で探しているようだが……
冥界の方を指差しながらブンブンと首を振る。
どうやらそつちも問題がありそうだ。

「そもそも蓮司、お前冥界に行ける手段あるのか？」

「……無いですけど」

歩いて行けるとは思っていない。

だが飛ぶ事は出来ない……訪れるのはやっぱり無理か。

「私も人間や妖怪が少ないところがいいな」

「妖怪が少ないところと言えば太陽の畑ですが」

「冗談」

「……Uターンしても仕方が無いですしね」

お別れを済ませてUターンするは本気でわけが分からないしな。

「だったら……目を瞑って……」

「それほぼ行きたく無い場所に向かう事になりますよ？」

「……そう言われるとそうか」

慎重に選んだ方がいいだろう。

あまりにとりさんに重圧掛けてもいけないし。

「あーもう分からない!!」

「だったらここはどうですか？」

「(い)は……?」

霧の湖? いや違うな……その近くにある洋館か?

「紅魔館に近いじゃないか!!」

「別に紅魔館に寄らなければいいでしょうに」

「それもそうだな……しかし洋館か」

「引き籠りのにとりには過ぎたる物件ですけどね」

「何をー!!」

……何とかデジャブを感じる。

懐かしいと思う事もあるが、それ以上にいつからそこに居たかだ。

「つてうわっ!?!いつの間に居たんだ」

「いつからでしょうね」

「文さん……」

「初めまして小野寺蓮司さん。いやもしかしたら初めましてじゃないかも知れませんが」

覚えてはいないけど、忘れないようになんとかしているような……そんな感じで話しかけてくる。

「申し訳ありませんが聞きたい事が多いので、少しの時間お願いします」

こちらとしても話したいことがあった為有難いが……あの時とは違い、忙しくなりそうなきしかしなかった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百二十二話 事前準備のために g o t o s c h o

o l .

「聞きたい事とは？」

「小野寺さん……ですよね？以前妖怪の山に来た記憶は？」

その話か……とは言っても誰しもがそうだよな。

今回覚えているかどうかで。アリスさんにも会いたいんだが……何処にいるかも分からないな……

「あります。一時期妖怪の山へ訪れていました」

「成る程それで……分かりました」

「まあそれでも……」

「あついいです」

「え？何がですか？」

「理由ですよ。記者として自分自身で追及してこそなので」

「分かりました……」

追いつけない気がするんだけど……まあそれでも言うのは無粋か。

「それじゃ、今度はこつちから聞くけど……文はどうするの？」

「どうする……と言うのは？」

「この後どうするかだよ。まさか私達に行けと言って、そのまま自分は任せっぱなしとか違うだろう?」

「おや?任せっぱなしと言うのは?」

「とぼけるなよ。どうせ何か廃洋館でありそうだから行かせようとするんだろ?」

「それがお二人の望みだと思っっていますが……」

「確かに望んではいるけどお前の道具にはなりたくないよ」

「えー……でも」

「おい、文!!」

にとりさんが怒りだす。利用しようとしてたのはーって思ったが、それでもにとりさんらしくない程怒っているなど。

「にとりさん？」

「蓮司、変更だ変更。付き合ってられないな」

「え？いきなりどうして……」

「いや違うんですよにとり」

「何が違うんだよ、危険な場所なんだろう？」

「危険じゃないなら、なんで文は来ないんだよ」

「忙しくてですね……本来であれば私はにとりに戻って来て良いと伝えに来ただけなんですからね？」

「あー、悪いけど暫くは戻らない」

「分かっていますよ、だから廃洋館にと」

「文が来ないといかないよ」

「うぐつ……文々。新聞も割と締め切りが近いんですが……」

「それだけじゃないだろう？何か隠してるだろ」

「……何をおっしゃいます？」

「スクープに飛び付く文が締め切りくらいで来ないわけないだろう」

舌戦が繰り広げられている。置いてかれているが……にとりさんを応援しておこう。

「……ちよーつと良くないものが住んでいるとの噂で」

「よくそれで私達に言えたな……」

「気になるは気になるですよね……ですがあまり心霊体験は新聞のウケが良くないので」

「だからって他人に任せようとするな」

「……分かりましたよ、私も行きます。心霊現象がどれほどか分かりませんが」

「むしろ蓮司を連れて行きたくないんだが……」

「人間がいるといたないとは変わるって噂ですし、にとりに頑張ってもらうしかないです」

「え？私が何しろと？」

「幽霊を探知する機械でも作ればいいんじゃないですか？」

「無茶言うなあ……やるけどさ」

「にとりさん……頑張ってください」

「ああ頑張るさ……ただここじゃまずいけどさ」

「まずいですか？」

「流石に宿で作ってるのバレたら怒られるだろう」

「あー……確かに無賃ですし、色々と騒音酷そうですし」

「文どこか無いかい？」

「あー……一応聞いてみましょうか」

そのまま文さんに連れてかれるまま里中を歩いて行つた。
なお、にとりさんはまた迷彩で姿を消していった……せこい。

「ごめんください」

「なんだなんだ？新聞は買わないと言つたはずだが？」

里の中でも比較的大きめな施設へと着く。

「ここは一体？」

「ああ、客人もいるのか？ようこそ、何用だ？」

銀髪に閻魔様ほどでは無いが、不思議と角ばつた帽子に赤いリボンが付いている。
服は上下一体で青に染まっているが袖だけが白い。

「唐突にお邪魔して申し訳ありません」

「いや、それは構わないが……君達は？」

「小野寺蓮司です」

「河城にとり、河童だ」

文さんに後ろで出ろ出る言われてて渋々出たようだ。

ただ……にとりさんが関わるだろうし仕方ない事だろう。

「人間と妖怪が一緒にいるのも珍しいが……私が言えたことでは無いか」

「え？」

もしかして妖怪なのか？だが、ここは人里の中心部の筈なんだが……

「上白沢慧音だ、この寺子屋で先生をしている」

「あつ彼女は半妖ですよ」

文さんがとんでも無いことを継ぎ足した気がするんだが……

「言われた通り半妖のワーハクタクだ、ただ気にしないでくれ」

「分かりました」

こちらとしても半妖とか妖怪だとか然程気にしていないしな。

それでも無いとにとりさんと一緒に行動なんて出来ないし。

「それで……本当に何しに来た？生徒になりに来たとかでは無いだろうし」

「場所貸してくれませんか」と

「……いきなり来て無茶苦茶言うなお前は」

「ここしか無いんですよ」

「いや、人里には宿泊施設結構あるだろう!？」

「少し作りたい物がありました……」

「……ここじゃ無いとダメか？」

「ちよつとメカ関連でして、人里で作りたく無いんですよね」

「……ああ、そう言えば河童にはそういう技術があると聞いたな」

「ですので、少しお願い出来ませんか」と

「……正直寺子屋の子供達にも見せたく無い気がするが」

「いやあ、頭の固い大人と違って子供達には今後とも考えて見てもらうのも手ですよ」

「人前でやりたく無いんだけど!？」

「まあにとり、場所を貸してもらうんですから」

「しかも子供って……絶対に邪魔される奴じゃん」

「頑張ってください……?」

「何が言葉を掛けるべきか分からなかった、とりあえずにとりさんには頑張つて欲しいが。」

「それでも、私は許可を出しにくいんだが」

「慧音さんにも利点がありますよ」

「なんだ？ 言つて貰えないか？」

「寺子屋の授業がにとりさんが開発している時だけ面白くなるので、生徒達にもプラスですね」

「……」

「名案でしょう！」

「私の授業はつまらないのか……」

「なので、少しの間お願いしますって事で」

「分かった……私の授業……」

「人前嫌だ……」

結局、意気消沈した二人を置いて話が纏まっていた。

結局これ以上の言葉が浮かばなかった俺は、ただ二人を見ていただけだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百二十三話 寺子屋の日常くtwo people i
n d i s t r e s s .

今日もまたにとりさんの元に子供達が集まる。

何を作っているのか分からない筈なんだが……見慣れない工具や製造に目を輝かせている。

「えつと……大丈夫ですか？」

それと同時に塞ぎ込んでいる先生の姿があつて、たまらず声を掛けた。

「ははは……大丈夫だ」

「全然大丈夫そうに見えませんが……」

「いや……私の授業で見せた事ないような顔をしているしな皆」

「どうしても子供は実験とかが大好きですからねえ」

「なんだか、先生で居る自信が無くなってくるよ」

「大丈夫ですよ、自信持つてください」

「……にとりの奴の方が先生やった方がいいんじゃないか？」

「……あの顔見てください」

にとりさんもとりさんで苦しんでいるような表情をしている。

人見知りな上に、子供達が手を出しそうになって気が気じゃないんだろう。

手伝おうにも妖怪の山にいた頃から製作には携われないし……それ以外にもあったしなあ。

「こう言う時にどうにかって思ったけど文さんは居ないし……」

恐らく新聞を作りに行ったであろう文さんは寺子屋にいない。
逃げられた気もするが……

「だから慧音さんしか先生は出来ませんって」

「……そうかな？」

「そうですよ」

「よし分かった!! 元気出た。有難う！」

「それなら良かったです」

「お前らー！ 見学は終わりで授業に戻るぞ！ 算数だ算数」

「えー」「やだー!」「なんでだよー!」

文句を言う生徒達を引つ張りながら授業を再開したらしい。
時折折れるようだが、立ち直ったら本当に強い先生だなと。

「……助かったあ」

「にとりさん、お疲れ様です」

「いやあ、本当は蓮司も助けて欲しいんだけど」

「……俺初日にそれやって散々怒られました」

「悪かったって……」

初日は一応触ろうとしていた子供達を危ないと注意していたが煩いと怒られた。

それで一応注意はするものの近付かなくなった。

「それに、俺が言ったところで……」

後何故か知らないうちに格付けがされているようだ。

子供達にとつて何故か俺は格下で言うこと聞かなくてもいいみたいに思われているようだが……

「キツイなあ……」

子供達にはそう言う傾向があるとは言え、雑魚扱いされたのは……何とかする物がある。

「まあ、後少しの辛抱だ。頑張ってくれ」

「……俺の立場を上げようとはしないんですね」

「この方が面白いしな」

「……」

色々と理不尽だ。

「それじゃあ私は製作に戻ろうかな」

「いないうちにやらないと効率落ちますもんね……」

「気が気じゃないからなあ……」

「それじゃあ俺は教室の方見ておきますんで」

「頼んだよ」

そのまま教室へ向かい、後ろで授業を聞かせてもらっている。

習った事ある内容だから問題はないが……

「(真面目過ぎるせいかな、つまらないのは分かりはする)」

分かっている身からすれば問題はないが、子供達にとつては地獄かもしれない。

教えるのは上手だし分かりやすいんだが……つまらないせいで集中力が皆切れてそ
うだ。

「にとりさんの方見ている子もいるし……」

チヨークを投げられてヒットしている。

分からなくもないがちゃんと聞こう。そうしないと将来に響くぞ少年。

「俺は教師経験ないし教えることも出来ないしなあ」

どうすれば面白くなるとかも分かりやしない。だから口を出す事が出来ない。

「さて今日はここまで、皆気を付けて帰るように」

授業が終了して皆帰る……とはいかずにとりさんの方へと集まろうとする。

しかしもう勘弁してと言わんばかりに迷彩で隠れたにとりさんを見つけられずに結局皆諦めて帰った。

「ははは……日に日に生徒達を取られてはいないか……」

「お疲れ様です」

「お前も嘲笑いに来たのか？」

「なんでそうなるんです……？」

先生がここまでメンタル弱くて本当に務まるのか不安になる。

「いやあ、困った困った……正直子供達が危な過ぎて本当にここ以外でやった方がいい

と思うんだけど」

全員が帰つたのを確認したのか、にとりさんが迷彩を脱いで現れる。

「メカの類とか異端って言うような人達ばかりみたいですから……」

「やっとストーブが導入されたんだもん……遅れているとは言え、こっちの技術を受け入れてくれなそうだ」

「子供達にウケているからいいじゃないか……」

「落ち着いてください……」

「なんだよー、ずるいぞー」

「……ズルイと言われても技術は仕方ないだろうよ」

「私にももつと人気が出れば……!!」

「人気はあると思いますよ」

「何処がだ……」

「少なくとも授業が問題あるのであつて、普段の子供達から慧音さんは人気者だとも思
うが。」

「むしろ集まられ過ぎても困るから、慧音がもつと引き留めて欲しいんだけど」

「嫌味か貴様あ!!」

「いや、本当の事を言っただけで……」

「待っていろすぐに始末してやる!」

そのまま慧音さんにとりさんの鬼ごっこが始まってしまった。
苦笑いしながらそれを見続ける。

「にとりの奴はだいぶ難航してそうですね」

「文さん、戻っていたんですね」

「ええ、今ですが……」

「皆の人気者のせいでだいぶ苦労しているようですよ」

「悪いような気もしますが……良かったです」

「え？」

「にとりの発明は凄いですからね。人見知りも相まって埋もれています。もつともつと人気者でも間違いないんですよ」

「そこまでですか？」

「ええ、ですからこうやって人気が出てくれたのもいい感じです」

「まあ、確かに凄い物作って怒られてじゃあにとりさん可哀想ですし」

一緒に作った巨大ロボット。今回はにとりさん単独だったが、怒られただけなどは理不尽で仕方ない。

「あの子がもっと頑張るようになるために期待していますよ小野寺さん」

「俺ですか？」

「はい、今のにとりの行動原理は貴方なので」

「ただ……作ってもらってばかりなんですけどね」

「いいんですよ、それもとりは喜んでるので」

「無理させないように応援させていただきます」

「そうしてください」

そのままにとりさんの方に視線を戻すと、鬼ごっこは終わったようで二人笑い合っていた。

人見知りのにとりさんがあややって他人と笑い合えるのはいい傾向なのかもしれないと。

謎の親面みたいな事をしてしまった事に自分自身で困惑しながらも、少しだけ笑みが溢れたのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百二十四話 人間と妖怪 thoughts half

apparition.

にとりさんの製作が徐々に進んでいくたびに慧音さんが塞ぎ込むんだがどうすればいいのだろうか？

「まあ、もうすぐ出来るしな」

「だからって放置でいいんですかね？」

「どうしようもないだろう？」

「それはそうですが……」

「それよりもだ、聞きたい事があるんだが」

「どうしました？」

「絶縁体……手に入らないか？」

「絶縁体ですか……？」

「ああ、放電されるとまずい場所があつてな」

「ガラスはともかく……ゴムだっけ？」

「ゴムは売ってるかな……？」

「里の事は慧音さんに聞いた方がいいか……」

「そのまま慧音さんの元へと訪れる。」

「ん？どうした？」

良かった……流石に塞いで無かった。

「慧音さん、絶縁体って何処で売っているか分かりますか？」

「絶縁体……あー、電気を通さない奴か」

ストーブとかがあつた以上流石に幻想郷にも電気はあるだろうし分かってもらえて良かった……

「何処かで売っていませんかねと……」

「流石に人里の何処で何が売っているかまでは分かっているか……」

「そうですよね……」

「ただ……そうだな、諦めるのはまだ早い」

「え？」

「着いて来てくれ」

そのまま慧音さんに着いて行くと人里を抜ける。

「あの……大丈夫なんですか？」

「ん？ああ寺子屋は休みだし問題ないぞ」

「そうでは無くて……人里の外に出て何処かにあるのかなって」

「行けば分かるさ」

そのまま後に続くと……

「いやは……」

迷いの竹林……何故ここに？」

「よし、着いたぞ！」

「もしかして恨んでらっしゃいますか？」

「何故そうなる？」

「いや……迷いの竹林ですし迷わせる気なのかなって」

「そんな事はないぞ」

「では何故」

「絶縁体と言われたからなんだが……」

「え？」

「え？つて竹は違うのか？」

「……すみません、知識不足だったようです」

竹つて電気を通さないのか……ちゃんと覚えておかないとダメだな。

「勉強不足は仕方ないとは言え、私を酷い扱いしてないか？」

「いえ、生徒達が取られたとかで何かありそうかなと……」

「逆だ逆、その点は感謝しているよ」

「え？」

「え？つて何でだ……」

「いや、申し訳ないのですが、正直いつもの行動がそうは思えなかったので……」

「……生徒達に笑顔が増えたのは事実だ、感謝している。それとは別に私のプライドが邪魔したわけだが」

「……」

もしかしてプライドが理由で日頃からメンヘラってるのか……？

「二人が悪いことではないのは分かっているんだけどな」

「それなら良かったですが」

とりあえず、恨まれて無いと分かっただけでも良かったのだろう、うん。

「それじゃあ竹を持ち帰るぞ」

「大丈夫ですかね？ 伐採しても……怒られるような？」

「あの子は問題無いって言ってたし大丈夫だろう」

「あの子……？」

「こちらの話だ」

気になるが今は先にこつちか。

第一、聞いた所で分からないだろうし。

「量は聞いてなかったが……一本あれば十分だよな？」

「流石に大きいものは作らないと思いますし」

楽々と育ちきつた竹を、バランスを崩さずに持つ姿に驚きつつもそのまま人里へと帰って行った。

一本丸々だし、入る前に何か言われると思つたが……慧音さんの人望が理由か素通しされた。正直凄い。

「蓮司、戻って来た……うわ」

「うわは無いでしょううわは……」

「いや……これは誰だつて言うだろう」

「お望みの絶縁体だし文句は無いだろう？」

「文句は言えないんだけどさ……」

「何かあるのか？」

「……親子丼を頼んで、鮭といくらの親子丼だったような感じ？」

「……何となく分かりますが」

合つてはいるが、何かが違うようになって感じて……使えるし問題がなさそうに見えるが。

「感謝はする……使えなくは無いしな」

「それなら良かったですが……」

「後数日で仕上がる予定だ」

「分かりました」

そのまま、邪魔にならないように慧音さんと部屋を出て行った。

「本当ににとりは凄いな」

「凄いですよね」

「私だとチンプンカンプンだしな。分からない知識を持つ者は本当に尊敬するよ」

「慧音さんも授業を見ていると、あらゆる知識を持っているようで尊敬しますけどね」

「経験の差さ」

「それでもですよ」

「有難う」

教師つて大変だなと思ったし、だからこそ纏める力のある慧音さんとかはより凄いなと。

「だけど、私はお前だって凄いなと思うぞ？」

「俺ですか……？」

寺子屋に来て、何かした記憶は無いんだが……

「人間と妖怪ってどうしても受け入れ難いな。半妖の私だって昔は苦労したさ」

「まあ……分からなくも無いです」

種族が違うとどうしても溝が出てしまう。

俺だって最初の頃はだいぶ妖怪に敵意を持っていた。

「なのに、妖怪と仲良くしている人間を見つけたんだ。こりや尊敬するさ」

「皆が優しい妖怪だからですよ」

出会った妖怪達は友好的な妖怪が多かったのも多い。
だからこそ、警戒心が薄れているのかもしれないが。

「友好的かなんて人間には分からないさ。出会えば石を投げるようなものだから」

「何故……」

「危険だから。その妖怪は優しくても、人間は弱いから自分を守らなきゃ簡単に妖怪に殺される」

「……」

「だが力に差があるとは言え人間も妖怪もそう変わらんよ。仲良く出来るならそれに越した事はない」

「……そうですね」

「これからも続けてくれよ」

「勿論です」

その後もう少しだけ話して解散した。

翌日からは昨日までの近寄り難い雰囲気は無くなつていき、少しずつ話す時間を増やして行った。

正直な話をする、まだまだ話したい事は色々あったが、遂に待ちに待ったにとりさんの作品が完成したのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百二十五話 湖にて～fairy mischief.

「それじゃあ、有難うございました」

「構わないさ、こつちも世話になつたつて言つてたしな」

「それじゃあ、また人里に来た時寄りますね」

「そうしてくれ」

「でだ、蓮司」

「なんですか……？」

「あの馬鹿は何処行つた？」

「馬鹿つて……」

確かに文さんまだ来てないんだよな……

逃げた……では無いと信じたいけど。

「……どうします？」

「一先ず行くぞ。もうここにいるのは勘弁だ」

「そこままでですか……？」

「機械壊されても困るし、事故られても困るんだよ」

「確かにそうですね……」

「だから少なくとも、霧の湖に行こうかとは思っている」

「霧の湖ですか」

確か紅魔館の前に広がる湖だった筈だ。

あそこに何かあるかな……

「ただ、廃洋館には絶対に行かないように。文が来てからだ」

「分かりました」

そのまま、寺子屋から出て行く……

「つと……」

「あつごめん」

「いや（ちらり）……」

あれ……妹紅さん？何故ここに？

「あれ？妹紅さん？」

「ん？誰だっけ？」

「いや……」

「行くぞー」

「あつ分かりました」

流石に今妹紅さんに説明する時間も無いし、にとりさんの後を追った。

「なんだったんだ……？」

「妹紅じゃないか、どうしたんだ？」

「慧音、久しぶり」

「この前竹林行つたんだが、すまなかつたな」

「別にいいよ、毎回会いに来いなんて言わないしき」

「それならいいが……」

「所でさつきのは誰？なんか河童もいた気がするんだけど」

「ん？蓮司とにとりだが」

「蓮司……？」

「どうした？」

「いや、苗字は？」

「確か小野寺だな」

「小野寺蓮司……」

「どうした？」

「何処行ったか分かるか？」

「ちよつと聞いてなかつたな……」

「……残念だな。今度来た時教えてくれ」

「何かあったのか？」

「気になっただけだ、会えば分かりそうだけだな」

「そうなのか？ だったら会えるといいな」

「ああ」

少し考えて、妹紅は諦めたように帰って行った。

—————

「……か……」

来たのは初めてではない。ただ……あの時は通り過ぎただけだ。

「大丈夫か蓮司？」

「大丈夫です、にとりさんも大丈夫のようで良かったです」

名前に恥じない霧の量だ、レミアアに捕まって通り抜けたあの時と違う。割と迷いかけている。

「油断したら本当に見失うからなこれ……」

「そうですね、ただでさえ見にくいですから……」

誰か風でこの霧を飛ばしてくれないかとまで思う、当然そんな事はないが……

「こつから廃洋館つて行けるんですか？」

「ああ、それは問題ない。私は霧の中でも見えるしな」

「離れても少しはどうかかなりそうですね……」

「だからって離れるなよ？」

「分かりました」

気を付けながら辺りを進む。

「後……魔洋館は文が来るまで行かないからな……？」

「……なんで霧の湖に来たんですか？」

「文が先に来てるかなと」

「居ませんね」

「本当に何処行つたんだよ……」

半ば呆れているようだ。ただ本当に居ないのが気になるな。

「こう言う時逃げるタイプじゃないですよね？」

「ああ、だから私もこつちとしか考えてなかったんだよ」

「何かあったんですかね……？」

「さあな……アイツの考えは私にも分からないし……」

「じゃあ一度戻りますか？」

「そうだ……な……あれ？」

「どうしました……？」

「使えなくなってる……」

「え!?何故急にそんなことが……?」

にとりさんのが使えなくなるって不味くないか……?だって霧の中が見えないんだろ?

「なんで急に故障したんですか?」

「ちよつと調べてみる……」

了解と、にとりさんの返答を待つ。

分からないと動き辛いし……

ただ……なんかちよつと……

「にとりさん……寒くないですか?」

「寒いか?湖だし普通……いや寒いな」

まるで氷が近くにあるのではと思う違和感を感じる。
訪れてすぐと比べて凍える程だ……

「これが理由だ」

「何か分かったんですか？」

「いや、理由は分からない……ただこの寒さが機械が不調の理由だ」

「……あー」

確かに寒いと機械の調子は悪くなるな……

湖はただ冷えるだけ……で済むレベルでは無さそうだが……

「寒い……寒いって……」

震える身体を揺さぶりながら原因を探す。

霧が濃すぎて見えないんだが……

「ストロブでも用意するべきだったかな……」

「どうせ使えないですよ……」

「そうだな……」

原因が分からない冷却に辛くなってくる。

身体が動き辛い……一体何が……？

「ちよつと待つてろ蓮司……私がなんとか……」

そう言うにとりさんの声も弱々しい、これはまずい。

躓くわけには行かないのに。

「みーんな凍っちゃえ」

その言葉だけ聞こえて、最後は……
霧が吹き飛んでいた。

「え？」

「置いてくなんて酷いですよ」

「文さん……？」

空には団扇を持った文さんが居た。

「遅いぞ文……」

「にとり達が先に行ったんじゃないですか」

「お前の事だから、先に行つてると思ってたしな」

「霧の湖ですし取りに戻ってたんですよ」

霧を吹き飛ばすなんて芭蕉仙かこれ？とさえ思う。

「ふつつつふ、驚いているようですね小野寺さん。これは天狗の団扇ですよ」

「凄いですね」

「ただすぐに霧でまた曇るでしょう」

「だったらまた仰げば……」

「いえ……それ以上に……」

霧の晴れた先を見る。

そこには青髪の少女が居るが……羽的に妖精か？

「あたいが見つかったようね!!」

その妖精は腕を組んでいる。自分がやった事に自信満々そうだ。

「あの一、貴女は何がしたいんですか？」

文さんがなんだこいつみたいに尋ねている。

「よく聞いてくれたわね!あたいはチルノ、サイキョーの妖精よ!」

本当に最強なのかは分からない。

たださっきの冷気がこの子が放ったのなら確かに最強クラスがあるかもしれない
……

「どつちにせよ油断はしてられないな」

逃げるか戦うかは分からないが、どちらにせよ二人の動きに合わせてしようとする。

「二人とも戦いますよ」

「大丈夫なんですか？」

「自称最強程度なので」

「……」

「何をう！あたいはサイキョーなんだからな！」

そのまま攻撃をしてこようとしたのを文さんに打ち落とされた。

「なにー!?やるなあ……」

「残念ですが私のデータはかなりあるので」

新聞のために集めたのかは分からないが、それでも文さんが大丈夫だと言うのならば大丈夫だろう。

「にとり、やりますよ」

「あい分かった」

見ただけなら虐めにも見えるような、二対一が開始されたのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百二十六話 これより向かう先は～
r hell?
h e a v e n
o

……何が起きているんだ？

「ぐぎぎぎぎぎ……」

「ほらほら、どうしました？」

「ちくしよー！今から当ててやる!!」

「うーん文……文だけで大丈夫じゃないのかい？」

「何を言うんですかにとり、こう言うのは二人でやるから効果があるのです」

「これはもう虐めにしか見えないんだが……」

「いいじゃないですか。悪さした妖精にはいいザマですよ」

目の前にて弾幕を避け続けている。

何故避けられるのかか思ったりもするが……本当に何が起こっているんだ？

「まだまだ……あたいの力はこんなもんじゃない!!」

「それは当ててから言ってくださいよ」

「うっさいうっさい!!」

そのまま氷の塊を飛ばして来る。

ただし……正面には飛んでいない。

「ここまで当てられないのも驚きですね」

「たかが妖怪風情がサイキョーのあたいに勝てると思うなああああ!!」

ただ……やはり正面には飛ばない……

ここまで来ると見ている方も戸惑うんだが……何を見せられているんだ？

「……」

「あれ？にとりさんどうしました？」

にとりさんがこちらの方にやって来て戸惑う。

何かあったのだろうか？

「……飽きた」

「え？」

「正面に立って何かしないといけないの飽きたし……文だけで大丈夫だろう？」

「……それでいいんですか？」

「余裕って言ってたしな……」

「なら分かりましたが……」

にとりさんが離脱した後も、文さんは変わらず正面でおちよくっているようだ。

「ふん、やっと一人落ちたようね。中々耐えたと思ったけど所詮はその程度」

「あーはいすごいですねー」

「何よ!!」

「当たってないのに、倒せたと思ってたて凄いですねえと」

「すぐに貴女も分かるわ。その恐ろしさが」

空氣が途端に変わる。また冷え込んできた。

流石にこれはどうにかしないとまずいか……？

「アイシクル……」

「流石にそれは小野寺さんが辛そうなのでダメですよー」

そのまま風圧で地面へと叩きつけた……痛そうだ。

「うぐ……うぐぐぐ……」

「にとりと同じく私も飽きたので、そろそろ終わりにしませんか？」

「これで勝ったと思うなよー！」

捨て台詞を吐いてそのまま逃走して行った。

「終わりましたよ」

「容赦無いですね」

「あれくらいしないと諦めないかなと」

「それはそうだ、ただ妖精相手でも加減はしたんだぞ？」

最後結構めり込んでいた気がするんですが……

「なので、大丈夫ですよ。そこの妖精さん」

「誰かいるんです？」

その後、草むらから出てきた少女に驚かされた。
誰もいるとは思って居なかったし……

「チルノちゃんが迷惑を掛けてすみません……」

「いえいえ、あの程度の戯れくらいなら問題ないですよ」

次は緑髪の妖精が現れた。

妖精と言えど髪の色は本当に多種多様だなあ……

「悪戯程度なら良いんですが……その人を殺しかけましたし……流石になど」

「大丈夫ですって、小野寺さんはこのくらいでは死にませんよ」

「死に掛けた気もしますがね……」

生きては居たが、あのままだとヤバい気はした。

「それで、君は？」

にとりさんもようやく動き始めた。さっきの妖精とは違ってこちらの妖精には興味津々のようだ。

「えっと……大妖精です」

「大妖精？」

「チルノちゃんのように固有名詞はありません」

「ああ……そうですか」

「だからチルノちゃんは凄いですからね」

「確かに……中央に当たらない以外は凄かったと思います」

「……本当にどうしようもないんですよねあれは」

どうにか出来るならもう既に対策してそうだしなあ……

「それで、襲つて来た理由は？」

「チルノちゃんと最初話してまして……この霧の湖に来る奴は悪い奴だと……話も聞かずに」

「あー……」

話を聞かないタイプなのはそうだろうなと思つたが……

「確かに、霧の湖に人間がいるなんてあの二人以外無かつたので怪しんでは居たんですよ」

「ですつてよ小野寺さん」

「仕方ないじゃないですか……」

そう言えば、まだ訪れて無かったんだなど。

「ですので、最初は私も加勢しようと思ったのですが……チルノちゃんに酷い事をしませんでしたし」

……いや、あれは結構酷かった気もするが。

「最後は仕方なかったのですが……どっちみちこつちが悪かったのでごめんなさいと」

「さつきの子に見習わせたいですねえ」

「……チルノちゃんはちよつと」

でしようねえ……

「それで、皆さんは何の用があつて霧の湖に？紅魔館ですか？」

「いいえ、違います」

「だったら……」

「あちらの廃洋館の方に用があつて来ました」

文さんは廃洋館の方を指差す。

すると大妖精さんは驚いた表情をする。

「え!?!あの洋館はお化けが出ますよ!?!」

「やっぱそうですか……」

「そうですかじゃないだろう……本当にさ」

「でも、そう言う話だっただろう？」

「それはそうだけど……」

「だから、変わりはありません」

「今まで、多くの死人が出たと聞きましたが」

「……多分それはそつちじゃなくて紅魔館の方じゃないですかね？」

「それはそうかも……」

……知っては居たがやっぱり紅魔館は。

「でもでも、お化けが出るのは本当なんですつてば!!」

「良いじゃないですか、記者として撮ってきてあげますよ」

「ひえーやっば怖い人達だー」

そのまま怯え出してしまった。

「これは文さんが悪いな……」

「絶対にトクダネがある事は間違いないです。説明してあげますよ」

「やっば文だけで行けばいいんじゃないか？」

「さつき助けましたよ」

「……そうだな」

二人とも助けられた以上、あまり強くは言い出せない。
と言うか俺も行く気はあつたし。

「もう知りませんから！崇られちゃえー」

さっきの妖精のように捨て台詞を吐きながら帰って行ってしまった。

「……さて、にとり。機械の調子は大丈夫ですか？」

「……ああ、問題は無い」

「小野寺さんも大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「それじゃあ……準備も終わりましたし、行きましようか廃洋館へと」

にとりさんの機械があれば、ある程度はどうにかなると思つてゐる。

それに文さんだつてゐる。一応幽霊にも会つたことがある。

当然同じタイプだと思わないし、悪霊かもしれないが。

「これもまた異変かもしれないしなあ」

そうとは決め付けは出来ないが、人が廃洋館で失踪し続ければ異変になるかもしれない。

それは止めないと思いつつ、湖から廃洋館の方へと歩き始めた。

next episodes

〱 廃洋館編 〱

百二十七話 廃洋館へ 〱 c u r s e d p l a c e .

……廃洋館、確かにいつ壊れるかみたいなのレベルで不思議な場所だ。

正直一人なら入りたく無い。

「……さて行くしか無いか」

「いやあ、ワクワクしますねえ」

「さつきまでやっぱ止めませんか？ 言ってた癖に都合いいね」

「嫌だなあ言ってますよそんな事」

……廃洋館に近づく度に言ってたんだよなあ。

ホラー苦手なのかな文さん？

「言つてません、絶対に！にとりの方が怖がつてるんじゃないですか？」

「うん、怖いよ」

「でしようね……え？」

「だから怖く無いならまず文が入つてよ」

「何をおっしゃいますかにとりさん？」

「ごめんね文、怖いつて言つてたの聞き間違いだつたよ」

「いえいえ、実は怖がつて居ましたなので止めましょう！はい！」

「いや、合わせなくてもいいよ。文が我慢する必要なんて無いんだから」

「……」

嘘を吐き始めた文さんも文さんだが……にとりさんがえぐいな。

「……三十六計逃げるに如かず!!」

そのまま飛び立とうとするのを、落とされる。

と言うか重い……なんだこりゃ？

「文が逃げると思ってたし対策させてもらったよ」

「だからってわざわざその機械作るの馬鹿げてませんか？」

「重力操作は元からあったもんだよ」

そう言えば幽香さんに少しだけ壊されてない機械があつたな……それがこれか。

「ですが……」

「残念だけどこれは文の負けでしょ」

「……分かったわよ！やればいいんでしょすぐに帰つて来るわ！」

文さんの口調が崩れている……もう退けないんだろうな……

「……ふん」

そつぽを向くように廃洋館の中へと入って行った。

「さて……つてちよつと!!」

ドンドンドンと音が鳴る。

中から音が鳴って、慌ててドアを開けようとするが開かない。

「どうなってるんだこれ……」

必死に開けようとしてもビクともしない。

扉も壊せそうなのに壊せないぞ……

「にとり!!悪戯はやめなさい!!」

「違うよ文、開けようとしてるんだけど開かないんだよ!!」

「はあ!?!そんなわけ……」

ドタドタドタと大きな音がする。

何が起きているんだ?文さんは無事なのか?

「文さん!!」

その直後ボタンと大きな音が鳴る。
扉が開かれて、文さんが出て来た。

「大丈夫です……ええ？」

大きなタンコブの出来た文さんが地面に倒れている。

本当に何があつたんだ……？

「文、大丈夫か？」

「してやられたわ……」

「何が一体？」

「幽霊よ……ポルターガイストか何かで扉は閉まるわ物が浮遊するわ、勘弁して欲しい
んだけど」

「ポルターガイストですか？」

「そうよ、悪質なね」

文さんはたんこぶをさすりながら答える。

確かに実害が出るなら悪質だな……

「だったらどうする文？お前の事だし探し続けるか？」

「いえ……今回は退くわ」

「意外だな。お前の事だし行くと思ってたけど」

「危険極まりないのよ。今回はこれだけで済んだけど……今度が本気だったら皆危ないわよ」

「……そうだな。用心に越した事はない」

「幽霊騒動が起きる原因は二つあるのだけど……一つは幽霊がそこを住処にしている事」

「もう一つは何でしょうか？」

「……その幽霊達が何かを隠している場合よ」

「何かとは……？」

「分からないけど、暴かれたく無い物よ。そう言うのを守護している可能性もあるの」

「……だったら文としては探したいんじゃないか？」

「さつき言ったでしょう？何かを守っているなら危険なのよ」

「確かにそうですね……そのためなら全力を出しそうです」

「後日……も正直考えたけど、危険なだけ。やめるか博麗の巫女を頼る事にするわ」

「霊夢さんは……引き受けるんですか？」

「呪われた館の対処だって巫女の仕事でしょう」

「そうなのか……？いや分からないが。」

「だから、どちらにせよ一度離れるべきね。ここに居て機嫌を悪くされるのは良く無いわ」

「……分かった。流石に今の文を信じない理由はないな」

にとりさんも了解する。

「ふむ……文の見間違ひも考えたけど館の中には幽霊が居るな」

にとりさんの方を見るとラジオのようなものを使っている。あれが作っていたアイテムか……

「と言うかにとり、それあるなら貴女が行くべきだったでしょうよ」

「文が見栄を張ったのが理由だろうよ」

「うぐ……」

正直どつちが悪いのかは分からないです。

「……まあ今はそれを言い争っても仕方ないから。一先ず人里辺りまで戻って考えるわ
よ」

「分かりまし……」

「蓮司、どうした？」

どう言う事だ……何故一体……？

「さつき閉まった筈の扉開いてませんか？」

文さんを吐き出して、その直後に閉まった筈の扉がまた開いている。

確認していたから閉まっていたと断言出来る。だが今の扉は開いており中の闇が見える。

嫌な予感がする……逃げないと。

「全員急……」

文さんが話しきる前に扉の奥に広がる闇は音を立てて周りを飲み込み始めました。逃げようとするも、その勢いに俺は飲み込まれた。

「蓮司……」

にとりさんの声は聞こえたが、どうなったか分からない。

文さんの声は聞き取れなかったが大丈夫だろうか？

こう言う時は自分の事を気にするべきなのだろうが、何が起きているのか理解していない。

何も見えず、音も遠くなり……自分どころか……一瞬で吸い込まれていったため、二人もどうなったのか分からない……

「出鱈目過ぎんだろ……」

理不尽さに悪態を吐きながら完全に館へと取り込まれていった。

その後……自分はどうなったか考える前に気を失った……

to be continued

百二十八話 廃洋館の少女く mystery girl

1.

「……うん？」

頭痛がするが、それでも無事な様だ。

もしかしたら死んだのかもれないが……

しかし明らかにここは建物内だし、目が覚めたのはベッドの中だから……死んではないだろうな。

「……誰も居ない？」

隣のベッドは空だ。文さんやにとりさんが居ない……

「探しに行かないとまずいよな……」

もしかしたら先に目覚めて探索に行ったのかもしれないけど……そしたら書き置きとかあるだろうしなあ……

「行くか……」

先程の様に扉が開かない事も警戒していたが……無事に開いたようだ。
さて……これなら良かったが……

「問題はこの先どうするかだ」

正直この場所が廃洋館なのかは疑問でしかない。

廊下を見て思ったのだが……明らかに広過ぎる……

洋館の大きさじゃないだろう……

それには……廃洋館と言うには周りが新し過ぎる……

「ポルターガイストも起きていないし……別の場所に飛ばされた可能性さえあるな……」

「それなら二人が居ないのも納得出来るが……」

だったら何処なんだって話になる。

「誰か居ればいいが……」

扉を開けて行く。色々な部屋があるな……本当に紅魔館のように西洋風だが……

「やっぱ、誰も居ないか……」

そう思っていたが……

「誰……?」

「えっとごめんなさい。ここで目を覚まして……」

明らかに幼い少女、ただ幻想郷において少女と言っても……凄まじい能力を持つ妖怪や人間も多いしなあ。

「なら貴方は招かれたの？」

「招かれたって……なら君も……いや貴女もですか？」

最初は諭すように話そうとしたが……違和感を感じるし流石に舐めた態度とか言われるのは嫌だしなあ……

最近三下が板について来たようで嫌だ。

「なら友達ね。嬉しいわ」

話が繋がっていない気がする……

ただ……現状話を合わせておいた方がいいか……

「友達で良いんですかね……」

「良いわよ、許してあげる」

「有難うございます……」

とりあえず、状況整理が優先か……

「俺の名前は小野寺蓮司です。人間ですので……」

「レイラ・プリズムリバー」

少女はそう答えた。

ただ……惚げさを感じる。

「それじゃあレイラさん」

「レイラで良いわ」

「……レイラちゃん」

「友達でしょう」

「……レイラ」

「それでよし」

「……」

心臓を掴まれる様な息苦しさを感じた。

場合によっては心臓を握り潰されそうなそんな重圧が……

刺激してはいけない。ただ……情報を集めないとダメか……

「レイラ……出口は何処だい？」

「出口……？」

「ああ……協力しないとって」

「どうして出る必要があるの？」

「え？」

「ここは私のお家よ。ここで皆と遊ぶの」

「……」

出来れば違ってて欲しかったが……そっちの方が。
逃げようにも逃げ場所すら無いだろうな。

「……いいよ、何しようかレイラ」

少なくとも今は無謀に出るタイミングでは無い……彼女の誘いに従うことにした

……

—————

「次は何しようか」

「……少し休ませてくれないかな」

「人間は弱いね」

「逆にレイラは元気だね……」

「うん、だって疲れないし」

やはりと言うか人間では無いんだな。

元から特殊な力を持っていた様で人間では無いだろうなと思っていたが。

「(答えてはくれなかったが)」

先程、種族を尋ねたら答えてくれなかった。

物を動かしたりもするし、文さんの証言からポルターガイストに関わる霊かもしれないが……

「ほらじゃあ休んでしょ」

「……二分も休んだ記憶がないんだけど」

「いいのーやるの」

そのまままたテーブルなどが飛んで移動する。

ポルターガイストの犯人は彼女なのか？

少なくともそう考えておいた方がいいか……

「それじゃあ次はこの子達と……」

そう言いながらぬいぐるみ達を取り出す。

見た目は人間っぽいが楽器を持っている様だ。

「この子達は？」

「私のお姉さん達なの」

「お姉さんですか……」

それぞれ髪色の違う姉妹達の人形がある。

妹達かと思いきや姉な意味はあるのか？

……正直、彼女の考えが読めない。

「大好きで大切なお姉様達だったの」

「だった……？」

「みーんな分かれちゃった」

「それは……辛いね」

四姉妹がバラバラになったならそれは辛いな……
何があつたのか……流星にそこまで聞く度胸はないが……

「こうやって……皆、皆」

そう言いながらレイラは人形を引き裂いた。
全身がバラバラになる。

「え……？」

「みーんなこうやって……」

次々に姉妹と呼ばれた人形達が引き千切られて行く。
その光景に唾然とする。

「皆、みんな、ミンナ……」

「姉達は……」

死んでしまったのか？

だったらこの子は一体……

するとレイラは笑い出す。

「冗談よ。姉さん達は死んでは無いわ」

「ビックリした……驚かせないで欲しいで……いや、欲しいな」

つい敬語が出そうになってぐつと飲み込む。
嘘だったのか……良かった。

ただ笑っている筈なのに……狂気を感じる。

「でもいいのかい？人形をボロボロにしちゃって……」

「いいのよ。壊れる時は壊れるわ」

「それはそうだけど……ですが姉達なんじゃ？」

「いいのよ」

「なら深くは言わないけど……」

「それに、人形じゃ無くてお友達ができたもの」

「それはまた別かなって思うけど……」

「でもお友達だし……」

言葉が途中で止まり、レイラは何か考え事をし始める。
物騒な事を考え始めなければいいが……

「違ったわ」

「何が……?」

「貴方と私はまだお友達じゃ無かったって」

「違ったのか……? どうしてだか分からないけど……」

何か相手に不都合があつたのだろうか?

どうしろって言う話だけど。

「だって私と貴方はまだ違うもの」

「何が違うのか理解しかねるけど……性別とか言うなら諦めてくれ」

こちらにレイラが向かって来る。一瞬身構えたが遅かった。腹部に何かが突き刺さっている。

「……は？」

さつきまで手には人形を持っていただろうか？

なんで今はナイフになっているんだ？

血塗れのナイフを持ちながらレイラは笑う。

「貴方も幽霊になれば同じでしょ？これから仲良くしようね」

幽霊……その割には身体がくつきりしているし意外だった。

と言うか血を止めないと……

「ダメだよ」

うずくまりながら腹を抑えていると背中にもう一刺しされる。のたうち回りながら何度も何度も……

「流石に……霊夢さんに伝えないと……」

そのまま俺は動かなくなった。

…

いつもの野原、そこで目を覚まして……大結界異変は終わったのだろうか？
花はだんだん減っていたが、終わってないと少し面倒だな……
とりあえず霊夢さんに……

「……なんで」

「ここは野原ではない……館だ……しかも」

「さっきの館……」

「何故？いつも通り戻らないのだ？」

「どうしてここなんだ？外は何処だ？」

「色々と疑問に思っていると扉が開く。」

「お兄さん……誰？」

「先ほど殺された相手……レイラが姿を現した。」

「うわっ……!?!」

「いきなりどうしたの……?」

「いっぴやなんでもないで……いっぴやなんでもない」

この調子ならやはり他と同じで、覚えていないのだろうか？
それなら隙を見て。

「その怯え様……何の能力か知らないけどレイラの事知っちゃったんだ」

「……」

汗が流れる。なんだこの殺気は……

「それじゃあお兄さん、お友達になろうよ」

部屋中の物が宙に浮かび、飛びかかって来た。

必死に避けるがまた飛んで来る。残念だが今回も死ぬだろう。

どうすればいいんだ？死んでも恐らくはまた此処だろう……なんとか出口を探さな

いといけないだろうか？

飛んで来たピアノに押し潰されながら、逃げ方を考えた。
ここで永遠なんて過ごしてたまるか。

t o b e c o n t i n u e d

百二十九話 騒霊と妖怪～poltergeists
please.

「おい文、蓮司はいるか？」

「居ないわ。一人だけ何処へ……」

ボロボロの館の中に文にとりは入り込む。

中は暗いが、所々開いた隙間から日が差し込んでいる。

「一人で何処か行けるわけ無い筈だけど……」

「とりあえず外へ……」

文は開けようとするが、やはりさっきの様に開かない。
ここで時間を割くのは無駄だと諦める。

「まずは小野寺さんを優先するわ」

「そうだな、この廃洋館内に居るかもしれないし」

館内の扉は開く様で、次々に確認するが見当たらない。
それどころか……生物の気配すらない。

「にとり、どう思う?」

「どう思うって言われてもなあ……生物は探知出来ないな」

「幽霊は……?」

「あーちょっと待って」

ガサゴソにとりはりユックを漁る。
そしてラジオみたいな物を取り出した。

「居れば反応する」

「……もつと正確な物作れなかったの?」

「そもそも生きてないのに反応する物を作る方が難しいんだってば……」

居る方に反応してノイズが走る。

外の世界ではゲームなどでいかにもありそうな機械だ。
使い始めるとノイズだけが流れる。

「壊れてるんじゃないの?」

「いや、さつき使えたぞ?」

「でも引き寄せられたじゃない。壊れてもおかしくないわよ」

「……どつちかと言うとだ」

「何よ」

「四方八方幽霊が居るの方が考えられそうだけど……」

「はあ？ 幾らなんでもそんなのは……」

「無くはないだろ……ただでさえもうこれ曰く付きだろうし」

「そんなんどうしろって……」

文が文句を言っていると机がガタガタ言い出す。

辺りの空気が禍々しい物に変わりながら、物が動き出す。

しかし浮かぶ前ににとりが壊した。

「いやあ……この部屋にもいるかあ」

「逃げるわよ」

「逃げ場あるといいけど……」

「つべこべ言わない」

そのまま部屋を駆け抜けていると、先程までと雰囲気が違う。耳を傾けてみると音が流れている。

「にとり、誰も居ないんじゃないの？」

「ああ、今でも誰も居ない」

「声がするわよ」

「……幽霊なんだろうな」

「……様子を見ましようか」

互いに隙間から部屋を覗き込む。

そこには三匹の幽霊が何やら話し合っていた。

「なんだありや」

「……プリズムリバー楽団」

「文、何か知っているのかい？」

「巷で噂のグループよ。音楽が上手いって聞いているわ」

「何故ここに……?」

「それも疑問だけど、そっか彼女達は幽霊じゃ無くて、騒霊だからこの部屋だけ雰囲気が違うのね」

「……ん?」

「まあいいわ。関係ない事だし」

「で、どうするんだ?」

「どうしようにも今近付くのは危険そうなのよね……正直正面から会いたくないし」

「じゃあどうしようも……」

うっかり部屋に集中しすぎていたせいか背後で浮かんでいた家具達に気付いていなかった。

そのまま直撃し、大きな音を立ててドアを突き破った。

「!?」

金髪の長女ルナサがいち早く音に気付き身構える。

続いて銀髪の次女メルランと茶髪の三女リリカも状況を理解した。

「……………誰？」

明らかに低い声でこちらへと尋ねる、だいぶ機嫌が悪そうだ……

「ああすみません、文々。新聞の射命丸文と申します。三姉妹のお噂はかねがね」

「記者……………」

記者モードに入った文に。ルナサは若干戸惑いながらも対応する。

他は任せてルナサを見ている。

「この館に迷い込んでしましまして……出口と友人を探してここに来まして」

「友人を？」

「はい、小野寺蓮司と言うのですけど……」

「……知らないわ」

「そうですか、お時間取らせて申しわけありません」

「じゃあ次は私からいい？」

「構いませんが、何か？」

「これは貴女達の仕業？」

「これって？」

「この廃洋館は元々私達三人だけで住んでいたのよ。だけど今は……」

「他の霊達も住み込んでいるね」

改めて機械を回すが、やはり全体から聞こえる。

どれだけの量がいるんだ……？

「とにかく貴女達じゃないのね？」

「ええ、幽霊には関係ありません」

「分かったわ」

その後三姉妹で集まって何か話している様だ。

その後此方へと向かって来る。

「あのさ、記者とお供の方……お願いがあるんだけど」

「高いですよ？」

「ちよつと文!？」

「いやいやにとり、ここは話を聞かないとまず出れませんし……」

「それもそうだけどさあ……」

「基本は飲まないといけないでしょうけど、こっちにもお願いがありますので」

「さつき言つてたもう一人の事だろうか？」

「話が早くて助かります。彼を探すのが最優先なので……」

「それは分かったけど……私達も見えないよ？」

「この洋館の中に居ないんですか!？」

「幽霊は多いけど……人間は見えないなあ」

「姉さん……もしかしたら」

後ろで見ていた、メルランとリリカも話に混じって来る。

やっと警戒が解けてきたようだ。

「ああ……え？でも本当にそんな事が？」

「見てないって事はそうじゃないの？って思うけど」

「ちよつと待って下さい。そつちだけで納得されてしまっても困りますよ」

「ああ、ごめん。でも記者さんの言ってた人に心当たりがあるかもしれない」

「本当ですか!?!何処に……」

「私達の用件も被ると思ってるんだけど」

「幽霊を追い出す事じゃ無いんですか?」

「違うよ」

「……違うんですか?」

「文が勝手に決めつけてただけじゃ無いか」

「にとりも思ってたでしょうに」

「落ち着いて落ち着いて」

ルナサは。言い合うのを間に入れて止める。

「すみません、取り乱しました。それでそちらのお願いも聞かせてもらっていいですか？」

「了解した」

ルナサは一度深呼吸をして真面目な表情になる。
いつもの楽団の時の笑顔とは違って本気の顔だ。
そして口を開く。

「レイラを止めて欲しい」

t o b e c o n t i n u e d

百三十話 廃洋館を彷徨う～where is he?

「レイラ……ですか？」

「文でも知らない事ってあるんだな……」

「そりやそうですよ、稗田の当主とは違いますもの」

「……レイラは私達の妹だよ」

「妹……？」

「文？」

「おかしいじゃ無いですか、プリズムリバー楽団は三姉妹で……」

レイラと言う少女は聞いた事がない。

裏方とかでさえ分かる筈だし……だからこそ異常だ。

「話してもいいかい？」

「……時間が無いので、簡潔にお願いします」

「申し訳ないが多分それだとこんがらがるよ」

「分かりました……」

「まず私達は騒霊だけど、私達は自然発生したわけじゃ無い……大昔にレイラが生み出したんだ」

「……それじゃあお母さんじゃ無いのかい？」

「ううん。私達とは別人だけど、レイラには姉がいてそれが私達だったの」

「……………」

相手の会話に困惑する。

別人なのか本人のかなど……………」

「レイラは小さい頃四姉妹だったけど……………離散しちゃって寂しかったあの子が姉達を想起しながら生み出したの」

「イメージナリーフレンドみたいな感じですか？」

「合っているような合っていないような……………まあそれで、私達が生まれてまた姉妹になった」

「……………ただの人間ではそんな力は無いのでは？能力者ですか？」

「いや、それが一家崩壊した理由でもあるんだけど……とあるマジックアイテムが補助となつて、成功したの」

「分かりました」

人間から魔法使いになつた存在も居る。

だからあり得なくは無いか……

「それで……その妹が、この館でおかしくなつたんですか？」

「それも違うね」

「ならなんですかつて言いたくなるけど……」

「レイラは天寿を全うしたからね」

「だったら何故……？それならば、既にこの世に肉体はないのでしょうか？」

「今年が何だか分かります？」

「ん……今年ですか？」

「……結界異変か」

「にとり、知っているんです？」

「聞いた事があったからなあ」

「そんな事があったのか」

「むしろ君達も知らなかったのかい!？」

「うん。幽霊は多いなって思ったけど、理由までは知らないよ」

「まあ……確かに幽霊が増えているって聞いていたな」

「それで天寿を全うしたレイラも、一度此方へと靈魂が戻って来たらしい」

「お盆……は時期違うんですけどねえ」

「お盆ってのは分からないけど……兎に角他の幽霊達に混ざって久しぶりに会えたと思っただけだね……」

「何が……?」

「何かが乗り移ったのかもしれない……私達の知るレイラじゃ無かった」

「何か……悪霊ですかね?」

「流石に断定は出来ないかな」

「それで……そのレイラさんは何処に？」

「消えた……正確には逃げられたかな」

「逃げられた……ですか？」

「最初は家の中で暴れていたんだけど……貴女達がここに来てからひっそりと消えたわ。何かを見つけたのかもしれないし……」

「それが蓮司さんですと？」

「可能性はあると思うわ」

「ああいや……でも……」

それが事実だと言うのなら正直言っただけでいい。

幽霊に気に入られる事がどれだけ恐ろしい事か……

「手伝うって話でしょ？損無いだろうし頼んだよ」

「……私としては問題ありませんが、にとりがどうかですね」

答えは分かり切っているが、にとりへと尋ねる。

しかし此方を向いておらず、何処か呆けた表情だ。

「……にとり、聞いてます？」

「ん……っああごめんなんだっけ!？」

「大丈夫ですか？貴女がそんなだと困りますよ……」

「ごめん、館中に幽霊だらけなようでしたっけ見えてしまってたよ」

「乗っ取られていませんよね？」

「大丈夫、そこは問題無い」

「それじゃあ、予定通り三姉妹の手伝いしながら小野寺さんを探すでいいですね」

「そうだな……急いで蓮司を見付けないと……」

「それじゃあ手分けして部屋を探そうか」

「外へは行かないんですか？」

「……それもそうか、文さんお願い出来る？」

「まあ私でしょうねえ……にとり、館内は任せましたよ」

「単独で大丈夫なのかい？」

「元から何処にいるか分からない以上、足の速い私くらいしか探せませんしね。にとりはにとりでやる事をやってください」

「そう言われるとそうか……了解した」

「皆、にとりをお願いします」

「悪霊共からは守ってみせるさ」

そう言いつつリリカに出口へと案内される。

目に見えるような幽霊もようよしているが、騒音で追い払っている。

「レイラを見つけたら頼んだよ」

「ええ」

そのまま外へと羽ばたいて行った。
さて……次はこっちの番だ。

「ちよつといいかい？」

「にとりさん、どうしたの？」

「この屋敷は全部探索したのかい？隅々まで」

「まだ、これから手分けして探すところだったし」

「それで、レイラの様子がおかしいのもあったし……一度話し合っていたんだ」

「ああ……それだけか」

最初何をしていたんだろうと思っていたが、それなら納得出来る。
ただ……時間は結構経っているのかもしれない。

「無事ならいいけどなあ……」

「ただちよつとおかしい事があつたんだよね」

「何かあつたのかい？」

「気のせいだとは思うんだけど……私達同じ話を繰り返していると思うんだよね……」

「え？」

「なんかしたことがある話を妹達ともしている気がするな……つて……」

ルナサが話している途中に視界が歪む。

身体を揺さぶって無理やり立ち上がると……

「何やってるんだ文」

「何やってるんだって何ですか!？」

「いや……お前外に出てっただろうよ」

「なんですぐに追い出したがるんですか……今から出るどころでしょうよ……」

「え？」

「なんですかってば」

「いや、問題無い」

「館内は貴女に任せましたんですからね。しっかりしてくださいよ」

不安そうにしながら文はまた玄関から外へと出て行った。

何が……いや……

「死に戻り……」

蓮司から聞いたんだっけな、それとも盗み聞いたかだが……今はどっちでもいいか。問題は巻き戻った以上はそれが起きている可能性が高いと言う事だ。

「……いつ、何処まで戻るのが分からないな」

正直不明瞭過ぎる。

ただ対策が出来ないのが難点だ……

「ええい、全部全部やり直しよりはマシだ」

少しずつ、知恵を生かして物を作り始める。

ここからは我慢比べだ。蓮司を助けるために……

まだまだ知識は浅くても、少しでも皆の役に立てるように、発明を続けるのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百三十一話 館探索編① dining room.

「はあ……どうするか……」

血が止まらない。

半ば今回も諦めて壁にもたれながら状況を見る。

「やばいなレイラが……これほどまでとは」

今回も確実に死ぬだろう……だから、

「覚えるだけ覚えないと……」

館の地形を覚えないと意味が無い。

出口は何処だか分からないし、それ以外の場所だつて覚えていない。

「死にたくは無いか言つてる場合じゃ無いよな……」

死ねるんだから大胆に行く。そうでもしないといつまでも終わると思えない。
必死に身体を起こす。

「血を止める道具すら無いか」

手で血を押さえながら扉を開けて部屋を出る。

隣の部屋は何か……

「……は？」

扉を開けた瞬間理解した。

この部屋は幽霊だらけだ……それも悪意だらけの……

「レイラだけじゃ無いのか……この館全部が……」

味方なんていない。この館は自分でどうにかしなきゃいけないのは分かっていた。

ただ……レイラだけと考えていたのはダメだった。

呪いなんて存在するのだろうか？そのまま触れられてすら居ない筈なのに……動けなくなつて……心臓が止まった。

…

「……レイラじゃ無いからって甘い事はないよな」

謎の幽霊達に殺されてこの呪縛から解かれればいいなと思つたが……そんな事はなかった。

館の中にいながらまた考え事を始める。

「すぐに部屋を出ないと駄目か……さつき部屋で籠もっていたらレイラが来たし……」

すぐに部屋を出ないと駄目だが何処へ行くべきなんだ？

「隣の部屋は見ておいて良かったかもな……」

あの部屋は駄目だ、入ったら死ぬ。

それが分かったただけでも進歩な気がする。

「……何処へ行くべきか」

まず、地図を探したいんだが……何処にあるかすら分からないしなあ。

「少しずつ覚えて行ければいいが……」

テンパれば当然覚えられない。最初の頃は驚きや必死に逃げて覚えられていなかったのが痛いな……

「……右から覚えて行こう」

幽霊に足音があるとは思えないが、ついうっかり足音に注意しつつ隣の部屋のその隣へと向かう。

「隣の部屋もアウトなら正直辛いな……」

少し怯えながら扉を開ける。

「……………は？」

食堂か？入れたようで良かったが……

「広いな……いやそりやそうか、明らかな豪邸だもんな」

部屋の中を探索する。流石に食堂に地図などは無いだろうけど……

「……………これは？」

食堂の壁に絵が立てかかっている。

名画とかかと最初は思ったが……この子はレイラか？

「よく見ればこの子達も……」

レイラが抱えていた人形の子達に思える。

と言う事は……この絵は家族の絵なんだな……

「ただ……描かれて数年ってレベルじゃ無いよな」

絵はまだ見えはするが、ボロボロだし。だいぶ年季が経っている。

なのに館は新しい……色々と違和感しか無い。

「姉様」

「っ!？」

後ろからの声に慌てて振り向く。
そこにはレイラが居た。

「やばっ……何処か」

慌てて逃げようとしたが、どうも様子がおかしい。
それ以前に……彼女を見てみると……

「……幼い？」

確かにレイラ自身幼いイメージがあつたが、記憶にあるレイラ以上に幼い。
それに彼女は此方を向いていたが俺を見ているわけではなさそうだ……

「どうしたのレイラ？」

後ろを振り向くといつのか金髪の少女が立っていた。

絵にも人形にもあつた子だろう。

「ズルイですわお姉様、また父様達と一緒に買い物に出たって」

「レイラは迷子になるから仕方ないだろう？」

「そんな事ありませんわ。私だつてもう8つですもの」

「だったら館内を歩くのはもう大丈夫なんだね」

「うぐ……それはまだ……ですけど」

「しつかり覚えなよ。私の部屋の地図何度見てもいいからさ」

「いつそ私の部屋でしたら楽なのに」

「それじゃあいつまで立つても覚えられないだろう？それに二階に来るのだって練習だ」

よ。頑張って」

「うぐ……私だってプリズムリバー家の娘ですので成し遂げて見せます!!」

「よく言ったねレイラ。ほらお土産だよ」

「わあ、お姉様大好き」

そのまま二人の姿は消える。

今のは幽霊の仕業? いや……どちらかと言うと彼女達の過去だろうか?

「……よく分からないな、ただ行く場所は決まった」

二階って言ってたな。あの金髪の子の部屋で地図を探すか。

まずは階段を探すしかないな……

そのまま扉を開けて外を覗く……

「……………!!!」

レイラが巡回している。

直前まで見た幼いレイラとは違って、殺してきた方だ。

何より……………吐き気がする程悪意を感じる。

慌てて、しかし音を立てないように扉を閉じる。

「……………正直、どうにかなればいいか程度だけど」

隠れる場所を探す。万が一扉を開けてきた時に、見つかってしまわない様に。

「テーブルの下……………テーブルクロスが引いてあるしバレない可能性も……………」

隠れるつもりで捲ろうとしたが、寒気がした。

なんだろう……………この中に何があるか分からなくて怖い。

嫌な予感が心臓を鳴らし諦める。だからと言って隠れないわけにもいかないが。

「……柱時計」

既に動かない時計を見る。

色付きのガラスで振り子の部分が覆われており、外からも中からも覗く事は出来るが

……目の前にまで来ないと見えないレベルだ。

安全ならテーブルの下かもしれないが……開けたくないしここにするしかないか

……

時計を開け中に隠れる。

それと同時に扉が開く……危なかった。

「あら……？この部屋に誰かが来たって幽霊が話してたけど……誰も居ないね」

……そう言う事か、だからこの部屋に来たんだ。

「気のせいかな？悲鳴も聞こえなかったし」

そう言いながらテーブルクロスを捲って居る様だ。

どうやら外からに比べて、中から外は中々見やすいらしく部屋での行動を見通せる。

「こら、勝手に出ちゃ駄目ですよ」

テーブルの下から何かが這い出てこようとして居るのを咎めている。

危ない……危険だとは思ったが何か居たのかよ。

「執事さんは何も食べていないよね？」

「……」

「そう、分かった」

恐ろしい会話に少しだけ震える。

そのまま耳だけ澄ませつつ、バレない事を願う続ける。

「泥棒さんかなあ。それならどうなつちやつてもいいよね」

おいおい、泥棒にも人権が……いや魔理沙さんの行動あまり許したくないな。
ただ殺すのは勘弁して欲しい。

「え？どうするのかつて？」

テーブルの下に潜む何かと会話しながら此方の方へと近づいて来る。
もしかしてバレたか……？

「新しい人形が欲しいんだよね」

目の前でそう呟く、やつぱバレて居るのか？
ヤバイ、出る事も出来ないしこれは……

「……流石にテーブルの下以外に隠れる場所ないねえ。他に逃げたか、そもそも皆の気のせいかな？」

背を向けてそのまま部屋を出て行った。

今、心臓が破けそうなくらい鳴っていると思う。

「危なかった……」

念のため戻って来ないかを確認する為に、まだ少しの時間潜み続けてから出る。

良かった……戻って来なかったか。

「急いで向かわないとな」

この部屋にも何か居るらしいし、ブーツとしていられない。慌てて扉を開けて部屋を出る。

直前にテーブルの方から音がしたが……さっきの執事って奴が動き出したのかもしれない。

「残念だけど見つかるわけにはいかないんだよ」

小さな声で呟きながら、階段を探す。

姉の部屋を急いで見つけなければ、そう思いながらまた行動を開始したのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百三十二話 館探索編②～girls room.

「やっと見つけた……」

何度も音に怯えて遠回りしながら、歩き続けて二階への階段を見つけた。

正直、もう疲れたが……休める場所なんて無い。

「急いで登るか……」

姉の部屋は何処にあるかすら分からないし、手当たり次第探さなければならぬ以上急がないと慌てて階段を登る。

「ん？」

途中、踊り場の階段に目が止まる。
何か違和感がある。

「……あつ、でもどう言う事だ？」

鏡が正確に写していない事に気付いた。

明らかにまだ綺麗な筈な階段なのに。鏡の中の階段はボロボロで歩き辛いで済まないレベルだ。

「これも幽霊の仕業なのか？」

気になりはするが、今はそれどころではないので慌てて階段を登る。

その直後……鏡から知り合いの声が出た気がしたが、気付かなかつた。

「何処へ行くか……」

正直金持ちを舐めていたかもしれない。

二階なんてそこまでじゃ……とは思ったが一階と同様くらいには広いかもしれない。これならレイラが迷った理由もよく分かるな……

「手当たり次第しか無いんだろうけど……キツイな」

もしかしたら三階もある可能性に怯えつつ一つずつ部屋を探った。

一階に比べて数が減っては居るが。それでも幽霊はいる様だ……気を付けなければ。

「よく分からない部屋だらけだが……」

少なくとも誰かが生活していたらしき部屋は見当たらない。

「急いで探さなければ……」

またいつ来るか分からない。幽霊達が告げ口するか分からない。

……色々と厳しいな。

「一先ず手当たり次第……」

部屋を開けて違うと思えば部屋を閉める。

女の子の部屋を必死に探す姿はヤバいものを連想するが……生き残る為だし仕方無い。

「()も違うか……」

一つ一つの部屋が大きく、次の扉までも苦勞する……

「なんでマンションよりも広いんだよ……」

一部屋がマンション以上ってどんだけ豪邸なんだよ。いやデカイ館なのは知ってるけど……

「もうちょっと話してくれれば良かったんだけど……」

ただ記憶の様な彼女達に尋ねる事はできなかつたしな……

「……………この部屋は？」

今までの部屋とは違う……と言うか女の子らしい部屋だ。

「申し訳ありませんがお邪魔します……」

この部屋があの子の部屋だろうか？

「つと探さない……」

残っている事を願いながら地図を探す。

しかし探しても見当たらない……

「……………じゃ無い？或いは地図が消えたのか……？」

……

確かに……この記憶は数日前とかそんな類ではない。既に無くてもおかしくないが、頭を抱えながら悩んでいると、また幽霊の姿がくつきりと映る。

またレイラだが……先程よりは少し成長した姿に見える。

それともう一人……確かに人形にあつた姿だが先程の金髪の子じゃなかった。

「メルランお姉様の音楽は本当に明るいですわね」

「習わされてる以上は、明るい歌でもやっていないと滅入っちゃうもの」

「確かに……音楽を聞く以上は、明るい曲が良いかもしれません」

「レイラは分かるわね。それに比べて姉さんと来たら」

「ルナサお姉様がどうされました？」

「いつもいつも暗い歌。音は綺麗なのに気が滅入るわ」

「でもルナサお姉様の曲も好きですけど……」

「駄目だよレイラ。あんなのに憧れたらレイラまで暗くなっちゃう」

「あんなとは随分な言い草だなあ」

扉の方から声がして、振り向くと金髪のあの子が部屋へと入って来た。

「ルナサお姉様おはようございます」

「姉さん、事実だろうか？」

「事実なもんか、メルランは無知なんだよ」

「姉さん、何が言いたいの？」

「もう明るい歌の時代は終わって暗い歌が流行っているのさ」

「そんな事はないでしょ。今だって明るい歌の方が良いよね？」

「えつと……どちらも良いじゃ駄目なんでしょうか？」

「駄目だよ、レイラには決めて貰わないと」

「うーん……」

「それじゃあいいよ、今から聴かせ合うから」

「ええ……？」

「いいねメルラン。それじゃあ私も楽器を取ってくるよ」

「隣だし折角だから姉さんの部屋でやりましょうか」

「オツケー、最新の流行りを教えてあげるよ」

「……」

「ちよつとレイラ、逃げようとしてないかしら？」

「いいえ……そんな事は……」

「レイラも来なさい。隣だから迷う事もないでしょう？」

「……はーい」

半ば助けを懇願する顔で連れて行かれた。

記憶の様だし、こちらの事を気付いていない様だし……助けてあげられないんだ……

「仲は……あれはいいのかな？」

少なくとも二人の姉は文句は言い合っても険悪には見えなかったが……
と言うかレイラが巻き込まれて、可哀想な気がした。

「何があつたのか……」

この記憶を辿る限り、姉に逆らえないどころか人形を壊すとも思えない大人しい少女
だし……何より姉達を大事にしていた様に思える。

それなのに……あの変貌の仕方は何なのだろうか？

出口を探すついでに分かるだろうか？

「隣の部屋……だよな」

片方の扉を見た。だからこのまま奥へと向かえばいいか。
扉を少し開け確認するが大丈夫そうだ……

「今っ!!」

一目散に駆け抜けて扉へと入る。

廊下で見付かると逃げ場がないし隠れられないのが本当に怖い……

「部屋に入れた……館の地図はあるかな……」

お邪魔しますと言いつつ、部屋の中を探る。

少し探していると、筒状に丸まった紙を発見する。

開いてみると館の地図と書かれている。

「これか……」

地図を見ても何処が何室か分かるだけではあるが……それでもあると無いとでは大違いだ。

娯楽室、とかそう言った分かり易い場所を起点にするのもありだし……

「食堂は……あった」

そのまま右折して行くと玄関か……開くかはともかく見に行つた方が良さだろうな
……

「後は……地下がある……」

地下室があるのかと驚いているとギイッとドアの音がする。
最初から隠れながら地図を見ていた筈だが……

「みいつけた」

「……」

見えていない筈なのに、何故か見つかっている様で恐怖する。
ハツタリかもしれないが……怖く無いなんて無理だろう。

「姉様の部屋を勝手に荒らして。思い出すらも奪う気？」

……
そんな事は無い。むしろここから出て行けっ出て出してくれればそれで済むんだが

流石にそれを言い出し始めるわけにも行かず、じーつと去るのを待っているが……

コツコツコツ

徐々に足音は近付き、ベッドの下から足が見える……近い……

「ハハハ」

その言葉とともに、ベッドが宙に浮く。

彼女と目があってしまった。

「……だったのね」

慌てて待ってくれと訴えかけるが通用しない。

彼女の瞳から光が消える。

「姉様達から奪う人間なんて消えればいい」

その直後、ベットが頭に当たり砕ける。

潰れたのか？ 酷い音がしたぞ？

まだ……地図をそこまでは覚えてないのに……

「ただ……まずは玄関へと向かわないと……」

しかし考えがまとまらない。

今の俺の身体には考えるべき脳がないから……

まずはどうすればいいかすら分らない。

覚える事も今は無理だ……次回は頭に入れないと……

割れた頭から血が止まる事は無かった。

その直後、死んだのが分かり……戸惑いつつも、今できる事をやっけて行くしかないと思つた。

ただ……何度死んでも少しづつ進んで来ているんだ。絶対に諦めずに出て見せる。空っぽの頭になつとそう浮かんだ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百三十三話 館探索編③ 〈small library〉

y.

「……」

玄関を指して歩き続けた筈だ。
なのに……壁に着いてしまった。

「地図が間違っている……はないよな。見間違えたか？」

まあ逆に行けばいい話だが……無駄な時間を使っている暇は無いのに……

「……所々違和感を感じるけど」

ドアノブが左側に着いていたりもした。

左利きの人が多いのかな……と思ったが、先程の記憶の子達は持ち方的に右利きに見えたし。

「全体的に左利き向けに作られてる様に見えるが、前の持ち主が影響していたり……？」

ただ家は新しいよな……曰く付きの家で、一家心中した家を買ったとかなら分かるが

……

「……流石に無いよな？」

レイラの変貌からあってもおかしく無い気がしたが……無いと思うことにしよう。
正直怖いし。

「逆へ向かうk ……」

後ろを振り向くと、蠟燭が迫っていた。

必死に躲そうと慌てて倒れる。その直後頭上を蠟燭が通り壁を燃やす。そして慌てた様に火が消えた。

「あつぶな……」

直後に遠くに見える影を見て慌てて部屋へと入り込む。

「ハハハは……」

図書室か……隠れるのには不安が残るところか……ポルターガイストが怖いが……

「ただ……戻れないか」

既に此方へと向かって来ているのだ……

ここでどうするか考えたほうがいいな……

「……隠れる場所はあるが」

ポルターガイスト相手に見つかりと本当に都合が悪いな……
幾らそこまで厚くない本と言えども凶器になり得るし……

「……来てるな」

本棚の影に隠れる。

見つからないのはまず不可能だろう……だからこそどうするべきか……

「……さて」

辺りの物が浮き始めて来た……

それと同時に扉が開く。

「やり過ぎたわ。これじゃあお姉様達に叱られる」

図書室の惨状を見てレイラが慌てている。

部屋を荒らしすぎるのを躊躇ったのか、全ての物を浮かしてはいない。落ちていた本の中に埋もれてやり過ぎそうとしているが……どうなるか……

「このままだとリリカお姉様に叱られるわね。早く掃除しないと……」

それはまずいな……隙を見て逃げ出そうとしても見つかりそうでしかない。

「……向こうから探してくれれば」

そう願っていると予想外な事が起きた……

「あの子達も呼んで来ようかしら。一人じゃ大変なもの」

そう言つて図書室から出て行つた……え？ 罨かこれ？

「とりあえず……様子を見てから出ないと……」

先程言っていたリリカって人物は気になるが……分からないしな。
まずは出れるかどうかであって……あれ？

「……これはまずいか？」

少し待つてから出ようと考えていたが、後ろから声がする。
もう帰って来たのか？

「……いや、違うな」

確認すると、今度は茶髪の少女と幼いレイラが居た。

正直、今は見ている暇がないんだが……ここで逃したら見る事はもう出来ないだろう
な……

「……注意だけはしながら」

周囲にも耳を傾けながら。二人の話を聞き始めた。

「……レイラが倒したの？」

「申し訳ありません。リリカお姉様」

現場は見れないが……話し方的には同じく散らばって居たのだと思う。
それを直すために、姉を呼んだのかな？

「……はあ、後で姉さん達二人も呼ばないとね」

お部屋にいた二人組か。仲が悪そうだったが……

「……あの、二人は大丈夫なんでしょうか？」

「うん？あの二人は仲良いよ？」

「え……？でも……」

「音楽性の違いはあるけど……それでも血の繋がった姉妹だしね」

「そう言われるとそうですけど……」

姉妹は本当に他の姉妹を信じ合っているのだろう。

そう考えると凄いなと思う。

「第一あの二人の違いは、音楽だけであって。それ以外は息が合ってるよ。私だって驚く程だ」

「それは凄いな……」

「それはレイラも分かっているだろう？」

「そうですね……音楽ではぶつかり合っていますが、それ以外では仲良しです」

「だから、二人がいれば良かったのにね」

「姉様達は忙しいですから……」

「ごーんな可愛い妹が頼んでるのにねえ」

「ちよつと姉様……」

「レイラ、貴女はもつと自信を持っていいわ」

「自信と言われましても……」

「大丈夫、貴女もプリズムリバーの姉妹なのよ」

「お姉様……頑張ります！」

「それじゃあ早めに片しちやいましょう。今日はお父様が早く戻ると言っていたわ」

「了解です」

そのままふっと消えて行った。

今ので姉妹全員かな……？結構個性豊かだ。

あの時レイラはバラバラになったってのは嘘って言うていたが、分かれたと言っていたな……

「脱出するのが一番の目的だけど……」

彼女について知らない駄目とかあるか……？

ここから出れてもまた囚われたらどうしようもないし。

「結局それは何処に行けばいいか分からないしまず出口だな……」

そのまま居てもレイラが仲間を集めてくるだけだし音を立てない様に気を付けながら部屋を出る。

まだ来てない今のうちに……

「いや……」

来るのが分かっているんだ。いつも何処にいるか分からないレイラに怯えるよりも今図書室にいる事が決まっている方がいい。

「こっちだ……」

対面の部屋へと入る。

ドアを少しだけ開けておく。バレたらまずいが防音もしっかりされているせいであんなに聞こえないし……

「……音がする。廊下急いで渡るとか無謀しないで良かったな」

そのまま誰かと話す様に図書室へと入って行った。

正直確認したかったが、幽霊達だと思っっている上に、此方を向いているのが居たらア

ウトだったしな……

「地図通りなら反対側……」

図書室近くでは歩いていたが、離れるとすぐに走り出した。

運良く外に出れるか、それとも閉じ込められたままか……出られた場合は早くにとり
さん達を見つけて合流しないと。

息を切らしながら、外へと繋がる扉を見つけたのであった。

|||||
t o b e c o n t i n u e d

百三十四話 館探索編④ Strange
in the hall.

「……開かないか」

予想はしていた。だが鍵が掛かっているとかじゃなくて、何故か開かないって感じだな……どう言うことだ？

「考えても仕方ないか。開かない事は開かないんだし……」

今はこれからどうするかが重要か……

行く場所が実質浮かばないしな……

「一先ず地図を見に行くか……」

覚えているか不安だったが、一度行った場所はなんとか大丈夫だった。何故さつき玄関間違えたんだらうな？

「また……勝手に部屋をとかわれられても困るし、地図だけ持って行こう……」

地図を持ち見ながら部屋を出る。流石に來ている事は無かった。

何処へ行くかは明確には決まっていないうが、一先ず向かう所は決まった。

「倉庫は一階だが……一番見つきり辛そうだ」

流石にまだ本棚の整理は終わっていないだろう。

だが念のためにと急いで目的地に着いた。

「()か……」

地図と照らし合わせて倉庫へと辿り着いた。

隠れるついでに何か良いものないかな……

「……よし」

扉を開ける。まず隠れる場所とは……

「……ええ？」

しかし考えがすぐに止まった。何が起こっている？

目の前にあるのは倉庫じゃなく……

「浴室……？」

隠れる場所が無い……だけでは無いな、何が起こっている？

慌てて地図を見ながら、浴室の場所を確認する。

「反対じゃ……？」

反対……まさに鏡の様に……

「……まさか？」

鏡の中？いや流石に……どうだろうな？

色々扉とかも真逆に見えたがそうかもしれない気がした。

「文字とかが反対になっていないが……ただそのせいで気付けなかったんだよな」

分からない。ただ鏡になっていると考えると動いた方がいいか。

「だったら行くべき場所は……」

確か、鏡があつた筈……二階への踊り場。

そこの鏡で何か……

「行かないと……」

そのまま浴室を出ようと……

「あれ……また？」

「ここでも彼女達に関わる何かがあるのだろうか？」

「また仲良し姉妹だろうか……」

「お姉様、待ってください」

「……」

「そこには浴室らしく服を着ていないレイラが……」

「失礼しました!!」

これはいけない、これはいけない。

コンプリートは出来なくなったがこれはいけない。
急いで踊り場へ向かいます、そうしましょう。

「何も見てない見てない」

自分に嘘を吐きながら階段へと急ぐ。

何故嘘を吐いてるのか……まあいいか。

「はいか……」

一見何も無い階段だが……そこにある鏡はこの館では異常だ。
なんせ鏡の映る世界は、今見えている物と別物だから……

「やっぱり鏡の世界なのか？」

少なくともそう思えた。ただ……どうなってるんだ？

「触つても反応無し。鏡の中を通り抜けるわけじゃ無いのか……?」

その後も色々と調べるが何も無い。

関係あるのは鏡じゃ無いのか……?」

「一度考え直すか……」

最後にもう一度だけ鏡を見る。

その鏡にとりさんが映る。

「え?にとりさん!」

慌てて確認するが既に映っていない。

後ろを振り向くがやはり居ない。鏡の中なのだろうな……

「……別の場所から?でも何処に?」

再び鏡の確認をする……して良かった。
背後に迫っていたナイフに気付けたから。
直後なんとか躲してナイフが鏡を割った。

「あぶなっ!?!」

「くすくす」

「本当に君は!!君は!!」

浴室の件でまともに見れないとか言ってられないレベルだ……すぐ死に掛ける。
文句を言うよりも逃げるのが先か……

危険だが落ち着いてなんてやってたら背中から刺されるし……段差に気を付けながら、階段を降りた。

「何処へ……行くべきだ?」

悩ましいが……逃げられる場所。

さつき行けなかった倉庫……しか無いか？

「……撒ける相手じゃ無いが」

それでも一瞬だけなら差を付けられる……

曲がり角で無理やりスピードを出して引き離れた。

「そのまま……!!」

倉庫へと一気に駆け込む。

今度は浴室なんて事はない……倉庫だ。

「何かないか……?」

慌てて探す。隠れられる時間なんぞ限られているから……どうにか出来るアイテム

は無いかと……

「これは……？」

明らかに触れてはならぬそうな物を見つける。

禍々しい……と言うか、呪われてそうと言うか……

「なんでこんな物が？」

触れない様に注意しつつ探索する。

そして……タイムリングを伺っていたかの様に……皆が映り出した。

「お父様、これはなんででしょうか？」

「レイラ、ああこれかい？これは勧められたものでね」

「明らかに、危険そうだけど……」

「はっはっは、子供達にはまだ分からないかな？」

あれがレイラ達のお父さんか……優しそうだが豪胆そうだ。

……と言うか俺もあのアイテムがいい物には見えないんだが子供なんだろうか？

「これは家族の仲がずっと続きます様にとって祈願する物でね」

「ふーん、また騙されてそうだけど」

「そこまで言うのと泣くぞ？皆を思っ買ってきたんだからな」

「はいはい、そんなの無くても仲良しですよ」

「全く……二人が音楽で喧嘩するから買ったと言うのに」

「そんな物に頼られて仲良くなるなんてごめんだけどね」

「と言うか音楽は人それぞれよ。姉さんと仲が悪いわけじゃ無いし」

「そっそうか……すまない」

「ところで父さん、他には何か買ったたりしてない？」

「……」

「父さん？」

「ちよつと……不思議な力を持つと言う鏡をだな」

「鏡!？」

大きな鏡……階段のはそこまで大きく無かったし……

何処だ一体何処へ……

集中して聞き始めようとすると、大きな音が鳴り扉が開かれた。

「ここだったんだー」

「……今っ」

聞き逃せないタイミングなのに……今来るのか……しかも逃げられない……

「鬼ごっこはおーわり」

「少し待っててくれないかな……今良いところなんだ」

「だめー」

途端に部屋中の物が浮く。

もうすぐ飛びかかって来る。

「鏡は何処にあるんですか!!」

聞こえる筈が無いのに、尋ねる。

早く答えが欲しいと……

「泥棒さんばいばい」

倉庫にあった刃物が腹部に突き刺さる。

痛みで身体を丸める。

「何処です……か?」

痛い……血が止まらない……誰か助けて。

部屋の物が自由に動くせいか、どんどん内部へと入り込んで来る。
身体中がどんどん赤くなって行く……

「こんな所で……まだ……まだなんだ」

「危ないかもしれないから、地k」

地下か？地下だよな？地下って言ってくれ……

最後まで聞き取れなかったが……地下だと思う。そう思うしか無い……

……次でどうにかなる。いや、次こそは終わらせる。そう思いながら今回も息絶えた。

t o b e c o n t i n u e d

m.
百三十五話 館探索編⑤～basement room

地図を再び確認して地下の場所を探る。

当主の部屋にあるのか……如何にも感が出てきたな。

倉庫にも曰く付きに見えるアイテムがあつたし……地下はもつと怖いが。

「ただ……そこにあるんだろうな」

不思議な鏡……流石に何も無いとは思わない……

行ってみて何も無かつたら……どうしよう……

「つて後ろ向きになつても仕方ないな」

当主の部屋は……鍵が開いているな。

少しだけ探しながらクローゼットをどかすと言うテンプレな行動で地下への階段を見つける。

「流石に化け物とか飼ってないよな……？」

そんなものはないと思いつつも不安になる。

ただ止まるわけには行かず進み続ける。

「暗いが……手元にあつて助かった」

明かりはまだ見える位置に置いてあり、手に取って使う。

真つ暗つて程ではないが……家の中でここまで暗い場所があると不気味だな。

「(ト)(ト)……かな？」

扉を見つけ中へと入る。

嫌な空気だ……

「骨董品とかが好きそうなのは分かったけど……」

壺とか怪し過ぎて俺は買う気が出ないんだよなあ……良い物だったって気付いたら残念がるだろうけど……

「……魔法陣まであるのはマジかよってなるなあ」

正直この主人は何がしたかったんだ？

こんなのおまじないで済むレベルじゃないだろ……全員が呪われてもおかしくないレベルだし……

「……ここには来てないと思ったんだが、流石にここにもか」

また皆の姿が浮かび上がる。

しかしそこに映るレイラは……この館にいるくらいのレイラにまで成長している様

だ……

「……」

しかし皆の様子がおかしい……何が？

「お姉様……」

「……レイラ、ごめん」

「いえ、お姉様達が悪いわけではありませんもの」

「しかし……不運なんだけど唐突過ぎて何も言えないや……ははっ」

「リリカ、笑い事じゃないよ」

「だったらどうしろって言うのさ姉さん!!」

「父さんも母さんも死んだ……それは事実だ。だからって立ち止まるわけには行かない」

「もう……どうしようもないでしょう？」

「……一先ず頼れる人を頼ろう」

「……いるの？」

「私は先輩に話してみる」

「だったら私は友達に……」

話し合って行く場所を決めているようだ……

しかしさつきまでの記憶は皆が楽しかったり喧嘩したりとか姉妹らしい記憶だったが……今のこれは本当に何が起きているんだ？

親が死んだのだろうか……唐突らしいし、こちらも理解が足りていない。

「レイラは？」

「私も皆を頼りますよ」

「了解、離れ離れになっちゃうけど。また会おうね」

そこで話は終わった……かの様に思えた。

地下でレイラが蹲っている。

「……あれ？もうこの館には誰も居ないんじゃない？」

レイラがまだ残っている事に疑問を思いつつ近付いた……だいぶ痩せている。

「お腹が……減りましたね」

館の中には既に食糧が残っていないのか、空腹で弱っている。
当然だが俺には何も出来ない。

「ごめんなさい、お姉様……レイラはもうダメそうです」

何があつたのだろうか？彼女だけが一体……

「皆は新しい道を歩めましたが……私は皆と一緒に居たこの館から出る勇気が出ませんでした」

鏡に向かって話しかけている。

自分は弱いと貶す様に。

「……本当に、皆で幸せに居たかっただけなのに」

……ふとした出来事で崩壊した日常は耐えがたい物だろう。

俺だってそうだ……今は全部が壊された非日常だ……

「幸せが溢れていってばかりで……」

「……」

これが彼女の死んだ理由か。

苦しんで苦しんで、悔いが残って幽霊になるのも分かるかもしれない。
だからって他者の命を奪うのは良くないが……

「なんだか皆の声が聞こえてきた気がします……お迎えなんですかね？」

「お迎えじゃ無いわよ」

「!？」

鏡の方を慌てて見る。そこには八雲紫の姿がある。……流石に記憶の様だが。

「ひっ……妖怪……!？」

「合つてはいるのよね……スキマ妖怪だし」

「スキマ妖怪……？それが何の用ですか？」

「ああごめんなさい、率直に言うと本気で死ぬ気？とね」

「自殺防止でもさせる気ですか？」

「そこまではしないけど……単純に、幻想郷に来ないかしら？とね」

「幻想郷……？」

「ええ、幻想郷」

「すみませんが……この館を出る気は無いです」

「構わないわよ。思い出があるんでしょう？この館ごと連れて行ってあげるわ」

「え……？」

「だからどうかしらと？」

「……何故関わろうとするのですか？」

「そりゃ、困ってる人は助けないとね……」

「……嘘な気がします」

「あらバレちゃった」

「……」

「気になる事があったからよ」

「気になる事？」

「そのマジックアイテムよ。今貴女の周りを姉と名乗る幽霊達が浮いているしね」

「え？お姉様達は……？」

「死んではないと思うわ。多分この子達は貴女が生み出したのよ」

「でも……」

「そのうち見える様になると思うわ」

「はあ……」

「その子達も貴女と話したいと言っているし、今回手伝う事にしたのよ」

「そうなんです……」

「だから貴女は幻想郷に来るかしら？」

「……行きます」

「いいのね？」

「はい、幽霊だとしても……また皆と暮らせるなら」

「なら……ようこそ、幻想郷へ」

そのまま館は全てが、吸い込まれて行った。

そこで記録が終わる。

予想以上の出来事がひたすらに続いていた。

「これで……大体が分かったのか？」

浴室の件はそりやなしだ。

あれは見れない……

「さて……最後に鏡だ……」

鏡を確認する。叩いても何の変化もないが……にとりさんがまたここでも映っている。

「どうせ声が届かな……」

「蓮司!？」

「え？」

にとりさんの声が聞こえて慌てて振り返る。やはり鏡の奥か」

「蓮司いるか！」

「居ます……!!！」

相手の方も驚いた顔をしている。

やはり鏡の世界だったか。

「今待ってろよ」

にとりさんが準備を始める。

流石に大丈夫だろう。

「問題はどよう行けば……」

疑問に思っていたが、消えるだろうな……

「…………え？」

今鏡に何か映らなっか？

いや映った。八雲紫だ。

彼女が何かするか、これからどうなってしまうのか。

「…………」

疑問に思いつつ、この状況をどうにか出来るかなど言いたいことは山ほどあるが、それを飲み込んで…………

「中に飛び込めばいいんだよな…………」

「蓮司！手を！」

「え？」

「鏡に」

鏡に手を触れるが、入る事が出来ない。

「あれ……？！これでも無い」

そう思っていると鏡の中から手が出てくる。

「……なっ」

よく見ればにとりさんのマジックハンドか……でも何故……？
目を凝らすとスキマの中を通ってきた様だった。

「蓮司iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

その手に捕まれ、鏡の中に潜って行った……やっと戻れたのか？疑問に思いながら。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

聞きたい事を聞く事を決めつつ、ホッと一息つくのであった。

百三十六話 その頃の彼女は
n i t o r i
s i d

e.

「また面倒な事をして……本当に蓮司は!!」

「今回は彼のせいではないわよ？」

「紫は混ざって来ないで」

「随分と嫌われた様で……」

「……」

そもそも、何故この二人が一緒に居るんだ？

唐突に来たのも怪しいし……今回も関わっているのか？

「では改めまして、小野寺さんお久しぶりですね」

「……はあ」

「何か？」

「分かるでしょう？」

「信じられていないのは辛いわね」

「記憶が消えていない様ですし、確実にあの事も覚えてるのでしょー？」

「勿論、覚えてるわよ」

「だったら分かるでしょうよ……」

「誰だつて嫌われたくは無い物よ」

「……それは、分かりますが」

「それに……今回助けたのは事実でしょ？」

「……だから納得出来ないんですけどね」

「別に私は貴方の敵では無いのよね」

「……」

考えが読めない。何か話そうともはぐらかすし……目的も行動も予想出来ない。

「にとりさんも大丈夫ですか？ 酷い目とかあつてたり……」

「驚いた事に大丈夫だった……何か企んでる様にしか思えないけどな……」

「今回ばかりは何も無いわ」

「へえ、それは何故だい？」

「今回がイレギュラーだからよ」

「……まあ、イレギュラーかもしれないませんが」

レイラについても分かりきっていない……

と云うか待てよ？

「レイラの件にも関わってますよね？」

「ええ、確かに私は彼女を知っている。それが何か？」

「本当に何がしたいのかが分かりませんが……」

「あの子がただ死ぬだけで終わる。そんな悲しいお話は誰だって嫌でしょう？」

「……」

結局は話す気無いかよ……

「……こちらからも聞きたい事があるのだけど」

「……」

からもって、答えられてない気がするんだが……

「鏡の中には誰が居たの？」

「……答える必要は？」

「あるわ、今回の解決に必要なので」

「……レイラだけですが、ずっと追われていました」

「それは災難ね」

「それで……これに何の意味が……？」

「後で話すわ。今は準備させてくださいいな」

そう言いながらひっそりと消えた。

あつこら……おい……

「蓮司！」

「どうしましたにとりさん？」

スキマ妖怪を追いかけようとするが、にとりさんに止められる。

「おっとそうはいかない」

「どうしました？」

「鏡の中のことは聞きたい事だらけだし。追うよりそれについて話し合いたいね」

「分かりました。でも俺の方も聞きたいので」

「んっ分かった。互いに話し合おう」

そのまま自分の事を話し始める。

何回死んだかは正直覚えてない……

死ぬるから何度も死んだと言って怒られたけど……

ただ……生き残れなかったしな……

「それでも、館に残された手掛かりを頼りになんとか出れましたよ……」

「結構恐ろしい事してたんだね……」

「同じ館ですし広がったのもありましたが……追い回されてばかりでした」

「まあこつちも色々とおつたさ」

「やっぱ、そうなんです？」

「騒霊達を手伝ってくれたけどね……」

「騒霊？」

「ああ、プリズムリバー三姉妹って呼び方らしいけど」

「……………」

レイラの姉さん達？騒霊になったのか？

いや…………過去の紫さんが言ってた生み出された子達か。

「ただ悪霊が多かったしさ、こつちでもお化け退治も必要だったしさ」

「……………なんでここまで悪霊いるんですかね？」

「異変ももうそろそろ収束してもいいと思うんだけど……………」

にとりさんの言い分的に相当多かったんだろかなあ…………死神は仕事しているのだからか？

「まあ、これで帰れるかな」

「帰れますかね…………？」

「どうした蓮司？」

「彼女の動向が分かりませんし……」

「……紫か」

「本当になんで会ったんですかね……」

「協力するって唐突に来たんだよ」

「ええ……」

「驚くだろ？」

「俺も理解出来ないので詳しく聞いてもいいですか？」

「ああ分かった。地下に来た時から説明するよ」

時は少し前に遡る。

河城にとりは館内で盟友を探していた。

「何処まで飛ばされたんだよ本当にさ……」

一階も二階も見当たらなかった。

本当に遠くへ飛んだのだろうか？

「レイラも居ないね……」

「そうだね……反応はしてるんだけど」

「どの辺にしてる？」

「んー地下かな、でも無いんでしょ？」

レーダーを見ながらルナサに答える。

「分からないなあ、あるかもしれないけど行った事ないし」

「なら探した方が良くないかい？」

「行き方わからないしき、そもそもあるかも分からないんだよ？」

「そっか、そりゃ残念」

床を見るが穴一つない。壁はボロボロなのに床には傷一つない……違和感だけど
……

「壊しちゃダメだよねえ……」

「勿論、私達の居場所が壊されちゃ困るよ」

「あーもう仕方無いな……」

諦めてまた探し続ける。階段の欠けた鏡も使いようが無いし……

「……ん？」

今一瞬鏡に何か映ったような？

欠けているせいで顔は分からないけどあの服は蓮司……？

「いや、無いかな……？」

鏡を覗き込む、当然割れているので自分すら映らない。

「やーっぱ気のせいかな」

そう思っていると鏡からスキマが開きにゆつと妖怪が現れる。

「うわああああああああ!!」

「どうしたの!?!」

慌ててルナサ達が駆け寄ってくる。

「今……鏡に……」

「鏡……何も無いけど?」

「え……?」

鏡を見るが確かに誰も居ない。

アイツまさか顔だけ出して逃げたか?

「第一その鏡映らないし何も無いでしょ」

「……まあ確かに、何も映らないけど」

「……アレが幻に思えないしな……」

「すまなかつた」

「気を付けてね」

「分かつた」

皆に謝罪する。納得出来ないけど、理由があるんだろうな。その後皆が散らばった後また鏡に近付く。

「……何の用？」

「困っているようなので」

「お前のせいで私は迷惑被ったんだけど？」

「そう言うのもいいじゃ無い」

「……はあ、それで出不精な妖怪がわざわざ出張ってくるのかい？」

「少しだけ問題があつて」

「問題？」

「彼が閉じ込められるのは少し都合が悪いので」

「……蓮司を知っているのか？」

「ええ、多少縁があつたのよ」

「……信用したく無いんだが」

「でも、彼を探しているのでしょうか？」

「ああ畜生、その通りだよ」

「では地下へと案内しましょう」

「……何が目的だ本当に、お前はただの人間に入れ込む妖怪じゃ無いだろう」

「ええ、そうね。それだけなら何もしないわ」

「だったらなんで」

「ただの人間じゃ無いのは分かっているでしょ？」

「分かってるけど……それでもだ」

「……まあ一つだけ言うならば」

いやいやって顔をしながら紫は話を続ける。

言いたく無いんだろうか？ だったら帰って欲しいけど。

「いい意味でも悪い意味でも彼は契約者だからよ」

「どう言う事だ……？」

紫だけじゃ無い……蓮司お前は何をしたんだ？

彼女の話聞きながら、にとりも悩んでいたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

百三十七話 異変と悪霊くto solve.

「そつから地下で鏡を見つけて君を引き摺り出したわけだけど……色々とあつたなあ」

「契約者……」

「何か気がかりかい？」

「紫さんが言った意味も分からなくは無いんですが……」

何かを契約したのは予想が付いている。

内容までは分からないが……

「アイツと契約を結ぶなんざ命知らずとしか思えないけど……」

「必要だったんですよ」

「……そうか」

「确实では無いが、流石に俺も騙されて契約を結んだとかだとは思いたく無い。

「まあいいや、詳しくは後だ……先にアイツを……」

「待たせたわね」

「うわっ!？」

「突如背後から声を掛けられたにとりさんが驚く。

「後ろまでスキマを使って行ってたんだ……」

「と言うかまたスキマを使ってひっそりと現れたのか……」

「随分といい反応で助かるわ」

「ぶっ飛ばすぞ!？」

「怖い怖い……少しやる事を終わらせて来ただけなのに……」

「何して来たんだよ……」

「確認よ」

「確認……?？」

「結界異変はもうとつくに収束している。ただし未だに悪霊は残っているの」

「それは異変関係無い可能性もありますけど……」

地底とかにも結界異変じゃ無い時にだって悪霊居たしな……ならおかしく無いだろ

う。

「よく知ってるわね」

「まあ……それでおかしく無いのでは？」

「おかしくは無いのよ」

「……何が言いたいんです？」

「ここ以外はね」

「……多いですもんね」

「リーダー格であるレイラ・プリズムリバー」

「やっぱり彼女が……」

「正確には彼女の中に棲む悪霊がね」

「悪霊……」

「彼女は幻想郷で天寿を全うしたの、ただ偶々この世界に帰って来た」

「何故ですか……?」

帰って来る理由は無いと思うのだが……

何か心残りがあったのだろうか?

あるとしたら三姉妹の事だろうか……

「簡単な話よ、結界異変で外の霊達が雪崩れ込んできた。本当にこれだけなら死神達も仕事の間合合わないわけないでしょう?」

「……いや、それは分かりませんが」

死神の仕事量なんて分からないし……ただ捌ける量じゃ無いとは言っていたが……

「外の世界の霊と共に、幻想郷内の霊達も地上に現れたの」

「え？」

まさか地底の霊達が……!?

さとりさん達がまずいのか？

「彼岸の時期は過ぎましたが、この結界異変で誘発された様です。今年には彼岸だらけになっただわ」

「なるほど……」

地底は関係無いのかな？

それなら良かったが……

「何を安堵してるの？」

「いや……何でもないです」

「ふーん。まあいつか……とにかくそのレイラが彼岸的なもので帰って来て悪霊に取り憑かれたんだらう？」

「そうね。合ってるわ」

「だったらなんだ？死神を呼んでくればいいのか？」

「いえ、今回は違うわ」

「じゃあどうするんだよ」

「……今回は特殊な事情なの」

「だったらなんだ？私達で解決しろと？」

「いいえ、それも違うわ」

「だったら何が言いたいだ紫、よく分からないぞ」

「にとり、さつき貴女に言ったけど鏡の中入れたかしら？」

「いや……無理だった。スキマを使っても通り抜けたしな」

「そんな事があつたんですか……？」

「ああ、コイツと合流後試したが私は鏡の世界に入れなかった」

「……マジですが」

「当然私も無理でした。無機物であるマジックハンドは通りましたがね」

「え……？　だったらなんで俺は？」

「彼女に招かれた獲物だからでしょうね」

「獲物……」

事実だが少しだけ傷付くな……

「彼女が作り出した世界から引き摺り出さないと、死神どころか誰もどうしようもない
の」

「……だったら放置すればいいんじゃないか？　それしかないだろうし」

「大変な事になるわよ」

「……何がだい？今でさえ大変だろうけど」

「一度獲物にされたのも、力を付けてまた拐われるわよ」

「なっ……!!」

一度冷静になる、ただ……確かにそうか、玩具にしか思っただけだった様だし。

「ですから、どうかしないといけないわ。それに……」

「まだ何か？」

「貴方もレイラを救いたいんじゃないの？」

「……」

「いや、それは無いだろう。だって蓮司は殺されたんだろう？」

「……」

「おう蓮司、どうした？」

「見たのでしよう、彼女の過去を」

「見ましたが……」

「家族と別れてもそれでも騒霊達と生きたわ。だからこのままにはさせたく無いの」

「……そうですね」

「おい、蓮司。何する気だ？」

「にとりさん……どつちみちこのままじゃ俺がまた拐われそうですし……どうにかするしか無いんですよ」

「紫、どうにか出来ないのか？」

「無理ね」

出来ると思われる死霊を知っている。しかしそれを教えない。

「戦わなくて良いんですよね？」

「ええ、どうせ無理でしょ？」

「……無理ですね」

逃げてただけだし、なんなら死にまくってたしな……

「だから鏡の世界から引つ張って来て欲しいの。そしたら後はこちらでやるわ」

「…………分かりました」

正直無謀だ。異変は全部任せきりだったし妖怪や幽霊と対峙する事はあっても死ぬか命辛々だったただけだしな…………それを生き残れって言うならだいぶキツいな。

「…………」

「大丈夫ですよにとりさん、死んでも終わりじゃ無いんですから」

「…………命を粗末にするんじゃない」

「勿論死なない様にしますよ」

何回も死にたくなんて無い。痛いのは勘弁だしな…………

ただ…………やらなきや自分が危ない。

本音を言うと彼女もどうにかしたいと思っている。ただそれを言い出すとまた怒られそうだしな…………

「準備は良い？」

「……まあやるしか無いですからね」

かくれんぼから鬼ごっこに変わった気分だ。

しかも捕まれば死ぬ……恐ろしいな。

ただ……覚悟を決めてやるしか無い。

「それじゃ行って来ます」

「……ああ」

「にとりさん、待っていて下さいね。俺も戻って誰も居なかったら不安なので」

「……分かった」

鏡にスキマが開かれたまた中への道が開く。

最初にとりさんが通ったが出て来てしまった……やっぱ俺だけなんだな。

「……あー獲物が自分から罠に掛かりに行くなんてな」

……大丈夫、大丈夫だ。やれるから。

彼女も助ける俺も生きるそれで良いだろ！

「っしやあ!!」

気合を入れる。そして勢いのまま鏡の中へと入り込んだ。

to be continued

百三十八話 悪霊の住処～dead house.

鏡の先は先程までいた世界。

正直でたいと思っていたのに、すぐに戻る事になるとは思わなかった。ただ、今回は脱出じゃなくて、目的があるわけだが。

「まずは……探さないとな……」

レイラ・プリズムリバー。彼女が何処にいるか……

地下室から出ながら探し始める。

「ん……」

レイラが見当たらない。

隠れたとかはしなそうだが……

「……悪霊達も居ないな」

おかしい、なんで何処にも居ないんだ？

まさかまた違う世界……？

「……だったらどうする」

あちらこちらの部屋を探す……しかし居ない。

そして……あの部屋へと辿り着く。

「……ここは、流石に居そうだけど」

こここの世界で何度も蘇った隣の部屋。

悪霊達が詰まっていた部屋。

……ここも居ないならお手上げだが。

「…………中には」

あれ？誰も居な……………だったら何処……………

「……………え？」

物凄い喪失感を感じる。

身体がよろけ下を見ると、赤い液体が流れている。

それが何かすぐに自覚した。

「血……………？」

その流れている場所を見ると……………自分だ。

一体何が……………？

「……………うえ」

下半身を見て嫌悪感が募る。

自分の胴体に穴が空いている……だからバランス取れなかったのか。部屋に入った瞬間飛びついて来たのか？

「……隠れてる？なんで？」

何に気付いたんだコイツらは？

今まで散々出回っていたのに、なんで急に隠れ始めた？

「あ……がああ……」

死なないって言ったのにすぐにこれはダメだろうよ……

ああ……ただダメだなこれは。

「畜生……」

何処からか聞こえるクスクスと言う笑い声。

レイラもここに居たんだろうか？

「……」

一瞬言葉を出し掛けたが、口を噤む。

やろうとしている事がバレるわけにはいかないし……

多分記憶は消えていると思うが、それでも隠れられたし気を付ける。

彼女を助ける。そうする為に欠かさない様に。

しかし……気を付けるって言ったのに悔しいな。

—————

何度も目覚めたベッド、過去に戻る事は無くて良かった。多分この館に縛られているんだらうな。

「……なんで警戒されてるか分からないけど」

何があったんだ？出て行ったことがバレたとかあるのか？
それなら迂闊だったかもしれないが……

「……………どうすつかなあ」

また無謀にも入るわけには行かないが……

あの部屋に入らなければどうにかなるかもしれないと思って、探すのかもしれない
ないな……

「霖之助さんが居ればアイテムも分かったんだろうけど……」

無いものねだりしても仕方ないが……

当主の部屋や、地下には何かありそうだな……

「行くか……」

当主の部屋や地下に潜る。

骨董品とかアイテムとか多いが……実際なんだか分からない……

適当にアイテムを使って、失敗だったらやり直したかも無しじゃないが……後で怒られそう。

「……………これは？」

ロザリオ、しかも金色だ。

純金かは分かる程知識は無いし分からないけど、重いしあり得はする。

「あー……………まあでも……………」

相手は幽霊であって、日本のお化け達だしなあ……

ロザリオが効くか分からないが……

「ただ他の謎のアイテム達よりは分かりやすいか……………」

謎の粉—とか投げて何が起こるか分からないし、第一とつくに消費期限とかの類は切れてるだろうから吸い込むと怖い。

壺とかはそもそも何か起きるとは思わないし……そう考えるとこれしか無いか？

「手当たり次第はしたく無いけど……」

ただ、何も試さないのも違うしなあ……腹を括るしかない。

「……」一応懐中電灯も持つて行くか」

準備は万端だとは到底思えない。

ただし、進まなければどうなるかも分からない。

腹は既に括つてある。大丈夫だ。

「……また、隠れていると考えながら動いた方がいいだろうな」

そのまま周囲を警戒しながら、扉へと向かった。

さて……二度も同じ手を喰らう馬鹿では無いが、それでもかなり警戒して扉を開ける。

「確認を……」

急いで周囲を懐中電灯で照らす。

霊は居た様だが、光に驚いたのか散らばって行った。

「……ハイハイ」

霊達が、部屋から消えて行った事を確認して部屋へと入る。

この部屋はずっと溜まっていたし、見たのは初めてだが……

「………礼拝堂？」

館にこんな場所があったのかと驚きつつ、部屋の中を探索する。

何も無いし……本来ならば、空になったその場所は神聖である筈だ。

なのになんでこんな寒気がするのだろうか？

「……神々しいとかとは逆で何故か悪寒が酷いな」

「それはね」

「!？」

声のする方向を見る。

レイラだ……こんな所に居たのか。

「……」

連れて行く様に、誘い込むための動きをするが、一切気にしていない。
完全にこちらを無視して口を開く。

「神様が居る場所……の筈だけど、事件が起こったの」

「事件……?」

周囲を気にしながら彼女の話に耳を傾ける。

「プリズムリバー姉妹達の両親。私の親でもあるけど、彼らはここでマジックアイテムを使つて死んだわ」

「……それじゃあ」

この部屋は両親に呪われているのだろうか？

そうなると手を付けられない気もするが……

だから霊が溜まりやすく、先程レベルになっていたのか……

「だったらここから避難しないといけないね」

一歩下がる。このまま引き寄せて地下へと向かわないと……

一発じゃ無理かもしれないが……それでも……

「ねえ」

「何？」

「何する気なの？」

「何する気って……」

「分かっているわよ」

「何が……ですか？」

「貴方の不思議な力。死んでも元に戻るのね？」

「っ!？」

なんで……バレて……

「ここは私の世界だもの。貴方の動きの違和感に気付けたわ」

「違和感……そんな物は……」

「まるで既に体験したかの様に動く、この部屋だつて入れない筈なのに // 偶々 // 懐中電灯を持ってきた様だし」

「それは……偶然だよ」

死なない為に動くしか無かったが……その動きで分かるのか……

「最初は未来予知とかも考えたわ。だけど違う様だし」

「……決めつけるのは早計だと思いますが？」

「だって、未来予知があつたら……この部屋に入らなかつたし」

「え？」

その途端何かに捕まれる。

後ろを見ると……コイツらは逃げた筈じゃ？

「はい、お終い」

「……」

また死ぬか……仕方ないけど、これじゃあまだ何回も死にそうだな……
仕方無い……また動き方を考えて……

「逃げられると思つた？」

「え？」

「また死んでも逃げられちゃうもの。逃がすわけ無いでしょ？」

「……」

「さて、新しい玩具になりなさい」

その言葉と共に、身体の中に何かドンドン入り込んで来るのであった。

to be continued

百三十九話 常識外くdon't get caught

t.

「○○さんって本当に凄いですね」

「いえいえ、そんな事はありませんよ。皆だつてやれば出来ます」

「いや、流石に厳しいですよ。それも奇跡なんですかね？」

「ふっふっふ。奇跡をこんな物で済むと思つてもらつては甘いです。本当の奇跡を後で見せましょう」

「……いいんですかね、奇跡をそんな安売りして」

「……まず第一に、信仰を集める事が大切なので」

「ああ……やつぱり大変なんですね」

「つてわけで小野寺さんもどうですか？」

「……いや、自分は明確な一定の○○教とかみたいには持つのは厳しいです」

「やつぱそれが日本らしいんですよ……」

「そうですね……特定よりも信じたい時にだけ信じるケースが多いですし」

「それも八百万の神がいる影響ですかね」

「でしょうかね……」

「まあ、勧誘は諦めます……興味ない方を誘っても○○○様に怒られそうですし」

「……大変ですね、色々」と

「頑張りは認めてくれますので」

「それなら良かったですけど……」

「それじゃあ小野寺さん。最後に大事な事です」

「この日本と言う場所においては神様はあちこちにいますので……簡単に諦めないでください。どうしてもない時はきつと助けてくれますよ」

「……そうだと良いですね」

勧誘が続いた様に思えて、この時は若干惑っていた。

ただ……今の俺はどうだろうか？

○○さんらしい考え方だなんて、とも思ったけど。

…

「……あれ？」

今何が起きてたんだ……？そもそも今どうなって……

「……」

目の前にはレイラがいる。

驚いた様な表情をしているが……

「何をしたの？」

「え？」

「何をしたのと聞いているの!!」

何をしたって何が起きているんだ……？
そう言えば俺の身に何が起きていたんだっけ？

「悪霊……」

身体の中に入り込んできた感触。

確かに何かがいた筈だ……

それはどうなったんだ？

「……消えた？」

だったら何処に行っただって言うんだ？

逃げたのかな……？

「貴方が消したんでしょ？」

「……」

何かがあったか……まさかとは思うがあの子が言つてた神様がなんかしてくれたと？

神様が今まで干渉して来なかつたのにあの子を思い出して……とかあるのか？

「……かかれ」

多くの物、幽霊達が飛び掛かる。

物を必死に避け、霊達が近付いて来る。

終わったか……と思つたが……

「……言つた通りなのか」

目の前で霊が消えた。

自分自身でも驚いたが……何があったのかは分からない。

「……………それか」

身体が浮いた気がしたが、すぐに落ちた。
そしてポツケから物が浮かぶ。

「……………ロザリオ」

確かに退魔的な効果はある物だが……………

まさかこれも神が……………？本当にあの人的に考えるとなんでもアリになってしまいうな

……………

「……………と言うか」

不味いな……………不味い不味い……………

ロザリオを取り上げられたって事はもう守りもない……………流星に危ないよな……………

「それじゃあ、お兄さん」

「失礼します!!」

色々なものに追われながらも必死に逃げた。

近くだが……勢いが激しい。スレスレで物が飛んで来る。

「……………ここで終わるわけにはいかない」

死ぬかもしれない。いや死ねば良い方か。

紅魔館の様に飛んでくる物に脚が潰れて全て乗っ取られるとか言ったら勘弁だ……

「まだ……………」

ふらふらになりながらもなんとかその脚で主人の部屋まで辿り着く。

だが……………ここからだ……

「お父様の部屋？悪い子だね」

「……実は俺が主人だから君は入っちゃダメだよーって」

「面白くない」

「はい……」

階段の前まで着くが、そこでレイラがニヤって笑う。

「なんだ……?」

「お父様が隠し部屋を作ってるのは知らなかったけど……降りるのかしら?」

「……」

言いたい事は分かる。

階段を降りよう物なら無秩序な物が降り注ぎただちに直撃するだろう。

「大人しく玩具になつて？」

「行かないやならない場所があるんだ」

「だったら、この子達にあげるわ」

先程よりもレイラの後ろに霊達の姿が見える。

その顔はまるで生者を恨んでいる様にも見えた……

「……どうする」

頭を巡らせる。どうすればこの場を切り抜けられる？

そんなの常識的に出来るわけ……

「……」

「諦めてくれましたか？」

「……ない」

「え？」

「常識に囚われちゃいけない……」

ここは非日常なんだ、いつまでも常識のままじゃダメだろう。

生き残る為には常識外の事を……

「それじゃー！」

そうして階段から飛び落ちた。

最悪死んでも良い。いや怒られるけど………だけど逃げるにしても死ぬにしてもこの方法が一番マシだ……

そんな予想外の行動にレイラは一瞬遅れ、ポルターガイストが届かなかった。

「追わないと……」

追おうとするがレイラの身に違和感が起きその場に蹲る。

「邪魔をするな……」

自分の中にいる何かに邪魔をされ、動けなくなる。

指示を受けていた幽霊達もオロオロしながら動かなくなる。

「既に奪われた癖に……」

身体に訴えかけるが、より一層抵抗が激しくなった。

その時間稼ぎは、階段を飛び降り気絶していた蓮司が目覚めるまでの時間稼ぎとなつた。

「常識から外れるのはいいけど……迂闊過ぎたな……」

脳死し過ぎた……結局早く降りられても気絶しちや意味ないだろうと。

何故か無事だった事に安堵しつつ折れた右脚を引き摺りながら鏡へと向かう。

目の前まで辿り着いた所で、レイラが下へと落ちてきた。

「……なんで、逃げるの？」

「行く場所があるって言っただろう？」

「嫌いなの？」

「少なくとも君は本人じゃ無いだろう」

今の振る舞いは子供の様に思えるが……少なくとも残酷性を含んでいる。

幼い子が悪霊化したのかもしれないが……俺じゃあ付き合いきれないし……

「ううん、私は私」

「その身体は君のものじゃ無いだろう」

「……私のだもん!!」

駄々をこね始める。

それを無視し、鏡に入ろうとする。

脚が折れてる上に、油断すれば一瞬で死ぬるのだ。

「絶対に逃がさない、元の世界でも追いつけてやる……絶対に」

「いや……困るか……」

そのまま飛びついて来て鏡に叩きつけられる。

しかし鏡に衝突する事なく、身体はすり抜けていった。

一応条件は満たしたが……本当にこれは大丈夫なのか？
どう見てもダメだと思いつつ、元の世界を思い浮かべる。
紫さん、出来るならどうかしてくれよ。

「……があっ」

外の世界に辿り着き、床へと叩きつけられ、そのまま首を絞められている。
やばい……窒息どころか首がねじ切られる。

「死……ん」

必死にもがいている所に音楽が流れ始めた。
その音楽に驚いたのかレイラの手が離れる。

「……げほっ」

慌てて周囲を確認する。

にとりさんや文さん、紫さんはまだしも死神までいたのは驚いたな……
そしてその周りでは三姉妹が音楽を始めていた。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

百四十話 さよならの時 good bye.

懐かしい気のある音楽。

聞いた事は初めてだが、それ程までに引き寄せられる。

「……各々が好きな音楽は違ってた筈だけど」

長女が暗い音楽が好きで、次女が明るい感じだったな。

各少女達に集中すると、確かにそれぞれの好みの音楽を奏でている様だが、自然とそれが調和している。

だからこそ、文さんが言う様に人気なんだろうなど。

「やめろ!!流すな!耳障りだ」

明らかにレイラでは無い言葉をレイラが放つ。
悪霊に効いているのだろうか？それだと良いが……

「音を止めろ!!」

騒ぎ立てて三姉妹に襲い掛かろうとする。
それを死神が防ぐ。

「やらせるわけにはいかないねえ」

「貴女ならそのままぶった斬ると思ったのだけど」

「それ言うとアンタが怒るだろう？」

「ええ、当然ね」

「だから待つてあげてるんだよ。感謝して良いよ」

「……………」

妥協ラインを探す二人を置いて音楽は流れ続ける。
それが苦しい様で必死に暴れる。
心配になるが死神に制止される。

「ダメだよ、待っててな」

「ですが……………」

「今レイラが抗っているんだよ」

「レイラが……………」

「だから見守っててやれ」

「……………」

正直レイラと会ってから日数としては一日も経っていない。

しかし何度も死に何度も会った。

過去の彼女を知り、何度も苦しみを知った。

思う所が無いわけではないが……………どうにかしたいって気持ちだっただけであつた。

「怪我してる癖に真面目だねえ」

「彼女自体が悪くないと考えますと……………」

「いやあ、本当に不思議な人間だ」

「そうですかね……………」

心配に思いつつ話し続ける。

彼女は未だに苦しんでいる。

早く中から出て行けと願うばかりだった。

「……レイラ」

真剣に弾きながらも姉妹達は本気で心配している。

正直あの紫さんも心配している様で驚いたが……

「……小野寺蓮司」

「なんですか紫さん」

「来るわ、構えなさい」

「構えなさいって……」

その言った途端レイラが倒れる。

慌てて近寄ろうとしたが……その瞬間中から何個もの黒い塊がレイラの中から飛び

出す。

そのまなこちらへと直進して行き……

「よつと回収完了」

こちらに飛び掛かる前に、死神がその魂を刈り取った。

「有難うございます」

「これが仕事だしさ。と言うか周囲気を付けなよ、まだ回収しきつてないだろうし」

唐突に霊が現れるのを警戒しながら周囲を見る。

そうしているうちに一匹、また一匹と刈り取られた様だ。

「これで最後だった」

最後の塊を切り取りホッとひと息ついた。

何かもよく分からなかったが……凄まじい量がいた事は分かった。

「それじゃ、後は嬢ちゃんが目を覚ますのを待つとしますか」

「いいのね？ てつきり貴女ならすぐに終わらせると思ってたけど」

「生憎、仕事をサボるのが生き甲斐でね」

「あまり上司を困らせてはダメよ」

「分かってるって」

二人の話を聞きながら、少しの時間が経ちレイラが目を覚ました。

「レイラ!!」

「お姉様……?」

三姉妹に囲まれ、少し戸惑いつつも喜びを見せる。

「大丈夫かい…………？」

「ごめんなさいお姉様…………私…………」

「いいんだよ、無事ならば」

「それに…………彼も巻き込みましたし…………」

そう言いながらこちらの方を見た。

「…………少なくとも今なんちゃらかんちゃら言う気はありませんよ」

折角家族で集まったのに、今水を差すのは違うだろうしき。

「今じゃないと多分話せませんよ」

「それなら尚更優先しなよ」

様々な感情が入り混じっているが……死神が来ている以上は彼女もまた戻るのだからな。

だからこそ、そちらを優先して欲しい。

「……分かりました」

そのまま一礼をして彼女達の方へと向き直す。

本当に……素はいい子なんだな。

「だいぶ痛手を負った様ですね」

「文さん……」

レイラが視線を逸らすのと同時にこちらへと文さんが向かって来た。

「折れてるだけなら治す事はそうそう難しく無いですがね」

「それならいいですけど……」

脚が取れた時の様な地獄はもう勘弁して欲しいしな……

治ると聞いて安堵する。

「なんなら三姉妹の躁の曲によっては治せるかもしれませんが……単独での多用は禁止されていますが」

「薬か何かですか……?」

「いえいえ、ただの曲ですよ」

「そうですか……」

少し不安に思いつつ周囲を見渡す。

「にとりさんは？」

居るには居るが、こちらに来ないのは何故だろうか？

「貴方に託すしか無くて、それで脚を折って来ましたし……凄く落ち込んでいます」

「……」

「後でフォローしてくださいね」

「了解です」

無事に帰って……来ては無いな死んだし……

それでも帰って来れたとは言え脚折っちゃったしな……

「まあ……また永琳さん辺りに……」

「あの、これどうぞ」

「レイラ？話していたんじゃ？」

「終わりました。それで最後にこれをつて」

謎の小包を渡される。

「なんですかこれは？」

「今回の件で迷惑掛けてばかりだったから……こんなのに割に合わないかもしれないけど……」

「……オルゴール」

「お父様が残っていてくれたの」

「……それって生前の姉妹皆のじゃ？流石に貰えないって」

「どうせ誰ももう来ないわ。それにこの子達の他にも私を覚えていて欲しいから……」

「と言うか貰わないなら私が貰いますよ？プリズムリバー姉妹達のオルゴールなんて貴重ですし」

「ダメ」

「……って事ですが」

「貰います。自分が貰ってしまっていないのか不安ですが」

彼女達が音楽が好きだった事は分かっているし、その結晶を貰えるなら有難い。

だが言われた様に……長い一日ではあったが一日だったんだよな……

「時間を掛けました」

「ん？もうちよつとサボりたかったけどねえ」

その後レイラが死神へと話しかける。

「いえ、これ以上残ると名残惜しくなってしまうので」

「まつ、残っていると悪霊になるのも予想できるから……ごめんよ」

「いえ、自分も久々にこの子達に会えて良かったです」

「そうかい、そりゃ良かった」

死神はそうして鎌を振るう。

当たったレイラは少しずつ身体が透けていく。

「皆様、また会う事があればその時は正気のまま逢いたいです」

「いつでも帰って来ていいからね大事な妹」

「有難うございます姉様達」

「正直君には良い印象はないけど……無事天国に戻れる様祈っておくよ」

にとりさんも文句はあるものを見送った。

それに一礼して文さん達へと続いて行った。

「それじゃあさようなら」

レイラが完全に消え、少しだけ泣きそうになるのを堪えた。

「皆様も有難うございました。あの子が無事天国に戻れた様で良かったです」

「まあ無事に異変も終わった様だしよしとしよう」

にとりさんがそう言うが……そうかこれで結界異変は完全に終わったんだ。
幽香さんを始め本当に長引いた異変だったな……

「……つとあの死神はもう帰ったんですね。本当に早いです」

文さんがそう言い、周りを確認すると確かにいない。

仕事が終わったら本当に消えたな……

「では私もこれで」

「逃がすわけ無いだろ？」

紫さんもさりげなく逃げようとしていたが、にとりさんが止めてくれた。

危なっ……逃げられかけた。

「……何か？」

「流石に色々聞かせてもらおうぞ」

「……」

「異変も解決したしな、文句は言わせないが」

「そう言えば……異変が解決したらって話が……」

「……分かりましたわ」

紫さんがこちらへと向いている。

やや面倒臭そうな顔を一度だけして、真面目な顔になる。

「全部は話しません。ですが少しだけお話しするとしましょう」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百四十一話 今後の課題とく Crisis boy.

「さてそれじゃあ……」

「言った通り全部は話しませんからね」

話を切り出そうとすると、いきなり止められる。

「……何を知っているんですか？」

「全部じゃ無いけど、色々だよ」

「……」

「そんな聞き方されても答えられないわ」

「……死に戻りは何故起きるんですか？」

「ああ、死に戻りね」

「……話してくれるんですよね？」

「簡単に言うと私が原因だけど」

「……ですよね」

「ただ、必要だったからよ」

「……必要、死に戻りが」

「ええ、そうでもしないと小野寺さんは死んでいましたから」

「死んでいた……一体俺に何が」

「そこまでは知らないわよ。事故にでも会ったんじゃないの？」

「そうですか……」

「だから私が生と死の境界を弄ったの。そのせいで、生きるのも死ぬのも不安定な状態なのが貴方よ」

「不安定……でも何度も死んでるんですが」

「当然、死ななきや生きても無い死んでも無いじゃなくて不死だもの」

「それはそうですが……」

「だから死ねば矛盾するから矛盾が無くなるように世界が巻き戻るわ」

「……意外と教えてくれるんですね」

「正直貴方が死に戻る理由なんて隠す必要無いもの」

「……だつたら何故前死んだんですか」

「当然言えない事もあるからね」

「そうですか……」

「生きてるか死んでいるか不安定な状態か……」

「最初事故か何かで死に掛けて、その状態を維持しているから魂が死に掛けとか言われるのだろうか……」

「なんでそんな事をしたんですか？」

「それは既に話したけど？ 思い出せない？」

「思い出せません……」

過去の自分が話していたんだだろうか？

だが思い出す事は出来ない。

「だったら言える事はないわ」

「……この記憶喪失の理由は？」

「言う気はないわ」

「おい紫」

「にとり、この件は私から話す気は無いわ。これが一番の危惧だし」

「異変を起こそうとしたとか……?」

「さて、どうでしょうかね?」

表情一つ変えない。

「ここまでされると読み取る事も不可能だろう。」

「分かりました……ならその張本人は?」

「自分で探したらどうかしら? 言った様に私が話す事はないのよ」

「……分かりました」

手がかりはなしか、前ににとりさんと調べた時も反応無しだったしな……

「最後に一つだけ」

「なんですか？」

「貴方はそのまま生き続けなさい」

「え？」

「これからどうしろって疑問に思っていたが……」

「また何度も死に戻って事ですか……？」

「幻想郷に生きる外の人間人以上、生きて行くのは厳しいでしょうね」

「元の世界には……」

「戻した所で死ぬわ。境界が閉じて死の運命が決まるだけだもの」

「だったら意味は……」

「正直引き伸ばしでしかないわ」

「……絶対に死ぬと？」

「今の所わね」

「記憶に、死に掛けに……ほんと勘弁してくれよ……俺はただの人間なんだぞ……」

投げ出したくなる。投げ出した所で意味があるわけではないが……それでもやる気は失せていく。

普通の人なら死んでいて助かった分マシかもしれないが、心臓を握られているのと同義に思える。

「……まっ自由に生きなさい」

「そうすればどうにかなると……？」

「確証は無いけどね」

そのまま落胆している俺を置いて去って行った。
にとりさんや文さんも啞然としているが……

「予想以上でしたね……」

「と言うか文さん知ってましたっけ？」

「にとりから聞いています」

「……成る程」

「それで、この後どうしますか？」

「どうすればいいんだろうな……」

「あまり落ち込まないで。死んだわけでは無いでしょうよ」

「そりやそうですが……」

「私の方も探してみますので、とりあえずは緩くやつてきましょう。異変もちょうど終わった事ですし」

「………緩くと言われましても」

「一先ずは人里に戻って………それから………足を治しませんと」

「………それはそうですね」

忘れていたとは言わないが、それ以上に突きつけられた現実になんか無かった。

「永琳さんの元にも向かいますかね……」

「それがいいかもしれませんね。にとり行きますよ」

「……ああ」

目に見えて落ち込んでいる。

にとりさんは何も悪く無いと思うのだがな……

そのまま声を掛けられずに霧の湖まで辿り着いた時、事件が起こった。

「しっ」

「……どうしました？」

「声を抑えて。突っ切るわ」

突っ切るって何をする気だろうか？

無謀じゃ無い？大丈夫か？

「脚が……」

「そうだったわね。捕まりなさい」

文さんの手を掴み空を飛ぶ。

その瞬間……霧の中でも状況を理解した。
霧の中に潜む赤い目……それは……

「咲夜」

「はっ」

レミリア・スカーレットと十六夜咲夜。
霧の湖は近くとは言え一体何が……？

「つて事は……」

危惧していた事が起こった。

文さんの手を掴んでいた筈の手は宙を浮いている。
時を止められたか……

「ああああああああ」

その後起きる状況を理解して叫び出す。

そのまま飛べる能力の無い俺は落下して行く。

「死ぬ……死ぬ……」

すると落下している最中に風に受け止められた。

「全く……レミイダメでしょう。しっかりしなさい」

パチュリーさんも紅魔館から出ているのか……!?
一体何をする気だ……??

「さて、初めましてかしら? ウチに何かご用かしら?」

「え?」

「え? じゃ無いでしょ、人の庭に入り込んで聞かせてもらおうよ」

「ここって、霧の湖の筈ですよ?」

「それが何か?」

「……少なくとも紅魔館に入った記憶は無いですが」

「ええそうね、貴方は」

「貴方は……?」

「あの天狗と一緒に居たでしょう?」

「……」

ああ、文さんか。俺が迷ってる間に何かあったのかもな……
関係ないなら少し泣きそうだ。

「ついて来てもらえるかしら?」

「……は」

心臓を握られたと言った途端に本当に握られるケースになるとは思わなかった……
とにかく、また来るって言ったらし丁度良かったと考える事にしよう……

「とりあえず……」

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

記憶の無いであろう彼女を相手に生き残れる事を祈るばかりだった。

く 紅魔館編②く

百四十二話 紅魔館にてく reunited girl
s.

「おい文」

「なんですかにとり」

「分かっているだろう？」

「申し訳ないけど……あれは仕方が無いのよ」

「その後助けに行かないのか？」

「私が行ったら尚更大変な事になるわよ、普段が悪いのだけど」

「だったら見捨てると……お前は……」

「少なくとも小野寺さんは利用価値があると思ってるし、どうこうはしらないと思うのだからどね」

「それは文の決め付けだろう」

「でも、だったらどうするだし」

「今から助けに……」

「ダメよ」

「文!!」

「いい加減山に帰るわよ。引き延ばしすぎたけど、いい加減天魔様が機嫌を損ねているわ」

「くっ……」

「一応使い魔達は置いておくわ。何かあったらにとりに伝える。それでいいでしょう？」

小鴉達を飛ばす。紅魔館の中へは行けそうに無い気がするが、何もしないよりはマシだ。

「……何かあったら恨むからな」

「ええ、元はと言えば私のせいだもの。それで何かあったら恨まれて当然よ」

「……分かった」

納得出来ない自分を抑え込んで無理やり納得した。
盟友の協力を出来ない事に心から悔やみながら。

「……つまりアンタじゃあの天狗は止められないってこと？」

「……ただの一般人ですし、何より誰でも止まらない気がします」

命の危機かと思いきや、いきなり聞かれたのは文さんについてだ。
青筋が見える気がするし、相手を焼いていたのだろう。

「ほんと、あの天狗爆ぜてくれないかしらね」

「……凄く嫌われっぷりですね」

「当然でしょ、正直不快だわ」

……俺自身は恩人だし、そんな気持ちはないが、プライベートもなんもない彼女は敵を作りやすいんだろうなと。

「下がっていいわ。脚ももう動くでしょ？」

「有難いことに動きますね」

正直折れたままだと思っていたが、パチユリーさんの賢者の石で折れたくらいなら治るらしかった。

対価は……払った記憶は無いが大丈夫なのだろうか？

「それじゃあ去りなさい、今日だけは部屋を貸してあげるわ」

「……………あの」

「何？」

「てつきり食事の為に捕まったと思ってたんですが、違うんですか？」

「食べられたいの？」

「全く」

「……最初はその気だったのよ」

「どうやら命拾いしたのかもしれない。」

「だけど自然と貴方は食糧にする気が出なかったの」

「訂正、していたらしい。」

「それなら良かったですが……」

「後……」

「どうされました？」

「その敬語も不快」

「え？」

「やめなさい」

「……分かった」

レミリア、実は前世の記憶があるんじゃないだろうか？

いや、振る舞いがないのは分かっているが……一体……

「お嬢様、それでは彼をどうするつもりで？」

「どうしようかしらね……正直雑用とかさせても……」

「お姉様ー！」

向こうの部屋からトテトテとやって来た……つてえ？

「フランどうしたのかしら？」

「えっとねー、暇！」

「少し待ってなさい……」

「えー」

「えーじゃないの今は忙しいのよ」

「むー、分かったけど……早くね」

「ええ勿論……つてどうしたのよ？」

「……なんでもない」

啞然としていたところを見られたのだろう。

さして問題ないが……そっか、良かった。

「うーん、お兄さんどうしたの？」

「何でもないよ、ちよつと気になった事があっただけだよ」

「そっかー、どうにかなるといいね」

「……そうだね」

あの時の頑張りが無駄じゃないと思うと泣きかけて来る。
流石に泣く事はしないけど……

「何？フランの事が気に入ったの？」

「そう言うわけでは無いけど……」

「決めたわ」

「え？」

「アンタ、仕事は？」

「……今は特にしていませんが」

自分で言っただけで最悪だなこれ……

ただ、してないのも事実だしな……

「だったらフランの相手をしてくれないかしら？」

「え？」

「私も忙しい時が多いし、いつでも見てあげられるわけじゃ無いから」

「……」

「治ったとは思っているが無邪気ゆえの危険が付き纏う気がする。」

「正直、怖い。」

「ダメかしら？」

「……死さないなら」

「暴走はしないし、前よりはましだと思っわ」

「……」

危険って事じゃ無いですかあああああ!!

あの時はまだ顔馴染みだったからマシだけど、こつちに関しては面白い玩具とか思われなくても困りますよお客様……

「やらかなぎややつぱ餌にしようかしら」

「脅迫じゃん……」

「いいかしら?」

「……危険ならすぐ助け呼ぶから助けて」

「善処するわ」

「ヘルプ!!」

「……まあ咲夜は何処かしらにいますと思うから頼りなさい」

「……分かった」

「よろしくねお兄さん！」

「……そうだね」

よし、プラスと考えよう。彼女がどれだけマシになったかど気になっていたし。本来はレミリアから聞く気だったけど……直接見れるならいいか。

「基本はフランの遊び相手、後は雑用を覚えてちょうだい」

「了解」

大体やる事は覚えている。問題ない。

命の危険はあるものの比較的マシだそうだし。

相手は覚えてないけどまたやって来れたし悪い事ではないか……

「頑張ろう」

気持ちを切り替える。

魔洋館はもう終わって紅魔館なのだ。

「お兄さん早く早く。人形遊びしようよ」

「分かった分かった、今行くよ」

フランの後を追って地下へと向かう。

前みたいに監禁はされてないみたいだが、場所はここそのままなんだな。

「それじゃあよろしくね」

「ああ」

ここまで気に入られている理由は分からないけど、それなら好都合だ。仲良く出来るならと願いながら人形遊びに付き合い始めたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

百四十三話 仕事なんですきつと～t r u s t m e .

「……」

目の前の壊れた人形を見る。

容易く取れる首を見て言葉を失う。

「お兄さん、次は何をするー？」

「この子達は……？」

「ごめんなさい、力入れすぎちゃった」

「そう……」

壊したくて壊してるんじゃないよなあ……
力加減のミスで人形が壊れる。
だからこそより怖いのだが……

「直せる……?」

「ごめんなさい……」

「ちよつと待っててね」

首が取れただけなら問題ない。簡単に直せる。
ただ……人形みたいなノリで俺自身もとなると困る。

「わー、凄いなええ」

「大切に使ってあげてね」

「……努力はするー」

それだけマシなのだろう。

修繕した人形をフランに渡し喜ばれる。

「直った！ 凄いねえ」

「教えてくれた人が良い人だったからね」

「その人何処にいるの？」

「今はどうかな……森にいるのかな？」

アリスさんに会いに行けてないし今どうなっているのか分からない。
今回は初めから流されるように進んでるしなあ……

「森？」

「ああ、ここからは遠いよ」

「えー、行きたい!!」

「そもそも外出していいのかい？」

「……うん」

「……」

ダメそうだなあこれは……

「まあ……行くとしても今度ね」

「ブーブー」

「文句言わないの」

そのまま続けて、気付けば彼女は眠っていたようだ。

「……ベッドで寝かせてと」

そのまま部屋を出る。

「……何してるんですか」

扉の先にレミリアが居た事に少し驚く。

「妹を心配して悪いかしら？」

「……心配なら頼まなかった方が良いと思うけど」

「いえ、何故か不思議と大丈夫だと思ったのよね」

「……何ですそれ」

「もしかしたら過去に何か貴方と関係があったり？」

「それだったら記憶に何かあるでしょうよ……」

「あるわよ」

「え？」

「騙していてごめんなさい。実は覚えているの」

「……なん……で？」

悪い事と言うわけではないが、何故覚えているのか理解出来ずに戸惑う。

アリスさんと違って何も無いよな……

そう考えているとレミリアが顔を覗き込んできた。

「どうして覚えて……」

その瞬間レミリアの笑みが溢れたのに気づいた。八重歯がチラリと見えた。

「やっぱりね」

「何が？」

「過去に何か貴方と関わりがあったのね」

「それは先程の話で……」

「知らないわよそんな」

「え？」

「カマを掛けただけよ」

「……してやられた感があるな」

「いいじゃない」

「まあ……」

悪い事ではないか、どっち道事実である事には変わりがないし。何より騙していたとか言い出しそうにはないから。

「違和感も何となく理解出来たわ」

「違和感……？」

「初めてな気がしないのがね」

「そう言えば言ってたような……」

正確な初めては……即殺されたんだが。

まああれは放置で二度目だ二度目。

「で、その件だけど」

「……やっぱりあるのか」

許されるかなって思ったけど、やっぱりダメかあ……大変な事にならねばいいが。

「人の話を早とちりするのは悪い癖のようね」

「………ん？」

「別に何もしないわよ。勝手に悲嘆的になられても困るわ」

「それならいいけど」

「その話を聞きたかっただけよ」

「ああ、だったら……」

「後でいいわ。フランの相手してて疲れてるでしょう？」

「それはまあ……確かに……」

遊ぶだけならいいんだが……人形が引き千切られるたびにちよつと……

「これからも相手するんだから今日くらいは休んでおきなさい」

「……助かる」

正直今日はもう休んでしまいたいレベルだしな。
後で色々と話すとして……信じてくれる気はするな。
そう思いつつ睡眠に入った。

—————

「ん……」

朝に違和感を感じて起きる。

何というか……何かに乗っかられてたような……

「……誰も居ないな」

今はその重さを感じないが……

誰かが来ていた？ いや、来ていても乗っかられているのはおかしいが……

「……気のせいかな？」

「お兄さん！おはよう」

「ああ、フランちゃんか」

「……って事はさつきまでフランちゃんが居たのかな？」

「どうしたの？」

「……フランちゃんさつきここに来た？」

「来てないよー」

「うーん……」

「……どう言う事だ？フランちゃんが嘘を吐いているも無さそうだけど……」

「誰か来たかい？」

「うーん、来て無いんじゃないかな？」

「そっか、ありがとう」

なら気のせいだろうな。深く考えても仕方ないか。

「それじゃあお兄さん遊ぼ！」

「……今起きたばかりなんだけど」

「早くー」

そのまま引き摺られて行った。

「……」

背後に違和感を感じながら。

「♪」

「ご機嫌だねフランちゃん」

廊下を鼻歌を歌いながら歩いている。

「うん！ずっと退屈だったんだもん。楽しくなって嬉しいよ」

「それは良かった」

楽しんでくれているのは事実だろうしな。それでも怖い事は怖いんだけどさ……
ただ……だからって敬遠はしてはいけないなど。

「お姉様が普段は遊んでくれるけど、忙しい時は忙しいしさあ……独りぼっちなんだもん」

「そっか……」

「お兄さんもいつも暇では無さそうだけだよ」

「……」

「一応これが仕事です。休みの時は休むけど。」

「うー、でも仕方ないよね」

「そこはまあ……ごめんね」

「いいよ、しょうがないもん」

「本当にいい子だねえ」

「ちよつと前まで……お姉様達に酷いことしてちゃったからね」

「……それはフランちゃんが悪い事じゃないよ」

「そっか、そう言ってくれるなら嬉しいな」

「それなら良かった」

少しだけ曇ったフランの顔に戻る、無事に戻って良かった。

「でもお兄さん」

「ん？どうした？」

「その事話したっけ？」

「……」

やらかした気がする。どうにでもなるだろうけど。

「お兄さん？」

「……」

誤魔化すようにフランに肩車をする。

やっぱり……見た目通り軽いんだなど。

どうにかノリで押し切ろう。

「えつと……どうしたの？」

「いや行くぞーって」

「おー！」

少し戸惑うもテンションに乗ってくれた。

そのまま紅魔館を肩車で走り抜ける。

少し走った後、咲夜さんに見つかりこっ酷く叱られたのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百四十四話 事件発生～t h i e f i n h a l l.

「ああ……直すから待っててね」

「フランじやないもん」

また人形が壊れたが自分じやないと言い張る。

「ごめんなさいと言う時もあれば自分じや無いと言う時もある……どう言う事だろう？」

「まあ、直せばいいか……」

「フランじやないもん」

「分かりました」

何故壊れたのか分からないけど……一先ず彼女じゃないと言うならば保留としよう。直せない程だったらまずいけどこれくらいなら問題ない程度だし。

「……一応は」

破けた部位を見てみる。

普段よりぐちゃぐちゃだ……直せはするが。

まるで本当にフランちゃんがやったようじゃない感じだな。嬉しくはないけど、力が強いせいで綺麗にもぎ取れるし。

「……こういうのが前にも」

「どうしたの?」

「ごや……」

流石に……それは無いだろう……

だつてここは紅魔館だぞ？そう易々と入れないだろうよ……

「……フランちゃん」

「なあに？」

「最近変な事起きてないかい？」

「変な事ー？」

「うん、起きて無いならいいけど」

「起きてるよー」

「え？」

まさかマジで……

「人形が勝手に壊れる！」

「……」

確かにそうだけど、今はその曖昧な疑惑以外が欲しかったなあ……

「他には？」

「無いよー、それくらい」

「分かった」

・流石に、これだけじゃグレーだな……

探すのは一旦保留……

「失礼します」

「ん？」

「咲夜だー」

咲夜さんが地下へとやって来る。
何かあったのだろうか？

「妹様、少しよろしいですか？」

「どうしたのー？」

「厨房に入ってませんか？」

「入っていないよー」

「本当に？」

「本当だよ、咲夜疑うの？」

「いえ……しかし、それじゃあおかしいわね」

「何かあったんですか？」

「ああ小野寺さん、すみません居たのに気付きませんでした」

「……」

真面目な顔をして入って来たし多分本当に目に入ってなかったんだろうな……そう信じよう……

「冷蔵庫に入れて置いた物がいくつか消えているの」

「泥棒……は無いですね、無理でしょうし」

この紅魔館で犯人が見つかって無いなんて相当だしな……
そもそも食糧を優先するのも考え辛いな。

「ええ、だからお嬢様や妹様に聞いたのだけど……」

「互いに知らない」と

「そう言う事」

雲行きが怪しくなつて来たな……

あの子はそう言う能力だが……明らかに異質の能力を持つ紅魔館で見つからないと
も思えないんだが……

「咲夜」

「どうしました、妹様」

「何が消えたの？」

「えっと……」

食べ物が消えたと聞いてフランちゃん目がマジだ……さっきまでの表情が一切無くなっている……

「ハムと……」

「……」

やばいやばいって……犯人が大変な事になるって……

「チーズと……」

「……………どうしたの咲夜？他は？」

「チョコケーキです」

「……………」

逃げちゃダメかな？逃げていいよね？
だってこのままじゃ俺死ぬもん…………

「お兄さん」

「……………何でしょう？」

回り込まれた……………もうダメだこれ…………

「悪戯っ子のメイド達かな？それとも侵入した妖精達かな？」

「あのフランさん……?」

「行こっか、犯人探し」

「……はい」

見付かるとか見付からないとかじゃ無い……これは見付けないとダメだ。恐らくは紅魔館に居るであろう少女を探し始めた。

「何してるのお兄さん?」

「いや……探してるんだ」

「でも何も無いよね?」

「いや……探してるんだ」

そりや何も無い空間を探してると疑問に持たれるよな……

「まあいいけど……私は行くよ」

「頑張ってください」

「やっぱ探してなく無い？」

「探してますって」

「……」

若干不安気味な顔をしながら別の場所へと向かって行った。
しかし……実際これも途方も無いよな。

「………いしさん居ますか？」

古明地こいし。地底の主、古明地さとの妹。

彼女の姿は捉えるのは難しいし、悪戯好きだし……あり得るんだよなあ。

「声はしないか………」

やっぱり気のせいなのかな？ フランちゃんも言っていたが、妖精とかもあり得るし。

コッ

「………誰かいるのか？」

後ろを振り向くが誰も居ない。

まさか……

「いいしさん……?」

慌てて廊下を駆ける。何処にいるか目には見えない。
ただ居るのだろうと。

「何処だ……?」

「どうしたのお兄さん?」

気付いたらフランちゃんに追い付いていた。
慌てて走る姿に驚かせてしまったようだ。

「ああごめん、フランちゃん。誰か通らなかつた?」

「え?通ってないよ」

「……成る程」

まあ流石に見えないだろうしな。
多分近くに居るんだろうけど。

「お兄さん、本当にどうしたの？」

「もしかしたら誰か居たかもって思いましたね」

「そっか……でも居ないよ」

「そうだね……何処にも居ない」

このままだとまた見失うだろう。

だから見付けないといけないのに……

「まあいいや、探し続けようよ」

「了解」

切り替えるしか無いか……見付からないし、別の場所で探すしか無いか……

「痛っ……」

「どうしたのフランちゃん!？」

「今何かがぶつかったの……」

「ぶつかった……?？」

まさか、いや合っているだろうな。

「こいしさんそこに居ますよね?？」

無意識であろうと、いると確信して意識的に探せば見付かる。

目の前に懐かしい彼女の姿が見えた。

「……見付けた」

t o b e c o n t i n u e d

百四十五話 事件中断～half-hearted
reconciliation.

見逃さないように手を掴む。こいしさんは驚いたような表情をしていた。

「えっと……」

こいしさんが唐突な事で戸惑っているようにも思える。
ただし……こっちは探していたのだ。

「やっと見付けた……」

「お兄さん何をしているの？」

「フランちゃん、見えないかい？」

「見えないって何が……？」

「ここにいるんだけど……」

「え？」

「やっぱりお兄さんには見えてるんだ」

「そうだね……見えてるよ」

「うーん、うん？」

そのままフランちゃんはこちらを凝視して……

「誰!？」

存在に気付いたようだ。

「あれ？バレちゃった？」

「誰なのよー！」

「フランちゃん落ち着いて……」

「落ち着いてじゃないわよ。急に居たのよ？」

「彼女は元から居たから……」

「居たって何処によ？」

「……そこにですよ。彼女は見えません」

「見えないって……?」

「無意識だから」

「こいしさんが答える……だが。」

「……?」

予想は付いていたが、理解出来ないよなあ……

「こいしさんは、そう言う能力なんです……」

「え? どう言う事?」

「なんで本人が疑問に思ってるんですか……」

「えー?」

「……まあとにかく周りが皆見えなくなるんです」

「そうなんだ……」

「多分そうだと思うよー」

もう本人が曖昧なのは気にしない事にしよう。

「つてことは……犯人はコイツ？」

「なんのことー？」

「ケーキ！食べたでしょ！！」

「食べたっけ？」

「アンタねえ!!」

「フランちゃんストップストップ!!」

「何よ?」

だいぶ苛立っているが、ここで暴れさせるわけにはいかないし……
何よりこいしさんに怪我させるのも申し訳なくなる。

「彼女がやったかも……いやまず犯人な気もしますが無意識の可能性が」

「無意識? だったら許されるとも?」

「それはそうですが……」

「なんでお兄さんが庇うのか分からないけど、食べ物への恨みは……」

「フラン、何をしているの？」

「お姉様!？」

レミリアと咲夜さんも騒ぎを聞いて駆けつけて来たようだ。
そして現状を見て……

「蓮司」

「……なんででしょう?」

「フランに何をしたの?」

「え?」

「今蓮司しか居ないでしょう?」

「あー……」

皆が現状を把握するために一度話し合う事にした。

「あれ？私もいいの？」

「一応お客様と言う扱いにしろと言われたので」

「じゃあいつかー、有難う！」

こいしさんは出されたクッキーを食べ始めた。
フランちゃんが恨めしい目で見てるんだが……

「それで、貴女は？」

「古明地こいしだよ」

「そう、ではこいし。貴女はいつここに入ったの？」

「いつだっけ？」

「え？」

「覚えてないんだ」

「覚えてないって……」

「お姉様、その子なんだか分からないけど無意識らしいよ」

「無意識って……また面倒なのが来たわね」

「後はお兄さんが知り合いらしいね」

「へえ」

「……前に少し縁があっただけですよ」

「まあそこも後にしましょうか……」

俺の方へ向いていた視線を逸らしこいしさんの方へと向く。

まあ本題はそっちだろうしな……

「貴女は何者？」

「んーとね、妖怪！」

「どんな妖怪？」

「下っ端妖怪！」

「……」

下つ端妖怪？さとりじゃ？

いやでも目の閉じたさとりはさとりと言うか怪しいし、ある意味下つ端なのか……？

「まあ……下つ端でもおかしくないか……何処に住んでいるの？」

「楽しい所！」

「ええ……それじゃあこの子返せないんだけど」

レミリアは戸惑っているようだ……確かに迷子が帰り道分らないのは困るよな

……

「蓮司」

「自分が何か？」

「この子何処の子だか知っているかしら？」

そりゃ知っているが……確かにこいしさんも迷子なら送り届けた方がいいか。

「内緒にして」

「え？」

「何よ？」

「いや……」

今こいしさんが喋ったよな？周りは一切気付いていなそうだが……
しかし内緒にしてか……言うべきだと思っただが……

「ちよつと前にあったのが外だったので分かりませんね」

「そう……」

理由は分からないが黙る事にした。

何を考えているか分からないが、致命的な物だとまずいし……

「じゃあ暫くはここにいなさい」

「お姉様!!」

「フランだって友達欲しいでしょう?」

「でもそいつ……フランのケーキを……」

「また買って来てあげるから我慢しなさい。友達の方が大事よ」

「ぶー」

「こいしはそれで構わないわよね？」

「うんいいよー」

「それじゃあ決まりってことで」

フランちゃんが文句を言いつつもこいしさんも居候と化したらしい。
気付けばどんどん住人が増えていきそうだな。

「蓮司」

「はい」

「フラン同様、彼女の見張りもよろしくね」

「……」

「返事は？」

「……はい」

「咲夜も念のためね」

問題児の保護者じゃないんだぞ……なんで大変なメンツばかり集まるんだ。

正直自信は全く無いが、やるしか無いと腹を括った。

「しかし、お嬢様面倒ならば追い出せばいいのでは？」

「いや、フランにだって友達は欲しいしね」

「なるほど」

若干不安に思いつつもやる事が増えた。

ついでと言うべきだとは思わないが、聞きたい事をこいさんから聞き出すのを忘れないように考えながら……

四百九十五年苦しんで来たフランちゃんを手助け出来ると信じて。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百四十六話 フランとこいしsmall conflict.

「正直な話、それが事実なら中々愉快ね」

「信じきれないか？」

「いえ、案外しつくり来たのだからそうでしょうねと」

レミリアに今までの事を話したが、流石に全面的に信じるのは無理そうだと
言うか、全部信じた方が怖いまである。

「まっ当時の私程は甘くならないだろうから、しつかりこなさないと思わぬわよ」

「今もフランちゃんのおふとした事で死にそうだけどね……」

「頑張りなさい」

「はい……」

「そんなにキツイの？」

「いや……キツイと言うよりも自由過ぎるので」

「あー……」

……と話していたのが数時間前。

久々に落ち着いて話せたなどと思った反面、今はさしずめ保育園の先生気分だ……

「お兄さん」

「何？」

「熊さん何処ー？」

「……それはさつきフランちゃんが壊したものかな？」

「ええ？なんで壊れちゃったの？」

「……乱暴に扱うからかなあ？」

「ぶー！」

「すぐにまた作りますか……ちよつとこいしさんそっち行っちゃダメですって!!」

「えー？なんでー？」

「散々言いましたよね!?! 咲夜さんに怒られますって」

無意識なのかもしれないけど……流石に頻繁に起こり過ぎている……

しかも少し目を逸らすと、ナイフを持っていた時まで……気付いて良かったが見失うと不味かったな。

「お兄さん、お兄さん」

「ちよつとお兄さんってば！」

「……少し待ってくれ」

正直増えた時点で手が回らない。

しかも放っておくと大変な二人だ……どうしろと？

「あの……」

「何？」

「お互いはどう思ってるの?」

とりあえずぶつけてみる事にした。

「え?お互いにつて?」

「フランちゃんとこいしさんだけど……」

「そんなの決まってるじゃん」

「ねえ」

「こいしはー」「フランはー」

「妹!」

「…………は？」

バチバチして来た…………どうするんだこれ？

「私が姉でしょ？」

「いいや私だよ」

お互い妹が出来る事期待してたのかなこれ…………

「お兄さんからの扱いで分かるでしょう？フランはちゃんって子供扱いだよ？」

「それはお兄さんからの扱いで私達の間では関係ないよ！」

「えーでも実際そうじゃない？」

「それだったらこいしは何歳よ」

「えつと……何歳だっけ？」

「だったら勝ったわね私は495歳（特殊仕様）だもの」

「なら私の方が上だー」

「嘘言いなさい、そう簡単に上回れるわけないわ」

「なにをー」

「むー……」

どちらも引く様子がない……どうすればいいんだこれ？

「お兄さんはどう思う？」

「……ノーコメントで」

ここで巻き込まれるのは正直困る。

どつちの肩を持つても地獄だしさ……

「なんで優柔不断なのさ」

「いや……どちらも姉に見えるしさ……」

「それじゃあダメでしょ、全くお兄さんは……」

言いかげようとしたところで言葉が止まる。

ちよつと、なに考えてるんですか……？

「ねえお兄さん、いや蓮司」

「……何かな？」

呼び名が変わった……多分そう言う事な気が……

「だって蓮司は人間だもんねえ」

「ああフラン、貴女の言いたい事が分かった！」

「妹じゃなくて弟でもいいもんね」

「……はあ」

いや……見た目的に姉と考えるのは無理だが……それでも弟扱いされるくらいなら我慢するべきか？

「……でもなあ」

キツいつてより弟にされた事で今以上の無茶振りが来そうでキツい。

これ以上振り回されたらしんどいんだが。

「蓮司、フランお姉ちゃんでしょ？」

「こいしお姉ちゃんだよー！」

……逃げちゃダメですかね？

「さあ」

「フラン姉さん、こいし姉さん」

「……なんか違う」

「……だろうね」

このメンツで俺が弟なのはキツいだろうよ……

俺だつて周りに見られたら死ぬそうだ……

「やっぱお兄さんはお兄さんじゃないとダメだよね」

「そうだよね、だからどうするか分かるでしょ?」

「うん、私達で決めるしかないよね」

「そうね、どっちが姉か教えてあげるわ」

……そうしてスペカを

「つて待て待て!」

「どうしたのお兄さん?」

「館の中で決闘はやめよう……本当に危ないから」

「でもこうしないと決まらないよ？」

「いや……話し合って」

話の途中でこいしさんがナイフを構え出す。

「だからダメだと……」

「だったらお兄さんが妥協案を見つけてくれるよね？」

「妥協案……」

「どつちも納得しないとダメだよ？」

「……成る程」

正直キツいけど、ここで浮かばない限り喧嘩を始めるだろうし、ロクな事にならないだろう……

だから……どうにかしないと……

「お互いが姉呼びつて言うのは……？」

「それなんの意味があるの？」

「だよね……」

「お互いが意地張ったりそのままを維持してくればいいんだが……それが通らないしなあ……」

「だったら、互いに日替わり事に姉妹の交換と言うのは？」

「それじゃ意味ないでしょ」

「そうかな？」

「……そんなの姉じゃないでしょ」

代案が浮かばない、だからこのまま説得した方が良さそうだ……

「どちらも姉なんて無理だしさ、一時的に姉の交換しか出来ないと思う」

「でも私の方が……」

「だから交換し合いましょうと」

「むう……」

「互いにやり合って、納得した方が姉でいいんじゃないかって意見はと」

「でも……」

「いいわ、了解」

不満そうなフランに対して、こいしは納得してくれたようだ。

「こいしはそれでいいの？」

「いいも何も私の方が姉だって納得させれば良いんでしょ？」

「む……」

「だからフランに分からせてあげればいい、私が姉だって」

「私の方が姉に決まってるでしょ」

「だったら証明してよ、明日は貴女でいいから」

「……分かったわ、こいし。貴女を私の妹にするから」

「勝負だー」

なんとか纏まってくれて良かった……

「……」

「どうしましたこいしさん？」

フランが人形を探しに行くと同時にこちらへとやって来た。
何かあったのだろうか？

「ありがとう」

「え？」

「色々とお互い抱えてたからね。こうやってなんとかなって良かったよ」

「それなら良かったけど……」

「これからもお願いねお兄さん」

「そう思うなら手加減してくれると助かるんですが……」

「なんのこと？」

「……」

まだまだ難儀は続きそうだと悟った。

t o b e c o n t i n u e d

百四十七話 フランとこいし② ~ danger gir

1.

「こいしお姉ちゃん」

「どうしたのフラン」

「……やっぱやめない？」

「順番って約束でしょ？」

「それはそうだけど……」

あれから数日経ってフランちゃんの方が飽きたのかもしれない……

と言うか呼び名に飽きたってあるのか……？

「まっ、その話は置いておいて……遊びにいこー！」

フランはまるで逃げるかのように部屋を出て行った。

「あつともう速いなあ……」

「ですね……フランちゃんいつでも元気そうだ」

「姉として誇らしいよ」

「……フランちゃん居なくても続けるんですね」

「当然でしょ、悪いかな？」

「まあ悪いわけではありませんが」

「まあそうだよねー」

「そして、追わなくていいんです？」

「ちよつと気付いた事があってね」

「気付いた事？なんででしょうか？」

特に何かあったように思えないが……彼女には何かあったのか？

「お兄さんと二人きりになるのは初めてだなと」

「ああ、そう言われると……」

紅魔館ではこいしさんと二人になることは無かった、と言うよりもいつもフランちゃんんが側に居たし。

「なんかさー、お兄さんは私の事情を知ってるみたいだし……今しか話せない事あったら聞くよ?」

こいしさんが伏せていた事……そう言われると聞きたい事がいっぱいあるな……

「地霊殿に戻らないんですか?」

「どうして? 邪魔なの?」

「いや……そうでは無くてさとりさん心配してませんか? つて」

「あーお姉ちゃんかー、確かに心配してるだろうけど……」

「……帰らないんですね」

「こつちにも事情があるからねえ……」

幾ら無意識で奔放でもそりや事情はあるよな……

「まあさとりさんに恩がありますし、一度顔を出したら程度には言っておきます」

「考えておくー」

「それじゃあもう一つ……」

「なあに？」

「なんで地底の事黙ったのかなって……」

「……忌み嫌われてるのは分かるでしょう？」

「それはそうですが……」

「だったら何を言いたいのか？」

「いや、何かあったから紅魔館に来たんじゃないんですか？」

流石になんと無くで紅魔館内に侵入出来るとは思わないが……

「それは、言いたくないかな」

一番大事そうだが、答えてくれなかった。

「じゃあ追いましょうか」

「そうだね」

……言いたくないと言った事以外にもまだ何かを隠している、なんなら嘘を吐いているようにさえ思った。

ただ……今はまだ問いただす気になれなかった。

「……？」

階段を登るとフランちゃんが居たが……一体何が起きてるんだ？

「分かりました？」

「うう……」

「あの……咲夜さん？」

「ちよつと、妹様の面倒を言われてるんじゃないのかしら？」

「それは言われましたが……」

まさかあの短時間に何か起きてるなんてと。と言うか四六時中見てるのも無理だし。

「階段登って暴れまわったのだけど……」

「マジですか……?」

周囲を見ると確かに傷や穴が目立つ。

「何故こんなことに?」

「ちよつと楽しくなっちゃって」

「……妖精達や人的被害は?」

「無いよ! 狙ってないもん」

「それならまだいいのかな？」

「いいと思ってるのかしら？」

「……いえ」

「全く……ちゃんと見て……」

ガシヤン

「……」

恐る恐る後ろを見る。

振り向くとこいしさんが花瓶を割っていた。

「ちよつとなんで？」

「あれ……なんでだろ？」

「無意識を盾に好き放題してませんか？」

「してないよ！」

「そうですか……」

流石に叱らないとな……

「ちよつと小野寺君」

「え!? これも俺のせい!？」

そのまま説教をされる事になった……何故だ？

「ごめんねお兄さん」

「……やる前に止めて欲しかったなあ」

「いやあ、だってお兄さん達来なかったし」

それでも問題行動は避けてほしいんだが……

「ちよつと行くの遅れたね……」

「何してたの？」

「特にはして無いかな」

「じゃあフランの事どうでも良くなっちゃったの？」

「そうでは無いってば……」

いつのまにか俺が悪いになって来てないか？

「まあまあそのくらいで……」

「……なんで花瓶割ったんです？」

「さあ？」

「さあつて……掃除しますからね」

「はーい」

正直逃げられたり反発されると思ったが、従ってくれるようで良かった……ここで逃げられたらまた咲夜さんに何か言われそうだし。

「それじゃあお兄さん、こいしお姉ちゃん頑張つてー」

フランちゃんは逃げた。

まあ花瓶割ったわけでは無いしいいか……

「それで……こいしさんなんで割ったんですか？」

「どう言う事？」

「いや……今はフランちゃん居ませんし」

「ええつとね……なんでだろ？」

「本気で無意識ですか……」

「うーん、あの時はそうした方がいいって思ったからだけど……なんでだろ？」

「ええ……」

「この子には何が見えてるんだ？」

「まあ気にしなくていいよ」

「いや、気にしないとまた怒られるんですが……」

「そっかあ……」

「もういつそ自分でも無意識を抑え切れないなら瞳を開いた方が……」

「ダメ」

目付きが変わりゾクつとした。

またやらかしたかようだ……

「これは開いちゃいけないの」

「なんで……いや分かった」

なんでと聞き出すのも危険だと察した。
そのため余計に触れるのはやめておこう。

「良かったねお兄さん」

「何がですか？」

「命拾いして」

「……」

ほんと平和に生きるのが許されないのでだろうか？

「私もお兄さん“だけ”とは仲良くしたいって思ってるし、殺さずに済んで本当に良かった良かった」

「……………だけって」

未だに瞳は闇のように黒く染まっただけで、続きを聞くことが出来なかった。

「それじゃあまた遅れて壊されてもあれだし、行こっか」

こいしは、そのまま階段を降りてフランの部屋へと向かっていった。

「……………」

残された俺は少しだけ震える足を叩いて落ち着かせる。

これだけで終わりじゃ無いんだと言いつける。

「無意識ってなんなんだろうな……………」

その三文字の言葉は何を起こすか分からず、ただただ戸惑いが残るのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百四十八話 さとり妖怪～dangerous specter.

今日もまた怒られる。子を持つ親でもここまでな気がしないんだけど……

「聞いているの？」

「はい……」

「あの二人を止めるのは難しいのは分かるけどね……流石に図書館を燃やしかけるのは看過出来ないわ」

「おっしやる通りです……」

魔法図書館の主、パチュリーノーレッジは燃えた本の修復をしている。

「しかし四六時中……」

「それは分かっているわ。見張るなんて出来ないもの」

「……」

「もうちょっと予め注意しておくとか……」

「お言葉ですがパチュリー様、本来であれば四百年以上あつた我々がしておくべき事です」

「……小悪魔、アンタね」

「本が燃やされて苛立つのは分かりますが、彼に八つ当たりするのは違うかなと」

「……それもそうね、ごめんなさい」

「いえ……大変なのは分かりますし」

「しかし妹様……やっぱり閉じ込めないと不味いのでは？と思うのですが」

「レミイが言うには抑圧された反動らしいけどね……」

「紅魔館破壊されませんかね……？」

「遊びたいの気持ちの延長戦だから壊し尽くしはしないと思うわ。だからと言って、本が大変な目に遭うのはよく無いけど」

「修復間に合ってよかったです」

「それで、問題はそれだけじゃ無いわ」

「なんででしょうか？」

「もう一人のあの子は何者？」

「何者と言われましても……」

内緒にしている事もあるが、実際こいしさんが何者かって言われると分かってない事の方が多。

「妖怪なのは分かるけど……分らないままなのは不安要素でしかないわ」

「なんだと不味いとかあるんですか？」

「色々あるわよ、鬼だとか龍だとか」

「龍!?!」

「正確には龍は妖怪じゃ無いけど……力を異様に持った者達ほど面倒なものには違くないわ」

「それはそうですね……」

「幻想郷で力を持つ者たちは心優しい妖怪も多かったが……それでも簡単に人一人消せるだろうしな。」

「幽香さんとかもまさしくそんな感じだったし……」

「吸血鬼や魔女でも困るわ」

「吸血鬼もですか……?」

「レミリアと友達をやってるわけだし、吸血鬼はむしろ歓迎だと思ったのだが……」

「他の吸血鬼なんて来て欲しく無いしね」

「同族の筈だと思いましたが……」

「吸血鬼同士は仲良くありませんよ」

「ちよつと小悪魔？」

「私だって話したいんです」

「仲良くない……ですか？」

とてもそんな風には思えないが……

「流石にあの二人は姉妹だから仲良しですよ？しかし吸血鬼同士は仲良く無いです」

「そうだったんですか……」

「と言うか、強種族は大概孤立しますしね。同族はむしろ敵です」

「……はあ」

ん？でもそれだと違和感があるような……

「例外って居ますか？」

「まあ、居ますね」

「ですよね……」

「鬼は例外で仲が良いようです。喧嘩は組む事を嫌いますけど」

地底で散々鬼が溜まって居たことを見て彼女達が孤立してるのは無いだろうなど。

「ただ、鬼は全体的に嫌われているから地底にいるわよ」

「例外で鬼が神社にいるらしいですけど」

「萃香さんですね」

「ああ、知り合いなのね」

「まあ……」

「後は風見幽香とか」

「パチュリー様、今はそう言う個人の話では無いかと」

気付けば話は逸れているが……そう言う妖怪は気をつけた方がいいのかなど。

「そこら辺には見えませんがね」

「後は……」

本をパラパラしながら探る。

「さとり」

「え？」

「後は危惧するのはさとり妖怪かしらね」

そのページを見せて来る。

流石に昔の資料の事もあつて似てはないか……

「そんなに不味いんですか？」

「当然よ、心を覗かれるし」

「それだけだとダメなように思えませんが」

「どうして？この話でむしろ何もいいと思えないんだけど」

「確かにそうですが……今までに比べて命の危険が無いかなと」

「何を言ってるの？」

「え？」

「さとり妖怪こそ人を殺すわ」

「……は？」

「いやいや、彼女達にそんな力はないだろう……」

「さとり妖怪、確かに見るだけなら問題ないかもしれないわ……だけどさとりは性格が悪いの」

「……」

まあ……性格に関しては擁護出来ない気がする。

「中を暴いて、人を破滅へと導く。それに対して大丈夫って言ったのよ」

「……予想外ですね」

確かに力を持っているのは分かる……だがここまでだったか……

こいしさんもさとりだよな……どうしよう……

「でもパチュリー様、決まってませんし」

「それはそうなんだけどね、ただの下級妖怪の可能性もあるし……姿を消すってそう言う妖怪な気がするしね」

「神とかみたいなどうしようも出来なさそうなのは除いてパチュリーさんならなんとか出来そうだと思いますが」

「出来るとしても、出来ないとしても安全に越したことはないわ。フランも見てなきやいけない以上そつちに集中出来ないし」

「そうは言ってもパチュリー様はどうかしようとするんですよね？」

「当然でしょ、親友の為だもの」

「いやあ、いいもの見せて貰いました！」

「小悪魔、覚えてなさい」

「なんでですか!?!」

「はははは……」

パチュリーさんを始めこの紅魔館の皆はそれぞれが信頼しあつて大好きなんだなつて思う。

恐らくこれからもそれは変わらないだろう。

「さて……」

どうするかだよな、さとり妖怪ではあるんだが……彼女は特殊な事情だ。それに皆が姿が消えるだけなら問題視してないし。

ただ……内緒にしておくのもそれはそれでどうかつてなるな。

「難しいな……」

この後どうする事が正しいのか分からず、頭を抱えるばかりだった。

to be continued

y. 百四十九話 彼女の本音く not necessar

「はいしさん」

「なあに？」

「聞きたいことがあるんだけど」

翌日すぐに話をする事にした。

流石に放置は出来ないし……

「ちよつと話したい事があるんだけど」

「フランを放っておいて良いの？」

「少し怖いけど……この話もしておきたいし」

「ふうん、速急なんだ……いいよー」

一応周りを見て……誰も居ない事を確認する。

よし大丈夫そうか。

「それで、わざわざ何が聞きたいのさ」

「こいしさんは、さどりの能力はもう使えないって認識でいいんですよね？」

「その話はしたくないんだけど……」

「出来るか出来ないかだけでいいので」

「出来ないし、する気もないよ」

「良かった……分かりました」

流石に出来ないなら文句は言われないうらう。

言われないうら……？

「じゃあ次はこつちから質問」

「はい、何かありました？」

「今の質問の意味って何？」

「ああ、能力があるかどうかだけど」

「なんでしたの？」

「まあ色々……」

「答えて」

気付けば目の前へと詰め寄って来ている。
顔を見ると瞳に吸い込まれそうだ。

「紅魔館でちよつと……」

「ざとりが居たら不味かったって事？」

「まあ、気にはして居ました程度ですが……」

「出て行って事？」

「いや、そう言うわけではありません」

「でもそれは能力を持ってないからでしょ？」

「能力を持って居ても事情を話してどうにか出来るならしたかったです」

「なんで？」

「なんでって、こいしさんもここに居続けてるし出て行かないならその方が良さそうでしたし」

「いや、なんでそこまでしようとしたのかなって」

「え？」

「かつて面識があつたって言ったけどさ。私の方は覚えてないし、目を閉じて居てもさとり妖怪なんだよ？なのに怖がらないし」

「それは……」

「私からしたらお兄さんの方が不気味なんだけど？」

「え？」

「自覚なかったの？」

「ありませんでしたが……」

「そっか、ならちゃんと言おっか」

「……」

「お兄さんはさ、ただの人間の皮を被ったなんなの？」

「なんなのって……？」

「何もかも歪、正直そこらの妖怪の方がまだ可愛いんじゃない？」

「そこまでですか……？」

「うん、さつき言ったこと全部納得出来てないよ」

「さつき言ってたこいしさんを庇う理由は」

「嘘でしょ？」

「え？」

「地上で面識がある？そんなの嘘でしょ？」

「何故です？」

「だってお兄さんが嘘つく時の癖が出てるもん」

「え?」

そんな癖あつたのか?

と言うかそんな致命的な失態をしてたなんて相手には不快だったんじゃない? 慌てて探そうとするが……流石に自分で分かるわけないし今じゃ無いな。

「いや、癖なんて無いのでは?」

「うん分から無いよ」

「え?」

すぐさま無いと返答される。一体何がしたかつたんだ?

「でもさっきのお兄さんの反応はそう言うことですよ?」

「いや……それは違うでしょ」

「違うないよ、だってお兄さん本当に嘔吐いてなやさつきみたいなの確認しないもん」

「……」

うっかりして居たのは今だったと言うわけか。

やらかしたな……話すのはいいんだけど……この子の場合本当に何が起こるか分からない。

他のメンツだって疑いを向けられたく無いしレミリアしか話してないのに。

「そう言われると否定出来ませんが……」

「じゃあ、どう言うことなの？」

「到底信じられないと思いますが……」

事情を話した……ってか本当にこの子無意識か……？

「……嘘っばい」

「癖分かるんですよね？」

「いや分からないって言ったけど」

「そうでしたね……」

「でも、そう言うって事は本当かあ……」

「ですね、過去にあった事です」

「それで、地霊殿に戻ったの？」

「一度だけ……追い出されましたが」

「ふーん」

「あの……と言うわけでした」

「そっか、同じだからか」

「同じですか……?」

何がだろうか?まさか地霊殿を追い出されたと思わないし。

「うん、お姉ちゃんに必要とされてないもの同士」

「必要とされてない?そんな事あるわけ」

絶対に無い筈だ。探して居たし、見つけて喜んでいたし。

「だってそうでしょう？」

「いや、さとりさんは」

「だってお姉ちゃんは私より建前の方が大事なんでしょ？」

「何を言つて……？」

「お姉ちゃんが探しに来た事なんて無いよ？」

「え……？」

「いや、心配しているし探していた……」

「あれ……心配はしていたし、喜んでいたが……探していたか？」

「お姉ちゃんは自分の立場を理解しているから、それ以上の事はしないよ。妹よりも他の人と会いたく無いから探さない」

「……」

「居ればいいもどうせ体面だけ、本当に必要なら探しに来るもん」

「でも彼女は、さとりで他の人の事を……」

「だから、それが私以上なんでしょ？必要とされてないよ」

「大切に思っていますよ」

「別にいいよそう思うなら。私は地霊殿に帰らないから」

「いや、一度帰って話し合った方が」

「それなら迎えに来てってね」

「だったら俺が……」

「行けるの？」

「場所は覚えてますし」

「違う違う。その頃みたいにお姉ちゃんはバックに居ないのに地底を通り抜けられるの？」

「……」

正直キツいだろうな……本当に地底で歩き回れたのは彼女のお陰だったし。

「じゃそういう事で、お姉ちゃん待ってよーっと」

そのままいしさんは行ってしまった。

追い掛けようとしたが追い掛けられずに。

「何が正しいんだろうな……」

この件の正解は、頭に浮かばなかった。

百五十話 地底の行き止まり～can't go ahead.
ead.

「さて……」

休日になり自由行動の出来る日。

例の大穴へと辿り着いた。

地底へと続く道、鬼など地上では見ないもの達がいる。

「行くしかないよな……」

その最奥に近い場所にある地霊殿、その主に。

飛ぶことが出来ないためそのまま穴へと飛び降りる。

流石に香霖堂でパラシュートに似た物は貰ってきたが。

「今考えたらよくあの道から落ちて生きてたなあ俺」

ここでさえ命の危険があるが、地霊殿への直通の道なんてもつと異常だった。生きていられる筈なんて無いレベルなのに。

何も着けて無かったのに。

そう考えながら降りていると何かに引っかかる。

「わっ」

糸……ここら辺にも張っていたのか？

「何かが引っ掛かった？」

黒谷ヤマメ、さとりさんから聞いていた土蜘蛛の一匹だ。

一度地上に出た時にこいしさんと一緒に顔を合わせた事があるな。

蜘蛛と言う割には人間のようにはしか見えないうんだが……

鬼とかもそうだが地底の妖怪達って言っても皆人型だった気もした。

「ああすみません、邪魔してしまつて」

「それは構わない……つてわけでも無いんだが」

「え……？」

何が起きると言うのか？

全く分からずに恐怖に思える。

「さつさと帰らせないとね。地底はアンタ達の住む場所じゃ無いし」

「成る程……」

当たり前だが……歓迎されるわけないもんな。

住む場所じゃ無いと言うけど、そんな優しい話ではなく、その目はここに入り込んで

来るなって言っているようにしか見えない。

「地底に用があるんです」

「はあ？何寝ぼけた事を言ってるんだ？」

そりやそうだよな……普通くる人間なんて居ないだろうし。

「迷い込んだじゃなくて、自分から来たのか……変な奴だ」

「……自覚はありますよ」

「ただの家出とかじゃ無さそうだが……地底へと行かせるわけにはならないねえ」

「そこをなんとか……」

糸に掴まりながらヤマメさんへと懇願する。

と言うか掴まっていると言うか……くっ付いていて捕まっていなにか？

「そもそも……お前は何する気なんだよ？」

「地霊殿に用がありました」

「……ふーん」

視線が更に険しいものになる、完全に敵を見る目なんだが……

「あの子に何の用だい？」

「さとりさんに少し話が……」

「やっぱいいや、今始末しよう」

「え？」

さつきまで無かった足が生えている。

まさしく彼女は蜘蛛だと言わんばかりに。

「ただの人間に害を与えるのは可哀想だけど……あの子達を酷い目に合わせたく無いしね」

「別に酷い目に遭わせる気なんて……」

「いいや、さとりなのは分かるならなんで気付かないんだ」

さとりは心を覗く。それは誰でも知っていてだからこそ皆が嫌がる。

ただし……その嫌悪を覗いたさとりだって嫌がる……当然だ。

「そんな事をする気はありませんから」

「そう言った人間は沢山いるんだよ。だからここでバイバイだ」

危険なのは承知とはいえ、あの時素通しされたヤマメさんでさえこれなのか……
彼女達も意外と慕われてるんじゃないやと思わされた。

「さて、貴方はどんな病に掛かるかな？」

そのまま毒針を……

一瞬力チリと音がした。

「ああ草原だ……」

そうかまた死んだのか……流石に仕方ないか。

「これで、何回死んだっけな……思い出せないや」

徐々に進んでいるが……それでもどれだけ戻ったか……

「それでも進めばそのうちどうにかなるか……死にたく無いけどさ」

「何やら不穏な単語ばかり聞こえるのですが」

「!？」

慌てて振り向く。そこには見知った従者がいた。

「咲夜さん……? どうしてここに？」

「どうしてって、貴方を助けたのだけど」

「え？俺を？」

「死に掛けていたじゃ無い」

「……ああ、もしかしてあの音って」

「……全く、迷惑を掛けないで頂戴」

「助けて頂きありがとうございます」

「地底に行きたかったの？」

「はい、少し用事がありまして……咲夜さんは何故ここに？」

「貴方に着いてきたのよ」

「俺にですか？」

「なんで……としか思えないんだが。」

「頼まれたのよ」

「誰にですか……?」

「こいしさん、彼女にね」

「え?」

「貴方が無茶するのを予想していたらしいわよ」

「みたいですね……」

即向かう事を予想していたのか……恐ろしいな。

「色々と聞きたいけど、お嬢様が把握しているだろうから聞かないでおくわ」

「感謝します……」

「それじゃあ戻るわよ」

「はー」

本来の目的である地霊殿へと向かう事は出来なかったが……仕方ない。

やっぱりこいしさんをどうにかしないと話にならないか……正直彼女がどうするか分からないが……

……難しいが、やれる事をやろうとそう決めた。

to be continued

百五十一話 姉妹〈scarlet ladies〉

「……」

「どうしたのお兄さん？」

「ああフランちゃんか」

「何？不満なの？」

「不満では無いよ。ただフランちゃんから話して来たのに驚いただけで」

「え？そう？」

「フランちゃんは話す前に何か起こすし……」

「気にしないで」

「……無理かなあ」

最近は色々と問題が起きてその度に呼ばれているしなあ……

「それで、フランちゃんどうかしたの？」

「あつそうだ、こいし見なかったー？」

「こいしさん？確かに見てないね」

俺も探していたが見ていなかった。

レミリアは見たって言っていたし、この前の件でこいしさんとすぐ話すつもりだったが……俺は見つけていない。

「そっかあ……残念だなあ」

「何かあったの？」

「ううん、後でいいや。それじゃあお兄さん遊ぼう？」

「分かった」

フランちゃんも探しているのか……

話したく無いってことはやっぱりなんかありそうだが……

「んっそういえば」

「どうしたのお兄さん？」

「フランちゃんも妹か」

「もっ？」

「いや、なんでもない」

危ない危ない、そう言えばこいしさんに姉がいる事は話して無いな。
ただそうか……妹なら少しは俺よりも分かる事はあるのかな？

「それでフランちゃん、一つだけ聞きたいんだけど」

「なあに？」

「姉の事どう思ってる？」

「レミリアお姉様の事？」

「うん、そうだね」

「うーん、カツコよくて大好きかなあ」

「まあそうだよなあ」

「そうだよなって？」

「ずっと互いが大好きそうな姉妹だし」

「違うよ」

「え？」

「違うって……何が？」

「お姉様の事少し前まではずっと恨んでたよ」

「…………え？」

幽閉はされていたが……治る前のあの時もそこまでつて思わなかったが……

「勿論それ以外の感情だってあった。お姉様のこと好きではあったし……ただ恨みや殺意もあつたよ」

「そうだったんだ……ごめん」

「なんでお兄さんが謝るのさ」

「いや、もっと軽く考えてたし」

「……分かってるよ私自身の事も。あの時は本当に止められなかったんだって」

「…………」

「でもさ、でも……それでも辛いんだもん」

「フランちゃん……」

「お姉様はなんで私の事を分かってくれないんだろうって、辛いのに……痛いのに……なんでそんな事するんだろうって。そんなドス黒い感情だつてあったんだよ」

迂闊とは言わない、知っておいて良かった事だろうし。

ただ……そうだな、この子はずっと一人だったんだもんな。

「ただ……今は仲良しそれで良かった」

「うん、仲良しだよ」

「本当に良かった」

「お姉様はそう思っていないかもしれないけど」

「いや、それは」

「でも、仲良いつて思うことにしたの」

「そうだね、レミリアだってきつとそう思ってるから」

「だって、暗く思ってもしょうがないしね」

「それはそうだ、明るく生きた方がいい」

改めて自分が取った行動が間違いなかったと自覚した。

「だからお兄さんにも一つ忠告ね」

「分かった」

「ちゃんと話し合った方がいいよ。思い込みじゃなくてね」

「思い込みですか……」

「私とお姉さまがどうして仲直り出来たかって言うと、ちゃんと話し合ったからだから」

「なるほど」

「お兄さんにもそう言う経験あるだろうし、言いとどまった事もあると思うから言っておく」

「……」

確かに言いとどまった事はあるし真相は聞きたい事もある。

特にさとりさんとは最後話し合い出来ずに追い出されたしな……

「……も、か」

「お兄さん何か言った？」

「いや、別に」

「むー……」

「拗ねないでくれ……」

「だってなんか隠してそうじゃん」

「まあ……否定はしないけど」

「うぐぐ……もー！ちゃんと遊んでよね!!」

「了解つと」

フランちゃんも諦めてくれたようだった。

正直話せる内容かと言うと話せないしなあ……本当に良かった。

そのまま予想以上に暴れて、昨夜さんに一緒に叱られた。

「……何処に行ったか」

こいしさんと話したい事が増えたが、一向に彼女は見当たらない。
本当に外に出てないのだろうか？

「蓮司」

「レミリア、どうかしたのか？」

「いや廊下でキョロキョロしてて、こいしでも探しているの？」

「ん、そうだけどレミリアは知ってる？」

「朝、食堂で見たわ」

「そっか、ならいるのだろうけど」

「パチエも図書館で見たって言ったし紅魔館にいる事は間違い無いと思うわ」

「それなら探さないとな」

「何？喧嘩でもしたの？」

「いや、してないけど」

「いつもあの子ベツタリだったし、こうやって探すのも珍しいわねと」

「確かにそう言われるとそうか」

呼んで無くても気付けば側にいたのに、最近を探しても居ないもんな……驚きだ。

「態々首を突つ込む気はないけど、きちんとしなさいよ」

「分かってる。見つからないままのわけにもいかないしな」

「面倒くさいって放り投げないでね。管轄外だから」

「そんな事する人間に見える……？」

「冗談よ」

「ならいいけど……」

「話さないと分からないままなんだからね」

フランちゃんと同じ事を繰り返す。
やっぱり姉妹なんだなと思いき知らされる。

「あのさ、レミリア」

「何かしら？」

「一つだけ質問してもいい？」

「好きにきなさい」

「フランちゃんの事どう思ってる？」

「馬鹿ね、決まってるでしょ」

そう言うレミリアは少し笑いながら。

「大切に大好きな妹よ」

その言葉を聞いて俺も少し綻んだ気がした。

t o b e c o n t i n u e d

百五十二話 無駄か否か his behavior.

満月の日の夜。今宵もまた何か起こりそうだとも思いつつも、こいしさんを探していた。

確か目撃情報だとこの辺なんだが……

「居ない……いや居るか？」

バルコニーを目を凝らしてみている。

そこには手摺りに座る、危ないこいしさんの姿があった。

「ちよつとこいしさん!？」

「うわつと!?!危ないなあ」

「ごめんなさい……ただ、そこまで危険な真似をしないでください」

「危なくしたのはお兄さんじゃん」

「いや、そもそもやらないでと言う事にして……」

「考えておくー」

「はあ……」

そこに居たのは、いつもと変わらないようなこいしさんだった。避けられていたのも気のせいだったかな？

「それで？何かあった？」

「……知っての通りかと」

まあ……初めから分かっていたんだらうな。

「まっだらうね、しょうがないしょうがない」

「……」

「それじゃあ寒くなって来たし戻ろつか」

「あのこいしさ……」

「戻らないよ」

「やっぱりそうだ、機嫌がいいのは不思議だが……彼女は戻らないと。」

「でも」

「約束したでしょ？」

話をまた遮られる。

あくまで自分から帰る気はないんだと。

さとりさんが来ない限りは……

「いつも通りならお姉ちゃんは来ない。ただそれがいつも通りでしょ？」

「嫌ってるわけじゃないんですよね？」

「勿論、お姉ちゃんの事は好きだよ？でもさ、お姉ちゃんがそうだとはい信じられないんだ」

「それならまず話さないと……」

「お姉ちゃんは優しいからね、私をどう思っているか聞いても庇う筈」

「本当に大事だつてあるじゃ無いですか」

と言うかさとりさんはそうだと信じたい。

「後はさ、ここも気に入ったし」

部屋へと扉を開く、そのまま中へと入っていく。

「本当に大事ならここから連れ去つてねって」

それだけを言い残し、もう話す事はないよとばかりにフランちゃんの元へと向かつて行つた。

「……何をしても無駄なのか？」

何をしてても彼女に届かないのか？

どうかしようにも、地霊殿に辿り着くことすら出来ない自分は無力にしか思えな

かった。

無駄である、彼視点では。

「よつ、久しぶり」

「ヤマメさんですか……？珍しいですね」

地霊殿には珍しい客が訪れていた。

土蜘蛛である彼女は地底の入り口付近に生息しており、地霊殿に訪れる事などほぼ無いからだ。

「いやあ、偶にはいいじゃない？」

「当然、構いませんよ。お茶用意しますね」

「ああ、有難う。さとりのところは美味しいさ」

「それで、何用ですか？」

「いや、大した事じゃないけど気になった事があってね」

「気になった事……成る程」

相手の心を覗き込む。いつものようにごく自然に。

その後、やらかしたことに気がつく。

「ごめんなさい」

「いや、話す手間が省けて良かったかな」

「そう言つて貰えると幸いです」

「それで、つまりそう言うことなんだよ。地底に人が来た」

「しかも迷子では無く……地霊殿に用があつてですか」

「そう言うこと、念の為に言いに来たつてわけさ」

「有難うございます。しかし……ああそう言う事ですか」

「また覗いたなもう……仕方ない奴め」

さとの頭をぼんぼん叩く。

うっかりとやってしまった事に気付き赤面する。

「そんな悔やまなくていいさ。少なくとも私は味方だから」

「……は」

「それで、なんで地上の人間が地霊殿を知っているか……誰かが噂してるのかねえ」

「噂ですか？」

「地霊殿の事を言いふらしてるとか？」

「知っている人は居ないと思いますし、何より来る意味が分かりません」

「それもそうだよなあ……だったら知ってるのが居たとか？」

「知っているの？」

「例えば……誰だろうな？妹ちゃんとか？」

「こいしが……!？」

こいしという言葉聞いて立ち上がる。

今現在どこに居るか分からない妹。

心配ではあるがどうしようもない……その妹の話だ。

「例えばだつてば……」

「そうですよね……すみません」

「ただ、可能性はありそうだけどね。知っていると言えば彼女だろうし」

「……そうですか、こいしが」

「彼女に何か言われたからさとりに何か用があつたつてもありそうだし」

「……」

「さとり、どうしたの？」

「探しに行かないと……」

「ちよつと!!」

立ち上がるさとりを制止する。

「このままだと向かってしまうだろうと。」

「……どうして止めるのですか？」

「急過ぎだよ、分かるけどさ」

「あの子が何しているのか分からないのに……」

「今まで気にもして居なかったのに、急にどうしたのさってレベルだよ」

「気にして居なかった……こいしを……」

本当に自分は姉失格なのでは無いだろうか？

大切な妹なのに……いつも通りと妹を心配する事を無意識に忘れて居た。

「……さとり、あんたは自分を理解しているのかい」

「……理解していませんが。それでもです」

地上はともうるさい。それでいて恐ろしい。

人間の心は触れる程、醜さに溢れている。

「ええ、分かっていますよ。分かっているんです……それでも」

大事な妹だから。

こいしには嫌われているかもしれない。

ただ……いつまでも放っておいたら心配でしか無い。

無理して連れ戻さなくてもいいが、せめて一目だけ見たいから。

「そもそもが関係無いかもしれないし」

「それでもいいわ。探す事には変わらないから」

「さとり様？」

「お燐、少し家を留守にするわ。お空と待つてなさい」

「どのくらいですかー？」

「妹を見つけるまでかしら」

「えつと……あつこいし様……今何処に？」

「それを探しに行くのよ」

「地上にですか？」

「ええ……少し怖いけど……それでもあの子に会いたいから」

「分かりました。お留守番してますね」

「ええ、お願いね」

「……なんかすまないね」

「いいえ、教えてくれて有難うね」

一人の男が取った行動は、その男にとっては無駄にしか思えなかった。しかし、別の場所で……少女を動かしたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

百五十三話 姉は強し～reliable girl.

「ああダメだダメだ……」

数日が経てば心の整理が出来ると思っていた。

しかし全く出来ていない。

自分では何も出来ない歯痒さ、自分の行為の無駄が予想以上に響く。

「なんで……」

落ち着け、落ち着こう。

夜だつて碌に寝れてないのに……

いつまでも乱されているわけにはいかないだろうよ……

「……………」

「お兄さんーん！」

何か出来る事は本当にならないのか？

数日そんな事を考えてばかりだった。

「ねえ聞いてる？」

考えたが浮かばないな…………俺じゃ突破しようにもないし…………

「ねえってば……………」

だからって相談するわけにもいかないよなあ…………

「お兄さん!!」

「うわっ!?」

思いきり衝突される。そのままつい倒れ込んでしまう。
呼ばれている事に気付かなかったのは悪かったが……痛い……

「もー、なんで気付かないの？」

「すみません……考え事を……」

「そっかごめんね……でも暇なんだから」

「そうですか……今起きるので待ってくださいね……」

そのまま起きようとする……が……

「……あれ？」

起き上がれない……一体何が？

意識が……大した一撃じゃ無かったよな？

「お兄さん……？」

心臓がバクバク鳴り始め……そのまま意識を失った。

—————

「……(ハハ)は」

あれ？さとりさん？

いや……あり得ないな。周りは明らかに地上だ……夢でも見てるのか？

「何処……何処なの？」

何を探しているのだろうか？

色々とあやふやでワケが分からなくなっている……

「何処なの……こいし？」

「え？」

こいしさんを探している？

ただ地上に出るとは思えないし……何より俺がここにいるわけ無いもんな……

「さとりさん!!」

声を掛けるが届かない。

やっぱりまやかしでしか無いのだろうか？

「やっぱりダメなのか……」

何もかも届かないのか……？

せめて彼女に何か届けば……

「暴れないの」

「え？」

その言葉とともに、目が開いた。

「散々迷惑掛けた癖に呑気ね」

「パチュリーさん……レミリア」

「ただの寝不足よ。そのせいで倒れたそうだけど」

「ああ寝不足だったんですね……」

さつき何が起きたのか分からず戸惑っていたが……そうか寝不足か。

「何があつたの？」

「いえ……ちよつと夜更かししていたようです」

「……あの子の面倒を見てて時間が足りないかもしれないけど……ダメよ？」

「すみません……」

「……まあ、私は行くからしつかり今日だけは休みなさい」

「了解です」

目が覚めた事を確認だけに来たのかすぐにパチユリーさんは出て行った。

「……」

「寝不足か……ダメだな本当に」

「いつもいつもなら文句を言うけど、偶にならいいわよ」

「……あれ？レミリア？」

「何？」

「いや、一緒に出て行ったのかと思ったけど……まだ居たから驚いたわけで」

そう言えばレミリアは出て行ってなかったもんな。

「別に居ていいでしょ？貴方がまだ寝るとは思わないし」

「まあ……それはそうかな確かに」

流石にここで二度寝とかはしない。

申し訳なさが突破しそうだし……

「それに、パチエも察して出て行ってくれたしね」

「察して？」

「何を抱えているの？」

「何をつて……特には何も無いけど」

「貴方が寝不足なんて相当でしょうよ……何か抱え込んでるんでしょ？」

「……そう見えたりする？」

「無理に話せとは言わないけど、パチエは居ないのだから話しやすいでしょ？」

「それは……否定は出来ないんだけどさ」

「どうせ、また倒れ込むくらいなら話しなさい」

「……」

言われた通り話せば少しは楽になるかもしれない。

ただ少し楽になるだけだ……自分が惨めになるし、何より話せない事だし……

それに……レミリアにさえどうしようもないと言われたらそれこそ意気消沈しそう
だ……

「ごめん、話せない」

「成る程……」

組んだ脚を組み替えながら、こちらを見てくる。

本当に申し訳ないとしか言いようがない。

「じゃあ話しなさい」

「え？」

いや、レミリア何を言つて？

「話さなくていいって話じゃ？」

「そんなわけ無いでしょ？あるかどうか聞きたかっただけよ」

「凶られた……」

「なら話しなさい」

その後、多少の抵抗を試みるが……流石に無理だと諦めた。

「……前に話した事だけど、レミリアとフランちゃんは仲良いつて」

「そうね、喧嘩はしない事もないけど。それくらい些細な事だわ」

「……その件で仲の悪い……いや悪くは無いかすれ違いしている人達が居まして」

「最近居付いてるあの子？」

「……何故そう思ったの？」

「貴方がそこまで頭を抱えるって事はねえ……」

「……」

誤魔化すのは無理だな……話せないところを避けた上で本音を告げよう。

「……ここからは主観だけどいい？」

「構わないわ」

「二人は仲が良い……と俺は思い込んでいたけど、すれ違いのようで離れ離れになっていて」

やっぱりさとりさんがこいしさんを迷惑に思っていると思えない。
かつてのあの時からそう思っている。

「ああ、さとりの事ね」

「……!?!」

何故……その名前が出てくるんだ？

まさか、最初から知っていた？

「……知り合いですか？」

「どうだと思おう？」

だったら何処で会ったと言うんだ？
そんな事出来る筈が……

「……」

「冗談よ」

「何が冗談なんだ……？」

知る筈のない名前を知っていて、
冗談も何も……

「貴方が寝てた時、出ていた言葉よ」

「……え？」

確かに……夢で見たけど。

「気を付けなさい。簡単にカマなんてかけられるのだから」

「……はい」

ただただ、自分が迂闊だったただけらしい。

「それで、その二人がねえ……」

「はい、どうにかと」

「……そうね、どうしようもないわ」

「……」

やっぱりか……これだったらやっぱり聞かなかった方が……

「ねえ蓮司」

「何？」

「少しは信じなさい」

「信じる……？」

「姉って言うのは強いのよ」

それだけ告げて部屋を出て行った。

「姉は強いか……」

確かに……さとりさんは強いのは分かる。
だけど無理なものは無理……

「だったら何が出来るって話だよな……」

だから信じるしか無い……そう思いつつも身体の中には燻りが残るままだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百五十四話 人里にて unexpected eve

n t.

何もしないと言うものも案外難しいもので、本当にこのままでいいのか怪しくなる。
ただ……出来ないのに気負うとまた言われるな……

「本当に、お兄さん最近静かだねえ」

「それでいいんでは無いですか？」

「それはそうだけど……もどかしくもある」

「そう言われましてもね……」

こいしさんに文句を言われるがどうしろと言うのだ……
俺だつて何かしたいのは山々だが……

「正直文句言われるよりはマシだけど」

まあ……それはそうなんだろうけど……

「……ねえお兄さん」

「なんです?」

正直また文句を言われるのかと思つてた。

「辛そうだけど大丈夫?」

「まあなんとか……」

ままならないのはずっと一緒だしな……正直割り切るには時間がかかるだろう。

「んー……ねえねえ」

「……だからなんです？」

「一緒に出掛けない？」

「え？」

半ば連れて行かれる形でこいしさんと人里へと向かう事になった。

「……急にどうしました？」

「気分転換も必要だよーと」

「気分転換ですか？」

「うん、多分した方がマシだしねえ」

「俺はいいんですけど……」

周囲を見る。明らかに人通りが多い。

「こいしさんが大丈夫なんですか？」

「え？私の心配？」

「そりや……妖怪ですし」

「あーでも見えないから大丈夫だよ」

「見えてる人もいるかもしれないですよ……？」

「だって……お姉ちゃんだって見えないんだよ？」

「……」

それを言われると反論出来ない。

それと同時に大丈夫そうかと思ってしまう。

「だからー何しても見えないってわけでー」

そう言いながらこいしさんが引っ付いてくる。

「悪い事してみる？」

そう耳元で呟いた。

「犯罪はダメですよ……」

「そう言う事じゃないんだけど……まあお兄さんには分からないかあ」

何故だか馬鹿にされた気がする。

「兎に角、欲しい物があつたら言つてください」

「うーん、まあそうだね。今日はお兄さん居るから盗んじやお兄さんの責任になつちやう」

「……俺が居なくてもやめてください」

「考えておくー」

少し不安に思いつつも……信じることしか出来ないわけで……彼女を信じながら人里を回り始めた。

「ほんとなんでも売つてるねえ」

「……そうですかね？」

比較対象が現在つてのものもあるが、やはりそこまでと思ってしまう。
勿論自分の方がズレているのは分かっているが……

「なーんか面白い物は……」

そう言うこいしさんの脚が止まる。

正直彼女が気になる物なんて無いと思ってたが……

「何かあった……」

こいしさんが脚を止めた物を確認してすぐに理解した。
それは鈴だった。

「なんだろう、変な感覚」

「変な感覚ですか？」

「うん、なんというか……どうでもいい筈なんだけど……気になる」

「……」

やっぱり、断片だろうけど彼女にも記憶があるのか？

何も無いよりはマシかもしれないが……逆にもどかしい。

「欲しいですか？」

「どうだろ……欲しい気はしないんだけど……なんかこのまま放っておくのも勿体無い感じ」

「……分かりました」

確かに、鈴があるって事はこちらとしても見落としが減る。
あの頃に戻るわけでは無いが……それでもだ。

「これください」

「いいの？」

「欲しい物があつたら言つてくださいと言つたじゃ無いですか」

「有難う」

鈴を購入し、彼女に渡す。

こいしさんはあの頃のように鈴を付けくると回る。

チリンと音がして一瞬周りがこちらを向いた気がするが……すぐに元の方へと戻る。

「うん、いいねこれ」

「それなら良かったです」

「ただ……どうしてだろうね」

「何かありました？」

「懐かしい感じがする……前にこうしていたような」

「どうしてでしょうね？」

「むー」

若干不満に思いつつもこいしさんが走り出す。

チリンチリンと音を鳴らすのが先程とは違ってもう誰もこちらを向かない。

「ああもう待ってくださいってば」

「いっまでおいでー」

逃げるこいしさんを必死に追う。

音のお陰で見失う事はないのだが……人通りのせいで上手く追いつらい。

「ぶつかってるし……」

こいしさんの方は何度かぶつかりながら逃げ続けている。

当然だが、ぶつかられた相手はそれに気付いていない。

「後でその点は叱らないとな……」

ばれなきやいいわけじゃないだろうと思いつつ、彼女を追い続ける。

移動距離に若干の疲れを覚えつつも、なんとか追い付いた。

「ほんと……好き勝手し過ぎですよ」

「しようがないしようがない」

「しようがなくなってますってば……」

「でも……気分転換にはなったでしょう？」

「それはまあ……」

どちらかと言うと気が晴れたと言うより、こいしさんが心配で仕方無いが強い気がするが……

それでもさつきよりはマシなのは事実か。

「それなら良かった」

「良かったじゃないですよ、人にぶつかっちゃダメですって」

「反省してまーす」

「絶対してないやつ!!」

そんな不満げな顔でどう信じろと言うのだ。
信じられる人は居るわけないだろうと。

「じゃあ帰ろうか」

「そうですね……」

半ば強制的に連れてこられたとはいえ、フランちゃんを放置して来てしまった。
正直後の事を考えると……若干の恐怖はある。

「まあ……それでも感謝してますよこいしさん……」

こいしさんの方を振り向きながら話を続けるがどうもこちらの方を見ていない。

「あれ？こいしさん……」

彼女が何を見ているのか気になって視線の方に目を向けた。
そしてすぐに理解した。

「え……？」

居るはずがないと言うのは願望だ。

それに本当であれば居て欲しいと思っていた筈なのに。

しかし実際に目にすると言葉を失う。

本当は自分でも信じて居なかつたのではないかと思ひ知らされる。

「さとりさん……」

古明地こいしの視線の先、その目で捉えているものは。

古明地さとり。こいしさんの姉であり、俺が今一番会いたかった人物であった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百五十五話 妖怪探し～where did you

go?

「さとりさ……」

人混みの中に今にも溶けそうなさとりさんを追う、それと同時に鈴の音が鳴る。

「はいしさんも追いましょう……」

声を掛けるが、鈴の音が遠くなる一方だ。
慌てて振り向くとそこには居なかった。

「……え？」

鈴の音が小さくなる。

見失ってはいるが……これ以上離れると不味そうだ。

「一体何が……」

こいしさんも心配だけど……今はさとりさんの方へ……

「まだ近くに居るはず……」

人混みを掻き分けながら人里の中へと戻って行った。

だが、見当たらない。

「気のせい……なわけないよな」

最初に反応していたのは俺じゃなくてこいしさんだし。

しかし……だったら何処へ？

「もしかしたらこいしさんが先行して……?」

姉妹だから行く場所が分かっていたり?

だったら完全に失敗だが……今更仕方ない切り替えよう。

「すみません」

「なんだい？」

「紫髪の少し背の低い女の子見ませんでしたか？」

「見てないねえ」

「有難うございます」

「あの……」

「……」

一部の人達には無視されたがそれでも聞き回った。

「だけどさ……」

「ここら辺に居た筈なのに何人に聞いても見ていないと言う……どう言う事だ？
分からない……他人に聞いても仕方ないのか？」

「らっしやい兄ちゃん」

「え？いや買い物じゃないです」

「なんでい、店の前でウロウロしてるんじゃねえっての」

「すみません……」

確かに行ったり来たりしていたが、店の前で邪魔してしまっていたのは悪いな……

「まあいいけどよ……また売れねえかねえ……」

「すぐに退きます」

「まあ急がなくてもいいけどよ」

「でも邪魔みたいですし」

「まつそりやねえ。さっきの嬢ちゃんもウロウロしてたけど結局買わなかったしよ」

「嬢ちゃん？」

「紫っぽい珍しい髪した寺子屋行くくらいの見た目のな」

「っ!?!何処ですか!?!」

「おわつと!?!どうしたよ」

「その子何処へ行きました……?」

「何処って……店の前に来ただけだぞ?」

「それでもどっち方面に行ったかなとは」

やっぱり見た人が居たんだ。ここに居たのは事実なんだな。

「恐らくとかだけでもいいので……」

そう話すと店主が多少震えた手で真つ直ぐ差す。

真つ直ぐはまた別の店の筈だが……怖がらせてしまった……は無さそうなんだが一体……

「あの……後ろは店では……？」

「真後ろって事ですよ」

「え？」

後ろから声がして振り向く。

そこには彼女が居た。

「さとりさ……」

「私に何用か分かりませんが……少し場所を変えましょうか」

そのまま彼女に連れられて行った。

人里から少し離れた場所。
もう完全に他の人は居ない。

「ここなら、良さそうでしょうか」

「あの……さとりさん？」

「ああすみません。聞いてませんでした」

聞いてなかった……彼女にしては珍しいと思うが……

「人里は騒がしいんです。聞き流さないととてもじゃ無いですが耐えきれません」

「ああ……成る程」

だから心を一切読んでなかったようだし、人里離れたのか。

「概ねそういう事です。何故貴方が知っているのか分かりませんが」

「……」

「まあ先どうぞ」

「先ですか？」

「聞きたい事があるのでしょう？」

「ありますね」

正直聞きたい事だらけなんだが……

「何故人里に？」

「少し用がありましたね」

「さとりさんが……人里にですか？」

正直驚きでしか無い。まずもって来たがらない人だ。
地上にいるだけでも驚きだと言うのに。

「逆に貴方が私を見つけたのも驚きですけどね」

「そうなんですか？」

「一応気配を消していましたので」

「気配を消す？」

そんなこいしさんみたいな事が出来るのか？

「妖怪なら出来ますよ。通り過ぎる人たちは周りを気にしませんし。気付かれない事く

らいなんて」

「……だからか」

だから店の兄さんは気付いていたのか。
完全に店の前にいる彼女に集中していたから。

「分かりました。有難うございます」

それでも、何故来たのが不思議でしか無いんだが。

「……探してる子が居まして」

「探している子……」

こいしさんだろうな……そうでもない彼女が出て来る理由が分からないし……

「やはり……」

「どうしました？」

「こいしの事知っていますね」

「……知っています」

本当なら、こいしさんと一緒に来る筈だったのだが……

「こいしは何処に？」

「分かりません」

「分からないって……成る程」

すぐに心を読んでくれるためスムーズに進むな。

「……」

「さとりさんどうしました？」

「心が覗かれているのが分かっていて、不快じゃないんですか？」

「特には……元から知っていますし」

「……変な人。でも今は貴方を探っている暇はありませんね」

「ですね……こいしさん……何処へ行ったんだ？」

「ご迷惑をお掛けします」

「……不思議な人」

何故逆になってしまったかは謎でしか無いが、先程とは変わって、さとりさんと共に
こいしさんを探すこととなったのだ。

t o b e c o n t i n u e d

百五十六話 互いの苦惱～shift think.

「少しよろしいでしょうか？」

「どうかされました？」

探索中にさとりさんが声を掛けてくる。
一度足を止めて彼女の方に耳を傾けた。

「本当にこいしは見つかるのですか？」

「自信無くしちゃダメですよ」

「しかし……」

「こいしさんは鈴を付けてます」

「鈴を？」

「こいしさんが付けてくれました。音を頼りにすれば少しはマシになるかなと……」

当然無意識な以上音も聞こえないのだが……それでも完全に聞こえないと言うわけでは無いしな……現に地霊殿の時は鈴の音で気付いた時もあったし。

「それは有難うございます」

「いえ、こちらにも必要だと思ったわけですし」

「少しは耳も澄ませませましょうか」

人々の声が聞こえて来るが、その中に鈴の音が紛れていないかと。

当然紛れていなかったがそれを頼りに探し始めた……のだが……

「……」

「さとりさん？」

すぐにまた彼女は足を止めてしまった。

「あの……どうしました？」

「ああすみません。なんでもないです」

「……分かりました」

……うーん。こいしさんが心配なのは分かるが。

一人で探すか？

「すみません……本当に……」

「大丈夫です……見失わなければ」

「そうですね……こいし……やっぱり」

「やっぱり何でしょうか？」

「いえ……特に……」

「……話してくれませんか分かりませんよ」

「……そうですね」

誰もかれもさとりさんのようには行かないしな……

「あの……小野寺さん」

「はい、なんででしょう」

「こいしを探すのやめませんか？」

「何を……？」

いきなり……どうしたんださとりさん？

「こいしが居なくなっただのは私のせいでしょうか？」

「そんなことはありませんよ」

こいしさんが本当に嫌だったなら、拒絶している筈だ。

あくまで彼女は信じられないってだけで嫌っているわけでは無かった筈だ。

「……いえ、こいしはきつと」

「……まずは話してください」

「話して……？」

「話さないとどうしようもないですよ。決めつけてもいいことはありません」

「……だったらあの子は突然居なくなるとならなくて」

「何か事情があったかもしれません」

「そんな事言っても……」

「……お願ひします」

こいしさんを信じて欲しいと彼女にただ懇願する。

あの時の地霊殿の二人みたいに……ただ戻って欲しいと。

「怖いんです……」

「分かりますよ」

誰だって怖いのは分かる。

他人の考えなんて理解出来ないから。

「私は人の心を覗けるんです」

「そうですね」

さとり妖怪がそう言う妖怪だったのはあの時から分かっていた。

最初の頃は驚いたが……死に戻る今ではむしろ安心する方だ。

「だから……尚更怖いんです」

妹のこいしさんは心が覗けない以上彼女にとって怖いのだろう……
普段知れる以上尚更だろうな……

「もし嫌われているとしたら私は……」

「絶対に無いですよ」

万が一あるとしても、今現状嫌われていると思っている以上変わらないだろう。
だからこそ……会って欲しいが。

「……確かに変わりませんが」

「自分が無責任な立場なのは分かりますが……お願いします」

自分で言い出せる立場じゃ無いことは分かっている。

なんせ今の俺とさとりさんは他人だし。

だから感情の押し付けではあるのだが……

「このままじゃ……」

誰も幸せになれないから。

「……そうですよね」

「さとりさん？」

「私だって会いたくて……ここまで来たんです」

こいしさんに会いたくてわざわざ地上まで来た。

彼女は絶対に来たくないだろう場所に。

あらゆる感情が籠った人混みが嫌だと言った。

彼女にとって雑音だらけの地上に……それでも大切な妹のために来た。

「全力で手伝います」

どんなに疲れてもやってやるぞーと、そう思い耳を澄ませると……

チリン

「今……音が……」

「さとりさん行きましょう!!」

「……はい!!」

そのまま音を追いかけた。

「……………」

中心部から外れた廃屋、ここで音が消えた。

自分が先導して中へと入って行った……後で怒られそうだが。

「……………」

「あらら、見つかったちゃった」

「いいしさん」

「お兄さん、どうしたの？」

そこにはこいしさんがニコニコした顔で座っていた。

「心配したんですよ……」

「ごめんごめん、無意識だからさ」

相変わらずニコニコしながらそう答える。

「それで、なんでお姉ちゃんが地上に……」

「ハハハハ」

話しているにも関わらずさとりさんは抱き締めていた。

「ちよっとお姉ちゃん……」

「こいし……居て良かった……」

笑顔は崩れて今は慌てている。

俺も驚いたし仕方ない気もする。

「もう……しょうがないなお姉ちゃんは」

「いや……しょうがないのはこいしさんのような」

「えー、酷いなあ」

泣いているさとりさんを撫でながら文句を言っている。

「まあ……良かったのは事実ですが」

「まだ何も話し合っていないんだけどね」

「でも、大丈夫そうですが……」

「……ちよつと悩んでたのが馬鹿みたい」

「こいしさんでも悩むんですか？」

「酷くない？」

「ごめんなさい」

「まあ……ちよつとね……」

「いいしは何を？」

「……お姉ちゃんに何言われるか分からないから逃げちやつた」

「ああ……」

互いが嫌つていると言うわけではなく、互いが相手の反応が怖いとそれで離れて行つたわけか。

仕方がないが本当に辛いやつだなそれは……

「まあお姉ちゃんに話したい事はあるんだけど……」

「おい兄ちゃん勝手に入ってんじゃねえぞ!!」

「あつごめんなさい」

ここに入っているのをついに怒られてしまった。
まあ居続けるわけにもいかないと……

「場所を変えよつか」

「そうですね……でも何処に？」

「一度戻らない？」

「紅魔館にですか、分かりました」

あれ……紅魔館大丈夫なのか？

まあ……少しだけならいいか……

「それじゃレッツゴー！」

「ちよつと引つ張らないで……」

戸惑うさとりさんを引つ張りながらこいしさんは紅魔館へと向かつて……

「そつちじゃない!!そつちじゃないです!!」

向かつては居なかった。

少し溜息をついて、それでも安堵もしながら二人を追いかけたのだった。

to be continued

百五十七話 少しの恐怖と安堵～there is still more.

紅魔館に戻るまでは支障は無かった、強いて言うなら足取りが重い事はあったのだが。

幸いさとりさんはこいしさんの方にかかりきりで此方を見向きもしなかったが……
実際どうしような……

「なんとかなればいいけど……」

二人が逢えたことに安堵していて気にせずいたが、こいしさんと違つてさとりさんは
正真正銘のさとり妖怪だしな……パチュリーさんとかに感づかれると不味い。

「ちよつとそこ……つと小野寺さんですか」

「美鈴さんどうしました？」

珍しく働いているんだなと思いつつ、止められた事に驚く。
何かあったのだろうか？

「いえ、小さい子連れ回して紅魔館に来た不審者かと……」

「酷い言われよう……」

第一いつもこいしさんかフランさんと歩き回って……

いや、普段こいしさん認識してないなこれ。

「すみません、迷惑でした？」

「いえ、あのその……普段は不味いですが小野寺さんの知り合いならいいかなとは」

「そうですか、ありがとうございます」

なんとか落ち着いてよかった……

「ああでも一応伝えないと……待ってください」

「……さつきお昼寝していた事バラしますよ？」

落ち着いて……無いかもしれない。

「……分かりました。お通りください」

そしていつもの事の筈なのに何故かバラされるのを嫌って美鈴さんが退く。

まあ……いいんだけどさ。

「それでは遠慮無く」

「しかし……心でも見透かされましたかねえ……」

「さて、どうでしょうね」

「ちよつとさとりさん!？」

小声ながらも驚きを隠せない声で話す。
ただそれに答えず館へと入っていった。

「小野寺さん」

紅魔館に入つてすぐにさとりさんに話しかけられた。
先程は答えず行つたが何かあつたか？

「何かありました?」

「……対応はさつき感じでよろしかつたでしょうか?」

「……」

これは……予想以上に前途多難な未来が見える。

「……さっきのは喧嘩売つてると見られる可能性もあるのでお気を付けて」

「え？」

「……まあ能力の事バレると不味いと思うのでそれも気をつけて」

地底に居たから当たり前なのかもしれないが……世間知らずで済むレベルじゃ無い事は分かった。

第一地底は来た人を追い返すようなムーブだったし難しいかもしれない……

「……精進します」

「全力でサポートしますので」

とりあえずレミリアに事情を話して他のメンバーにはバレないように……

「帰っていたのね」

「………咲夜さん」

どうやら甘くは無いらしい。

「妹様が探していたわよ。余り放っておかないように」

「ああ、気をつけます」

「それじゃさっさと仕事を終わらせないと」

もしかしてこのままで終わる……？

「それじゃ……あら？その子は」

フラグと言うものはやはり建ててはならない……
間違いなく痛い目見るのだ。

「こいしさんの関係者です」

「あああの子のって……今何処に？」

「そこに」

「ごめんなさい、見落としていたわ」

「仕方ないですよ」

変な事は言わないでくれよ……？

「流石にお嬢様には言つてくださいね」

「今ちようど向かう気でしたし」

「ああ……足を止めさせてしまつて申し訳ありません」

「いえ、別に迷惑とかでは無いですし」

さつき出来るだけ他に会いたく無いと言つたのは気のせいだ。

「それで貴女」

「はい」

視線がさとりさんの方へと向く。

「私は十六夜咲夜、このメイド長をしているから何かあったら言ってちょうだいね」

「何かあったら……」

「勿論何もなくても、話したいとかあればいいけど」

「分かりました」

「それじゃあよろしくね……えっと」

「古明地さとりです」

「さとり……」

「深い意味はないですよきつと」

慌てて割り入る。逆に不思議そうな顔をされてしまつてミスだと気付いた。

ただ特に追求する様子はなく咲夜さんは戻って行く。

「今のは小野寺さんのミスですよ」

「分かりましたので勝ち誇らないでください……」

何事も無かったし気にしない事にしよう。

最後まで何も起きないでくれよと祈りつつレミリアの部屋へと着いた。

「あら？何かしら」

「レミリア少し用事が」

「………その子のこと？」

「そうです」

「こんにちわ」

「こんにちわ。貴女のお名前聞いていいかしら？」

「……古明地さとりです」

「ああ、こいしの言っていた姉なのね」

「……？」

「何驚いたような顔してるのよ」

「いえ、こいしとコミュニケーション取れていたのが驚きでして……」

「ああ、まあ蓮司が居ないと厳しいけどね」

「そうなんですか？」

「……そもそも見つけれないケースが多いしね」

「成程……」

「それで、どう言う要件かしら？」

「……数日泊めていただけませんか？」

「数日ねえ」

「お願い」

こいしさんも懇願している。

本人は無意識でやっているのだろうか……？

「……そうね、事情は聞かないでおくわ」

「レミリア？」

「ああ蓮司、そんな心配しなくてもいいわ」

「ならいいけど……」

そのままレミリアは席を立ち二人の方を向く。

「さて古明地姉妹。貴女達二人を紅魔館に歓迎するわ。こいしの場合は改めてだけどもね」

「ありがとうございます」

「是非とも妹の友達になってくれると嬉しいわ」

「私はもう友達だよー」

「そうね。さとりも宜しければね」

「数日の間。仲良くなれば良いと思います」

「そう言ってくれるだけでも嬉しいわ」

さとりさんがここまで言うのは驚きだが……良い事には違いないな。
そう思いつつ談話で盛り上がる皆を眺めるのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百五十八話 募る苛立ち、探す最適～dependence girl.

「概ね、やってきた事は理解出来ました……正直予想外だらけですが」

やっと腰を下ろし会話が出来た。

今日の事も含めて彼女が関係しそうな過去の事も全部。

そうは言っても殆ど覗かれた気もするが。

「まあ、こいしさんと会ったのは驚きですが……」

「凄いでしょー!」

「どうして紅魔館に居たとか疑問があるんですけどね……」

「ふっふーん、覚えてない！」

「……でしようね」

まあそこは散々言われてるしな……

「小野寺さん、こいしの確保有難うございます」

「いや……本当に見つけられて良かったです」

少しでも目を逸らせばこいしさんは見つからなくなる。
本当に運も良かったわけだ。

「それで……これからですが……」

さとりさんが話す途中に扉がバンと開いた。

慌てて振り向くと苛立ち混じりのフランちゃんがいた。

「お兄さん」

「どうしたの……?」

理由は分かるが念のため聞く。
違ったら良いなと思いつながら。

「何で来ないの?」

「今帰って来たばかりなんだけどき……」

やはりその件だよな……会いに行けと言われていたが、先に共有とかだけは済ませておきたかったから。

まあ流石にそれは後にするか……

「ごめん、こつち切り上げてそつちへ行くから」

待たせてしまいが仕方ない。先にフランちゃんと全力で……

「ふーんだ」

「フランちゃん落ち着いて」

「どうせ私より仕事の方が大事なんでしょ？」

……そんな言葉、何処で覚えた？

予想以上に染まって来ているな。

「……小野寺さん、早く行ってあげてください」

「え？ああ了解です」

さとりさんから急かされた事に驚きつつ部屋の外へと出る。
その後をフランちゃんが追いかけて来る。

「お姉ちゃん？」

「こいし、どうしたの？」

「お姉ちゃん、何か心配そうだけど……」

二人が去った後、こいしがさとりへと尋ねる。

「あの子……だいぶ心が荒れていたもの」

「……それお兄さんに伝えなくて良かったの？」

「どうして？」

「あつこれ……お姉ちゃんもお姉ちゃんで面倒な奴だ」

「？」

「……まあ、どうしようもないのが事実か」

流石にここで自分が行ったらフランが何するか分からない。
だからこそお兄さんが頑張ってくれることをただ祈る事にした。

「最近お兄さん私に対して冷たくない？」

「そんな事は無いと思うけど」

「だって今日も朝から勝手に出掛けちゃうしぎ」

「用事があったからね」

「連れてつてくれれば良かったじゃん」

「いや……外出れないよね？」

「ぶー」

「ぶーと言われても……」

「その後もすぐに来ないしさあ」

「忙しかったからね……」

「あんま扱い酷いとどうなっちゃうか分からないよ？」

「……勘弁してくれ」

そのまま、部屋へと向かう予定だったが……

「蓮司、少し良いかしら？」

「レミリア、今は明らかにまずいと思う」

まさかのレミリアが乱入して来た。

フランが云々言ってたの貴女では？

「ダメに決まってるでしょお姉様」

「……フラン我慢しなさい」

「お姉様……？」

「蓮司」

「しかし……」

「蓮司、早くしなさい」

フランちゃんの方を見ると俯いている。

正直それで行くのはどうかと思うが……

「行って」

「……分かった、早めに戻って来るから」

一体このタイミングに何が目的だ？

正直フランちゃんが可哀想だが……

「どうして……？」

その声は誰にも聞こえずに……

「……」

多少の苛立ちを持ちながらレミリアの部屋へと辿り着く。

「さて、どうしようかしら……」

「いや、何か用があつてじゃ？」

「正直言うと無いのよね」

「……帰ります」

「待ちなさい。予想以上に深刻な問題が起きてるから」

「問題？それは俺が関係してるのか？」

「完全にしてるわ」

「……は？」

「正直な話……フランがここまでだと思ってなかったの」

「ここまででっ？」

「進行度と言うか……蓮司への依存度と言うか……確かに今まで幽閉していたとは言え予想以上過ぎたわ」

「そこまで……か？」

「なんでアンタが自覚無いのよ。一日居ないだけでもアレよ？」

「アレよと言う言い方はあんまりだと思うが……」

ただ確かに……一日だと言うのは異常なのだろうか？正直分からん。

「蓮司が永久にフランの元で世話係するって言うならそれでも良いかもだけど……」

「無理だな……」

今は紅魔館にて異変を待っている最中だが、恐らく起きれば関わりに行く。そうしな
いと先に進めないしな……

そうすれば紅魔館から離れる必要があるし、死ねばまた巻き戻って此処じゃなくな
る。

「万が一残るとしても寿命の問題があるものね」

「……そうだな」

俺は後100年すら生きれるか不安だしな。

まあ流石に110歳超えとか無理そうだが……

「親離れとは違うけど、徐々に慣れさせないといけない。そうでもしないともしかしたらフランに唐突に眷属にさせられるかもしれないし」

「眷属……」

吸血鬼の眷属にさせられるわけにはいかないな。

全てが台無しになる可能性だってあるしな。

「だから、蓮司以外の人間も雇って色々慣れさせようとも考えたけど……人間は紅魔館に来ないし」

「……まあ来たくないだろうな」

どう考えても危険だし。

今こそ知っているが、最初は自分も命懸けだと思っていたし。

「少し蓮司には窮屈かもしれないけど、慣らしていくしかないわ。前はやってちようだ
い言っただのにごめんなさいね」

「……本当にフランちゃんが可哀想としか」

「ほんと、苦しませてばかりね」

妹の事を本気で思っているのは分かっている。

こちらでも出来る事を考えて動くしか無いか……出来るだけ彼女が楽しめるように。

「……ああやってやる。やってやるよ」

一生を添い遂げる事は出来ない、だからこそ今出来ることは何か……

レミアアの理想通りにするのは難しいと思うが、自分が紅魔館を去った後のフラン
ちゃんを考えるとそうするしか無いのかと。

とりあえず明日から考えようと今は悔いのないようにめいいっぱい遊ぶこととした

の
だ
っ
た
。

一
度
染
ま
っ
た
狂
気
は
そ
う
簡
単
に
は
消
え
は
し
な
い
。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百五十九話 犠牲者精神 < can, t be help

e d.

「お待たせ、本当にごめん」

「……お兄さんは悪く無いし仕方ないよ」

若干沈み気味のフランの元へと着いた。
少なくとも今日は約束したし果たす。

「……でももうこんな時間だけど」

「フランちゃんが大丈夫なら大丈夫さ」

徹夜くらい問題無いし。

しかし明日からは……まあ考えるのは後でいいか。

「それじゃそれじゃそれじゃあ!!」

時間も忘れて遊びに暮れるようだった。

夜も暮れ朝日ももうすぐと近づいて……

「……」

大丈夫だと言った筈なのに、既にその人間の意識は無い。

原因とするならば久々に人里に向かった事など多々あるだろうが、それでも寝落ちてしまった……

それを叱る様子もなく、ただフランは見つめている。

「全くしょうがないお兄さんだなあ」

人間だから仕方ないと言い聞かせる。

吸血鬼に比べて弱いのだから、こうやってすぐに寝てしまう。

力も劣るし、すぐに死ぬ脆い生物。

だからこそこうやって愛おしく思うときもある。

「短命だからこそ美しいのかな？」

命短く輝くからこそ美しいみたいに、人間はそうでなくてはならないのかもしれない。
い。

「んー、だけどそれは嫌だな」

たった100年くらいしか一緒に居られない。

そんなの短過ぎるし認められない。

お兄さんにはずっと一緒に居てもらわないと。

「まっいいいよね。約束破っちゃったわけだし」

本来であれば今は眷属を作る事は出来ない。

しかしこの妹はそのルールすらも破壊する事が出来る。

「と言うわけでお兄さんこれからもよろしくね」

そのまま、眷属にしようと齧りつこうとすると……

「やっぱりね」

「!？」

慌てて入り口付近を見ると、怖い目付きをした姉がそこに居た。

「お姉様？」

「フラン、それはやってはいけないって言った筈だけど？」

「でも、お兄さんが……」

「それも踏まえた上でダメって言ってるけど」

「なんで？」

「彼がそもそも眷属化を望んで無いもの」

「そんなの……死なない方がいいに決まってるじゃん」

「そんなものは私達の決めつけよ。第一彼が言ったもの」

「なんで……そんなのおかしいよ」

「おかしく無いわ。だったら人間なんて種族は存在しないもの」

その方がいいと言う人間しかいなければ既に人間と言う種族は滅びているだろう。そうでは無いのは人間であり続けたい人が殆どだからだろう。

「第一ウチの咲夜だって人間よ？」

咲夜を幼い頃から拾い育て上げた。

今でこそ立派な従者だが、当時は色々であった。

「でも咲夜は一度も眷属になりたいと言った事はない」

人間だから出来ることがある。

人間だからこそ成長し続けられる。

妖怪の生は長い。途中で何度も折れたり足を止めたりしてしまおうだろう。成長を辞めたらそれはもう私じゃないから。

「だから、それを決めるのは私達じゃ無い」

「分かんない、分かんない分かんない」

「ほんと……私って子育て苦手ね……咲夜が良い子に育ち過ぎたのもあるけど」

目の前の暴発しかけのフランを見る。

そして妹さえも満足させてあげられない自分に溜息が出る。

「最近蓮司に任せきりだったからこうして遊ぶのも久しぶりね。さあフラン遊びましょ?」

そうして建物内に弾幕が飛び交い始めた。

やべっ寝てた……申し訳ないなこれ。

まずはフランちゃんに謝らないと……

「……今何時だ？」

時計を確認しようとしたがその前に違和感に気付く。
なんだか暗い……しかしそれはすぐに分かる。

「外？」

気付けば夜空の下にいる。あれ？なんで？

「夢でも見てるのか？」

「あっお兄さんやつと起きた？」

「……こいしさん？」

「うん、そうだよー」

「何が起きているんです……?」

「えつとね、紅魔館の一部が壊れちゃった」

「……?」

「一体何故そんなことに?」

「上上」

こいしさんに言われるままに上を見る。

そこではフランちゃんと紅魔館の皆が戦っていた。

「ちよつと状況が読み込めないです」

「お兄さんを争ってーじゃない?」

「いやいやいや……」

何で俺で争うのか分からないんだがって話だしな。

「まあお兄さんが何かしたんじゃない？」

「……否定は出来ない」

現に寝落ちしたしな……

「それでこいしさんは此処で俺の見張りしてくれてたんですか？」

「まあそれもあるけど……」

「？」

「私もお姉ちゃんも戦えないからね……」

「ああ、紅魔館の問題ですもんね」

「そうでもなくて……」

「まだ何かあるんです？」

「お姉ちゃんは戦えないし……能力がバレたく無い」

「……ああ、確か」

さとりらしい能力なんだっけか？

それだったら確かにまずいな……

「それで私はもつとダメ」

「それ以上にまずいのが？」

「遊びじゃ無くてこう言う時は調節出来ないから……私かフランか死んじやう」

「え……いやいや……」

だつてそれを防ぐためのスペカールなんだろう？

だつたらおかしく無いか……？

「スペカは？」

「お姉ちゃんは律儀だけど地底で流通してるわけないじゃん」

「分かりませんが……」

「してたら地底の鬼達は常日頃どつきあいなんてしないよ」

「そうですか……確かに……」

だったらどうしようもないか。レミリアを応援……いやそれ正しいのか？

「合っていますよ」

「さとりさん？」

どうやら近くで座っていたようだが気付かなかった……

「貴方はむしろレミリアさんを応援しないとまずいです」

「そうなんですか？」

「突然館が壊れていたため彼女達を覗いた所、フランさんが貴方を眷属にさせようとしてレミリアさん達と争い始めたらしいわ」

「……成程」

唐突に言われて戸惑うが、結局は自分が原因かと。

「急いでこの館を離れる事をオススメします」

「いやいや……それは……」

「何か出来るわけではないでしょう？ だったら避難したほうがいいでしょう。そのため
に彼女達は戦っているわけですし……」

「そう言われると……否定は出来ませんが」

「こいし、先導してあげなさい」

「でも本当にいいの？」

「何かありますか？」

「あのままじゃみんな不味いよ？」

「え？」

「……………」

「悪いけど今回は言うよ。確かそれだけの恩を受けたし」

曖昧な記憶だが。それでもこいしさんは必死に覚えている。
だからこそ返したいって。

「不味いとは？」

「フランがいつもよりも強力になってる。あの皆でもきついよ」

「そんな……………」

何が起きている？どちらにせよそれじゃあいけない。

目の前を見る、レミリアが咲夜さんがかなりの血を流している。

「……さとりさん」

「正気ですか？」

「はい」

心をすぐに読んで察してくれる。

それだけの事をしなきゃならないと。

「本当は眷属になってあげればいいんだけどね」

当然なる事は出来ない。

永遠を生きる種族になる気はないし、元の世界にまだ戻る気があるから。

「所詮は人間とは言いませんけど……軽いですね」

「何度も死んでますからね」

久々にさとりさんやこいしさんに会えたがこれは仕方ない。
誰かが死ぬなんてあつてはならないから。

「……小野寺さん」

「大丈夫ですよ俺は」

「……何か持っていますか？優しい音楽が流れるものとか」

「……ありはしますけど」

唐突に何を言い出したのかは謎だが……

あるにはある、オルゴールだ。

ただ……レイラから貰ったこれを渡すのは……

「お願いします。どうしても必要なんです」

「……分かりました」

どうせ死ぬなら……いいか。

レイラには悪いけど……

「ありがとうございます」

そのままオルゴールを鳴らし始める。

優しい音楽が流れる。

「これならいいわね」

「お姉ちゃん？」

「こいし、ごめんなさい」

「お姉ちゃん!？」

「小野寺さん。心の底から貴方が皆を思っているのが分かりました」

「さとりさん」

「後は任せてください」

「でもさとりさんは……」

「ええ、バレるだけです」

そう告げて空を飛ぶ。当然飛べない俺は追い付けない。

「ちよつと、これは紅魔館の問題よ」

「傷だらけで文句言わないでください」

「……」

「終わらせます」

「……大切な妹なの」

「ええ、分かっていますよ妹は大切なものです」

オルゴールを鳴らす、その音に近付いてくる。

「本当に純粋な子。だけど忘れちゃいけませんね」

想起する、彼女が楽しかった思い出。

それは蓮司だけじゃない、姉も従者も様々な人達がいる。彼一人じゃ無かったはずだ。

「っ……」

その記憶にフランが立ち止まる。すかさずレミリアが抱き締める。

「お姉様」

「……ごめんなさいね、フラン」

「なんか意識がずるいずるいつて持ってかれちゃって……そしたら気付いたら」

「分かったわ。ゆっくり聞いてあげるから」

「うん！」

そのまま館の壊れてない部分に戻って行った。
良かった、無事で済んで。

「……」

「さとりさん?」

さとりさんは一人の少女を見つめている。

パチユリー・ノーレッジ、彼女も同様にさとりさんを見つめている。

「さとり妖怪……」

パチユリーさんからそう聞こえた気がした。

to be continued

百六十話 自分の事、自分の目的
t i n a t i o n .
n e x t
d e s

翌日、レミリアに呼び出された。

昨日は夜のドタバタでとか言いたいがそうも言つてられない事情だろう。
部屋へと入ると、既にさとりさん達は居た。

「何かあつたかつて話だけど……まああつたなあ」

昨日の今日で呼ぶのは珍しいが、そりやなあ……
ただ実際俺から話せる事はないわけで。

「フランの事では無いわ」

「ん？そうかい？」

てつきりそうだとしか思ってたが……

「そっちはこちらでやるから問題は無い。問題はそっちよ」

そう言うレミリアはさとりさん達を指す。

察しはしたが……

「数日だけどうぞと言った気がしたけど」

「パチエがだいぶ怒っていたわ」

「あつそれはすみません……」

うん……一番困ってそうだったしな。

「だからとつと出て行きなさいって話よ」

「……俺も？」

「当然でしょ」

「……」

「私を騙してそれで済むんだから感謝しなさい裏切者」

まあ仕方ない。こいしさんを放つてはおけないとやった事は事実だし……

しかしこうもレミリアに言われると辛いな……

「何か未練でもお有りですか？」

「さとりさん？」

「いや、貴方の心がそう言っているような気がしたので」

「まあ……あるはあるけどさ」

「ちなみにですがレミリアさんは言ってる事は全部本心では有りませんので」

「……ええ？」

「ちよつと狡くないかしら!？」

「いえ……小野寺さんには本音をぶつけ合えて私達に対してのアドバイスをした癖に、そこで逃げる方が狡いのでは？」

「逃げるって……?」

「本音を言わず誤魔化して、その方がカッコいいとも思ってるんですかね？」

「……だからさとり妖怪って嫌いなものよ」

「私はレミリアさん結構好きですけど？」

「……そう」

「チョロいですね」

「……殺す」

槍を構えるレミリアを宥める。

正直危なかったかもしれない……

「と言うわけで理由を言ってあげたらいいかがですか？」

「いいわよ、どうせ出て行ってもらおう事には変わらないし」

「ほうほう、大好きな小野寺さんですが種族の違いにより……」

「適当なデマ流さないでくれない？」

「つまらないですね。少しは焦ってくれないのに」

いつの間にか話から置いてかれている気がする。

「えっと……つまりは？」

「これからフランに色々させるとしたの」

「それはいいと思うな確かに」

ずっと幽閉されていたし。新しい事に次々挑戦したいだろう。

「楽しいこともあれば、辛いこともある。その時に小野寺蓮司って逃げ道を作らせない

ようにね」

「逃げ道にはならなそうだが……」

ただ……俺は甘やかしそうか？

「そう言う事よ。異変まで居てもらうことが出来なかつたけど」

「まあ俺もフランちゃんが良くなってくれる方がいいし」

フランちゃんには今後も困難が多いだろうし頑張つて欲しい。
流星にレミリアも非道な事まではやらないと思うけど。

「いずれはフランも外に出れるようにしたいわね」

「そうなる事を願ってる」

それに関しては本当に、彼女も外に出られればいいしな。

「それなら蓮司以外の人間にも慣れてもらわないとならないけどね……先が長いわ」

「応援しか出来ないけど」

「それでいいわ」

レミリアはそう言いつつ二人の方も見る。

「それじゃあまたいつか。今度は改めて友達として迎え入れるわ」

「じゃあ明日来ていいの？」

「ダメに決まってるじゃない」

こいしさんのボケによりレミリアのキメ顔が台無しになってしまった気がするが

……まあ仕方ないね。

「お兄さん行こっかー」

「うん」

こいしさんに引き摺られるように紅魔館を出て来る。
改めてお世話になったなと思いき知らされるばかりだった。

またいつか

「で、さお兄さんはどうするの?」

彼女達を地底の入り口まで送りつつ尋ねられる。

これからか……

「まずは人里に行こうかなと」

バイト代を貰ったわけだし一時的に人里に泊まりながら今後を考えるのが一番か？

「小野寺さん、少しよろしいでしょうか？」

「どうしました？さとりさん」

「地霊殿に来ませんか？」

「え……」

確か前は追い返された筈だが……

「お姉ちゃん、どうしたの？」

予想外なのかこいしさんも驚いたような顔をする。

「今回お世話になったのは事実ですし」

「だからって地霊殿に来てもお姉ちゃんが迷惑かけるだけじゃん」

「こいし……?」

散々な言われ方をしたせい或少し悲しい表情をしている。

「そうと決まったわけじゃ」

「いや事実かなって」

「……まあこちらでも出来る事をしますよって事です」

一瞬顔を強張らせたがすぐに元に戻る。

どうやら妹の悪態には負けなかったらしい。

「小野寺さん、地底には貴方が探している妖怪が居ると思います」

「……本当ですか？」

自分でそんな事考えたかと疑問に思いはするが、どうにかなるなら有難い話だな……

「合っているか分かりませんが、可能性はあります」

「分かりました」

「気難しい性格なので、とり合って貰えるか分かりませんが一応話してみますね」

「わざわざすみません」

「それが私が出る事ですから」

地底に俺の探している妖怪がいる、到底信じられない。

だってその場合は俺が過去に地底に来た可能性がある……記憶がないより前にはあまり考えられない。

それでもさとりさんが言う以上は嘘を言っているようには思えないが……

「まずは行ってからだな」

二度目の地底、そして地霊殿よりも奥深く。

そこに何かがあるのか……期待と不安だらけだった。

next episode

く地底の底へく

百六十一話 向かう場所はくdeeper than here.

「また君か、この前注意した筈なんだが……」

「ああ、ヤマメさんお久しぶりです」

地下へと潜る途中にヤマメさんとまた会った。

今度はさとりさん達もいるし問題無いだろうけど。

「すみませんヤマメ」

「いやいいんだけど……その男もそう言うことかと理解したし。ただ妹様は？」
「ここにいます」

「ああ、私には見えないけど居るならいいんだ。見つかって良かったよ」

「ええ、そうですね」

こいしさんが無事に見つかって安堵している。
俺でも見つけるのに苦労するしな……

「人間、さとり様に迷惑のないように」

「流石に気を付けますよ」

睨みつけられながら地底へと降りて行く。

途中鬼に絡まれながらも地霊殿へと辿り着いた。

「……騒がしいですね」

「何かあったのかしら？」

さとりさんも不安そうにしている。何かあったんだ？

「ただいま、お隣どうしたの？」

「さーさーとりさまあああああああああ」

慌てて隣さんが抱き付く。本当に何が起きてるんだ？

「どうしたのよ」

「帰って来た……帰って来た……」

ああ……そう言うことか、そりゃ心配だよな……

「本当に心配したんですからね……」

「ごめんなさい。それでも成果はあつたから」

「こいし様？」

「ん？どしたの？」

「あついたんですね気付きませんでした」

「酷くない？」

「仕方ないじゃ無いですかー」

「うーん許す！」

何というか……こいしさんだなあ。

「ほらお空も！さとり様帰って来たよ」

「うにゆ？さとり様？」

そうしてお空さんも顔を出して来るが……

「……ん？」

「うちのお空がどうかしましたか？」

「いえ、小さいような」

前に見た時とは違う。あの時は俺より背の高かった筈だが、今は小学生くらいの背しかない。

「うにゅー？」

「お空に対して何考えているんですか貴方は……」

「誤解です!？」

少なくともさとりさんがそう言った目をするような事は考えていませんってば……

「と言うか、お兄さんは何者だい？」

「ああ自分は……」

「私の客人です」

「ええ!?!さとり様の？」

「お燐？」

「ごめんなさああああい」

そのまま叱られる。あの時もよくあつたな……

「えつと……先行つてよっか」

「……分かりました」

そのままお燐さんを見捨てて地霊殿内へと入つて行つた。

「そう言えばこいしさん」

「うんなあに？」

「さとりさんが言つてた妖怪つて誰だか分かります？」

正直どんな妖怪か検討も付かなければどうしようもないしな。

「分かんないや」

「そうですか」

まあそれは流石に本人に聞かないとならないか。

「でも一つだけ分かることがあるかな」

「何でしょうか？」

「お姉ちゃんが頼りに出来る人物な以上、間違いなく面倒な性格だと思う」

「あー……」

何故か凄く納得出来てしまった。

「お待ちせしました」

「いいえ、大丈夫です」

少し時間が経った後、さとりさんがやって来た。

近くで倒れている猫がいるがほはお隣さんだろう。

「お帰りなさいと言うつもりはないですが、ご自由になさってください」

「ありがとうございます」

まあお帰りなさいはなんだかんだ違うしな……

「一先ず今日この後彼女に会って来ます。その後、明日にでも小野寺さんを連れて彼女の元に行くと思いますよが」

「どういう方なんでしょうか」

「……」

さとりさんは少し考える素振りをするがすぐに口を開く。

「すみませんがお答え出来ません」

「何故かだけ聞いても？」

「余計な考えを持って貰いたくないので」

「余計な考え？」

「彼女は人間も妖怪も嫌いですので……憐れんだりや怯えたりとか余計なことされたく無いんですよ」

「……分かりました」

人間嫌いか、会って貰えるのだろうか？

「だからそう言うのが……」

「ああすみません」

気を付けないといけないな、本当に。

「お姉ちゃん、私も行っていい？」

「ダメに決まってるでしょ」

「えー」

「お隣やお空と遊んでて」

「分かったー」

「念のため聞いておきますが、小野寺さん明日で大丈夫ですよね？」

「お願いします」

出来るだけ早い方が都合がいい。

何をするか分からないのだから少しでも情報が欲しい。

「なら良かったです。ああ、相手が拒否しても無理やり会わせるのでそれはご心配なく」

「ひえ……」

有難いが怖いわ。

「最後にもう一つ」

「どうしました？」

「小野寺さんを地霊殿のその先、地底に案内するのはこれが初めてですが気を付けてください」

「危険だつて事ですか？」

「まあ……そうですかね」

「それは流石に気をつけます。ここで死にたくないですし」

「悪霊もいる、場所も危ない……何より封じられたアイツらがいる」

「アイツら？」

「こつちの話です」

「はあ……」

その場では深く追及しないことにした。

「そのため地底では離れないように」

「そうですね……」

灼熱地獄とかよりも危険な可能性があるなこれ……あの時案内されなかったし。

「灼熱地獄はそもそも危険じゃないですよ？」

「え？」

あんな燃えていたのに？

「燃えてはいませんが……後で聞くことにしましょう」

「やっぱ私も行ったほうがいいんじゃない？」

「ダメよ」

「ちえー」

「それじゃあ一度出掛けますのでまた明日」

「分かりました」

さとりさんはそのまま部屋を出て行く。

暫くこいしさんは残っていたが、寝るからと部屋に帰した。

「明日か……」

自分自身と向き合う日になるのだろうか、そう信じて。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百六十二話 地底の底に潜むもの～underground
beast.

「暗いな……」

地底は、地霊殿よりも暗くて危ないとこだらけだった。
足元もぐらついていて気を張りながら進む。

「大丈夫ですか？」

「はい、なんとか」

「落ちたら運が悪いと助けられないので……」

「なんでそんな危険な場所なんですかね……」

「それは彼女に聞いてください。と言うか……普段なら飛んで行きますので」

「それを言われるとそうですが……」

そうは言ったって人間には限界がある。

だからこそ気を付けて降りている。

「地霊殿が最下層だと思っていましたが……」

「ええ、まだまだありますよ」

「マジか……」

「恐らく前の私は言う必要がなかったからだと思いますけど」

「……そうでしょうね」

少なくとも地底の奥底に行くことなんて想像つかなかったしな……

「兎に角まだまだありますので向かいましょう」

「はい……」

そのまま徐々に降りていきさとりさんがもう近いと言っていた。

こう言う時こそ油断せずに……

「歩く事を禁止する」

「え？今さとりさん何か？」

慌てて確認しようとするとするが足が動かない。

「え？」

当然動かそうとしたせいでバランスを崩す。
狭い道だったこともありそのまま落下する。

「わあああああああああ!!？」

「小野寺さん!!？」

慌ててさとりさんの方へと手を伸ばすが届かない。
そのまま底へと落ちて行く。

「落ちろ」

さとりさん以外の声が聞こえそちらへと向く。

「にとりさん……?？」

色は違う目に映った少女は赤色だ。それでもにとりさんの面影が残る少女が見えた気がした。

「どうなって……」

確認しようとするもどんどん下へと落ちて行く。

そのまま確認出来ずに底まで辿り着いた。

—————

「彼に何をしたんですかみとり」

さとりの前に先程の少女が現れる。

「何ってこつちが聞きたいんだけど」

みとりと呼ばれた少女は不機嫌だった。

「死なない高さとはいえ、いきなり落とすなんてあんまりでしょう」

「一応、能力は同じ人間には使えないから暗示程度なのだけどね」

「それでもよ」

「第一、あの男を連れてきて言われたくないわ」

「あの男……彼に何か？」

「別に……」

「貴女の心を読むのを『禁止』されてて分からないのよ」

「今言ったように気にしないでいいわ」

「……一つ聞かせて」

「何？」

「彼の記憶を奪ったのは貴女？」

「奪ったって言い方は癪だけど。思い出す事を禁止はしているわ」

「どうして」

「……私が言うのはここまで。予想は付いてるけど彼が悪い」

「……記憶にないのだけどね」

みとりが関係していると言うことは彼が一度ここに来ていると言うことだ。思い出せないし……何かするような人物とも思えない。

それでもみとりは絶対に地底から出ないから……そうなのだろう。

「……はあ、出来れば解除して欲しいのだけど」

「断るわ」

「……せめて会うだけでもしてくださいね」

そのまま地下へと向かおうとする。

その直後何かが隣を通り過ぎた。

「……え？」

「やっぱり、予想通りじゃない」

みとりは溜息を吐くのであった。

「痛い……」

地の底へと強打する、大した高さは無かったがそれでも痛いものは痛い。

「さつきは何が……」

一瞬歩けなくなった気がする。足が棒のように動かなくなつて……

「まるで記憶のように禁止されて……いやまさかな」

冗談だろと思いつつ周囲を見渡す、正直見辛い。

「懐中電灯とか有れば少しは変わったんだらうけどな」

当然そんなものは存在せず、暗闇を歩くしかない。

周囲の状況もわからない絶望的な状況だ。

「さとりさん……さとりさん何処ですか？」

もしかしたら降りて来ているんじゃないかと祈りながら歩き続ける。

何度も返答が無い中呼び続けたり、頭をぶついたりしながらも探し続ける。

「さとりさん……ん？」

誰か居る？ 気配がするって言うか何か感じる。

「さとりさんですか？」

「……どうしました？」

「!？」

さとりさんの声がする。やっぱり来てくれていたんだ。

「さとりさん、どうしました？」

「いえ、問題無いです」

やっと見える位置まで来れた……少しぼやけているがさとりさんだ……

「出口が分からなくて……どっちが上ですか？」

「飛べばいいでしょう」

「飛べないですつてば、兎に角どこかから行きましょう」

まあ……最悪出口が無ければさとりさんに運んでもらうか。

「ああ、少し待って下さい」

「何かありました？」

「少し足元が……退かしてもらってもいいですか？」

「足元……？」

少し大きな石がある。たださとりさんでも動かせそうだが……
もしかして怪我したか？

「本当に、大丈夫なんですか？ 足とか何もありません？」

「ええ、なので動かしてもらえればいいです」

「……分かりました」

なんだか違和感があるが、さとりさんを困らせてもだしな……

言われた通り動かす。

「これでいいですか？」

「ああいいよ、ありがとう」

「……ん？」

今さとりさんの声じゃなかった様な……？

「それじゃあさとりさん行きましょ……さとりさん!？」

さとりさんの身体が崩れて行く。

え？一体何が起こっているんだ？

唐突な事に呆気にとられる。

「いやあ、助かったよ人間。お陰でやっと出れた」

そこにいたのはさとりさんではなく、黒い服にまるで翼の様に赤と青の羽に似たものが生えた少女だった。

t o b e c o n t i n u e d

百六十三話 事態は更に悪く～can't help
it anymore.

「さてと……この人間……名前はどうでもいいや。どうしてやろっかな」

「さとりさんは何処に？」

「んー？知らないけど？底には来てないんじゃない？」

「だったらなんでさつき……!!」

未だに状況が半ば飲み込めておらず問いただす。

「まあそれは私の能力がと……教える必要はないか」

「……」

またインチキ染みた能力があるのか……と言うかさとりさんじゃないのに俺は何かをした？

「まあお礼としてこの人間ににご褒美与えるのもやぶさかじゃないけどそんな気分じゃないしー、まずは何しようかなー」

「……出れたと言っていましたが無かあったんですか？」

「さあどうだろうねー」

「……もし封印されてたとかだったら」

「どうするんだい？」

彼女は、武器を構えながら答えを待つ。

「……………どうしましょう」

「おいおい……………」

溜息を吐きながら武器を下ろした。

だが……………実際どうすればいいのか分からない。封印なんて出来ないだろうし。

「まずはさとりさんに伝えるのが先決か」

「おっとそれは良くないねえ」

そのまま通せんぼうされる。

無理矢理突破しようとするが力負けする。

「だめだめー、人間が敵うかっての」

「……うぐっ」

ほんといくら鍛えても人間にはきつい世界だなあ……

「そーいや、まだアレは地底にはあるんだっけ？探そうかな」

「何をするつもりか分かりませんがやめた方がいいですよ」

「んー、人間が妖怪様に逆らうのかー？」

「流石に地底を滅茶苦茶にされるわけには行きませんからね……」

「ふーん、じゃあ面倒だしサクッと……いやでもコイツは恐らく地底のジョーカーかあ……」

「ジョーカー？」

「まっ使えそうな奴って事だよ」

そのまま掴まれる。暴れるが抜け出せない。

「何する気だよ……」

何というか……既に取り繕う余裕がない。

「んー、ただ地底を脱出じやつまらないよなあ……」

「知らんが」

「だからー、アンタを人質に地底の妖怪達に揺さぶりを……」

「流石に無理だろ……」

「地底そのものをどうにかするなんて不可能だろうし、何より俺一人で出来るなんてあり得ない。」

「まっアレを探すついでにやってみようって事でー」

「わーい」

「……………」

「今何か聞こえた様な……………」

「……………待ってろって話じゃ?」

「そうだったけ?」

「……………」

いや助かりはしたけど……また俺も怒られるの？

「うわつと!?!何だお前」

「あれ……えつとなんだっけ……」

「なんだつてこつちが聞いてんだよ!!」

「あつ思い出した!ご先祖様が封印してた奴だ」

「だからなんだよ、私は出て行くんだ」

「ダメだよー、悪い獣はやつつけないとー」

そのままこいしさんはスペルカードを使用する。途端に地底に花が咲き乱れる。

「え?何これ?」

「いっくよー」

相手はこいしさんの行動を理解出来ないのか戸惑いながら囲まれて行く。

そうか……もしかして封印されていた上に地底だからスペカの存在が知られていない？

「まだまだ行くよー。本能：イドの解放」

「まず……」

こいしさんのスペカに圧倒され、相手は追い詰められる。ダメだと察したのか空をとんで逃げて行った。

「あつ終わっちゃった」

「逃げて行きましたね……」

「しかしアレが復活しちゃうったかあ……確かお姉ちゃんに伝えないとダメだったかな？」

「ごめんなさい」

「まあ……復活の予兆はあったし仕方ないよ……それよりただじゃ済ませないタイプだから油断しちゃダメだよ」

「はい、気を付けます……さっきのもいつ来るか分からない……」

上から物凄い音がして慌てて振り向く。

さっきのが帰って来て……え？もう？

「やっぱり持ってたっけ」

「え？」

謎の物体に身体が引っ付く。剥がそうとしても剥がれない。

「それじゃあなー」

「ええええええええええ!!」

そのまま連れて行かれた。

「……あれ？お兄さんは？」

残された少女すらも状況を理解出来なかった。

「離せ……」

先程から地底内をフヨフヨ浮いている。

離せとは言っているものの、正直即死する高さまで行っており、先程よりは言葉が弱くなっている。

「まだ見当たらないか……ムラサ達は何処だ？」

聞き慣れない人物の話をしている……また地下に封じられている奴らか？

「アレも見当たらないしなあ」

「さつきからアレってなんのことだ？」

「ん？あー……見れば分かる」

「見れば分かるじゃなくて……」

「まっアンタが気にしなくて良いんじゃない？」

「だったら下ろしてって話だが」

「えーだって何かに使えそうだし」

「……」

当たり前だが先程と異なり誰も助けてくれる人はいない。
そのまま地底を彷徨い謎の建物に着いた。

「あっこれだこれ」

「何処だこゝ……」

建物だと思っていた。ただ……よく見ると違う。

船かこれ？ なんで船ぶねが？

そのまま謎の物体から下ろされた……いや落とされたが正しい気もする。

「おーいいるかー？」

「……いや、いるわけないだろ」

見たところ新しい様な感じはあるが、ここに誰か居るとは思えない。

「いや、ムラサがここを離れるわけないだろ？」

「知らないが……」

船の中に居続けるって無理じゃないか？

いくら妖怪とかでも何も食わずになりそうだし……無理だろ。

「んー……これか？」

何する気か分らんが……止めた方がいいよな。

怪しげな動きをしている相手に飛びかかる。

流石にこれ以上抵抗してくると思わなかったのか不意を付けた。

「ぐっお前……」

「地底で好き勝手ばっかされるかっての……」

今更だとしてもやりたいことを全てさせるわけにはいかない。

たとえ少しの時間稼ぎでも……

「落ちる……」

そのまま組み合ったままデッキへと落ちる。

落ちた時腰を強打して掴む手を離してしまう。

「痛っ……」

「全く人間の癖に……つと、あれは」

「……なんだあれ？」

地下室の方に何かが見える。

結晶の様な……まるで目に見えた封印って言った感じの。

「助かったよ人間。やっぱ連れて来て正解だった」

「待て……ぐっ……」

骨は折れてなさそうだが……それでも動けない。

手を伸ばすが届かず彼女は地下室へと降りて行く。

「さて、ムラサ。始めようか人間への叛逆を」

これから地底に、地上に何が起きるか分からない。その恐怖を抱えながら、間違いないく、自分のした事は今後後悔する事なのだろうと察した。

t o b e c o n t i n u e d

百六十四話 異変の始まり～twice incidents.
n t s .
i n c i d e

その場で見ていることしか出来なかった。

いかにも閉じ込められていたような少女が、姿を表す。

まるで水兵のような服装に、背に近いくらいの大きさを持つ錨。

そこまでは分からなくも無いが柄杓を手を持っている……何故柄杓？

「……ぬえ、抜け出してたんだ」

「なんか不満そうじゃ無い？折角出してあげたのに」

「不満では無いけど。アンタのが嚴重に閉じ込められてそうだったし、助けてくれたのも驚きしかないしね」

「まあ封印はキツかったよ。一人じゃ無理だったから協力……いや利用したし」
そう言いつつ俺の方を向く。

「協力者？」

「では無いかな」

「何でいるの？」

「攫った」

「うわあ……」

村紗と呼ばれた少女は若干引いている。

と言うかも片方……ぬえ？あの鶴か？

「流石に違うよな……」

そう願う事しか出来なかった。

「他は？」

「一輪が旧地獄街道にいるって話は聞いたよ。他は……魔界」

「魔界？」

「ん？」

聞き慣れない単語に反応してしまう。

「人間、まだ居たのか？」

「……動けないし、逃げれるなら、逃げたいがね」

と言いか居たこと知ってるだろうに。

「幻想郷って魔界もあるのか？」

「幻想郷では無いですけどね」

村紗と呼ばれた少女が反応する。

「……よく分からん」

「別にいいですよ、関係無いですし」

「関係無い？」

「魔界に人間を連れてけませんしね」

「あー村紗、行くの？」

「行くに決まってるんだろ？聖がいるんだぞ？」

「聖かあ……」

「なんで嫌そうにしてるんだよ」

「だって前も聞いたけど人間だろ？」

「人間だけど文句あるのか？」

「なんで人間なんて助けるんだよ」

「聖だからに決まってる」

「地底や人間に復讐するんだろ？」

「……一応聖の判断を仰ぐけど、少なくとも聖はそんな事を望んで無いと思うな」

「な……」

その言葉にぬえは震え始めている。

仲間割れしてるのはいい事のような……手遅れのような既にどうすべきか分かっていない。

「それじゃ、行くから」

「勝手にしろ!!」

ぬえはキレたまま船を降りて行く。

勿論俺も連れ……ええ？

「ちよつと……何で俺連れたままなんだ!？」

「え？だつて使えそうだし」

「使えそうだしじゃなくて……第一人間嫌つてるんだろ？」

「それに、お前にだつて悪い話じゃ無いぞ？」

「どう考えても既にアンタらが抜け出した時点で悪い話なんだが……」

「だけど、このままだと最悪な奴が封印解かれるぞ？」

「人間つて言われてたが……」

「魔界に封印された人間つて時点で不味いと思わない？」

「……思うが」

どう考えても不味い類の人物だろうな……
その封印を解かせるとかあつてはならない。

「だから手を組まないかと」

「……」

正直リスクの方が高い。

ただ今更退けない上、このまま放置すれば悪化する未来は見えるか。
頼れる人だつてここが分からない以上居ないし……

「分かった……が封印を止めるまでだ」

「そりゃ勿論、そこまでアンタのこと信頼してないしね」

「当然こちらにも信頼してないどころか最終的にまた封印出来ないかと考えてるし。」

兎に角、それ以上に止めなきやいけない相手もいるんだが……

「小野寺蓮司だ」

「封獣ぬえ。ただアンタの名前は覚ええないと思うけど」

「そつすか」

どう考えてもお互いが利用する気しかない。そう思えた。

—————

「……」

見たくない物を見た。確かあの船は封印していた筈だ。
出れない様にしておいた筈なのだが……何が？

「あの男だろうか？」

「小野寺さんがそんな事……」

「でも行けるとしたら彼だけだ、分かるだろうか？」

「いや、小野寺さんはここの底にいた筈じゃ……」

「ここの下には何が居たかな？」

「まさか……」

慌てて底へと降りる。小野寺さんどころか、居たはずのアイツが居ない。

「まだあの男を信じるのか？」

「……」

「記憶は確かにないさ、でも無くても同じことを目指してるんじゃないかな？」

「みとり、一つだけ聞かせてください」

「……何か分からないとはいえ、答えたくないんだけど」

「彼は……地下に何しに来たんですか？」

「分かるだろう？」

「みとり!!」

「……予想通りだよ。彼は地下で異変を起こそうとした」

「……なんでそんな事を私は覚えてないんですかね」

「……さあね、たださとりも気を付けな」

それだけ言い残してみとりは去って行つた。
それと同時に下方からこいしが来る。

「こいし……?」

「ごめんお姉ちゃん。お兄さん見た?」

「こいし、何があつたの?」

何が起きたか分からず、こいしを聞いたです。

「お兄さんが攫われちゃつた」

「攫われた!?!」

本当に、何が起きたの？理解が間に合っていない。

「地底の怪物にお兄さんが攫われちゃって……追いつかなくて……」

「……分かったわ」

こいしの話だけ聞くと鶴が悪い様な気がする。

ただし……だったら何故封印が解かれたのかって話でもある。

「……何を信じればいいのか」

さとりは困り果てていた。

「紫様、報告があります」

「異変が起きたのかしら？」

八雲の隠れ家、そこで従者の藍と紫が居た。

「ええ、船が唐突に地底から現れました」

「……」

「紫様？」

「……藍もう一度言ってちょうだい」

「確か聖輦船でしたっけ？かつてのあの船が浮上しています」

「……分かったわ」

「紫様、何があったのですか？」

「……私が把握している異変と違うわ」

「………は？」

「二つの異変が……まさか同時に起こるなんて思いもしなかったわ」

…

妖怪の山の頂上、かつてそこには何もなかった筈の場所に社が建っていた。
その社を見て、一人の女性は満足している。

「いいじゃないか、そう思うだろう？」

「はい、神奈子様に対応しいと思います」

「おう、早苗もそう言ってくれるかい」

早苗と神奈子と呼びあう二人は喜び合っている。

「神奈子がいいのはいいんだけど……早苗は良かったのかい？」

近くの石に腰掛けたもう一人の少女が尋ねる。

「良かったとは？」

「本来ならばこんな『早く』幻想郷に来るわけじゃなかっただろう？」

「ええ、構いませんよ」

「友人とかも居ただろうに……」

「友人は確かに居ましたけど……幼馴染が居なくなりましたし」

「ああ、神社でもよく話してたアイツかい？」

「はい……幻想入りした可能性はあると思いますし」

「まっ見つかるといいね」

「はい！」

この幻想郷で何が起こるか分からない。

突然消えた幼馴染もどうなったか分からない。見つかるなら探しに行くしかない。

「この幻想郷で何が起きるか。楽しみです」

そうして二つの場所で異変が始まった。

それを起こすもの、解決するもの、見てるもの……多くの人間、妖怪を巻き込んでいった。

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

く二つの異変く

百六十五話 二つの異変くsearch incident.

魔法の森。既に殆どの場所をも覚えたであろう場所に来ていた。

ぬえがいる以上、人里とかに居れないし……そこまで信用しておらず、何をしでかすか分からないからだ。

最悪魔法の森の中央くらいに置いていけばいい。

実際の所はもう一つ理由があつたのだが……

「用があつた奴いないじゃん」

「アリスさん……無事かな？」

アリスさんに会いに来たのもある。

魔法使いである彼女は、魔界について知ってるかもだし。

ただ……居なかったわけだが。

「まあ今は居ない以上気にしてもしょうがないんじゃない？」

「それはそうだが……」

「まあ今はそれよりどうするかでしょ」

「どうするか……」

どうするんだろうな……魔界の場所なんて知らないし。

「ぬえは魔界の場所って……」

「知るわけないじゃん」

「……だったらあの船も」

「いや、ムラサは魔界の行き方知ってると思うよ」

「え？ 同じなんじゃ？」

「私達は地底で会ったのが始めだからね」

「？」

その割には助けようとしてたのか。

「私が地底に忍び込んだ時、偶然封印された船を見つけて少し話合ったのさ」

「その時封印を解かなかったのか？」

「解いたけどそんな時その場に居た河童と一緒に封印されたんだよ」

「そのまま封印しとけばなあ……」

その河童にも迷惑……

「……ん、河童？」

「なんだよ」

「地底に河童？」

「おかしいか？」

「地底には居ない筈……」

「私達の時は居たけどなあ」

「だいぶ昔ですね……」

にとりさんと色の違う河童は居たが……

まあ昔の時代なんて分からないな。

「話が逸れすぎたな。兎に角その時に聖とか魔界の話は聞いた、それだけだけだな」

「成程……」

「詳しそうな奴いないか？」

「詳しそうな奴……」

居ないわけでは無いが、知っている確信は無い。

「博麗霊夢さんとか……」

「あーダメ」

「どうして？」

「一応妖怪なんだ、博麗はまずい」

「……」

もしかして霊夢さんに頼んでコイツ封印してもらってついでに解決も頼む……いやこれだけやらかして他人任せが最低だなそれ。

ただ……コイツの封印だけは頼んでもいいかもだけど。

「他は？」

「魔法使いとか……後は八雲紫とか」

「ふーん、じゃあそいつらに会いに行く？」

「ただ、八雲紫は無理だろうし……魔法使いなあ」

アリスさんは居なかった、魔理沙さんは行方不明だろうし……

「パチュリーさん……」

紅魔館に行くしかない……いや無理か……レミアは許してくれたが、パチュリーさんは激怒してると噂だった……暫くは近付けないし。

「後頼れそうな人は……」

居るには居るが冥界とかは行けないしな……知ってそうな人は大概行けない場所だらけだし……

「文さんとか居れば……」

「呼びましたか小野寺さん」

「え？」

文さんの声がしたんだが……

「上です上」

上を見ると誰も居ないが……いた木を潜り抜けて文さんが出て来た。

「お久しぶりです」

「廃洋館以来ですか」

「そうですね、一体何があったんです？」

「流石に空を飛ぶ未確認物体それを調べないわけはありません」

「そう言われると……そうですね」

確かに人目を避けたとはいえ目立ったろうしなあれ……

「それで、追いかけて見たら小野寺さんだったってわけです。しかし紅魔館に居たのは？」

「色々ありまして……」

「しかし、また違う女の子ですか……モテモテですね」

「コイツは誰だ？」

「射命丸文と言います。新聞記者です」

「新聞……？まあいいかとかく天狗か」

「そうですが、何か……？」

「魔界って分かるか？」

「魔界ですか？分かりますが……」

「だったらいい、案内しろ」

「そう言われましてもねえ……少なくとも小野寺さんが行く場所じゃありませんし……」

「そう言うのはいいんだよ。今は行かないや行けないんだよ。最悪私だけでもいいし」

「それに、こちらとしても手が足りません。こっちの事手伝って欲しいくらいですし」

「何かあったんですか？」

「異変です」

「異変……の解決のために俺達は魔界を目指すんだけど」

「はあ？異変を解決って……魔界関係ないですよ？」

「いや、船が魔界を目指していて……」

「……小野寺さん。本気ですか？」

「本気ですが何か？」

「……小野寺さん、しっかりと聞いてくださいいね」

真面目な顔つきになる。しかし何が起きたと言うのだ？

「異変が二箇所できていると思われます」

「……え？」

「いやいや、ただでさえ異変は滅多に起きないと言うのに……同時に起こるってなんだ？」

「小野寺さんの言う魔界と……妖怪の山です」

「妖怪の山で……？」

あの場所で何を起こすって言うんだ？

「頂上に……何やら神社が……」

「……霊夢さん何してるんですか？」

いやいや、博麗神社が人気無いからってダメだろ。

「霊夢さんじゃないです」

「それ以外に巫女が？」

「いるらしいですね。一度来てくれませんか？」

「いや、魔界の方も……」

「どっちの異変も気にしないとまずいと思います。まず確実な方で……」

「分かりました」

確かに……気になりはする。

ただ、妖怪の山は出禁なんだが……今回は緊急事態と言う事で許してもらおう。終わればすぐ出ますので……

「おい、魔界の方は……」

「ごめん、こっちの異変も放つては置けないし行くだけ行かせて欲しい」

「……仕方ないな。おい天狗終わったらすぐ案内しろよ」

「分かりました」

妖怪の山の頂上に神社？何が起きたんだ。

しかも建てるような命知らずなんて幻想郷にいるのか？
色々疑問に思いながら妖怪の山へと向かった。

t o b e c o n t i n u e d

百六十六話 見知らぬ少女～I miss you.

「楽になったのは助かったが、改めてこれ凄いな」

妖怪の山を登りながらボソツと呟く。

文さんでは厳しいのだが、ぬえは何故か俺を運べるお陰で山を登らずにすんだ。
どうしてもこの山は苦勞するし助かった……

「ほら、頂上ですよ」

「……何が起きているんだ？」

頂上に近い筈なのに声がする。

ここら辺には誰も近付かなかった筈なのに。

参拝客が居てマジで神社が建っている可能性がある？

「疑ってるわけではない……うーん」

真実だとは思っているが、見ないと思う感情もある。

「着けば分かりますよ」

「そうですね……」

「何騒いでるんだよ」

ぬえが少しだけ不満そうにしているが気にしない。と言うか分からないだろうし……

考えても見ない限り意味が無いと考えながら頂上へと連れて行かれる。

「……え？」

確かに規模が大きいとは聞いていた……けどここまでか？
博麗神社以上な気も……いや、やめておこう。

「凄いですよね」

「……神様、どんな神様を祀ってるんですかね？」

「そこはまだ分かりませんね……私達も警戒してるので」

「警戒ですか？」

「ええ、妖怪達も何が起きてるか分かってないので」

「分かってない？」

「今回、天魔様が独自に決めたようで……皆も周囲までは来ますが神社へと入り込みま

せん。一応妖怪でもありますし」

「……だからさつき声が」

参拝客じゃなくて周囲を見張ってた者達か……

「だったら私達も来た意味無いんじゃないの？私だって妖怪だぞ？」

「だって、用があるの小野寺さんにでしたし」

「おいおいおい、あんまりじゃ無いか」

「そもそも誰ですかってレベルですしね」

「こちらを見るが……答え辛い。」

「まあいいです。小野寺さん行きましようか」

「俺行つていいんですかね？」

「むしろ小野寺さんの力が必要なんですけどね」

「……怖いからこそつて利用されても」

「それだけじゃないんですよね」

「まだ何か？」

「人間がいるらしいです」

「……え？」

「いや……妖怪の山だよな？」

「正直、天魔様の考えが読めません。何故人間が、神がいるのか」

「……神様も居たのか」

幻想郷では良くあるのかもしれないけど……まさか神様自体も居たのか。

「頼みました」

「え？俺一人？」

「流石に行きますよ」

「良かった」

神社の中に入って行く。何故かそこは懐かしい気がした……

「あつ参拝客の方ですか？」

緑髪の女性……確かに人間っぽいな……
しかし何故妖怪の山に？

「え？」

「……どうしました？」

いきなり驚いた表情を見せる。

一体何が……？

「小野寺……君？」

「……え？」

何故ここで呼ばれた？

何も分からなかった。

「小野寺君！やっぱり小野寺君ですよね！」

「えっと……」

正直理解が出来ずに戸惑う。

目の前の少女は一体？

「忘れてしまったのですか？」

「いや……」

思い出そうとすると頭が痛い……

一体……本当に何が？

「早苗です。東風谷早苗です。覚えませんか？」

「……ごめん。恐らくは一部記憶が欠けてるんだ」

確かに初めて会った気はしないし時折見たあの子に似ている気がする……ただ詳しくは思い出せない。

「そうですか……それは現状はなんとも言えませんね……」

親身になって話を聞いてくれる。

妖怪の山を拠点にするくらいだし、それも罫かとも考えるが何故か信じたくなる。

「とりあえずはまだ私達は幻想郷の事すら分かっていませんし、今すぐにとは言いませんが……」

「それでも有難いです」

正直、仲間が増えるだけでも有難い。
あまり良いものではないと言われたが……諦めきれない。

「それで、今回は守矢神社に何の御用ですか？」

「それは、なんで急にこの神社が建ったかですね」

文さんが話に割り込んでくる。

元々そう言う予定だったしな。

「本来であれば貴女達の仲も気になりますが……今はそれどころではありませんので」

「神社が建った理由ですか……」

早苗と名乗った少女は少し悩みながら……

「すみません、神奈子様聞いてもらっても良いですか？」

「それは構いませんが、聞いていないので？」

「ええ。幻想郷に行くときだけ聞きましたので」

「それで良いんですね……」

「早苗は良い子だからね。理由なんて聞かないのさ」

「あつ神奈子様」

鳥居の奥から誰かが出て来る。

一見すると年上の女性に見えたが……威厳というか威圧と言うか……人間離れした何かを感じた。

麓の神様達とは違う、この感じもまた神様なのだろうと。

「ふむ、妖怪と……懐かしい少年が居たものだ」

「……」

そしてやはり知られていると、正直分からなくなってきた。

「神奈子様、小野寺君は記憶喪失だそうです」

「おや……そうだったか。済まないねえ」

「いえ……大丈夫です」

「しかしそうか、記憶がなかったからしてなかったのか」

「？」

「いつも通り再会のキスの一つでもしてると思ったんだがね」

「!？」

なんて事をしてるんだ俺……

そんな羨ましい？ いや訳の分からない？……兎に角そんな事してたのか？

「神奈子様……そんな」

「なんで早苗の方が先にテンパっちゃうのさ面白く無いねえ」

「??？」

なんかもう分からなくなってきた。

「あの時のアンタは叩けば伸びるようなタイプだったんだけどねえ……こりやなんかあったようだね」

完全に置いてかれています。はい。

「結局今のは？」

「冗談だけど？」

「……大丈夫です早苗さん？」

「はい、なんとか……」

この神様もまた……自由奔放だなあ。

「つてラブコメは良いんですよ。八坂神奈子さん。何故妖怪の山に神社が？」

「ああ、そう言えばそういう話だったね」

「答えてください」

「嫌だと言ったら？」

「は？」

「このトップと話は付いてるよ。だから言う必要はないね」

「それで納得しろとでも？」

「するしか無いだろう？」

「うぐぐ……」

答えられずに悔しい顔をしている。

ただ、トップがって言われれば逆らえないよなあ……

「でしたら独自に調べるまでです。小野寺さんも」

「いえ……こつちばかり気にかけてもらえません」

向こうが手遅れになってしまつては困る。

明らかに復活させてはならぬそうなのに。

「何かあつたんですか？」

「異変が、起きてまして」

「異変？」

「放つておくと大変な事ですよ。ちなみに妖怪の山に唐突に生えた貴女達も異変です
か
ら
ね
?」

「放つておくと大変ねえ……」

神奈子……様?は少し悩んだ後。

「よし早苗、手伝って来な」

「え？良いんですか？」

「ああ。私達は新参だし少しでも良い印象持つて貰つて信仰集めたいからねえ」

「なるほど、分かりました！」

本当にさつきから置いて行かれていた気がする。

それに手伝つて貰えるのは有難いが……

「申し訳ないけど、普通の人間が異変解決は無理だし危険だ。俺だつて出来ないし」

ただの少女であろう彼女を巻き込むのは危険だと思つた。

しかし彼女は……

「大丈夫です、なんとたつて私もただの最強の人間ですから」

と記憶には無いいつものように、覚えてない筈なのに……
その言葉に納得して安堵したのだった。

t o b e c o n t i n u e d

百六十七話 邪魔をする者～strict and friendly.

「博麗神社の裏の洞窟ですか……」

勿論そんな物があつた事は知らない。

更に山といった以上は広いだろうし……

ただ文さんがここで嘘を吐く意味は無いしなあ……

「はい。そこに魔界へ行ける方法があります」

「凄いきたくない」

ぬえは否定気味だが、行くしか残されていない。

「そうは言っても他に方法はないんだろ？」

「でもさーでもさー……巫女怖くない？」

「あの一……私も巫女なのですが……」

早苗さんが悲しそうな顔で告げる。

「でも、博麗の巫女じゃないじゃん」

「博麗の巫女ってそれ程なんですか……？」

「妖怪退治の巫女。妖怪にとつちやこれ程に怖い相手はいないね……今の巫女は知らない
（まじり）」

「ぬえの時代にも居たのか……？」

「さあね。私は幻想郷出身じゃないし。ただ幻想郷に流れ着いた時にはもう居たよ。おつかないのが」

「おつかないって……まあ確かに分からなくもないような」

「それじゃあ幻想郷で信仰を得るには難しいんですかね……」

「いや、そうでもないですね」

「射命丸さん……でしたっけ？ どう言う事ですか？」

「博麗神社は信仰をそこまで集めていませんので」

「……え？」

「……そう言われるとそうですね」

明らかに信仰を集めて無いってのは見て分かる。

と言うか……それ程に由緒ある神社なのに何故か人が居なかつたな……

「人間ですら少ないのに、妖怪なんでもつての外ですし」

「ああ……退治の対象ですもんね」

「えっと……それじゃ妖怪の信仰を集めれば良いのでしょうか？」

「妖怪の山ですし十分にありかと」

「分かりました。後で神奈子様にご相談します」

「そうしてくださいな。こちらとしましても山に建つた以上は妖怪に都合が良い方がいいのだよ」

「はい！」

「んじや、後は元気がいい奴らに……」

「逃がさんよ」

「やる気がー……」

文さんと別れつつ、テンションが下がるぬえを引つ張りながら博麗神社へと向かった……のだが。

「封獣ぬえか……ムラサが言っていた」

「ナズーリンさん？」

「おや？私を知っているのかい？」

「通してください」

「悪いがそれは出来ないね。ご主人が目覚めたんだ」

「それは良かったですね……」

「一体……どう言う理由なんだ？」

「……それでご主人とムラサが言うには封獣ぬえを通すなど」

「……ぬえじゃないよー」

「残念だが特徴も聞いてるんだ」

「そんなー」

「……」

正直ナズーリンさんがあの船と関わりあるなんて予想外なんだが……
どうするべきか……戦闘を出来れば避けたいし逃げるのはもっと避けたい。

「さて、勝たせてもらおうか」

ナズーリンさんがスペカを用意する。

まずい、こちらもスペカを用意しないと……

「あれって地下の小娘が持ってた奴か？」

「こいしさんの事ならそうですが……」

「結局あれって何だったんだ？」

「さつき話した気がするんですが……」

「まああまり必要そうに思わなかったしな……」

「いや……絶対必要だと思えますが……」

「そうなんです？」

「……そう言えば早苗さんはそりゃ知らないですよね」

……文さんに残ってもらわうべきだったなあ。

「スペカバトルが出来ないだど？」

「なんとというかそうですネはい……」

「この場合ってどうすればいいんだろうな……」

「……仕方ない。教えよう」

「いいんですか？」

「いいも何も……スペカが使えなければどうしようもないだろう……」

「確かにそうですね……」

「この世界はあらゆる物事をスペカ勝負で決めてた筈だし……覚えなきやダメな事は事実か……」

「私も時間がないんだ……すぐに覚えてくれよ」

「えー」

「えーじゃない、本来であればお前にまでは教えたくないんだからな」

「分かったっての」

ぬえも洩々従う。

しかし……本当にこれでいいんだろうか？

「つまりはこう言うわけだ。分かったか？」

「まあ一応ね。なんで人間が作ったこんな面倒な事に従わなきゃならないんだか」

「必要だからだよ。全く大妖怪言う癖に常識は無いんだな」

「獣が吠えるな」

「教えてもらったろうに……」

「うっさい、私は天才だから元から心配なかったんだよ」

「……早苗さんは？」

「無視するなー！」

後ろから何か聞こえるが気にしない。

「そうですね……私らしいスペカは出来たと思います」

「それなら良かったですが」

「これで、幻想郷でもなんとかやっていけそうです。ありがとうございます！」

「ああ。そう言ってくれるなら嬉しい限りさ」

「それじゃあ、この御恩はいつか返しますので今度守矢神社に寄ってください」

「何処だい？」

「妖怪の山の頂上です。すぐには来れないでしょうけど、いずれは舗装とかがしますので」

「そっか、楽しみにしてるよ」

「ええ、楽しみにしてください」

そのまま前を通り過ぎて行く……あれ？

……いいのだろうか？まあいいか。

「ふーん」

ぬえも察したようで着いてくる。

そのまま通り抜けていった。

「中々教え甲斐のある子だったな……ぬえは正直教えたくなかったが……覚える気が

あつただけまだマシか」

これで安心してスペカ勝負を……

「……ん？」

後ろを振り向く。既に彼らはいない。

「やられた……」

教えるだけ教えて逃げられた最悪なパターンだ。
後悔しつつ追えるだけ追う事に決めたのだった。
一行は博麗神社へとどんどん進む。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百六十八話 問題は増え続けく dangerous g

a f f e .

「博麗神社……ここがですか？」

「はい、此処です」

「難からなんとか逃げ出し、博麗神社へと辿り着く。」

「大きいですね」

「……守矢神社の方が大きいと思いますが」

「そうでは無くて……」

「妖気……は逆だな気とかオーラみたいなものだろ？」

「ああそう。そんな感じですよ！」

「オーラ？神様が凄いいみたいなの？」

「いや、神様むしろいんの？つてくらい感じないぞ」

「ええ……」

本当にこの神社大丈夫なのか？

「だからこそ、守護してる巫女の力が顕著に分かります」

「あー……確かに霊夢さん強いですし」

「それだけでも無いんですけどね」

「そうなんですか？」

「色々……負けていますね。頑張らないと」

「来たばかりですし、どうとでもなると思いますが……」

「そうですね、守矢の巫女としていずれ超えてみせます！」

「何か聞き慣れない単語が聞こえたんだけど？」

「あつ霊夢さん」

「……参拝客かしら？」

「いえ、違います」

そう言うと少しだけ俯いた後、話を続ける。

「……巫女志望？生憎ウチは募集してないけど？」

「巫女志望でも無いですね……」

「だったら何よ？忙しいのよ」

「魔界に用がありました……」

「……誰から聞いたの？」

先程までの面倒臭そうな表情は変わり真面目になる。

魔界の存在すら知らなかったし……そりゃ秘密にされてるよな。

「……地底に封印されてた妖怪達が言っていました」

流石に文さんの名前は出さずに答える。

嘘は……言つてないしな。

「地底の妖怪……なんでそんな事は今はいいか。何があつたの？」

「……それは」

「そこからは私が説明しますよ」

「えっと人間……にしては何かおかしいような」

……誰だこの人？

見たことあるような……無いような。

「ぬえさんですよ」

「…………え？」

早苗さんからそう告げられたが、ぬえさん!?
ただの女の子にしか見えないんだけど……

「…………この前の異変ってあつたじゃ無いですか？」

「…………確か結界異変だったっけ？」

「そうそうそれです」

誰だこいつ、ぬえのわけないだろ……

「それで、その異変がどうだったの？」

「その異変で世間が大騒ぎになったじゃないですか」

「まあそうね、六十年周期の大異変らしいもの」

「……そんなやばい異変だったのか？」

「何か言ったかしら？」

「いえ……別に」

「……まあいいわ。それで、その異変がどうしたのよ」

「簡単に言うと。地上でそれだけ問題になった異変と言う事で、地底もかなりの問題になったんですよ……それこそ封印に目が行かないくらいに」

「……つまりは異変が起きて地底が怠慢したと」

「ええそ……いやいや。地底もやる事はやりました」

今肯定しかけたよな……俺の方見て慌てて訂正したけど。

「ふーん。それで地底の封印が解けたのが原因と」

「そいつらが魔界で封印されている奴の封印を解こうとしてると聞いて……行かないとって」

「それは確かにまずいわね……」

「そう言う事です。だから止めに行かないとって……」

「言いたいことは分かった。ただなんでただの人間がどうにかしようとしたの？」

「だってどうすればいいの分からなくて……」

泣きながら彼女は訴える。

いやだから誰だよこいつ……

「はあ……ちよつと待つてなさい」

そう言うのと霊夢さんは神社の中へと戻って行く。
それを見て少女はほつと一息つく。

「はー……めんどくせ」

「ぬえだ……」

「なんだよ」

「いや……らしく無いなと」

「勝てると思うが、わざわざ戦う意味も無いしな」

「意外と消極的なんだな」

「だからこそ鶴は平安で名を轟かせたんだよ」

「それは……なるほど」

確かに鶴つて妖怪の話は聞いた事あるが、名前だけだと思っていた……

「ただ私のお陰でどうにかなりそうだろ？」

「そうか？」

「だってあの巫女もお涙頂戴で協力気味だ。楽しんでムラサ達を止められるだろ」

「ならいいが……何もなければいいな」

「フラグ建てんな」

ぬえに怒られていると霊夢さんが帰って来た。
本当に戦闘準備しているようだ。

「……………これでよしと」

「霊夢さん……………それは？」

予想は既に付いているが念の為聞いておく。

これで違うとかだったら困るし……………

「魔界に行くわ。流石にそれは私がどうにかしないとイケないから」

「じゃあ俺達も」

「邪魔よ。私だけでいいわ」

「……………分かりました」

流石に霊夢さんなら大丈夫だよな……

そう信じるしか無いな。

「……でも神奈子様にもせずに帰ったと言うのも」

「……そう言えばそうね」

「どうしました？ 霊夢さん」

「アンタよアンタ。なんでそんな服着てるの？」

「それは巫女だからですが……」

「巫女？ 博麗神社では募集してないって言ったけど」

「申し遅れました。私は守矢神社で風祝をしています 東風谷早苗と申します」

「風祝……巫女ねそれで守矢神社……」

「新しく妖怪の山の頂上に建ったんです」

「ちよつ早苗さん……」

それは絶対言ったらまずい奴だって……

「へえ……妖怪の山にね」

「あの……霊夢さん」

「それって異変よね？」

「異変は……魔界で……」

「妖怪の山で異変ね。博麗神社以外の神社が出来たと……」

「これは……まずいやつだ……」

「予定変更。妖怪の山に向かうわ」

「ちよつと待つてくださいってば……」

「待たない」

「そう言いながら妖怪の山に向けて飛んで行く。」

「え？え？」

「早苗さん、急いで守矢神社に戻りますよ!!」

「ちよつとどう言う事だ人間」

「それどころじゃ無いんだよ。流石にこれはまずいって」

「アレと戦う気か？」

「分からないけど……急がないと」

「ああもう分かった。終わったたらすぐ行くかな!!」

暴走してしまった霊夢さんを放置出来ない……止めれるか分からなくても流石に放置は出来ない。

二つの異変……どちらも放置出来ない状況に少し辛さを感じた。
絶対に両方とも……惨事を起こさせない。

t o b e c o n t i n u e d

百六十九話 魔理沙は何処に?~around
village.

「……魔界へと向かった筈では？」

「それどころじゃ無くなったので……」

妖怪の山へと向かう途中、空を飛んでいた文さんと再び合流した。

「まあ……そのままで行くのも厳しいでしょうし」

「そういう問題では無くて……」

「……何かお困りなことがおありで？」

「霊夢さんにバレました……」

「おや？それなら勝手にやってくれるからいい事なのでは？」

「……守矢神社の事です」

「はあ!？」

驚いた表情をする。そりやそうか……そうだな。

「何してるんですか!!まずいつてレベルじゃないですよ」

「それなんですよね……」

「ああもう……急いで山の皆へと伝えに行きます」

「今からじゃ間に合わないです……」

　靈夢さんに結局追い付けていないし……今話してるだけでもだいぶ……

「見くびらないで欲しいですね幻想郷最速を」

　確かに速いが……ただ報告までもとなるとな……

「それに、山には神様達もいますしね」

「神奈子様達ですか?」

「いや、それ以外にも人間が山に入るのを止めてくれる神様が居ますよ」

「ああ……あの姉妹とか」

　山に入る時に止められた事を思い出す。

「ですので小野寺さん」

「はい。急いで向かって……」

「いえ、魔理沙さんを探して来てくれませんか？」

「魔理沙さんですか？」

「あ、分かりませんか？」

「いえ、魔理沙さんは分かりませんが……」

「でしたらお願いします。彼女を止められるのは魔理沙さんしか居ないので」

「アリスさんとかは」

「……今幻想郷に居ないので」

「え？」

「それではお願いします！」

「あつ」

気になる事を残しつつ行ってしまった。

一先ず止めるには魔理沙さんか。

「おいおい、また違う場所行くのか？」

「悪いけど、あの巫女を止めるためには必要なんで」

「人間に協力を頼むのなんて嫌だけどな」

「……ただこのままだとあの巫女に妖怪がやられますよ?」

「うぐぐ……分かったっての」

「それで小野寺さん。魔理沙さんって方は何処に?」

「分かりません……」

「え?」

「本当に気まぐれですから」

アリスさんの家を訪れるついでに魔理沙さんの家へも行ったが居なかった。
手当たり次第探すしかないか?

「ああもういつそぬえが能力で魔理沙さんになってくれたら……」

「死にたくないっての」

「殺しはしないだろうけど痛い目は見るかあ」

「知ってそうな場所回りましょ。時間もあるわけではないですし」

「そうですね」

守矢神社も妖怪の山もどうなるか分かったもんじやない。

急いで探さないと足を早めた。

「なあ、効率悪くないか？」

「二人とも地上知らないし仕方ないってかどうしようもない」

ぬえをなんとか説得し人里で聞き込みを続ける。

ただ結構な広さもあるし、明らかに手分けしては厳しいと判断した。

「そんなん変わりまくってる地上が悪い」

「何百年間変わらない方が怖いが」

当然ぬえが知る地上の面影は全くと言っていいほど残っていない。

「しかし皆知らないとなると他は……」

寺子屋へと辿り着く。

居なかつたとしても手掛かりが欲しいところだが。

全滅は勘弁して欲しい。

「あの、すみません」

「なんだ?今は閉まってる時間だぞ」

中から慧音さんが顔を覗かせる。

「こんにちわ。聞きたい事がありました」

「ああそう言う事だったか。授業を受けに来たと思つて驚いたぞ」

「違います違います」

「そうか……それで何を聞きたい?」

「魔理沙さんが何処にいるか分かりますか?」

「魔理沙か……生憎場所は分からないな……」

「そうですよね」

人里で聞いて分からない以上、薄い望みでしか無かった。

「だがそうだな……居るかもしれない場所なら分かる」

「本当ですか!？」

「そんな慌てるな……香霖堂って分かるか？」

「行ったことはありません」

「そこに居るかもしれないぞ、後は紅魔館」

「あー……」

特に紅魔館の方は納得出来た……よく来てたもんな。

「これでいいか?今少し忙しくてな」

「十分です、有難うございました!」

そのまま二人を連れて香霖堂へと向かう。

居てくれればいいが……そこばかりは祈るしかない。

「全く……騒がしい奴らも居たものだ」

「慧音、誰か来てたの?」

「ああ“一輪”お客様が来てただけだ」

「ふーん、頼られているのね」

「そこまでじゃないさ、それになんだかんだ一輪も頼られてるじゃないか」

「私なんてまだまだよ。聖に比べればね」

「聖か……確か仲間が救出に向かっていたんだったな」

「ええそうよ。私は私でやる事をやらないとね」

「人里で住める場所探しだったな……私も出来るだけ手伝わせてもらおうぞ」

「助かるわ。まだまだ私も慣れてないからさ」

「妖怪と人間の友好関係を築くって言うなら喜んで協力するさ」

「一輪。ナズーリンも帰って来たぞ」

「了解雲山。今向かうわ」

地の底に封印されていた妖怪達も段々と地上へと根付き始めた。

そして皆聖を救うため動き始めたのだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百七十話 異変解決の少女くstart negoti

ations.

「失礼します」

香霖堂へと入る。

その途端怒声が聞こえて来る。

「あり得なくねえか！おう聞いてんのか!？」

「やれやれ……相変わらず君は無茶振りしかないな」

「どうやら揉めているのか？」

「あの……」

「魔理沙、お客様だ。帰ってくれ」

「これで帰れるかっての」

「何があつたんです？」

「あん？まあいいかちよつとトラブルがあつたんだよ」

「トラブル？」

「魔導書を仕入れていなかっただけだ」

「ほんとにさ……頼んだじゃないか」

「……それはちゃんと代金を払ってからにしてくれないか？」

「だって借りてるだけだしな」

「……だから用意してないんだ」

「なんでだよ！」

「誰も買いもしないものを仕入れたって仕方ないだろう？」

「ぐぬぬ……」

どうしよう……どう見ても霖之助さんが正しいようにしか見えない。

「なっ分かるだろ？」

「……答えかねます」

「それが賢明だろうね。さてお客様何か御用は？」

「ああすみません。魔理沙さんに用があつてきました」

「私か？」

「邪魔なら奥に行くが？」

「いや、霖之助さんも居ていただいて大丈夫です。むしろ居ていただいた方がいいかもしれないですし」

「そうかい。それなら了解だ」

「で？何の用だ？」

「力を貸して欲しくてお願いに来ました」

「何かあったか？」

「異変が起きまして」

「……それは私よりも霊夢に頼んだ方がいいと思うが」

「それで問題が起きたんです」

「問題だと？」

「……少しいいかい？その前に異変が起きてるなんて初耳なんだが？」

霖之助さんが口を挟む。

そういえば今回の異変は神社はともかく船の方も目撃情報が無いな。

「今、異変が二つ起きています」

「二つ……あり得るのかい？」

「実際に起きています」

「信じ難いが……霊夢が片方に向かって対処し切れないと言うことか？」

「そうでは無いんです」

「だったらなんだ？」

「解決して欲しい異変と違う異変に向かいます……」

「んー？話が読めないぞ？」

「異変って言われている片方が私達なんです」

早苗さんが説明を始める。

「ん？あんた誰だ？いやこの男も誰だか分からないけど」

「東風谷早苗と申します。妖怪の山の頂上の守矢神社の風祝です」

「あそこの頂上……？人が住める場所じゃ無いだろ」

「それが何故か許されたらしくて……幻想入りして今そこに住んでいます」

「それだけか？」

「それだけです」

「何かしたりとかは？」

「何をしろって言うんですか？そもそも幻想郷に来たばかりで異変とかも理解して無いです」

「本当にこれ異変……異変ではあるか……でも……あー」

魔理沙さんも理解してくれたようだ。

「あの馬鹿……さっきの言い方的にもう一つの異変は不味いんだよね？」

「はい。魔界に封印された人間を復活させようとしています」

「魔界に……？」

「何したか分かってはいませんが、魔界に封じられる程の人間って事は」

「不味いな……了解した。ならそれを解決すればいいか？」

「いえ、霊夢さんを止めてもらってもいいでしょうか？」

「なんでだ？危険なんだろう？」

「だからこそ霊夢さんの力も借りたいですし……何より無害であろう守矢の皆さんのピ
ンチですし」

「ん？お前は守矢の人間じゃ無いのか？」

「違いますね。縁あって手伝う事になりましたが」

「ふーん。まあそこを気にしても仕方ないか……で、霊夢と戦えか」

「やっぱり厳しいですか？」

「何というか……やる気も出ないのもある」

「え？」

「異変解決ならまあ仕方ないかとは思うが。一応異変を解決しようとしてる霊夢に歯向かうのもなあ……」

「そこをなんとか」

「うーん」

「えーおほん」

霖之助さんが咳払いをする。

「大丈夫ですか？」

「君、注文でよかったね？」

「え？何を……」

「魔導書の注文承ったよ」

「え……?」

魔導書なんて買っても読めない……あー理解した。

「注文お願いしてもいいですか」

「ああ了解した。良かったじゃないか魔理沙。魔導書がこの店に入るようだ」

「本当か!？」

「さあね。彼が注文を続けるならだが」

「何が望みだ?」

目を輝かせながら尋ねてくる。

「先程のお願いを……助けて欲しいですね」

「成程了解！ 霊夢をボコボコにすればいいんだろ？」

「そこまでしろとは言いませんが……」

「大丈夫大丈夫、普段の鬱憤を晴らしたいのもあるしな」

ああ……仲良いとは思ってたけど因縁もやっぱあるのね。

「さて、良かったでいいかな？」

「霖之助さんありがとうございました」

「いや。この程度で役に立てたならこちらとしても嬉しい限りだ」

そのまま魔理沙さんを連れて妖怪の山へと向かう。

間に合ったかは分からない。ただ出来るだけ早く呼べたから何とかなつて欲しい。そう思えばかりだった。

t o b e c o n t i n u e d

百七十一話 山でのトラブル～troublesome

gods.

「よく考えりゃ妖怪の山なんて登った事ないな」

魔理沙さんはそう言うが人間は普段この山に登れないし仕方ないだろうなどは。

「ほんとなんでお前は妖怪の山の事こんなに知ってるんだよ……」

「少し縁があつたためですけどね……」

「まあ気にしても仕方ねえか」

そう話をしながら登ろうとすると……

「ちよつとあんた達」

「げ……神様達じゃねえか。なんでこんな所にいるんだよ」

「げって何よ！第一あんた達がいる方がなんでって話なんだけど!!」

そう言いつつ道を遮って来たのは秋神様達だ。

会ったのも久々な気がする。

「お前達の相手なんてしてる暇ないんだっての！私は急がなきゃいけないんだ」

「させるわけ無いでしょ！人間が妖怪の山に登るなんてどれだけ無謀だと思ってるのよ」

確かに……魔理沙さんだから大丈夫だと思うが他だと危険だよな。

そう言う面でも優しい神様達なんだろうとは思うけど。

「第一お前らボロボロじゃないか。それで良く止めるとか言い出せたな」

「さつき山に巫女が来たのよ。災害つたらありやしないわ」

「疑う気は途中から失せてたがやっぱり霊夢来てたんだな」

「来てたかですって？やっぱりあんたも暴れる気じゃ無いの？」

「違うっての。霊夢を止めに来たんだよ」

「そんなの信用出来るかあ!!」

「そう言いつつ妹の方が暴れ出そうとする。」

「確かに魔理沙さん信用出来ないし仕方ないよね。」

「ちよつと待てよ。こいつら見てもなんとも思わないのか？」

魔理沙さんは此方を向いて話す。

「ん？」

俺らがどうかしたのか？

何かした……わけじゃ無いよな？

「え？ってなんだよ。お前らこの山の関係者なんだろ？」

「あー……」

確かに早苗さんはそうなんだが……

「そうですね。私は守矢神社の巫女ですが……」

「守矢？何よそれ」

「この妖怪の山の頂上に在るのですが……」

「はあ？知らないわよ」

「そんな気はしました……」

やっぱり知らないよなあ守矢知名度今から上げていく立場だし。

「おい……話が違うような……」

「守矢神社まだ出来たばかりですしそんな知られてませんって！」

「そっか……じゃあどうすつか……」

「去れー早く去れー」

がるると言いたげに威嚇して来て追い出そうとして来る。帰る時間はないし強行突破しかないのか？

「いやあ、大変なことになってますねえ」

「文さん？ いい所に」

「げ……天狗は何の用よ？」

「げとは随分ですね。呼んだ救援がいつまでも来なくて困っていたんですよ」

「それはすみません……魔理沙さん探すのに時間がかかってしまって」

「別にいいです。今から急げばいいんですから」

秋姉妹の方を睨みつけながら話す。

「何よ。私達が間違ってるってわけ？」

「間違ってるとは言いませんが、今は邪魔しないでください」

「ぐぬぬ……」

「山の事は私達の事情ですから」

「分かったわよ好きにすればいいじゃ無い!!」

「ありがとうございます。では」

「普段の貴女らしくなくて気持ち悪いわね」

「酷い言われようです……」

「……んじゃ行くぞいいのか？」

「ふんっ、精々痛い目に遭う事ね」

負け惜しみを言いつつ秋姉妹は去って行った。

なんで負け惜しみしてんだろう？

「それじゃあ行くか。天狗にこれ以上どやさされてもだしなあ」

「しかし文さん本当にいいタイミング……もしかして始めから見えました？」

「ええ」

「そうですね……流石に最初から見てる……え？」

今なんて言った？

「だから最初から見てたっつの当然だろ？」

「え？文さん？」

ちよつと待て落ち着け。これは本当に文さんじゃな……

「ぶくく……しつかし面白いもんだな。大層な神様の癖に天狗かどうか見分けられないなんてよ」

「ぬえ？」

「ああそうだ。いい出来だっただろう？」

「そうか……助かった」

本当に文さんが来ていたわけじゃ無いのか。しかし本当に今回は助けられたな。

「なあ蓮司だっけ？」

「そうだけど」

急にどうしたんだ？

「予想以上にお前といると面白いな。まさか自称神様までもを騙す日なんて来ると思わなかったしな」

「自称ってか本当の神だけどな」

「そこはどうでもいいけどさ。どうせ強くは無いらだろうし」

「強くは……無いかな」

豊穰の神様達とかだし……戦闘力あっても困る。

「それで次は誰を騙すんだ？大妖怪か？あいつら以上の神様か？」

「別に騙したりとかするわけじゃ無いよ」

「そう思ったけどな。お前と居ると色んな奴に悪戯出来そうだなと思わされたんだよ」

「んな無茶苦茶な」

「妖怪つてのは時折無茶苦茶するからこそ妖怪なんだよ」

「いや、意味分からないが？」

「気に入ったから安心しろってこった」

「本当にいい事なのかそれ？」

「どうしても困るなら私が退治してもいいぞー？」

「それもいいかもしれない……」

「おいやメロオ!?!」

「……皆様、そろそろ向かいませんか?」

「そうですね」

早苗さんが哑然としている中そろそろ向かわないとまずいと思い再び山を登り始めた。

大妖怪であるはずの鶴に気に入られる。それはどうなんだろうなと思いつながら。

t o b e c o n t i n u e d

百七十二話 河童、完成させる hisou | ten
soku.

「……騒がしいな。こつちからだ」

やたらと騒がしい音に気付きそちらへと向かって行く。
木の影から何かが見えた気がした。

「なんだあれ……」

魔理沙さんが驚いているが俺には見覚えがある。

「偽想天則……」

間違いなくアレはにとりさんと一緒に作った偽想天則だ……何故ここに？

「いっけー……！」

「にとりさん……!?!」

にとりさんの声と共に偽想天則が動き出している。
なんで動いているんだ……？

「わああああああ」

「早苗さん……?」

「凄……凄くないですか？」

「え？」

「幻想郷でこれ程の物が見れるとは……まるでアニメや特撮のようなマジ物が見れるなんて……」

「あの……早苗さん？」

「小野寺君！ロボットですよロボット！しかも本物の巨大ロボです!!」

「はっはあ……」

目を輝かせている早苗さんに呆気を取られる。

そうか、こう言うの好きだったんだ。

「と言うかブーツとしてる暇はねえぞ。霊夢が戦ってるしな」

「え？」

よく見たらにとりさんが戦っている相手は霊夢さんだ。

と言う事は追いついたんだ。

「構えな皆。霊夢の邪魔してるアレは流石にまずいしどうにかしなきゃならねえ」

「え？」

「え？つてなんだよ」

「あんなかつこいい物壊すんですか？」

「何がかつこいいのか分からんが敵だろうし壊すぞ」

「魔理沙さん。敵じゃありません」

「そうなのか？」

「ええ、にとりさんですし」

「暴走してるように見えるんだが」

「……多分大丈夫です」

そう信じるとしよう。

「おい、終わりそうだぞ」

「がんばれええええロボットおおおお!!」

早苗さんの全力で応援を受けてか渾身のストレートが霊夢さんに入った……大丈夫なのか？

「うおおお決まったああああ」

「早苗さん落ち着いて……」

「落ち着いていられますか！行きましょう！」

「待つて……」

駆けて行く早苗さんを追いかけながら偽装天則の元へとついた。

「なんだお前達？お前達も侵入者か？」

ロボットに乗りながらにとりさんが返答する。

「いえ！そんな事はありません！その立派なロボットを見せてくれないかなって」

「お？アンタもこのロボットの事が分かるの？」

「ええ！凄い事が分かりますし見てみたいですね」

「ふふん、いいだろういいだろう」

「乗り手さん、ロボットをもっと見せてくれませんか？」

「うーん、ちよつときついな」

「なんでですか!?!」

「ちよつと私の独断では決められなくてな」

「だったら誰に聞けばいいんですか？」

「蓮司ってんだが。今何処にいるか分からないし無理だろうな」

「え？小野寺君」

「なんだ、知ってるのか？」

「と言うか今居ますし」

「……………ふむ」

その言葉と共にロボットから降りて来た。
そのままこちらへと向かって来る。

「無事だったんだな」

「無事とは言い難いですが……………」

現にこれの封印といたし……………

「まあ話したい事は色々あるが……………まずはどうにかしないと……………」

倒れている霊夢さんを見ながら言う。

確かに放置は出来ないか……

「あーなんだ……霊夢はこつちでどうかしておくからいいよ」

「いいんですか？」

「元からそう言う話だしな。知り合いなら話してこいよ」

「有難うございます」

こちらからもにとりさんに聞きたい事があつたしちしようど良かった。

早苗さんが偽想天則に入ってしまったのを見送りながら話へと入った。

「こつちからも聞きたい事あるけど、まず蓮司からでいいよ」

「では失礼して……なんで完成してるんです？」

「ん？完成って？」

「あのロボットですよ」

「ああ非想天則か」

「非想天則？偽想天則では？」

「偽想天則は途中って言っただろう？完成したから非想天則だ」

「成程」

「あれから結構時間あったしな。私も完成させたわけだ」

「……」

ここまで聞けばおかしくはないが……死んで以降妖怪の山に寄った記憶はない。太陽の畑で教えた事だけで一人で完成させたのか？

「そう言うわけで完成したわけさ」

「それは良かったです」

「さて、こつちからだか紅魔館では大丈夫だったのか？」

「ええ大丈夫です」

「私の記憶が残ってるって事は死んでないのは分かるけど……それでも吸血鬼はなあ……」

「大丈夫でしたってば」

「ならいいけどな……で次が重要なんだが……なんで妖怪の山に来た？ 追い出されたんだろ？」

「霊夢さんが来てるって話を聞きました」

「あー……確かにそうだな」

何故かにとりさんが迎撃したわけだけどさ。

「救援は助かったがこっちは問題ないぞ」

「俺もこうなるとは思わなかったですね」

「しかしそうだと私達の為か？」

「正確には彼女のためですけどね」

ロボットではしゃいでる早苗さんの方を向く。

「相変わらず人気者なんだな」

「一応古くからの知り合いですしね」

「それは分かったが関係あんの？」

「この山の頂上に新たに移住して来たんですよ」

「そんな噂は聞いてたがアイツなのか」

「ええ、ですから一度妖怪の山に戻って霊夢さんをどうにかしようかと」

「大変なんだな……」

「まあ終わったわけですしね」

遠くを見る。文さんが守矢の神様を連れて来てくれたようだ。
間に合ったようで良かった……

「ただ、結局この後どうするんだ？」

「話し合うしかないのでは？」

「だらうな」

皆が揃ったわけだし霊夢さんも話せる事を祈るばかりだった。
暴走したら……どうしような……

t o b e c o n t i n u e d

百七十三話 異変の解決仕方～after all this.

「はっ、みみっちい巫女もいたもんだね」

「うっさいわね。身勝手に幻想郷に入って来たアンタ達が悪いでしょうが」

「身勝手とは随分だねえ。こっちもちゃんと話し合った末だつて言うのにさ」

「うぐ……」

「なあ霊夢……諦めようぜ？」

「そう言うわけには行かないでしょ！これだつて異変なのよ」

「それはまあ分かるけどな……」

「かつての異変の様に害意は感じられませんが」

春雪異変や結界異変に比べてマシな上にそもそも周囲に何か起きたわけでもないし。

「そう言う問題じゃないのよ」

「霊夢さんの個人的な理由では……?」

「違うわよ。勿論ゼロでは無いけど」

「あっはい」

やはりゼロでは無いんだなど。

「異変つてのは起こされたら解決する。それがルールだからね」

「必ずですか？」

「必ずでは無いけど」

「なら害意は無さそうだし放っておいていいかと」

「それは無理。今までののは放置出来たとしても今回のだけは無理よ」

「そんなに巫女や神社が気に食わないんですか？」

「違うわよ」

「え？すみません」

「……アンタはどれ程異変つてもものを知ってる？」

「妖怪が起こして人間が解決する。レミリア・スカーレットが紅霧異変を起こしてから様々な異変を知りました……それより前は分かりませんが」

厳密に言うとは紅霧異変も知らないが、話だけは聞いたしな。

「そうよね」

「何がですか？」

「あくまで異変は妖怪が起こすもの。だったら今回は？」

「今回は事故に近い形のような」

「違うわ。問題なのは起こしてるのが妖怪では無くて神だと言う事」

「……」

神が異変を起こした。確かに言葉だけ聞くと問題でしか無い。過去にあったかもしれないが分からないしな……

「今までの異変と比べて危険と判断しておかしいかしら？しかもそれが妖怪だけに住んでいる妖怪の山にだなんて」

「そう言われると……」

否定はし辛い。守矢の神様達が何かするとは思えないが、それを聞いただけの霊夢さんが分かるわけないし……

「だから懲らしめる、までは行かなくとも少なくとも向かわないとダメなのよ。分かったなら離しなさい」

「……」

早苗さんや神様達の方を見た。

正直どうすべきか分からない。

「ああ、結局アンタは私達をどうにかしたいって事だね？」

「そうよ。幻想郷はロクでもない神達ばかりだからね」

「ははっそれなら信仰も集めやすそうだ。他が酷けりや自然とね」

「やつぱり危険なんじゃ無いの？」

「いきなり襲って来ようとしたあんたには言われたく無いね。諏訪子準備しな」

「あいあいさ」

二人は霊夢さんを解放しつつスペルカードの準備をする……ええ？

「あの……なんでスペルカードがあるんです？」

「これかい？これは諏訪子があらかじめ準備しておけてね」

「……いつですか？」

そんな情報いつ手に入れたんだ？来たばかりの筈なのだが……

「幻想郷に入る前だね。最低限のルールとして先に言われてたらしいのさ」

「……」

そうか前か、それなら大丈夫か……いや、その話何故早苗さんにはしなかったんだろ
うな……

「なるほど、流石は諏訪子様です！」

「あの……早苗さん？」

「どうしました？」

「諏訪子様達からスペカールの話は聞いてないの？」

「無いですけど……」

その後ハツとした表情をする。

「諏訪子様……私は聞かされてないのですが」

「そうだったけ？」

「……」

「ごめんごめん。言い忘れてたか」

「まあ良いですけど……」

少し落ち込む早苗さんを心配しながら気付けば弾幕ごっこが始まっていた。
それを確認して魔理沙さんがこちらへと来る。

「どうにかなったようで良かったな」

「どうにかなったんですかね……？」

「少なくとも勝負が始まったって事はそれ以上の揉め事にはならないしょ」

「絶対的ルールですもんね」

「だからもう大丈夫ってわけだ」

「本当ですか……？」

「ああ。だから嬢ちゃんも安心して良いぞ」

「安心して辛いですけど……これで終わったでいいんですかね？」

「いや終わってないぞ」

「え？」

「やっと本題に入れるんだろ？」

「あ……」

「あ……じゃ無いですからね早苗さん……」

「ごめんなさい」

守矢神社の事が大事なのは分かるが、そもそもなんで同行しているか忘れないでおくれな……

「やつとでいいんだな？」

「ああぬえ。問題ないよ」

「つたく、時間だけかけまくりやがって」

「……ごめん」

「謝るなんてアンタらしくないよ」

「いやでも今回は……」

「だったらさっさと行こうって話だ。今愚痴つてもしやーないし」

「ああ、そうだな」

「元から約束しましたし、助けられた以上私も行きます」

「それは分かったが、その魔女はどうするんだ？」

「あー私はちよつと……やりたい事済ませてから行くから少し遅れる」

「遅れるって……来る気ないんじゃないのか？」

「間に合わなかったら悪いな」

「いえ、魔理沙さんが居てくれたお陰でスムーズに行きましたし」

「……出来るだけ急ぐからくたばんなよ」

「気を付けます……」

魔界と言う場所がまだ分かってないため確信は出来ないが……出来るだけどうにか
ならないかと願うばかりだ。

「ほら行くんだろ？」

「ああ行くこう」

もう大丈夫だと信じて再び博麗神社に……魔界へと。

手遅れになってない事をただ祈りながら。

「……アイツに連絡すつか」

去る前に小声で聞こえた魔理沙さんの言葉を気にしつつ今度こそ向かうのだった。

next episodes

く魔界編く

百七十四話 魔界にてく suddenly danger

rous.

博麗神社のさらに奥深く。そこには洞窟があつた。

本来であればすぐにでも向かう筈だったのだが……だいたい時間がかつたな。

「道に迷わないようにな」

「どうでしょう？洞窟がどんな場所だか分かりませんし」

「行ってみなきゃ分からないって事ですな」

三人で洞窟に潜って行った。

「あれ？どう言う事だ？分かれ道とかは？」

「……無いみたいですね、ただこれは」

一方通行ではあるが、一歩進むたびに足取りが重くなって行く。
理由は分かるが……こんなに圧があるのか……

「いよいよ来たって感じですね」

「そりやそうだろ。何言ってるんだよ」

「ええ……」

「いつまでもお気楽で居るんじゃないよ。死ぬぞ？」

「……そうですね」

ぬえに叱責されて気持ちを改める。

流石に元からお気楽では無かったが、それでもだ。

これから向かう先は魔界だと言うのに気を抜いては居られない。

「死ぬわけには行かないもんな」

「そうですよ。死なないでくださいね本当に！」

早苗さんに注意される。本当に心配かけさせてばかりな気がする。

死に戻り出来るとしても何処まで戻るか分からないしな……

「それじゃあ入るぞ」

心臓が行くなど言いたいのか強く動く。

それを無理やり押さえ込みながら扉を開けて一歩先に進んだ。

「……綺麗」

「そうですね」

入るなりいきなり目に入ってきたのは一面銀世界だった。

季節外れとも言いたくはあるが……正しい季節が分かってないしなんとも言えない。

「気を付けろよ」

「そうですね……」

綺麗なのは確かだが雪が未だに降っている。

だいが積もっているようだが何処まで積もるのか不安でしかない。

「安全そうな場所を目指しましょう。このまま降られ続けると私達も危険ですし……」

「そうですね……」

周りには銀世界しか見えない。何処へ向かえばいいか分からない以上は少しでも動いて探さないと手遅れだってあり得る。

「ここからはある意味運がいいかどうかだろうな……」

今なら扉から戻る事も出来る。

だがここまで来た意味がなくなるだけだし戻る意味もない。

一度離ればもう戻れるか分からない。だが船を探しに進み出した。

「……二人とも大丈夫ですか？」

「……、……、……よ……」

「……」

吹雪が強くなっていたのもあり二人の声が聞き取りづらくなっている。

二人の姿は目立つ事もありまだ見えるが……下手すれば見えなくなる可能性だってある。

「二人とも、ちよつと離れすぎ……」

「……ん、……せん」

「……ああくそつ……聞こえないな」

近寄らないといけないのにお互いが聞き取れていない。近付こうにも皆が先に行つて追い付けない。

「……どうするんだよ」

徐々に二人が離れていることに気付く。

何故かと考えたが……身体が動かなくなってきた。

身体が凍えて動かない……無理して動かそうにも重くなってきた。

「待つて二人とも……」

当然その声が二人に届くわけがなく目立つはずの二人の姿も遂には見えなくなった。

「……大丈夫……動けば追い付く」

動けば追い付く筈なんだ……大丈夫すぐに……

よし無理してでも脚を動かして……

「……あれ？」

なんで倒れているんだ？

なんで歩いて居なくて既に倒れているんだ？

おいこれじゃあダメだろ……？

「異変を解決するんだろ？ 異変を止めるんだろ？」

だったら動かないとダメじゃないか……このままじゃどうしようもないじゃないか

……

「あの時とは違うんだ」

春雪異変の時のように何も出来ずに雪に埋もれて死んだあの時とは違うんだ。

あれから何度も何年も経ち何個かの異変に会ってきたんだ。

あの時のように……何も出来ずに死にたくない。

「……戻れば全て済むとしても」

ここで戻ればぬえが復活する事は無いだろう。

早苗さんだって幻想郷にいるか分からない。

今回はぬえが復活させたあの子が異変を起こしたから早苗さん達も触発されて幻想入りしたその可能性も無いとは言いい切れない。

そこまで考えるとこの二人は異変を起こしたから現れたのかもしれないし……
第一何処まで戻るのかが分からないし。

「……………生きるんだ」

もしそうならば二度と会う事は無いだろうから。

記憶を引き継いだ俺を相手にさとりさんが気付かないわけがないから……
もう二度と復活もさせないだろうな。

「だから……………だからなんだっけ？」

色々と分からなくなってきた……………自分は何を考えていたんだ？

「……………眠いなあ」

眠くなって来た……眠いから寝ていいんだっけ？

いやダメだった気がする……

なんでダメなんだっけ……

「……」

分からないからいつか。寝てから考えよう……

また明日。思い出せると信じて……

「……」

「……」

「……ナンデコイツガ？」

百七十五話 目を覚まさぬ裏で s a n a e s i d

e.

「命は無事そうね。暫くは目を覚まさないだろうけど」

「……有難うございます」

ぐっだりとした少年を早苗は不安そうに見ている。

実際彼女が居なかったら目の前の少年は死んでいただろう。

吹雪の中彼を見失い気付いた時には自分達じゃ手遅れだった。

「何があったの？」

「……」

「正直小野寺君が魔界にいるなんて驚きなんだけど……彼にとって魔界は全く関係ない筈なのに」

「知り合いだったんですか？」

「ええ。普段は幻想郷にいるからね」

「そうだったんですか。私も最近幻想入りしまして」

「そうなの。よろしくねと言うべきかしらね？」

「よろしくお願ひします。アリスさんでしたっけ？」

「ええそうよ。普段は魔法の森に居るわ」

「東風谷早苗です。本当に今回はすみませんでした」

「いいのよとも言つてあげたいところだけど……上海が見つけてくれてなかったら死んでたわよ」

「本当に良かった……」

「戻るだけだとしても……苦痛でしょうしね」

「……?」

「ああ……何でも無いわ」

「そうですか?」

「さて……彼が目覚める前に事情だけでも聞かせてもらおうかしらね」

「魔界に封印された危険人物がいると聞きました」

「魔界に？あの人から聞いた事はないけど……」

「あの人？」

「この魔界を作った神に近い何かよ」

「創造神と知り合いなんですか!？」

「……今魔界にいるのは彼女に呼ばれたのが原因だしね」

「なるほど」

「それで、その危険な人間がなにかしら？封印を解いたりする気？」

「逆です。小野寺君が言っていた事は封印を解こうとする妖怪が居たのでそれを止めないと」

「面倒そうな事になりそうね……言いたいこと分かったわ」

「信じてくれるんですか？」

自分とは初対面の筈なのに信じてくれるだなんて優しい人だ……

「小野寺君がそんな事する筈ないし」

「……そうですねえ」

知ってましたよ知ってましたとも。

なんか私に見えない魅力とかあるんじゃないかって思いましたがそりややつぱ彼ですよね。

「なんかしょんぼりしてないかしら？」

「いえそんな事は……」

「あー……勿論貴女のこと信用してるからこそ信じたんだから安心して」

「え？」

「どうやら私にも魅力があつたらしい。」

「それで……その貴女も言ってる事あつてるかしら？」

「……ん？合ってるんじゃない？」

「ぬえさん。貴女の方が知ってますよね!？」

「そうだったけ？」

「どうしたんです？」

「やる気が出ない」

「はっ。」

え？いきなり何を言い出すんですか？

小野寺君もですが二人がメインなのは？

「なんかさあ。私は妖怪だし人間なんてどうでもいいんだけどさなんかそいつが死にか
けな所見ると色々と冷めてさ」

めちやくちや気にしてるじゃないですか……

あえて言い出す事はしませんけど。

「そうは言ってもやるしかないでしょう？」

「それなんだよなあ……」

私は最初からぬえさんと行動していたわけではないので分からないが、だいぶ変わったんだらうなとは思う。

「何が正しいとか何するべきとか分からなくなってる」

「とりあえず……封印はどうにかしないと」

「うーん……」

ここまで来て、急に冷められてどうしろと言うのだ……

ぬえさんの力も間違い無く必要なのは分かっているからこそ投げられても困る。

「彼がやる気だったんでしょ？」

「そうだなあ、責任感感じてたし」

「だったらいつそどうにかしてやるってやればいいんじゃない？」

「なんでアイツの為に」

「逆よ」

「逆？」

「自分がやろうとする事を先にやられるんだもの。悔しいに決まってるわ」

「悔しい……それもそうか。邪魔されるの嫌だよな」

「あの……小野寺君は多分……」

そんな事はないだろうと言おうとしたらアリスさんが静かにしてと合図してくる。
謎に思いながらも口をつぐんだ。

「彼が動けない今がチャンスじゃない？」

「成程。アンタ賢いな」

「じゃあ行ってきたらどうかしら？」

「了解。おい緑の行くぞ」

「緑のって……ちよつと待ってください」

「なんだよ」

「少し彼女に聞きたい事が……」

「……早くしてな」

そう言い残してぬえは出て行った。

「理由を聞いても？」

「ああ言うタイプは搦め手の方が通じるからよ」

「そうですか……ただ助かったのは事実です」

「それで貴女も行くのでしょ？近くに友好的な魔族が居るだろうから頼ってみるといいわ」

「アリスさんは来てくれないんですか？」

「ええ。彼を放置出来ないし」

「本当であれば彼を待つ気だったんですが……さっきの流れで行くしかないですが……」

「ダメよ」

「え？なんでですか？」

「彼がやらなきゃって言ったのだろうけど……彼は一般人なのよ」

「それはそうですね……」

「魔界まで着いてきたのはいいけどこれ以上はダメ。死ぬだけよ」

「……」

「納得出来ないのも分かるけどね」

「いえ……分かってます」

彼が起きていれば間違い無くどんな状態でも付いてきただろう。

それでさつきみたいにまたボロボロに……

「ぬえさんと二人で終わらせてきますよ」

「いや……さつきも言ったけど近くの魔族頼ってね？迷うわよ？」

「あつそうでした。気を付けます」

小野寺君のお陰で守矢は助かったんだ。

霊夢さんが特攻してきて彼の縁が無ければどうなってたか分からなかった。その点に加え日本での彼にも感謝している。

本当に色々助けられたから。

「だから今度は私の番」

雪が弱まっているのを確認してぬえと共に飛び出したのだった。

百七十六話 焦燥く wake up boy.

寒い寒い寒い……

身体が凍る。動かなくなる。

全身から血が流れ出す。そしてその血も凍っていく。

苦しい苦しいその感覚さえもう分からな……

「わあああああああ」

悲鳴を上げながら目を覚ます。

あれ？ここは……？

「……ウツセーゾ」

「あつごめんなさい」

上海さんだ……なんでこんな所に？

「()は？」

「ワカンネーノカ？」

「はい……」

確か記憶の最後は豪雪の中だった筈なんだが……

「魔界……でいいんですかね？」

「……マツテロ」

「え？」

そのまま上海さんは何処かへ行ってしまった。
完全に一人取り残され呆気に取られている。

「……上海さんは幻覚……じゃないよな。だったらこの場所だっておかしいし」

彼女が幻覚だとしたら既に死んでいるだろうしな……この建物の中にいるのがおかしい。

これすらも幻覚は……無いな。死んだらすぐに戻るのだから。

「早苗さんとぬえも居ないし……」

それはそうか。ただ無事である事を願うしか無いな……
ダメだ。それで手遅れだと話にならない。

「家の主にお礼を言って向かわないと……」

「全く……本当にじつとしてられないのね」

「……アリスさん？」

なんでアリスさんが？と思いつつ改めて上海がいた事を自覚した。
そうだな上海さんがいたんだからおかしく無いか。

「久しぶりね。とでも言えれば良かったけどそんな場合じゃ無いわ。何してるの？」

「何って……魔界に向かった船を追い掛けて」

「それは二人から聞いたわ」

「二人って……無事だったんだ」

「……はあ。一番危険だったのは貴方だと言うのに呑気ね」

「実際自分はこう生きていたの。二人はどうなのかでしたし」

「……そう言う性格だったわね。その割には異変に首を突っ込むのに」

「……そうですね」

「今回も明らかに自分の身の丈以上じゃないの」

「それはそうかもしれませんが……何も知らないと万が一があっても全てやり直しになりますし」

「そうですね。やり直しになる筈ね」

「？」

「……なんでもないわ」

アリスさんの言葉に少し違和感を持ちつつもそこには突っ込まなかった。

「とりあえず……これから先ですが」

「小野寺君はここで待つしか無いわね」

「え？」

「当たり前でしょう。どうにか出来るわけないもの」

「それはそうですが……」

「貴方が信頼して二人を連れてきたんでしょ？ だったら信じて待ちましょうよ」

「それはそうですが……」

「……話聞かせてもらってもいいかしら？ 正直彼女達の話だけじゃ理解出来ないの」

「分かりました」

「追う事も出来ないだろうし今やれる事と言えば話すことくらいだろうなど。

「魔界を知っている彼女の方がこの先どうすればいいか分かりやすいだろうなども考えながら話し始めた。

「……」

「アリスさんは表情を変えずに真剣に聞いてくれていた。

「茶化す人なども多かつたし真面目に取り合ってくれる存在は本当に有難い。

「それ、小野寺君が悪いとは思わないけど」

「聞き終えたアリスさんはまずそう答えた。

「だって俺が封印を解いたんですよ？」

「事故じゃ無いの」

「事故だとしても……」

「あのねえ……幻想郷でそんな責任感ばかり考えてたらダメな事くらい分かるでしょ？」

「無責任過ぎませんか？」

「だからって悪いのは落とすとしたその妖怪でしょ？なんでひとりで悪い悪い言ってるのよ」

「……」

「……ただ放つて置けないのは分かったわ。此方でも少し知り合いに声を掛けてみるから」

「有難うございます」

魔界へと来た以上今までの異変と比べ物にならない気がするし、人手はいくらでも欲しい所だ。

「俺は何をすれば？」

「何もしなくていいわ」

「いやそれって……」

「どうせ暫く休んで無いんでしょ？少し休みなさい」

「休んで無いのは……」

紅魔館でフランちゃん達に振り回されて地霊殿でも落ち着く前に今回の事があって

……

休めて無いな確かに……

「やらなきやいけないって言いたいだろうけど間違いなく今の貴方は冷静さを失っているわ」

「……そうですかね？」

「まずは休みなさい。その後これからを考えましょ。彼女達の手伝いに行くとしてもね」

「分かりました」

焦り過ぎていたせいで気付かなかったが、身体がまだ僅かに痛む。

二人には申し訳ないけど少し休ませてもらおう……

—————

目の前には化け物がいた。

よく分からない化け物。幻想郷にいていいのか不安になるほどの存在だった。人じゃあどうしようも無いと言える程の存在で霊夢さん達も倒れている。

「なんだよこれ……」

明らかに異常な存在は幻想郷を喰らい尽くす。

こんなものが魔界に封印されていたのかよ……

「無理だ……無理に決まっている」

他の異変がまだ優しいものだったんだなって気付かされた。

明らかに勝ち目のない存在でしかないから。

霊夢さん達もやられてどうしろって言うんだよ。

「お前のせいだ」

「え？」

「お前のせいだお前のせいだ」

「……」

周り中からそう聞こえる。
俺をひたすら責め続ける。

「そうだ……そうだよな……」

やったのは俺なんだし否定は出来ない。
自分でやったんだから俺が悪いと。

「手遅れだ」

そうか、手遅れなんだごめんな……
全部全部……

そこで目が覚めた。

「……やっぱり逃げてなんてられないよな」

ならどうする？一人じゃどうしようもない。

アリスさんに言っても待ってて話になるだろうし。

「誰か居れば……」

結局は他人頼みなのは分かっている。

ただあんな悪夢を見てこのままでもいいなんて思えない。

誰か居てくれれば。

「辛気臭い面してるじゃないか」

「!?」

下の方から声がして慌ててそちらを向く。
そして床を突き抜けて現れた姿に驚いた。

「え? 誰?」

あの閻魔様を思い出すような早苗さんよりも濃い緑髪だが結構長髪のようなうだ。

青い服に翼と言う姿だが……それ以上に脚がないのに違和感がある……まあ床を抜けてきたし幽霊なんだろうか?

「あんたの言う助けて欲しい誰かだけど? 弟子から手助け要請されたしねえ」

「弟子……アリスさんの師匠とか?」

「そつちではないけど。まあいいじゃないか」

正直な話不審者にしか見えない。

ただ協力者なら誰でも欲しい所だが。

「大体の説明は聞いたけど助けて欲しいならあんたからも聞かせな」

少なくとも敵がここまで面倒な事はしないだろう。そう考えて話すことにしたのだった。

盤面を好転させれると信じて。

t o b e c o n t i n u e d

1. 百七十七話 仲の悪い二人～only quarrel

「小野寺君ちよつといいかし……」

アリスさんが部屋にやって来たかと思うと言葉を失う。
そのまま隣の幽霊を睨みつけた。

「なんのつもり？」

「あ？何がだい？」

「あんたが魔界に来るって何があったのよ」

「知り合いですか？」

「ええ。だけどこんな悪霊の事を覚えなくていいわ」

「酷い酷い。酷過ぎて泣いちゃうよ？」

「勝手に泣けばいいわ。魔界でまた何かする気？」

「何かって……ああ、あんたが小さい頃に虐めた時の様な事かい？」

「……犠牲」

「ちよつと待ったアリスさん!？」

部屋の中でスペカを使おうとしたのを慌てて止める。

しかも多分これやばい奴だし……

「止めないで小野寺君。今始末しないとロクな事にならないから」

「だからって建物内でスペカはまずいですって」

「だったら外に出ればいいかい？」

「……好きにしてください」

「なんでスペカ打たれかけた側がそんな事言ってるんだ？」

「なんか冷めちゃったねえ。まあいいさ敵対しに来たわけじゃないよ」

「ふん、どーだか」

「魔理沙に頼まれたわけだし流石にしっかりとやるさ」

「魔理沙さんに？」

「ああ。さつき頼まれたのさ」

魔理沙さん、そこまで気にしてくれていたのか。

「つてわけで分かったかいアリスちゃん」

「うぐぐぐ……」

凄く悔しそうな顔で見ている……

確かにいじめっ子を好きになるケースなんてほぼないしなあ。

「えつと魅魔さんでしたっけ？」

「そうだね。で、どうするんだい？」

「流石にアリスさんが嫌がると思うなら……」

「でも人手が足りないんだらう？」

「……」

「さつきまでそう言う話していたじゃないか。どうしても足りないから探していたんだらう？」

「……ですね」

これから起こる事が分かっている。不安でしかない。

だからこそ彼女達二人だけよりも多ければ多い程良いと思っっているしな……

「だったら分かっているだらう？」

「……アリスさん」

「はいはい。分かったわよ」

本当に申し訳無いな……出来れば頼りたく無いだろうに……
絶対に失敗したく無いのも事実だしな。

「それじゃ決まりって事だねえ」

「一ついいかしら？」

「なんだい？」

「何が目的？」

「目的ねえ」

「それが分からない以上協力したく無いのだけど」

「簡単な話だよ」

「簡単な話？」

「楽しそうだから。分かりやすいだろう？」

「……」

思った以上に破天荒な人……いや幽霊だなど感じるばかりだった。

—————

「さて、それじゃあアリスちゃんの話を読みましようかねえ」

「何の話よ？」

「これからどうするのかって話だねえ。まさかアレだけ言って何も考えて無いとは言わ

せないけど」

「勿論と言っても現状状況が読めてないのよね」

「なんだいそりゃ。それでどうにかするって気だったのかい？」

「あの人に会いに行くわ」

「あの人って？」

「神綺。魔界の創造主よ」

「……ああ。前に会った事あるねえ」

「あんたの場合は塩撒いて追い出されそうだけどね」

「私の場合成仏しそうだから辞めて欲しいんだけど」

「いいじゃないの」

また喧嘩が始まってしまった……

「とにかく、神綺さんに会いに行けばいいんですね」

「封印された人間。その存在を間違い無く知ってるでしょうし」

「そうですね。確かにその方がいいかもしれません」

少しでも情報を得れるならいいし。何より場所を分かっていないからな。

「あんたもそれでいいでしょ？」

「それは構わないけどさ」

「何よ？」

「そいつはどうするんだい？」

そう言つて俺の方を……え？俺？

「どうするつて……？俺をですか？」

「ああ。まさか連れて行くのかい？」

「……そうね。確かに連れて行くのか悩ましいところね」

「え？ダメなんですか？」

「さつきまでの話を聞いてた？」

「聞いていましたが……無茶をしない程度には何かをしたいです」

何が出来るか分からなくても、夢の様に何もしないせいではとか嫌だから。

「……分かったわよ。一応あの人に連れて来いと言われてたし」

「え？連れて来いつて？」

なんで俺の事知られているんだ？

流石に全てを見通してるとかじゃ無さそう……無いよな？自信無くなってきた。

「ほーへーふーん」

「どうしました魅魔さん？」

「いや。彼女も親なんだなと思ってねえ」

「親？言ってる意味が分かりませんが」

「そのの嬢ちゃんがよく分かってるよ」

呼び方色々変わってる気がするが……

アリスさんなら分かるのか。

「アリスさんどう言う事です？」

「………何でもない」

「え？」

「何でもないわ」

「………分かりました」

深く聞かない方がいいらしい。やめておくとしよう。

「それじゃ向かうとしましょうかねえ」

「あんたは追い出されても知らないわよ」

「えー助けておくれよ」

「そのまま成仏出来る様に祈っているわ」

ほんと仲悪いな……どうにかなってくれるよう祈るばかりだ。
神綺さんのとこで少しはマシになります様に。

t o b e c o n t i n u e d

百七十八話 魔界の主く dotting parent.

「まさかすぐに戻ってくる事になるとは思わなかったわ」

「別にいいでしょ。さあ行きましょ行きましょ」

館に辿り着いたが、魅魔さんが先陣を切って行ってしまった……早いな。

「私達も行きましょうか」

「そうですね……」

紅魔館すらも上回る巨大な館に気後れする。

流石は創造主と言ったところだなとしか言いようがない。

「別に取って食ったりはしないわよ」

「それはそうですが……なんか無事に済まなそうで……」

「大丈夫何も起きない……」

アリスさんが話している最中に館内の方で爆発が起きる。

……え？何があつたんだ？

「……起きたわね」

「向かいましたよ!!」

流石に爆発が起きてのんびりはしてられないと慌てて駆け込む。
玄関に入ると既にそこで戦闘が始まっていた。

「お客様にあんまりじゃないかい？」

「不届き者は摘み出すだけです」

魅魔さんと金髪のメイドさんが戦っている。

「これは……魅魔さんがいきなり何かやらかしたのか？」

「……あー」

「アリスさん何か分かったんですか？」

「分かったけど……止められるかしら？」

「止めなきやまずいのでは？」

「そうね……夢子」

「アリス様帰って来ていたのですね。待っていて下さい」

様？アリスさん一体何が……？

「残念だけど待つのは貴女なの夢子。非常に気に入らないけどそいつはお客様よ」

「は？」

「抑えて。分かるけどさ」

「幾らアリス様でもその冗談は笑えませんが？」

「冗談じゃないってことさ」

「……過去にやらかした事をお忘れですか？」

「なんのことだい？私はやらかした記憶はないんだけど」

「……やっぱりコイツを」

「ダメよ」

「……」

「分かるわ。分かるけどダメなの」

「……つち。お通り下さい」

今このメイドさん舌打ちした!?

「それじゃあ遠慮なく通してもらおうかねえ」

「さっさと神綺様にやられて下さいな」

「くすっそうだといいいねえ」

そう笑いながら魅魔さんは奥へと進んで行った。

「アリス様どう言うつもりですか？」

「緊急事態なのよ。アイツの手は借りたく無かったけど借りる必要が出来たレベルのね」

「数日前までここにいたのに……そこまでの事が唐突にですか？」

「ええ。彼から聞いたの」

「彼……」

確認するかの様に此方を向いてジロジロとしてくる。

いつも通り怪しまれているのか？

「ああ。神綺様が言っていたあの人でいいのでしょうか？」

「あんたが思ってるような関係じゃないわよ」

「？」

何を思っているんだろうか……？

まあ俺が気にする事でも無さそうか。

「本当ですか？」

「そもそも思い込みが激しいのよ」

「確かに……神綺様はそう言う所がありますね」

とりあえず理解した事は、メイドさんにまで裏切られたらしい。神綺様が可哀想だな

とは思った。

「……アリスさん向かいましたでしょうか。魅魔さんが先に突っ込んで行きましたし」

「いえ、今行くと巻き込まれるし……」

「巻き込まれる？」

その直後爆発が……また？

家の修理相当必要なんじゃないだろうか？

「そこ危ないわよ」

「え？」

家具が物凄い勢いで飛んでくる危な……

「気を付けてください」

「有難うございます」

メイドさんに助けられていた。

油断してたわけでは無いが一瞬で死にかけてたな今。

「まあ気を付けるのはどっちかと言うところの惨状を起こした二人でしようけどね」

「二人とは？」

「一人はこれ」

アリスさんが言う方向を見ると魅魔さんが倒れている……いつの間に……

「もう一人は……」

「さてもう一度聞かせてもらえるかしら？なんでこの館に入ってきたの？」

第一印象は小柄な少女。しかし威圧や殺意なの重圧に立ちくらみを起こしかける。

ほんと……幻想郷では人間が弱い立場なのも分かるがそれでも桁違いなの多過ぎだろ……

「全く……次勝手に館に入ってきたら……あら？」

不思議そうな顔をしながら此方の方を見てくる。

何か用なのか？魅魔さんの様にはなりたく無いが……俺達も勝手に入った扱いになる？

「アリスちゃん帰って来てたのね。暫くは来ないと思ってたけど」

「……神綺さんお邪魔してます」

「もう神綺さんじゃ無いでしょ」

先程までの重圧が一気に消えた……変わり過ぎじゃあ？

「……まず神綺さん。魅魔を連れて来てごめんなさい」

「アリスちゃんだったの？ 虐められたりした？」

「いえ……今回協力する事になりました」

「……もしかしてやらかした？」

「調子乗ってたしいと思いますけど」

一方のアリスさんは余所余所しいと言うか距離を取っていると言うかそういう風に
見える。

「アリスちゃんが冷たい」

「神綺様……客人の前ですよ？」

「え……客？アイツなんて塩撒いておけば」

「いえそつちでは無いです」

そのままメイドさんが俺を前に出す。

もしかしてこつち見てたけど気付いてなかった？

「……人間か、何用だ？」

「神綺さん……もう無駄だと思いますけど……」

アリスさんが溜息を吐いている。

ただ言いたいことは分かる。怖くもあるが怖く無い部分も見えてしまった。

「……」

「神綺様、対応してあげて下さい」

「え？あつうん。君、何か用かしら？」

色々と諦めた様である。

「すみません。封印された人間についてここに来れば聞けるかもと話があつて」

「アリスちゃんからかしら？」

「そうですね。魔界の創造主なら分かるだろうと」

「ふむふむ。アリスちゃん彼って何者なの？魔界に普通に來てるし」

「何って言われても……」

「神綺様。恐らく彼が前にアリス様が言っていた人間かと」

「あーーーーー!!アリスちゃんが言ってたあの子ね!!」

「……そうだけど、改めて神綺さんが思ってるようなのじゃ無いわよ?」

「大丈夫よ。分かってるから」

「だったら少しは話を聞く気を見せて欲しいのだけど……」

「あの……俺はどうすれば?」

「いいのいいの。気にしないでね」

「ええ……」

気になることだらけなのだが……これも全部放置しろと？

「神綺さんでよろしいでしょうか？」

「ええ。お姉ちゃんでもなんでも自由に呼んでね」

「……神綺さんで」

「えー」

創造主という割には本当にノリ軽いぞこの人!?

いや、その方がいいのか？危険は減るし。

「……そう言えばアリスさんとはどういう関係で？」

「え？アリスちゃんと？」

なんとか話題をずらす。気になってもいたしちようどいいだろう。

「保護者に近いかしらね？お母さんって呼んでくれればいいのだけど」

「呼びません」

「ぶー」

仲が良いのか悪いのか……多分良いんだろうな。

「じゃあ此方からも」

「これ以上巫山戯なくていいからね？」

「分かってるわよ。後で聞くけど」

「……何もないからね？」

だから何が……後で聞いてくるならいいか。

「困ってるからこの館へと来たのだろうけど。何も聞かないとどうしようもないわ。聞かせてね」

どうしよう……今まで相對した人達の中ではかなり安心出来ると……そんな気がした。

t o b e c o n t i n u e d

k.
百七十九話 ポンコツ主～charisma break

「魔界に封印された人間ねえ……確かに聞き覚えはあるけど」

「本当ですか？」

「ただ……だいぶ前の事だし、そこまで印象に残ってないのよね」

「だいぶ前なんですか？」

「ええ。アリスちゃんとかが生まれるもつともつと前。多分千年前とかもつと前よ」

「……は？」

それだけ人間が長生きしてるのか？

色々とおかしい様な？

「普通なら私の様に死んでる筈なのに生きてるのかい？」

気付けば魅魔さんが起きている。

霊体のお陰かダメージは残ってなさそうだ。

「会話に混ぜれとは言ってないけど？」

「流石にここまで酷い扱いだと泣けるねえ」

「……神綺さんすみませんが我慢を」

「……アリスちゃんが言うなら仕方ないわねえ」

渋々とした顔で認める。

本当にこの幽霊は過去に何したんだ？

「魔界の深くにある法界……だった気がするのだけど。確かそこに封印された人間がいる」

「その言い方だとまだ生きてるのかい？」

「正直関わってなかったから気にしてはなかったけど……生きてはいるみたいね」

「……本当に人間なのか不思議で仕方ないねえ」

「魔法使いや超人の類いかもしれないわね」

「超人？」

魔法使いはともかく超人って……？

「そのままの意味よ。人を超えた存在、人体ではありえない様な事を人のまま成す異端よ」

「……千年以上も生きているのを考えるとその方があり得そうですね」

「……第一、ただの人間では魔界に居続けられないもの」

「え？俺は？」

今魔界にいるんだが異端とか言わないよな？

「今はアリスちゃんが貴方の補助してるから無事って感じね。アリスちゃん居なければ大変だったわよ？」

「……」

気付いてなかった……有難う。と言うかそこまで危険だったのか……

「そして法界はここ以上にまずい場所。人間じゃ訪れられないわ。アリスちゃんが居ても貴方じゃ危険な目に遭うわ」

「……そんな場所で千年？」

本当に人間なのか？人の皮を被った化け物じゃないだろうか？
そうだった場合は、非常に困るのだが。

「あんたの魔界だというのに全然知らないんだねえ」

「人間と関わる気なんて無かったからね。昔の奴らも勝手じゃなくて頼み込んできたしまあ良いかと」

「その結果何が居るか分からないと」

「……」

「ああ構わないさ。やっぱトップたる者ドシンと構えていないといけないものさ」

「そうね。なんで私がそんな事一々気にしなきゃいけないのよ」

「神綺様！そいつに乗せられてます!!」

「え……？はっ助かったわ夢子」

封印も心配だけどそれ以上に神綺さんも心配でしかないんだが。

本当に大丈夫か？気の抜けている時のレミアよりも残念な気がするが大丈夫だろうな多分……

「それで、どうするんだいあんたは？」

「まずもう一回あんたをぶっ飛ばして」

「そろそろ向かった方が良さそうだけどねえ」

「一発殴るくらいなら……」

神綺さんが構えるとともに魅魔さんが距離を取る。時間もそうだがさつき死に掛けたんだが？

「えっと二人ともどうすれば」

「……夢子」

「申し訳ありませんがアリス様。私も神綺様と同じ考えなので」

「……」

「どうしましょう……待つべきなんですかね？」

逃げる準備だけはしておく。もう逃げた方がいいかもしれないが……

「……はあ」

「アリスさん？」

「母さんもうみつともないからやめて」

「アリスさん!？」

突然の母さん呼びに驚く。

俺がない時はいつもそうなのだろうか？

「……あ、効いてる」

向こうで神綺さんが崩れた……いやこつちに来た。

謝ってる。すっごい謝ってるよ。

「急に頼みに来た上に魅魔を連れて来たのは悪かったわ。だけど時間がないの」

「……そうね」

「手伝う気が無いなら場所教えてくれるだけでもいいから」

「アリスちゃんが怪我するかもしれないのを放つてはおけないのだけど」

「だったら行きましょ。魔界の主がああの程度で怒っては仕方がないわ」

「分かったわ。待たせてごめんなさい」

「意外とスムーズに進んだ……收拾付けるのはいつも通り凄い人だなと思わされるばかりだ。」

「……最初からアリスさんが収拾付けければ良かったのかもしれないね」

「そうもいかないでしょ」

アリスさんと神綺さんを見ながらそう思ったのだが、夢子さんとしては違うようだ。

「そうなんですか？」

「女の子には見せたくない部分だってあるのよ」

「そうですか」

「分かってなさそうね……」

「……恐らくは」

「まあ気にしないでいいわ」

「……」

気にしないでいいと言われると……分らないので諦めた。

「さてじゃあ急ぎたいけど……夢子あの子達に連絡入れてもらっていいかしら？念には念を込めて」

「既に声を掛けてます。神綺様の事ですから必要だと思いましたし」

「出来た従者で助かるわ、それで夢子、あの子達は？」

「連絡は入れましたが居ないようです」

「そう、なら仕方ないわね」

側から見ても過剰戦力な気がするが、これ以上増えかけていたのか。いや有難いが。

「ただユキとマイが連絡付かないのは珍しいわね」

「神綺様、正確にはユキはいつもの事です。マイと連絡が付かないのが珍しいです」

「そうね……よく考えたらユキと連絡付かないなんてよくあったわ。今度叱っておきましよう」

「……もしかしたら」

「どうしたのリスちゃん？」

「付いて行った可能性があるんじゃないかって」

「付いて行った？」

「二人によ」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百八十話 法界へくgang of four.

「今日も寒い。がんばろー！」

「……」

「あれ？マイどうしたの？」

「……お気楽過ぎ」

「えー！」

「……」

「いいじゃんねえ。君達もそう思わない？」

「いいじゃんいいじゃん。早苗もそう思うだろう？」

「あははは……」

頼もしいと思いつつお気楽過ぎないかと思わされる。

ここからは危険な状況な筈なのに。

「……大丈夫？」

「ええ、心配有難うございます。マイさん」

「振り回されるのは同じだから」

「……返事はし辛いですね」

「なんの話ー？混ぜてよ」

「あんたにしつかりしてと言いたいのよユキ」

「え？しつかりしてるじゃん」

「……？」

「酷い!？」

「早く行くわよ」

「うー……うん」

唸りながらも渋々と従う。

これから彼女達ですら訪れた事がない場所だ。

「法界、場所は知ってるけど行ったこと無いんだよねえ」

「必要が無いもの」

「えー、それじゃあ二人とも頼りにならないのか？」

「……」

「ちよつとぬえさん!？」

「事実だろうか？」

「……貴女達は魔界を歩けるの？」

「え？」

「何も情報無しで魔界を歩き回れる？法界へと向かえる？」

「……」

「それじゃあ私達は帰るわね」

「え、マイ？どうしたの？」

「帰るわよユキ」

「ええ!？」

「ええじゃ無いわよ。必要ないと言われているのだもの。ねえぬえさん？」

「……いやー居てもいいんじゃないかな？」

「……それはなんで？」

「皆で居た方が賑やかだろう？」

「そうだそうだい」

「ユキ、静かにして」

「……」

ユキさんは黙り始めた。

と言うか……：空気が悪いんですが大丈夫でしょうか？

「私達だって別に暇ってわけではねえ？」

「え？マイ暇だっ」

「ユキ」

「……」

「それで、ぬえさん」

「……手伝ってくれると助かる」

「魔界でイキると大変な目になるわよ」

「……くう!!」

「……あのぬえさんが圧倒されている。

「正論だけをぶつけているせいでぬえさんも反論出来ない。」

「……早苗さん、これでいいかしら?」

「あの……」

「何？」

「師匠と呼ばせてください！」

「……は？」

「マイさんは最初は怖そうないメージがありました、今はカッコよくしか見えなかつた。」

「よかったじゃんマイ。弟子だつてよ」

「……不味いのはぬえさんだけだと思っただけど」

「でもマイ、魔界にまで来た人達だよ？」

「……あー」

「私は真面目な方ですからね!」

「あれ? 早苗って常識に囚われないとか言ってなかったっけ?」

「……言っていました」

「……もう行きましょう。考えるだけ頭痛くなるわ」

「痛い? 薬飲む?」

「……殆ど貴女のせいだったんだけどねユキ」

「え……?」

「……はあ」

三人に振り回されて頭を抱えながらマイは進んだ。

「案外封印を解くって割には何も居ないんだよね」

「そうだな。ムラサ達の船が来てないな」

「そんなデカイ船だったら魔界に入る時気付きそうだけどね」

「……甘いよ」

「え？マイ何が？お菓子？」

「……」

「師匠、どういふことか聞いてもよろしいでしょうか！」

「……」

「おい流石に可哀想だし普通に聞いてやれ」

「……貴女が一番真面目なのが気に食わない」

「なんでだよ!？」

「……多分普通の船じゃないんでしょ？神綺様とて把握出来るなら動くだろうし」

「だったらまだ来てないって事じゃ？」

「……だったらいいのよ。問題は既に魔界にいる時」

「え？だって居ないって」

「気付かない可能性の話したでしょユキ」

「……………うん？」

「万が一船がそう言う仕様なら気付かれずに封印が解かれるって事ですよ」

「え!?!それ大変じゃん!!」

「……………」

「そう言ってるんです……………」

「急いで向かわないと!!」

「落ち着いてください。今向かってますし」

「そう言えばそうね」

でも尚更急がないといけないだろうと思わされた。
万が一手遅れだったら彼に申し訳立たないから。

「絶対に止めて見せる。彼のためにも守矢だって危険かもしれないし」

「そうだそうだ。絶対にムラサ達を許しはしないよ」

「なんか分からないけど私も頑張る！」

「……」

空気が変わる遂に着いたんだと理解する。

ここからが本番だと自分に言い聞かせて法界へと足を踏み込んだ。

—————
t o b e c o n t i n u e d
—————

百八十一話 追いついた者達～there is an

abnormality here.

「急げば間に合うかしらね？」

「さあ……？ 確信は出来ません」

恐らくは先に法界へと向かった早苗さん達を追い掛ける。

ここからはだいぶ遠いらしいが仕方がない。

と言うか……

「落ちないように気を付けてくださいいね」

「はい、気を付けます」

夢子さんに乗せてもらってるのに文句なんて言えるわけがない。
空を飛べないから仕方なくはあるんだが。

「本当は貴方を連れて行きたく無かったのだけど」

「いいじゃんいいじゃん。男なら当たって砕けるだ」

アリスさんは残っていて欲しいと言った感じだったが、魅魔さんの反対や一人で魔界に放っておく方がまずいと判断して連れてかれた。

「あの二人を先に連れて行った意味が……」

「まあ先に対処出来る可能性も上がりますし……」

「それもそうね」

現状はプラスに考えるしかない……誰が悪いや誰が何したとか考えてばかりでは仕方ない。

「暗くたって仕方ないからなあ。下とか見て暗い気持ちぶっ飛ばせ」

「下……」

魅魔さんの言う通り下を見る。そして後悔する。

「……高くないですか？」

「下は危険なもの」

「それは分かりますが……」

下は川なのだろうか？ いや川とすら思えない。

それだけではなく、瘴気を纏っているように見えて近付くと危険に思える。

その二点から落ちたら助からないような恐怖がずっと残っている。

「ただ夢子、危険だったら彼を落としても注意しなさい」

「了解です神綺様」

「えっちよつと待ってください」

「そうは言っても夢子が大変なことになっても嫌だし……」

「……母さん」

「……冗談よアリスちゃん」

「冗談には見えませんでした……」

「大丈夫、大丈夫よ」

「……彼が大変な事になったらもう二度と帰らないから」

「ちよつと……ちよつと!!」

アリスさん……目がマジだ。

有難いけど。それと同様に神綺さんが可哀想である。

「夢子、命に代えても守りなさい」

「了解です神綺様」

「流石に自分も大事にして!？」

「でも……アリスちゃんに嫌われたくないから……」

「流石にわざととかでなければ文句はありませんよ……」

「いや、人の人生って一度だけでしょ？そんなお気楽じゃダメでしょ」

「だからと言って皆だって同じじゃないですか」

「一緒？一緒のわけ無いでしょ？」

「え？」

「ただの人間と同じ程度で死ぬなら神やら魔族やら魔法使いやらの分類は必要ないもの」

「それはそれで極端な気がします」

「でも実際私達の方が……いや」

「ん？どうしたのさ」

「あんたが共倒れになってくれるのが一番かもね」

「おー期待するといいき」

「だから喧嘩しないの」

不安と頼もしさを改めて感じながら目的地へと辿り着く。

法界、見たところ魔界と変わらないが……

「……………うぶ」

「大丈夫かよ」

魅魔さんにさえ心配される。よほど酷い顔をしてるのだろう。それもそうか……

踏み込んだ瞬間重圧を感じえづく。

必死に吐き気を抑えて足を進める。

「大丈夫です」

「休め……とは言えないな。休める場所なんざ無いし。必死に耐えろよ」

「はい……」

耐えなきや、戦闘すら起きていないんだ。

資格が無いと言われればそうだとしか言えない気もするが……

「分かれる……は得策では無いわね。纏まって動いた方が良さそう」

「いいのかい？時間は無いんだろう？」

「時間は無くても、リスクを払う必要はないわ」

「はいはい。リーダーに従いますよ」

「私じゃない気がするけど……まあいいわ」

「それでアリスちゃん、どうするのかしら？」

「まずは母さん。封印された場所は分かるかしら？」

「……」

「そう」

「ごめんねアリスちゃん……」

「別に怒ってないわよ」

「ほんと……?」

「分からないならまず二人を探しましょう。状況の整理がしたいし」

「そうね……方が一戦闘とかになってるかもしれないし」

「ここからは音は聞こえないとは言え何処かで戦ってる可能性だってある。

目標が先に見つかる可能性もあるが、探し回るしかないな。」

「動き回るが大丈夫？」

「……どうにか」

いつまでもふらついてなんていられない。

無理にでも立ち上がって落ち着かせる。

「いつぞ吐いてきたらどうだ？」

「そう言うわけにも行きませんので……」

流石に吐くのはな……しんどいとしても。

「そうだ、折角のこの場で吐かれても困るな」

「……え？」

聞き覚えのある声、ぬえさん達じゃなくて。

「ナズーリンさん」

「やあやあ。この前はまんまとやってくれたね」

「……いつのまに法界に」

「それを言うつもりはないさ」

「……アリスさん神綺さん。既に法界に来ているようです」

「そのようね、どうにかしないと」

「させると思ukai?」

ナズーリンさんがスペカの準備を始める。時間を取られるわけにはいかないのに
……

「さて、時間稼ぎにしなければならないだろうけどやらせてもらおうよ」

一刻も早く向かわないとならないと思いつながら、立ち塞がるナズーリンさんと戦うこととなった。

ナズーリンさんにとって残念な事と言えばこちらのメンツが尋常じゃないため勝負

は一瞬で終わった事だろう。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百八十二話 不思議な人間 Who is.

「ねえマイー、今音しなかった？」

ナズーリンとの戦闘が始まったのを聞き取っていたものたちがいた。

「音くらい、するものでしょ」

「えー、でも気になるんじゃない？」

「一々気にしてる時間は無いでしょ？」

「それはそうだけどさあ……」

他のメンバーは気にしてはいない事をユキだけは異様に気にしていた。

「今は優先すべきことが……すみませんがお願いします」

「分かったよお……」

ユキは渋々納得しようとするが……

「また……爆発音じゃない?」

「どうだろうなあ、流石に誰かいるのは分かるけど……さつきまで居た場所な上船の音じゃないしなあ」

「ちよつと見てくる!!」

「ちよつとユキ!?!」

マイの言葉も聞かずに走り去って行く。

「急いで追いませんと」

「……いい」

「ユキさん……?」

「このまま行く」

「それで大丈夫なんですか?」

「……足手まといが消えたから」

「足手まといって……」

「実際そうでしょ? 言ったところで話を聞かないし」

「……」

どうしよう、この場で消えてしまった以上は否定は出来ない。

「早苗、気にしないで行こうぜ」

「分かりました……」

時間がない上にぬえさんの後押しもあり渋々従う事にした。
せめてユキさんの無事を祈りながら。

「……少しはマシになって来たが」

魅魔さんが少し空から探索すると言って離れていった。

そのため動くに動けず現在岩にもたれて休んでいる。

「こつちを氣遣つてくれたかな……」

アリスさんと夢子さんは神綺さんの近くにいるようだ。
多分近くには居るだろうけど。

「さて、準備しないとな」

そろそろ帰ってくるだろうしと。

立ち上がり軽くストレッチをする。

これ以上奥に入れば更にキツイだろうし気の持ちようだ。

「はーん。今準備って言ったね」

「え？」

目の前を見る、あれ？この姿は？

「魔理沙さん？いつの間に魔界へ？」

「ふむふむ。そこの人間！」

「え？なんですか？」

てつきり魅魔さんだけじゃなくて助けに来てくれたのかと思っていたが……
なんだか様子がおかしい。

「やーつと見つけた！」

「えつと……有難うございます？」

しかし魔理沙さんじゃなければ誰だと言うんだ……？
いや、変に考えても混乱するだけだ。

「それじゃ終わらせちゃおうか」

「終わらせつつえ？」

突如弾幕を放ってくる。

流石に対処出来ない……それどころか何が起きてるのかさえ理解出来ない……

「当たっ……」

至近距離の弾幕を避け切れるはずもない……そう思っていた。

「……あれ？」

「大丈夫ですか？」

「はい……大丈夫です」

アリスさん、神綺さん達どころか魅魔さんですらない……
誰なんだこの人？

「弱いものイジメはいけませんよ」

茶色に紫混じりな髪に白黒の服を来た女性だ。

……服の色だけ見ると二人とも似てるな。

「なんだ？そいつの仲間か？」

「仲間ではありませんが……弱い者の味方ですよ」

「なにをー！お前が封印を解きに来た奴か？」

封印を解きに来た？いやそれは違うが。

まさかこの魔理沙さんに似てる人は危惧したフリをして変装して封印を解きに来た

のか？

「仕方ありませんね……力を使うのは避けなかったのですが」

「纏めてやってやるー」

先程以上に広範囲の弾幕を放ってくる。

避けるのは到底不可能だが……

「南無三」

弾幕の中を通り抜けて敵へと近づき掌底を決めた。

あれ……？ 弾幕勝負？

「ぐわー。そんなのありなの？」

「いじめっ子にはいい仕置です」

「ちくしよー覚えてろよー！」

そう言つて負け惜しみを放ちながら……

「神綺様に言いつけてやるからなー」

「え？」

逃げて行つた少女が最後に放つた言葉に驚く。
慌てて追いかけて……られるわけもない。

「もしかして神綺さんの関係者？」

「どうかしましたか？」

「いや……大丈夫です。助けただき有難うございました」

見知らぬ女性にお礼を言う。

もしかしてさつき話していたユキさんだかマイさんだかだろうか？

「いえいえ、困っている人がいれば助けるのは当然です」

「それが本当に出来る人は珍しいと思うんですけどね……」

「そうかもしれないですね。ですが誰であれ助けられるものは助けるべきでしょう」

「はあ……凄いですね」

流石にそこまで言い切る人は幻想郷内でもほぼいないだろう。

「しかしそうだと化け物とかでも対象ですか？」

「流石にその人のせいで他の多くの人に害になるとか言うならば残せませんが。罪もな

いなら魔族も人間も同じです」

「……成程」

本当に聖人と呼ばれるタイプの人なのだろうなと思わされる。

こう言う人だらけなら幻想郷も危険が減るのだろうか？

「そう言えば貴方は一人ですか？それならばあの子達に言つて……」

「いえ、大丈夫です。皆で来てるので」

「分かりました。では貴方にご武運を」

彼女がそう言うのと後ろから声がある。

焦ってアリスさん達が駆けて来た。

「小野寺君大丈夫!？」

「アリスさん」

「ごめんなさい遅れたわ。大丈夫だったの？」

「はい、なんとか」

「心配かけさせないでね。貴方が死ぬとアリスちゃんが……」

「誰のせいで気付くの遅れたと思ってるの？」

「……ごめんなさい」

「いや、自分も助けてもらったわけですし……」

「え？何処にいるのかしら？」

「恐らくマイさんかユキさんに……」

後ろを向くが先程の人が居なくなっている。

いつの間に消えたんだろうか？

「あらあの二人が？何処に行ったのかしら？」

「神綺様!?ここですよ!!」

そうするとさっきの黒服の少女が……え？

「あらユキ。マイは？」

「マイは待たせているので今行きましょう……つてあああああ!!」

「どっとうしたのよ」

「神綺様！そいつですそいつが封印から出てきて」

「……は？」

「……」

「あつあのまさか神綺様……？」

「もしかしてだけどユキ。まさか貴女……」

「ごめんなさいいいいいいい」

その後叱られながらマイさん達の方へと向かった。
そこにもおらずにまた叱られていた。

「急いで合流しないとね」

「……そうですね」

「小野寺君どうしたの？」

「いえ……」

無事にユキさんと合流出来たと思いつつ一つの疑問が残った。
さっきの人は本当に誰だったんだ？

t o b e c o n t i n u e d

百八十三話 船を追うく those who dist
u r b .

「マイいいいいいい!!」

「……何してるの貴女達は」

「だってマイに行ってくる言ったのに……」

「ユキが勝手に行ったのにそれにマイが付き合う必要は無いでしょうよ」

「ええ?でもあのマイが……」

「グダグダ言っても仕方ないでしょ?行きましょ」

「そうだね……分かった！マイ待っててね」

「……」

「あれ？夢子さんどうしました？」

「いや……」

何やら夢子さんの様子がおかしいが何かあったのだろうか？

「何もなければいいんですが……」

「実は……マイさん真剣や忙しい時って……ユキさんを邪魔に思ってるんですね」

「ええ……」

耳打ちで衝撃的な事を聞かされる。

ユキさんは気付いていないようだしバレなきやいいが。

「とりあえず闇雲に……つてえ？」

船が飛んでいる。やっぱり法界に来ていたのか……

「皆いました、急ぎましょ！」

「居ましたって何が？」

「船ですよ船。追いかけましょう」

「船なんて無いけど……」

「陸じゃなくて空ですよ？」

「ええ……？」

何やら、様子がおかしい。

それにすぐにアリスさんは気付く。

「小野寺君、本当なのね？」

「え？本当ですが」

「どっちかしら？」

「どっちって……東方面上空ですが」

「皆、準備して」

「え？どう言う事なの？」

「ここまで来れた時点で察せられるかもだけど。恐らく船は人間にしか見えてないわ」
「え？でもぬえは」

あの時見えていたはずだが……

「その時は復活したばかりだったんでしょ？」

「そうですね」

「だから見れたんでしょね。したてなら何も出来なかったでしょうから」

「だったらその後は……」

……そう言えばぬえはあの後すぐに飛び回ったが船を見つけて居なかったな。
そう言う事だったのだろうか？

「逃がすわけには行かないから行くわよ」

「ああ待ってアリスちゃん」

アリスさんを先頭に皆で伝えた方向へと向かう。
その最中他の人影があつた。

「え？小野寺君」

「あれ？早苗さん達ですか？一体どうして」

「船が見えたからですが……これですよね？」

「これですね。合ってます」

早苗さんにも船が見えたか。助かった……

「ふーん。コイツが居るって事は早苗の言っていた事は合っていたか」

「ぬえも居ましたか。良かった」

早苗さんだけ単独って事は無くて良かった……

そしてその後騒ぎ声が始まった。

「マイいいいいいなんで行くんだよおおおお」

「急に居なくなつた貴女が悪いでしょ」

「マイいいいいい」

あつ今マイさん凄い嫌そうな顔をしたな……分からなくも無さそうなのが……

「おっと本当に船があるようだ。見えないが感触はある」

魅魔さんが船を叩いている。

この距離でもやはり見えていない様だがこれなら乗れそうだし大丈夫か。

「早く行くわよ。このまま向かわれてもだし時間が惜しいわ」

「そうですね」

そのまま乗り込もうとすると錨が飛んで来るくる。

大声で告げるが皆気付くのが一步遅れる。

「開海：海が割れる日！」

早苗さんがスペカを発動し下から水が噴き出してきて錨を防ぐ。

幸い同様に見えていた早苗さんのお陰で事なきを得たが危なかった……

「あつちやー……今ので何人か落としかつただけどねえ。攻撃した以上は見えちやうし」

船の中から声がする。それと同時に皆が船を視認出来たようだ。

「でき。ぬえ、いくらなんでもやり過ぎじゃ無い？なんで私達の邪魔をここまでするかねえ」

「先に裏切ったのはそっちだろう？全力で邪魔するさ」

船からあの時の妖怪が顔を覗かせる。

そのままぬえさんと口論になっている様だ。

「あーもうっ……かなりの人数集めてきてるなあ……船には頑張って貰わないと」

「いや、私も出るよ」

その言葉と共に船の中から誰か出てきた。

赤い服に虎柄を纏った様な姿。

髪の毛も虎柄に見えるが、その上に……なんだろうあの花？

見た目だけじゃないな……いつもと違って槍のような武器持ってるから武闘派なのだろうなとは分かる。

「星、大丈夫？」

「聖をここから出せれば勝ちだからね。今ここが踏ん張りどころでしょ」

「それはそうだけど」

「今は宝塔もあるし……何より」

ぬえの方を睨み付ける。

「ナズーリンを虐めたのはコイツらだろう？少しやり返さないと気が済まないさ」

「ナズーリンさん……」

彼女も解放側の妖怪だったのは驚いたが、やはり仲間だったんだろうな。

「ナズーリン……？ 確かあの鼠か」

「ああそうだ。酷い事をしてくれたらしいな」

「……酷い事？ 確かに騙しはしたが」

「そうやってまた騙す気だろうか？ ナズーリンにした事の何倍にも返してやるからな」

「……」

その件はよく分かっている。つい数時間どころか数十分前に起きた事だし。

確かに敵とは言え神綺さんがやり過ぎたイメージはあったかもしれない。

「……そうかそうか。可哀想になあ、だが私に喧嘩を売った以上は後悔させてやる」

「ぐぬぬ。待っていてくださいねナズーリン。仇は取りますから」

「……死んではなかった筈」

「安心しな。一緒の場所へと送ってやるから」

「……だから死んではいませんよ」

ぬえさんも悪ノリしてしまつたが罪を被せてしまつたらしい……

そのまま戦闘が始まつた。無事な事を祈ろうとするが……過剰戦力な気もするしなあ。

それでも無事を祈りつつ、ナズーリンさんとぬえさんに心の中で謝るのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百八十四話 神と妖怪と魔法使いと receive God.

「流石ムラサが頼んだ程だ。中々じゃないか」

ぬえさんどころかユキさんマイさんも居て余裕そうなのはどう言うことだろうか？
やはり彼女達にも残ってもらった方が良かったかもしれない。

「こつちとしては逃がしてしまった人達がいるのが辛いですがね」

神綺さんやアリスさん。小野寺君などは船を追いに行った。

当然必要な事ではあったが……メンバーが過剰過ぎたと思いきり過ぎて相手を過小評価し過ぎていたかもしれない。

「早苗、早く！」

「すみません!!」

スペカを準備して参戦する。私じや戦力にならないかもしれないけど……数の差をもっと作らないと。

「甘いです」

相手の手に持っている宝塔が光り出す。

「危ない」

「遅い。宝塔：レイディアントトレジャーガン」

「っ」

宝塔が光が全員へと襲いかかる。

慌てて避けたと思つたらその光が光弾となり降り注ぐ。

「マイ、危ない！」

ユキさんがマイさんを庇い負傷する。

「大丈夫ですか!？」

「この程度ならまだゲームオーバーにはならないさ」

怪我はしているが大怪我では無さそうで安心する。

そもそも弾幕勝負で大怪我はしない筈だが、相手が相手なせいで信用ならないし。

「戦闘不能になってくれて居たら有り難かったのですが」

「そう簡単にやられるものかって！」

ユキは立ち上がり弾幕を返す。

私に比べて明らかに綺麗で強い弾幕だが……

「そのくらいじゃどうしようもないでしょう？」

簡単に躲される。追撃する弾幕達も全部避けられた。

「マイ、合わせて」

「……仕方ない」

マイさんが渋々とユキさんに合わせて弾幕が放たれた。

これが協力技……ロマンでしか無いですよね!!!

「確かに合わせれば強いかもしれませんが……」

宝塔から放たれたレーザーに弾幕は全て飲み込まれた。

「……は？」

「残念ですが魔法使いが神に勝てるんでも？」

「神……？」

幻想郷には神様が多い事は分かっているけど、それでもまさか敵になるとは……

「はあ笑えるねえ」

「……ぬえさん？」

「いや、だつておかしいだろ早苗」

「何がですか？」

「だって神様が人間の封印を解きに來たって？お笑いじゃないか」

「……そっか」

確かになんで神様が人間一人のために魔界まで來てるのだろうか？

「話す必要はありません。終わらせます」

また宝塔が光る。レーザーが飛んで來るのだろう……
いつまでも避け切れるとは思えない。

「面倒だなあアレ」

「ぬえー、だったらどうするのさ？」

「ちよつとユキ盾になってくれない？」

「私受けたばっかりなんだけど!？」

「もう一回くらい行けるでしょ」

「うぐ……分かったわよ」

「……もう一度受けれるとでも？」

「さっきの錨のが怖いしなあ。問題無いだろうね」

「ちよつと受けるの私なんだけど!？」

「頑張れ！」

「ええいつ!かかって来い！」

「……なら遠慮はいりませんね」

「ちよつとは遠慮してよおおおおお!？」

「嫌です。寅符：ハングリータイガー」

宝塔の光が彼女を纏いそのまま突っ込んで来る。

これはさつきよりもまずいのでは？

「もう腹は括ったんだ来いよおおおおお!」

そのままユキさんに直撃……なんで避けないんですか!？」

「ぐううう……」

直撃したユキさんはふらついている。流石にこれ以上はまずい退がらせないと……

「ユキさん一度退がって……」

しかし一度ぶつかつた光弾がそのまま回り再びユキさんを襲い出す。
これはまずい……

「ユキさん……!!」

「ありやりや……流石にキツイかな……頑張つて」

「……全く本当に足手まとい」

「マイ……?」

ユキさんに当たる直前、マイさんが止めている。勢いを殺しきれずにダメージは負つたようだがユキさんは無事だ。

「最初から避ければよかつたじゃない。面倒かけさせて」

「だって耐えて言われたし……」

「……本当にこれで何も無かったらどうしようかしら」

ぬえさんの方を見る。いつの間にか相手の裏をとっていた……気付かなかった。

「ぬえさん……!」

「おまつ早苗しーっ」

慌てて口を塞ぐが間に合わない。

相手に聞こえてしまったようだ。

「いつの間に……ですがギリギリセーフですね」

「本当に?」

「……なにを言いたいんです？」

「さーて、約束通りどうにかしてやったよ」

「……ええ？」

ぬえさんは何をしたのだろうか？

何かをしたようには見えないけど。

「そう、なら身体を張った甲斐があるってものだ」

「何をしたかは知りませんが、その程度でどうにかなるとでも？」

「へえ、ならやってみたら？またユキが受けてくれるよ」

「なんでええええ!!？」

「ぬえさん……ユキさんは流石に……」

「いいでしょう。手負いから終わらせましょうか……寅符：ハングリータイガー」

しかし唱えるが何も起こらない。

「あれ……？ちよつと宝塔、何をしているんです？」

その後も何度もスペカを唱えているようだが反応はない。

「……なんでー……」

「おやおや、どうしたんだい？」

「貴女……何をしたんですか!!」

「いやいや、それはこっちのセリフだけど」

「何を？」

「一体あんたは『何に』唱えているんだい？」

「何に……？」

ぬえを除く全員が宝塔の方を見る。それは宝塔ではなくただの石だ。

「あれ？マイーさつきまで宝塔じゃ無かった？」

「……そう言う事」

「お？分かったの？」

「……さつきの隙に宝塔をすり替えたのね」

「そう言う事。気付かないでやんのー」

「宝塔は、宝塔は何処ですか!？」

「さあねえ。無くしちゃったよ」

「そんな……あれが無いと……無くすなんて……」

「おいおいそんな嘆いている暇はないぞ？」

「……え？」

「さあてこつちの番だ」

「……」

彼女は逃げ出す。心境的には追いたくないけど……

「さて追い掛けるぞー！この怪我の復讐だー」

マイさんとユキさんが追いかけて行つた。

流石に止める気は出ない……

「なあ早苗」

「どうしました？」

「私も追うから早苗は船を追っておいて」

「ぬえさんも追うんですか？」

「万が一宝塔を見つけれられるとまずいしねえ」

「それもそうですか。お願いします」

そのままぬえさんは後を追って行った。

さて私も船を追わないと……向こうはこっちよりも過剰戦力とは言え無事でありますように。

t o b e c o n t i n u e d

百八十五話 封じられし超人
e n t i t y . t r u e i d

「本当にあの船はなんなんだ？」

全力で追い掛けているが追いつきはしない。

魅魔さんや神綺さんですら追いつかないのだからどれ程のスピードが出てるって話なんだ？

「遠ざかりはしないものの、このままじゃ近付けない」

「だけど、逃がすわけにも行かない」

「そう言うこと。どっちが先に力尽きるかね」

「逃したくはないですが……」

「だけでもあの船について何も知らないし、それが可能かどうかはまだ難しいねえ」

「それは……」

「実際にあの船がどうなってるのか分からないし、燃料などもどれ程あるか……それどころかあるかすら分からない。」

「永遠に動き続けるなら勝ち目なんて無いものね」

「流石にそれは無いと思いますが」

「あら、どうして?」

「永遠にあのスピードなら封印なんて出来ないでしょうし」

「成程……確かにそうね」

あの船長も油断するタイプには見えなかったし捕まったのにはやっぱり理由があると思うから。

「このままだと法界を出ますね」

「……目的は既に果たされている？」

「……どうなんでしょう」

そんな雰囲気は感じられなかったし足止めされた以上は今からしに行くように見えたが……

「それに既に解かれていたらもう出て来ていてもおかしく無いんじゃない？」

「そう言えば……一向に姿を見せませんね」

封印が解かれたのだとしたら既に姿を見せていると思う。
だからこそまだかなと……

「……」

まさかとは思うが少し前にあつた長髪の女性。

あの人が関係してたり……？

少なくとも助けてくれたとは言え謎だらけだし……

「……分からないものを考えても仕方ないか」

「あつ法界を抜けましたね……」

身体が軽くなると思いきや、逆に徐々に慣れて来ていたため合わなくなる。

ただ……法界に入った時よりはマシか。

「ふっふっふ。しかし相手も迂闊ね」

「どうしたんだよ神様。疲れておかしくなったか？」

「今は貴女の戯言に付き合う暇はありません」

「ならどうするんだい？」

「ここから先は私の世界よ」

神綺さんが光るとあらゆる物を動かした。

木が、岩が地上にあるもの全てが船を襲う。

「よしっ、これでいいでしょ」

「えっげつな……」

船はどんどん降下して行く。これなら追い付くだろう。

「ただ勘違いしないで。本番はここからよ」

「そうね。アリスちゃんの言う通り」

「それじゃあ動くとしましょうかねえ」

魅魔さんを始め皆で船を取り囲んだ。

流石にこれで逃げ出されると本気で困る。

「ああもうっ何してくれるのさ……船が」

「必要ですか？」

「いいや…は休んでて。私だけで良いよ」

一部聞き取れない会話を聞いていると船から一人出て来た。

この船の船長。ぬえがムラサと呼んでいる何度目かの相対となる幽霊だ。

「全くさー、なんでそんなに邪魔したいわけ？」

「私の敷地内で封印を解くなどさせるわけにもいかないでしょう」

「ええええい、邪魔だなあ……」

村紗がスペカを唱えるとすぐに魅魔さんや神綺さんのスペカに飲み込まれる。

2、3枚と唱えても圧倒される姿に力の暴力を感じた。

「こんなのデタラメだよ……一輪呼べばよかったなあ」

「こちらも止めないといけない故に慈悲は無いけど……まあ不憫にしか思えない。

「星もまだなのとおお。絶対こっちの方がキツイでしょ」

「向こうか……」

正直早苗さん達の事は不安である。

だが……託された以上信じないといけない。

「……つと何か来たわね」

探知に専念していたアリスさんが誰かを発見する。

話によると接近してきているらしいが……

「今言ってた星って方でしょうか？」

「夢子。気を付けて」

「了解です」

「え？星来たの？だつたらここから」

一瞬相手が喜んだ顔を見せたが……

「私です！」

「早苗さん!!」

早苗さんが追いかけてきたようだった。

と言うか早苗さんが来たと言うことは……

「今相手は宝塔を無くして皆で追い回している所ですね」

「ちよつと星また無くしたの!？」

「いやすみません……ぬえのせいです」

「そうなんだー」

半ば諦め気味でこちらを睨んでくる。

「……どうするかなこれ」

「やっぱすみません。出ますね」

「ちよつと聖!?復活したばかりで体調も万全じゃないだろう?」

「しかしこれ以上皆がやられているのを放つてはおけません」

そして船の中から誰かが降りてき……

「……」

助けて貰ったあのんだ。見慣れないし少しはムラサ達の方の可能性も追っていたが
……

「初めまして聖白蓮です」

「ああよく分かった。封印されてたのはアンタだねえ」

魅魔さんの言葉で気付かされた。

この人が魔界に封印されていた人間……今回の騒動の中心だったのか。

「さて、まだ本調子では無いと思いますが村紗達を守るために本気出させてもらいます」

「やってみなさい」

今の言動もそうだが……さつき助けてくれたことも含めて本当この人封印される程の人間なのか？

その疑問が頭に残った。

t |
o |
b |
e |
c |
o |
n |
t |
i |
n |
u |
e |
d |

百八十六話 超人と人間 < difference in

force.

「流石に簡単にはいかないか」

こちらの五人と対等に戦っている姿を見て驚かされる。

本当にこれで万全じゃないのか？

「ちよつと神様。なんてものを封じてるんだい？」

「私だって知らないわよ」

法界にここまで人間が封じられているだなんて思つてもいなかつた。千年も前にこのような人間が居たのか……しかも寿命などで死なずに。

「普通千年も生きてたら気にするもんだと思うけどねえ」

「口動かす暇あったら戦いなさい」

「分かっているっての」

「おっと、そうはさせない」

さつきまで満身創痍だったムラサも復帰して来る。

魅魔さんが慌てて対応したが、更に厳しい状況となった。

「夢子、まだ行ける？」

「大丈夫ですが……決め手に欠けます」

「そうなのよね……」

人間を逸脱したようなその能力はこちらのスペカを全部捌いて来る。

「ほんつと面倒。こうなるならゆつくり話し合いで解決した方が楽だわ」

「話し合い？」

その言葉に相手は手を止める。

「え？通じるの？」

「通じると言うか……こちらとしても聞きたいことがありますので」

「聞きたいことねえ」

「どうして妖怪がこんな事をしてるのですか？」

「妖怪？私は神だけど？」

その質問にあっさりと返す。

「私も妖怪と言うよりは亡霊かねえ」

魅魔さんの扱いは困るかもしれない……

ただ魅魔さんが妖怪じゃないとなると……

「私は神綺様に作られた魔界人です」

「えつと……私が魔法使いで」

「私が巫女で……あれ？妖怪なんて居なくないですか？」

正確には妖怪はぬえがいるが、今は居ないしなあ……

「魔法使いに人間は仕方ないとは言え、貴女達は妖怪でしょう?」

「はあ? 何言ってるのよ。私は神よ神」

魅魔さんは気にしていなさそうだが、神綺さんが猛反発する。

妖怪扱いされるのがそこまで嫌だったのか。

「神と妖怪、どこが違うんですか?」

「神と妖怪……?」

遠くで聞いていた自分の耳にも入る。

だが何を言っているのかを理解出来ていない。何が同じなんだ……?

「逆に何処が同じだと思ったのよ」

「差があるとでも?」

「当然でしょ。例えばここを作った神様が、この妖怪達と同じだと言いたいわけ？」

「それは絶対におかしいです」

早苗さんも乱入して来る。

確かに上司の神様達の対応を見ればそう思える。

「違いますよ。逆に何が違うんですか？」

「何処が一緒よ。妖怪は人間を餌にするのもいるし、妖怪と人間の役目も違うわ」

「役目や食糧って全部の妖怪がってわけでは無いですよね」

「……少なくとも人間は妖怪や人間を全く食べないと思うけどね」

「……どうしても分かり合えませんか」

「むしろ妖怪以上にそこまでして妖怪を庇うアンタの方が危険にしか思えないけどね」

「……聖は私達だつて助けてくれたんだ！お前らには分からないだろうな!!」

「分かるつもりは無いわ。貴女のせいで危険に及ぶ人間は多そうなもの」

「大丈夫です。私は全てを救いますから」

「全て同じと言いながら神みたいなの振る舞いをするのね。結局貴女が傲慢なだけじゃ無い」

「やはり対話は不可能か。誠に愚かで自分勝手な者達め」

喚く超人は力を解放する。

力が数段上がっているような……ますい。

「全員伏せてください!!」

「南無三!!」

先程の神綺さんのように周囲を覆い尽くすほどの弾幕が散りばめられる。

いや……これは避けられるほどじゃ無いし弾幕と言うにはとても横暴だった……

—————

「痛い……」

全身を打ったような痛みで目を覚ます。気絶していたのか……

「目が覚めましたか」

「っ!?!」

先程の超人、それに幽霊がいる。
捕らえられては……いないな。

「先程ぶりと言うべきでしょうか？」

「そのまま放置とは随分と余裕なようで……」

「ええ、だって貴方は敵じゃ無いでしょ？」

「え……？」

「先程襲われていたと言うのに……また捕まるのは流石に恥じた方がいいですけど」

「んー？」

もしかして、俺捕まってたと勘違いされてる？

「だけでも大丈夫です。今は完全復活しましたのでこの聖白蓮が保護しましょう」

「聖、でもそいつは……」

「ぬえって方と一緒にいたんですよ？だったら」

「むー、でもアイツは敵ですよ？」

「いいえ、味方ですよ」

「むー……」

「あの……」

「どうしました？」

「人間は敵じゃ無いんですか？」

「……いえ？人間は敵では無いですが？」

「……」

やっぱりこの人には違和感がある。

「……人間も妖怪も救う気ですか？」

「当然です。それが私の役目ですから」

「……それは人喰い妖怪とかでも？」

「先ほども言いましたよね？」

……やっぱりそうなんだよな。

この人にとっては人間よりも妖怪の方が弱いとなっている。

それなら人喰い妖怪なんて存在しない筈なのに。

「先程も言いましたが……全てでは無いとは言え殆どの妖怪が人間よりも強いですよ？」

「それなら迫害されていない筈では？」

「今は……少なくとも幻想郷では全ての妖怪が迫害されているわけでは無いですよ」

「……私の封印を解くのを妨害して来たのに？」

「……それは俺が原因です」

「貴方が何か出来たとでも？」

「魔界に封印された人間……そうとだけ聞いていましたから。危険にしか思えませんでした」

こうなつてしまつた以上は今回もまたダメなんだろうなと自覚している。

だからこそ……次に繋げるために情報を集めなきゃいけない……楽に死ねればいいが。

「ああそうですか……確かにそうですね」

「聖、理解するんだ」

「ええ、だって普通に危険人物としか思えませんし」

「それでいいの聖？」

「大事なのはそこじゃありませんから」

「な……」

「では貴方、私の事は今はどう思いますか？」

「……危険な人物です」

意識は変わらない。この人が幻想郷で何をするか予想がつくしそれはさせてはいけない。

だからこそ、言葉の真意を探すために一歩踏み込んだ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百八十七話 理想と目標
what to do da
n g e r l a d y .

「危険と来ましたか。この状況にも関わらず」

「……言いました」

間違い無く放置は出来ない。

今までみたいに異変に実害があるわけではないが、皆を一撃で対処出来る力を持つものが妖怪の味方をされてもどうしようもないのだが……

「ねえ聖、やっぱりコイツも同じだよ。残しても仕方ないって」

「いいえ村紗。私達が人間も救うのが役目ですよ」

「……人間を救う？」

「何か問題が？」

さつきも言っていたが本当に救う気なのか？

明らかに出来るわけがないように思えるが。

「人間に害ある妖怪を救うのならば、人間を救う事なんて無理ですよ」

「いいえ、出来ますよ」

「出来ません。妖怪は本能で動くから、人間を餌だと思えば妖怪とは永遠に分かり合えませんが」

「でも……いつかは……」

「いつか、万が一それが出来たとしてもそれまでに犠牲になる人がいるでしょう。それも少なく無さそうです」

「だったら妖怪は退治されるのが正しいと？」

「別に、そもそも全ての妖怪を退治するわけでは無いですよ」

「全部じゃなくても退治される妖怪が居るのは問題ではなくて？」

「……退治される妖怪が可哀想なら食べられる人も可哀想な気がするんだけど」

「村紗？」

「いやさ、聖……最初はこんな奴の事なんてって思ったけど結構正しい事言ってるじゃない？」

「正しい事？何を言っているのです？」

「あのさ。私も気になっていたんだけど聖は全ての妖怪を助けるの?」

「そうですね何かありますか?」

「それってさ。コイツとかみたい今回襲ってきた奴らも助けるって事でしょ?」

「全てを助けますからね」

「やっぱ……そうだよね」

「村紗……?」

「聖。やっぱそれは無理かもしれない」

「一体何を?」

正直驚いた。この人の説得は無理だろうと思っていた。

現状無理だが……それ以上に無理だと思っていた船幽霊の方がそう言い出すとは思っていなかった。

「正直、最初に聖の事を悪く言ったのはキレそうになったけど……。敵をも助けてなんて居られないよ」

「いえ、いつかは分かり合える筈……」

「……いいや分かり合えないよ」

「……村紗。貴女がその人間に乗せられるとは」

「確かにさ、乗せられてるよ」

「だったら」

「でもさ、事実なんだよね」

「事実……?」

「ねえ君。嘘は言っていないんだよね?」

「嘘……?」

いきなり話を振られたがどう言う事だ?

「さつき言ってた事だよ。嘘では無いんでしょ?」

「嘘は言ってません」

「……だろうね。妖怪を助けてばかりじゃいつまで経っても人間は敵のままだよ」

「村紗もそう思うのですか?」

「別に全部を助けちゃダメってとは言わないけどさ……どうしても仲良くなれない相手はいるもん」

「……」

「聖が人間と仲良くしろって言えば従うけどさ。幾ら聖が言ったって私達や聖を封印した人達とは絶対に仲良くなんて出来ない」

「……それはそうですね」

「既に生きてはいないだろうが、流石に自分を封印した人間と仲良くは出来ないだろうな……」

「自分達を餌にする妖怪。人喰い達が今の幻想郷に居るのは私達だって知ってる。ルールには縛られてるけど本能的に生きているから……いつそのルールを破るかなんて分からない」

「なら妖怪を見捨てろと？」

「そうは言わないよ。さつき聖も言っていたけど、分かり合える人間と妖怪は居る筈」

現に私もそうだしと言っているが……正直この子が分かり合えるのかは不安でしかない。

「そしたらやっぱり妖怪だけが無慈悲なのでは？」

「別に人間だってそうさ。悪人を救う必要なんて無いんだよ」

「村紗、それは違います悪人であろうと救うのが私達の役目です」

「そうだね。ただそれは今じゃ無い」

「今じゃ無いとは？」

「妖怪も人間も、まずは救う人を救おうよ」

「救う人ですか？」

「さつき言つてたように不当な扱いを受けている妖怪だつて善人だつて居るんだから悪人よりそつちじゃ無い？」

口を挟めないがいい方向に進んでいっている気がする……多分……
ただそれ以上に拗らせているようなため不安はまだ残る。

「まずは聖の味方を増やさなきゃダメ。今の私達の人数じゃ助けられる人数なんてたかが知れてるし」

「味方ですか……増えますかね？」

「そのために一輪が人里で準備をしているんだし無理では無いでしょ」

「人里で……？初耳ですが」

「だってそれを言う前にコイツらが襲って来たし」

そう言いながらじーつと見て来る。

「えつとごめんなさい……」

「しかし人里ですか……どうしろと？」

「どうしろって変えなくていいでしょ」

「大丈夫なんですか？」

「聖が妖怪を助けるなんて皆知ってるから。一輪もそう動いてるでしょ……流石に人喰いを助けるとか言わなければ」

「いつかは助けるかもしれませんがね」

「まだ言うんだ聖……」

「ええ勿論です。しかし先ずは善人など優先すべき人物がいますね」

「それはそう。私達だって聖の味方してくれる人間や妖怪を助けたいもん」

そう言いながら此方を見て来る。

「勿論良いよね？全ての妖怪がダメとか言い出さないよね？」

「それはまあ……そうですね。実際自分も仲の良い妖怪は居ますし」

「ああそう言えば君、あのぬえとも仲良いんだっけ……変わってるね」

「……否定は出来ません」

ぬえさん、色々と凄くはあるんだが……確かに付き合いがある人物は変わってそう
だ。

「私達は今度こそ聖に幸せになつて欲しいから」

「……」

良い人ではあるのだろう間違いない。

ただ皆を倒したりして彼女には含むものがある。

それと同時に千年近く封印されていた事にも同情し思考がぐちゃぐちゃになって来
る。

そのため、彼女達に対して考えることを一度置くことにした。

「さて、じゃあ行くかうか」

「……」

正直、死ぬと思ってたが生き残れるとは思わなかった。

しかも良い結果に近い……危険ではあるため今後見ていかなきゃならないだろうけど……幻想郷には霊夢さん達もいるしまだなんとかか。

「村紗。この人はどうしますか？」

「あー？人質で」

「え？」

今の流れから人質になるの俺？

この後どうなるんだ？

「え……でも人質だなんて」

「理由はすぐに分かるだろうから……」

「ムラサああああ見つけたああああ」

「……あー」

村紗さんが溜息を吐くとぬえが上から駆け付けてきた。
それと合わせて一度はやられた筈の皆も戻って来る。

「油断していたとは言えこの私を一度倒すなんてね」

「おいおい神様油断してるんじゃないよ」

「もうしないわ。魔界の全てを使って始末するから」

「マイー神綺様が本気だし私達もやるぞー」

「……ええ」

そうして今回の皆が集まった。

先程の虎の服装の人は捕らえられている。

「えつと……君」

「どうしました？」

「……説得を手伝ってくれと助かる」

「……」

そう言うことになった。

— — — — —
t o b e c o n t i n u e d

百八十八話 船は飛び立つ～go to hope.

「どう見たって、状況悪くなったからにしか見えないけどねえ」

「それでもマシンなんじゃ無いの？少なくともさつきよりは過激じゃないんだろ？」

予想通りと言えば予想通りだが、意見が割れている。

さつきまで敵だったし仕方が無いが、先陣を切っていたぬえさんが保護側に居るとは思わなかった。

「てつきりぬえは極刑だとか言い出しそうだと思ってたんだけどさ」

「んー？実際の話妖怪の味方が少ないのは事実だからな」

「それなら最初から私達の味方で良かったんじゃないの？」

「いや……お前達最初人間を解放しに行くしか言わなかったじゃん」

「そうだったか、ちゃんと言うべきだったかなあ……でもあの時ぬえその子と一緒にだったじゃん」

「あーまあぬえ……あの時は拐ってたけど」

「……」

その事を初耳なアリスさんに睨まれる。

結局目の庄に屈して頭を下げた。

「あちゃーそれならぬえは味方だったか勿体ない」

「んー、あの時ならまだしも。結局ムラサ達の仲間にはならなかっただろうね」

「それはどうして?」

「コイツを通じて面白い人間も居る事知ったしな。人間を滅ぼすような妖怪まで庇護の対象だと言うなら流石に私も危険視する」

「へえ。封印されてずっと人間なんかーって言ってたのに少しの期間でこんな変わるなんてね」

「……………ふん」

村紗さんが向こうで話し合っている一方。

「……………」

聖さんはこちらでただニコニコとしている。

「あの……」

「どうしました？」

「あの時は邪魔者を排除する事で精一杯でしたが、今こうやって落ち着いて見てみると人間である小野寺さんが妖怪達や魔法使いと仲良くしてるなど」

「……それが何か？」

「この光景が、私達の目標ですからね」

「ああ」

「そう言われるとそうか、妖怪により良い世界を作るために人間と妖怪が仲良い方がいいのか。」

「幻想郷でもこんな感じですかね？」

「一部の妖怪はですが……多くの妖怪は住処を作って生きている感じですよ」

「そうですか。どんな妖怪がいるか楽しみですね」

「アリスさん達の森にも確か住んでましたよね？」

「居るわね。人食い妖怪は流石に居ないけどね」

「それは、仕方ありませんね」

「妖怪全てが人間と仲良くしたいと思っては居ないわ。友好的な妖怪は人里に居たりもするし強制されても困るのよね」

「……レミリアだとかは絶対嫌な顔するだろうな」

レミリアにさとりさんとか人間と関わりたく無いと分かる妖怪達も居る。

彼女達に仲良くしようって言おうとしたら聖さんでもキレられそうだ。

「レミリアさんですか？いつか会いに行きたいですね」

「あの……」

「どうしました小野寺さん」

「さつきから行ける前提で考えてますが……」

「うん？」

「不思議そうに見ていますが、一応その件で向こうとか特に揉めてますよ？」

「ああ。その事なら問題ありませんよ」

「……何処が？」

「小野寺さんは賛成と言ってくれたので」

「……一応警戒しながらではあります」

「では賛成と。そうなるとそのアリスさんや早苗さんも自動でokでしょう？」

「え？」

アリスさんの方を見る。凄い悩んだ顔をしている。

「アリスさん？」

「……そう言う事、反対し辛いわね」

「私も小野寺君が賛成だと反対って言う意味がないですし」

「……………」

「だって今回危険視したのは貴方でしょ？ 貴方が問題無い言うなら同じく警戒に留めるしか無いじゃない」

「……………すみません」

「……………彼女の言う通りの所もあるのよ」

「え？」

「森にいる妖怪。人間と仲良くしたい子もいるの……………けど見た目が化け物だったりとかで出来なかつたりも無くは無いわ」

「成程……………」

確かに……………そう言ったケースもゼロでは無いのか。

それなら彼女のような存在は必要なのか。

「納得しかけてるけど反対に決まってるでしょ」

神綺さんが反対する。そりやそうか……

なんだかんだこの人が巻き込まれまくってるしな。

「あらあら」

「何笑ってるのよ」

「正直貴女は追い出す側だと思ってる居ましたが」

「アリスちゃんを危険な目に合わせるわけないでしょ」

ああ……そう言うことか。

神綺さん的には居る方が鬱陶しいだろうと思っただが、出したく無いわけだ。

「問題ないわ」

「アリスちゃん……?」

「霊夢達の判断も欲しいところだし、何より幻想郷の方がこれ以上の過剰戦力になるのよね……」

「でもアリスちゃん……」

「私は大丈夫だからもつと信じてちょうだい。何より彼女の言う通りな所もあるから」

「……分かったわ」

「有難う、母さん」

「ただし危険になったら言いなさいよ。魔界からでも行くから」

「ええ、その時は」

「……」

結局聖さんの言う通りに事が運んでいる。
まさかそう言う能力とかじゃ無いよな？

「違いますよ」

「え？」

今、心を読んだ？まさかさとりさん達と同じ？

「えつと……驚かれた顔をしています、心を読んだとかそう言ったのではありません
よっ」

「……では何故？」

「昔、多くの人々や妖怪に会っていたのでそういった表情の機微が人より読めるだけです」

「……」

それって実質さとり妖怪みたいなものでは？

「先程までは頭にきててそんな暇はありませんでしたが、今落ち着くと皆様読みやすいので」

「……だから上手くいくと？」

「一人だけ不安ですが」

「二人……？」

「ん？あたしかい？」

魅魔さんの方に注目している。

確かに彼女はどうか読めない。

「いいんじゃないのかい？何かあれば魔理沙にやらせればいいし」

「あ、いいんだ……」

「流石にアイツならやらかしはしないでしょうしね」

「……うっかりは多そうですけどね」

「そしたら言いな。しばくから」

「……はあ」

そのまま話は続き反対は居なくなっていた……本当に誘導されてないよな？

「ああそつちも纏まったかい？」

村紗さんが船を動かす準備をしている。

さつき神綺さんにやられたと思いきや船殆ど傷すらないな。

「ええ村紗。これでやつと幻想郷に向かえます」

「そりや良かった。それじゃあ行くよ」

「あの村紗さん」

「早苗だっけ？どうしたの？」

「船に乗せていただけませんか？しょうか？」

「あの早苗さん……？船に憧れてたのは分かりますが……」

「ちよつと小野寺君！それもありますけど」

「そうじゃ無いだろ？」

ぬえさんも混ざって来たが……

「なら一体？」

「お前凍死しかけただろうが」

「……村紗さんお願いします」

「あー……まあ人間だもんね」

船に乗る前に皆に別れを告げる。

そうは言っても魅魔さん含めて魔界のメンツ以外は乗ったわけだが。

「アリスちゃーん」

「ああもう煩い!!」

アリスさんが若干苛立ちながら別れを告げた。

頻繁に来れる所ではないが、いずれはまた来れたらなと思う。

「それじゃ忘れ物は無いね? 行くよ」

そうして船は飛び立った。

「そう言えばナズーリンさんは?」

無事なのか心配しながら。ナズーリンさんを探す。

するとすぐに見つかった。

「……おや、なんで君が？」

「色々ありまして……」

「そうかい、聖が良いと言うならいいが」

「ああナズーリン目が覚めたんだ」

「村紗、迷惑を掛けたようだね」

「大丈夫だよ。ナズーリンも忘れ物ないよね？」

「私は無いが……」

「どうしたの？」

「ご主人様は？」

「……あ」

進んだ船は忘れ物を取りに戻るのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百八十九話 記憶喪失の鍵～place arrived at.

「全く……私でなければ怒るでは済まなかったですよ」

置いてかれかけた寅丸さんが文句を言う。

一人では魔界から帰れないしそりやそうだ。

「宝塔を無くしたご主人様だし置いていっても良かったかもしれないが」

「ナズーリン……そんな事言わないでください」

聞いた話だとぬえさんによつて宝塔が行方不明らしい。

流石に居なかつた自分達では何処か見当が付かない。

「ぬえさん……いったい何処に？」

「分からない」

「ええ……」

本当に魔界から出ていいのか不安になるんだが……

「一応ダウジングでは魔界の外を示しているが」

「ナズーリンのそれはアテになるのですか？」

「ずっとやらされてるわけだし、今すぐ辞めてもいいんだが？」

「ごめんなさい!!」

寅丸さんが謝って……あれ？上司だよな？

「私としては無いと思っっている。あつたら悪いがね」

「まあ、魔界で見付けたらつて話したし大丈夫でしょ」

寅丸さんを見つけた後、念のため神綺さんをお願いしておいた。

不満そうではあったがアリスさんが念押ししてたし大丈夫だろう。

「それじゃあ、人里に向けてでいいのかな？」

「ああ村紗、少しだけ寄ってもらいたい所があります」

「ん？星何処へ向かうんだい？」

「まさかご主人様……宝塔を探しに行くとか言わないね？」

「いや確かにそれはそうですが」

「……」

「ナズーリン。住処が先ですので、流石に地上で即宝塔探しはしません」

「ならいいけど、だったらどうするんだい？」

「……地底へ」

「はあ？巫山戯ているのかい？」

ナズーリンさんの驚きも当然だ。俺でも驚いたし。

つい最近まで封印されていたよな？

「巫山戯ていません。一度人里に向かう前に地底に行きたいのです……聖、よろしいでしようか？」

「それは構いませんが……こちらも先に色々と済ませたいのですみませんが着いていけません」

「それは構わないよ。村紗だけ居れば十分だ」

「逆に私は必要なの？」

「ええ、あの子に会います」

「……えー!?あの子だよね?本気で言ってるの?」

「本気ですよ。聖は間違い無く助けるでしょう?」

「あー……そうだけどさあ……マジかあ」

「二人ともどうしたんですか……?」

流石に不穩に感じて来て口を挟む。

地底の妖怪達は難ありだし何より個別に生きているのばかりだ。それなのに助けなきやいけない存在ってなんなんだ？

「ああ、地底で助けたい妖怪が居るんだ」

「地底で？地底の妖怪達は出ないようにしている筈と聞いたのですが」

「ああ私もそう聞いてたよ。でも……明らかにその子はおかしかった」

「おかしかった？」

「明らかに嫌われ者だらけと言われていた地底でも嫌われていたんだ」

「……無くはないでしょうけど」

さとりさん達みたいに意図的に嫌われている者達も居るだろう。

しかし……それでも珍しい方だな。

「……ねえ。まさかその妖怪を地上に出すとか言わないでしょうね？」

アリスさんが険しい顔をする。

確かにそれは気がかりな事だな。

「流星にそれはしません。幻想郷のルールに違反するでしょうし」

「意外ね。平気で破ると思ったけど」

「不当に捕らえられている聖を救出するためならまだしも、今折角出れたのにまた封印されるような真似はしないさ」

「……ならいいけど」

「でも……どうするの本当に？」

「……村紗さんがそんな心配している所を見ると不安しいんですが」

「私には不安しかないね」

「……どんな妖怪なんです？」

「近寄り難い雰囲気をした妖怪で……確か河童だったかな」

「河童……」

地底に河童が居ないわけでは無いが、偏屈者とは言え嫌われ者と言うほどでは無いだろう。

しかし、何故か頭に浮かんだ。

「……その色はもしかして赤ですか？」

「もしやご存知で？」

「……少しは」

あの時の河童か、唐突に殺されかけた記憶がある。
彼女は本当になんなんだ？

「そっか、それなら都合が良いや。一緒に来るかい？」

「……遠慮しておきます」

この前の事を考えると何も考え無しに行こうとは思わない。
さとりさんが居るとしても危険には変わらないし。

「仕方ないね。私達で行きましょう」

「……まあそうだね」

「村紗もそんな嫌ですか？」

「嫌というか……あの子の近くにいるとなんか違和感があるんだよね」

「違和感ですか？」

「うん。何と言うか封じ込められると言うか出来なくなると言うか……なんかむずがゆい」

「それは封印されていたからでは？」

「かなあ？それならいいんだけど」

「大丈夫ですよ村紗。無理そうなら諦めますから。無理強いはしたく無いですし」

「うんそれならいいかー」

「星、あまり村紗に無理をさせてはいけませんよ」

「大丈夫ですよ。村紗の気のせいですよ」

「何をー、だってあの時の私は違和感だらけでおかしかったんだぞー?」

「はいはい。なにがおかしかったのかって」

「だって封じ込められてて禁止禁止ーって叫ばれてるようだったんだよ?」

「……っ!?!」

禁止?禁止って言ったか?

「小野寺君。急に表情を変えてどうしましたか?」

「今禁止されてるって言いましたよね？」

「……あつうん、言ったケド」

まさかその言葉を聞くとは思わなかった。

地底にその正体が居るのか……まさかあの子が……

禁止されている

「あがつ……」

かつて妖怪の山で襲ったような頭痛に襲われる。

割れるような痛み、いや実際には自分で分からないが割れているのかもしれない。

「小野寺君!？」

く 平和な日常く

百九十話 平和な日常く peace days.

「いつまで寝てんのよ!」

「うがっ!」

腹部に痛みを感じて目を覚ます。

そう言えば暫く記憶が無い。

「……………」

必死に記憶を手繰り寄せる。確か船に乗っていたことまでは覚えている。

「いつまで寝ぼけてんのよ。ここは博麗神社よ」

「博麗……神社……」

周囲を見渡す。確かに神社に思えるが……

「押し付けられたのよ」

「ええ……」

いや確かに気絶した俺も悪いけど、いくらなんでも悲し過ぎる。

「気にしても仕方ないか……」

居ないものは居ないのだから割り切るしか無い。

「……整理しよう」

二つの異変は無事に解決した筈だ。

解決と言うよりは話し合っただけかもしれないが、自分は信じると決めたのだ。

「……うん。終わった記憶はある」

「いきなり何よ」

「いや、異変は終わったんだなと」

「こつちの仕事増やされたけどね」

「そこはごめんなさい……」

「ほんと妖怪の味方する超人なんて面倒なものを幻想郷に連れて来たわね」

「……」

「まあいいわよ。確かに魔界に置きっぱなしにされるよりはマシな事は事実だし」

「それなら良かったです」

「普段ならね」

「え？」

「……妖怪の山の事忘れてないでしょうね」

「え？」

「え？じゃないわよ、妖怪の山の自称神様達も対処しないとイケないのに」

「対処必要です？」

「あんたのお気楽に巻き込まないで欲しいのだけど」

「……管理者の立場からすれば確かにそうですね」

「そう言う事。アリスも協力的だからまだマシだけどね」

「アリスさん……」

アリスさん達も忙しいなら置いてかれるのも仕方ないか。

しかし聖さん達のことには気になるものも置いていかれた以上は別の事をした方がいいか。

「……それでは。休ませていただき有難うございました」

「どうしたのよ急に」

「行かなければならない所が多いので」

魔理沙さんとの約束も果たさないといけないし、守矢にも寄りなければならぬし……地底にも行きたい。

「ダメよ」

「ダメよって何がですか？」

「アンタは外に出すなって言われてるの」

「はい？」

唐突になんなんだ？外に出さないってどう言うことだ？

「アリスや魔理沙に言われたのよ。暫く神社に押し込めておけて」

「なんで二人が……？」

アリスさんはまだ分からなくも無いが、魔理沙さんまでこうするように言ってくるのは驚きでしかなかった。

「無茶し過ぎらしいけど。若いうちは無茶しろって話だと思うけど」

「霊夢さん……その言い方だと」

「あ？」

「ごめんなさい」

物凄い目で睨まれた……まあ自分が悪いのだが。

「アリスと、魅魔が話したことが理由よ」

「え？ 魅魔さん？」

一切気にしないタイプとしか思っていないんだが？聞いた今でも。

「気絶しまくって放っておくと死ぬって言ってたわよ」

「……まあそうですね」

自分でも死ぬ可能性をいつも考えながら動いているしな。

でもアリスさんは死に戻りの事を……

「まあ永遠に神社にいろとは言わないから少し休みなさい。どうせ身体もだいぶ参ってるんだろうし」

「休めと言われましても……」

「酒に手を出したら殺すから」

「いや……未成年なんですが」

「それ以外なら好きにしているから」

「好きにつて……」

何をすればいいんだと考えながら思い出す。
そういえば神社には彼女が居たな。

「……立ち上がってどうする気？」

「少し萃香さんに会いに行ってください」

「え？居ないわよ」

「……え？」

萃香さんにこの前の話を聞いておきたかったんだが……本当に何をすればいいんだ？

「萃香に何したかったか知らないけど……酒飲みに行ってるから暫く帰って来ないわ」

「そんな……」

「まあそのうち帰って来るから身体を休めておきなさい。どうせ次の異変にも首を突っ込むんでしょ？」

「……まあそうですね」

「はあ……本当に面倒な人間ね」

「否定はしません」

「だったら休め。異変の最中に倒れて邪魔になるなら見捨てるから」

「分かりました」

東の間の平穩になるか、暫く異変が起きないかなどは自分では分からない。
正直調べたい事も行きたい所だつてある。

「地底……」

ただ今一番気になっている地底は間違はなく一人ではいけない。
だからこそ、少しだけ訪れた休みを大切にすることにした。

t o b e c o n t i n u e d

百九十一話 平和な日～peace days.

一日が過ぎた。何も起きない、平和なのだが……

「本当にいいのかこれで……」

一応神社の掃除等はしたが、入ったりしてはならない場所や触れてはいけないものなども多そうであまりしつかりとは出来なかった。

そのため、予想以上に早く終わり手持ち無沙汰である。

「やること無くなったな」

日本人と言う性質に加え、今までの激動のせいで何もしないで良いのかと不安になる。

「zzz」

霊夢さんは寝ている。一応昼過ぎの筈なんだけどな……起こすのは怖いから起こす事はしないけど。

「……何か起きないものか」

非日常が起きれば日常を望むなんて話はよく聞くけど。結局自分は非日常を求めている。

改めてじつとしていられないんだなど。

「……少しだけ」

「おい、ダメって約束だろ？」

「あれ？魔理沙さん？」

頭上から声がして見てみると魔理沙さんが居た、いつの間にも……

「休んでろって話だろうよ」

「落ち着けない性格でして……」

「分からなくもないが、だからってこつちがする事増やされても困るんだが？」

「それは……確かに」

子供じゃないんだから我儘言わずに大人しくしていろって話だが、それでも何も無いのは辛く思う。

「まあ私なら絶対に我慢しないだろうけどな」

「ええ……」

「分かるだろ？」

「まあそれは……」

絶対に魔理沙さんは我慢しない。それは分かる。

「そのうち他の面子も来るだろうから我慢しろな」

来てくれるように安心した。完全に放置される可能性まで考えていたし。

「ああ、一応お前達が魔界で戦ってた奴も来たがってたけど」

「聖さん達ですか」

何も報告が無い以上は問題行動は起こしていないようだ。まあ数日で起こす事はま
ず無いだろうが……

「結局聖さん達は大丈夫なんですよね？」

ただ念のため魔理沙さんに尋ねる。

信じていても気になるものは気になってしまうのだ。

「ああその事なんだが……」

魔理沙さんはあまり良い顔をしていない。

まさか何かあったのか？

「……霊夢は居ないよな？」

「寝ていると思いますが……まずい事でも？」

「ああまずい」

「そんな……」

考えが浅はかだったか？

兎に角それならどうにかしないと……

「ああ暗い顔すんな。そう言う意味じゃねえ」

「そういう意味じゃない……？」

だったら何が起こっているのだ？

「お前が博麗神社に降ろされた後、船のまま人里についてだな……」

「ああ。それで問題に……」

「いや逆だ。多くに人間の興味を惹き、信者になってる人が多いな」

「え……」

それはそれで驚きだ。もう影響を及ぼしているのか……

「それに加えて」

「加えて？」

「守矢」

「守矢……」

色々と察した。そりや霊夢さんを気にするわけだ。

「八坂神奈子、洩谷諏訪子……思った以上に二柱ともヤバいな。妖怪の山の妖怪達だけじゃなく地上の人間達もだいぶ信仰してる」

「……博麗神社は？」

「言う必要あるか？」

「……」

何故こんなに差が出るんだろうな……

博麗神社は歴史ある上に今までは別宗教もそこまでだったのに……

「まあこればかりは変わりっこ無いな」

「そうですね……」

早苗さん達も間違いなく張り切るだろうし更に寂れ……いや0だしこれ以上は無いか……

「霊夢もやる事すればいいんだろうけどなあ」

「……………してどうにかなるんですかね？」

「いや、ならないと思うな」

「……………ですよねえ」

「なんとというか……………博麗神社はそういうもんなんだ」

「そういうもんって……………」

「霊夢自身が変われば多少は変わるかもだが……………変わるは変わるで他に問題起きそうだな……………」

「だったら守矢神社などで色々と聞いてくるとか……………」

「霊夢がやると思うか？」

「……いえ」

この前魔界の異変以上に速攻で守矢へと向かったわけだし聞くわけないと思う。と言うかこの話聞いたらまた襲撃しそうだ。

「まあだから、実際の話この件はどうしようもないな」

「そうですね……逆に他の神社に寛容になられても怖いですしね……」

聖さんの様にいつもニコニコしている霊夢さんを浮かべる。恐怖で身体が震えた。

「だから霊夢には貧乏で居てもらわないといけないわけだ」

「それはそれでどうかと思いますが……」

「でも霊夢が貧乏辞めたら何起こるか分からないしな」

「そう言われると……悲しい事ではありませんが」

「いいんだよ。貧乏巫女って言っていればな」

「……バレたら怒られますよ？」

「大丈夫大丈夫。この時間に霊夢が起きてるわけ無い……」

「魔理沙さん……？」

その表情から嫌な予感が汲み取れる。正直後ろを向きたく無い。

「おい後ろ……」

「……」

察している。だから向きたく無いのだ。
しかし圧を感じてゆつくりと振り向く。知っていた。

「だいふ楽しそうな話ね？」

「いや楽しそうな事してたの魔理沙さんだけですよ……」

弁明しようと魔理沙さんの方を向くが箒に乗って飛び始めている。

「あつちよつま」

「それじゃあな。私は帰るぜ」

「押し付けて逃げないでくださいよ!?!」

「そーいや買った魔導書は既に貰っておいたから心配いらなからな」

「ちよつと本当に自由過ぎるううううう」

最後に衝撃の言葉を残されながら猛スピードで去って行った。

さて……後ろを向きたく無い。

「魔理沙は……後にしましょうか」

「ボクヒガイシヤデス」

「……それを決めるのは私でしょ？」

「かもしれないです」

結局、乗ってしまった自分も自分だったため抵抗を諦めて叱られる事を決めた。

不満はあったものの、翌日神社で吊るされた魔理沙さんを見て本当にマシだと思いはらされたのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百九十二話 平和な～p e a d a y s.

「大変だったんですね……」

「なんなら今の状況も大変なんですけど」

早苗さん……来てくれたのは有難いんですが……

「どうしました？」

「……ここに来ます？」

「……って？」

「博麗神社に来て……大丈夫なんですか？」

この前も霊夢さんに気付かず話していたせいで魔理沙さんが恐ろしい事になっていたが、その本人が来たらもつとヤバいのでは？

「大丈夫ですよ？」

「……後ろで霊夢さんが見ている気がするんですが」

確認していないが、圧を感じる。多分いる。

「え？大丈夫ですつて霊夢さん優しいんですよ！」

「??？」

何を言っているんだ早苗さんは？この前初めて逢った時も散々な目に遭ったばかりだろうに。

「あの後色々ありましたね……弟子入りしました!!」

「弟子入り!?!」

「何よ、何かおかしいの?」

「いや、霊夢さん……その……」

やっぱり後ろに居たようできて、速攻で声を掛けられた。

「あつ霊夢さん」

「……で、早苗は何の用よ?」

「え?ダメですか!?!」

「何の用かって聞いてるんだけど」

「小野寺君に会いに来たんですが……心配でしたし」

「結構な頻度で誰か来るわね……」

「有難い限りです」

「でも誰もお賽銭入れないのよね」

「ははは……」

「で、早苗お賽銭は？」

「ちよつと今日持ち合わせが……」

「早苗??？」

「すみません霊夢さん！諏訪子様がお賽銭持たせてくれなかったので」

「全くあの神は……」

「ちよつと諏訪子様が悪口を言わないでください!!」

「……ごつごめんなさい」

早苗さんの庄に屈する。

霊夢さんが押され気味な所は初めて見るかもしれないな。

「仲が良いのは分かりました……」

「そうですね。私も分かり合えて良かったと思います」

「本当に……一体何が……」

「魔界での騒動が終わり次第。私が土下座して霊夢さんに弟子入りしました」

「……成程」

いつのまにそんな事になってたんだ……

と言うか霊夢さんの場合それくらいなら断りそうだが。

「正直うざったらしかったんだけど」

まあ、霊夢さんはそうだと思っただが……

「褒めちぎりました」

「ん？何か言っただ？」

「いえ何も」

肝心な理由は霊夢さんに聞こえないように俺にだけボソツと言われた。
霊夢さんおだてに弱いのか？

「だから私が一番弟子です！」

「ああもう……また客が遠のきそうで困ったものだわ」

そう言いつつも見てない間に結構教えてそうだ……がめつくても根は良い人なのと
プライドが許してなさそうな……

「そうよ早苗、今貴女以上に問題があつたわ」

「どうしました霊夢さん？」

「命蓮寺はどうなったの？」

「命蓮寺？」

初めて聞いたが、そんな人……では無さそうだな場所は何処にあるんだ？

「聖さんの所ですよ」

「ああ命蓮寺と言うのですか」

この前魔理沙さんは言ってなかったし初めて聞いたな。

無事に馴染めているなら良かった……扇動して反旗を翻さなければいいけど。

「元から居た一輪さんが話を広めていたのもあり、人里で話題の中心になっています」

「いつか見に行きたいですが……」

今は許されていないので後でだな。

彼女達がなやっているとかはまあ気になるんだけどさ。

「神奈子様達もまた来いに行っているので行く所ばかりですね」

「え？守矢神社にも呼ばれているんですか？」

「そうですねえ。神奈子様達も話したい事があれば妖怪の山の河童も話したい事がある
と」

「河童……にとりさんかな？」

にとりさん、非想天則を完成していたし乗ってみたいんだよな。
今動けないと言うのにその時に限ってやりたい事だらけになる。

「小野寺君忙しそうな顔していますね」

「……今の時間が終わって異変が起きる前に色々とやりたい事ありますからねえ」

「私は恐らく同行できませんが、いい旅になるように祈るばかりです」

「何から出来るか分かりませんがね……」

他にも確か寄りたい場所が……有った気がするが……

「ああそうだ早苗さん」

「どうしました？」

「地底ってどうなりました？」

正直一番大事な事なのに忘れかけていた、何故だろうか？ 忘れるわけなんて無いのに……。

「地底ですか？」

「はい、一部の人達が行った筈ですが……」

「えつと地底……」

「早苗さん……?」

「つとああ! 思い出しました」

「忘れてたんですか……?」

自分も忘れていたとは言えそうそう忘れる事で無い気もするんだよな……
何かが起きている気もするが……憶測だけだし今はなんとも言えないな。

「えつと……結局どうなったんです?」

「確か星さんと村紗さんですね……確か帰って来てません」

「え？」

「見てないですね……聖さんはもう少し時間がかかるだろうとの話でしたが……」

「心配はありますが……」

地底に潜れるわけ無いしな、自分で何も出来ないの分かってるし待つしか無い。

「ただ……それ程時間かかるものだったっけかな？」

「……これは秘密の話なんですけど」

「早苗さん？」

「神奈子様が地底で何かをする気なのでその時についてに地底を見て来ますよ」

「有難うございます」

地底で何をする気なのか分からないのは怖いが、早苗さんも居るしよつぽどの事はな
いだろう……

「地底に行くとしても誰か誘わないとだしな」

「なんで地底がそんな気になるのよ」

「いや、知り合いが……」

「なんで地底に知り合いが居るのよ……信じられないんだけど」

「そう言われるのは悲しいですが……」

「まあ、そこに文句言うのは仕方ないけど。地底にはそう易々と思わない事ね」

「そうですね」

霊夢さんも非協力的だろうし流石に行けるとは思えないが、それでも地底にはもう一度寄る必要はあるだろうなと思ってる。

何より……忘れていた事が気掛かりだから。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

百九十三話 平和～p e d a y s .

俺がいるからだけなのかは分からないが、寂れたと言う割には博麗神社には人が寄るように思えた。

霊夢さんはそれに喜びつつも俺に用があると言われて沈んでいるを繰り返していた。

「ほんとまともな参拝客は居ないの？」

「いや……分かりませんが」

「ちよつとアンタ探して来なさいよ」

「そんな無茶苦茶な……」

遠出せずにと付け加えられた。無茶苦茶にも程があるだろ。

「はーやーくー」

「……はあ」

正直無理だろうが何もしないと嫌な目線が刺さるので鳥居の先へと行く。

「……ん」

見知った顔が登ってくるのを確認する。

そう言えば……偶に神社に来ていたな。

「……あら？」

「レミリアか、正直驚いたな」

「驚いたのはこっちの方だけど」

石段を登りきり近くへと来る。

特に変わりはないようだ……数週間で変わってる方が問題かもしれないが。

「地底にいたんじゃないの？」

「まあ……色々あった」

「……ほんと忙しさに愛されてるわね」

「……愛されているのかは分からないが」

実際否定は出来ない気がする。

今のこの状況を自分で珍しく思っていた時点で尚更。

「あらレミリア。お賽銭入れに来たの？」

「霊夢。そうがつつくのはどうかと思うのだけど」

「大事なのはそれでしようよ」

霊夢さんが尋ねているが……確かに開口一番がお賽銭な事は相当だと思う。

「あまりお嬢様にたかるのはやめてくれませんか？」

しつこかったようで咲夜さんが口を出す。

確かに誰か言わなきゃ永遠に続いていた可能性もあったかもしれない。

「それで……じゃあなんの用よ、どうせまたソイツでしようけど」

「いや、レミリアはいるの知らなかったらしいけど」

「じゃあなんの用よ。宴会も何も無いわよ」

「用がなきや来ちやダメなのかしら？」

「正直ダメと言いたいのだけど」

「少し相談よ」

「……へえアンタにしては珍しいじゃない」

「そうね。本当なら貴女に頼む気なんて無かったけど」

「お帰りはあちらだけど？」

「……失踪事件が起きている」

「失踪？」

「かもしれない」

「ええ……」

かもしれないって一体なんなんだ？

あやふやなんだが……

「レミリア、一体何があったのよ。そんな不確定要素並べられても困るのだけど」

「失踪したのがウチの妖精メイド達なのよ」

「え？」

それはかなり不味くないか？

しかも達つて事は一匹二匹では済まないだろうし……

「霊夢さん……これは……」

「解散」

「まあ……そうね」

「え？」

「なんでそんな気にしてないんだ？失踪事件なんて大問題だと思うんだが……」

「妖精なんてアテにしてもねえと」

「どう言う事ですか？」

「アイツら仕事するって言ってもいつ消えるか分からないし本当に気紛れなのよ」

「消えるって……？」

「何も告げずに飽きたらやめるみたいな感じよ」

「ええ……無責任では？」

「そもそも妖精に責任なんて無いわよ。本能で生きているもの」

「そうですか……」

「失踪が複数なのは確かに問題かもしれないけど……妖精達が消えたって言われてもそれがあるのよ」

「それでも心配なのは？」

「確信もないのに動けるわけないでしょ」

「そんなものなんでしょうか？」

「忙しいもの」

「……」

やる気がないんだろうなあ。

まあやれって言ってもやらないタイプだし言ったところで仕方ないし。

「……まあ霊夢ならそう言うと思ったわ」

「お嬢様」

「別にいいわよ。杞憂ならそれでいいし、実際だったとしても伝えたもの。霊夢なら何かあったら動くわ」

「そうでしたか。分かりました」

不安に思っていた咲夜も主人の一言に黙り込む。

「それで霊夢。彼持っていったいいい？」

「ダメよ。今は何もさせないようにしてるの」

「そう、フランが待ち侘びてただけ」

「能力持たない人間なのに、異変に首突っ込んだばかりだし」

「……忙しさって言ってたけど異変にまた突っ込んだとは思わなかったわ。連続じゃないの？」

「……まあ、うん」

「……もしかしてだけどあの船？」

「そうよ。しかも追って魔界に行ったらしいわ」

「……馬鹿じゃないの？」

「酷くない？」

「いえ小野寺さん……失礼かと思いますがお嬢様に全面同意です」

「しくしく」

「まあそろそろ終わりにするけどね」

「そうなんですか？」

「いつまでもウチにいられても困るし、何よりこの前早苗と話してたけどやる事そこそこあるんでしょ？」

「ですね。後は今言われたように失踪した妖精メイド達も気になりますし」

「あら、気にしてくれるの？」

「霊夢さんが杞憂と言う以上はついぞと言う感じですがね」

「別にいいわ、私としても確信じゃないし。何かあつたら報告お願いね」

「分かりました」

「それじゃあ咲夜、今日は戻ろうかしら」

「はっお嬢様」

そうしてレミリアが帰ろうとする。

しかし帰る前にまた此方を向く。

「ああそうそう霊夢」

「何よ」

「……えつと」

「……」

「ごめんなんでもないわ」

「そう。ならさっさと帰ったら」

「……そうね」

少し違和感を残しながらレミアは帰って行った。

少しだけ気になりはしたものの、特に追求する事はしなかった。

∴

「お嬢様」

「どうしたの咲夜」

「何か霊夢さんに話す事があったのでは？」

「ええあったわ。それも妖精メイド達が消えたのと同じくらいに大事そうなの」

「では何故何も言わなかったのですか？」

「思い出せなかったのよ」

「え？」

「だから、思い出せなかったの。大事そうな事なのにまるで思い出してはいけなと言われたばかりに思考にモヤがかかってね……と言うか咲夜にもその話したでしょ」

「そういえば……確かされました」

「思い出せる？」

「……いえ」

「何かしらねこれ。何もなければいいけど」

不穏は各地に現れ始めた。

t o b e c o n t i n u e d

百九十四話 平く p days.

「待たせたわね霊夢」

「ほんと遅いわよ」

「アリスさん？」

確かに久々と言えば久々なのだが、何を待たせたのだろうか。

「小野寺君も久しぶり。ちゃんと休めたかしら？」

「ええまあ……何も出来ませんでしたし休ませていただきました」

「ならいいけど。本当に無茶してない？」

「してませんって……なんでそんな疑り深いんですか？」

「だって……ねえ」

「その微妙に否定し辛そうな言い方されると困るんですが」

「片っ端から異変に首突っ込む人間が常識なわけないでしょ」

「……」

自分も第三者視点で見ると同じな気がするな。自分自身でも信用出来ないならお察しだろう。

「まあそれが小野寺君らしいから諦めてるけどね」

「ははは……」

「それじゃ、もう後は任せたわよ」

「え？どう言う事ですか？」

「元々アリスに頼まれていたのよ。神社に押し込んでおけつてね」

「え？アリスさんが？」

「そうでもしないと何をしでかすか分からないもの」

「……否定はしませんが」

「正直あの超人達の様子見もあつたからね。危険な事に巻き込むわけに行かなかつた
し」

「あの人達に危険は無かったと思いますけど……」

「へえ」

「あの……アリスさん？」

「唐突に船で気絶して、彼女達を怪しまないと思ってるの？」

「……」

「まあ普段の行動を見て今は別因だろうと判断したけどね。あの時は大変だったのよ」

「はい……」

「ごめんなさいで済むレベルでは無いなこれ……」

「なんで気絶したのか、結局自分でも分かってないし。」

「……まあ今更気にしても仕方ないわね。それもここじゃあ分からないだろうし……出掛けられる?」

「ええまあ。持ち物は何も無かったので」

「それじゃあ、霊夢。ありがとね」

「お礼は賽銭でいいわ」

「今手持ちないから今度ね」

「ちよつと話が違うじゃないの!？」

「冗談よ。ほら」

「毎度あり」

渡した封筒を即座に確認する。

今日のご飯は豪華だとか言っているが、一日で使い切るんじゃないだろうか？

「人里の場所、覚えているわよね」

「はい、流石に覚えていきます」

「ならまずは命蓮寺かしらね」

そうして人里へと向かって行った。

「なんですかこれ？」

「見ての通りよ」

人里に入るなり人集りにぶつかる。

先が見えないほどの長蛇の列に呆気に取られる。

「……見ての通りつて事は命蓮寺ですよね？」

「ええそうよ」

「魔理沙さんが言っていたがここまでかあ……」

このままじゃあ辿り着くのが夕方とかになりそうなんだが……

「おう兄ちゃん達も入信者かい？」

「いや、そう言うわけじゃ」

「なら物珍しさかねえ。一度行ってみるといいさ」

「そうですね。一度行ってから考えます」

完全に里の人達の心を掴んでいるところをみると凄いなと思う反面、この短期間だと言うことに多少の恐怖を感じる。

「ただこれは……諦めた方がいいのか？」

「ん？あれ何してんだ？」

「え？ぬえ？」

「つてかやつと復帰したんだな」

「そうですね。無事でした」

「ならいいけど……なんで並んでるんだ？」

「なんでつて……並ばないとダメですし」

「いや、あんた達ならいいだろ。ほら着いてきな」

ぬえさんが手招きして呼んでいる……本当にいいのか？

「アリスさん」

「いいんじゃないかしら？一応知り合いなわけだし」

周りも見るがむしろおーって感じで見てきてるんだが、本当に命蓮寺影響力かなりのものになってないか？

「では失礼して……」

列を抜けて前へと進んで行く。
すると大きな寺が見えて来た。

「こんなスペースあったのか……」

「一輪があらかじめ準備してくれてからねえ。簡単に建てれたみたい」

「それはそれは……」

突然寺が建つと言って場所を渡してくれた住民達も凄いな……本当に色々大丈夫か？

「まっ私も驚きだけだな。正直ここまでとは思わなかったし……」

「そうね……魔理沙も一種の異変って言ってたわ」

まあ魔界に居て数日、その短期間で寺がバーンと建っていたらそりゃ異変だ。

「おーい聖ー。あいつが来たぞー」

「仲良いんですか？」

「まああの異変終わって敵対する必要無かったし今は私が居候だしなあ」

異変を通じて争っていた筈が数日でここまでぬえさんが敵対心を無くすとは思わなかった。

少しはまだ壁があるかと思つたが、今見た感じだととてもそう言ったものを感じない。

「待つてくださいい今行きますね」

中から声がして聖さんが出て来る。

「小野寺さん。無事だったようで何よりです」

「有難うございます」

「ねえ、口を挟んで悪いけど来た人達を放っておいていいの？」

「いまはナズーリンが対応しているので大丈夫です」

「ならいいけど。こつちにかかりきりでーだと悪いと思ったし」

「大丈夫です。参拝者は多くても捌き切れますので」

「言い方……」

「ああ流石に誰一人無碍にはしてないので安心してください」

「それはまあ……安心と言うか必要な事というか……」

「まあそのお話は置いておきましょうか。小野寺さんはここをどう思いました？」

「まだ入ってないので広いとしか言いようが無いんですけど……」

「ああすみません、焦り過ぎました。案内しましょうか」

「それは本当はさせたいけど聖、皆が待ってる」

ナズーリンさんが中から出て来る。

慌てているようだし急ぎみたいだ。

「一輪は？」

「ちよつと今表に出れないね」

「分かりました。今向かいます」

「すまないね」

「いえ、大事ですから。それでは小野寺さんまた後で時間作りますので」

「無理しないでも」

「いえ、改めて話したい事が多いので」

「分かりました」

そのまま聖さんが奥へと戻って行きナズーリンさんが残る。

「大変そうですね」

「まあね。聖はなんとかなる言ってるけどかなり大変だ」

「そうなんですネ……」

「主人達がまだ帰って来ないしね」

「……大丈夫なんですか？ 星さんと村紗さん」

「多分ね。そうそうにやられる二人じゃないし」

「………そうですか」

不安は不安だが、なら俺が探すとかは言い出せないしなあ。

「どうせここの後あちこち回るだろう？ その時は頼む」

「ああ情報があれば伝えますよ」

「ん、助かる」

そのままナズーリンさんは戻ると思いきや手招きする。

「そう言えば一輪と会ったこと無かつただろう？案内するよ」

一輪さんか、魔界には来ず人里で話し合ってた人だな。どういう人か気になってはい

た。
「その頃には聖も話が終わってるだろうしね」

「分かりました」

命蓮寺。不思議な雰囲気纏うその敷地内に歩みを進めるのであった。

t o b e c o n t i n u e d

百九十五話 d a y s .

「ナズーリン。こっちに参拝客を連れて来ないで欲しいんだけど」

「ああ一輪。この人達が例の人達だよ」

「あらそう。貴方達だったのね」

尼僧の格好、と言うか聖さんでさえ派手なイメージがあるため初めて寺らしい雰囲気
を纏った人の様にも感じる。

「聖復活の邪魔してくれたりで言いたい事はあるけど……まあ協力もしてくれたようだし
良いとおくわ」

「それはいいんですが……」

「何？」

彼女の姿を見て納得した筈がそれは一瞬で終わった。
それが消し飛ぶ程の光景がそこにあつたから。

「えつと……その妖怪は？」

「妖怪？」

「それ……」

「それって……」

雲居さんの側に浮いている何かがある。

ふわふわしているかと思えば……巖ついぞこいつ!?

「ああ雲山ね」

「雲山……さんですか」

「ええどうかしたの？」

「いや……印象に残りそうだなと」

なるべく悪口にならないように考えながら話す。

おっさんのなんなの言いかけたが多分睨まれるとやばい。

「まあ雲山の話で盛り上がっても仕方ないし本題に入りましょうか」

「……本題？」

「え？」

「本題って何かあったんですか？」

初耳なんだが、ナズーリンさんからもそんな話聞いてなかったし。

「正直その話関係だと思ってたのだけど」

「すみませんが違うと思います」

「ナズーリンに人手を探すようお願いしていたのよね」

「人手、ですか？」

「ええ。貴方達も知ってるでしょうけど、星と村紗がまだ帰って来ないの」

「結構言われていますね」

「小野寺君。私は行った事ないけどそこまで時間がかかるの？」

「何かしているのであれば、掛かるでしょうけど……話すくらいならもう帰って来ていておかしく無さそうですが」

ただ、相手がごねにごねしているとかがあるのならば可能性は0ではないが……

「だからナズーリンに臨時作業員の募集をお願いしたから、聖関係で会った彼ら連れ来て来たのだと思ったのだけど」

「流石に倒れた人間に頼むわけにもいかなかったからね。代わりに見つけた人間達を案内した筈なんだが、まだ来てないのかい？」

「来てないわ。てつきり例のつて言うから彼らがとずっと思ってたもの」

「……そうか。真面目そうな人間達だと思っただがね」

「……………失踪ですか？」

「分からないね。一応少しは話したとはいえ相手の本質までは分かりきって居なかったからすつぽかさされた可能性だってある」

「……………」

失踪の可能性があるか、その人間達の事を知りはないがどうなんだろうな…………

「アリスさんはどう思います？」

「私？」

「はい。ちよつと疑問に思ったことがあるので」

「そうね……………私見でいいかしら？」

「お願いします」

「そうね……異常だと思うわ」

「おや、相手の事どころか私の事もまだほぼ知らないのに異常と言えるのかい？」

「ええ。確かに貴女達の事はまだ知らないけど、それでも分かる事はあるもの」

「分かる事ですか？」

「この寺よ。出来て間もないのに既にかかなりの影響力がある……その事はここらの人間なら分かるのに来ないとかなんてあり得るかしら？」

「ああ……そう考えると変ですね」

出来てすぐに人里中の話題になったと聞いた。その筈なのに里の人間がぶつちとかするわけではないか。

当然里の外の人間ならそれ以上に気をつける筈だし。

「まあ、それならそれで何があったんだって話だがね」

「……もしかしたらですが」

「どうした、君には何か心当たりがあるのかい？」

「失踪が起きているのかもしれない」

「……まあ今その話をしていた所だしなあ」

「それだけじゃないんです」

「と言うと？」

「紅魔館でも妖精メイドが何人か失踪したと言われていたので、一緒の可能性があるん

じゃないかと」

「ねえ、そもそもその話初耳なんだけど」

「……確かに話してませんね」

「そんな話があったのに話さないなんてどう言うことかしら？」

「……ごめんなさい」

隠してたつもりではないが、話さなかったため怒られた。

ただレミリア達が逃げたって話もしてたし仕方がないんだ……

「幻想郷で神隠しが起きてるって事？」

「確定ではありませんけどね」

「ただ、当然その可能性も追わなければならぬ」と

「流石にご主人達がやられているとは思わないけど他は分からないね」

「ただ……探し様が無いのは事実ですが」

「神隠しと言えば天狗とか？」

「……しそうなメンツには見えないですが」

妖怪の山の天狗が人攫いなどしそうに思えない。

「普通ならそうだろうが、今回は別の問題もある」

「他と言うと？」

「守矢神社。あそこだって人手が足りてないだろう？」

「いや、早苗さん達がするわけないでしょう」

「果たしてそれはどうか。私達と同じく見たばかりなのだろうか？」

「それでもです」

言葉を強調する。早苗さん達がそんなことするわけないと。

「ああ分かった分かった、そこまで言うなら信じるさ。ただどつちみち守矢神社には行くのだろうか？」

「行きますね」

「まあ君なりに調べておいてくれ。それくらいならいいだろう？」

「分かりました」

疑ってはないが、寄る事は決めているわけだし問題ない。
……無いよな？信じているが不安になって来たんだが。

「小野寺君」

「アリスさん？どうされましたか？」

「不安そうな顔をしているけど今は気にするのはやめましょ？言っただけだから確認すれば良いだけだから」

「……そうですね」

悪い方向に考えてしまうなら考えない方がいい。どうせすぐに分かるのだ。

「皆さんお待ちせしました」

聖さんが用事を終わらせ此方へと合流する。
話したかった内容は概ね同じだった。

「やっぱ聖さんも気にしてたんですね」

「当然です。昨日来ていた人が居なくなつたとかは嫌ですので……」

「見つけられるかは分かりませんが探しますよ」

「お願いします」

命蓮寺を出て守矢神社へと向かう。

何もなければそれでよし。あればどうすればいいか……分からないけど……
行つてから考えよう！どうせ他にもやりたいことがあるんだから。

— — — — —
t o b e c o n t i n u e d
— — — — —

百九十六話 穏な日常

days.

「何こそこそしてるのよ……」

「いや……」

アリスさんに呆れられながら山頂へと着く。

なるべくバレないようにこそこそしているが逆に目立ちそうな事に気付いていない。

「ほら。皆の邪魔になるわよ」

「ああすみません」

命蓮寺でも言われていたが、守矢神社は守矢神社で参拝客が多いと感じた。

当然人里と違って妖怪ばかりだが、それが一層驚く理由となる。

「珍しい物好きなた狗ならまだしも、人嫌いな河童までいるとは思わなかったわ」

「あつほんとだ河童まで……」

明らかに見知らぬ妖怪までいる。

命蓮寺は妖怪も受け入れるとは言っていたが……そこは流石に守矢に軍配が上がり
そうだ。

「でもやつぱり失踪した人ここに居なそうですよ」

「元から疑ってなかったんじゃないのかしら？」

「まあ……ただ来ることは決まっていたので確認出来れば確信出来るなど」

「それはそうだけど……」

向こうで早苗さんが目まぐるしく動いている。
明らかに人手が足りているようには思えない。

「手伝って来た方がいいんですかね？」

「小野寺君。神事とか出来るの？」

「いえ全く。ですが雑用とか」

「……思った以上に神社関連は雑用すらも面倒よ。博麗神社で思い知らされたわ」

「ああ……博麗神社はここ以上だと思えますが」

確かに博麗神社は参拝客こそ居ないものの、巫女の仕事量が少ないため自然と雑用が増えるだろうし。

ただ、今の組み合わせからすれば忙しいのは一緒か。

「ただ……見てるだけと言うのは申し訳ない気もするんですが」

「余計な仕事増やしちゃダメでしょ」

「……そうですね」

「こういう場面で余計な事するのが一番頭に来るのはよく分かるしな……」

「さて、どうしましょうか？」

「どうするって、会いに来たんじゃないの？」

「それはそうですが……」

神社の方を見る。さつきと全く変わららず妖怪だらけだ。

「人間も居ますが少し距離取ってるように見えますし……妖怪の山には人嫌いな妖怪も結構居ますので何食わぬ顔でなどは躊躇いが起きますね」

「ああ……河童とかは特にそうね」

見る限り河童を始め人間たちから離れたがっているように動く妖怪が目映る。
いやあ……流石に行き辛い……

「こういう時に知り合いが居れば……」

とは言っても妖怪の山の知り合いはそこまで多くないんだよな……

「にとりさんとかは……居ないよな」

「……蓮司か？」

「え？にとりさ……にとりさん？」

少し探したが柱の後ろに居ることに気付いた。
なんでそんな場所にいるんだ？

「蓮司だ……良かった!!」

「え？どうしたんです本当に」

「いや……ちよつとあつて……」

神社に行きたいのだろうか……そう言えばにとりさんも相当な人見知りだったよう
な気がする。

「……一緒にいきますか？」

「……うん」

「こちらとしても助かったわけだが、流石に心配になるな……」

「少し並ぶようだけどね、にとりは大丈夫かしら？」

「ああ問題ないよ。そもそも私は参拝に来たわけじゃないし」

「確かに神頼みするタイプだとは思っていませんでしたが……ならばどうして？」

「ああ巫女に用があつたのさ」

「巫女……早苗さんに？」

「ああ。あの子私のロボットを褒めていただろう？」

「偽想……いや非想天則ですか」

確かに早苗さんあの時の目は輝いていたな。

「確かに他の河童も分かってくれる奴はいるんだが……それ以上に分解させてくれとか言う奴が多いしなあ……」

「あー……」

河童の性格上他人のにすげーって言うよりもバラして構造が見たいとなるのか……
確かにそれだにとりさんも悲惨だな。

「だからあの子みたいな存在が有難くて……人間だけど少し勇気を出して行きたいな
つて」

「いいと思います」

今は他の参拝客が居たこともあってダメだったわけか……

「蓮司にも後で見せないとな」

「ほんと……よく一人で作れましたよね」

「設計図あったのが大きいけどね」

一応人と距離を取っていた妖怪達が終わったのを確認しながら並ぶ。その途中話を続けるのが進みが明らかに遅く感じる。

「……時間かかりますね」

「早苗一人だとどうしようもなさそうね」

「……他は神様でしたねそう言えば」

「今片方居ないけどな」

「……え？」

初耳なんだが？

「片方、えつと威厳がありそうな方が暫く帰って来ていないな」

「ああ……確か神奈子さんだったかな」

威厳がある方で判断して申し訳ないかもしれないが……流石に差があり過ぎるのだ

「まさか失踪じゃないよな？」

流石に無い……流石に無いと言いたいのだが本当に失踪が多過ぎる。

しかも人間だけじゃなくて神様までもだと？

「私はなんだかんだ数日間ここに來てるから居ないなって気付いたけど……」

数日間柱の側にいたのかと思いつつ、不安になる。

流石に全員が偶然とは思えないが……

「……ちよつとこれは申し訳ないですが割り込んででも早苗さんと話に行きましようか」

急いで状況を把握しないとまずいかもしれない。

気付けば異変が起きているなんて事は十分にあり得るから。

「悪いけど。早苗も疲れてるし後にしてくれないかな？」

急に止めが入り振り向く。

そこにはもう一柱の神様がいた。

「諏訪子さん？」

「ちよつと穏やかじゃなさそうな雰囲気だね、問題があつたなら聞かせてもらつていいかな」

唐突に割り入って来た事には驚いたが、間違いなく今話すべき相手と判断し、話し始めた。

t o b e c o n t i n u e d

百九十七話 不穩と日常～unrest suddenly.

「失踪ねえ……そりゃ不味そうだ」

諏訪子さんも不審に思っているようだ、そんなの無いとか言われたらどうしようかと思っただが。

「まあでも神奈子は失踪じゃないから安心していいよ」

「そうなんです？」

「ああ地底に行ったからねえ」

「また地底ですか……」

「どうかしたのかい？」

「地底に行った皆が失踪になってるんですよね」

「あー……そう言うことかあ……」

正直皆大丈夫とは言うが、立て続けに大丈夫と言われている人が失踪しているのは怖い。

「だから……どうしたものかと」

「言いたいことは分かったけど……正直厳しいね」

「厳しいですか？」

「純粹に人手が足りない。神奈子の事は心配だけど私も早苗も神社を離れるわけにはいかないんだ」

「家族が行方不明なのにそつちが優先なのかい？」

「おやおや河童君。だったらここで私達が居なくてもいいと言うのかい？」

「それは……困りそうだな」

「そうなんだよ。タイミングが悪過ぎる」

神社は妖怪の山で知られ始めた時。今人が居ないと言うことはあつてはならないのか……

それもギリギリな人数だと言うのに……

「むしろ君達妖怪の山のメンツが助けてくれるといいんだけどな」

「私はその……」

にとりさんが後退りする。

その顔は拒否と言うよりは戸惑いに見えた。

「まあ君じゃなくてもいいさ。誰か出来そうな子はいないかい？」

「それは……」

諏訪子さんが詰め寄り、にとりさんが後退る。

いい加減口を挟もうとするが……

「あまりにとりを虐めないでくださいな」

「文さん」

にとりさんの事をよく知る人物が助け舟を出した。

「あーえつと……情報屋だっけ？」

「いいえ。新聞記者ですね」

「新聞……幻想郷にもあったのか」

確かに前はそう思ったこともあった。

「ええ、ありますよ。今回のイジメについてもスクープにしようか悩みましたが流石に止めさせていただきました」

「イジメでは無いんだけどね……」

「私がイジメと書けばイジメになるので問題ないです」

「だからあの新聞は人気がないのよ……」

アリスさんが呆れ出した。

ただ信憑性がないのは確かに残当なのが……

「……流石に彼女に協力を頼んでいたのにイジメ扱いはやめてくれないかい？」

「おや？ 協力ですか？」

「ああそうさ。彼女に調べてもらいたい事があったのさ」

「失踪事件の事ですか？」

「およ？ 君も知っていたのか」

「ええ。あちこち回っていてそんな噂を耳に挟んだので」

……確かに文さんならそう言う情報は回ってくるか。ならば話を聞きたいところだ

が。

「正直半信半疑でしたが、ここまで言われる以上は真実なんでしょうね。少し聞いてきますか」

「地底つてのが行き辛くはあるんだが……」

「……まあ普通は行きたがらないわよ」

アリスさんが此方を睨みながら言う。

はい、分かってます普通ではないです。

「じゃあ分かった。大変すまないんだがその新聞記者も合わせて調査に行ってくれと有難い」

「文はもういないぞ？」

「……………え？」

にとりさん以外の皆が周囲を確認するが確かに居ない。
聞いてきますか言っていたがもう行ったのか？

「もう行ってくれたならむしろいいのだろうか？」

「……………文のことだから情報集めてから行きそうだけだな」

「え？文さんなら現場直行だと思いましたが」

「現場主義とは言え慎重な一面もあるんだよ」

「そうでしたか……………」

まだまだ文さんの事は知らないな……………

と言うか自分の事を話す人じゃないだろうし知らないままだろうけど。

「ならこのまま行きますか？」

「いや、文を待とう」

「暫く掛かるのでは？」

「いや、文の脚なら多分そこまで掛からないだろうし……それに」

「それに？」

「私の目的もあるし……」

「ああ……」

そういうばにとりさん早苗さんに会いに来たんだもんな、またチャンス逃すと大変
そうだと。

「まあ別に文に何かあってもいい気味だろう」

「流石にそれは……」

「むしろ私もさつき庇ってもらったがそれ以上にやられまくってるし何か起これーとすら思うよ」

「それが起きたらマジで異変解決どうしようもないんですけどね!!」

「済まないね……そっちはそっちで本当に手が足りなさそうだ」

「文さんが戻ってくれば事態が動く可能性はありますし」

「そうだな。あの新聞記者いい情報を持ってきてくれればいいが」

「………そうですね」

「どうした？」

「ただニュースというものは必ずしも良い事では無いですしねと。特に今の状況なら」

「ああ……そう言うことか」

「まあ待つしかないでしょ」

「早苗もその頃には終わるだろうからね」

「……そう言えば諏訪子さんは手伝わないのですか？」

「いや、神様が手伝ってるのはおかしいだろう？」

「……そうですね」

そのまま、不安に思いつつも待つ事となった。

「皆さん来ていたんですね！」

仕事が終わりに早苗さんが此方へと向かって来る。

「早苗さん、お疲れ様です」

「いえ、このくらい大丈夫です！」

疲労が見えるもののまだ元気は残っているようだ。遅しいな……

「それで……そこの方は？」

早苗さんにはにとりさんの方を見てにとりさんが隠れる。

「確か……この前助けてくれた方ですよね」

「……なんのことやら」

「あの時は霊夢さんが手をつけられない状態でしたからね。助かりました」

その後も褒め続け次第ににとりさんが出てきた。

話も合うようで不安げな顔から笑顔へとなっていき、その姿を見て安心した。

「早苗、確か非想天則見たかったんだよな。いいぞ」

「いいんですか!?!」

「ああ。私と早苗は盟友だからな!」

「盟友ですか!やった」

そのまま2人は山道へと駆けていく。

文さんを待っている為止めようかと思ったが、伝えに行けばいいと判断して今は止めなかった。

「神奈子が心配だけど……早苗のあの顔見ちゃ私も止めらんないや」

「……ですね」

「あの記者が早く帰って来てくれば……」

文句を言おうとする諏訪子さんの前に黒い羽が舞う。

この羽は文さんのだが。

「文さん、戻ったんですね」

「ちよいとすみません。問題が起きました」

「問題ですか？ちよつと待っていてくださいにとりさん達を……」

「いえ、そんな暇はありません。今すぐ向かわないと」

文さんの表情がいつも以上に深刻さを増している。
今すぐな事も加えてどう考えてもただごとではない。

「何があつたの？」

アリスさんも表情を変える。

何が起こつたというのだ？

「人里が何かに襲われています。急いで向かいましょう」

「人里が……？？」

少し前までいた時は何も無かつた……いや失踪らしきものはあつたがそれくらいだつた。

だから何か起きているようには思えないし命蓮寺のメンバーだっている大丈夫だ。

「……」

大丈夫なはずなのに……胸騒ぎが止まらなかった。

t o b e c o n t i n u e d

百九十八話 侵食された日常～demon's feast.
t.

人里に訪れると言葉を失った。

何が起きているんだ？

「……つい、さつきまで居たよな？」

あちこちに瓦礫の山が出来ている……しかしそれ以上に感じたのは……

「血の匂い？」

血の匂いを分かるなんて思わなかったが、流石にこれは鼻に残った。

「なんだよこれ」

見えては居ない。けどその匂いがあちこちからする……どれだけの血が流れているんだ？

「霊夢さんと魔理沙さんを急いで探して来ます」

「文さん、お願いしました」

状況を伝え文さんはすぐに飛び立った。

此方もすぐに対応しなきゃならない。

「すまないね。早苗が居ないのは不味いかもしれないのに」

「いえ……今出来ることをするしか無いでしょう」

本来なら来る予定は無かったが文さんの表情を見た諏訪子さんも人里へと来た。

ある程度は戦えるメンツではあるが……

「警戒を怠らないように。何かあるか分からないもの」

「アリスさん、とりあえず怪我人を探さない」と

「それは人形達にやらせるわ。まずは寺子屋や命蓮寺に向かいましょ」

「分かりました」

慧音さんや白蓮さん達も心配だ。

特に子供も多い寺子屋が今どうなっているのか不安で先に向かう事にした。

「慧音さん大丈夫です……熱!?!」

「来やがったか」

唐突に襲われ首を掴まれる。

ヤバい……息が……

「待て妹紅」

奥からそう聞こえると身体が自由になった。

「慧音、何を言ってる」

「その人達は違うだろう」

「……ええ？」

驚きつつも妹紅さんは此方を見る。そして青ざめる。

「すまない……間違えていたようだ」

「この状況を見るに仕方ないかもしれませんが……何があつたんですか？」

周囲を見渡す。慧音さんに妹紅さんに……いつもよりも生徒が少なく見える。

「……鬼だよ」

「……え？」

鬼……？なんで人里に鬼がいるんだ？

「萃香さんですか？」

「いや違うね。普通の鬼だ」

「……地底にいる筈では？」

「私達だつてそんなの分からない!!なんでアイツらが人里に来やがったんだよ!!」

「ちよつと待つて、今らつて言つた？」

「言つたよ……一匹や二匹じゃ無い」

「……どう言う事だ？」

鬼が地底から上がつてくるなんてあり得ない。

あり得ない筈だが……

「さとりさんは、地底は何があつたんだ」

「ちよつと落ち着きなさい!!」

「いや、急がないと……」

「そつちも大事かもしれないけど、人里だつてどうにかしなきゃだし……何より命蓮寺

「だって心配でしょうよ」

「……そうですね。すみません」

地底も大変だと思うが、地上は現在進行形で問題が起きている。

特にこの状況を見て地底へ向かうのもダメか……

「寺子屋は妹紅もいるし大丈夫だ。あっちの寺の方が多いだろうし向かってくれ」

「しかし……」

「これ以上の被害は減らしたい。頼む」

「行こうか二人とも。そのために人里に来たんだろう」

諏訪子さんがそう話す。ここにいたままではどうしようもないだろうと。

「……分かりました」

何故鬼がいるかや無事なのかなど様々な不安が残るが。それでも立ち止まれないと走り出した。

「ほんと酷いな……」

鬼どころか住民の姿すら見当たらない。

全滅とか言わないでくれよ？

「……後少し」

命蓮寺に辿り着くと足が止まった。

出来たばかりの筈の寺は倒壊しており、見るも無残な姿になっている。

「聖さん!?ぬえさん、皆さん!!」

建物に声を掛けるが反応が無い……

抜け出したんだよな？そうに決まっている。

「……君達……か」

「っ！ナズーリンさん!!」

慌ててナズーリンさんの元へと駆け寄る。

見ただけでも左腕は折れており、足からも血が流れている。

「アリスさん、治療を」

「ええ、少し待つて……」

「いやいい……それどころでは無い」

「それどころでは無いって……この傷はどうにかしないと……」

「その暇があつたら襲撃に備えてくれ……またあいつらが来る」

「あいつら……」

「鬼だよ。里の人達の話じゃ地底にいる筈だったのになんではいるんだ!!」

妹紅さん達と同じように犯人は鬼らしい。

相手として悪過ぎる……出来れば他であつて欲しかった気もするが。

「……聖さんは？」

「……」

「ナズーリンさん？」

「あの中だ」

寺を指差す。潰れた建物内に居るとでも言いたいのだろうか？

「え……そこつて？」

「聖は建物から出れずに倒壊に飲み込まれた。助けたかったが……」

折れた腕、見つからない協力者……ナズーリンでは掘り起こす事は不可能だった。

「……だったら急いで起こさない」と

「頼んだ」

「こつちはやっておくから、話を聞いておいて。今のままじゃ全然分からないもの」

アリスさんは多くの人形を動かし瓦礫を動かし始めた。

確かに……こうなると作業しても邪魔か。

「……聖さんなら鬼と戦えた筈では？」

「……信じてしまったんだよ」

「信じた？」

「ああ。鬼と分かり合えるとな。外の有様を確認せずに」

寺へ駆け付けた鬼達を何も知らずに受け入れてしまった。

疑う事を嫌う彼女は、それゆえに鬼達を止める事が出来なかつたと……

「聖の性格上私達が止めるべきだったな」

「ナズーリンさん達が悪いわけでもありませんよ」

「……ああそうだ。悪いのは襲って来たあいつらだ」

「……そいつらが来たみたいだよ」

「……」

諏訪子さんの言葉に後ろを向く。

確かに……人里に居てはならない者がそこに居た。

「おいおい、まだ人間がいるじゃねえか」

「鬼……なんで地底から出て」

「そんなのどうでもいいじゃねえか。テメエらには関係ねえんだよ」

この量は……一匹だけでも異常だと言うのに何匹居るんだ？数え切れない程だ。

アリスさんの方を見る。流星にこの短時間で白蓮さんを見つける事は出来なかったようだ。

「……この量は、流石に危険かもしれないわね」

「それでもやるしかないだろう?」

諏訪子さんとアリスさんも戦闘準備をする。

時間を稼げれば文さんも間に合うかもしれない……と思っていたが。

「……嘘だろ」

まだまだ増える。地底にいる鬼全てが出てきたんじゃないかと思うレベルに思える。

本当に……何があつたんだよ?

「あがつ……」

当然と言えば当然かもしれないが数が数だ……一瞬で決着がついた。

現在自分の身がどうなっているか分からない。

「なあ………する？」

「勿………引………うだ………」

鬼達が何か話しているのが聞こえる………ただ………何も聞こえない。

「………」

「………」

あれ？本当に聞こえなくなった………なんでだ？

「耳………？耳………」

耳が聞こえない………いや、耳が無いのか？

なんで耳が無いんだ………

「ああ……あれか……」

目の前に俺の耳がある……それどころか腕まであるぞ……

「……返……せ」

「……」

「……」

目の前で鬼どもが笑ってる気がする。何がおかしいんだよ……何を笑えんだよ……怒りのまま睨みつけていると目先に手が伸びて来る。
待て、待て待て何する気だ？

「あ” ああああああああああああああああ”

何も見えない。暗い暗い、目が熱くなる……そこに目は無いのに。

「ゴホッ」

今口から何かを吐き出した気がした。

何を吐いたかすら分からないが、一気に冷たくなった気がした。

「……………あ……………え？」

呼吸が呼吸が出来ない……………なんで……………

そもそも今の俺には何が出来るんだ？

何が……………何が……………

……………そうか、何も出来ないんだ。

何故かって……………もう何も残ってないから。

そのまま、何も分からずに俺は鬼達に全てを奪われていた。

百九十九話 起こるはずだった物～few days ago.

人里に鬼が来襲する数日前。

地底の奥底。ここに住む住人達を地底の妖怪達全員が把握しているわけではない。そんな場所にある地霊殿には珍しく客がいた。

「悪いね」

「いえ大丈夫です」

妖怪の山のとっぺん、守矢神社にいる神と地の底の妖怪の代表の一人、古明寺さとりが対談していた。

「何の用……いえ。私達を利用する気ですか」

「ふうん、心でも読めるのかい？」

「はい。そんな恐ろしい妖怪に何か？」

「いや、むしろ都合がいいねえ。一々細かい説明が面倒なんだ」

「細かい説明……待ってください。貴女達何をする気なんですか!？」

「やっつと鉄仮面が崩れたか。その方がアンタにはいいよ」

「そんな事はどうでもいいんです!!何をやる気なんですか」

「所謂産業革命だよ」

産業革命……何を言い出すのだろうか？

しかし心の底からそう思っている……尚更地底を巻き込む理由が分からない。

「……貴女達の目的に地底を巻き込まないでください」

「いやいや、勿論アンタ達にだって利をもたらずさ。じやなきや勝手にやってるよ」

「……場所が使いたいからですか」

「そう言う事だよ。それなら持ち主に聞いた方が都合がいいってね」

嘘を吐けばそこを突っ込めるのに真実だけを話してくる。だからこそ、厳しいものがある。

「別に何かしろってわけじゃ無いさ。ダメかい？」

「……地底に力を借りるとは相当ですね」

「別に、妖怪の山でも言われはしたがそれでもアンタ達に嫌悪感なんてないしねえ」

この人は本気で幻想郷を発展させる気なのは分かっている。
かと言って助ける義理は無いのだが……

「……そのエネルギーは全部使うのですか？」

「うん？ どう言う事だい？」

「エネルギーの使い方は見ました。それを地底で使えませんか？」と

「地底でかい？」

「産業革命とは言いませんが……便利な事に越した事はないので」

本来ならば地底を発展なんて考えてなかったのだが……

あの人がまた来ると考えると少しはマシな方がいいかもしれない。

「……本当にあの人は読みきれませんし何するかも分かりませんし」

彼が行方不明になったあの後、八雲紫が地底へとやって来た。

彼の無事を伝えるためだと言っていたが、信用ならないのだが……覗いても真実だったのだ。

「ん？どうかしたかい？」

「いえ……」

そのくせ、目を離すとすぐに危険になるらしい……地底で勝手に死なれても困るのだが……

「……さっき言った条件は飲めるのですか？」

「ああその事かい、構わないよ。全部のエネルギーを使えると思ってないし」

「そうですか。なら分かりました場所を貸す分には構わないです」

「有難いね。正直地上よりも地底の方が物分かりがいいのは驚きだけだよ」

「それで……核エネルギーとはなんですか？」

「うん？あーそう言う事か」

核と言うものは分からないが、彼女はそれを利用してしようとしているらしい。
分からないまま受け入れるのもまずいだろう。

「簡単に言うとは巨大な力だね。危険もあるから安全のために多くのスペースが欲しいの
さ」

「全部言うんですね」

「バレてる事を黙る必要はないねえ」

「それもそうですか」

「で、だ。さつきは場所をとら言ったがもう一つ必要なものがある」

「何を……いえ、妖怪ですか？」

「ああその通り。地獄鴉を一羽貸して欲しい」

「地獄鴉……」

地獄が移り、灼熱地獄の規模が縮小されてから地獄鴉の数はだいぶ減った。地獄には居ないこともないが、空以外をあまり見ない。

「ああ。地獄鴉の存在が今回は必要なんだよ」

「それはどうし……八咫鳥」

「ああ本当に楽でいいねえ。それでどうだといって話だ？」

「それは……」

八咫鳥。それは地底であつても存在は知っている。

その力を取り込めば巨大な力となるだろう。

お空も普段から灼熱地獄の温度の調節に苦戦していたり、力を欲しがっていたためまたとない話だ。

「……悪くはないですね」

「だろう」

お空を元に地底も発展する。

誰だつて願つたり叶つたりのだ。誰だつて願つたり叶つたりのだ。

だから問題はない。

「……」

『地底に危機が訪れます』

彼曰く何度も死ぬたびに地底に伝えて来たらしい言葉。
聞いた話では最初の一度を除いて何もなかったらしいが。

『力を持った空さんが地上を焼き尽くそうとします』

地上の人間が地底にそんな忠告をしに来る。

地底に来るまで危険でしか無いのに。

何故かと聞いてみた。心から聞こえる声を聞き流しながら。

『空さんに誰かを殺してほしくないのです』

私に向かつてそう告げた。

お空が何かするようには思えないが……

お空が力を手に入れるとしたらここだ。

「……すみません。やっぱやめます」

「なんだい？ やつと纏まったと思ったんだけど」

「お空に力を与えるのはダメです」

「お空……がよく分からないけどダメなのかい？」

「人間にそう言われたので」

「ふむ……人間にか」

「悪くない条件だと思いましたが、ごめんなさい」

「いやいいよ。人間にダメと言われたなら諦めるさ」

「……粘られると思いましたが」

「いや、その人間って言うのが心当たりあるんでね」

「それは……」

「おっと覗かないでいいさ。大方地底に来る人間なんざアイツしか居ないからな」

その言葉に覗き込もうとしたが、雑念を混ぜられ覗けなかった。

「全く早苗に地底に行つてたつて話は聞いていたが、異変だけじゃなくて色々と首突っ込んでるとはねえ」

「ちよつと、心を」

気になる。合ってるかもしれないと思うと気になる。しかしそうは行かない。

「やなことだ。断られたせいで別の方法を考えなきゃならないんだ」

「あるんですか？」

「地獄鴉は否定されたけど場所は借りれているからねえ。地獄らしく火力発電でも作ろうかね」

「火力……火でもエネルギーは作れるのですか……」

「意外となんでも出来るものさ。ただこれは一度持ち帰ろうか……また来るよ」

「分かりました」

そうして神奈子は帰って行った。霊鳥路空に関わる事をしないまま。

本来起こる筈だった異変は一人の少年の手によって止められたのであった。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百話 起こらないはずだった物く Worst Wor

st.

ここも地底ではあるが、地霊殿よりも更に下にある何も無い場所だった。何も無い場所である筈なのに……そこには数人集まっていた。

「……なあやめないかみとり。こんな事したってどうしようもないだろう?」

目の前の少女、河城みとりに語り掛けるが何も答えない。

助けを求めるように隣の人物を目線に移すが……勿論彼女も捕まっていた。

「どうする星?このままじゃ」

「村紗、そうは言ったってどうしようもないでしょう?」

「それはそうだけど……」

身動きを完全に封じられている。簡単な動きすら出来ず、精々話す事くらいしか出来ない。

かつて封印されていたようにただそこに磔にされているようだった。

「前はこんな感じではなかった筈だけど……」

封印されていた時代にも彼女と話す事はあった。

その時は一匹狼のように周りを寄せ付けないように振る舞っていたが、根は優しく思えたのだが……

「……予想以上に力が余ったな」

目の前の少女はそう呟く。力……なんのことだ？

「力をどう使おうが勝手とは言え他人をこうするのは違うでしょ」

「……勝手に私のテリトリーに入ってきた癖に」

「うん？」

「邪魔しないでって前に言わなかった？」

「邪魔って……そりゃ悪かったがこうやって地底に押し込められてるのも居心地悪いだろうと思ってさ」

「……」

その言葉を言うと顔色が変わる。

まずい……怒らせてしまったか？

「ああすまない、勝手な事をした。もう関わらないと誓うから」

正直今の命蓮寺を何日も開けるわけにはいかないのだ。
だからこそ穏便に済ませたい。

「誓うから、何？」

「返してくれないかってね」

無理を承知でお願いする。

と言うよりも、身動きが出来ない以上これしかないわけでもあるし……

「……残念だけどそれは出来ないよ」

「なんでさ。お節介が迷惑だったただけだろう？」

「そうじゃ無いよ」

「だったら何さ」

「……始まるんだよ」

「何が始まるって言うのさ。地底から何も出来ないだろう？」

「いいや、私達の叛逆が始まるのさ」

「叛逆だって？やめておきなよ。私達だって失敗したばかりなんだから」

正確には叛逆と言うよりは聖を助けに行こうとしただけで目的だけなら成功しているが。

ただ元から聖を封印した人達は死んでいるわけだし復讐や叛逆なんて無いけどさ。

「あんた達には関係ないだろう？」

「こーやって動きを封じてる癖によく言うよ」

「それに、ここの方が安全だしね。勝手に侵入してきた相手を一応生かす気があるだけマシだと思うけど?」

「……は?何を言ってるのさ?」

生かす気?何を言っている?まるで誰かを殺すみたい……
それにここの方が安全?異変は問題とは言え危険な程ではない認識であったが。

「さて、そろそろ集まってきたね」

みとりがそう言うのとゾロゾロと集まってきた。

一体何かと確認したが……

「鬼……なんでこの規模で居るんだ?」

色々とおかしい。鬼がこうやって群れるのも違和感だが何か変だ。

「村紗、それ以上におかしいことがあります」

「え？何が……」

「なんで鬼が従ってるんですか？」

「あ……」

そうだ。あの子の事を見下してるわけじゃないけど、鬼ってそう言う種族なんだ。

他の鬼にもよほどが無ければ従わないと言うのになんで河童に従っているんだろうと。

「見た感じ洗脳とかには感じないし……」

むしろ鬼達にはやる気を感じる……何が起こっているんだ？

「集まってくれてありがとう。やっとこれで準備完了だ」

「やーっとって感じだよな」

「暴れていいのか？」

「ここで暴れられても困る。もう少し待ってくれたまえ」

「そこの妖怪達はダメなのか？」

「ダメだよ。ミスは許されない。万全の状態ですべて居て貰わないと困る」

「しょうがない。ただすぐに暴れさせろよ？」

「ああ、地上で好きにしてくれ」

「地上……!!？」

叛逆言っていたがまさか地上で何かする気なのか？

そんな事聖に知られたら不味いな……聖が危険になる。

「……と言うか聞いた話では鬼は地底から出れない筈では」

「……なんで出れないと思う？」

みとりが予想外に反応して来た。

何故出れないかか……

「そう言うルールだから？ いや鬼がルールを守るわけないか……」

「私が出る事を禁止してたからだよ」

「……まさか」

「当然だろう?」

全員の禁止を解いた? リソースも余っていると言うことはそれが全部無くなったから?

「……おい、本当に何をする気だよ」

冷や汗が流れる。私達を生かすってことは地上でどれだけの生物を殺す気だ?

「待て、それだけはやっちゃダメだ。好き勝手に暴れたら本当に殺し合いで済まなくなるぞ?」

「上等じゃねえか。ただの喧嘩じゃすまねんだよ」

「おいつおいつ」

既にみとりは此方を見ていない。聞こえているはずの声に答えない。

「君達は虐げられて来た。こんな狭い場所に押し込められて……鬼だと言うのに自由すら無かったおかしいだろう?」

多くの鬼が首を縦に振っている……良くないことだ。

「さあ叛逆の時間だ。地上を我々の住処……獄都へと変えようじゃないか!!」

多くの鬼が諸手を挙げて賛同する。

そのままみとりは鬼を引き連れて地上へと向かった。

どうにかしたいのに……身体が動かない……動かないといけないのに。

「くそつなんでだよ……このままじゃダメなのに……」

それから数日後……人里は獄都へと成り果て、彼は命尽きた。

n
e
x
t

e
p
i
s
o
d
e
s

く獄都異変く

二百一話 異変への備えくstrongest
pri
e s t e s s .
|-----|

「……やめっ」

悲痛と共に目を覚ます。

場所は……博麗神社だ。少し前まで居たこともあつて流石に分かる。

「そうか……」

死んだのか、確かにアレはどうしようもない気がするが……

周囲どころか人里を埋め尽くすレベルの鬼。人間どころか妖怪でも無理に近い。

兎に角、霊夢さんにこの事を伝えないと……

そう思っていると襖が開く。

その姿は霊夢さんだ、鬼とかならどうしようかと思っただが……

「霊夢さん、大変な事が……」

「……」

こちらをじつと見て来る。

何かあったのだろうか？

「あの……霊夢さ……」

「ちよつと待って」

「はい」

よく分からないが止められた。
すると霊夢さんはうんうん唸り始める。

「ほんとごめんなさい」

「えつと……何がです？」

「昨日大分飲んだせいで思い出せないわ。アンタのこと人里から攫ってきたかしら」

「え……う？」

少し話が噛み合っていない……ああそうか。死んだんだ。

しかし初対面だとしても異変の事を話さないわけにもいかないしな……

「ああ大丈夫です」

「ならいいけど……ほんつと思いつけない程飲む気はなかったのだけど」

言い訳にしか聞こえないが今はそれはいい。

そう言えば霊夢さん視点で知らない人間が神社で寝てるのはそりゃ戸惑うよな……

「とりあえず落ち着けてないけど落ち着いたわ。探してたようだし何か私に用件があるんでしょ」

「あっはい……霊夢さん異変が発生しました」

「……は？」

「人里に鬼が出ました」

「いやいや無いでしょ。昨日だって人里寄ったわけだし」

「今日ってわけではないんですけど……」

「出鱈目言ってるんじゃないわよ。そもそも鬼は地底から出れないの」

「そうですよね……その筈だったんだ」

幻想郷について教えられている時に、鬼は出られないルールだと聞いた。

しかしあの時は何故か出れてる上に本能のままに動く奴やその仕返しをする気だった奴もいた。

「第一、異変は既に起きたばかりなの。しかも二個同時よ二個、だから暫くは起きないでしよ」

「しかし起きたものは……」

「酔った自分のせいで連れて来たと思ってるけど。素っ頓狂な事ばかり言っているとそろそろ追い出すわよ?」

霊夢さんの目付きが変わる、これ以上はいい加減にしろって目だ。

戻った所で止められないのか？

「っ……そうだ」

そう言えば記憶が消えない妖怪が居たな。

「何よ、まだ何か巫山戯た事を言うの？」

「紫さん、八雲紫は居ますか？」

「……」

少なくとも彼女ならこの状況を多少は分かる筈だ。

多分居るだろうしそれに賭けるしかない。

「なんであんだ……って人里の人間だし知っててもおかしくはないか」

「……居ない、ですかね？」

「生憎アイツも暇じゃないしどうでもいい事に出て来るわけないでしょ」

「なら敢えてどうでもいい事に出ようかしら」

その言葉が聞こえて唐突にスキマが現れる。

そしてその中から目当ての人物が現れた。

「紫さん」

「正直、貴方の方から呼び出してくるとは思わなかったけど……まああんなことでもあったなら仕方ないのかしらね」

「紫、何を言っているの？」

「ああ、彼の言った事が実際に起こるわよって話」

「は？二人揃って異変解決の巫女を騙すんじゃないわよ」

「霊夢。残念ながら本当よ」

「だって、そんなの出鱈目じゃない」

「ええそうね。でも異変と言うのは出鱈目で理不尽な物よ」

「……」

その言葉に霊夢さんは黙り込む。

やはり信じ辛いのか飲み込みにくそうだ。

「それで、それが本当だとしてどうしたいわけ？異変を解決しろとでも」

「はい……止めないとまずい異変ですのよ」

「いえ、違うわ」

「紫さん、何が違うんですか？」

唐突な否定に驚く。この場合賛同だから出て来たと思っただが……

「霊夢は向かわないわ」

「え？」

？
霊夢さんが向かわなきやどうしろと言うのか……解決出来る人間は……魔理沙さん

「だったら魔理沙に譲れって言うの？」

「いいや、それも違うわ」

「だったらどうするのよ？ヤバい事が起きるんでしょ？」

「だからこそよ、霊夢や魔理沙には地上に残ってもらわなければならないわ。対処出来るのは限られてるし」

「だったらどうするの？まさか抑えるだけにとどめて異変を解決しないとか言う気？」

「それはこつちでどうにかするわ。貴女は他の巫女とか皆を呼んで異変に備えなさい」

「異変は起きてから解決する筈なのに……異変に備えるとか、紫が協力するとか滅茶苦茶なの分かってるかしら？」

「そうね。でもそれだけ今回の異変はまずい。死人が出るなんて話じゃないもの」

「……任せていいのね？」

「ええ、勿論」

澄ました顔で紫さんは答えた。

「それじゃ、行くわよ」

「え？行くって何処に？」

唐突に言われてもさっぱり分からないのだが……

「着いてくれば分かるわ。急ぎなさい」

「はっはい」

紫さんのスキマを追いかけながら走る。

「……ほんと、信じていいのかしらね」

二人が行った後に霊夢は呟く。

正直信用ならないけど、信じないといけないかもしれないと。

「……まっ地上で死人が出てても面倒ね。やるしかないか」

面倒だし胡散臭いのは事実。しかしそれで放置出来るほど非常ではなかった。

「魔理沙に……早苗に……後誰かしらね」

紫が人間を残した意味を考えながら出来るだけ対応出来るようなメンバーを考える事にした。

「後で話聞かせなさいよね」

見知らぬ筈だが気になる男と紫、あの二人から散々聞いてやろうと思ったのだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百二話 聞かされた真実～the past heard.

「……(ト)は」

無縁塚、なんでこんな場所に？

今回の事件とは関係ないと思うのだが……

「この件についてアイツに聞いておきたくてね」

「アイツ？」

無縁塚に誰かいると言うのか？

ナズーリンさんも今は人里にいる筈だしなあ……

「ん？誰か居るのか」

「あ……」

そう言えば……この人が居たか。

「えっと……どういう組み合わせだ」

目の前の鬼、伊吹萃香は戸惑う。

まあ実際そうだよな……最後に会ったの俺が紫さんに殺された時だし。

「実際自分もどう言う組み合わせか分かってないです」

「……そうか」

萃香さんは色々と諦めたようだ。

「まあ面倒な異変が起こるって事だね。私も動かないとなくなつたのよ」

「お前が動くななんて相当だけど……それに私が関係あるのか？」

「直接は関係ないけど、協力要請はあるわ」

「協力って言つてもなあ……私がすると思つてるのか？」

「え？しないんです？」

萃香さん時間をかけて話した所、友好的なタイプだと思つていたし……協力するタイプだと思つていたんだが。

「萃香はしないわよ。異変だつて楽しむタイプの方だし」

「……なら萃香さんに何の用が？」

確かに萃香さんと話したい事などはあるが……今はそれどころじゃないしなあ。

「勿論協力してもらうためよ」

「だからだと思うのかつて？紫の事だから考えがあつて言ってるんだらうけど」

「当然ね。考えがあつて言ってるわ」

「そっか、じゃあ聞かせてくれ」

「鬼が地上で暴れるわ。当然死人も出る」

「……何を言ってるんだ？アイツらが出れるわけないだらう？」

「既に戻った後と言えば分かるでしょ？」

「……成程な」

「この前もそうでしたが、やっぱり覚えてるんですね」

「ああ、まあ私も事情知ってる側だしな」

「その事情と言うのは……」

「紫が言わん以上は辞めておくよ。そのうち分かるだろうしね」

「そのうちって……」

「どうせ今回はそれだろ？」

「それって……」

「河城みとり。地上に出れるって事はアイツが原因だろうか？」

「河城……みとり？」

にとりじゃなくてみとり？

名前に考えるとにとりさんの関係者だが……

「……地底の」

「そうだ、地底に赤い河童が居た……」

あまり姿を覚えていないが……にとりさんに似ていた気もする。

「……鬼関係だから萃香に聞こうと思ったけど。まさか元凶まで予想付いてるの」

「まあ……私が山に居た頃の知り合いだしな」

「だいぶ前なのね」

「ああ、そうだよずっと地底にいる」

「どうして地底に居るんですか？」

「地底にかあ……」

「あれ？知らないんですか？それならすみませんが……」

「いや知っているが……言うべきかどうか……」

「今回の首謀者の可能性十分追えるなら聞いとかなきゃダメでしょ」

「だよな……じゃあ言うぞ」

萃香さんは決心したように話す。

「河城みとりは人間と妖怪のハーフだ。妹はれっきとした妖怪なのに」

「ハーフですか」

珍しいには珍しいと思う。ただ友好的な妖怪もいる以上は無くはなさそうだが……
河童だから珍しいかもだが。

「随分とあっさりとした反応だけど違うわよ？」

「違うって何がです？」

「あなたの考え方と差異があるって事よ。萃香が山に居た時代は妖怪と人間は今どころか本当に敵でしか無かったわ」

「そこまですか……その時代のハーフって……」

「当然周囲から殺されてもおかしくないレベルだわ」

「……………」

「だからこそ。私は地底の古明地さとりと手を組んで鬼を地底に封じ込める役割を依頼した」

「封じ込める役割って事は……………」

「あらゆるものを禁止する程度の能力。それで鬼が地上に出ることを禁止した。ついになだがお前の記憶に影響してるのも恐らくその能力だと思う」

「禁止する程度の能力……………」

禁止されるような違和感……………恐らくあっていると思う。

何より彼女は俺の事を知っている感じだったし。

「思った以上に酷い経歴なのね。悪魔の妹よりはマシだろうけど」

「フランさんもそうでしたが……」

それでも、どうにか出来るならどうにかしたいな……

「小野寺さん」

「どうしました紫さん」

「彼女を憐れむつもり？地上を滅ぼそうとしたのに」

「……ですわね」

そうだ、それがあるんだ……その事実から目を背けてはいけない。

彼女の今までに思う事はあるかもしれないが、それでも許してはいけない。

「つて事で萃香、悪いけど手伝ってもらわうわ」

「あー……理屈は分かったが無理」

「なんでよ。まずい異変なのよ？」

「言いたい事は分かったけど。原因の一人でもある上にあの子の心情も分からないしな……少し加担しづらい」

「そんな……」

萃香さんの協力が得られないのはキツすぎる……あの鬼達をどうしろって言うんだ。

「まあそうね、そう言うと思ったわ」

「え？紫さん？」

断られると思ってたのか？

事情を知れたのはいいけどさ……

「それじゃ、萃香協力してちょうだい」

「おいおい、話聞いてたのか？」

「ああ、ただとある妖怪と会うのにアンタの力が必要なのよ。協力じゃ無くてそれでいいわ」

「いや、紫さん？」

それだって可能なら既に萃香さん協力してくれそうだが……

「あーそう言うことか、分かった」

「え？」

今ので分かったのも謎だがなんで協力するんだ……？

「萃香が居ないと普通にキツイからよ。そしてこの件で必要だと思ってるからじゃない？」

「関わらないって言ったのにですか？」

「ええ、と言うかまず萃香が居ないと成功しないから」

「それは……どんな妖怪なんです？」

「妖怪の山の今の主、天魔よ」

t o b e c o n t i n u e d

二百三話 山の主との対談くfoundling gi

r l.

「やれやれ、君が直接出向いて来るとは思わなかったな」

目の前の天狗は文さんとかとはレベルが違う。

本当に嫌なくらい圧を掛けてきてるな……

天魔、文さんが言うには今の妖怪の山の主らしい。

「緊急事態だし仕方ないじゃ無いか」

「……山を出て行った貴女が来る以上は相当なんでしょうが」

「ああ、相当だと聞いた」

「聞きますが、その彼は終わり次第追い出してくださいよ」

「いや、そんな事言ってる問題じゃないんだ」

「……妖怪の山は基本人間達に無関係だと分かっているのかい？」

「ああ」

「……分かった。要件を聞こう」

面倒くさそうな顔を一瞬だけして、それでも切り替え話を聞こうとする。

「鬼が出る。地上にな」

「……貴女が増えるとなると頭を抱えるのだが。そもそもあの子はどうした？」

「ああ。みとりが原因らしいんだよね」

「なっ……あの子が……何故唐突に？」

「理由までは分からんさ。ただ放置出来るわけじゃないだろう？」

「……そうだな、どちらにせよ地底の異変を無視出来るわけがない」

「追い出したわけではあるけど優しくはあるのか？」

「誰も彼もがじゃなくて不本意さを感じてた人達もいるだろうし……」

「……まあ近いもんな」

「不本意でしかないが」

「え？」

「何？」

「いえ……」

「どうやら慈悲の類では無かつたらしい。
ただあると信じるとしよう。」

「しかし……どうしたものか」

「紫達からすればお前に手伝って欲しいいらしいが」

「ご冗談を。元々妖怪の山の主だった貴女なら分かる筈だ」

「分かるって？」

「君とは話してないのだが……異変とあれど動けないと言う事だよ。妖怪達はトップが消えた事に気付けば無秩序になる」

「そこまでなんですか……」

まあ河童や天狗など自我が強い妖怪ばかりなイメージはあるけど……

「それくらいなら問題は無いのだが……」

「……ないんです？」

ついつい先程から突っ込んでしまってるが流石にえってなるだろうよ……

「生憎山頂の面子を信用しきってないのでね。無秩序の中でアイツらが中心になられても困るのさ」

「あー……」

確かに悪人では無いことは分かるけど……あの神様達は野心があるのは分かるし、

乗っ取られそうではある。

「特に今は一柱は何やら企んでいるようだしな」

確か地底に向かったって話だったもんな……

「だから無理だねと言う話だ」

「……それは、そうですね」

異変も問題とは言え別の問題もある以上はなんとも言えない……
ただ、本格的にどう対処すれば良いんだ？

「うぐ……すまないな紫。これを説得するのは無理だ」

「確かに天魔は無理そうですね」

「私はと来たか。ああ山頂の奴らは自由に持って行って良いぞ」

「そうしたいのは山々ですが。生憎あの巫女は霊夢が求めている一人でしょうなので」
「だったら無謀に特攻します?」

「またあの時のように鬼達に暴れられて死にたくなんぞ無いが、これ以上何も出来ないならそうするしか無い。」

「いいえ。まだ手が残っているわ。そもそもそのために来たのだし」

「そのためにつて、山の主への協力要請じゃ無かったですっけ……?」

「それは出来ればよ。本題は……この異変で関わらなきやダメな子がいるでしょ?」

「関わらなきやいけない子?」

「ええいるでしょ？首謀者に関わりのある子が」

関わりのある子……正直一人しか思い付かない……実際そうなのだろうけど。

「八雲紫……まさかお前!？」

「元から彼と仲良いし、山としても何もしないわけにはいかないでしょ？」

「だからってあの子を巻き込むな」

「巻き込まない方がおかしいでしょうよ。関係者を蚊帳の外にするつもり？」

「……」

「あの……紫さん、何が？」

「萃香は元から言うタイプじゃないけど、アンタもやっぱそうよね」

「五月蠅い」

「え？え？」

「ああ蓮司。簡単に言うと、にとりは姉の存在すら知らなかったって事だ」

「え……」

驚きかけたが、確かに昔にとりさんは姉などは居ないって言ってたな……

「いつまで隠している気？あの子には死ぬまで教えないつもり？」

「外部が口を出すな」

殺意を隠さずに表して来る。

関係ない筈だが、それはこちらにも届き怯みそうになるも、必死に耐える。

「外部が口を出すなど言われてもね……そうやって山の事しか考えないからこうなったんじゃないの？」

「……っ」

「山が大事なのも分かるわ。だけど山の都合であの子に散々な事させておいてそれでいてその扱いはみとりが可哀想じゃないの」

「……」

萃香さんもただただ紫さんの言葉を聞いている。

「トップのあんた達と彼女がそう言った以上変えろよは言わないけど、少しは腫れ物扱いじゃなくて対応したらどうかしら？」

「そのために、あの子を危険に晒せと？」

「異変と言うものは誰しも危険になるものよ」

「あの子はただの河童なのに、迫害を受けるかもしれない事をしろうと？巫山戯てる」

口を突っ込めない。異変以前にこの件はどちらの言い分も分かる。

にとりさんだつて大事だし面倒事になりそうなのは分かるからどうにかしたい気持ちも、紫さんのようにそのせいで不幸になっている人物がいるのも……

何が正解なんだ？

「なあ蓮司」

「萃香さん」

「何が正解だと思う？」

「正解って……」

そもそも正解があるのだろうか？

無いのではとすら思ってしまう。

「あー難しく考えるな。お前が思った事で良いよ、どうだ？」

「自分が思った事……」

正解じゃ無いにしろ、自分がどうするべきかが大事か。

「本人が居ないのに決まるものじゃ無いかなと……」

にとりさんがどうしたいのか全く分からない、どちらも正解な気だつてするしハズレだとも思う……ならば隠したいとしても聞くしか無いだろう。

「成程な。じゃあ向かうか」

「え？向かうつて？」

天魔の方を見る。今行けるのか……？殺されないだろうか……

「わざわざ紫が挑発しているあたり時間稼ぐつて事だろうからな。お前が聞くつて判断したんなら行こう」

「……………そうですね」

この件をにとりさんが聞かずに進むのもおかしいなと思う。

にとりさんが勝手にしてくれて言ったならまだしも彼女は知りすらもしない。だから……彼女の意見を聞く為に探す事にした。

—————
t o b e c o n t i n u e d
—————

二百四話 忘れし盟友～left behind clue.

山の中、相変わらず飛べない人間は苦勞するような道を越えながら進む。目的のにとりさんを探して。

「足が……」

獣道すらない山道は改めてキツく感じ、歩く度に痛みも増して来る。
あの時はよく登って来れたなど感心すらしかける。

「大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。ここで止まるわけには行きませんし」

「ならいい」

そのまま黙々と進んで行くと河童の住処へとやつと辿り着く。

「()か……」

そこから少し離れたにとりさんの作業場、そこに色々な凶面が散らばっている。

「非想天則が見当たらないけど……今はそれどころじゃないか」

にとりさん呼びながら探すが見当たらない。

「どこか出掛けた……じゃあないよな」

「どうした？」

「にとりさんが見当たらなくて……」

「そうは言ってもここまで来た以上は探すしかないだろ」

「ですね」

一応他の河童達の集会所にも向かう……人間嫌いだろうけど一大事なのでごめんなさい。

「さて、居ればいいけ」

突然言葉が途切れる。

正確には唐突な痛みには言葉が出なくなったからである。

「あつぐつ……」

腹部の唐突な痛み……殴られた？

「ん？何があつた？」

萃香さんも何があつたか気付いていない様子で腹を押さえ始めてから違和感に気付いたようだ。

「何が……いや」

うずくまりながら必死に考える。

何かにやられたと言うなら答えは一つしかない。

「河童か……」

透明技術あるもんな……そりゃ気付かないが……

「妖怪の山に何の用だ？」

「!？」

姿こそ見えないものの何度も同行したため声で判断出来る。

この声は……にとりさんだ。

「にとりさん……良かった見つかった……」

「え？なんで……と言うか全然理解出来ないんだが？」

会えなければどうしようと考えたが、とりあえず居ないなんて事はなくて良かった。ただ姿は見えないし、なんか様子はおかしい。

「何なんだよお前、一体何しに来たんだよ!!」

「……ああ」

そうか、そうだよな……そうじゃなきゃ殴つて来ないよな……

死んだら記憶が消えると言っては居たものの紫さんが原因じゃないのか？
もしかしてこのケースで何もしてないのか……？

「妖怪の山に人間……お前達もなんだろう」

「お前達も……何があつたんです？」

「惚けるな、人間が妖怪の山に居るなんてまたアイツら関係なんだろう？」

「アイツら、なあ妖怪の山になんかあつたのか？」

「アイツら……」

考えて理解した。人間云々言っている以上は守矢神社だろうと。

またって事は何かあつたのか？

「人間がこれ以上山に入って来るなって!!」

「……………そこか」

萃香が辺りを散らす。透明だったにとりさんが出て来る。

「え？何が起きた!?何をやったんだ？」

「にとりさん……………」

「なんで……………私を知ってるんだよ」

「前に会ったことがありますよ」

「私に……………人間の知り合いなんて居ない」

「それでも、前に会ってるんです」

「……………」

流石に何も知らない相手に言うだけキツイよな……

自分だって知らない人間に知り合いだって言われても困るし……

「……………お前、名前は？」

「え？」

「名前はって聞いてるんだよ。本気でやるぞ？」

「……………小野寺蓮司です」

威嚇したような目で見て来る。

これで知らないとか叫ばれたらどうするか……………つてか言われるだろうけど。

「……………これか」

にとりさんが何かを取り出す。日記みたいに思えるが……

「それは？」

「さあな。私自身も記憶に無いんだが……」

そう言いつつカチャカチャと弄り始め、その日記を開く。

「……だろいな」

「うん？」

「知り合いかあ……記憶に無いんだけどなあ」

「にとりさん、まさか」

「……ああ、正直人間の知り合いなんて居ないし嫌だと思ったんだけどな」

「……良かった」

にとりさんが記録に残してくれていたらしい。
ほんとそのお陰で助かったわけだが。

「だが納得は出来ないんだけどなあ……」

「それでも飲み込んでもらうしか無いみたいだぞ」

「君の事は書いてないんだけど……本当に誰？」

「うーん私なあ……言ってもいいんだけど……」

「いや言えよ」

「なあ、どう言えば面白いと思う？」

「ええ……」

変な事を囁かれたんだが……萃香さんは何をしたいんだ？

「おい、普通に答えればいいだけだろ？何悩んでるんだ？」

「普通にかー、普通でいいのか」

「何だよ本当に」

「そっか、じゃあしようがないよな」

「……？」

「元妖怪の山のトップだな」

「はああああああああ!!」

にとりさんが驚いた表情で此方を見る。
残念ながら真実なので首を縦に振った。

「いやいや……はあ?」

「にとりさん落ち着いて……」

「落ち着けるか!?!唐突に知り合いらしい人間に元妖怪の山のトップだって、私じゃなくても困惑するわ」

「……すみません」

そりゃそうだ。誰だってそうだわ。

「……………それで私に用があったんだよな。本当になんなんだよ」

「……………あー」

「おいなんだ!?!何があつた!?!何だよその顔……………私にこれ以上何を言う気だよ……………」

……………今の彼女に言つて大丈夫なのか?

これ以上言つたら混乱で済まないんじゃないか?

「実はお前の姉が居るって話なんだが」

「萃香さん!?!」

唐突にぶつちやけた!?!そして案の定にとりさん混乱してるよ。

「……………え?え……………えええええ、あー」

既に言葉が安定しなくなっている。
もうにとりさんは限界としか思えないんだが……

「それで、協力してくれないかって」

「……そうか」

「にとりさん、大丈夫ですか？」

「とりあえずだ」

「はい」

「状況を整理させろ。全く訳が分からない」

「……ですわね」

た。自分でも上手く話すことは無理だと考え、紫の元へと連れて行くことを決めたのだっ

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百五話 彼女の決断く follow girl.

「分ならず屋め……」

「あら、分ならず屋はどつちかしら？」

未だに時間を稼いでいたようで怒声混じりの天魔の声が聞こえる。

この時間煽られ続けたなら普通なら攻撃に出てそうだが……

「……」

文句を言いつつも、隙を見せないように淡々と睨んでいる。

正直戻るのが怖いのだが……

「やっとかしら」

「……」

当然のことながら紫さんに即バレた。

まあ実際逃げるわけにもいかないのだが。

「君達は……そう言えばコイツに気を取られて見ていなかったが……」

そのまま天魔はこちらを確認し、驚く。

河城にとりがその場に居たからだ。

「……お前、何をしたか分かっているのか!？」

「ええ、分かっています。ただこうしないと」

「だったらどうなるかも分かるな？」

「天魔様。私が言ったんだよ」

「にとり。本気か？」

「ああ本当だ。私を除け者にする気じゃ無いだろうな？」

「にとりには関係ない事だ。除け者どころか関係ないのにどうしろと？」

「嘘だろう？」

「嘘？何がだ？」

「私の姉が関わっているんだらう？」

「っお前達まさか……」

「いや、蓮司じゃない。言ったのは私だよ」

「……本当に山に関わらないでいただきたいのですが」

「この件に関しては私も同意だからな」

「……貴女も関わっただろうに」

「だからこそだよ。これ以上はダメだあの子がそう言ったんだろう」

「……ぐう」

「天魔様。姉とは？何があつたんですか？」

「……はあ。後悔はしないな？」

「勿論。これで何も知らない方が後悔が残るよ」

「……仕方ない。君の姉だが」

流石に状況を理解した天魔は諦めて話す事とした。

「……成程」

「軽蔑したか？」

「いや、どうせ姉がこの山じゃ住めない事は分かるしな……ここはそう言う山だ」

「にとり……」

「当然納得は出来ない。思う所は当然あるけどさ……」

「にとりさん……」

まあ飲み込めるわけなんてないな、姉がいて住処を追い出されたなんて……必要だったとしてもにとりさんが納得する必要なんてないだろうし。

「それで、その姉が地底の鬼達を率いて反乱を起こすと言うわけか……」

「そう言うことよ。だから貴女に協力してほしいってわけ」

「協力か……」

「貴女もこの惨劇……いや異変を止めたくないのかしら？」

「……」

「にとりさん？」

「正直な話。姉のことは知らないが……それでも姉なんだろう？」

「……そうだな。間違い無く姉だ」

「そうか……とんでもないことをしようとしているが、それでも姉なんだよな」

「ええそうよ。だからこそ共に止めましょう?」

「紫さん」

「何?」

「少し静かにしましょう?」

間違い無く悩んでいるだろうし、姉に協力したいと言う気持ちもあるのだろう。

そうなる困るのだが……今まで世話になったとりさんを無碍にしたいくはない。

「分かっているの? 敵になられるわけにはいかないって」

「だとしても……」

「君は何がしたいんだ？」

戸惑うにとりさんに尋ねられる。

「異変を止めたいですね。地上で大勢の人が死ぬのは勘弁ですし」

「だったら私の力が必要なんじゃないのか？」

「……それはそうなんです、それを決めるのはにとりさんですし」

最初から彼女抜きで話し合うのがおかしいって事でもあって探しに行ったわけでもあるしな。

だからこそ、彼女が嫌だと言うのなら……

「……おい八雲紫」

「何かしら河城にとり」

「お前、私の記憶持つてるんだろ？」

「正確には持つているとは違うけどね、貴女が思い出せないようにしているだけ」

「どっちでも変わらないだろ。さっさと解け」

「へえ」

「何意外そうな顔してるんだよ」

「いえ、問答無用だと思ってたのよね」

「別に、全て思い出してからでもいいだろう？」

「本当にいいのね」

「やけに念押しするな……何だよ一体」

「正直な話、かなり戻っているから莫大な情報で脳がどうなるか分からないわよ」

「……そこまでなのか？」

「……はい、そうですね」

「そこで何故お前が返事するのか分からないが……そこまでヤバいか」

「だからこそもう一度聞いわね。どうするの？」

天魔が後ろで不安そうな顔をしている。

やっぱ山の皆は大切なんだなど。

「……聞く」

「にとりさん……」

「そんな心配そうな顔をするな。正直私がどうすればいいのか確かめる為でもあるんだから」

「……分かりました」

「それじゃあ」

紫さんが何かをし、にとりさんが膝をつく。
それを心配し、慌てて駆け寄る。

「にとりさん……大丈夫ですか？」

「……ああ、大丈夫だ」

「良かった……」

「が……納得は出来ないな」

「納得出来ないですか……?」

「ああ。この事にじゃ無く思い出せなかった自分にだかな」

「それは……」

どう考えても仕方ないだろう。封じていた人がいるのだから。俺自身も思い出せない事あるのだから俺も悪になってしまう。

「分かってはいるんだよ、無理な事は……それでも蓮司を忘れていた事は納得出来なくて」

「……」

間違っているも正しいも違う気がして何と答えればいいのか分からなかった。
そのまま言葉に詰まっていると……

「それで、にとりはどうするかしら？」

紫さんが沈黙を破った。

「ああ、そうだな……天魔様」

「……好きにするといい。もう止めはしないよ」

「有難うございます。それじゃあ……協力するよ」

「いいんですか？」

「蓮司に協力する事は元からずっと決めてた事だしな。それに今回は……姉が居るなら絶対に止めたい」

「そうですね」

アレを止める為に皆集めているんだ。止めなきやダメだろう。

「一度話してみたいしな。私の姉、河城みとりがどんな人物かも気になるし」

「仲良くなればいいですね」

「ああ、そうだな」

「さて、これにて一件落着ですか」

紫さんが安堵したように振る舞う。

それが本心からかは分からないが……と言うよりも胡散臭いが……

「ああそうそう紫」

「何でしょうか？まだ何か？」

「一発殴らせろ」

「……え？」

「元はと言えば全部お前のせいで面倒事になったんじゃないかあああああ」

そうして背中のリュックから飛び出したロケットパンチが直撃する……痛そう。

「痛つ、ちよつとやめなさ……」

「まだまだあああああ」

そのまま喧嘩が始まった……止めなきやダメだろうか？

「あの一」

一応萃香さんに訴えかけるが。

「よし行くか」

萃香さんも参戦し始め止まらなくなった。

とりあえず、心強い仲間は出来たのだが……大丈夫なのか不安になるばかりだった。

t o b e c o n t i n u e d

二百六話 最後の仲間
variously rely
mates.

「さて……準備完了ですかね」

にとりさんが加わり、安定度は上がった。

これでどうにかなるかは確定では無いが、彼女の機械は信用出来るしな。

「んー、萃香は来ないのよね」

「そう言う話だしな」

「え？」

「何よ」

「聞いてないんだが？」

そう言えばにとりさんには言っでなかつた気がする……

「問題でもあつたかしら？」

「問題しかないが。地底なんだろ？蓮司がどう考えてもキツイ」

「だつたらどうしろと？」

「仲間を増やすしかないだろ？」

「アテはあるの？」

「文くらいしかないけど」

「じゃあ文はどうなの？」

「絶対来ないだろうな……地底だとそもそも文の能力活かせないし」

「だったら意味ないじゃない」

「蓮司、誰か居ないのか？」

「俺ですか？」

「ああ、蓮司の知り合いに居ないのか？」

「知り合いと言われましても……」

殆どが紫さんに地上で戦う言われてたしな……居ないのではと思うのだが。

「地上が襲われて問題ある奴らとかで……居ない？」

「うーん……」

考え込む。アイツらを止めたい人は居るのか……

「……確信は無いですが」

「やっぱり居るじゃないか、誰だい？」

「藤原妹紅さんです」

死に戻る前、人里で起きた事を考えれば、間違い無く彼女も止めたいだろう。

協力出来る状態かは分からないが……どうにかなるなら助けて欲しい。

「藤原妹紅……竹林だったかしら。まあいいわ、可能性があるなら向かうとしましょう」

「本当に……確定では無いですからね？」

「何も無いよりはいいもの」

「それはそうですね」

話すだけ話して無理なら諦めよう。

あまり時間を掛け過ぎて鬼が出てきてしまつては意味がないのだから。

そのまま迷いの竹林へと辿り着いた。

なお、にとりさんのマシンで楽出来たのでやつぱり心強い事を再認識した。

「さて、じゃあ行つてきなさい」

「え？紫さんは？」

「少し休ませてちょうだい」

「忙しかったですしね……分かりました」

「そいつはサボりたいだけな気もするが……まあいいか」

にとりさんは不満を言いつつ小屋へと向かう。

「ん……客か？迷子か？」

「あれ？」

妹紅さんだけでは無くて慧音さんも居る。

人里から離れているのは珍しいと思うが……

「つと、どうした？迷子なら送るが」

そうじゃなくて、少年って事はにとりさんは……

「あー……」

なんだかんだ初対面だもんな……そりや姿を出せないか……
これだと自分でやるしかないわけで。

「迷子では無く、力を貸して欲しいと……」

「力、妹紅にか？」

「そうです」

「そうか、なら私は邪魔か？」

「いえ、居てくれた方が有難いです」

「ならいいが、何があつたんだ……？」

「……人里に」

……タンマ、ダメだなこれふぎけるとしか思えないだろうし。
ちよつとあの休んでる人呼ぶしかないな。

「人里に……人里に何かあるって言うんだ!？」

外に出ようとした所慧音さんに掴まれる。

力の差は歴然ですぐに引き寄せられる。

「おい、何かあったのか？言わないと分からないぞ」

「ちよつちよつと待つてください」

「待てだと、今人里で何か起きてるのかもしれないのに待てるわけなんて無いだろう？」

それは当然だが、揺さぶられたら話す事も厳しいんだが……吐きそう。

「慧音、それじゃ話せない」

「はっ……すまなかった。急いでるのにダウンさせてはまずいか」

やっと解放された……助かった。

「さて、これで大丈夫だろうか？悪いがさっきの言葉は看過出来ない。何があつたのだ？」

「……一応はまだなんですけど、恐らくは数日後人里が襲われるので助けて欲しいと」

「人里が……数日後に？何に？」

「鬼に……です」

滑稽な話かもしれない。ただそれは事実なのだ。

「鬼か、到底信じられないが……」

「ですよね」

だから、一度戻ろうと……

「……予言か？」

「え？」

「それは予言なのかって聞いている」

妹紅さんも話に乗ってきたが、予言とは……？

「お前の言う鬼が来るってのは誰かから聞いたのか？」

そう言う事が、確かに幻想郷なら預言者とか居ておかしく無いのか。

そして、ここは話を続けるためには……

「はい。知らない人でしたが、気を付けろと」

「そうなのか……急いで戻った方がいいのか？」

「でも慧音。安易に信じ切るのも良くない」

「それで手遅れなんて勘弁だが……」

「いや、実は輝夜がこの前そう言ってたし今回もその騙しの可能性があるんだよ」

「あー……」

すっごくいやりそうで困る。違うのだが。

「……今回は輝夜さんでは無いです」

「そう言う方が怪しいんだが？」

「……紫さーん」

説得するのが厳しく感じ助けを求め。
やだと聞こえたが無理にでも呼び立てた。

「私必要ないって言ったじゃない」

「時間が無いのが事実なので」

「しょうがないわねえ……」

「八雲紫か、お前何をしに」

……会う人全員から不審がられてるんですが本当にこの人大丈夫か？

「ああもう面倒ね。はい解除と」

「……ええ？」

「何？これでいいんでしょう？」

「いや……確かに早いかもしれませんが危険なのでは？にとりさんの時にはそう躊躇い
ましたし」

「ああその事。ハクタクには何もしてないし、この子は大丈夫でしょ」

「ええ……」

何を根拠に言っているのだろうか？

正直不安しか無いんだが。

「不死身だから問題ないわ。死なないもの」

「……パンクするって話では？」

にとりさんの時死ぬって話だったか？

いや色々混ざって死なないとは言い切れないが。

「……大丈夫でしょ」

「おい、それにこんなポンポン解除していいんですか？」

「それは問題ないわ。貴方以外は」

「……」

紫さんを睨みつけるが涼しげな顔で流される。

そして頭を抱えていた妹紅さんがこちらを向く。

「クソ……頭が痛い」

「大丈夫か妹紅」

「ああ大丈夫だ。ただ問題だ」

「何があった？」

「そいつの言う通り……ってかアンタ何度か会ってるな記憶を手繰ると……また異変なのか」

「はい、そうです……異変ですね」

まだ起きてないとしても異変と断定していいだろう。

「慧音、人里に向かうぞ」

「……鬼が来るのか」

「ああ、もう少しすれば来てしまう。人里を守らなきゃ」

「信じ難いが、妹紅が言う以上は真実なのだろうな。急ぐか」

「その事なんだけど」

「なんだ？紫まだ用があるのか？」

「人里を始め地上は博麗の巫女を始め多くの人間達を守る。だから貴女には異変解決を手伝って欲しいのよ」

「何故だ？博麗達が解決すればいいだろう？」

「そもいかないわ。そうしたら地上を守る者達が居ないもの。あれだけの量を一人も

地上に出さずには無理だし」

「それこそ。アンタ達がやればいいんじゃない？」

「出来ないわよ。殆どの妖怪達は人間を助けられないし人間だって不審しか無くて、妖怪に助けられようともしないわ。だからこうするしかないの」

「……言い分は分かったが」

「だから藤原妹紅。貴女も地底へ来て解決を手伝って欲しいのよ。元凶を対処出来ない限り異変は終わらないから」

「しかし……寺子屋や人里が……」

「こつちは大丈夫だ。博麗達も居るようだし私も居るからな」

「けど慧音……前回は」

為すすべなく負けたと言おうとして指で塞がれる。

「それ以上の言葉は無しだ。やってみせるさ」

「本当に？」

「地底で頑張るんだろう？ だったら地上でも負けてられないさ。私だってやれるんだからな」

「分かったよ慧音」

決意した妹紅は此方を向く。

「今度こそ、蓮司だったかな？ 君を守りながら異変解決をすればいいわけか」

「別に今度こそつてアレは俺自身が悪かったわけで……」

夜が止まった日、あの時の事もちゃんと思い出したのか……

「さて、今日では無いのは分かるけど。それでも急がないと慧音達のためにも」

仲間になった妹紅さんは我先と地底へ向かおうとしてそれを慌てて追いかける。

「ちよつと蓮司お前も早いぞ!？」

そして透明になって存在が忘れられ掛けていたにとりさんも俺達を追いかけ地底へと走っていった。

「あら……じゃあ私も行かないとね」

「八雲紫」

「何かしら？ 上白沢慧音」

「全部お前の筋書きじゃないよな？」

「違うわよ。安心していいわ」

「安心は出来ないけどな」

「筋書きだけで言えば……もしかしたら彼の筋書き通りかもしれないわよ」

「さっきの男か？まさかただの人間だろうよ」

「私も把握し切っていないから分からないけどね。もしかしたらよ」

「まあお前じゃ無いならいい。しっかり解決しろよ」

「言われなくとも」

そうしてスキマに入り込み後を追う。

慧音の方も人里へと戻って行つた。

「さて、ここからね」

仲間を集め、準備を整えた四人は地底へと脚を踏み入れたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

二百七話 旧都へ～j u s t h e l l .

「おい……本当にここに人が住んでるのか？」

「正確には妖怪ですが結構な量が居ますよ」

地底に初めて来た妹紅さんは戸惑っている。

薄暗い雰囲気は怪しげさも増せば確かにそう思うか。

「それこそ地上よりも住民は多いかもしれないわよ」

「まさか、地上にだって沢山人はいるだろう？」

「私は妖怪のつもりで言ったのだけどね」

「紛らわしいわ!!」

「まあまあ……」

いきなり喧嘩しても仕方ないだろうと二人を止める。

「……話題を変えましょう。蓮司、目的地まではどれくらい掛かる?」

「かなり掛かりますね、最下層なので」

「このまま落ちていければ良かったんだがねえ」

「地霊殿の方まで行かないとダメですしね……」

「地霊殿?」

「地底にある施設よ。地底の纏め役である可愛らしい少女がいるわ」

「可愛らしいって……」

本人に言ったら絶対怒られるだろ……

間違つてないとは言いたいが、絶対心覗かれてアウトになる。

「……つと言うか紫さんが知ってたんですね」

「ええ、地底は何度か行く必要があったからね……と言うか」

「？」

「貴方なら察せると思っただけど」

「あー……」

その言われ方をして気付いた。

記憶が消されている以上は彼女に会ったことがそりやあるのか。

「とりあえず、会えばいいんだな」

「確定では無いものの、協力してくれるかもしれないまし」

「ああ。地底の親玉が居ればそいつも諦めるだろうし」

「それは諦めないと思うけどね。それくらいでやめるならそもそもやらないもの」

「そうか、そりや残念」

「だったらその人達の力頼りか」

「いえ、それだけじゃなくて神奈子さんとかが地底に来てるって話でしたし。そちらはまず心強い味方になるかと」

行方不明になっていた神奈子さんは地底に向かったって話だったし。もしかしたら星さんや村紗さんも居るかも知れない。それなら有難いが。

「里を襲ったアイツらよりも多いって考えるなら人数差はまだまだだが、人里と違って好き勝手出来るしなんとかなるかもな」

「妹紅さん……何する気ですか？」

「んー色々々々？」

「……崩壊とかは気をつけて下さいね」

「あーそうだな……」

「そんなノリにすんなよな!?!お前以外ほぼ死ぬんだから」

「あら？私はスキマで逃げるので」

「おいコラ私達が死ぬだけじゃないか!!」

「分かったっての」

なんか本当に喧嘩起きそうだが大丈夫か？

心配しつつも先に進み、やっと他人と接触する。

「……地底に何の用？人間も居るみたいだし」

いつもの事ながら門番がわりとしてヤマメさんが相對する。

さて……どうしたものか。前は下手言つて死に掛けたが。

「久々かしら」

「……スキマ妖怪か。また何かする気か？」

「そんな事ないわ。むしろそう言った事含めて話さないとねと彼女に用があったわけよ」

「……あの子に会わずのは本当に悪影響なんだが」

「仕方ないわよ。トップの役目だもの」

「後ろの奴らは？」

「今回の件で必要な人員よ」

「……人間が？」

「ええ、人間が」

「……通したくないが、仕方ないか」

ヤマメさんが折れて渋々と道を譲る。

凄く嫌そうな顔をしているのは人間とかが居るからなのか、紫さんだからなのか……
考えないでおこう。

「さて行くわよ」

「分かりました」

そのまま、紫さんの後を追いつ地底の奥、地獄へと進んで行く。
橋を越えパルスイさんと会いながら旧都へと向かう。

「……なあ、こつち見る目が多くないか？」

「まあ……人間は目立ちますしね」

「それでも……異様な感じがする」

「慣れますよ、きつと」

「慣れないほうがいいわよ」

「え？どうしてですか？」

「敵対とかじゃないわ。ただこちらを見ているもの」

「それがおかしいですか？」

「何やら……ヒソヒソ話しているのよね」

「ヒソヒソですか……」

「……まあ用件終わらせて早く帰れって事じゃねえかな」

「まあ、それなんですかね」

「さて、もう旧都ね。鬼に気を付けなさい」

「まだ、流石に動いて無さそうですが」

「どちらにせよフラストレーションが溜まつてる可能性も十分にあるわ。油断はしないように」

「それはそうか」

どちらにせよ普段から喧嘩っ早いのは事実だ。さとりさんも居ないし喧嘩吹っかけられないようにしなきゃならないな。

「休みたかったんだけどなあ」

「我慢しなさい。流石に旧都じゃ休めないわ」

「ぶーぶー」

にとりさんが文句を言いつつ旧都へと辿り着く……しかしどうするか……

「通らないといけませんよね？」

「ええ、すぐ過ぎるわよ。そうしなきゃ気にしないでしょ」

「それはそうですね。逃げる相手を追うタイプじゃないものね」

「にとりは大丈夫か？」

「ああ、やってやるさ」

そのまま旧都へと入り駆け抜ける。見つからなければいいが……
ただその想いも虚しく。

「ん？なんか余所者か？」

「……」

気にするな、走り抜ける。ただの人間を追い掛ける気なんて無いだろう。

「あー行っただか……なら仕方ない」

よし案の定諦めたか。ならいいけど……

「おい待て、アイツは」

「ん？あああああ本当じゃねえか」

「追え、絶対に逃すな」

「は……………」

そのまま追い駆けられる…………いや何でだ？

そして脚で叶うはずもなく捕まった。

「…………蓮司!？」

慌ててにとりさんの機械によって鬼が吹っ飛ばされる…………助かった。

「おいお前ら。あいつの言った人間達だぞ追い詰めろ」

「…………あいつの」

河城みとりかもしかして…………まさかもう動いているのか？

「…………やるしか無さそうね」

集まる鬼たちをどうにかしようと、皆戦う準備を始めるのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百八話 鬼の纏め役～fighting girl.

「多いな、どうするべきか」

紫さんが倒しても、妹紅さんが倒しても次々と新しい鬼が現れる。

一向に終わる気配がなかった。

「一旦引くか？と言うか無理してでもこいつらに構い切らずに向かうか？」

「それが出来ればいいのだけど」

此方の方を見る。まあ問題は俺だよな……逃げ切れないし。

「正直私が殿務めても良いんだけどさ」

さりげなく距離を取ろうとは試みるものの、明らかに自分狙いである。

妹紅さんが仁王立ちするが、攻撃しないのを見るとすり抜けてくる……正直かなり厳しい。

「……本当にあの子面倒ね」

「辿り着けずらしいのは……不味いな」

地底どころか旧都すら抜けることに苦戦している。

幾つか鬼対策の道具は持ってきてはいるものの……ここで使うとみとりと対峙した時に不安が残る。

「……だが、使うしかないかねえ」

地底に潜る前、最終確認のため霊夢さんの元へ立ち寄って貰った三枚のお札。

三枚あるからってよりはここで使う不安の方が強い。

「この場を切り抜けるため仕方ないか」

そうして札を投げようとして……

目の前に鬼が吹っ飛んで来た。

「……え？」

いや……まだ使っていないよな？

なんで急に鬼が飛んで来たんだ？

「邪魔すんなっての」

「あ……」

「ん？なんだ驚いた顔をして」

……確か、星熊勇義……いや勇儀だったかな確か。
さとりさんが言うには旧都でも名の高い鬼なんだっけか。
彼女が吹き飛ばして来たのか。

「おー、やっと空いたか」

「えっと……」

何が目的だろうか？正直読めない。

「姐さん。コイツらは」

「あー分かかってる分かかってるっての」

「勇儀、出来れば邪魔しないで欲しいのだけど」

「邪魔か。旧都で散々暴れてそれはあんまりじゃないかってさ」

「先に襲って来たのは鬼の方でしょ」

「入って来たのはあんた達だろう？」

「用があつたからね」

「それではいそうですかとなると思うか？」

「なつてもいいじゃない」

「構わないと言いたいが、地底には地底のルールがあるからな」

「あら、ならどうすればいいかしら？」

「当然、力で示せよ。納得させてみなつて」

「姐さん、それじゃ約束が」

「あ？良いだろうよ。元々戦いたいから従ってただけだしよ」

「しかし……」

「それとも、アンタが渴きを満たしてくれるのかい？」

勇儀さんがそう言うのと鬼は一步下がった。

「まあいい。本命はこつちだしな」

此方の方を睨んで来る。大丈夫、怯えるな……睨まれただけだ……

「生憎だけど、彼はスペルカードを所持してないわ。弾幕勝負は出来ないから諦めてちょうだい」

「最初からそんな気はないさ」

「じゃあ何する気よ？」

「喧嘩に決まってるだろ」

「殺す気？」

「まあ確かに、死んだらそこまでだな」

「それを認められるわけ無いじゃない」

「だからと言ってなあ……ならこうするか」

地面を殴り付ける。そのまま地面が割れた……え？

あれ掠るだけでも危なく無いか……？

「よっし良い感じか」

「脅しが？」

そうなら完全に良い感じなのは事実だが。

「じゃあこっでつと」

勇儀さんは中央に出来た窪みへと立つ。一体何だ？

「特別ルールだ。こっから出たらお前の勝ちでいい」

「こっからつてことは……」

勇儀さんが立っている窪み。大体三人程のスペースしかない。当然戦闘するには狭過ぎるだろう。

「これならいいだろ？」

「……何も無い条件よりはマシですが」

「それでもだいぶキツイわよ。鬼相手に動かせるわけなんて」

「……」

「おいおい、こつちを向いたところでルールは変わったりしないぞ」

「……分かってます」

「死なないように祈りな」

「おいやめろって」

「いえ……これしかないなら」

間違いなく無数に襲つて来る鬼と比べるとマシになる……だからここしかない。

「おう、覚悟を決めたか。流石だな」

「何かあるならいいけど。無謀なら怒るぞ？」

「いや……無くはないです」

「そっか。なら頑張れよ」

にとりさんから応援を受け意気込む。

勇儀さんは構えているがこちらに突っ込んでくることは出来ない。
だから十分に考えてから動く事が出来るだけ余裕がある。

「おい、早くしろや」

「ビビってんのか」

声を荒げた鬼達がいるが約束な以上攻撃はして来ない。

だから考えるしか無い……一撃でも食らえば死にそうだし。

「……流石に使うしか無いが」

問題は役に立って聞いてただけでお札にどんな効果があるか分からない事だが……
自分の望むように叶ってくれるように祈ろうか。

「……死ぬなよ自分」

鬼を動かす、まず持って無理な事だがしなければならぬ。

自分の頬を叩き奮い立たせ戦いに望むのであった。

to be continued

二百九話 喧嘩 (reckless challenge)

e.

一歩進んで一歩下がる。そんな様子見が続く。

踏み出そうにも牽制されいまいち突っ込みきれない、このままと言うわけにもいかな
いのに。

「どうしたどうした」

移動はしていないものの、風圧の拳が此方へと飛んで来る。ただの風の筈なのに当
るだけで痛い。

「焦っちゃいけない。ただのんびりもしてられない」

冷静に考える。既に地底の鬼達が知っていると言うことは、地上に上がって来ている奴らも居るのではないかと。

また地上を地獄にするわけにはいかない。

「……」

石ころを拾いぶん投げる。しかしそれは捕まれ握り潰される。

「おいおい、喧嘩だろ？」

「素手だけが喧嘩なのは勘弁して欲しいんですが」

「だったら一方的にやられると？」

「近付けばこつちが一方的ですしね」

「そうかい、それなら構わねえ」

え……いいのか？

「そつちが折れて突っ込んで来るの待ちやいいだろ？」

「確かにそう言われると合っています……」

「それに、時間が無いのはむしろアンタらだろ？」

「……」

やっぱりそうなのか、なら急がないと。

気を付けなければならぬ筈なのに、慌てて勇み足気味に近付く。

「来たんなら少しは本気見せようか」

「その前にどうにかしないと」

結構近づいたが未だに準備運動みたいな動きをしている。
ここでもうどうにかなればいいが。

「一歩」

「蓮司！」

にとりさんの言葉に足を止める。

さつき喧嘩する前に言われた事か。

三歩目に気を付けろと。

「三歩目……か」

さつき言われた事を思い出す。本当に何が……

しかしそれはすぐに分かった。

「天井が……」

小刻みに震えたかと思つた途端岩が降ってくる。

慌てて避けようとするが……

「痛っ」

隆起した地面にぶつかると、なんでここまで盛り上がってるんだよ……

「つじゃない」

慌てて上から降つて来た落石を避ける……足踏みだけでここまで出来るのかよ……

「本当は地面じゃ無くて弾幕なんだけどな。これもいいだろう？」

「メチャクチャだな本当に……」

一度距離を取らなきゃ、落石が無さそうな場所に……

「そうか、下がるか」

「下がっちゃダメだ」

下がるんじゃない、立て直してすぐに落ちない位置から……

「二歩」

にとりさんの制止を聞かず距離を取った所に二回目の振動が起きる。
しかしそれは先程よりも離れており再び巻き込まれる。

「なっ……」

慌てて内側に飛び込むが岩が顔面に当たる。

頭は割れてはいないものの出血する。

「ぐう……」

「へえ、耐えるか」

「無茶だったの」

「……大丈夫」

無茶だとかどうとか、決闘が終わった時点で負けたら鬼達が駆け寄って来るのだからここで負けを認めるわけにはいかない。

「まだ、まだやれる」

「そう来なくっちゃな。それじゃこつちも全力だ」

そう言いながら足を振り上げる。

「三步必殺。さあさあさあ!!」

地面が先程以上に大きく揺れる。

ただもう既に分かった、前に突っ込めば当たらないと。

「よし」

案の定後ろ側の方でメチャクチャな事が起きている。

今までとは違って爆発に近い気もするが……本当に揺らしただけで起きたのかアレ
?

「最後の三步目を避けたか」

「大体分かりましたからね」

「へえ……分かったって言うか」

「……まだ何かあるんですか？」

「いや、正真正銘三步で終了だ」

「なら、今が……」

「今を読めてないのはお前の方だけだな」

「はっ何……」

落石の方を見ていたせいで慌てて勇儀さんの方を振り向き気付く。
避ける事に集中して目の前に居ると。

「避けたまでは良かったんだがな」

そのまま全力の拳を喰らう。

流石に耐えきれず吹っ飛ぶ。

そのまま、三步の領域に入り込み頭上に岩が降って来る。

「ぐう……」

「悪いな人間、終わりだ」

「蓮司いいいいいい」

にとりさんの叫び声が聞こえる……

ああそうか、今頭上から岩が……ああダメだ。

「……」

痛みはある。ただそれは殴られた腹部に感じるだけであって肝心な頭などには感じない。

何が起きたのかと閉じた目をそつと開ける。確認すると岩が直撃して居ない。

「助かった……?」

運なのだろうか? 偶然直撃しなかったと言うなら有難いが……

「うぐ……」

腹を抑えながら立ち上がる。直撃したはずだが貫通がしていないようだ……骨折してないとは言い切れないが。

「蓮司、生きている……無事なのか?」

「驚いたな。拳に岩で確実に仕留めたと思ったが」

「……なんとかですがね」

足を引き摺りながら前進する。まだ動けるから負けでは無いのだ。

「……はあ、はあ」

「その身体でやる気か」

「まだ、終わってないならやるしか無い……から」

「しょうがない、耐えきったご褒美だ。一撃受けてやるさ。一方的も喧嘩としてつまんないしな」

「……」

来た。油断とは言えないが、それでもどうにか出来るかもしれない時が。

ここしかない一撃を浴びせる時が……

「今行く」

先程のように怯えた足では無く、引きずりつつも退かずに直進して行く。そして目の

前に辿り着いた。

「さあどうする？」

「奥の手を……」

勇儀さんの目先でお札を使う。何か起きてくれと願いながら。

「……頼みました霊夢さん」

札は燃え上がり辺りに突風を巻き起こす。

予想していなかった勇儀も足が揺らぐ。

「うわっなんだこりゃ」

当然目の前で起きた突風に自分も無事では無く地面へと叩きつけられる。

「がっ……」

痛みを感じつつ、周囲を確認する。地べたから見えた彼女の足を。

「あっ……」

勇儀さんの踵がはみ出たのが見えた。

ほんの少しだったが、目線が低い自分には確認出来た。

「危なかったが、これで終わりか」

「……て」

待てと叫びたかったが満身創痍で声が出ない。

周りもはみ出た事に気付いていない。

「それじゃ。俺達の勝ちって事ですか」

周りの鬼達の歓喜の声が聞こえる……認めてたまるか。
動け、動けよ……

しかしその想いは通じず、既に自分は動けない。

「……う」

悔し涙を流しながら、立ち上がる事が出来ずそのままだった。
もうどうしようもないと思わされていた。

「いいえ。違いますよ」

その声が聞こえるまでは。

to be continued

二百十話 怪しげな提案～outside knowledge.

「何が違うんだ？さとり」

話に割り込んできたさとりさんに対して勇儀さんが不満そうな顔をする。

「何がって勝敗の事ですよ」

「まさか。そいつの勝ちとでも言うത്？」

「そんな文句ありげな顔をするくらいなら自分の足元でも見たらどうですか？」

「足元？あー」

勇儀は自分の足元を確認して理解する。

確かにほんの少しだけはみ出していた。

「これくらい気にするもんでも無いだろうよ」

「負けず嫌いで大雑把なのは分かりますが、貴女が決めたルールでしょう？」

「あー……まあそうだけどさ」

「それに、命懸けで決めたルールです。貴女が一撃喰らうと言って全力を出したのに、そう破られたら堪らないでしょう」

「うぐ……」

さとりさんの正論に言葉が詰まる。

後ろの鬼達も流石にさとりさんには文句は言えないのかおろおろしている。

「後の事は私が引き継ぎますので貴女方は大人しくしていなさい」

「納得いかねえ……」

「でしたら相手しましょうか？全力でお相手しますよ」

「……はあ」

溜息を吐きながら勇儀さんは鬼達に指示を出す。そのまま鬼達は散らばっていった。

「最後の力こそ驚いたがあんなもんじゃ物足りないからな。次こそ本気でな」

どう考えても俺には無茶な事を言い残して去って行った。

「……さて色々ありますが、何故貴女が居るのですか八雲紫」

「あら、別に居たつていいじゃない」

「貴女が居て良い事があつた記憶がありませんね」

「あら？そうかしら」

「……まあいいでしょう、概ね話は分かりましたし」

「あら、思った以上に読むのが早いのね」

「貴女のは最初から読む気はありませんでしたので」

「そう。折角意地悪しようとしたのだけど」

「……急用の筈なのによくそんな余裕ありますね」

「本当に分かっているようね」

「ええ。協力的な人が居たもので」

倒れているこちらをじっと見てくる。

協力的……？

「色々忙しくなりそうですが、まずは彼を休ませなければなりませんね。こいし」

「え？こいしさんも居るんです？」

「貴方を明らかに助けていましたしね。正直驚きましたが」

「俺を……」

少し考えて理解する。勇儀さんの三步目で助かった理由とはと。

「あ？バレた？」

「バレたではありません。全くすぐ姿を消すんだから」

「ごめんなさい」

突然何も無い空間からふわっと現れたかと思えば、さとりさんにごめんなさいのポーズをしている。

って事は本当に命を救われたわけだ。

「こいし。ちゃんと担いで来るように」

「はーい」

了承と共に持ち上げられたが戻る途中すぐに引き摺られ始めた。

え？なんで……痛い痛いって。

「そう言えばさ」

「なーに？」

「なんで助けてくれたんですか？」

さとりさんならまだしもこいしさんが助けるようには思えないのだが……

「分かんない」

「まあ、ですよね」

「気まぐれと言うか、無意識に助けられたわけか……本当に運が良かったな。」

「兎に角、ありがとうございます。お陰で生きていますので」

「うん」

助けられた事に感謝しつつこれ以上引きずられまいと先行して地霊殿へと向かった。

「んー、なんで助けたんだろ」

こいしは自分でも分からずに戸惑っている。

普段ならそんな事を考えない筈なのに。

「何故か助けないと思って思ったんだよねえ」

自分自身に何が起きているのか戸惑いながら後を追いかけて行った。

「ん？なんでアンタが居るんだい？」

「いや、こちらも驚きですが」

さとりさんが少し用があると別部屋に待機を言われたがそこに神奈子さんがいた。

神奈子さんが地底に居るのは知っていたが、既に地霊殿に居たのか。

地底で騒動が起こっているわけだしまだ来れていないと思っていた。

「しかし、旧都で大分騒いでいたようだけど。まさかアンタ達だとはねえ」

「色々ありましたしね……旧都で」

「まあいいや。ちようどいいところだよ」

「ちようどですか？」

「さとりの説得を手伝って欲しいのさ」

「今はそれどころじゃないんですが……」

騒動に巻き込まれていて今はそちらをなんとかしないとイケない。自分達も説得す

るのはするのだが絶対別件だろうし。

「頼むよ。そつちも手伝えば良いだろう?」

「それは……有り難いですが」

元から神奈子さんも手伝ってくればって事だったし。そうなってくれるなら嬉しい限りだが。

「何を頼む気なんです?」

まずそれを聞かないわけにはいかないなど。

「ああ、その事かい? アンタに分かるかは分からないけど大丈夫?」

「馬鹿にします?」

と言うかだ方が一分からないなら、分からない事の手伝いをしろって言われてる？

「いや、早苗の知り合いだったねそう言えばなら分かるか」

「……もしかして外の世界関係です？」

「ああ。そう言う事だね」

「幻想郷に外関連持ち込むのは不味いのでは？」

「何、大丈夫だろう別に革命とかする気じゃ無いしな。だろう？」

紫さんの方へ尋ねた。そう言った件を話せるトツプだもんな。

「内容によるけど、まあ危険な物じゃなければ良いわよ」

「つてわけさ」

「いや……まだ内容聞いてませんし」

安全かどうか全く分からないなど。

「なあに、幻想郷を便利にしたいわけさ」

「便利にとって良いようですが……やっちゃんならぬものもありますからね？」

「そこは大丈夫だ」

「本当ですか？」

「電気って知ってるだろ？」

「知っていますか」

確かにそれは幻想郷には縁が無いものだな……しかし作る気か？

「考えてる通り電気を生み出す気だ？良いだろう？」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百十一話 古明地さとりく her speculat
ion.

「貴方達が知り合いなのは驚きました」

「え……あつそうですね」

さつき話していた事はすぐに筒抜けらしい。

まあそれは構わないっちゃ構わないが。

「そちらも色々な用件があるみたいですが、まずは本題から行きましようか」

「はい、お願いします」

河城みとり、そして地底の鬼達の事だ。

これをどうにかしなければまた死ぬだけだろう。

「まず、貴方達はどんな関係なんですか？」

「貴方達って」

「小野寺さんと、みとりの事ですよ」

そっちな、てつきりこのメンバーとかの事かと思つたが……と言うか。

「どう言う関係……」

どう言う関係なんだ？予想は多少は付くとは言え確信ではないしな。

「なんでそんな悩んでるんですか……」

「いや実際、俺も曖昧で……」

「なんですかそれ……成程」

記憶がない事をすぐに理解する。

しかし同時にそれ以上に困った顔をする。

「本当に……何が……」

「多分みとりさんに聞いた方が早いのだとは思いますが」

「……そのつもりでしたが、連絡が取れませんでした」

「連絡が取れないですか……」

「ええ、ですので気になったわけですが……知らないとなると」

「そのみとりって奴が悪い事をしようとしている。それを止めるじゃダメなのかい？」

「そうしてもいいのかもしれませんが……みとりの意図が読めないのですよね」

「それは全員が分からないですね……ただやろうとしている事は……」

「それは分かりました……少しは話してから動いてくれれば良かったのですが」

「なっちまったもんは仕方ねえさ。で、さとりだっけ？アンタはどうするんだ？」

妹紅さんも尋ねるものの、頼むような目で見える。

俺達もそうだが、妹紅さんも人里が大事だしな……

「みとりと……貴方達……」

「手を貸していただくために、こちらに来たのですが」

「……手を貸すとは決められませんね」

「なんでだ？流石に放置はまずいと思うけど」

「みとりが何を考えているか分からない以上は安易に参加出来ませんし。ただ私も向かいます」

「それはいいわね。さとりが居れば安心は出来るもの」

「その結果。歯向かう可能性もありますがね」

「いいえ。貴女なら分かってくれるはずだわ」

「そうですか」

紫さんの言葉に鬱陶しさを感じるように目を背ける。

やっぱ嫌われてない？

「こいし。お隣を呼んで来てちょうだい。お空はいいわ」

「んー？分かった」

そのままこいしさんはふつと姿を消す。失踪しそうだが任せて大丈夫なのだろうか？

「大丈夫ですよ。こいしは最近迷子が減りましたし」

「そうなんですか？」

「ええ」

それなら良かった。やっぱあの時から少しづつ分かり合えてるのだろうか？

「貴方が……」

「どうかしましたか？」

「いえ……それより他に用件があるんじゃないですか？」

「他の用件……」

「ああこっちの事かい」

「そうですね。貴女は元々別に来たようですし」

「この件が終わってからのがいいと思ったがね」

「そう言われましても貴女の考えてる事は理解出来ないので説明だけでもしてもらいませんと困ります」

「ああまあそうかねえ」

「……今馬鹿って思いませんでした？」

「いやいや……決してそんな事は」

なんか汗かいてるんだが神奈子さん。
いや、思っちゃったんだろうな。

「……取り敢えず未知のエネルギーと言う事は分かりました。それで地底にどう関係が？」

そのまま神奈子さんは話始めた。説明の仕方が分かりやすい事に驚いたが……

「つてなわけはどうだ？」

「分かりました」

「ん？これだけで分かってくれるのは有難いが」

「いえ、内容は分かりましたって事です。今決めるとは言ってませんし」

「それもそうか」

「みとりと話し合って。落ち着いてから決めます」

「いい答えを期待するよ」

「そうですね。そうなるといいですが」

お互いが納得出来たようなら良かった……

「……？」

さとりさんが今一瞬手招きしたような。

気のせいだろうか。

「では、こいしが戻ってくるまで少し失礼」

そのままさとりさんは部屋を出る。

さつきの出来事が気になった為、付いて行くように出て行った。

「あの……」

「小野寺蓮司さん」

「何かありましたか？」

「単刀直入に言いますね。これが正しいと思いますか？」

「え？」

なんのことだろうか？何か間違いがあったのか？

「そう言えばみとりに一つだけ言われていた事を思い出したんです。これが正しいのかと」

「それは、どう言う意味での事ですか？」

「分かりません。私はみとりの心は覗けませんので」

「そうですか……」

正しいのかどうか。真正面から言われると揺らぐ気持ちもある。

ただ間違っているとは思えないし今回の異変は間違い無く止めないといけない。

「正しいと思っています」

「分かりました」

「あの、これで何か？」

「私も、貴方から探った記憶には貴方のことがありますが、それでもそれだけじゃあ信用出来ません」

「それはそうですね」

「私はみとりを信じています。昔からの付き合いですし」

昔から地底に居るらしいし、仲もいいと聞いていたしな。

「しかし貴方達の心を覗いてもあり得ない事に思えても、嘘偽りは見えませんでした」

「全部真実でしたから」

「みとりの話を聞くとは言いましたが本当はみとりの味方をしようとしてました」

「……それは」

「だけど、貴方を間違っているとも思えなくなりました。その為に勇儀に全力で挑んでいたわけですし」

「さとりさん……」

「ですが、考えた上で貴方達と戦うこともある事を忘れないように」

「考えてくれるだけでも有難いですよ」

「そうですか」

あれ？今さとりさんが笑ったような……気のせいかな？

「さとりさまー」

「ああお隣達も来ましたね」

向かつて来た二人の方を向く。

「それじゃあ行きますか。真実を確かめる為に」

「はい！」

俺は一度部屋へと戻り全員を呼んでから。共に地の底へと向かうのであった。

t o b e c o n t i n u e d

二百十二話 地上での行動lack of prep
a r a t i o n .

博麗神社、ここに多くの人間達が集まっていた。

「霊夢。結局どうなんだ？」

いの一に訪れた魔理沙が尋ねる。

「……正直信じたく無かったけどね」

「つて事はまさか……」

「ええ。文からの報告で鬼の姿が確認されたらしいわ」

「はあ……」

「魔理沙、どうしたの？確かに面倒だしやりたく無いけどアンタは喜んでやるタイプじゃない？」

「いやそうじゃなくてな……」

「じゃあ何よ」

「地上に鬼が出るのも意味分からないし、それを当てた人間もなんというか……なんだかなあって」

「ほんと、出鱈目だらけよね」

「小野寺君ですし、なんでもありなんだと思いますよ」

「いや、そう言われても困るんだが……」

「彼の事は今は大事では無いです。今は先に対処でしょう」

「そうね……此方もそこまで多いわけでは無いものね」

　　霊夢は周囲を見る。魔理沙と早苗とアリス。それに裏方として文がいる。

　　正直、敵の量が分からない為足りているとは言いが辛い。

「普段から人間と交流があるアリスを除いて、人間じゃなきやダメなのは分かるけど……それでもキツイわね」

「いやはや……これは命蓮寺の皆に協力を要請するしか無いでしょう」

「嫌よ」

「霊夢？」

「商売仇に協力なんて言うわけないでしょ」

「あのかな、霊夢そんな事言ってる場合じゃないだろ」

「それに、そこまで信用してないのよ」

「そうか？人里で信頼されているようだが」

「つい最近異変が終わって人里に来たのに、またすぐ異変が起きた。こんな頻繁に起きる筈なんて無いのに……関係してないと思えないのよね」

「考え過ぎだろ」

「それなら良いだけよ。どっちみち頼る気は無いわ」

「そうか。分かったよ」

「霊夢さん、そろそろ」

「分かったわ。行きますか」

人里へ向けて、人里を守る為に準備する。

「小野寺君達は大丈夫ですかね……」

「信じるしか無いわ。彼が頑張つて来ても地上が大惨事じゃ意味が無いもの」

「アリスさん……そうですよね」

「大丈夫よ。ちゃんとこなして彼の帰りを待ちましょう」

「はい！」

そのまま皆人里へと向かう。
当然まだ何も起きていない。

「ここから、地底へ向かうわそれで鬼達と会うでしょうし」

「それは良いんだが……地底ってどう行くんだ？」

「……あれ？」

「霊夢……まさか？」

「いやいや、アリス……貴女は」

「地底に行ったって散々聞かされただけよ」

「早苗……」

「妖怪の山に通じる道はあるとは聞きましたが……詳しくは分かりません」

「文なら分かるだろうけど……」

生憎と文は今居ない。もしかしてやらかしたのだろうか？

「嘘だろ……どうするんだよこれ」

「……迎撃準備を整えて」

「ダメに決まってるでしょ。人里巻き込むわよ」

「そうよね……」

「そう言う準備も必要だろうが、なんでこんなうっかりなんだよ」

「普段は異変起きてから動くから場所が分かるのよ」

「今回はそれが手遅れだろうよ……しゃあない全員で情報収集だ」

「そんな暇……」

「それしかないからだろ……」

「うぐっ……」

霊夢も渋々従い全員で手分けして探し始めた。

しかし、状況はよろしくない。

「まあ……そりゃ知らないわよね」

「慧音も曖昧だと言うと……こりや文を探すしかないか……？」

「……いえ、霊夢さん。まだ行ってない場所が」

「早苗、何処かあったかしら？」

「命蓮寺ですよ」

「早苗、忘れたとは……」

「それしか方法が無いなら仕方ないですし、何より私はあまり聖さん達が関わっているようにも思えないんですね」

「そう言えば、あんたは確かに会ってたわね」

「私も会ってはいるわ」

「ああ、異変に関わっていたわね。それでアリスはどう思うの？」

「妖怪と人間の共存。言うのは簡単だけど本気で実現しようと思ってたわ」

「……」

「危険だと思う……けど信じたい気持ちも同時に強かったの。それだけ全力さを感じたわ」

「そう、似た意見なのね」

「霊夢は会ったこと無いだろうから不安だろうけど、少なくとも私は彼女……聖白蓮は関わってないと断言するわ」

「そりや良い意見だな。霊夢、どうするんだ？」

「ううううう……分かったわよ!!」

少し怒り混じりの声を魔理沙にぶつける。

そのまま御幣を命蓮寺方向へ向ける。

「行くわよ！さっさと行くわよ。何も無ければ承知しないんだから!!」

霊夢は腹を括り、命蓮寺へと突っ込んで行き他のメンバーも後に続いたのであった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百十三話 私がすべき事～determination
n girl.

「参拝の方は此方に並んでくだ……」

「邪魔するわ」

「おい、勝手に入れられちゃ困るのだが」

「急用なのよ。聖白蓮を出してちょうだい」

「いや、あの方でも用があるからってホイホイ皆と話されても困るのだが？

「いいから」

「いいって……よくな」

「いいから」

「……その格好、もしかして博麗の巫女か？」

「そうよ」

「何の用だよ本当に……」

「だーかーらー、聖白蓮に用があるって言ってるの」

「お前のような危険人物通すわけ無いだろ!？」

「だったら力尽くで……」

「やってみろ、こっちだって全力で……」

「ちよつと霊夢さん」

「早苗、アンタも手伝いなさい」

「いやそうでは無くてですね……頼みに来たんですから」

「妖怪に凶に乗らせると碌でも無いわよ」

「妖怪が全部悪いわけじゃ無いって何度も……」

「ああ早苗か……助けてくれ」

「流石にこれは止めますので」

「早苗、アンタはどっちの味方なのよ!？」

「合ってると思う方の味方です」

「ちよつと、それじゃこつちが間違ってるみたいじゃない！」

「……霊夢、私でも早苗と同じに思うぜ？」

「魔理沙まで……なんでよ!!」

「と言うわけで帰ると良い」

「帰れるかって話よ」

「あの一」

「聖……どうした？」

命蓮寺の中から聖が顔を出す。それにナズーリンは驚いている。

「いえ、前で騒いでいるようでしたので」

「ああ気にしないでくれ、問題無い」

「大ありよ」

「あら、確か……霊夢さん。何かご用でしょうか？」

「ええ。少し聞きたいことがあって来たわ」

「分かりました。では中へ……」

「生憎だけどそんな暇は無いの」

「あら、何か急用でしたら聞きます」

「ほんと、これくらい簡単な事だったのに」

「いきなりこちらの話すら聞く耳持たない人間を信用は出来ないさ」

「なん……」

「霊夢さん用件を話しましょう!!」

「そっそうね……聖白蓮、地底への行き方知っているかしら？」

「地底ですか？」

「ええ。行かないやならないの」

「村紗や星が向かいましたし知っては居ますが……」

「つ、教えてちょうだい」

「はいそうと教えるのは躊躇いますね」

「なんでよ!?!」

「意図が読めませんし……わざわざ危険な地底に向かう意味も」

「異変解決よ」

「異変ですか……」

その言葉に聖は驚いたような顔をする。

「なんでそんな表情するわけ?」

「いやそりやそうだろうよ……異変なんてまだ起きてないだろう?」

「起きてるわよ」

「いやいや、起きてたら何かしらが起こって……」

「この人里に向けて鬼が迫って来てるわ」

「……は？」

「まあ……そうですねえ」

「鬼……ですか」

何言ってるんだこいつって顔をするナズーリンさんに早苗は賛同している。

一方の聖は何故か納得しているようだ。

「だから、人里に被害を出させないように、私達も向かって止めないといけないの」

「……理屈は分かりました」

「いいのかい聖」

「……どうでしょうね」

「どうでしょうってなんだ？」

「このまま素直に教えるのが正しいのかとは」

「……躊躇う理由あるのか？」

「星達が地底に居た頃こんな事は無かったらしいですし。そう考えると何かとんでもないことが起こったように思えます」

「そうするとどうなる？」

「例えば住処を奪われた、地底で問題が起きて住めなくなった……みたいに仕方の無い理由があるかもしれない」

「それは確かに否定出来ないな」

「そこに博麗の巫女……間違い無く衝突するでしょう」

「ええするわ。その為に聞いているのだから」

「話もせずにですか？」

「出来る相手だと思ってないもの」

「決めつけはいけません」

「違うわよ。決めつけないといけないの、そうしないと手遅れなんて事はあるから」

「……………」

「……………」

お互いの睨み合いが続く。

魔理沙やアリスまでも沈黙を続け、戸惑う早苗は右往左往している。

「あつあの二人とも……………」

「早苗、今は静かにしてなさい」

「でも、アリスさん……………」

「私達もなんとかしなきゃとは思ってるけど、ここで口を挟むべきでは無いわ」

「……………はい」

自分じゃどうしようもないのは分かっている。でもこの状況も良くない気がしてならない。

「私だって……なんとかしなければ」

彼が命を掛けて止めに行ったのにダメでしたなんて言えるわけが無い。
だから膠着なんてしてられない。

「あっあの……」

「ちよつと早苗!？」

「アリスさんごめんなさい。私も見ているままでは無理です」

「早苗さん、どうしました?」

霊夢の時とは反応が違い。優しい顔で早苗の言葉を待つ。

「早苗」

「霊夢さん、良いですか？」

「分かった、任せるわ」

霊夢は此方を信用したようにまっすぐな目で返す。

その表情に応えるようにより一層決意する。

「……私の話を聞いてください」

t o b e c o n t i n u e d

二百十四話 私達が成さなきやいけない事 full

power girls.

東風谷早苗は話した。これから起こるであろう事を、どうして欲しいのかを。かつて自分の油断で死なせてしまった責任を果たす為奮闘している。

「(何故自分の記憶が消えていないのか不思議ですが)」

霊夢さんや魔理沙さんは覚えていないようでアリスさんだけは彼の事を知っていた。

前回戻る直前に私に人里の現状を伝えに来た文さんもその事を知らないらしい。

「皆さんも幻想郷に来たばかりで忙しいと思います。でもこのままだとそれすら出来なくなるのです」

「……それが、本当なのですが」

「私は嘘を吐いていません」

「まあ……博麗の巫女よりも信じたくはあるが」

「それに、あの時約束しましたよね。悪い妖怪はなんとかしなきやダメだつて」

「それは……確かに」

船に乗って魔界に行った記憶は残っているようだ。

ただしそこに彼は居ないようだが……

八雲紫、本当に彼女は何をした？

「だったら、今回はそれに該当するケースです」

「そう言われても……」

「……決断をお願いします」

「いつもと違うんだな」

「ええ。私だけじゃなく人里の皆様の大事もかかっていますので」

いつもの優しい雰囲気はそこになく本気で相手を見つめる。

「その言い方は……」

「ナズーリン、もう良いです」

「聖？」

「早苗、もう向かわないとまずいのですね？」

「はい。文さんがそう言っていました」

「ナズーリン。いいですね？」

「……聖がそう言うなら」

「では皆様向かいきましょうか」

「は？何言ってる？」

「正直な話。いくら早苗が言おうとも、貴女達を信用しきるのは無理ですし私達も向かいます」

「つ……アンタねえ」

「それに、私達も心配なんですよ」

「鬼達が？」

「いいえ。地底に行った星や村紗がですよ」

「あ……」

「貴女達が言うような事態ならあの子達もまずいんです。なので私達も見に行かなければなりません」

「そうね。霊夢、彼女達の言い分は十分に納得出来るわ。それに戦力も欲しいわけだし」

「そうね……その通り。頼むわ、聖白蓮」

「……霊夢、どうしたんだ？らしくないが」

「今回頑張ったのが早苗なのに文句言うのは筋違いでしょ」

「それはそうだが……」

「霊夢さん……」

「早苗、有難うね。お陰で助かったわ」

普段ではあり得ないような感謝の言葉に驚く。まさかこんな霊夢さんが見れるとはと。

「意外そうな顔してるわね」

「え……すみません」

「いいのよ。自分でもそう思っているし」

「あはは……」

どう反応して良いのか分からず苦笑いする。
変な反応したらしばかれそうだし。

「それでもね。譲れないものはあるの」

「譲れないものですか？」

「幻想郷を妖怪から守る。それは博麗の巫女の仕事だから」

「それは、そうですね」

「だから人里が大変な事に遭うなんて起きてはならないの」

「そのためなら自分を曲げられると？」

「ええ。嫌いな相手にだって頼むし。今回みたいに礼だって言うわ」

「その割には最初は嫌がっていたようですが」

「それは言った通り信じてなかったから」

「いや絶対プライドも拒んでいただろうぜ」

「うっさいわね」

「……凶星ですか」

どちらにせよ、決断してもらった為文句は言えない。

皆で止めに向かうだけだ。

「さて、いつまでものんびりしてないわ。皆、向かいましょ」

「は………」

命蓮寺の全員で来るようで、ナズーリンや一輪も含め聖白蓮の先導の元、皆で向かった。

「皆さん遅いですよ」

「しばくわよ?」

「なんでですか!？」

「行き先をちゃんと伝えなさい。私達誰も地底への行き先なんて知らないのよ」

「ああ……それはすみません。てつきり知ってるものかと」

「行っていないんだから分からないわ。勝手な決めつけはやめなさいよ」

「ですねえ……次から気を付けます」

そう言いつつ文は周囲を見渡し違和感を持つ。

「あれ……なんで命蓮寺の皆さんが？」

「手伝ってもらったことになったわ」

「え……ええええええ!! 霊夢さんがですか？」

「いいじゃないの」

「いいですけど……ええ、あの霊夢さんが命蓮寺に？」

「そうよ。必要な以上は私だって我慢するわ」

「分かりました。気にはしていられませんし急ぎませうか」

く過去と自分く

二百十五話 燻る不安く I a m …….

「気を付けて」

「はい」

大丈夫と言いたいところだが前に落ちたしなど、気を付けなきや今度は死ぬかもしれ
ないし。

「本当は、飛び降りれば早いですか」

「……」

確かにそうだ、下に行くだけなら飛び降りた方が早い、皆飛べるわけだし。飛べない自分が問題だが結局覚えられていないわけでしょう……
と言うかただの人間には無理です。

「にとり、なんか無いのか？」

「あつたらもう渡してる」

「だよなあ……」

「俺の事はどうしようもないので、気にせずに」

「と言うか、あんた達先に行った方がいいんじゃないの？」

「紫？」

「彼がいけないのは仕方ないとは言え妹紅やにとりは行けるじゃない？態々付き合わな

くても」

「それはそうだが……紫は？」

「面倒くさい」

「……」

「嫌よ」

「お前ここまで来て……」

「神奈子もそうでしょ？」

「いや、お前と違って私は行くが？」

「え？」

「サボり癖のあるお前とは違って急いで早苗達の元に帰りたいしな」

「……」

「つてわけで何もしなくても終わらせればいいんだろ？」

「そうだと楽ね」

「ここまで言っても来ないのか……」

このままじゃ良くなさそうだ。地味に険悪な雰囲気が出て来たんだが……

「流石に、ここで言い争っても仕方ありませんね。三人を連れて行けばいいんですね？」

「三人とも……大丈夫ですか？」

「……大丈夫だ、そのために来たんだしな」

「ああ私も大丈夫だ。だから蓮司の方も気を付けろよ」

「はい、落ちないようにします」

「そうじゃなくてだ……」

「……」

「アイツがごねて残ろうとしたんだ、警戒をしとけよ？」

「そこまでします……?」

確かに違和感が残るが始めに助けに動いてくれたのも事実なわけで……

「まあ、無警戒は止めとけよなと」

「分かりました、にとりさん」

「實際気を緩める暇など無いしな……」

「紫さんが敵になったら詰む以上警戒しても……つて気持ちもなくは無いが。」

「先行くからな」

「そう言いつつ皆地の底へと飛んで行く。正直ここまであつさり飛べると羨ましいな。」

「あつさり行つたのね」

「おかしいですか？」

「いえ、変じゃないけど。本当にいい縁を築いて来たのねと」

「それは、確かにそうですね」

「ほんとまるで……」

「何か言いました？」

「さあ、どうでしょうね」

「……」

明らかに聞きたいことなのは分かる、ただ話してくれないだろうけど。
変な動きをしてない事を確認しつつ会話を続ける。彼女にだけ聞きたい事もまだ
あったから。

「……紫さん」

「なあに？」

「……俺の旅ってここで終わると思いますか？」

答えてくれるとは思わない。ただ尋ねてみた。

「成程」

NOと言われると思ったが、悩む素振りをして驚く。

答えてくれる可能性があるのかと。

「彼女が過去を持っているって話だったし、それを思い出せば終わるのか？」

河城みとりが過去を握っている。彼女はそう言っていた。

逆に俺の死に戻りの原因は八雲紫にあったはず。

だからこそそれを思い出せば全て終わるのか？と。

「確かに……言いたい事は分かるわ。貴方の目的は結局それだものね」

「それで……結局言ってくれるのか？」

「そこまで気になるなら逆に黙ってたいわね」

「……」

「まあまあそう怖い顔しないの」

「誰のせいだ……」

「そうね……貴方にはまだやる事がある。と言っておきましょうか」

「やる事……それは」

「分からない」

「え？」

「私でも分からないのよ」

「何を……言ってるんだ？」

おかしいだろうよ。この人が知らないわけなんて無いだろうよ。
結局話す気が無いだけか。

「それを貴方が探さなきゃならない」

「無茶苦茶だな」

「でも、そうしなきゃならないわよ」

「……はあ」

これ以上はどうしようも無さそうだと諦める。

いつまでもにとりさん達を待たせるのも悪いわけだし。

「行くしか無いな」

「ああ一つだけ言っておくわ」

「……なんですか？」

まだこれ以上何を言うのだと思いつつ彼女の言葉に耳を傾けようとする。

正直、碌でも無い気がするんだが。

「貴方が全てを思い出せば間違いなく今の縁は壊れるわ。その時、どちらを選ぶかしっかりと選びなさい」

「……」

どちらをか、不安にしかならない様な言葉を聞かされ、過去の自分に嫌な予想を持ちつつ、奥へと進んで行った。

t o b e c o n t i n u e d

二百十六話 信じられないもの～disgusting
enemy.

「……なんだ？」

徐々に下に降りて行くが、違和感を感じる。

正確には違和感と言うよりは……

「音？」

「そりや皆が先に行ったもの……じゃ無いわね」

話し声などならまだ分かるが……明らかに違う。

金属と金属がぶつかるような。

「大方闘ってるんでしょうね」

「え？ 闘ってる？」

「別におかしくはないでしょ？ その可能性はあつたんだし」

「そうは言ってもそこまで経ってないのに……」

「色々疑問に思うのは分かるけどこうなつた以上は急ぐわよ」

「はい」

「先程に比べて道が多少は広がつたのもあり少し速度を上げる。

闘っているとしても何が誰かなどを急いで確認しないとイケないし。

「流石にまだこの高さじゃ飛び降りれないが……」

「出来るわよ」

「え？」

「通りなさい」

そう言いながら紫はスキマを開く。

「……何処に繋がっています？」

「下にだけど？」

「……先程やってくれて良かったのでは？」

「無駄に疲れるだけじゃ無い」

「……………はあ」

もうこの人は仕方ないかと観念しつつそのままスキマへと入り込むことにした。当然というべきかそのまま底の方へと辿り着いた。

「皆、何を……………」

すぐに周囲を見渡す。そこには先行したメンバー達がいた。それだけなら普通だったが……………

「……………え？」

しかし、予想外の展開に驚かされる。彼女達が闘っていた相手は……………

「星さん、村紗さん？」

「蓮司、いつの間に……と言うか知り合いか？」

「知り合いですね。ただ通じないと思いますが」

「通じない……ああそう言うことか」

自分にとっては知っていても、彼女達にとっては初対面だろう。

だからと言って闘ってるのが驚きだが。

「話し合いなどは……」

「出来るもんか。初めに攻撃して来たのはあいつらだし」

「……何が」

地底に来たのは聞いてたとはいえそのまま暴れ回ってるとは考えてなかったし……
本当に目的が読めない。

「と言うかだ……アイツら弾幕じゃなくて直接的に攻撃してくるし……勘弁してくれ」

「……弾幕ごっこは確か覚えていた筈ですが」

間違い無く使ってたしな。星さんは見てないがぬえが言ってたし。

「だったらルールに従えつての」

「言っても仕方ないだろ、早く何とか……」

構える妹紅さんの頭上に錨が刺さる。

そのまま身体が崩れさり、燃え尽きて復活した……知っていたが目の前で見ると驚かされるな……

「おっと、やってくれたなあ!!」

炎の塊を二人にぶん投げる。

躲されたタイミングに合わせて詰め寄る。

「にとり達、一気に駆け寄るぞ」

その言葉に全員で詰めるが捌かれる。

「え……？」

確かに魔界でも強さはあった、でも聖さんも居ないのにここまでなのか……

「くっそ、さっきからこれだ。なんでこんな強いんだよ」

「落ち着けてさ。焦ってもなんも良い結果になりやしないさ」

「神奈子。だったらどうする……？」

「アイツら、なんか様子がおかしいんだよな」

「おかしいって？」

「何か、脅迫観念と言うか。暴走しているようにも見えるし」

「暴走……色々何が何だかだが」

「それが分からない。あの馬鹿の力が必要かねえ」

「馬鹿？」

「ここに來るのが遅れてる馬鹿だよ」

「ああ……」

確かに紫さんなら分かる可能性があるか？

いや万能って言うには流石に遠くはあるが。

「だからさつきと来いって言うしか無いんだけどさ」

「紫さん、居ませんか」

流石にさつきと来いとは言えずに穏やかに言う。

と言うか居るよな流石に……まだサボって無いよな……？

「何？」

「居るじゃないですか」

「居るから何よ」

「何よって……必要なんですが……」

「私は何もしなくて良いって話だったんじゃない？」

「いや、このケースでそんな事言ってる場合じゃ……」

「……確かに変ね」

「紫さん？」

「……操られているとは違いそうだけど。一体何が」

「あの……紫さん？」

確かに真面目にやってくれと言ったのは言ったが、急に真面目になるのはビビる。

「……ねえ、アンタ達。少し良いかしら？」

「……」

紫さんが二人に話しかけているが答えない。
さつきから何か囁いているようだが……

「成程……」

「何か分かったんですか？」

「ええ。本当にやってくれたわね河城みとり」

この原因も彼女なのか……何が起きているのか想像出来ず、ただ不安げに二人を見る
ことしか出来なかった。

t o b e c o n t i n u e d

二百十七話 妙手くinsane thing.

「河城みとり、彼女がこれ以上何を？」

「アンタと同じよ」

「俺と同じって？」

「記憶が一部禁止されている。あの子の能力だけだね」

「禁止？それで何が？」

「この子達のこと分かるでしょ？」

「……」

少し考え理解する。

ぬえを通じて解放され、魔界に向かったわけだが……その記憶が無いとなると、必死になるってわけか。

「ならばどうすれば……」

「どうしようもないわ」

「え？」

「それは貴方自身が一番分かるでしょ？」

「……本当にどうしようもないのか」

自分がどうにかならない事がよく分かっているか。

悔しいが、事実のため言葉が出ない。

「だからどのみち、やらなきゃならないのだけど……邪魔ね」

「……説得や共闘が出来れば楽ですが」

「どれだけの時間封印されてて、開放されたばかりよ」

既に何も信じられないか……特に皆聖さんを大事に思っていた以上、目の前の敵全て薙ぎ倒さなければ止まらないだろうと……思った以上に厄介だ。

「手加減なんて出来ない上にね」

「本命はこの後……」

異変の原因である彼女をどうにかしないといけない。

地上の事も考えれば今すぐにも解決したいのに、どうしようもない。

「やり辛いな……」

「あら？ 貴女はこう言った戦いに慣れてるのでは？」

苦戦する妹紅に紫が尋ねる。

「ん？」

「普段から散々やってるじゃない」

「アレは本気の殺し合いだぞ？」

確かに自分はスペカを介さないバトルはしているが、それは輝夜との全力の殺し合いであって他の人には通じない。

「最悪、その方法もあるのよ」

「……は？」

「確かに記憶を消されているだけ。あくまで利用されてるだけで、この二人には悪い所は一切無いかもしれない」

「そつそつだよな……？」

「ただ、それをどうにかするためのルールがスペカルルール。それすらも出来ないんじゃないでしょうか。ルール制定前の人間と妖怪の殺し合いに戻るだけ」

「だからってそれじゃあ……」

「それに優先度だつてある。この二人よりも人里の方が大事なもの」

「それはそうか……仕方ないな」

妹紅は全身に炎を纏う。今までとは違い本気で殺す気のようなだ。

「それ……は……」

止めないと思いつつ言葉に詰まる。

自分じゃどうする事も出来ないし、それが最適に思えるから……例えそれが知り合いだとしても……

「まあ焦んなって」

「神奈子さん……?」

焼き尽くそうとする妹紅を止めにかかる。

「邪魔してる場合じゃないだろ?」

「まあそうだな。急がなきゃならない」

「だったら……」

「だがウチの宗教的にあまり妖怪殺すのは良くないんでね。今後に響く」

「っ今それどころじゃないだろ!!」

「それも分かっている。だからこそ必死に考えたものを一つだけ試させてはくれないかな」

「何かあるんですか？」

「本当は巻き込みたくないが、あんたが一番危険になる」

「……分かりました」

「……即答かい。流石に驚きだがね」

「大丈夫です」

大丈夫と決めつけるのは無謀でしかないが、このままでは何が起きてもダメにしか思えない。

なら例え危険であっても……

「それじゃあ悪いが妹紅暫く全力で時間稼ぎを頼んだよ」

「時間稼ぎ？」

「ああ、殺すなって事だ。頼んだよ」

「分かったがなんで……」

疑問に思いつつも全力で戦いに挑む。

しかし決死の相手を止めるまでは流石に至らない。

「あー紫。あんたも頼めるかい？」

「……」

「あの嬢ちゃんをフリーにしたいんだよ」

「ああ、大体やりたい事は理解したわ。細かくは分からないけど」

「そういう事だから」

「仕方ないわねえ……少しだけよ」

俺には理解出来ないが何か通じ合っているようで紫さんも向かう。

それと同時にさとりさんが此方へと向かって来る。

「何をする気ですか？」

「分かるだろう？」

「幾ら私とて話された方が楽なのですが……正気ですか？」

「これしかないだろう？」

「そこまでは言い切れませんが……そもそも危険に思えますし」

「……いいんですね？小野寺さん」

「詳しくは聞いてないですが……」

「悪いが時間が惜しい。聖白蓮がどういう人物か詳しく言ってくれ」

「え？えつと……」

何をする気だと疑問に思いつつ神奈子さんに伝えた。

「よし、分かった問題ない」

「……不安しかないですが」

「そんなん失敗してからだろう?」

なんと無茶苦茶なと思っていると神奈子さんは二人の元へと突っ込んでいった。

「星、村紗。戦いをやめなさい」

普段とは違う神奈子さんの言葉遣いに驚きつつ、何が起きるのかと固唾を呑む。その言葉に反応が無いと見ると再び神奈子は口を開く。

「二人とも、この聖白蓮の話が聞けないのですか?」

えっ……神奈子さんの言葉に驚いていると、それは自分達だけでは無かった。ずっと暴れていた二人が止まり此方を見る。

「想起」

その動きを止めたタイミングで、さとりが想起を始める。

一体何を……？

「巫山戯るな、お前が聖なわけ無いだろ!!」

やっぱりダメかあ……そりやそうだろうけど。

「あれから神になったのさ」

「聖を愚弄するのもいい加減にしろ！村紗」

「ああそうだね。肉片一つ残す必要なんて……」

……しかし驚いた。激昂とは言え話は通じるのかと。

正直話なんて一切通じないと思ってたし。

ただこの状況は明らかにまずい気がするが……

「ああそうだね。バレちゃっては仕方ない」

「認めていいんですか!？」

この状況で相手を怒らせただけって不味くないか？でも確かに最後の手的なものだったし望みにかけるといふ意味ではおかしく無いのか……？

「ええそうですね」

「さとりさんまで……」

妹紅さん……すみませんが、止める事は無理だったようで……

「ああ。だってそこにいるもんな」

「……え？」

「居るでしょう、分かりますよね」

「ちよつと待って」

「おい付き合え」

「付き合えって……」

さとりさんと神奈子さん、それにあの二人が見てるのって……俺!?

「彼女が時間稼ぎしてくれていたので助かりました」

「……でも男だが？」

「今の二人は憔悴状態なのもあつて曖昧ですよ。流石に神である彼女では騙しきれませんでしたが」

「……無茶苦茶じゃ無いですか？」

「戦っていたのならまだしも、貴方は見ていただけですしね。あの二人も違和感はあるたようでもそこに潜り込む事が出来ました」

「相変わらず凄い能力だ……」

本当になんでも出来るのではとすら思う。

「しかし……いいんだよなこれで」

「ふむ、ならば二人は死んだ方がいいと」

「……二人とも、この人達は協力者です」

流石に折れた、そんな事言われたら折れるしかない。
色々な人に謝らなきゃいけない気がして来たが今はそうも言ってもらえない。

「聖……？」

二人が近づいて来る。

「近付かせないで下さい。流石にバレますので」

「え……無茶な……」

危険だと言われた意味を理解した。

偽物と気付かれたら間違いなく俺が狙われる。

「聖……大丈夫だったのですか？」

「……ええ、ですので心配はいりません」

「それは無いよ。ずっとこっちも封印されてて心配だったのに」

「……ですので助けに来たのです。ここの親玉を懲らしめて脱出しましょう」

「分かったよ」

「……妙だね」

「何がですか？」

その光景を見て神奈子は不思議に思う。

確かに騙せるように努力はしたものの、こんなあっさり信じ込むのもだいぶ不自然だと。

「ただの運が良い人間なのかねえ」

「能力じゃ無いかしら？」

その疑問に紫が口を挟む。

「能力だつて？ただの人間だろう？」

「そうかもしれないし、違うかもしれないわよ」

「なんだよそりや……」

「それは……あの子に聞きましょうか」

「あの子って……成程ね」

地の底から新たな妖怪が姿を現す。

それは河城にとりにそっくりな赤い妖怪……河城みとりだった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百十八話 一歩くfirst goal.

「また……お前か」

「記憶に無いんですけどね」

「しかし……また来るか」

「来るに決まってるでしょうが」

いきなり驚かれたが意味が分からない。

逆になんで来ないと思っただのか。

「記憶を返してもらわないとなりませんし」

「あー……ああそうか」

しかし妙だな……この姿を見た限りこの前問答無用で地底に落としてきたのは彼女だ。

問答無用で襲って来ると思ったが……

「さっさと出すもん出して大人しくしな。面倒はごめんだよ」

「……」

「おい、何とか言ったら」

「まあ……構わないが」

「え？」

今、この子何て言った？

「むしろその方が好都合だしな」

「好都合って……」

何が好都合だ？今まで散々やっていた癖になんで急に変わった？

「驚いたわね」

「何がだ？そこの妖怪」

「あなたの態度が軟化したのも、こんな凶行に出るのもよ」

「別に、私の勝手だろう？」

「それで済む問題じゃ無いから言ってるのだけど」

それはそうだ、今回は確実に勝手で済む問題では無い。

「……」

「まさか、影響されたとか言わないわよね？」

「だと言ったら？」

影響された……なんの話だろうか？

関係あるように思えるが……全く分からない。

「冗談。もしか思えないけど？じゃなきゃ今までの数十どころか数百年は何になるのつて話よ」

「待ったからこそさ、一歩進めばそこから一方通行なのだから」

彼女に違和感しかない。唐突に協力的になる理由が分からないし、そもそもの行動全てが今までと変化し過ぎている。

しかし……その理由はと言うと分かるはずがなかった。

「そう……」

「それに、聞いた話ではあんたも賛成だったんだろう？」

「ええそうね」

「え……？」

「紫さんも賛成？ いやそれならなんで今協力してるんだ？」

「そもそもこの惨事に賛成って……」

「紫、話が違うが？」

みとりを睨み続けていた妹紅も紫の方へと視線を変える。
その表情には憎悪が浮かぶ。

「別に、私はそんな事してないって言っていないじゃない」

「そうかよ。よおく分かった」

妹紅の手に火が宿る。一触即発状態に思える。

「紫さん……」

「一つだけ言い訳するのなら、ここまでになるとは思ってたとだけ言っておくわ」

「それで、許されるとも?」

「普通に考えてみなさい……地底に来ると思う?」

「…………誰がだ？」

「彼よ」

「…………俺？」

確かに因縁はあるのは分かるが…………俺なのか？

だからこそ好都合…………？ 一体何を…………

「…………」

折角ここまで来たというのに怖くなって来た。

今更逃げる事は出来ないのに、逃げるわけにも行かないのに。

「蓮司」

「にとりさん？」

「思い出すのが怖いのか？」

「……」

怖い、その言葉すら出せない。

良い状況の筈なのに、何故か追い詰められている気分だ……

「私も思い出した身だ。怖いのは分かる」

そうだった、にとりさんも思い出したんだ。

しかもここに来る前。少ししか経ってないのに、既に落ち着いている。

「まあ私の方は自分から思い出したい身だったけどな。そこは違うかもしれないが……」

「こや……」

自分の知らない自分が居る。そんなのは戸惑いどころか恐怖でしか無い筈なのに、それでも心配をさせないように……

「思い出すために歩き続けて、色んな人に協力して貰って……情けないままってわけにも行かない……そりゃそうだ」

「蓮司、大丈夫か？」

「ええおかげさまで。過去から逃げてても変わりませんもんね」

「そうだな。それについてに言うなら」

「言うなら？」

「過去がどんなであろうとも、今のお前は私の中では変わらないよ」

「……ありがとうございます」

「ああ、終わったのかい？」

ふと横を見ると神奈子さんが妹紅さんを止めていた。

逆を見ると、星さんと村紗さんが状況を確認し合っているようだ。

その事からも彼女は嘘では無く本気らしい。

「やっと済んだか。待たされたこっちの身にもなってみろ」

「すみませんねと言いたいところですが……消したのそっちでしょうに」

「それもそうか」

「ただ、決意は付いた。俺はもう逃げないって」

「逃げようが関係ないけどな。決めた以上は逃げてでも能力を解くし」

「……」

決意を濁された気がするが……それでも腹を括って悪い事は無い。
拳を握り彼女の方へと一步進む。

ここまでが罠だとしても死んでまた戻って来てやる。何度でも何度でも。

「それじゃあ……なんだ」

彼女はニヤツとした表情をし。

「お帰り。共犯者」

その言葉と共に、脳内に莫大な情報が入り込んで来たのだった。

next episodes

く過去の物語く

二百十九話 幻想入りした少年く welcome to

—————

「幻想郷は必ず存在する!!」

「またその話か……」

会長のいつもと変わらない話にうんざりしている。

いや、夢を追い続けるのは良いんだけどさ。

「ちよつと先輩!?冷たくない?」

「いや会長……言うのは確かにタダだがいつも証拠何も無いのにそう言われても困るんだが……」

「それを探す為に此処があるんでしょ？」

「はあ……」

東深見高校、ここには不思議なサークルがあつた。

その名前は秘封倶楽部と言い、今年設立されたようでメンバーは初代会長を名乗った彼女一人だったはずだが……

「はい会長、幻想郷では妖怪とも話せるんですか？」

「ええ早苗先輩。結構人間と交流を持つ妖怪も多いらしいわ」

「それじゃあ、信仰を集められるかもしれないね」

「おつ中々早苗も遅しいね」

守矢神社の巫女であり、自分の幼馴染でもある彼女……東風谷早苗は当然自社の神様と交流がある。

ただし他所の神社では、神様と会うなどあり得無いどころか本来ならば神様も見えていない……ただし守矢神社には確かに神様が居て自分も会ったことがある。

そんな不思議な経験をしている彼女は秘封倶楽部としても気になる存在であった。

それにより幼馴染が勧誘され、なし崩しで自分も入ることになってしまった。
いや……別に部活とか入ってたわけじゃないし構いはしないが。

「ほら、小野寺君。妖怪とも仲良く出来るらしいですよ」

「………そうかい」

幽霊の類は信じている。と言うか幽霊ではなく確か神様だったが早苗さんのところの守矢神社で見たことがあつた筈だし。

だからこそ、此処みたいに秘密を暴くつて言うのも嫌いでは無いのだが……

「異世界ねえ」

「異世界じゃ無いわよ。この世界にあるのだもの」

「いや……そこまで行ったらもう異世界だろ」

流石に異世界と言うものを信じ込める程ではなかった。
馬鹿げていると言うか、規模が違い過ぎる。

「第一行く方法も無いんだろ？」

「そうね、探してる段階だわ」

「……」

「何よ、文句あるの？」

「いや……」

廃墟だの、幽霊屋敷だの危険な場所に突っ込むよりはマシか。

実際に幽霊が云々とかよりも怪我や不法侵入とかそれ以上の問題もあるわけで……

「と言うわけで行くわよ、先輩達」

「分かったから焦らずに……」

こうして早苗さんと共に会長に振り回されつつ日常を過ごして行った。

その日が来るまでは。

—————

その日も平凡な日常だった。

いつも通り友人達と駄弁り、授業を受け日が終わる。そう思っていた。

「……………え？地震」

地面が揺れた、気がした。

しかしそれは一瞬で終わり、周りも騒ついたが一瞬で終わったこともありすぐに授業へと戻った。

何もおかしい事はない……

「……………？」

教室に何かいる？

さつきまでいなかった筈なのに。

と言うか……………何だアレは？

「獣……………じゃないし……………そもそも……………」

幽霊、いや化け物のように見える。

なんであんなものが教室に……

「皆、あれ……」

声を出す前に襲われる。人間離れたその速度で気付けば目の前に居る。

「……は？」

目の前に居た、そう思って驚いていたがそれだけでは無かった。腹に穴が空いている。

「なんだよこんなの……」

血を吐き、熱がどんどん奪われていつているように思える。

周りは大丈夫なのかと無理矢理身体を動かして確認しようとする。

「……？」

周りが止まっている……？

「まさか……死んだとか言わないよな……」

「死んでいないわ」

「っ!？」

後ろから声がし振り向こうとするが、全身が既に動かない。

「ああ、既に動けないのね。もう直に死ぬのだから仕方ないわ」

直に死ぬ……そうか、そうだよな……こんな血を流してたら死ぬしかないよな……

「ただの名も無い様な雑魚妖怪だけど、ただの人間相手だとやっぱ事故になっちゃうものね……」

雑魚妖怪……妖怪って言ったか？

妖怪なんているいはまだしもなんでこんな場所に……おかしいだろう。
しかも事故って……なんだよそれ……

「……ただ、このままってのも良く無いわね」

「……」

「結界から飛び出た妖怪が外の人間を殺した……流石に幻想郷にも支障が出るわ」

「……あ」

ちよつと待て、今幻想郷って言ったか？

いや……今そんな事気にしている場面では無い……このままだと確実に死ぬ。

「仕方ないわね……本当はあまり良く無いのだけど」

なんだ……何をする気だ？

「神隠しというものを知っているかしら？」

その言葉になんて答えたかは記憶に無かった。

ただ分かる事は死にたく無かった。

死にたく無かった。死にたく無かった……

t o b e c o n t i n u e d

二百二十話 共犯者 never dead
t, s way goes. tha

「痛たたた……」

何があつたつけ……？この痛みは……

「そーいや……」

思い出した……思い出したのだが……

「本当にあつた事なのか……？」

何かに襲われて……かなりの深傷を負った気がするのだが、痛みはあるが思った以上

では無い。

「当然でしょ、いつまで寝惚けているつもりかしら？」

「……アンタか」

初対面で合ってはいるはず、ただ記憶を失う寸前聞いた声は彼女の物に違いない。

「何か不都合でも？ 助けた筈なのだけど」

「ああそつか……やっぱ助かったでいいんだな」

本来ならば何故助けたとかあんたは誰だとか聞くべきなのかもしれないが、今はそれどころでは無い。

死んだ筈の記憶があつたからだ。

「残念だけど。そう言うわけでも無いのだけどね」

「……は？」

「そう言うわけじゃない？何を言っているんだこの人は。」

「簡単に言うと、肉体は死んでいるの」

「……まさか幽霊とか言い出さないよな？」

「幽霊とは少し異なるわね……肉体に無理矢理縛り付けているような感じね」

「なんで……そんな事を？」

「あら？死にたかったのかしら？」

「そう言うわけでは無いが、放置されてる気がしてならないのがね……」

「放置か……合つてるとは言わないけど私にはどうしようもないのよ」

「??」

色々わけが分からない……ドッキリだとしても謎だがドッキリであつて欲しいレベルだ。

「死に掛けだった貴方を死ねないように境界を切つたの。どっちかと言うと幽霊よりも亡者ね……」

「正直、言つてる事が理解出来ないが……」

オカルトなどに少し知識があつたところでただの一般人だ。言つてる事が理解し切れない程非日常な事が起きている事だけが分かる。

「簡単に言う……死ぬ筈だった貴方の死を切り離して無理矢理魂と肉体を繋いでいるけど、私にはそれを戻す力が無いってことよ」

「……つまり俺はどうしろと？」

このままゆっくり死んでいけどでも言われるのだろうか？

しかも全く知りもしない場所で。

「だから提案があるのよ」

「提案？」

何を考えている？何が出来るか分からないレベルの俺に何をさせる気だ？

「まず貴方には住んでいた世界を出てもらうわ。あの世界じゃ亡者の住み場所なんてないし、私も違う世界までは能力を維持出来ないわ」

つまり、近くに居ないと死ぬと言うわけか……ただ世界を出ると言うことは……

「……外国にでも行く気か？」

確かに、死体とかお化けとか動いてそうな国はありそうではあるが……言語大丈夫かな？

「違うわ。別の世界って言ったでしょ」

「……異世界転生とか言う奴か？」

正直、神様とかによるそう言った類のは別人にして欲しいんだが……

「そう言うのとも違うのだけど……幻想郷って言う場所に行ってもらおうの」

「……会長の与太話がここでもか」

「会長の与太話？どう言うことよ」

「……ウチのとこの会長が幻想郷は存在するって喚き回っててな」

「……それも気になるけど今はそれどころじゃないわね」

「それで、幻想郷がどうかした？そこに何かあるのか？」

「そこにはありとあらゆる種族がいる。それこそ私の把握し切れない妖怪達なども」

「私の把握しきれないとは？」

「こう見えても私は幻想郷を作った一人なの」

「……え？」

年下とは言わないが、とてもそのような年齢には見えない。

会長が言う幻想郷の歴史に応じた年齢に見えない……と言うか作った人が生きてる
とも思ってたし。

「他の賢者達も、力を持った妖怪達なども居る。そこにはもしかしたら貴方の魂を満たせる存在がいるかもしれないと言う話よ」

「かもしれないか……」

どうにか出来るならしたいが、それ以上の不安が募る。

妖怪達が当たり前にいるような世界で生きられるのかと。

「少なくとも、私は居ると思うけど。それくらいあらゆる能力が幻想郷には存在しているのだから」

「その分ただの人間は死にやすそうとしか思えないが……」

「死なないわよ？」

「……つまり身体が溶けても壊れても生きると。そう言うのじゃ生き返ったとしても困

るな間違いない」

「いいえ。それじゃあ身体が無くなれば貴方は消える。死の境界線が切れたとは言えないわ」

「だったらどうなる？」

「死ぬ前に巻き戻る」

「え……？」

「貴方は死ねないのよ。苦しくても肉体が減びても巻き戻るから」

「……」

目の前の女性も人間ではないのだろうと思っていたが、まさか自分自身も人間とは言えないものになっているとは思わなかった。

「それとも、死んだ方がマシだったかしら？」

「いえ、生きている方が良いな」

確かにあの時、自分は死にたくないと思った筈だ。

今だって同じだ。死ぬよりはマシに決まっている……むしろ安全にも近いし。

「変わっているわね」

「周りがどう思ってるかまでは分からないがな」

ただ、そうか……成程な。

「つまりは幻想郷でその人物が見つかるまで何度も死に続けろと」

「それしか方法が無いもの。そうじゃなければ永遠に時は止まったままになるわ」

「……」

「私にも目的がある以上貴方に協力するけど、永遠に止まったままにさせるわけには行かないの」

「目的とは？」

「現在貴方に言えることは妖怪の地位の向上とだけかしら。兎に角今は幻想郷に向かつてもらう事にしましょう」

「分かりました……が、一つだけ聞きたいことがある」

「何？」

「あんたの能力、詳しく聞きたい。生死を操るのか？」

「いいえ。私の能力は生死ではなく境界を操る方ね」

「その境界とは？」

「距離、場所、記憶、それこそ生死など様々なものよ」

「……記憶か」

「どうかしたかしら？」

「頼みたいことが出来た」

「聞くだけ聞いてあげる」

「他人の記憶の境界を操って欲しい」

「……だいぶ、危険な事を言うのね」

「死んだ筈の人間が目の前に現れたら恐怖でしか無いだろ？」

「それは事実ね、でもそれだけかしら？」

「……保険もある」

「保険……ね」

「何かしでかした時に、覚えておられると不都合な事とかあった時、手遅れとか困るしな」

そのせいで遠のいたならまだしも、関係修復不可能とか言ったらどうしようもない。それならまだ初対面の方がどうにかなるから。

「分かったわ。貴方が死ぬ度に記憶から消えるように調整してあげる」

「有難うございます」

「いえ、これからの共犯者ですもの」

「共犯者か」

死にたく無かつただけなのに随分遠くまで来てしまった気がする。

ただ、人間に戻る為にはこれしか無い。

死なない為にはこれしか無い。

「それでは改めてようこそ幻想郷へ」

彼女が作り出したスキマの中へと進み出した。

to be continued

長引いて本当にすみません、次回までまだ少しかかります。

二百二十一話 最初の出会い
ath lady
bullyish
de

「……………は？」

スキマを通ったが変な場所に出たな……………と言うか船？

「おんや？」

他に乗ってる人間が居た様で驚かれる。

「ああすまない、驚かせた」

「そいつは構わないけどねえ……………問題はそうじゃないさ」

「何かあったか？」

「アンタ、何者だい？死者かと思えばそうには見えないし」

「一応死んでは……」

死人では無いと言おうとして言葉に詰まる。

いきなり目の前の人間が鎌を持っていたのだから。

「ん？どうしたよ？」

「いや……」

彼女はそれが当然のように振る舞っている。

だからこそ、問い質して触発させたく無いが……

「この子が妖怪って奴か……?」

と言うかそう思わざるを得ない。

笑顔で鎌持ってる人間の方が絶対怖い……いや今も大概だが。

「ふむ、まあいいか。気になったのはお兄さん生きてるか死んでるか分からないって事なんだけどさ」

「ああ……って分かるものなのか?」

「そりゃね。あたいはそう言うもんだし」

「そう言うもん? 一体それは?」

不思議な言い方に戸惑う。

人間じゃ無いって彼女からそう言われたでいいのだろうか?

「だからこそお兄さんをこのまま連れてっていいか悩むわけさ」

「連れて行く？何処に？」

「何処つて冥土にさ」

「……は？」

メイド？メイド喫茶……いや死者を気にしているなら冥土か。

「驚いてるが……ここが何処だか分かっているのかい？」

「いや……」

船には乗っているなと思ったが理解はしていない。

そのため周囲を見渡すと……

「川……」

海か川か、或いは池かもしれないが、乗っている船的に川かと判断する。
川岸が見えるが……赤い花が咲いている。

「当たりつちや当たりだけでもって所かねえ」

「何か違うのか？」

「三途の川って分かるかい？」

「……冗談だろ？」

「冗談では無いさ。死神のあたいが言うんだからさ」

「死……!？」

妖怪だと思ってたのにそんなものじゃ済まないんだが……

「まだ死んでない……ですが」

「なんだいなんだい改つちまって、別に取って食いやしないだろうよ」

豪快に笑いながら答える。

この態度はむしろ畏まった方がダメなタイプだ。

「はっはあ……」

「それでだ、お兄さんはどうしたい？」

「どうしたいとは？」

「このまま行くかだけど」

「戻る」

「即だね」

「死にたくないからここにいる訳だし」

「訳あり……つてそりやそうだろうね」

「八雲紫に死にたくないなら幻想郷にと」

「はあ……あのスキマ妖怪にかい」

「ええ。だから冥土に向かわずに戻らないとと」

「……一つ忠告しておく、幻想郷はそんなに甘くはないよ？」

「それは既に言われた。でもこれしかないんだ」

「そう言うならいいけどさあ、仕事は増やさないでくれよ」

「そりゃ……なあ」

死んでも戻るとは言われた。ただそれを信じ切っている訳ではないし、何より冥土に行ったらどっちみちアウトそうでここを切り抜ける必要があるのは間違い無い。

「分かってるならいいさ」

「やっぱり、死神とは言え誰かが死ぬのは困ると」

「いいや、あたいがめんどい」

「……?」

「どうした?」

「いや、今死神にあるまじき言葉を聞いたような」

「さぼりたーい働きたくなーい」

「……」

気にしたら、負けなのかもしれない。

「幻想郷で生きてくなら、深く考えずにいけばいいんじゃないかな」

「さつきと言ってる事違う!？」

「実際の話、幻想郷自体はいいとこだしそこまで危険じゃ無いけど、ここいらが危ないって話さ」

「……分かった、気を付ける」

三途の川の付近なんて確かに危なさしか無いか……

「……と言うか、結局どう生きればいいのか分からないが」

「いい言葉がある」

「なんです？」

「常識に囚われるな」

「そんな……幼馴染みたいな事を」

早苗さんみたいなタイプの人何処にでも居るのか？

「実際そうなんだよ。外の世界の人間程自分で分かるものと考えろ。外じゃ起こり得ない事なのに」

「……まあ、それは」

この子が実は人間だったって言っても鎌持ってる時点で常識とは離れてるしな。

「おっと、そろそろいい具合か」

彼女の言葉を聞きつつ後ろを振り向く。

確かに陸地が見えて来た。

「それじゃ、ここを進めば無縁塚に出るから。後は勝手にしといてくれ」

「投げっぱなし……」

「そもそも本来乗客じゃ無いしな」

「それもそうか」

彼女からすれば急に船に乗っていた相手だろうし。

「これからどうするんだい？」

「……当初の目的を」

少々毒気を抜かれかけたが、本来の八雲紫に言われた目的を果たす準備をする。まずはそれ優先だ。

「そうかい、うーん……」

「一体どうしたんです？」

「いやちよつとこつちにも考え事がね」

「考え事？」

急に変わってどうしたと言うのだろうか？

「ああいや気が変わった、アンタに付いて行けばサバ ……いやなんでもない」

「……………」

何か言いかけた気がするが、気にしても仕方ないか。

「と言うか勝手にしろって感じだったのに急に何故？」

「まあまあ。旅は道連れ世は情けって事で」

理由は不明だが同行者が増えてくれるのは有難い。

少なくとも彼女は強いだろうし……頼って良いだろうか？

「それじゃ終点ですよとこっから先付いてきて下さいってね」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

彼女が業務報告の様な物をした後、目の前に道が見えたのだった。

二百二十二話 口実く reasons to hell

p.

船から降りて岸へと着く。

ただし全く分からない。それはまあ当然ではあるが。

「はいは……？」

「無縁塚つて所さ」

「……身寄りの無い墓場だったか？」

「そうさ。と言つても幻想郷ではここに入るのは外の人間だらけなんだがね」

「確かに……外の人間は身寄りが無いか……」

「つとここじや無いな、ついて来な」

「ここじや無いって何処へ？」

「結界の抜け穴さ」

「ちよつと聞き慣れない単語ばかりだが」

結界は確かあの妖怪が言つてた気がするが……抜け穴つて……

「本来三途の川は人間じゃ通れないからねえ……」

「そう言われると……」

一般人が冥土普通に行ける方が怖いしな。

「ただそれはそれで抜け穴があるのは不味いんじゃない？」

「抜け穴って言うか、正確には綻びだし……何よりそれが無いと戻れなくなるんでねえ」

「確かに、それは不味いな……」

自分同様戻れない人達も出て来るだろう。

それこそ三途に辿り着いたら詰みとか困るぞ……

「つと……か」

「何も無さそうだが……」

「いいやあるんだよ。見え辛いけどねえ」

あると言われても……そんなもの微塵も感じない。

と云うかさつきから普通の道に見えるんだが……

「なんだい疑っているのか？」

「疑っていると言うか……」

自分のそう言った才能が低いせいだろうか分からんときか言いようがない。

「真つ簡単な話だが触ってみりゃ良い」

「……危なくないのか？」

「んー、腕が溶けるくらいかねえ」

「は……腕が!?!」

慌てて触れようとした腕を引っ込める。

いきなり危険じゃないか……あんまりだ。

「なんでそんな危険な事をさせようど？」

「え？だって実際そんな事無いしな」

「……」

「そんな怒った顔すんなって。ただの冗談じゃんか」

「笑えない冗談だが」

「そりゃ悪かったね。真面目事な雰囲気は苦手でねえ」

そう言う性格なのだろうけど……正直信じたくなってきた。
ただ……この人居ないと抜け出せないしなあ……

「ほらいいや」

そのまま、彼女は鎌を使い見えない何かを割る。

……つて割った!?

「ちよつと何して!？」

「ああ、問題無い。すぐ直せる所だ」

「直せるからつて良いわけじゃ無い気がするんだが」

「いいのさ。死神の特権つて事でね」

「……無茶苦茶だ」

呆気にとられつつ、後に続き墓場を進む。

本来ならば不気味な筈のだが……それ以上の存在が目の前にいるせいで然程感じ

ない。

「……」

「ん？どした？墓場だらけで怖いのかい？」

「いや……」

しかし、貴女の方が怖いですとも言い出せず。

「……仕事は？助けてもらいはしたものの、こちらにかかりきりでいいのか？」

なんとか誤魔化した。

「あー……」

すると彼女はバツが悪そうな反応をする。

「失言だったか？」

「いやその……これは内緒だけどき」

「……む」

嫌な予感がしてきたぞ、逃げる事は出来ないんだが。

「……サボり中なんだよねえ」

……これ、巻き添い食らわないだろうか？

「……ちなみにいつから？」

「サボってた時丁度乗ってきたかな。こいつ利用すればサボれるかなって」

「……問題は？」

「大アリだねい」

「っ……っ」

彼女を追い越して全力で走る。

死神でさえもやばいと言うのにその上の存在の巻き添いなんてごめんに決まってる。

「おっとそりゃ酷いねえ」

「悪いが俺は安全に出世して……じゃなかった目的があるからここで終わるわけには……」

「……あれ？」

だいぶ遠くに逃げた筈なのに、真後ろに彼女がいる。
走ったとか飛んだようでは無いのに……瞬間移動？

「何が……」

「ちよつとだけズルをね」

「……能力か？」

「おっと知っているのかい、そう言うことさ」

「……本当に出鱈目な能力だらけだな」

また逃げた所で同じだろう。観念して後を着いて行くことにした。
そのまま話を続けながら道を進む。

「そう言えば」

「何か？」

「お兄さんも大概そんなもの持ってそうだけどね」

「え？」

大概そんなものって……能力の事か？

「気のせいかもしれないけどさ」

「外の人間なんだが」

俺は妖怪と違って人間だし……そもそも幻想郷の住人では無いぞ？

「外の人間でも持つ事は出来るってわけさ……つと」

話が途切れる。何があったか……

「おつとこりや不味いね……」

「不味いつて、理解出来てないが」

唐突に不味い言われても不安になるだけで、何がどうとか分からないんだが……

「あー、えつとだ……」

「……上司にバレたとでも？」

「いいや、そうではないんだけどねえ」

本当にこれ以上は不安しか残らないからやめて欲しい。

「そろそろ仕事に戻らないとなって思ったわけさ」

「さつきまでサボリたがってたのにそりや無いだろ……」

しかし彼女は聞く耳を持たず、逃走準備をする。

「それじゃ、ここまで連れて来たしあたいはここまでつて事で」

「本気かよ!？」

慌てて手を伸ばすが能力を使ったのか消えてしまった。

周囲には見えず途方に暮れる。

「……戻りてえ」

あの態度な以上間違いない何かを感じ取ったのだろう。
足取りが重いと言うよりも、進む気が失せる。

「ただ、行くしかないか……」

鬼が出るか蛇が出るか。それともそれ以上のものが居るかもしれない……

「……」

一歩一歩進む度に空気が重くなる錯覚を覚える。

そのまま歩いて行くとひらけた場所に出る。

「……彼女は」

その先で佇む少女を見かける。

しかしその姿は少女と言うよりは……

「例え話だったんだけどな……」

飲んだくれた、鬼が居た。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百二十三話 友好的な化け物 i t i s...

「鬼……でいいんだよな？」

見た目だけ見ればただの少女だ。

しかしここでは見た目なんてアテにならない、散々自覚している。何より先程から感じる重圧もある上、あの死神が逃げたわけだし。歪だが角も生えてる……

「近づかない方がいいかねえ……」

草木に隠れながら迂回していく。

少しだけ音は鳴るが……大丈夫と願って。

「うん？」

しかし目の前の少女は何か反応する。

顔を見るにだいぶ酔っ払ってる筈なのに……

慌てて姿を隠す。

「んー……気のせいかな」

なんとかばれなかったようだ……助かった。

今度は注意を払って……

「……え？」

目の前に居た筈の少女が消えた？

目を離したとはいえ一瞬だぞ!?

周囲を見渡す……気配が無いし何処かに行ったようにも見えない。

「……………気のせいでは無いよな？」

先程まで居た筈の現場を確認する。

遠目から見えた瓢箪も無くなっている。

「勝手な思い込みか……………」

確かに無縁塚にそんな恐ろしいものが居ても困るが…………

「見いつけた」

「……………え？」

そこには何も居ない筈なのに……………声が出た。

慌てて周囲を見渡すが……………やはり居ない。

「何処……………何処だ？」

「()だよ()」

何も居なかった周囲に何かが集まり始める。
集まった姿は……先程の少女となった。

「何……が……」

「はっはっは、驚かせて悪いねえ。そんなつもりは無かったんだ」

「そんなつもりは無かったって……」

「私が呑んでた所でチラツと見えたからねえ。気になって誘い込んだわけさ」

「……ぐ」

そのまま去れば良かったのに興味本位で寄ったのは事実である。その結果……捕

まった。

「取って食いはしないから安心しなつて」

「それならなんとか……」

正直、危険とは考えていたが食われる考えはしていなかったな。

危険だが友好的な存在と会い過ぎたせいで気が緩んでいるのは事実だし気を締めないといけないことを自覚する。

「まっつまみにもならなそうな人間だしなあ」

「なりそうな人間とかあるのか……」

「聞きたい？」

「……やめておく」

変に条件を知ってしまった方が絶対怖い奴だし。

「そうかい。まっなんでもいいけど」

酒を呑みながらそう話す。何が目的か分からないな……

「じゃあ俺はこれで」

「まあまあ」

離れようとするが掴まれる。

見た目では信じられないような力で動けない。

「……………急ぎますんで」

「まあまあ」

どうやら拒否権はないらしい。

酒の匂いもだいぶキツくなってきたのだが……

「何が目的なんだ？」

「いや、一人で呑むのも寂しいなってわけだね」

「……呑めないが？」

「そんな固いこと言うなって」

「いや……匂いだけでもキツイ……勘弁してくれ」

「うぐ……無理強いするとまたあの巫女に叱られるだろうしやめておこう」

「そうして欲しい」

「ただ……肴代わりに話し相手くらいにはなって欲しいねえ」

「それは……」

正直な話、急ぎたいのも事実だが……

「なら聞きたいことがあるんだが」

「ん？どうした？」

「幻想郷の事を教えて欲しい」

「……どう言う事だ？」

酒に伸びていた手が止まる。

此方の話を聞く気はしつかりあったようだ。

「外の人間ってここに居るの珍しいか？」

「外ねえ……その言葉は嘘じゃないか？」

「……？嘘じゃないが」

「ならいい」

……いきなり嘘を疑われた。確かに信じられないかもしれないが少し謎に思った。

「いや……でも待て……生きた人間は珍しいかもしれないや」

……そこら辺に埋まっているが普通人間はここら辺に居ないと……まあそりやそうか墓場だしな。

「あー……そう言うことか」

「最低限話をしては貰ったが……正直全く分からないからな」

「あー分かった分かった。むしろ都合がいいかもな」

「都合がいい？」

都合が良いことなんてあったか？騙したりするタイプじゃないだろうし……

まさかここらの墓みたいに住なくなっても問題無いからとか言い出すんじゃないだろうな？

「なんだ怖い顔して」

「都合が良いってなんだろうなと」

「あー……そう言うことじゃないさ。私も外の世界が気になったからねえ」

「ああそう言うことか」

「外がどうなってるのかとかは正直どうでも良いんだけど……酒とかは知らないものも
ありそうだしなと」

「……まだ呑み足りないのか？」

「全然、いくらでも」

「その割にはまだ無くなってないようだが」

「ああ、このお酒は無くならないからね」

「……」

なんか今凄い事言わなかったか？

たださつきから呑んでいて無くなってない以上はそうなのだろうと思うしかないわ

けで……

「ほんと、幻想郷は出鱈目なものばかりだな……」

「私から言わせりゃ外の世界のが出鱈目だらけだがね」

「……否定はしない」

当たり前前となっていたが、正直なんでこんなものが存在するんだって物が多いのは事実だ。

「そう言うのも合わせて聞かせてくれよ？」

「そちらこそ、互いに話せる事を話しきれるように」

目の前の存在は明らかに対峙してはいけない存在なのは理解している。

今回は運が良かったが今後は分からない……ただ死なないと言うのなら続けるしか

ない。

こんな死ねない化け物みたいなものから戻るために。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百二十四話 迷い、そして決意
the right way for me.

「よう蓮司、酒を持ってきてくれたか？」

あれから一週間程が経ち、萃香さんや周りを通じて幻想郷の事が分かり始めてきた。その分酒を要求されるのだが……

「余裕はあまり無いからな？」

一応仕事出来る場所を探しながら酒を購入し持って来ている。中々キツイが、村の人が優しく助かっている。

「別に良いだろ、ほらちようだいな」

「萃香の酒のが上質な奴だと思うが……」

「いいんだよ、こう言う酒だつて飲みたくなるんだから」

「あの……金……」

「細かい事は気にすんなつて」

細かいで済む額じゃ無いのを考えて欲しい……

幻想郷について色々と教えてくれた事には感謝しているが。

「それじゃ、呑もうか。待ってたんだぞ」

……しかしこの鬼はお構いなしである。

まあ分かっていたけど。

「だから呑めないって言ってるんだがな……」

そして呑めないのだからやめてくれとは……

それにその酒は買った奴以上にやばいわけで……

「酒は呑まないって本当に真面目だなあ……」

萃香から聞いた話で一番納得したのは、上位種は自由奔放と言う事だ。

例外は居るかもしれないが、少なくとも今まで会ってきた者達は……紫にしろ、死神にしろ萃香以上に自由に生きすぎてると思う。

「まあ良いだろ？ 大人への通過儀礼みたいなもので」

「いやそれでも年齢が……ってかその酒はそもそも人間じゃダメじゃんか!!」

「確かに」

「いや確かにじゃなくてな？」

それ呑んだら命の危険とかふぎけんなって感じた。

死なないから良いだろとか言ってきたが、そんな危機あるもの呑もうとするわけがない。

「まあこの酒は人間が呑めたものじゃないし仕方ないけど」

「……」

突っ込む気力も消えてきた。

ダメなものなのに呑むって言ったら嘘つきはダメだーって呑ませてくるんだろぅしなあ……

「ああ近付けないでくれ……流石に匂いだけでクラクラするんだ」

「酒の匂いだけで酔ったって？弱いな本当に」

人間でさえ無理なものを未成年でいけるわけが……つて。それを平然と呑んでるのも大概ではあるが。

「キミが極端に強いだけなのもあると思うけど」

「ハハハ、酒に弱い鬼が居てたまるかっつて言うんだ」

「それは……まあそうか」

御伽噺でさえも鬼は酒に強いのだ。

下戸の鬼など想像も付かない。

「それにだ、呑めば呑む程物足りなくなるのさ」

「現在進行形で呑んでいるのに!？」

「だって蓮司言ってたろ、外の酒について」

「……まあそれは」

確かに目を輝かせていたからついつい記憶にある物を全部言ったが、当然持つてこれるわけがない。

なのに募られると罪悪感が……

「なあなあ、お前に知識があるなら村とかで作れないのか？」

「詳しい作り方までは分からない。何より今の立場でギャンブルはしたくない」

成功すりやいいが、失敗したら目も当てられない。

一応幻想郷で生きていくのに融通してくれた人達だ、無駄なりスクを負わせたくなはない。

「そうか、残念だ……」

そのまま萃香が悲しそうな顔をする……話題を変えるか。

「それで萃香」

「幻想郷の話をもっと聞きたいわけで」

「あー……まあ酒も持ってきたしなあ」

渡した酒を開けて呑む、そのままプハアと息を吐く。

「そーいや思い出したが」

「………？」

何だろうか？ 重要な事か？

今更重大な爆弾を落とすとかだったら少し怖いが。

「蓮司、紫が言っていたんだが本当なのか？」

「何の事だ？」

流石にそれだけじゃあ分からない。

あの妖怪の事正直謎が多過ぎるし。

「異変を起こすって話だ」

「ああ、その話か」

既にその話も彼女にした、その度に笑われるのだが……

「相変わらず疑われているようだが」

「そりやそうさ。あのサボリが過干渉なのも疑わしい」

「俺だって分からないよ」

萃香から聞いたが相当だったみたいだし。

「ただ、ギリギリで救ってやったから幻想郷で色々やってみると」

「あー、はいはい……いつもの酔った大法螺だろう？」

分かった分かったと言わんばかりに此方を見る。

そもそも普段から嘘など吐いていない筈だが。

「俺だってこの身体のままは嫌なんだから嘘じゃないって」

「はっはっは、これだけは嘘じゃないって？」

「俺だって、死にたいわけじゃないし」

「だから、やるってわけか」

「……」

「蓮司？」

「……その話だが」

あれだけ決意していたのに悩んでいる。

と言うより……心が折れかけているのもある。

最初は何としてもと考えていたが、萃香含めて肝心な上位種族の面子がお好きにどうぞって感じな時点で本当に効果があるのか不安にしかならない。

それに、躊躇いが発生する事も多々起きた。

「どうした？」

「正直、幻想郷を知り始めて悩みが出て来た」

「成程……ね」

いつになく萃香が聞く気になっているようだ。

「本当は他人なんざ気にするべきじゃないんだろうけど」

異変を起こすってなるなら、それだけの覚悟が必要なわけだが。

「それはそうだねえ。過去に起きた異変達はみんなそうさ」

皆、皆自分の為。だからこそ巫女にとつちめられたと。

正直とつちめられるで済むならまだマシなのだろうが。

「それに怯えたってわけかい？」

「いや違う」

痛い目や死ぬ意味なんて気にしてない。

正直何度も死んで成すべきだと思ってたし。

「……本当に何もされなかったんだ」

「されたかったのかい？」

「……返せる物は無かったけどさ」

「なら良いじゃないか」

外の世界でも無かったわけではないが、いきなり来た人間を素性も聞かずに助けることはそこまですくはない。

しかも……それが村全体でだ。

「それでどうするか悩んでるって感じか」

「……絶対やるって決めてたんだけどな」

「別に良いだろ、悩んで出した結論が良いに決まってる」

「……やった方がいいとか、ダメとか言われると思ったが」

「それを決めんのはお前だろ？私が言う事じゃないさ」

「それは、そうか」

「まっそもそも、実際お前が出す結論も予想つくんだけどな」

「それは」

「言わない。さっき言っただろ？」

「それもそうか」

「ただ……今決めるよりも、幻想郷をもっと知った方が良いんだろうな」

死体同然の気味が悪い自分の身体だが、場合によってはこれと付き合っていく必要があるわけだが……雑に決めて手遅れになるわけにもいかない。

決めてしまったらリセット出来るとは限らないんだ。

「村ならまだしも、外は妖怪だらけで危険だぞ？」

「ああ、だが後悔はしたくないからな」

「そっか」

「好きになれるなら、好きになりたいし」

「お前は……いや」

萃香は言いかけた事を仕舞い込んだ。

そこまで思ってる以上は答えなんて出てるだろうと。

「一つだけ言っておくか」

「何？」

「鬼に誓ったその言葉、忘れるなよ？」

「誓ったかと言うと疑問だが……どっちにせよそのつもりだしな」

そのまま萃香と約束して別れる。

そして向かう場所を決めないとなど。

萃香に色々な場所を聞いたし、向かって知っていくべきだと。

「……もつと知って行くっきゃねえな」

そのまま幻想郷へと溶け込んでいく……筈だった。

「面白そうなの見つけた」

to be continued

二百二十五話 決意、そして迷い
r t e d w a y f o r y o u . t h e d i s t o

その翌日、また彼はここへと訪れた。

おかしいわけでは無いのだが、忙しい事もあつて連日来る程余裕など無い筈だが……

「どうした、蓮司？」

「いえ、特に何も無く来ただけです」

「そうか……」

何やら違和感を感じる。

ただそれが何なのか……

「と言うかお前、また酒持ってきたのか!？」

「はい、萃香さん。ただ萃香さんのお酒の方が上質だと思いますが」

「それは確かにそうだが……それでいて、お前は呑まないんだろ？」

「だから呑めませんって言ってるじゃないですか」

「いや、それなのになんで持ってきたんだって思ってた……」

「そりゃ、必要だと思いましたし」

「私にとつちや必要だけど、お前にとつちや浪費だろうに」

「いいんですよ、これくらい」

「だったらこれでも呑むか？」

そう言いつつ伊吹瓢箪を渡そうと試す。

「年齢が……つてか萃香さんのそのお酒はそもそも人間じゃダメでしょう!!」

やっぱそうだよな、昨日と変わらないようにも見える。

いつも通り、酒は呑めないし反抗的でも無い……おかしな所は無い筈だ。

「つと悪いな、試したわけだが」

「何を試したって言うんですか……」

「いや、唐突に呑んだりしないかとな。出来ないだろうけど」

「分かってますよ、ああもういつも通りクラクラします……」

「いつも通りだな」

「ん？」

「いやなんでもない、お前はいつも通り酒が駄目なんだなってしみじみ思っただけだ」

「萃香さんが強いだけでしょう……」

「ああ、そりゃそうだ」

「やたらめつたら心配性になってしまったのだろうか？」

「何というか……自分がらしく無いと思う。」

「しかし、こりや暫く会えなくなるかね」

「まあそうですね」

「また酒持つてこいよ」

「持つて来れたらですがね……」

「なあに、お前の事だからなんだかんだすぐ持つて来そうだがな」

「いや、そもそもここに来るかも分かりませんし」

「ん？」

何やら嘯み合わない気がする。

そもそも自分の聞き方が悪かった気もするが。

「暫く仕事漬けて事じゃ無いのか？」

「いや、仕事は辞めてきました」

「……嘘だろ？」

仲良くやれていると言っていたし、唐突に辞める理由もあるように思えないのだが。何より酒を持ってきた以上金じゃ無いだろうし。

「本当です。幻想郷で異変を起こしますので」

「……は？」

何を言い出した出鱈目じゃ無いか。

昨日言ってた筈の事を忘れてなんてわけないだろうし。

「おい蓮司」

「どうしました、萃香さん？」

「……!？」

そうか今更違和感に気付いた。

さつきからコイツ敬語になってるし、何より呼び方も萃香さんが変わっていた。違和感を持ってなかったのも謎だが、急にここまで変わり果てたのも謎だ。

「嘘だよな？」

「いや俺がこのままじゃ死ぬしか無いのは……だからこれだけは嘘じゃないんです」

「……」

一体何があつた？しかも昨日だぞ……
寝ぼけているなどには見えないが……

「そうしないと俺が……」

「待ってって」

「どうしました？」

「色々、変だぞ？」

「変ですか？」

「昨日何があつたんだ……？」

「何も、無かつた筈ですが……」

「いや……」

何もかもがおかしいと突っ込みたくなつたが、彼の表情から戸惑いを感じる。
本当に何も分らないのか？

「何やらありそうですが……そろそろ準備しないと」

なんのと聞かずとも分かる。
聞かずとも分かかってしまう。

「アイツは何もするなと言うんだらうけど……」

むしろあの邪悪はこの事でさえ楽しんでるのではと思う。
下手すりや今回の原因もアイツじゃ無いのか？

「あの萃香さん」

「ん？ああ悪い」

もうすぐにも行きたいのかと言わんばかりに急かす。
このまま行かせるのは……

「……恨むなよ」

「萃香さん何を……」

「お前が本心かどうか洗脳とかされてんのかどうか分からん、だからこれが一番だ」

そう言う萃香は巨大化し、目の前の人間を……踏み潰した。

それは一瞬の事であり、潰された本人は何が起きたのか理解すら出来ない、ただ瞬きするようなその刹那で命を落とした。

「……全て戻ると言えどもお前の中には残るし、私は紫には消させないしな」

それにあれが本心ならこのまま続ければいい。

死んだところで突き進むだけなのだろうから。

そうじゃない場合は……巻き戻って治って欲しいが……

「だからと言って殺すしかないのはやり過ぎである事は間違い無いな」

鬼を理解しようとしてくれる人間なんて居ない。

酒を持って来て呑めないながらも駄弁って、そんな事が出来る人間がいるとは思わなかった。

ただそれは……

「もしも正気に戻っても、二度と仲良くなる事は無いだろうな」

私は友と思ったお前を殺した。お前を裏切った。

お前も私に嘘を吐いた、如何なる事情があろうとも鬼に誓った言葉を忘れたのだ。

「私もお前も嘘吐きだ」

そうして萃香は酒を呑む……顔に溢して誤魔化しながら……

その直後、世界は再び戻った。

to be continued

二百二十六話 紅魔館へ～steep road to death.

「ん……」

目を覚まし周囲を見渡す。

見覚えのない場所だ。

「平原？」

ここが何処だか分からない、ただ幻想郷なのだろう。

頭の中のこの記憶が到底夢などとは思えないし……

「倒れているわけにはいかない……」

やらなきやいけない事があると足を進める。
まだフラフラだがそれを気にしない。
ただ、運が良かった。すぐに人と出会った。

「おいアンタ、そんなボロボロでどうした？」

「すみません。迷子でして」

「迷子？何処に行く予定だったんだ？」

「紅魔館です」

「……は？」

目の前の人物が固まる。

そこまでなのだろうか？

「……何が目的で？」

「少し、主人と話したいことがありました」

「……」

男は悩みに悩んで蓮司に場所を伝えた。

何度も気を付けろよと言われた……そこまでののか。

だが……その方が都合が良い。

「さて、こっつちか」

聞いた方向へと向かう、空気が変わった気がした。

この奥に進めば、いずれは目的の妖怪に出会えるだろうと考えた。

「……」

しかしそうは上手くいかないようで……

「なんだこれは……」

進むにつれ霧に包まれて行く。

雨などが降ったわけでは無い筈だが……

「行くしか無いか……」

もつと周囲の事を聞いておくべきだったな……

ただ急がないと行けなかったから……そう急がないと……

そう思い駆けながら霧の中を進む。

「……大丈夫、大丈夫」

進む度に不安に思いつつそれを押さえつけて走る。

合ってるよな？霧のせいで分かりづらくなってきた。

「これは……」

目の前の水に突っ込みかける。

見辛いため気付いて良かった……落ちたら洒落にならないし。

「これが言われていた奴か……？」

湖の近くにあると聞いていた。ならば近いか……

そのまま湖の周りを歩いて行く。

ひたすらひたすら……

「……長く無いか？」

かなりの時間湖を回った気がする。

しかし一向に他の景色が見えない。

「霧のせいだけじゃ無いよな……」

ただひたすらに大きい。琵琶湖とか程では無いだろうが、そこら辺によくあるレベルでは無いと思う……

「はぁ……はぁ……」

息が切れてくる。疲れも溜まって来る。

少し休めば良いのだが、休まずに進み続ける。

それは霧の中と言う不安からか、それとも異様に駆られてる使命感からか……止まる事は無かった。

しかし遂に問題が起きた。

「……あ」

足がもつれた。それだけと言えばそれだけなのだが、そのまま湖へと落下した。

「あぶっ……ばっ」

慌てて陸へと上がろうとするが、手が届かない。
動き続けて疲れ果てた身体が上手く動かない……

「嫌だ……嫌……」

服が水を吸って行く。身体が重くなって行く。

助けてという言葉も消えて行き……水底へと沈んで行った。

「……」

目が覚めて思った事はまたあの距離を進まなければならぬのかだった。

水底も苦しきしか無かったし、本当にあるのかと不安しか無かった……

「だから……」

行かないと、行かないといけないんだ。異変を起こさなきゃ行けないんだ。行かないや行かないや行かないや行かないや……

「そうするように……決められているのだから」

その後、何回も死んだ。

何回も落ちた。

何回か何かに襲われた。

突然氷の塊が落ちてきたりもした。

「また……か……」

既に心は折れている気がした。

しかしそれでもやらねばならないので続けた。

ここまでやって着かないのなら本当にあるのか疑わなければならぬだろう。なのに決意は鈍らずに再び愚直に進み続けた。

「なんで、なんだろうな……」

自分でも分からない、分からないけど続けなきゃならない。

そうしなければならぬから。

きつと成した時に答えが分かると信じて。

「……ぜえ、ぜえ」

疲れながらも考える。今回は大丈夫だと思い込みながら。

「霧の中には変わりないけど、少しずつはマシになっている筈……」

疲れきった脳内は都合の良い想像ばかり浮かぶ。そんな事は無いはずなのに、
継続

ける。

転んでは起きて、倒れては身体を叩いて奮い立たせる。

「あと少し、あと少し……」

そのまま一歩進むと、霧が晴れた気がした。

「……あれ？霧が」

霧が完全に消えたわけでは無い。しかし薄くなった気がする。

そのお陰で周囲が見渡せる。

「……幻覚じゃ無いよな」

今まで一度も霧が晴れたことなど無かったし、何より目の前にあるそれが到底現実だと思わなかった。

「赤い……赤くて……」

吸い込まれそうな、不気味なような真つ赤な建物に目を奪われる。
趣味が悪いとまでは言わないが……やはり現実離れしている。

「ただ……そうか」

紅魔館と言うには相応しい見た目とも言える。

ならば……確かに辿り着いたのだろう……

「良かった……」

喜ぶのも束の間、それ以上に身体が限界だった……

紅い建物を目に映しながら……気を失った。

危険な妖怪達の住処で。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百二十七話 最初の一歩～to an incident.

「いふっ……」

痛い……急な痛みが……と言うか何があったんだっけ？

「げほげほ……」

「やっと起きたかしら？」

噎せていると、正面から声ができる。
見ると翼の生えた少女が居る。

「君は……?」

「あら、まさかここまで来て知らないつもり?」

「ああ……ならば合っているのか」

「何が合っているか知らないし、どうでもいいけど」

そう言いつつ此方へと詰めて来る。

「不用心過ぎないかしら?それとも妖怪を舐めているの?」

「お願いがありました……」

「……は?」

「そのためにここまで来て……」

「呆れた」

「……何が、ですか？」

紅い目で此方を睨みつけて来る。

一瞬気圧されそうになったが、上手く乗り切った。

「話を聞いてあげる立場ですら無いのに、お願いなんて通じると思っているの？」

「それは……」

言いたい事は分かる……ただ自分も。

「まあ、どうでもいいか」

目の前の少女は此方への興味を失ったかのように。

容易く殺された。

次に目を覚ました時には戻っており全てを理解した。

「……話すら」

やっと辿り着いたのに、こんなにあっさりと終わるのか……

「次は辿り着けるのだろうか……」

心は恐らく折れていた。しかし呪われたかのように進み続けた。
そうしなければならぬのだから……

「……やってやる、やってやればいいんだろ〇〇」

そう意気込み……

「……ええ？」

今自分でなんて言った？誰の名前を呼んだ？
無意識だったせいで聞きそびれたが……

「……まあいいか」

思い出せない以上は仕方ない。今は兎に角行くしか無いのだと諦めて進んだ。

また湖でも館でも何度も死んだが、事態に変化が起きるのは思った以上に死ぬ前だった。

「また、何の用？いい加減にして欲しいんだけど」

唐突に目の前の館の主人はそう言った。

「……あら？また……初めての筈」

彼女は困惑しているようだ。

正直自分も何が起きたのか分かってないが、むしろ助かったのだと思う。

「貴方何処かで……」

「何度か殺されました」

「……へえ」

ジロジロと眺めて来る。

「死んでるのに来るなんて馬鹿かしら？」

「……やらなきゃいけない事があったので」

「………咲夜」

その言葉と共に目の前に銀髪の女性が現れる。

また特別な能力を持った存在なのだろうなど……少なくとも出鱈目に思える。

「お茶の準備をしなさい」

「はっ」

そのまま消えて行った……瞬間移動？

「お茶ですか？」

「話を聞いてあげると言っているの」

「ああそう言う事ですか」

「つまらなかったらその時点で死ぬ。それは自覚しなさい」

「……はい」

聞いてもらえるだけマシなのだが……予想はしていたものの誰も彼もとてつもない存在なんだなと思いきらされた。

「異変を起こして欲しい……ねえ」

「そのお願いに来ました」

「……正気？」

凄い戸惑うような顔を見られた。この人こんな顔も出来たんだな……

「正気です」

「異変を起こすなどか言われるなら分かるけど。むしろ私達に起こせって来るなんて異

「常でしか無いのだけど？」

「起こすな？と言う事は起こす気があったのですか？」

「いや無いわ、魔界で異変を起こした奴が居たらしいけど」

「魔界？」

「そこを詳しく話す気は無いわね。異変を起こして退治されたただけなもの」

「成程……」

「だから異変を起こす気も無ければ、起こす意味もないの」

「……」

「少なくとも、何度も死んでいる人間らしい、実に人間らしく無い狂った提案だと思った

わ。だから特別に生かしてあげる」

死は免れたようだが……それではダメなのだ。どっちみち死ぬ未来しか無い。

「何かありませんか？」

「……どう言う事？」

「何か異変を起こす理由がありませんか？」

「……起こすかの提案では無くて起こさないとダメなの？」

「そうしなければ今生きても結局死ぬので」

「そう、どうでもいいわ」

「どうでもいいですか……」

当然そうなのだろうけど、なんとしても成し遂げなければ……

「やる意味も無ければ、義理もないそれで十分でしょ」

「……外に出たいとは思いませんか？」

「は？」

唐突に何を言い出すのだろうか顔で見る。

唐突にこんな話をすれば当然だろうが……

「ただでさえ、制限されてますよね？」

吸血鬼と言う存在の習性を考える。

当てずっぽうとも言えるが、周囲が霧だらけな以上全く無いわけでは無く思える。

「何を根拠に？」

思いついた事をひたすら並べてみる。

合っているとは限らないが、全て外れているとも思えない。

「当てずっぽうね」

当然それはバレるのだが……

「何かは当てはまる理由はあると思いましたが」

「そうね……確かにその通りかもしれないわね」

その言葉を聞き安堵する、多少はなんとかかなりそう……

「ただ一つ、それで私を動かせると思うな。人間風情が」

「……………そうですね」

手厳しい……………成さねばならぬが突っ込み過ぎてもダメなのはきつい……………
まだ話を聞いてくれているだけマシなのは確かだが……………

「具体的な案をまず出しなさい。起こせと言って丸投げするつもりなら許せない」

「ああ……………それはそうですね」

二元からそのつもりは無かったが、そう言ってもらえるならむしろ助かる。

「貴方が本当にそのつもりなら、共犯者として協力しなさい」

「色々と考えてみます」

綱渡りしつつも協力が得られた。

目に付くような大きな異変を起こすための最初の一歩に……………

二百二十八話 次なる異変～next do it.

×年夏、紅霧異変が起きる。

主犯はレミリア・スカーレット紅魔館の主人である吸血鬼である。

彼女は館の仲間達と共に異変を起こしたが……そこには共犯である蓮司の姿は無かった。

なら何処かと言うと……

「問題は……無さそうかな」

再び野へと戻っていた。

「何回か試してちゃんと起きてるし……無事に行けたか」

レミリアの共犯者となった後、皆で集まって異変の計画を立てた。

そのまま無事進行したが問題があった。
今後死んだらどうなるのかと。

「ただ、予想外だったのも結構あったが……結果的にはマシか」

死にたくなんざないが、仕方ない時は割り切るしかない。

今までの事が台無しになる方が不味いと。

そう思い、全て詰めて実行され、その内容を確認した後……自殺した。

「……そのまま、また行って」

話は纏まっている以上手早く話すしか無いと。

毎回やらなきやいけない以上は、安易に死にくいかもなと考え、異変の内容含めてどう説得をと考えて居たのだが……

「レミリアさんは……」

その計画は既に出来ていると言われた。
むしろ部外者が急になんだと……

「流石に不気味だったけど……」

流石に意味が分からな過ぎてまた死んで見るしか無いと検証はした。そのために余計に死ぬ事になったが、仕方ないだろう。

その結果は……自分が居ない状態で異変が遂行されている。

「紫さんの仕業だろうとは思うが」

流石にそれしか浮かばない。それ以外こんな事態を起こせると思わない。

記憶の無い筈が一部の記憶だけ保持しているなどと……

「結果的にはむしろ悪くない……か」

仕業と言うよりはむしろお陰か。

自分が異変に関われないのは問題かもしれないが……そうこうしてる場合でも無い
か。

早くしなければならぬのだから……

「時間に余裕が出来はしたが……」

次の異変だろうか？少なくとも一つでどうにでもなるとは思わないし……
それには問題があるのだが……

「……どうすんだこれ」

何をどうすればいいのか分からない。

人里や萃香さんとかの場所しか知らないし……

「……探すしかないのか」

途方も無いがそれしかない、協力者……いや共犯者を増やすしか無い。

「……間に合わなくなったら遅いんだ」

遅いんだと繰り返し歩き始める。

しかし、そう簡単に見つかる物では無い。

そもそも……妖怪達と遭遇しなかった……

「不味いな……」

直に紅霧異変が起きる、それまでに何も起こせなかった……

無駄な時間ばかりが……時間は無いのに。

「……結局異変は起きるのに、繋がらないか」

「異変ですか？」

「っ……!!？」

慌てて身構える。独り言が聞かれていた。
しかもよりにもよって不味い部分を。

「いや、なんでも」

「すみません。気になってしまったので聞いてしまいました」

ふと話しかけて来た相手を見る。

白い髪の女の子だ、しかし普通の人とは違う。

「うん？ 一体どうされました……とこれですか」

少女も視線に気付いたのかその刀を見る。

今までの人達は刀なんざ持つてる人達なんて居なかったしこの子が特別だよな……
それともこの子が危険人物とかあるか？

「ああすみません。怪しい者ではないのです」

「……」

「あ……怪しく無いですよ？」

「……すみませんが、帯刀していきなり異変と言う言葉に首突っ込んでくる人を怪しく無いと言われましても」

「うぐ……そう言われると否定出来る場面は全く浮かばないのですが違うんですって」

「そうですか……」

信用はし辛いのは事実だ。不審者としか見えないし……

ただ現状、他に比べてキーになりそうな物を持っている気がする。

「それにですね。貴方の言った事が気になるのは事実では？異変と言われる以上は」

「確かに……それも事実ですね」

「この前起きたばかりですよ？なのに起きるみたいな言い方をされれば」

「ばかり……？」

ちよつと待て、過去に異変が起きた話は聞いて居たがばかりなのか？

「ああそう言えば、魔界での異変は一般人には関係無かったですもんね。数ヶ月前の出
来事ですが」

「数ヶ月前……」

そんなに頻繁に起きて居たのか？

だったら本当に異変は一つ二つじゃ足りなくて。

「しかしそれならそれで違和感がありますね」

「何がですか？」

「異変の事に詳しく無いのになんで異変について知っているのかと。この前の異変の話では無さそうですし……」

「ああ……確かに」

「何故納得しているのかは知りませんが……」

確かにおかしい事だらけだな……もしかして今結構不味い状況？

「流石に放置出来そうに無いですね、変な動きをすれば刀を抜かざるを得ません」

……命懸けがやっと終わったと思っただんですが、また命懸けなんですネ。

「では、話を聞かせてもらいます」

「……分かりました」

このままでも仕方無いし話して損は無いだろう、どうせこのままでも死にそうだし。この子は普通では無さそうだから……次の異変に繋がることを祈ろう。

「異変についてですが……少し場所を変えましょうか」

流石にこれ以上他の人に聞かれると不味いし……

彼女も納得してくれて場所を移動し話し始めた。

次の異変を急ぐ為にも……

to be continued

二百二十九話 冥界への準備～living
person crazy de eds.

人里を離れ、誰も居ない事を確認する。

相手は待たされ過ぎたせいかな若干苛立っている。

事のあらましを全て伝えた。

「……」

しかし彼女は何も答えない。どうしろと言うのだ。

「あの……」

「到底信じられない……と言うか嘘だと思ってますね」

「まあ……分からなくはないですが」

「ただ、貴方が危険人物だと思わされましたね」

「それも……分からなくないですが言ってくれ言われて言ったのにそれはあんまりでは？」

「こちらには信じられない理由があるのですよ」

「……聞いても良いですか？」

流石に理由が分からない以上はどうしようもない。
秘密などと言われたらどうしようもないが……

「紫様がそのような事をするとは思いません」

「知り合いなんです?」

正直、驚きだが……そもそも。

そのような事ガツツリするタイプなのではとしか思えんが。

「正確には、私の主人と友人です」

え、友人……は流石にいるか流石に。

しかし真実しか言っていないのだが……どうしたものか。

「そして紫様がそのような事をする時は、必ず幽々子様に話しますので」

「幽々子様……」

「おや、知り合いですか?」

「いえ、全然」

「でしようね。知り合いと言ったら斬る所でした」

「物騒な……」

「冥界の人間と知り合いと言えば私でもキレますので」

既にキレているような気しかしないのだが。

ただ余計な事を言う必要は無いな……じゃなくて。

「冥界？」

あの死神が連れてく予定だった冥土の事か……？

いやいや……ツツコミどころだらけなのだが!?

「なんでそんな所に人が……？能力者だとしても」

「ある程度察せるでしょうけど、人じゃ無いですよ？」

「……成程」

力を持っているのは妖怪だと言う事は分かるのだが、本当に人間は一般人しか居ないな……

「その主人さんを心配されて話さなかったとかは無いですか？」

明らかに、危険を通り越した事をしている自覚はあるし、だからこそ話さなかったと言われてもおおかしくは無い。

「それは……うーん」

悩み始めたようだ。問答無用じゃなくて本当に良かった。

「そもそも、話している人物が同じなのか不安になってきましたけどね」

「え？同じだと思いますが……」

「自分が知っている紫さんとはかけ離れてそうなので。そんな事平気でしそうと思ってましたし」

「ああ、そう言う事では無いです。紫様ならやるでしょうし」

「……んー？」

「いまいち理解しきれずにいる。」

「紫様ならやりそうなんです……しかし殆どは話してからやってみましたし……その点での疑問点です」

「本当に仲が良かったんですね」

だったら、既に話している？いや分からない。
そもそもその幽々子さん自体を知らない以上、進展はしないだろうが。

「……正直、貴方の法螺話で済めばいいのですが」

「残念ですが」

そんなわけではないのだ。

「仕方ありませんね。一度戻って幽々子様に聞きましょう。私としても気になりましたので。では失礼しますね」

ああお買い物もしていかないかと喋りながら去ろうとする。
とりあえず危機は去ったのだと安堵する筈だったが。

「あの……」

「ああ。いきなり食いかかってしまつて申し訳ありませんでした。つい冷静さを失つてしまう悪い癖が……」

文句を言われるとでも思つたのか謝罪される。

疑われる理由も自分の迂闊が理由だし文句は無いが……殺されかけたのはやり過ぎだが。

「文句が言いたいわけではなくてですね」

「では……まだ何か？」

正直自分でもなんで止めたのか分からない。

ただ止めないといけないと思つたからであつて……

ああ、でもそうだ。このまま他で探し続けても見当たらないのだ。きつとだから自分は……

「自分も連れて行つて貰えませんか？」

「……寝惚けてます？」

「いえ、特には」

「冥界って分かりますよね？死後の世界ですよ？人間が行く場所ではありません」

「行ったら死ぬとかは無いですよね」

「流星に行っただけで死ぬわけでは無いですね」

「なら行つてはいけないと言うわけでは無さそうですが」

「それはそうですが……」

信じられないと言う顔をしているが普通の人間ならそうだろう。

ただ自分は普通じゃないしな……

「行っただけでは死にはしないものの、命の保証は出来ませんよ?」

「守ってくれとまでは言いませんよ」

「狂人ですか?怖くなってきました」

このまま何をすればいいのか分からない状況が続けても仕方がない。

それに紫さんの知り合いだと言う以上はどう言う人なのか気になるのもある。

「本当に連れて行っているのか怪しいですが……貴方に行く気があるのなら連れて行く方がいいのも事実ですが……」

そのまま彼女は少しうんうんと悩んだ後。

「……分かりましたが、失礼のないように」

「気を付けます」

観念したかのように受け入れた。

最初に断った冥土に行く事になるとは思わなかったが、これも異変のためだ。

「先が作れるといいけど……」

本当にその先があるのかと頭によぎりつつ、無理矢理振り払ってこれからやるべき事を考えた。

t o b e c o n t i n u e d

二百三十話 白玉楼 mansion of the
dead.

冥界に行くためには三途の川を渡る必要があるかと思つたがそんな事は無かつた。

吸血鬼達のように翼などが無いのにも関わらず空を飛んでいる……事はもう氣にしない事にした。だつて幻想郷だからつて理由で済みそうだし……

「落ちないでくださいね」

「氣を付けるとは言いたいですが……」

捕まつてるだけな以上はどうする事も出来ない。

手を離されたら落ちるわけだし、こつちから何か出来るわけでも無い。

「少なくとも、気は張っておいてください。即死するので」

「……ですね」

今は雲の上を飛んでいる。死ぬなら良い方でこの高さだと絶対身体がバラバラになるだろう。

……流石にそんな死に方はごめんだ。

「普段人を乗せたりしないから、少し不安はあるんですけどね」

「何故今そんなことを言うんです?」

脅しか?脅しなのか?

いや、違うな。どっちかと言うと天然なんだろうなこの子。

「でも大丈夫でしょう」

何をどうして大丈夫になったかは分からない。

ただ自分に来れることは信じるしか無いと思いつつ、空を飛んで行く。

「しかし、冥界って空にあるのだろうか？」

「何故ですか？」

「今、飛んでるわけですし」

この前三途の川を渡った筈なのだが、その時は地上を動いていた。

到底あの舟が空を飛ぶと言う事は無いように思えたが。

「大丈夫ですよ。目的地は此方なので」

実際違うと言われてもどうする事も出来ないのが結論なのだが。

ただ、合ってるなら何も心配はない。

「つとこの辺ですね」

彼女が動きを止めると雲の切れ間に差し掛かる。

そこから見えるものは……

「いやいや……いや、え？」

気流が発生している。なんかこの距離でもゴーゴーと風の音が聞こえるレベルなんだが……

「どうしました？」

「……そこ？」

「そうですが」

え？明らかに人を引き裂きそうなアレに突っ込むの？死ぬんじや無いかな？

「と言つてもここから結界に入るしか無いのですが」

そつかあ、そうなのかあ……なら仕方ないな。

「死んだらすみませんね」

と言うか多分死ぬ、俺は妖怪達と違うもん。

「人間でも、死なないとは思いますが」

「そこは断定して欲しかったかな……」

死んだら仕方がないで割り切ろう、どうせ一人じゃここまで来れないのだから。

ならば次回気をつければ良いと。

恐怖は消え切らず、飛び込む瞬間目を閉じた。

「……………生きてるな」

むしろ傷すら無かった、よかったよかった。

「だから言ったでしょう」

そう言う彼女はふんすと、自信満々な振る舞いをしている。

今自信満々になるなら最初からそのままできて欲しかったと……………言い出すのは良くないな。

「ええ。疑ってしまつてすみませんでした」

それ以前にここは謝るべきだろうとしつかり謝罪する。

「構いませんよ、それよりここです」

「……………なっ!？」

雲の隙間からはこのような建物は見えなかった。

見逃していた？ いや目を閉じていたとはいえその前から確認出来た筈だ。そう考えると急に現れた気がするのだが。

「ここが、私や幽々子様が住む白玉楼です」

妖夢さんから降りた後、外を周り門をくぐる。

「……………これは」

ここは本当に冥界なのだろうか？ 地上と違いが分からない。

死者の住む場所と言うのに全く生者と住処が変わりがないのだが。そして何より……

「広いつてレベルじゃ……………」

屋敷も庭も異様な程の大きさを持つ。

紅魔館も大きかったが庭園などを含めるとこちらの方が広いだろう。

そもそも日本にこれ程の屋敷があつたっけレベルなんだが。

「そこまでですか？」

「ええ。それに素晴らしいとしか言えなくて」

歴史的建造物などに興味があるわけでは無いが、誰だつてこれを見たら感動するだろう。特に日本人は。

「それは嬉しい限りですが。生憎今は案内とかは後にしませんと」

「と言うと？」

「まずは、幽々子様の元へ向かいます。付いてきてください」

周りが気になりはするが、立ち止まるわけにもいかないか。

「どうしました、こっちですよ」

「あつすみません」

待たせるわけには行かないと後を追う。

「あら……?」

庭に誰かを見かける。一瞬屋敷仕えの人かと思つたが……そのような雰囲気ではない。

「妖夢う、遅かつたじゃない」

「幽々子様、すみません」

幽々子様、妖夢さんが言っていた人だな。

「それに、その人は誰かしら？」

「……冥界に来たいと言った人物です」

「……ええ、狂人？」

酷い言い様だ……いや事実だな。

と言うかそんなところまで主従で同じなのか……

「理由は一応あるんです」

「無いと言われたらどうすればいいか分からなかったけどねえ」

「それはそうかもしれませんがね」

「それじゃあ、理由を聞いても良いかしら？」

そのまま彼女はこちらの話を聞く気だが……

なんだか、目が輝いていないだろうか？

いきなり来たわけだし、不審とかそう言った感じな目で見られると思ったが。

「ああ……成程」

「どう言う事です？」

「冥界だと、何も無いので幽々子様も聞く事が楽しみつて事ですよ」

そうなのだろうか？ 確か今は咲いてないが、形的に桜の大樹であろうものもあるし何も無いと言った程では無いと思うが。

「一つは紫さんの知り合いだと言った事」

「貴方も紫と知り合いなの？」

「ここに連れてきたのは彼女ですし」

「ふむふむ、それでそれで？」

一つ一つにワクワクしている姿がよく分かる。

歳を取っているようには見えない。ただ少女にも見えない彼女だが、その振る舞いは少女のように見えた。

「もう一つ、異変について探りに来ました」

「異変？」

そちらに関してはキョトンしている。

まあそうか、異変については関係無い筈だし。

「彼が、もうすぐ異変が起きると言ったので私が少し突っかかったんです」
「妖夢から？珍しいわね」

「それ程、看過出来なかつたので」

「そうねえ……確かにそれを言われると気になっちゃうものねえ」

「実は……」

「まあまあ、長話になりそうだしお茶でも飲みながらにしましょうか」

……冥界にお茶つてあるのか？いや言った以上はあるんだろうが。

しかし、少女みたいかと思いきや、マイペースだな……

「異変もそうだけど、紫について聞きたいからね。聞かせてちょうだい」

「……大した事は知りませんが」

「構わないわよ」

そのまま中へと案内された俺は、知ってる事を全部話す事にした。
少なくとも彼女は何かありそうだから、そう思つて。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百三十一話 彼女の本音ノノマター
Wh
at you do.

「紫がそんな事を企んで居たなんてねえ」

お茶菓子を食べながらそう答える。

正直、話している最中に消えて行くお菓子に気を取られかけたがなんとか耐えた。

「聞いてなかったんですか？」

「そうねえ、初めて聞いたわ」

「幽々子様は信じるのですか？」

追加のお茶菓子を持って来た妖夢さんがそう尋ねる。

「んーまあ。分からなくはないからねえ」

「分からなくない？紫様が？」

「ええ。紫なら十分あり得るわねと」

「そうでしたか……正直驚きですが」

「一番幻想郷の事を考えているもの」

「幻想郷の事を？」

「たまらず突っ込む。幻想郷の事を考えているならこれはいいのか？」

「妖怪の地位向上とは言っていましたが……正直」

はつきり言つて胡散臭い。あの時は信じたが今となつては本当にそうとは思えないし……地位向上なんて必要なくらいに立場もあつて、元より妖怪強いしな。

「信じられない？」

「信じられないですし……幻想郷の為になると思えません」

「そうねえ、その理由ならならぬと思うわ」

「……理由は思い付いているのです？」

「多分……だけどね」

思い付くのか……自分にはサツパリだが。

「ただ、紫が秘密にしている以上言う事じゃ無いけど」

「そうですか……」

……まあいいか。目的はそれじゃ無いし。

「こちらで異変は？」

「異変……んー」

彼女は少し悩む姿を見せる。

「無いは無いのだけど……」

「だけど、どうしました？」

「紫がそうしているなら、私もそうしようかって悩むわねって」

「……どうなんでしょうね」

あの人の考えなんて全く読めないわけで。

「まあ、やりたくなったらやりましょうか」

「それでいいんです？」

こちらとしては起こってくれるなら好都合ではあるんだが……この人の行動が全く読めない。

「いいのよ。もっと自由にやらなきやねって」

「はあ……」

「その時は相談に乗ってちょうだい」

そうのほほん言いながら席を立つ。

「何処へ？」

「お腹すいちゃった。ご飯にしましょ」

話は終わりなのか、本当に掴みどころと言うか掴ませてくれる気がしない……

「……………ん？」

いや、いままでお菓子食べてたよな？お腹すいたってなんだ……………？

「妖夢(ご)飯はー？」

ああ本当に食べるのか……………予想以上だ。

と言うか……………そっちの方が優先された気がする。

その後も話そうとしたが食事が優先で聞く耳を持たなかった。

数日経ったが彼女は何も変わらないし何も分からなかった。
ふわふわしているし、話も上手く続かない。

「異変に関しても進展は無し」

あれから一度だけ尋ねてみたが、あらー、とかそうねーとかしか言っていない。
気が向けばと言っていた以上は強く言い出すのは違うだろうけど……

「その場その場で言ってる事変わるとかもありそうで……」

ただ可能性がある以上は諦めもつかない。

別の場所とか行って何も起きなかったとかだと困る……特にここはそうそう来れないから。

「……」

一応妖夢さんにも言っではみたが……

当然幽々子様がやる事に従うだけですと事態の変化は起きる筈も無かった。

「ああもう五月蠅い」

心の中では急げと何度も急かしてくる。

ただ、自力ではこれ以上の手段が無いと無理矢理自分を言いくるめる。

「待つしか無いんだよ」

いつまで……？何のために？

分からない分からない。

「何でアレはこんな事を……？」

……え？

アレって何だっけ？

「ダメだ分らない」

そのうち思い出せるだろう。

無理だとしてもキツくてもやらなきやいけないんだから自然とまた浮かぶ筈だ。

「いつそガツンと……」

言えるわけは無い。言えたとしても効果はあると思えない。

もやもやしつつ更に数日が過ぎる。

また何も変わらない一日だと思っていた。

しかし彼女の方から声を掛けてきた。

「ちよつといいかしら？」

「どうされました？」

いつものようにニコニコはしている。

ただ雰囲気は異なり、真面目さを感じられ少し身構える。

「本当に起きたわねって」

「起きた？」

考えられるとしたら……一つだが……

「吸血鬼達が異変を起こした」

紅霧異変……もうその日になっていたのか。

ここからじゃ全く確認出来なかった上に時間感覚もズレて分かり辛かった。

「しかしそうね、そうなのね」

「あの……」

勝手に納得されても困るのだが……
此方からしたら何も分からない。

「一つ聞いていいかしら？」

「どうぞ」

むしろ聞いてくれないと分からないので……

「異変を起こして、その後どうするの？」

「その後ですか？」

その後と言うのは異変の目的だろうか？

「生き返る為にやっているのだから生き返るでは？」

「ああいやそういう事じゃなくてね」

笑顔も消えてスツとした顔になる。

「異変がそのまま成立してしまったらどうするの？」

「成立ですか？」

「ええ、妖怪が異変を起こして人間が解決する」

「それが幻想郷のルールですね」

「だったら異変が解決しなかったらどうするのって？」

「それは……」

そんな事あり得るのか？

「幻想郷がずっと紅霧に覆われたら？」

「……フランさんが行動出来るようになる？」

突拍子のない事を言った気がするが。

彼女の目的はそれだしむしろ都合がいいとも思える。

「そう、ならもしもその異変で人が死ぬとしたら？」

「……」

人が死ぬ、有り得るのかと思ったがそもそも妖怪が何かしでかす時点で十分有り得る

事だ。

しかし誰かが……

「異変ってそう言うものなの、それを理解しなきゃダメよ」

「分かってる。分かってなきややれっこない」

一度歪んでもう止まるなんてしない。

しちやいけないのだから。

「私はね。したい事があるの」

「それは……」

やっと出て来た彼女の本音。むしろやりたい事があつたのに驚いた。

「手伝いますよ。それが目的でしたから」

「いいえ」

「いいえとは？」

「そこまで貴方を信用出来ない。それだけの事をやろうとしているから」

「それだけの事……」

「貴方と同じよ。私は蘇りたい」

「蘇る方法があるんですか!!」

その言葉に食いつく。いや食いつかない方がおかしい。

「私だけだけどね」

「そうですか……」

残念と思う半分。生き返る方法があるのは助かると考える。自分にも使えるかもしれないし。

「ただそれには代償があるの」

「代償ですか？」

「多くの人間が大変な事になるわ」

「それは……もしかして死……ですか？」

「さあどうでしょうね？」

ふふふと彼女は笑う。しかし目だけは笑っていない。

「だとしても」

「小野寺君選択肢をあげる」

選択肢……秘密にするかどうか？

「もしもそれでいいと思うならまた妖夢を頼ってここに来てちょうだい。その時は手
伝って貰うから」

「そんな事しなくても自分は」

「今ここで選択を迫る事は脅迫まがいなもの。しっかりとまた来るか考えてちょうだい」

「……分かりました」

「……それじゃあ。もう一つの覚悟を」

もう一つの覚悟とは……と疑問に思っていると身体が軽く。
あれ……それって。

「これは生き返るための私の覚悟。貴方の覚悟も見せて」

ああそうか分かった……あれは俺の……

他人を殺してでもと言う……

「……………ごめんなさい」

そこで謝っちゃ仕方ないんじゃないや文句すら言わない自分の方がおかしいか。

「貴方にもなんとしてもとの意思があればまた」

その言葉と共に、俺の魂は周囲へと飛び散った。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百三十二話 不死を知る者～revive hint

t.

流されやすいのは自覚している。

その癖変な所で意地を張る。

殺されたのにそれでも向かうのは、だいぶ異常だと分かりつつ進む。

そこに生き返る手掛かりが……そして異変があるから。

「小野寺さんですか？」

「そうです……が」

また冥界に行く必要があると人里を歩く。

そこで運良く妖夢さんを見かけたと思つたら……何故か此方の事を分かっていた。

「幽々子様がその気があれば私に言つてくださいとの事です……そもそも貴方にとつて何のことだつて話かもしれませんが」

「いえ、大丈夫です」

幽々子さんが言うことは……間違ひなく覚えていてる？

「大丈夫ですって……なんで……いや詮索はやめておきましょう」

従者は従者として出過ぎないと言わんばかりに引き下がる。気になる事は尤もなはずなのに。

「それで、どうしますか？何も無いなら私は帰りますが」

「いえ、行きますよ。約束しましたので」

「……正気？そもそもどんな場所だか分かっているのですか？」

「はい。それで大丈夫と言っています」

「……分かりました」

一度だけ不安そうな顔で此方を見て表情を切り替える。

そのまま、前のように白玉楼へと案内された。

「……そう、来たのね」

「いや幽々子様？幽々子様は小野寺さんがくると思っていたのだからお誘いしたのでは？」

「そうねえ……」

「幽々子様、どうされたのです？」

「妖夢には申し訳ないんだけど、少し下がっててちょうだい」

「……分かりました」

不服と言うよりは不思議そうに、それでも主命ならばと言った感じで下がって行った。

……つと去って行った妖夢さんに注目しているばかりでは無いな。

「本当に良いのね？」

「……その前に聞きたい事があるんですが」

「何かしら？」

「なんで……記憶を？」

あの人が言う限り例外など無い筈なのだが……

「ああ、それは私が紫に頼んだからよ」

「頼んだ？」

「ええ。私の記憶は残してと」

「……出来たんですね」

正直、無差別に起こる事だと思っていた。

ただ、賢者ともあればなんだって可能みたいなものか。

「ええ。忘れるわけにはいかないもの」

「蘇る……ですな」

自分の最終目的。忘れる筈など無い。

「そのために貴方には協力して貰うわ。覚悟はいいのでしょうか？」

「勿論」

彼女の手を取る。既にやると決めたのだ。

そのままあれやこれやと計画を進めていくうちに……ついにあの日となった。

レミリア・スカーレットによる紅霧異変が起きる、その日に。

「幽々子様。お話が」

「どうかしたの？」

いち早くそれを察知した妖夢が主人へと伝える。

「地上にて、吸血鬼達が異変を起こしたようです」

「成程……ねえ」

「おおかた、彼の言う通りとなりました」

「と言う事は今度は私達ね」

「はい」

主人に意を唱える事はない。

計画を聞いた初めから彼女は肅々と従う。

「それじゃあ妖夢、引き続きお願いするわ」

「幽々子様は？」

「少し様子を見てくるわ」

そのまま中庭へと向かい。桜の木の前に着く。

西行妖。そこの前に彼の姿もあつた。

「あつ幽々子さん」

「この子でも見ていたのかしら？」

「はい。満開になれば、今の状態はもう見れないと思つたので」

「ええ、確かにそうね」

満開になる事を考えると今のこの光景も物珍しくなるのだろう。

「西行妖が満開になれば私も蘇る」

「まるで魔法のようですがね。ただ幻想郷だからと納得出来るのもあるような」

「魔法のように思えるかもしれない。けど必要な事だからね」

「蘇る為に桜を調べて、色々とやってきましたしね」

「そうね……数ヶ月とは言え貴方だって待っていてくれたものね」

「約束しましたしね」

自分が出来る事はそこまで無かつたが、それでもやれるだけの事はした。

「吸血鬼が異変を起こしてもうすぐ秋になるわね……だったら次の春かしら？」
「そうなりますかね」

春度を集めると言って混乱したが考えるのをやめたのでセーフだった。

「出来たのはいいけど、結構かかるのよねえ」

「いいじゃないですか。時間が足りないよりは」

「それはそうなのだけども……」

何か気まずそうだ。

「何かありましたか？」

「……まだまだ時間があるから小野寺君にお願いしたい事があるの」

「それは構いませんが」

むしろ頼られるなら好都合と言える。

「向かって欲しい場所があるの」

「場所……ですか？」

正直何かをしてくれだと思ったから驚いた。

「永遠亭。地上にそう呼ばれる場所があるの」

「永遠亭……」

正直幻想郷の場所など全然知らないに等しい。何処だか予想も付かない。

「多分紫に頼れば分かるはずよ」

「分かりました。そしてそこでは何が？」

「不老不死がいるらしいわ」

「不老不死……は？」

長寿や幽霊までいるならおかしくないのか？

いやでもと言う事は……

「貴方に関わる何かがあるかもしれないの。更に言うなら私の後押しになるかもしれないし」

「確かに……そうですね」

言う通りだ。不老不死ならこう言った現象について知っているかもしれない。

「だから本格的に春が来る前に行って欲しいと言うわけなの」

「分かりました」

即答した。一番重要な事かもしれないし。

「ええ。それじゃあお願いするわ」

一応まだやる事があるかだけ確認し、無かったため妖夢さんに連れられ地上へと戻る。

永遠亭と言う言葉に心を揺さぶられながら。

「不死……ね本当に羨ましいわ」

死んだ事に後悔なんて無かつたはずなのに彼が来てから生き返りたいと思つてしまつた。

だからこそ前は目にもくれなかつた不死に妬みを覚える。

「不死になる方法があるなら蘇生する方法もあるかしらね」

西行妖が満開になれば私は蘇れる。

ただしそれは私が埋まつているからであつて彼は違ふのだ。

「その人達を頼れば私だけじゃなくて貴方も……」

蘇れるだろうと思つてふと思ひ出した。

「ごめんなさい。貴方はまだ死んでなかつたのよね」

冥界に居たため忘れていた……

いや……彼が心地良すぎて死んでいたと勘違いした？

彼は扇動すると聞いていたけど実際それ以上にさえ思わされた。

「無事に戻ればいいのは確かだけど……」

確か、確かなのだが……

「でも小野寺君……貴方は……」

元に戻ったらここには二度と来ないでしょう。
そう思うと胸がざわついた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

二百三十三話 永遠亭へくchase the rabbit.

永遠亭と呼ばれる場所がある。

この竹林の中なのだが全く見当たらない。

そもそも里の人達でさえ噂ではと言った話だったし、存在しているのかすら疑問があるようだった。

「迷いの竹林と呼ばれているらしいけど……」

この先に人が住めるのか？

いくら道を覚えているとしても、ふと気を抜いたら迷うぞ絶対。

「案内役すらいらないのはどうにも……」

少し幽々子さん達から聞いてくるべきだなと思いつつも進む。

ただ同じ場所を繰り返しているようにしか思えない。

「……帰り道も無いとなると。ん？」

何も居ないと思つて居たが、何かが居る？

その見た目は兎に見えるのだが……

「あつやぼつ」

こちらが気付いた事を察したのかそそくさと逃げ……つとちよつと待て。

「待つて待つて、逃げないでくれ」

慌てて追いかける。

見失ったら本当に碌な事にならない。

「速つ……」

うさ耳が生えていた以上人間では無いのだろうけど、身体能力の高さに驚く。

気を抜けない。抜いたら見失ってしまうから。

息を切らせながら必死に追う。

同じ場所を走っていると思われたが……それが見えた。

「ここは……いや、ここが？」

白玉楼にも劣らない古屋敷が見える。

そもそも竹林にこのような場所があったのかと疑問に思う。

「ただ、それつまりはここでもいいって事だよな？」

竹林にあると言う永遠亭。

どう考えてもここことしか思えない。

「げげっ、追いついてんの？」

先程の兎が驚いたように此方を見る。

完全にやらかしたと顔を手で覆った。

「全力で追いかけてましたんで」

「え？何？ストーカー？」

「違います……」

確かに周りから見たら、ストーカーとか危険人物に見える可能性はあったかもしれない……

「じゃあ何さ。意地悪でもしたかったのか？」

「永遠亭に用があつたんです」

「は？ここに、人間が？」

人里の者達は確かにここを知らなかったが、全く人間が来てないのかと。

「お兄さん病氣つてわけでも無さそうだけど？」

「病氣？何の話です？」

「ええ……それすら分からず来たんだ」

「少し会いたい人が居まして」

「お師匠様かな？生憎忙しいよ？」

「お師匠様つてのが分かりませんが……」

「八意永琳じゃない？違うの？」

「えつと……」

と言うか誰一人名前でも知られても知らない。

人里でも何も情報が手に入らなかったしな……

「流石に姫様では無いだろうし……」

「あの……」

「何？」

「不老不死って分かります？」

「……は？」

流石に幽々子さんがあの場面で嘘を言うとは思わないけど、それでも不安になって聞いてしまった。

「何それ？」

……不老不死があると聞いたが、もしかしてここじゃなかった？

ならまた竹林を走り回る事になるのだが……

「知らない知らないつと。さっさと帰った帰った」

……なんかおかしいと言うのかなんというか。

さつきまでは少なくとも聞く気がありそうだったが、急に追い出そうとしているように思える。

「……本当に知らないです?」

「知らないつてば。少なくともここいらには関係ないよ」

……なんか自爆してないか?

「出来れば話せればと……」

「……」

「どうしました?」

「何処で聞いた?」

雰囲気は変わり本気の顔で睨み付けてくる。

「……知り合いからですね」

詳しくは言うわけにはいかないが、流石に何も言わないわけにも行かず。

「ふうん」

「どうにかありませんかね……」

「生憎だけど、姫様に会わせたくないね」

姫様、先程も言っていた人か。

その人が不老不死なのか……?」

「これ以上居座るなら実力行使に出るけど？」

「……うぐ」

確かに知れたとはいえだから良いとはいかない。

無理して追いかけて来た以上はもう来れない可能性すら考えられる。

紅魔館の……比じゃないしなここ。

「そもそも会つてくれないだろうけど。面倒事は避けたいんでね」

手から爪を剥き出しにする。

流石に危険で済むレベルじゃないやつだ。

「じゃあ数えるよ、さーん、にー」

「待て待て待て」

スピードがおかしいし、逃げるにしたって絶対碌な事にならない。

「いちー」

あつダメだ間に合わな……

「にー、さーん」

……増えた？

「……何してるんです？」

「何つてこつちの台詞よ。面白そうな事してるじゃない」

正面を見ると、気付けば人が増えている。

黒い長髪で……凄く綺麗な人だ。

「でも姫様……」

この人が姫様？確かにそんな雰囲気はある。

「ただでさえここに人間なんて珍しいのだから追い出しちゃつまらないでしょ」

つまらないって言った？そんな理由で決められるのか???

「姫様、と言うか珍しく出て来たんですね」

「まあねえ。永遠亭の前で揉めて何だろうって出たらこれだったし」

「ああそれはすまねっす」

「いいわよてゐ。その分退屈しのぎは出来そうなのだから」

そう言うのと此方をじつと見てくる。

「それで貴方。永遠亭に何か用かしら？」

「……不老不死の方が居ると聞いて来ました」

「食べても不死にならないわよ？」

「いえ、そう言うのじゃないです」

金魚とかでそんな話を聞いた事はあるけど……どちらにせよ人の肉を食うってないだろうに。

「少なくともここで話す話ではないわね。来なさい」
「分かりました」

彼女に誘われるまま、永遠亭の中へと踏み入れた。

t o b e c o n t i n u e d

二百三十四話 永遠の姫君 *who know*
eternity.

「さて、楽にしてちょうだい」

白玉楼に負けないレベルの広さの建物だった。

外から見るとそこまでのように思えたが、内部が思った以上に広い。

聞くと特別な事をしたと言っていたが。

「そんなに周囲を見渡してどうしたのよ？」

「先程までの竹林にこのような建物があったのかと」

「そこまでかしら？」

「ええ、そこまでです」

話は聞いていても、一面中竹林だったあそこにあつたとはいまだに納得が出来ない。

「そう言う事もあるものよ」

「まあ……実際にそうですからね」

あつた以上は事実なのだ。それは変えられるわけではない。

「まっ話してみたものの、その話はどうでもいいわね」

「そう言われると……そうですね」

ただ、バツサリ切られるのもなんというか……つていやいやそうじゃ無いだろ。

「不老不死の方、なんですよね？」

「ええそうよ。試してみる？」

「試す……？」

疑問に思った瞬間、彼女は小刀で指を落とす。

躊躇いすらなく一瞬の事で言葉に詰まる。

「首とかでも良かったのだけだね。周囲が血溜まりになると掃除が面倒で」

気にするのは、そこでは無いと思うが……

「少し待ってなさい」

彼女はそう言うのと徐々に落とした筈の指が治っていく。

「これは……」

「痛みはあるけど、傷ついたままも許されない」

「今更だけだね。正直痛みもどうでもいいわ」

「それは……」

諦めは付くものの、それでも痛いのは毎回勘弁してくれと思っただけ……

「憐れみか想像したか知らないけど、幾千年も経てばどうせ慣れるものよ」
想定もしない年数に何も答えられなかった。

「でもまあ、これで信じられたでしょ？」

「それは……確かに」

「これで信じない言ったら本気で首でも落とそうとするかもだしそれを見たくないし
な……」

「ならよしってね」

自分の作られたものと違って純粹な不老不死だと言う彼女は……長い時を生きている
と言うのにただの少女にも見える……逆にそれが凄い事であり、恐ろしい事でもある。

「さて、次はこちらの番ね」

「でしようね」

流石にここに来て何もなかったかと思う人は居ないだろうしな。

「何か面白い話をしてちょうだい」

「……ん？」

思ってた反応と違うのだが……

「なによ、話を聞きに来た癖にタダで帰る気？」

「いやその気は無かったですが……予想外の返答過ぎて」

「そうかしら？」

「てつきり何か聞いてくるものかと」

「どうでも良くない？」

「……確かに」

実際他人のそう言った事情とかはどうでもいいと言えばそうか。

「面倒事は退屈しのぎにはなるのだけど、それよりも面白い話聞いた方が割に合わない？」

「自分には分からないですが」

「別に分からなくていいわ。面白い話さえしてくればいいから」

「少し待っててくださいね」

正直その考えは無かったからすぐには浮かばない。

何を話せば……

「まーだー」

「ええつと……」

外の話はあまりしない方がいいよな……あまり言いふらしてもだし。

だからって今の現状を話してもだし……何を話したものか……

「……一つ聞いていいかしら？」

「何でしょう？」

「貴方、外の人間でしょ？」

「……え？」

何もバレル理由なんて無かったはずだが。

「なら外の話でもしなさい。あまりに退屈させると酷い事になるわよ」

「ヒエ」

もうバレてるならいいだろうと話す。

変に内緒にして喧嘩売る必要無いしな。

「……へえ」

全てを聞いた彼女は頷く。

「で、結局貴方の来た理由も聞いてしまったわけだけど」

「話すついでに必要なわけで」

外の世界の話をするついでに必要なだと思つて話してしまった。

「人工的とはいえ不老不死ねえ。そりゃ私が気になるわけだわ」

「聞いた話とはいえ、不老不死が居ると聞いて」

「ただ、今までの話で思うけど。いいものじゃ無いわよ」

「確かに……：：：そう言う事でしようけど……：：：」

「死ぬるなら死ぬ方が幸せよ？蘇らずに」

「かもしれないが」

死にたくても死なないのに、痛みだけは残る。そんなの地獄しかないのは……

「ただ……：：：死にたくない」

「そう」

強引に来ると思つたが案外アツサリとした返答だつた。

「無理矢理死ぬとかは言わないんですね」

「そんなの生きてる人の勝手だし、そこまで関わる気は無いわよ」

「成程」

「生きたいなら勝手に生きればいいし、死のうとするのもご勝手に」

「まあ自分の人生な以上はそうですね」

「ただ……：：：後悔するでしょうね」

そう言つた彼女は今までとは違い、憐れむような目で此方を見るのであつた。

t o b e c o n t i n u e d

二百三十五話 異様な対価
oblem. difficult pr

永遠亭に着いて数日が経った。

本来であれば帰る予定だったのだが、永遠亭の同居人に止められていた。

彼女曰く、色々と検診したいと。

「検診する意味あるんですか？」

「姫様達のように傷が治るとか言うわけじゃないし、不思議体質には興味が尽きないのよ」
八意永琳。彼女も不老不死らしいが……

「しかし、本当に言われた通り変な体してるわね。死んでるわけではないけど、生きてい
るにもおかしい」

改めてそう言われると、キツくも感じるな……

「どうにも、ならないですよね」

「私でも厳しいわね。怪我人というのとも違うもの」

「………どういう状態です？」

怪我では無いのは分かっている。ただ自分の身体はどうなっているのかと。

「魂を肉体と言う器にポンと置いただけのような……普通の人間と違ってズレてるのよね」

謎の例えだと、料理では無く素材をただただ皿に盛っただけで……混ぜてないと言う事らしいが……分かるような分からないような。

「それをどうにかしないと」

自分の身体を元に戻す為に異変を起こしているが、未だに進展は無い……現状起きたのは紅霧異変だけではあるが。

「アテはあるの？」

「……あります」

その為に今色々とやっているのだから。

「そう。ならばいいのだけど」

あちこちでやれる事をやって、異変を起こして……ソレを探す。

その為に一度白玉楼に戻って異変を進めないといけなのだが……次なる異変を起こさないと間に合わないかもしれない。

ただ、彼女達がやる事を見たいのもあるため、異様に急ぐ感情を無理やり押さえつける。

「もしも解決方法に手が足りないのなら、姫様を巻き込んでしまいなさい」
「……え？」

「貴方を招いたのもそうだけど、あの子は結局真新しさを求めているからね」
「……つまりは暇潰しって事じゃあ」

「残念だけど貴方にとつては深刻な事でも、永遠人にとつてはそんなものでしかないわ」
数千年生きているのだとしたら確かに些細な事なのだろうが納得が……

「可能性があるだけマシなのですかね……」

暇潰しが理由だとしても、協力的な相手の方が良い事は事実か。

「そういう考えが出来る子は素敵よ」

「……どうも」

ただ、真面目に取り組んでくれるかなどの不安は残るが……否定的よりも十分に良い。
い。

「行つてきます」

彼女に言われるまま、姫様の元へと向かった。

「蓮司……だったかしら？何か用？」

「……」

部屋の外で呼び掛けた筈なのだが寝そべってるしだいぶ寛いでいらっしやる……

ダメとは言わないと言うか……むしろ頼み事して良いのかこれ？

「何か用と聞いているのだけど」

「ああすみません。少し聞きたい事がありました」

「面倒そうね……」

凄く嫌オーラ出してますねはい。

「とは言っても聞くだけならただね。言ってみなさい」

「なら……」

自分が戻る為について話す。

相手にとつては一切得の無い話だが……するだけならと。

「随分都合の良い話ね」

「俺の個人的な問題ですしね」

彼女には一切関係無いのは当然っちゃ当然だ。

「ああそつちじゃなくてよ。そんな与太にしか見えない話を信じるのかって」

「この世界に来てそれに縋って生きるしか無い以上は」

「その為に異変も起こすと」

「その存在を見つけないといけない以上は……」

幻想郷にいるか分からない者を異変を起こして探す。

そんな無謀な事を信じるしか無い。

「ふうん、ただの人間の癖に面白いじゃない」

「面白いですか？」

「ええ、いつの時代も貪欲で滑稽な人間は多いのだけど。貴方は別の意味で面白いもの」
「別の意味ですか……？」

「多くの人間は死にたく無い、それは当然ね。人によつては不老不死を望むものだって居るわ」

「でしようね」

人によつては欲しいものだろうしな。

「当然望まない者だっている。嫌だと言う人もいる。それも分かるわ」

「……人間として生きたいと言うわけですか」

「ええそうね」

「それと同じだと？」

「いいえ違うわ」

「え？」

違うのか？何処が？

「人間として生きたいならば、分別はつくもの。死にたいわけでもなくて、異変を起こす

と言う禁忌を犯してまで普通を望むのは異常よ」

「……」

「不老不死だから何でも出来る。ただそうやって何でもしてまで元に戻るのは死にたいから。死にたく無いのに何でもして不死を捨てるのは理解し難いわ」

「……それでもしないと」

「まるで使命に操られている人形みたいで見てて飽きないわ」

自分の中の違和感を思い出しつつ、返答に詰まる。

「まっそんな壊れかけみたいなの人間の方が好きね。ただの人間なんて関わりたく無いもの」

「その為に竹林に？」

「ええ。誰もが求婚してくるから嫌になったのに、破綻者の貴方とは。婚約はごめんだけど、話し相手としてなら貴方は良さそうね」

「なんとというか……」

悪口には違いないのだが、今はむしろ助かるので困る。

「それで、何をする気？」

「当然、異変を」

「異変を起こすのは妖怪の仕事ってのはさつきからも言ってるわよね？」

「それでもです」

「今の異変はどうするの？」

「起こして、次に起こすでしょうね」

「何処で？」

「当然、ここで」

「……へえ、面白い事をしようとしてるじゃない、ここでなら私にもそれを手伝えつて言うの？」

彼女は恐らくは意図を理解しているのであろう。それでも改めて確認してくる。

「その為に一から話したので」

「でしょうね。だからこそ分かりやすい」

「それで、協力して貰えると言う事でいいですね？」

「いいわ……と言いたい所だけど」

「何か……ありますか？」

「一つだけ条件を与えるわ」

「条件ですか？ 一体何を？」

「すんなりとは行くとは思わなかったが、それでも何をさせる気だ？」

「貴方の覚悟は散々聞いたけど、少し見せてもらおうとね」

「……無茶振りですか？」

「当然でしょ。私達も人間が異変を起こすと言う禁忌を犯すのだから」

「……まさか昔話のような事をやれと？」

なんだったつけ？火鼠とかそう言うやつ。

「流石にそれはしないわ」

「良かった……無理難題では無くて」

「だって幻想郷では手に入れる事が簡単なもの」

「……え？」

嫌な予感が……と言うよりもそれ以上とは？

「さて小野寺蓮司。貴方に五つの難題、貴方に解けるかしら？そして私の願いを叶えて
みなさい」

彼女は不敵に笑いながらそう言った。

t o b e c o n t i n u e d

二百三十六話 危険すぎる場所　strange boom.
t t o m .

「暗くて、見えないな……」

彼女から言われた難題、それにより優曇華さんに案内され迷いの竹林から地底へ向かう事となった。

正直、地底にこれ程のスペースがあるのは驚きだが。

「ここまでの広さと来れば何かに住んでいるのか？」

ここに行けと言われたが何かがあるかは分からない。

自分自身急ぎ過ぎたのだろうと今更感じられる。

死にたくないはずが、また急ぐ気持ちに塗り潰された。

「時折、衝動のように起きるこれをなんとか出来ないものか」

正直、これに関しては調べ様がないかもしれない……

ただあの日、何があったか……余裕が出来たら調べた方がいいだろうな。

「つとそれよりも今はこっちだ……」

段々目が慣れて来た……と言う事は光源が何処かにあるのか。

「獣や虫が寄つてこなきやいいけど、このままじゃ進めないしな」

火を起こし持ち歩く。火に何かが寄せられなきやいいが、周りには何も居なそうだ。

「このまま進めばいいんだつたな」

舗装はされてないものの、歩ける道があるだけマシだろう。

「……ん」

音がした、気がした。ただそれはかなり遠い。

流石に地底にいる何かに出会いたくない以上は遠い方が有難いが……

「流石に火を消すわけにはいかないな……」

危険だとしても見えないと言うわけにはいかない。

だからこそさっさと見つけたいが……

「結局、なんのことやら」

彼女曰く、それは見れば分かると言われた。

無茶苦茶だと思うが、それで向かった自分も大概か。

「せめて協力者が居れば話は変わるが……」

当然居るわけない。むしろ誰とも会わない方が良いと言われたしな……

「流石に幾ら何でも死んで準備をするは馬鹿でしかないな」

気を付けつつ進み続けるが……

「徐々に狭くなつて来ている？」

歩く分には問題無いが、誘い込まれているようで嫌に感じる。

そして何より……逃げ道が徐々に無くなるようで困る。

ただ進むしか無いのだが……

「せめて、道だけは普通であつてくれよ……」

よじ登る必要が出て来た。なんとかまだ進めはするが……

「絶対こりや逃げるのは無理だな」

いつそその心配が無くていいかと無理矢理自分に言い聞かせ進……

「やばっ……」

登ると言う事は……一度火を消さねばならず、当然壁を前にすれば前も見えない。

気を付けはしたが……それじゃ足りずに落ちる。

幸い高さは低いもの……

「痛ッ」

身体を打つ。重症まではいかないが、響きそうだ。

「傷を……治しようも無いよな」

治療道具も無ければ、そんな魔法を覚えてたりもしない。

これ以上の傷を増やさないようにしないと……

「ただ……回り道は無いか」

そんなものがあればさつき使うので諦めてもう一度登る。

「つとわっ!？」

やつと端を掴んだ筈がそこで痛みで握力が落ちる。

しかもこれは……頭から……まずっ。

「……あれ?」

落ちた筈だった。いや落ちている筈だった。

なのに何故か登っている。

「何が……?」

周囲を確認する。しかし誰も居ないし何も無い。

「……」

手をぐつぐとすする。違和感がある。まるで誰かに引つ張られたような……

まさか透明人間かと周囲を触れてみるが何も居ない。

「そもそも透明人間だとしても手伝わないか……」

自分は明らかな部外者なのだ。そんな存在を手伝うとは思えない。

「止まつてる暇もないか」

原因探しをしている暇もない。ここに何かが通りかかれば危険なのだから。
「行くか……」

地底を進む。求めて求めて。

分かれ道があつたが、何故かこつちだと確信して進む。

そして遂に辿り着いた。

「……え？家？」

地底に？なんで？建物があるんだ……？

「つとそれどころじゃない」

まるで導かれたかのようにここに来てしまったが……そうじゃない。

誰かにバレてしまったら不味いの誰かが居そうな場所に来てどうするんだ……

「離れ……」

「誰か居るんですか？」

「!?」

声かして慌てて隠れる。急いで火も消す。

不味い何かが……

「気のせい？それともあの子が？」

……女の子？いや待て。

こんな場所に居るわけ無ければ、人間の姿に似た妖怪は今まで沢山いた。だから、油断しちゃ。

「……そこですか。騒がしいのは」

……は？声に出てた？いや出てない筈。

音も出してないよな？騒がしいって。

「話はゆつくりと聞きましょうか」

逃げなきゃ、殺され……

その直後弾幕が降り注ぐ。

避けることも叶わず直撃する。

「……人……？……の子……呼ん……しょう……」

何か言ってるが分からない。ただこれじゃあ生きられないだろう。食われるかどうか……死ぬだけか。

地底がここまでじゃあ安易に受けたのは失敗だったかなと思いつつ……その後はどうなったか分からない。

t o b e c o n t i n u e d